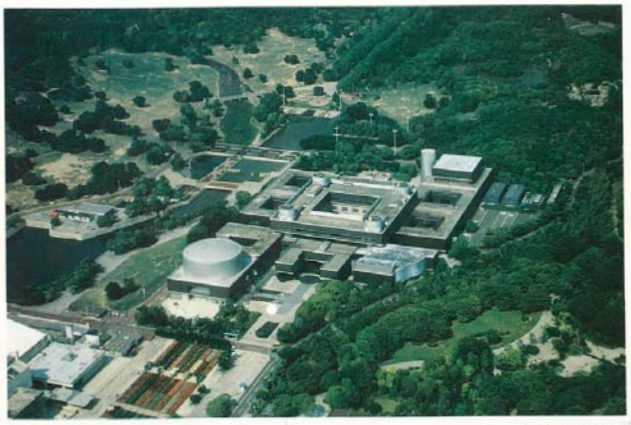
総合研究大学院大学

文化科学研究科概要



1990



もくじ

文化科学研究科について …… 1
専攻の概要 …… 2
地域文化学専攻 …… 2
比較文化学専攻 …… 4
文化科学研究科の学生 …… 6
文化科学研究科の学位 …… 6
文化科学研究科の教職員 …… 7
国立民族学博物館について …… 8
国立民族学博物館の概要 …… 9
総合研究大学院大学について …… 10
総合研究大学院大学の沿革 …… 11
総合研究大学院大学の組織 …… 12
総合研究大学院大学の特色 …… 13
総合研究大学院大学の教職員 …… 14
総合研究大学院大学の入学について …… 15

文化科学研究科について



研究科長　杉本尚次

総合研究大学院大学は、学部をもたず大学院だけを置く国立大学として、昭和63年10月1日に開学した我が国最初の独立大学院大学である。文化科学研究科は、総合研究大学院大学の一研究科であり、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤として、平成元年4月に設置された。

国立民族学博物館は、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究の場として重要な役割を果たすとともに、日本における民族学（文化人類学）の研究センターとしての機能を有している。近年の国際化、国際交流の著しい進展・活発化、そして研究分野の拡大とこれにともなう研究課題の多様化は、民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めてきている。

このような現状をふまえて、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化を研究する「地域文化学専攻」と「比較文化学専攻」の2専攻をおき、民族学（文化人類学）を中心とした教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目的としている。

専攻の概要

地域文化学専攻

専攻長　友枝啓泰



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としている。本専攻においては、現地調査及びこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色



民族誌学的方法論に基づいた諸民族の個別文化の研究を主な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
アジア地域文化学	アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東アジア文化研究Ⅰ(日本)	教授 佐々木高明 助教授 松山 利夫
			東アジア文化研究Ⅱ(中国大陸・朝鮮半島)	教授 竹村 卓二 教授 周 達生
			中央アジア文化研究	助教授 松原 正毅
			北アジア文化研究	助教授 大塚 和義
	アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東南アジア文化研究Ⅰ(大陸部)	教授 佐々木高明 助教授 田邊 繁治
			東南アジア文化研究Ⅱ(島嶼部)	助教授 宮本 勝
			南アジア文化研究	助教授 栗田 靖之 助教授 永ノ尾信悟
			西アジア文化研究	教授 片倉 素子
ヨーロッパ・アフリカ地域文化学	ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	ヨーロッパ文化研究	助教授 野村 雅一 助教授 大森 康宏
	アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東アフリカ文化研究	助教授 福井 勝義
			西アフリカ文化研究	教授 和田 正平 助教授 小川 了
アメリカ・オセアニア地域文化学	アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アメリカ文化研究	教授 友枝 啓泰 教授 大給 近達 助教授 山本 紀夫
	オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	オセアニア文化研究Ⅰ(島嶼部)	教授 杉本 尚次 助教授 須藤 健一
			オセアニア文化研究Ⅱ(オーストラリア大陸)	助教授 小山 修三

比較文化学専攻

専攻長 藤井知昭



民族社会、民族技術、民族宗教、民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としている。諸民族の文化の通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指す。本専攻においては、従来の民族学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色



理論民族学的方法論に基づいた通文化的研究を主要な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。研究にあたっては、現地調査に基づく第一次資料の活用を重視する。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。また、コンピュータなどによる情報処理を活用し客観的な比較研究を行う。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族社会・宗教学	民族社会	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治集団、法規範、所有と分配等に関する通文化的・理論的研究	民族社会研究Ⅰ(社会)	教授 松澤 員子
			民族社会研究Ⅱ(法・政治)	助教授 大塚 和夫
			民族社会研究Ⅲ(経済)	助教授 端 信行 助教授 藤井 龍彦
	民族宗教	諸民族の祭祀、神話、宇宙観等に関する通文化的・理論的研究	民族宗教研究Ⅰ(宗教行動)	助教授 中牧 弘允 助教授 田村 克己
			民族宗教研究Ⅱ(宗教観)	教授 黒田 悦子 助教授 石森 秀三
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究	民族技術研究Ⅰ(生産技術)	助教授 秋道 智彌
			民族技術研究Ⅱ(製作技術)	助教授 森田 恒之 助教授 吉本 忍
			民族技術研究Ⅲ(生活技術)	教授 石毛 直道 教授 大丸 弘
民族言語・芸術学	民族言語	諸民族の言語、文字、伝達等に関する通文化的・理論的研究	民族言語研究Ⅰ(言語と文化)	教授 崎山 理 助教授 長野 泰彦
			民族言語研究Ⅱ(文字と情報伝達)	教授 杉田 繁治 助教授 吉田 集而
	民族芸術	諸民族の音楽、芸能、文芸、造形等に関する通文化的・理論的研究	民族音楽研究	教授 藤井 知昭 助教授 樫井 哲男
			民族美術研究	教授 杉村 棟
			民族芸能研究	(教授 守屋 毅)
			民族文芸研究	助教授 江口 一久

( )印は平成3年4月担当予定

文化科学研究科の学生

(1) 大学院入学定員及び現員

(平成2年10月1日現在)

専攻	入学定員	現員 1年次	現員 2年次	現員 計	備考
地域文化学専攻	3	3〔1〕	1	4〔1〕	
比較文化学専攻	3	2	3	5	
計	6	5〔1〕	4	9〔1〕	

〔 〕は私費留学生で内数である。

(2) 外国人留学生数

(平成2年10月1日現在)

国名＼区分	大学院	研究生	計	備考
中華人民共和国	1		1	
フィリピン		1 (1)	1 (1)	期間 (H2.4.1～H3.3.31)
計	1	1 (1)	2 (1)	

( ) は国費留学生で内数である。

文化科学研究科の学位

専攻	授与する学位	備考
地域文化学専攻	文学博士	研究内容によっては学術博士
比較文化学専攻	文学博士	

文化科学研究科の教職員

現　員（平成２年10月１日現在）　（人）

区　分	教　授	助教授	計
地域文化学専攻	8	14	22
比較文化学専攻	9	13	22
計	17	27	44

役職員

文化科学研究科長	杉本尚次
地域文化学専攻長	友枝啓泰
比較文化学専攻長	藤井知昭

事務局	
管理部長	田中武雄
研究協力課長	奥出栄治
研究協力課共同利用係長	新見惇一
研究協力課共同利用係主任	中塚裕二
総合研究大学院大学庶務係主任	奥論一
研究協力課共同利用係事務補佐員	古本聡美

国立民族学博物館について

受験生に期待する



国立民族学博物館を基盤として開設された総合研究大学院大学文化科学研究科は、博士課程後期３年だけである。

その受験資格は、修士課程修了者およびそれと同等以上の学力を有するものである。ただし、修士課程における専攻は、かならずしも民族学（文化人類学）のみに限定しない。民族学関連諸分野および理工系をふくめ、多様な学問分野の学生をうけいれる。

出身学科よりも、問題はその学生の研究者としての意欲と資質であろう。柔軟で、バイタリティーにあふれ創造性にとむ学生をのぞんでいる。

民族学の場合は、フィールド・ワークが基本であるために、現地調査の期間を約１年はみておかなければならない。フィールドの期間もいれて３年で学位論文をかきあげるということは、かなりきびしい仕事であろうが、学生諸君はそのつもりで勉強してもらわなければならない。

全国から優秀な学生諸君が多数応募されることを期待している。

国立民族学博物館長

梅　棹　忠　夫

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館は、昭和49年６月に文部省所轄の国立大学共同利用機関として創設され、学術研究の発展及び教育活動の推進に資するため、世界の諸民族に関する資料を収集、保管し、もって公衆の観覧に供するとともに民族学に関する調査・研究を行うことを目的としている。この博物館に所属する研究者は、民族学（文化人類学）、言語学、民族技術、民族芸術、コンピュータ民族学などの専門家からなっている。

本博物館は、全国の大学の教員をはじめ民族学の研究者が利用する共同利用機関であり、全国の大学を中心とする研究者の協力のもとにさまざまな課題についての共同研究が行われ、民族学及び関連諸科学に関する研究センターの機能を果たしている。また、標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等を計画的・体系的に収集・整理・保存して、全国の研究者の利用に供するセンターとしての役割もになっている。

本博物館における研究にかかわる組織としては、研究部と情報管理施設がおかれている。研究部は、５つの部から構成されている。第１研究部は、東アジア・中央アジア・北アジア、第２研究部は、東南アジア・南アジア・西アジア、第３研究部は、ヨーロッパ・アフリカ、第４研究部は、アメリカ・オセアニア、第５研究部は、民族芸術・民族技術・民族言語・コンピュータ民族学を主要な研究対象とする。研究部では、客員教官を含め約80名の研究者が研究に従事している。情報管理施設では、研究者が収集した世界の諸民族の社会と文化に関する資料を整理、保管して、利用に供するとともに、諸情報の管理・検索システムの開発研究を行っている。本博物館には、高水準の情報処理装置が配備されている。

所蔵民族学資料　（平成２年４月１日現在）

標本資料	映像音響資料		文献図書資料	
海外	99,272点	レコード・コンパクトディスク	32,491点	和書 153,044冊
国内	82,678点	テープ（言語・音楽）	8,831点	洋書 167,687冊
		フィルム・ビデオテープ	4,461点	計 320,731冊
				和雑誌 3,661種
				洋雑誌 3,550種
計	181,950点	計	45,783点	計 7,211種

総合研究大学院大学について



学長　長倉三郎

総合研究大学院大学は、我が国初のいわゆる独立大学院――学校教育法第68条の２の規定に基づき学部を持たず大学院だけを置く大学――として昭和63年10月に設置された国立大学である。

本学は、全国の大学研究者の共同研究推進について中心的役割を果たしている大学共同利用機関のうちの７研究機関（高エネルギー物理学研究所、国立遺伝学研究所、統計数理研究所、岡崎国立共同研究機構（分子科学研究所、基礎生物学研究所、生理学研究所）及び国立民族学博物館）との緊密な連係・協力の下に、それらの優れた人材と研究環境を基盤として博士後期課程の教育研究を行うことを特色としている。本学はこうした特色を生かして教育研究活動を総合的な立場から活発に進め、新しい境界領域を開拓するとともに、それぞれの専門分野において学術研究の流れに先導的に対応することのできる創造性豊かな研究者を養成することを目的としている。知的探求心に燃えた活力ある学生の応募を期待する。

総合研究大学院大学の沿革

昭和57年６月　国立大学共同利用機関所長懇談会が「国立大学共同利用機関における大学院の設置について」を要望した。

昭和61年４月　国立大学共同利用機関所長懇談会が「大学院問題に関するワーキング・グループ」で検討した結果に基づき「総合研究大学院大学の基本構想について」を取りまとめた。
岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備調査室及び同創設準備調査委員会が設置された。

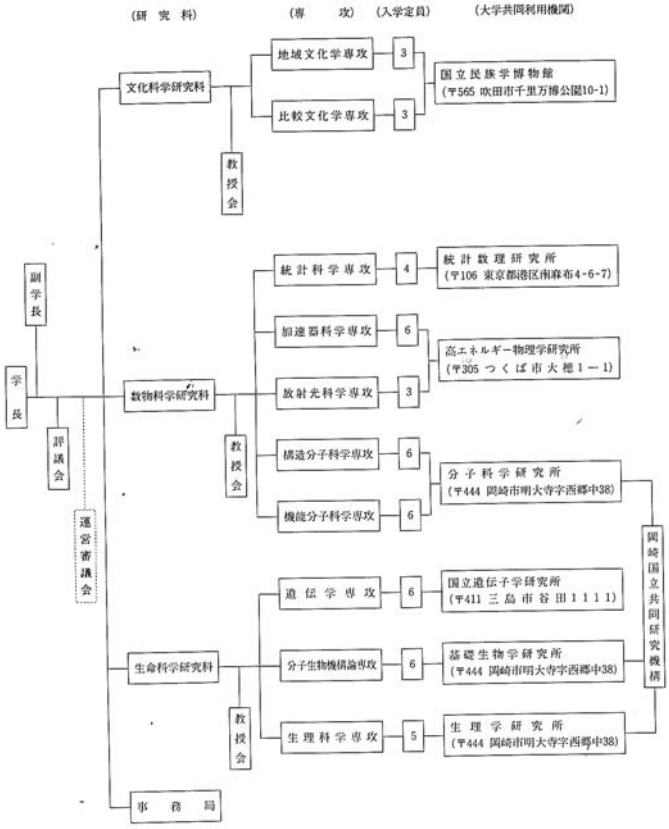
昭和62年３月　総合研究大学院大学創設準備調査委員会が「総合研究大学院の基本構想」を取りまとめた。
５月　岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備室及び同創設準備委員会が設置された。
７月　総合研究大学院大学創設準備委員会が「総合研究大学院大学（仮称）の創設準備について　―中間まとめ―」を取りまとめた。

昭和63年５月　国立学校設置法の一部を改正する法律が公布、施行された。（昭和63年法律第67号）
９月　総合研究大学院大学創設準備委員会が「総合研究大学院大学の創設準備について」を取りまとめた。
10月　総合研究大学院大学開学（数物科学研究科、生命科学研究科）
初代学長に長倉三郎（理学博士）が就任

平成元年４月　文化科学研究科設置
学生受入れ・授業開始

平成２年１月　初代副学長に廣田榮治（理学博士）が就任

総合研究大学院大学の組織



総合研究大学院大学の特色

■ 学部を持たない大学院だけの大学――いわゆる独立大学院――
■ 大学院の課程は、後期３年の博士課程
■ 教育研究は、７研究機関との緊密な連係・協力の下に実施
① 教官組織は、各研究機関の教官で編成する。
② 教育研究の大部分は、各研究機関の施設・設備を用いて実施する。
③ 各研究機関で行われている高度の研究活動に密着した教育・研究指導により、専門分野についての深い専門性をかん養する。
④ 大学共同利用機関の開かれた機能を生かし、各研究科・専攻間、国の内外の大学・大学院との相互交流を進めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際性等を培う。

国立学校設置法（抄）
（学校教育法第68条の２に定める国立大学）
第３条の３　学校教育法第68条の２に定める国立大学として、次に掲げる大学を置く。
……
総合研究大学院大学
２　……
３　総合研究大学院大学は、第９条の２に定める大学共同利用機関で政令で定めるものとの緊密な連係及び協力の下に教育研究を行うものとする。

※備　考　学校教育法
第68条の２　教育研究上特別の必要がある場合においては、第53条の規定にかかわらず、学部を置くことなく大学院を置くものを大学とすることができる。
（第53条　大学には学部を置くことを常例とする。ただし、当該大学の教育研究上の目的を達成するため有益かつ適切である場合においては、学部以外の教育研究上の組織を置くことができる。）

総合研究大学院大学の教職員

現　員（平成２年10月１日現在）　（人）

区分	学長	副学長	教授	助教授	助手	事務官	技官	計
学長	1							1
副学長		1						1
事務局						26	2	28
文化科学研究科			17	27				44
数物科学研究科			54	58	60			172
生命科学研究科			27	23	34			84
計	1	1	98	108	94	26	2	330

役職員

学長			長倉三郎
副学長			廣田榮治
文化科学研究科	研究科長		杉本尚次
	専攻長	地域文化学専攻	友枝啓泰
	〃	比較文化学専攻	藤井知昭
数物科学研究科	研究科長		木村嘉孝
	専攻長	統計科学専攻	赤池弘次
	〃	加速器科学専攻	菅原寛孝
	〃	放射光科学専攻	千川純一
	〃	構造分子科学専攻	諸熊奎治
	〃	機能分子科学専攻	井口洋夫
生命科学研究科	研究科長		藤田善彦
	専攻長	遺伝学専攻	富澤純一
	〃	分子生物機構論専攻	竹内郁夫
	〃	生理科学専攻	江橋節郎
事務局	事務局長		中村桂樹
	総務課長		牧山助友
	学務課長		遠藤勝久

総合研究大学院大学の入学について

(1) 入 学 資 格

①修士の学位を有する者

②外国において修士の学位に相当する学位を授与された者

③大学を卒業した後、大学・研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学において当該研究の成果により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

④本学において、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

(2) 選 抜 方 法

書類選考と面接により行う。

①書類選考

修士課程の履修状況等に関する調査書、修士論文及び付随する資料について行う。

②面　接

修士論文（作成中の者はその修士論文についての研究の要旨）、修士論文のない者は発表した学術論文等これまでに行った研究の要旨及び志望研究内容等について行う。

(3) 修 了 要 件

本学に3年以上在学し、所定の単位を修得し、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び試験に合格すること。

ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については短縮することがある。

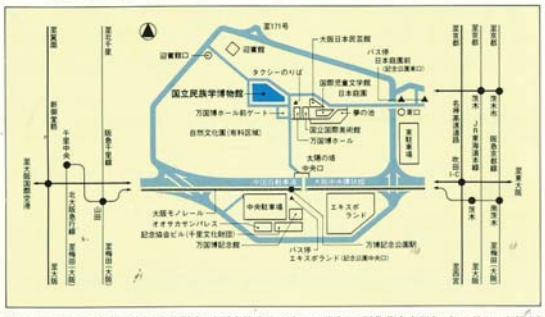
問い合わせ先

☆国立民族学博物館　管理部研究協力課共同利用係

〒565 大阪府吹田市千里万博公園10番1号

電 話 06—876—2151　内線221・222

FAX 06—875—0401



●各駅よりバスで日本庭園前（記念公園東口）下車徒歩約13分。JR茨木駅・阪急茨木市駅（エキスポランド行き）。千里中央駅（阪急茨木市駅行き）。

●大阪モノレールで万博記念公園駅下車徒歩約15分（ただし、自然文化園は有料です）。

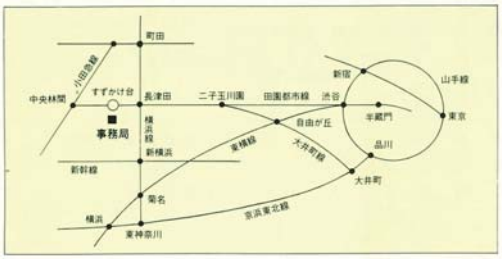
●タクシーは民博正面まではいることができます。

☆総合研究大学院大学　事務局

〒227 横浜市緑区長津田町4259（東京工業大学長津田キャンパス内）

電 話 045—922—1661

FAX 045—922—2338



総合研究大学院大学

文化科学研究科概要



1991



もくじ

文化科学研究科について …… 1
専攻の概要 …… 2
地域文化学専攻 …… 2
比較文化学専攻 …… 4
文化科学研究科の学生 …… 6
文化科学研究科の学位 …… 6
文化科学研究科の教職員 …… 7
国立民族学博物館について …… 8
国立民族学博物館の概要 …… 9
総合研究大学院大学について …… 10
総合研究大学院大学の沿革 …… 11
総合研究大学院大学の組織 …… 12
総合研究大学院大学の特色 …… 13
総合研究大学院大学の教職員 …… 14
総合研究大学院大学について …… 15

文化科学研究科について



研究科長　藤井知昭

総合研究大学院大学は、学部をもたず大学院だけを置く国立大学として、昭和63年10月1日に開学した我が国最初の独立大学院大学である。文化科学研究科は、総合研究大学院大学の一研究科であり、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤として、平成元年4月に設置された。

国立民族学博物館は、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究の場として重要な役割を果たすとともに、日本における民族学（文化人類学）の研究センターとしての機能を有している。近年の国際化、国際交流の著しい進展・活発化、そして研究分野の拡大とこれにともなう研究課題の多様化は、民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めてきている。

このような現状をふまえて、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化を研究する「地域文化学専攻」と「比較文化学専攻」の2専攻をおき、民族学（文化人類学）を中心とした教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目的としている。

専攻の概要

地域文化学専攻

専攻長　和田正平



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としている。本専攻においては、現地調査及びこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色



民族誌学的方法論に基づいた諸民族の個別文化の研究を主な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
アジア地域文化学	アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東アジア文化研究Ⅰ（日本）	教授　佐々木高明 助教授　松山　利夫
			東アジア文化研究Ⅱ（中国大陸・朝鮮半島）	教授　竹村　卓二 教授　周　達生
			中央アジア文化研究	教授　松原　正毅
			北アジア文化研究	助教授　大塚　和義
	アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東南アジア文化研究Ⅰ（大陸部）	教授　佐々木高明 助教授　田邊　繁治
			東南アジア文化研究Ⅱ（島嶼部）	助教授　宮本　勝
			南アジア文化研究	教授　栗田　靖之
			西アジア文化研究	教授　片倉　もとこ
ヨーロッパ・アフリカ地域文化学	ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	ヨーロッパ文化研究	助教授　野村　雅一 助教授　大森　康宏 （助教授　庄司　博史）
	アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東アフリカ文化研究	助教授　福井　勝義
			西アフリカ文化研究	教授　和田　正平 助教授　小川　了
アメリカ・オセアニア地域文化学	アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アメリカ文化研究	教授　友枝　啓泰 教授　大給　近達 助教授　山本　紀夫
	オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	オセアニア文化研究Ⅰ（島嶼部）	教授　杉本　尚次 助教授　須藤　健一
			オセアニア文化研究Ⅱ（オーストラリア大陸）	教授　小山　修三

（　）印は平成3年10月担当予定

比較文化学専攻

専攻長　杉田繁治



民族社会、民族技術、民族宗教、民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としている。諸民族の文化の通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指す。本専攻においては、従来の民族学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色



理論民族学的方法論に基づいた通文化的研究を主要な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。研究にあたっては、現地調査に基づく第一次資料の活用を重視する。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。また、コンピュータなどによる情報処理を活用し客観的な比較研究を行う。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族社会・宗教学	民族社会	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治集団、法規範、所有と分配等に関する通文化的・理論的研究	民族社会研究Ⅰ（社会）	教授 松澤員子（助教授 清水昭俊）
			民族社会研究Ⅱ（法・政治）	助教授 大塚和夫
			民族社会研究Ⅲ（経済）	助教授 端信行 助教授 藤井龍彦
	民族宗教	諸民族の祭祀、神話、宇宙観等に関する通文化的・理論的研究	民族宗教研究Ⅰ（宗教行動）	助教授 中牧弘允 助教授 田村克己
			民族宗教研究Ⅱ（宗教観）	教授 黒田悦子 助教授 石森秀三
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究	民族技術研究Ⅰ（生産技術）	助教授 秋道智彌
			民族技術研究Ⅱ（製作技術）	教授 森田恒之 助教授 吉本忍
			民族技術研究Ⅲ（生活技術）	教授 石毛直道 教授 大丸弘
民族言語・芸術学	民族言語	諸民族の言語、文字、伝達等に関する通文化的・理論的研究	民族言語研究Ⅰ（言語と文化）	教授 崎山理 助教授 長野泰彦
			民族言語研究Ⅱ（文字と情報伝達）	教授 杉田繁治 助教授 吉田集而 助教授 八杉佳穂
	民族芸術	諸民族の音楽、芸能、文芸、造形等に関する通文化的・理論的研究	民族音楽研究	教授 藤井知昭 助教授 櫻井哲男
			民族美術研究	教授 杉村棟
			民族芸能研究	
			民族文芸研究	助教授 江口一久

（ ）印は平成3年10月担当予定

文化科学研究科の学生

(1) **大学院入学定員及び現員**（平成3年5月1日現在）　（人）

専攻	入学定員	現員 1年次	現員 2年次	現員 3年次	現員 計	備考
地域文化学専攻	3	2 (1) [2]	3 (2) [1]	1	6 (3) [3]	
比較文化学専攻	3	3 (3) [1]	2 (1)	3	8 (4) [1]	
計	6	5 (4) [3]	5 (3) [1]	4	14 (7) [4]	

（ ）は女子学生で内数、［ ］は私費留学生で内数である。

(2) **外国人留学生数**（平成3年5月1日現在）　（人）

国名＼区分	大学院生 1年次	大学院生 2年次	大学院生 3年次	大学院生 計	研究生	備考
中華人民共和国	2 (1)	1		3 (1)		
インドネシア	1 (1)			1 (1)		
計	3 (2)	1		4 (2)		

（ ）は女子学生で内数である。

文化科学研究科の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。また、専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野	
地域文化学専攻	文学	学位論文の内容によっては学術
比較文化学専攻	文学	

※学位に付記する専攻分野については、見直しを行う予定である。

文化科学研究科の教職員

現員（平成3年5月1日現在）　（人）

区分	教授	助教授	計	備考
地域文化学専攻	11	10	21	
比較文化学専攻	10	13	23	
計	21	23	44	

役職員

文化科学研究科長	藤井知昭
地域文化学専攻長	和田正平
比較文化学専攻長	杉田繁治
事務局	
管理部長	田中武雄
研究協力課長	岩本義男
研究協力課共同利用係長	新見惇一
総合研究大学院大学庶務係主任	奥論一
研究協力課共同利用係	村上新吾
研究協力課共同利用係事務補佐員	成富美佐子
〃	宮脇聖子

国立民族学博物館について

受験生に期待する



国立民族学博物館を基盤として開設された総合研究大学院大学文化科学研究科は、博士課程後期3年だけである。

その受験資格は、修士課程修了者およびそれと同等以上の学力を有するものである。ただし、修士課程における専攻は、かならずしも民族学（文化人類学）のみに限定しない。民族学関連諸分野および理工系をふくめ、多様な学問分野の学生をうけいれる。

出身学科よりも、問題はその学生の研究者としての意欲と資質であろう。柔軟でバイタリティーにあふれ創造性にとむ学生をのぞんでいる。

民族学の場合は、フィールド・ワークが基本であるために、現地調査の期間を約1年はみておかなければならない。フィールドの期間もいれて3年で学位論文をかきあげるということは、かなりきびしい仕事であろうが、学生諸君はそのつもりで勉強してもらわなければならない。

全国から優秀な学生諸君が多数応募されることを期待している。

国立民族学博物館長

梅棹忠夫

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館は、昭和49年６月に文部省所轄の国立大学共同利用機関として創設され、学術研究の発展及び教育活動の推進に資するため、世界の諸民族に関する資料を収集、保管し、もって公衆の観覧に供するとともに民族学に関する調査・研究を行うことを目的としている。この博物館に所属する研究者は、民族学（文化人類学）、言語学、民族技術、民族芸術、コンピュータ民族学などの専門家からなっている。

本博物館は、全国の大学の教員をはじめ民族学の研究者が利用する共同利用機関であり、全国の大学を中心とする研究者の協力のもとにさまざまな課題についての共同研究が行われ、民族学及び関連諸科学に関する研究センターの機能を果たしている。また、標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等を計画的・体系的に収集・整理・保存して、全国の研究者の利用に供するセンターとしての役割もになっている。

本博物館における研究にかかわる組織としては、研究部と情報管理施設がおかれている。研究部は、５つの部から構成されている。第１研究部は、東アジア・中央アジア・北アジア、第２研究部は、東南アジア・南アジア・西アジア、第３研究部は、ヨーロッパ・アフリカ、第４研究部は、アメリカ・オセアニア、第５研究部は、民族芸術・民族技術・民族言語・コンピュータ民族学を主要な研究対象とする。研究部では、客員教官を含め約80名の研究者が研究に従事している。情報管理施設では、研究者が収集した世界の諸民族の社会と文化に関する資料を整理、保管して、利用に供するとともに、諸情報の管理・検索システムの開発研究を行っている。本博物館には、高水準の情報処理装置が配備されている。

所蔵民族学資料

（平成３年４月１日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	103,568点	レコード・コンパクトディスク	34,632点	日本語図書	162,745冊
国内資料	82,699点	テープ（言語）	6,107点	外国語図書	177,148冊
計	186,267点	テープ（音楽）	2,996点	計	339,893冊
		フィルム（16ミリ）	2,780点	日本語雑誌	4,993種
		ビデオテープ	1,858点	外国語雑誌	4,325種
		計	48,373点	計	9,318種
				マイクロ写真資料	1,898種

総合研究大学院大学について



学長　長倉三郎

総合研究大学院大学は、我が国初のいわゆる独立大学院として昭和63年10月に設置されて以来３年目を迎え、本年度は第一回修了者を送り出すこととなっています。

本学は、全国の大学研究者の共同研究推進について中心的役割を果たしている大学共同利用機関のうち７研究機関〔高エネルギー物理学研究所、国立遺伝学研究所、統計数理研究所、岡崎国立共同研究機構（分子科学研究所、基礎生物学研究所、生理学研究所）及び国立民族学博物館〕を基盤とし、これら基盤機関との緊密な連係・協力の下に、優れた人材と恵まれた研究環境を活かして博士後期課程の教育研究を行うことを特色としております。

本学は、このようなユニークな形態の上に運営上の新しい工夫を加え、我が国の大学院制度の多様化に貢献するとともに、他の大学・大学院とも積極的に協力し、基礎科学の振興、独創的な学術研究の展開、教育研究の国際化など今日の学術的・社会的要請に応えてゆくことを念願しています。同時に長期的視点に立って、新しい先導的学問領域の創造と展開、幅広い視野をもち、しかも独創性豊かな研究者の養成に努める所存です。

こうした目的を達成するため、各基盤機関の伝統と独自性並びに国の内外に開かれた運営上の特色を活かして高度の教育研究を行うとともに、大学院大学としての一体性を確保し教育研究の総合性を発揮するために、全学的行事として、サマースクール、学生セミナー、国際シンポジウム、共同研究等を積極的に推進しています。今後ともこうした分散と総合のバランスをはかりつつ、本学創設の理想に向かって一層の努力を続けてまいる覚悟であります。各方面のご協力とご支援をお願いいたします。

総合研究大学院大学の沿革

昭和57年６月　国立大学共同利用機関所長懇談会が「国立大学共同利用機関における大学院の設置について」を要望した。

昭和61年４月　国立大学共同利用機関所長懇談会が「大学院問題に関するワーキング・グループ」で検討した結果に基づき「総合研究大学院大学の基本構想について」を取りまとめた。
岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備調査室及び同創設準備調査委員会が設置された。

昭和62年３月　総合研究大学院大学創設準備調査委員会が「総合研究大学院の基本構想」を取りまとめた。
５月　岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備室及び同創設準備委員会が設置された。
７月　総合研究大学院大学創設準備委員会が「総合研究大学院大学（仮称）の創設準備について　一中間まとめ一」を取りまとめた。

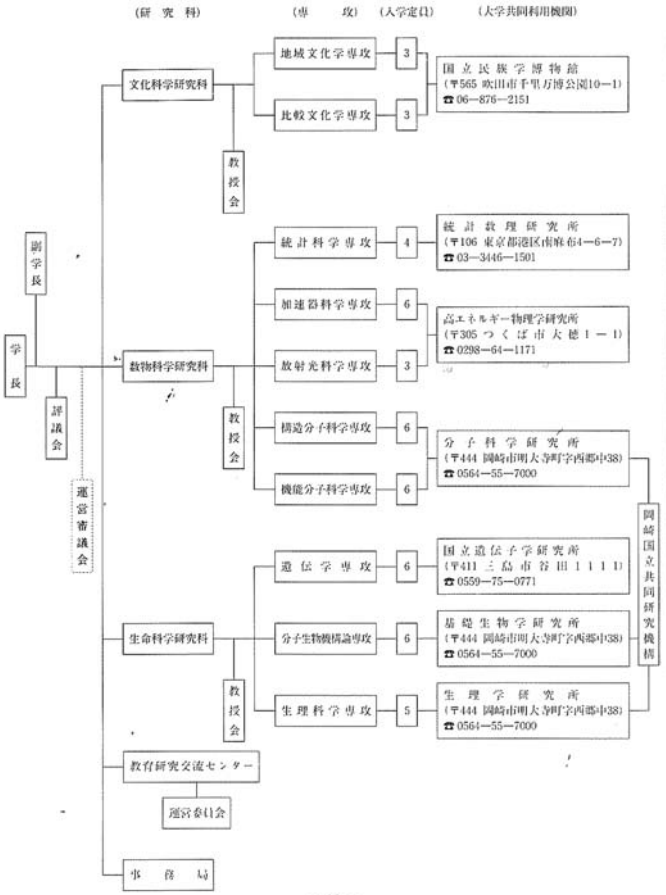
昭和63年５月　国立学校設置法の一部を改正する法律が公布、施行された。（昭和63年法律第67号）
９月　総合研究大学院大学創設準備委員会が「総合研究大学院大学の創設準備について」を取りまとめた。
10月　総合研究大学院大学開学（数物科学研究科、生命科学研究科）初代学長に長倉三郎（理学博士）が就任

平成元年４月　文化科学研究科設置
学生受入れ・授業開始

平成２年１月　初代副学長に廣田榮治（理学博士）が就任

平成３年４月　教育研究交流センター設置

総合研究大学院大学の組織



総合研究大学院大学の特色

■ 学部を持たない大学院だけの大学――いわゆる独立大学院――
■ 大学院の課程は、後期３年の博士課程
■ 教育研究は、７研究機関との緊密な連係・協力の下に実施
① 教官組織は、各研究機関の教官で編成する。
② 教育研究の大部分は、各研究機関の施設・設備を用いて実施する。
③ 各研究機関で行われている高度の研究活動に密着した教育・研究指導により、専門分野についての深い専門性をかん養する。
④ 大学共同利用機関の開かれた機能を生かし、各研究科・専攻間、国の内外の大学・大学院との相互交流を進めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際性等を培う。

国立学校設置法（抄）
（学校教育法第68条に定める国立大学）
第３条の３　学校教育法第68条に定める国立大学として、次に掲げる大学を置く。
……
総合研究大学院大学
２ ……
３　総合研究大学院大学は、第９条の２に定める大学共同利用機関で政令で定めるものとの緊密な連係及び協力の下に教育研究を行うものとする。

※備　考　学校教育法
第68条　教育研究上特別の必要がある場合においては、第53条の規定にかかわらず、学部を置くことなく大学院を置くものを大学とすることができる。
（第53条　大学には学部を置くことを常例とする。ただし、当該大学の教育研究上の目的を達成するため有益かつ適切である場合においては、学部以外の教育研究上の組織を置くことができる。）

総合研究大学院大学の教職員

現　員（平成３年５月１日現在）　（人）

区　分	学長	副学長	教授	助教授	助手	事務官	技官	計
学長	1							1
副学長		1						1
事務局						29	1	30
文化科学研究科			21	23				44
数物科学研究科			55	56	61			172
生命科学研究科			27	24	33			84
教育研究交流センター								
計	1	1	103	103	94	29	1	332

役職員

学長			長倉三郎
副学長			廣田榮治
文化科学研究科	研究科長		藤井知昭
	専攻長	地域文化学専攻	和田正平
	〃	比較文化学専攻	杉田繁治
数物科学研究科	研究科長		清水良一
	専攻長	統計科学専攻	赤池弘次
	〃	加速器科学専攻	菅原寛孝
	〃	放射光科学専攻	岩崎博
	〃	構造分子科学専攻	諸熊奎治
	〃	機能分子科学専攻	井口洋夫
生命科学研究科	研究科長		森脇和郎
	専攻長	遺伝学専攻	富澤純一
	〃	分子生物機構論専攻	竹内郁夫
	〃	生理科学専攻	
事務局	事務局長		浮田雄二
	総務課長		牧山助友
	学務課長		遠藤勝久

総合研究大学院大学について

(1) 出願資格

①修士の学位を有する者
②外国において修士の学位に相当する学位を授与された者
③大学を卒業した後、大学・研究所等において、２年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
④その他、本学において、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

(2) 選抜方法

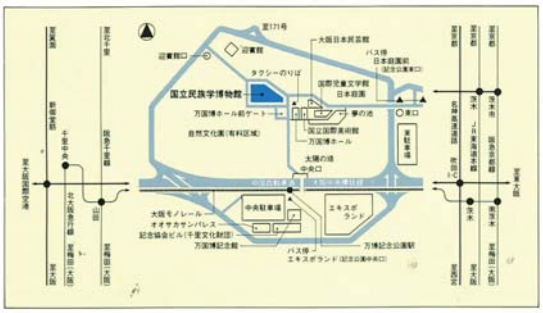
選抜は、書類選考と面接により行う。
①書類選考
修士課程の履修状況等に関する調査書、修士論文及び付随する資料について行う。
②面　接
修士論文（作成中の者は、その修士論文についての研究の要旨）、修士論文のない者は発表した学術論文等、又は、これまでに行った研究の要旨及び志望研究内容を中心に行う。

(3) 修了要件

本学に３年以上在学し、所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び試験に合格すること。
ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については短縮することがある。

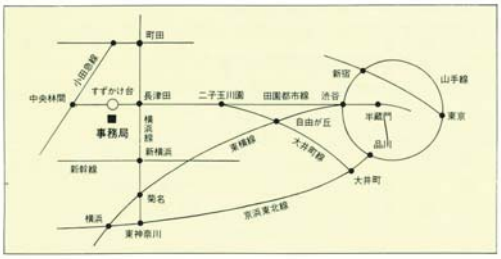
問い合わせ先

☆国立民族学博物館　管理部研究協力課共同利用係
〒565 大阪府吹田市千里万博公園10番１号
電話 06—876—2151　内線8209・2020
FAX 06—875—0401



●各駅よりバスで日本庭園前（記念公園東口）下車徒歩約13分。JR茨木駅・阪急茨木市駅（エキスポランド行き）。千里中央駅（阪急茨木市駅行き）。
●大阪モノレールで万博記念公園駅下車徒歩約15分（ただし、自然文化園は有料です）。
●タクシーは民博正面まではいることができます。

☆総合研究大学院大学　事務局
〒227 横浜市緑区長津田町4259（東京工業大学長津田キャンパス内）
電話 045—922—1661
FAX 045—922—2338



1991. 9. 発行

総合研究大学院大学

地域文化学専攻
比較文化学専攻 概要



1992



もくじ

文化科学研究科について …… 1
専攻の概要 …… 2
地域文化学専攻 …… 2
比較文化学専攻 …… 5
文化科学研究科の学生 …… 8
文化科学研究科の学位 …… 8
地域・比較文化学専攻の教職員 …… 9
国立民族学博物館について …… 10
国立民族学博物館の概要 …… 11
総合研究大学院大学について …… 12
総合研究大学院大学の沿革 …… 13
総合研究大学院大学の教職員 …… 14
総合研究大学院大学の組織 …… 15
総合研究大学院大学の特色 …… 16
総合研究大学院大学について …… 17

文化科学研究科について



研究科長　和　田　正　平

総合研究大学院大学は、学部をもたず大学院だけを置く国立大学として、昭和63年10月１日に開学した我が国最初の独立大学院大学である。文化科学研究科は、総合研究大学院大学の一研究科であり、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻、比較文化学専攻の２専攻により、平成元年４月に設置され、平成４年度には、国際日本文化研究センターを基盤とする国際日本研究専攻が増設された。

国立民族学博物館は、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究の場として重要な役割を果たすとともに、日本における民族学（文化人類学）の研究センターとしての機能を有している。近年の国際化、国際交流の著しい進展・活発化、そして研究分野の拡大とこれにともなう研究課題の多様化は、民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めてきている。

国際日本文化研究センターは、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力を行う機能を有している。近年国際社会における日本の地位の向上とともに、「日本」に対する総合的な研究が世界的レベルの中で進められている。

このような現状をふまえて、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化に関して地域的・個別的に対象を設定し、教育研究を行う「地域文化学専攻」と、そうした諸民族の社会・技術・宗教・芸術等について通文化的手法に基づき教育研究を行う「比較文化学専攻」及び国際的な視野で日本の文化と文明について教育・研究を行う「国際日本研究専攻」の３専攻をおき、国際的・学際的な教育・研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目的としている。

専攻の概要

地域文化学専攻　　専攻長　片　倉　素　子



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としている。本専攻においては、現地調査及びこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色



民族誌学的方法論に基づいた諸民族の個別文化の研究を主な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
アジア地域文化学	アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東アジア文化研究Ⅰ	教授 佐々木高明 助教授 松山 利夫
			東アジア文化研究Ⅱ	教授 竹村 卓二
			東アジア文化研究Ⅲ	教授 周 達生
			東アジア文化研究特論Ⅰ	教授 佐々木高明 助教授 松山 利夫
			東アジア文化研究特論Ⅱ	教授 竹村 卓二
			東アジア文化研究特論Ⅲ	教授 周 達生
			東アジア文化研究演習Ⅰ Ⅱ Ⅲ	教授 周 達生 助教授 松山 利夫
			中央アジア文化研究	教授 松原 正毅
			北アジア文化研究	教授 大塚 和義
			中央・北アジア文化研究特論Ⅰ	教授 松原 正毅
			中央・北アジア文化研究特論Ⅱ	教授 大塚 和義
			中央・北アジア文化研究演習Ⅰ	教授 松原 正毅
			中央・北アジア文化研究演習Ⅱ	教授 大塚 和義
	アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東南アジア文化研究Ⅰ	助教授 田邊 繁治
			東南アジア文化研究Ⅱ	助教授 宮本 勝
			東南アジア文化研究特論Ⅰ	助教授 田邊 繁治
			東南アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 宮本 勝
			東南アジア文化研究演習Ⅰ	助教授 田邊 繁治
			東南アジア文化研究演習Ⅱ	助教授 宮本 勝
			南アジア文化研究	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究特論	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究演習	教授 立川 武蔵
			西アジア文化研究	教授 片倉 紫子
			西アジア文化研究特論	教授 片倉 紫子
			西アジア文化研究演習	教授 片倉 紫子
	ヨーロッパ地域文化		ヨーロッパ文化研究Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究Ⅱ	助教授 大森 康宏

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
ヨーロッパ・アフリカ地域文化学	ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	ヨーロッパ文化研究Ⅲ	助教授 野村 雅一
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅱ	助教授 大森 康宏
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅲ	助教授 野村 雅一
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ	助教授 大森 康宏
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅲ	助教授 野村 雅一
	アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アフリカ文化研究Ⅰ	助教授 福井 勝義
			アフリカ文化研究Ⅱ	教授 和田 正平
			アフリカ文化研究Ⅲ	助教授 小川 了
			アフリカ文化研究特論Ⅰ	助教授 福井 勝義
			アフリカ文化研究特論Ⅱ	教授 和田 正平
			アフリカ文化研究特論Ⅲ	助教授 小川 了
			アフリカ文化研究演習Ⅰ	助教授 福井 勝義
			アフリカ文化研究演習Ⅱ	教授 和田 正平
			アフリカ文化研究演習Ⅲ	助教授 小川 了
アメリカ・オセアニア地域文化学	アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アメリカ文化研究Ⅰ	
			アメリカ文化研究Ⅱ	教授 友枝 啓泰
			アメリカ文化研究Ⅲ	助教授 山本 紀夫
			アメリカ文化研究特論 Ⅰ Ⅱ Ⅲ	教授 友枝 啓泰 助教授 山本 紀夫
			アメリカ文化研究演習 Ⅰ Ⅱ Ⅲ	教授 友枝 啓泰 助教授 山本 紀夫
	オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	オセアニア文化研究Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究Ⅱ	
			オセアニア文化研究Ⅲ	助教授 須藤 健一
			オセアニア文化研究特論Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究特論Ⅱ	
			オセアニア文化研究特論Ⅲ	助教授 須藤 健一
			オセアニア文化研究演習 Ⅰ Ⅱ Ⅲ	教授 小山 修三 助教授 須藤 健一

比較文化学専攻

専攻長　崎山　理



民族社会、民族技術、民族宗教、民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としている。諸民族の文化の通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指す。本専攻においては、従来の民族学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色



理論民族学的方法論に基づいた通文化的研究を主要な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。研究にあたっては、現地調査に基づく第一次資料の活用を重視する。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。また、コンピュータなどによる情報処理を活用し客観的な比較研究を行う。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族社会・宗教学	民族社会	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治集団、法規範、所有と分配等に関する通文化的・理論的研究	民族社会研究Ⅰ	教授 松澤 員子 教授 清水 昭俊
			民族社会研究Ⅱ	
			民族社会研究Ⅲ	
			民族社会研究Ⅳ	教授 端 信行
			民族社会研究Ⅴ	教授 藤井 龍彦
			民族社会研究特論Ⅰ	教授 松澤 員子
			民族社会研究特論Ⅱ	教授 清水 昭俊
			民族社会研究特論Ⅲ	教授 藤井 龍彦
			民族社会研究演習Ⅰ	教授 端 信行
			民族社会研究演習Ⅱ	教授 清水 昭俊
			民族社会研究演習Ⅲ	教授 松澤 員子
	民族宗教	諸民族の祭祀、神話、宇宙観等に関する通文化的・理論的研究	民族宗教研究Ⅰ	助教授 中牧 弘允
			民族宗教研究Ⅱ	助教授 田村 克己
			民族宗教研究Ⅲ	教授 黒田 悦子
			民族宗教研究Ⅳ	助教授 石森 秀三
			民族宗教研究特論Ⅰ	助教授 中牧 弘允
			民族宗教研究特論Ⅱ	助教授 田村 克己
			民族宗教研究特論Ⅲ	教授 黒田 悦子
			民族宗教研究演習Ⅰ	助教授 石森 秀三
			民族宗教研究演習Ⅱ	助教授 田村 克己
			民族宗教研究演習Ⅲ	助教授 中牧 弘允
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究	民族技術研究Ⅰ	助教授 秋道 智彌
			民族技術研究Ⅱ	教授 森田 恒之
			民族技術研究Ⅲ	助教授 吉本 忍
			民族技術研究Ⅳ	教授 石毛 直道
			民族技術研究Ⅴ	教授 大丸 弘

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究	民族技術研究特論Ⅰ	助教授 秋道 智彌
			民族技術研究特論Ⅱ	助教授 吉本 忍
			民族技術研究特論Ⅲ	教授 大丸 弘
			民族技術研究演習Ⅰ	教授 森田 恒之
			民族技術研究演習Ⅱ	教授 石毛 直道
			民族技術研究演習Ⅲ	助教授 秋道 智彌
民族言語・芸術学	民族言語	諸民族の言語、文字、伝達等に関する通文化的・理論的研究	民族言語研究Ⅰ	教授 崎山 理
			民族言語研究Ⅱ	助教授 長野 泰彦
			民族言語研究Ⅲ	助教授 吉田 集而
			民族言語研究Ⅳ	助教授 八杉 佳穂
			民族言語研究特論Ⅰ	教授 崎山 理
			民族言語研究特論Ⅱ	助教授 長野 泰彦
			民族言語研究特論Ⅲ	助教授 八杉 佳穂
			民族言語研究演習Ⅰ	助教授 吉田 集而
			民族言語研究演習Ⅱ	助教授 長野 泰彦
			民族言語研究演習Ⅲ	教授 崎山 理
			言語情報研究	教授 杉田 繁治
			言語情報研究特論	教授 杉田 繁治
			言語情報研究演習	教授 杉田 繁治
	民族芸術	諸民族の音楽、芸能、文芸、造形等に関する通文化的・理論的研究	民族芸術研究Ⅰ	教授 藤井 知昭
			民族芸術研究Ⅱ	助教授 櫻井 哲男
			民族芸術研究Ⅲ	教授 杉村 棟
			民族芸術研究Ⅳ	助教授 江口 一久
			民族芸術研究Ⅴ	教授 鳥倉 功夫
			民族芸術研究特論Ⅰ	教授 藤井 知昭
			民族芸術研究特論Ⅱ	助教授 櫻井 哲男
			民族芸術研究特論Ⅲ	教授 杉村 棟
			民族芸術研究演習Ⅰ	助教授 江口 一久
			民族芸術研究演習Ⅱ	助教授 櫻井 哲男
			民族芸術研究演習Ⅲ	教授 鳥倉 功夫

文化科学研究科の学生

(1) **大学院入学定員及び現員**（平成4年5月1日現在）　（人）

専攻	入学定員	現員 1年次	現員 2年次	現員 3年次	現員 計	備考
地域文化学専攻	3	4 (2)	2 (1) [2]	4 (2) [1]	10 (5) [3]	
比較文化学専攻	3	2	2 (2) [1]	4 (1)	8 (3) [1]	
国際日本研究専攻	3	2 [1]			2 [1]	
計	9	8 (2) [1]	4 (3) [3]	8 (3) [1]	20 (8) [5]	

（ ）は女子学生で内数、〔 〕は私費留学生で内数である。

(2) **外国人留学生数**（平成4年5月1日現在）　（人）

国名＼区分	大学院生 1年次	大学院生 2年次	大学院生 3年次	計
中華人民共和国		2 (1)	1	3 (1)
インドネシア		1 (1)		1 (1)
大韓民国	1			1
計	1	3 (2)	1	5 (2)

（ ）は女子学生で内数である。

文化科学研究科の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。また専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学
比較文化学専攻	文学
国際日本研究専攻	学術

学位論文の内容によっては学術

文化科学研究科地域・比較文化学専攻の教職員

現員（平成4年5月1日現在）　（人）

区分	教授	助教授	計	備考
地域文化学専攻	9	11	20	
比較文化学専攻	10	13	23	
計	19	24	43	

役職員

文化科学研究科長	和田 正平
地域文化学専攻長	片倉 素子
比較文化学専攻長	崎山 理

事務局

管理部長	内藤 貞
研究協力課長	岩本 義男
研究協力課共同利用係長	新見 惇一
研究協力課共同利用係主任	大宮 典弘
総合研究大学院大学庶務係主任	西山 浩治
研究協力課共同利用係事務補佐員	成富 美佐子
〃	宮脇 聖子

国立民族学博物館について

受験生に期待する



国立民族学博物館を基盤として開設された総合研究大学院大学文化科学研究科は、博士課程後期3年だけである。

その受験資格は、修士課程修了者およびそれと同等以上の学力を有するものである。ただし、修士課程における専攻は、かならずしも民族学（文化人類学）のみに限定しない。民族学関連諸分野および理工系をふくめ、多様な学問分野の学生をうけいれる。

出身学科よりも、問題はその学生の研究者としての意欲と資質であろう。柔軟でバイタリティーにあふれ創造性にとむ学生をのぞんでいる。

民族学の場合は、フィールド・ワークが基本であるために、現地調査の期間を約1年はみておかなければならない。フィールドの期間もいれて3年で学位論文をかきあげるということは、かなりきびしい仕事であろうが、学生諸君はそのつもりで勉強してもらわなければならない。

全国から優秀な学生諸君が多数応募されることを期待している。

国立民族学博物館長

梅棹忠夫

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館は、昭和49年６月に文部省所轄の国立大学共同利用機関として創設され、学術研究の発展及び教育活動の推進に資するため、世界の諸民族に関する資料を収集、保管し、もって公衆の観覧に供するとともに民族学に関する調査・研究を行うことを目的としている。この博物館に所属する研究者は、民族学（文化人類学）、言語学、民族技術、民族芸術、コンピュータ民族学などの専門家からなっている。

本博物館は、全国の大学の教員をはじめ民族学の研究者が利用する共同利用機関であり、全国の大学を中心とする研究者の協力のもとにさまざまな課題についての共同研究が行われ、民族学及び関連諸科学に関する研究センターの機能を果たしている。また、標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等を計画的・体系的に収集・整理・保存して、全国の研究者の利用に供するセンターとしての役割もになっている。

本博物館における研究にかかわる組織としては、研究部と情報管理施設がおかれている。研究部は、５つの部から構成されている。第１研究部は、東アジア・中央アジア・北アジア、第２研究部は、東南アジア・南アジア・西アジア、第３研究部は、ヨーロッパ・アフリカ、第４研究部は、アメリカ・オセアニア、第５研究部は、民族芸術・民族技術・民族言語・コンピュータ民族学を主要な研究対象とする。研究部では、客員教官を含め約80名の研究者が研究に従事している。情報管理施設では、研究者が収集した世界の諸民族の社会と文化に関する資料を整理、保管して、利用に供するとともに、諸情報の管理・検索システムの開発研究を行っている。本博物館には、高水準の情報処理装置が配備されている。

所蔵民族学資料

（平成４年４月１日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	109,055点	レコード・コンパクトディスク	35,962点	日本語図書	129,642冊
国内資料	82,800点	テープ（言語）	6,107点	外国語図書	229,821冊
計	191,855点	テープ（音楽）	3,039点	計	359,463冊
		フィルム（16ミリ）	2,829点	日本語雑誌	5,529種
		ビデオテープ	2,365点	外国語雑誌	4,566種
		計	50,302点	計	10,095種
				マイクロ写真資料	1,997種

総合研究大学院大学について



学長　長倉三郎

総合研究大学院大学は創設以来３年半余を経過し、本年３月16日には第一回学位記授与式を挙行して、29名の修了者に博士の学位を授与しました。これは教育研究の指導に当たられた教官各位をはじめ、それぞれの専攻を構成する基盤機関の関係者の格別の御尽力によるもので、この機会に感謝の意を表します。また第一回修了者諸君が、創造性豊かな研究者として国際的に活躍し新しい学問領域の創設と展開に積極的に挑戦して、本学建学の精神の具現に努力されることを心から期待します。

本学はこれまで７つの大学共同利用機関を基盤とし、これら基盤機関との緊密な連係・協力の下に、博士後期課程の教育研究を進めて参りましたが、本年４月より新たに国際日本文化研究センター、国立天文台、核融合科学研究所が基盤機関として参加することになりました。これら３研究機関はそれぞれ国際日本研究、天文科学、核融合科学専攻を構成し、各専門分野において高度の教育研究を推進することになりますが、同時に、本学全体としての総合的な視点から新しい先導的学問領域の創造と展開、幅広い視野と独創性を具えた研究者の養成に努力されることを期待します。

本学は各基盤機関の伝統と独自性を活かし、各専攻毎に分散して高度の教育研究を行うとともに、大学院大学としての一体性を確保し教育研究の総合性を発揮するために、全学的行事として複数の専攻や研究科にまたがる共同研究、サマースクール、学生セミナー、国際シンポジウム、ワークショップ等を積極的に推進しています。昨年９月には江崎玲於奈、利根川進、中根千枝、H. Taube、G.S. Stent、J.R.Maddox ６博士を講師に招き「現代科学の諸断面」に関する第２回サマースクールが開催され、参加者一同深い感銘を受けました。こうした全学的教育研究活動の中心となる教育研究交流センターが昨年４月に設置され、同センターの教授として国立遺伝学研究所より高畑尚之博士を迎えることができました。本学の将来にとりまして心強く、嬉しく存じています。

今後ともこうした分散と総合のバランスをはかりつつ、本学創設の理想に向かって一層の努力を続けてまいる覚悟です。各方面のご協力とご支援をお願いします。

総合研究大学院大学の沿革

昭和57年６月　国立大学共同利用機関所長懇談会が「国立大学共同利用機関における大学院の設置について」を要望した。

昭和61年４月　国立大学共同利用機関所長懇談会が「大学院問題に関するワーキング・グループ」で検討した結果に基づき「総合研究大学院大学の基本構想について」を取りまとめた。
岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備調査室及び同創設準備調査委員会が設置された。

昭和62年３月　総合研究大学院大学創設準備調査委員会が「総合研究大学院の基本構想」を取りまとめた。

５月　岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備室及び同創設準備委員会が設置された。

７月　総合研究大学院大学創設準備委員会が「総合研究大学院大学（仮称）の創設準備について　—中間まとめ」を取りまとめた。

昭和63年５月　国立学校設置法の一部を改正する法律が公布、施行された。（昭和63年法律第67号）

９月　総合研究大学院大学創設準備委員会が「総合研究大学院大学の創設準備について」を取りまとめた。

10月　総合研究大学院大学開学（数物科学研究科、生命科学研究科）
初代学長に長倉三郎（理学博士）が就任

平成元年４月　文化科学研究科設置
学生受入れ・授業開始

平成２年１月　初代副学長に廣田榮治（理学博士）が就任

平成３年４月　教育研究交流センター設置

平成４年４月　文化科学研究科国際日本研究専攻・数物科学研究科天文科学専攻・数物科学研究科核融合科学専攻設置

総合研究大学院大学の教職員

現員（平成４年５月１日現在）

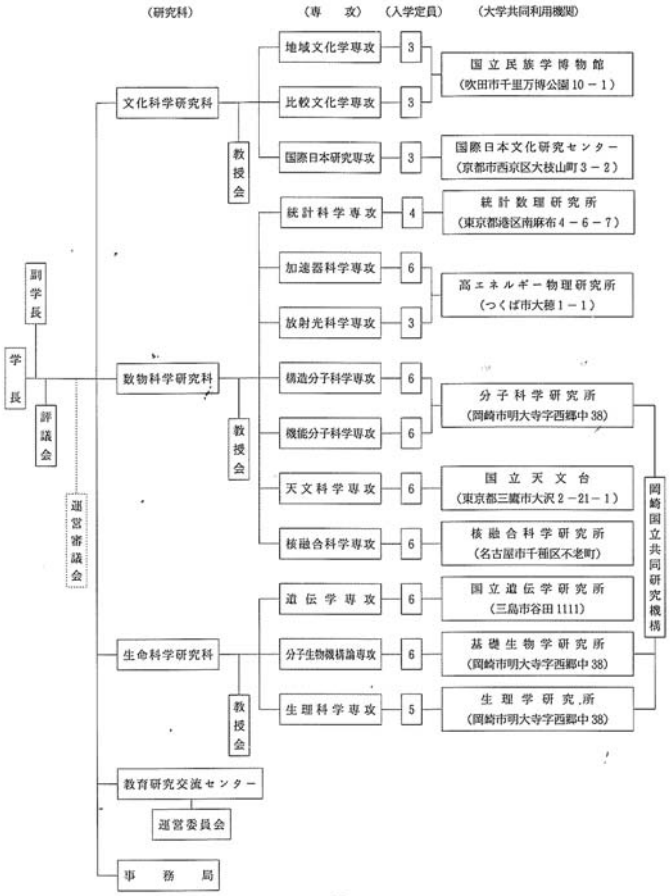
（人）

区分	学長	副学長	教授	助教授	助手	事務官	技官	計
学長	1							1
副学長		1						1
事務局						31	1	32
文化科学研究科			31	34				65
数物科学研究科			88	97	111			296
生命科学研究科			29	25	31			85
教育研究交流センター			1					1
計	1	1	149	156	142	31	1	481

役職員

学長		長倉三郎　教授
副学長		廣田榮治　教授
文化科学研究科	研究科長	和田正平　教授
	地域文化学専攻長	片倉素子　教授
	比較文化学専攻長	崎山理　教授
	国際日本研究専攻長	村井康彦　教授
数物科学研究科	研究科長	大瀧仁志　教授
	統計科学専攻長	赤池弘次　教授
	加速器科学専攻長	菅原寛孝　教授
	放射光科学専攻長	岩崎博　教授
	構造分子科学専攻長	吉原經太郎　教授
	機能分子科学専攻長	井口洋夫　教授
	天文科学専攻長	古在由秀　教授
	核融合科学専攻長	飯吉厚夫　教授
生命科学研究科	研究科長	亘弘　教授
	遺伝学専攻長	富澤純一　教授
	分子生物機構論専攻長	竹内郁夫　教授
	生理科学専攻長	濱清　教授
事務局	事務局長	浮田雄二
	総務課長	牧山助友
	学務課長	坂部忠昭

総合研究大学院大学の組織



総合研究大学院大学の特色

■ 学部を持たない大学院だけの大学――いわゆる独立大学院――
■ 大学院の課程は、後期３年の博士課程
■ 教育研究は、10研究機関との緊密な連係・協力の下に実施
① 教官組織は、各研究機関の教官で編成する。
② 教育研究の大部分は、各研究機関の施設・設備を用いて実施する。
③ 各研究機関で行われている高度の研究活動に密着した教育・研究指導により、専門分野についての深い専門性をかん養する。
④ 大学共同利用機関の開かれた機能を生かし、各研究科・専攻間、国の内外の大学・大学院との相互交流を進めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際性等を培う。

国立学校設置法（抄）
（学校教育法第68条に定める国立大学）
第３条の３　学校教育法第68条に定める国立大学として、次に掲げる大学を置く。
……
総合研究大学院大学
2　……
3　総合研究大学院大学は、第９条の２に定める大学共同利用機関で政令で定めるものとの緊密な連係及び協力の下に教育研究を行うものとする。

※備　考　学校教育法
第68条　教育研究上特別の必要がある場合においては、第53条の規定にかかわらず、学部を置くことなく大学院を置くものを大学とすることができる。
（第53条，大学には学部を置くことを常例とする。ただし、当該大学の教育研究上の目的を達成するため有益かつ適切である場合においては、学部以外の教育研究上の組織を置くことができる。）

総合研究大学院大学について

(1) 出願資格

①修士の学位を有する者
②外国において修士の学位に相当する学位を授与された者
③大学を卒業した後、大学・研究所等において、２年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
④その他、本学において、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

(2) 選抜方法

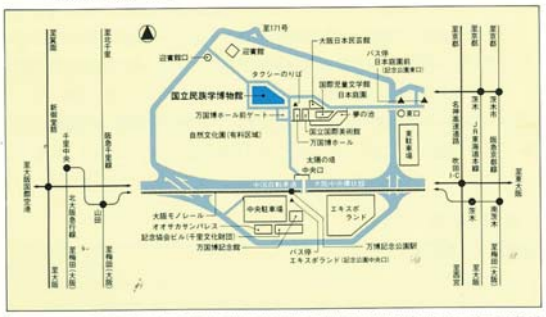
選抜は、書類選考と面接により行う。
①書類選考
修士課程の履修状況等に関する調査書、修士論文及び付随する資料について行う。
②面　接
修士論文（作成中の者は、その修士論文についての研究の要旨）、修士論文のない者は発表した学術論文等、又は、これまでに行った研究の要旨及び志望研究内容を中心に行う。

(3) 修了要件

本学に３年以上在学し、所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び試験に合格すること。
ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については短縮することがある。

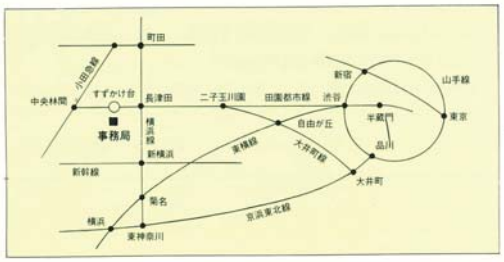
問い合わせ先

☆国立民族学博物館　管理部研究協力課共同利用係
〒565 大阪府吹田市千里万博公園10番１号
電 話 06―876―2151　内線8209・2020・8236
FAX 06―875―0401



●各駅よりバスで日本庭園前（記念公園東口）下車徒歩約13分。JR茨木駅・阪急茨木市駅（エキスポランド行き）。千里中央駅（阪急茨木市駅行き）。
●大阪モノレールで万博記念公園駅下車徒歩約15分（ただし、自然文化園は有料です）。
●タクシーは民博正面まではいることができます。

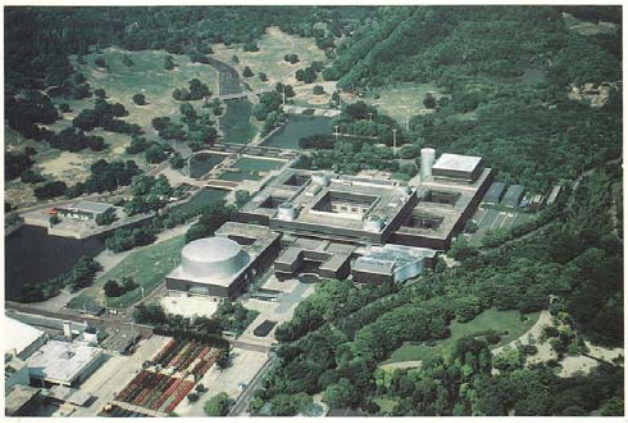
☆総合研究大学院大学　事務局
〒227 横浜市緑区長津田町4259（東京工業大学長津田キャンパス内）
電 話 045―922―1661
FAX 045―922―2338



1992. 9. 発行

総合研究大学院大学

地域文化学専攻
比較文化学専攻 概要



1993

845 18.9



もくじ

文化科学研究科について …… 1
専攻の概要 …… 2
地域文化学専攻 …… 2
比較文化学専攻 …… 5
文化科学研究科の学生 …… 8
文化科学研究科の学位 …… 8
地域・比較文化学専攻の教職員 …… 9
地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する …… 10
国立民族学博物館の概要 …… 11
総合研究大学院大学について …… 12
総合研究大学院大学の沿革 …… 14
総合研究大学院大学の教職員 …… 15
総合研究大学院大学の組織 …… 16
総合研究大学院大学の特色 …… 17
総合研究大学院大学について …… 18

文化科学研究科について



研究科長　崎山　理

総合研究大学院大学は、学部をもたず大学院だけを置く国立大学として、昭和63年10月1日に開学したわが国最初の大学院大学である。文化科学研究科は、総合研究大学院大学の一研究科であり、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻の2専攻により、平成元年4月に設置され、平成4年度には、国際日本文化研究センターを基盤とする国際日本研究専攻が増設された。

国立民族学博物館は、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究の場として重要な役割を果たすとともに、日本における民族学（文化人類学）の研究センターとしての機能をもつ。近年の国際化、国際交流の著しい進展と活発化、そして研究分野の拡大とこれにともなう研究課題の多様化は、民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めつつある。

国際日本文化研究センターは、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究ならびに世界の日本研究者に対する研究協力を行う機能をもつ。近年国際社会における日本の地位の向上とともに、「日本」に対する総合的な研究が世界的レベルの中で進められている。

このような現状をふまえ、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化に関して地域的・個別的に対象を設定し、教育研究を行う「地域文化学専攻」と、そのような諸民族の社会・技術・宗教・芸術等について通文化的手法に基づき教育研究を行う「比較文化学専攻」および国際的な視野で日本の文化と文明について教育研究を行う「国際日本研究専攻」の3専攻を置き、国際的・学際的な教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目的とする。

専攻の概要

地域文化学専攻　専攻長　小山修三



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としている。本専攻においては、現地調査及びこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色



民族誌学的方法論に基づいた諸民族の個別文化の研究を主な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
アジア地域文化学	アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東アジア文化研究Ⅰ	教授 清水 昭俊 助教授 松山 利夫
			東アジア文化研究Ⅱ	教授 竹村 卓二
			東アジア文化研究Ⅲ	教授 周 達生
			東アジア文化研究特論Ⅰ	教授 清水 昭俊 助教授 松山 利夫
			東アジア文化研究特論Ⅱ	教授 竹村 卓二
			東アジア文化研究特論Ⅲ	教授 周 達生
			東アジア文化研究演習Ⅰ Ⅱ Ⅲ	教授 周 達生 教授 清水 昭俊 助教授 松山 利夫
			中央アジア文化研究	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			北アジア文化研究	教授 大塚 和義
			中央・北アジア文化研究特論Ⅰ	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			中央・北アジア文化研究特論Ⅱ	教授 大塚 和義
			中央・北アジア文化研究演習Ⅰ	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			中央・北アジア文化研究演習Ⅱ	教授 大塚 和義
	アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東南アジア文化研究Ⅰ	助教授 田邉 繁治
			東南アジア文化研究Ⅱ	助教授 田村 克巳
			東南アジア文化研究特論Ⅰ	助教授 田邉 繁治
			東南アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 田村 克巳
			東南アジア文化研究演習Ⅰ	助教授 田邉 繁治
			東南アジア文化研究演習Ⅱ	助教授 田村 克巳
			南アジア文化研究	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究特論	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究演習	教授 立川 武9
			西アジア文化研究	
			西アジア文化研究特論	
			西アジア文化研究演習	
	ヨーロッパ地域文化		ヨーロッパ文化研究Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究Ⅱ	

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
ヨーロッパ・アフリカ地域文化学	ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	ヨーロッパ文化研究Ⅲ	助教授 野村 雅一
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅱ	
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅲ	助教授 野村 雅一
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ	
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅲ	助教授 野村 雅一
	アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アフリカ文化研究Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究Ⅱ	教授 和田 正平
			アフリカ文化研究Ⅲ	
			アフリカ文化研究特論Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究特論Ⅱ	教授 和田 正平
			アフリカ文化研究特論Ⅲ	
			アフリカ文化研究演習Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究演習Ⅱ	教授 和田 正平
			アフリカ文化研究演習Ⅲ	
アメリカ・オセアニア地域文化学	アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アメリカ文化研究Ⅰ	
			アメリカ文化研究Ⅱ	助教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究Ⅲ	教授 友枝 啓泰
			アメリカ文化研究特論Ⅰ Ⅱ Ⅲ	教授 友枝 啓泰 助教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究演習Ⅰ Ⅱ Ⅲ	教授 友枝 啓泰 助教授 八杉 佳穂
	オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	オセアニア文化研究Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究Ⅱ	助教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究Ⅲ	助教授 秋道 智彌
			オセアニア文化研究特論Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究特論Ⅱ	助教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究特論Ⅲ	助教授 秋道 智彌
			オセアニア文化研究演習Ⅰ Ⅱ Ⅲ	教授 小山 修三 助教授 吉田 集而 助教授 秋道 智彌

比較文化学専攻

専攻長　黒田悦子



民族社会、民族技術、民族宗教、民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としている。諸民族の文化の通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指す。本専攻においては、従来の民族学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色

理論民族学的方法論に基づいた通文化的研究を主要な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。研究にあたっては、現地調査に基づく第一次資料の活用を重視する。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。また、コンピュータなどによる情報処理を活用し客観的な比較研究を行う。



授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族社会・宗教学	民族社会	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治集団、法規範、所有と分配等に関する通文化的・理論的研究	民族社会研究Ⅰ	教授 松澤 員子
			民族社会研究Ⅱ	
			民族社会研究Ⅲ	
			民族社会研究Ⅳ	教授 端 信行
			民族社会研究Ⅴ	教授 藤井 龍彦
			民族社会研究特論Ⅰ	教授 松澤 員子
			民族社会研究特論Ⅱ	
			民族社会研究特論Ⅲ	教授 藤井 龍彦
			民族社会研究演習Ⅰ	教授 端 信行
			民族社会研究演習Ⅱ	
			民族社会研究演習Ⅲ	教授 松澤 員子
	民族宗教	諸民族の祭祀、神話、宇宙観等に関する通文化的・理論的研究	民族宗教研究Ⅰ	助教授 中牧 弘允
			民族宗教研究Ⅱ	
			民族宗教研究Ⅲ	教授 黒田 悦子
			民族宗教研究Ⅳ	助教授 石森 秀三
			民族宗教研究特論Ⅰ	助教授 中牧 弘允
			民族宗教研究特論Ⅱ	
			民族宗教研究特論Ⅲ	教授 黒田 悦子
			民族宗教研究演習Ⅰ	助教授 石森 秀三
			民族宗教研究演習Ⅱ	
			民族宗教研究演習Ⅲ	助教授 中牧 弘允
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究	民族技術研究Ⅰ	助教授 山本 紀夫
			民族技術研究Ⅱ	教授 森田 恒之
			民族技術研究Ⅲ	助教授 吉本 忍
			民族技術研究Ⅳ	教授 石毛 直道
			民族技術研究Ⅴ	教授 大丸 弘

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究	民族技術研究特論Ⅰ	助教授 山本 紀夫
			民族技術研究特論Ⅱ	助教授 吉本 忍
			民族技術研究特論Ⅲ	教授 大丸 弘
			民族技術研究演習Ⅰ	教授 森田 恒之
			民族技術研究演習Ⅱ	教授 石毛 直道
			民族技術研究演習Ⅲ	助教授 山本 紀夫
民族言語・芸術学	民族言語	諸民族の言語、文字、伝達等に関する通文化的・理論的研究	民族言語研究Ⅰ	教授 崎山 理
			民族言語研究Ⅱ	助教授 長野 泰彦
			民族言語研究Ⅲ	
			民族言語研究Ⅳ	
			民族言語研究特論Ⅰ	教授 崎山 理
			民族言語研究特論Ⅱ	助教授 長野 泰彦
			民族言語研究特論Ⅲ	
			民族言語研究演習Ⅰ	
			民族言語研究演習Ⅱ	助教授 長野 泰彦
			民族言語研究演習Ⅲ	教授 崎山 理
			言語情報研究	教授 杉田 繁治
			言語情報研究特論	教授 杉田 繁治
			言語情報研究演習	教授 杉田 繁治
	民族芸術	諸民族の音楽、芸能、文芸、造形等に関する通文化的・理論的研究	民族芸術研究Ⅰ	教授 藤井 知昭
			民族芸術研究Ⅱ	助教授 大森 康宏 助教授 吉田 憲司
			民族芸術研究Ⅲ	教授 杉村 棟 助教授 吉田 憲司
			民族芸術研究Ⅳ	助教授 江口 一久
			民族芸術研究Ⅴ	教授 熊倉 功夫
			民族芸術研究特論Ⅰ	教授 藤井 知昭
			民族芸術研究特論Ⅱ	助教授 大森 康宏
			民族芸術研究特論Ⅲ	教授 杉村 棟 助教授 吉田 憲司
			民族芸術研究演習Ⅰ	助教授 江口 一久
			民族芸術研究演習Ⅱ	助教授 大森 康宏
			民族芸術研究演習Ⅲ	教授 熊倉 功夫

文化科学研究科の学生

(1) **大学院入学定員及び現員**（平成5年5月1日現在）　（人）

専攻	入学定員	現員 1年次	2年次	3年次	計	備考
地域文化学専攻	3	3 (1)	4 (2)	6 (3) [3]	13 (6) [3]	
比較文化学専攻	3	3 (1) [2]	2	6 (3) [1]	11 (4) [3]	
国際日本研究専攻	3	4 (2) [3]	4 (2) [1]		8 (4) [4]	
計	9	10 (4) [5]	10 (4) [1]	12 (6) [4]	32 (14) [10]	

（ ）は女子学生で内数である、〔 〕は留学生数で内数である。

(2) **外国人留学生数**（平成5年5月1日現在）　（人）

	大学院生 1年次	2年次	3年次	計
中華人民共和国	3 (1)		3 (1)	6 (2)
インドネシア			1 (1)	1 (1)
大韓民国	1 (1)	1		2 (1)
インド	1 (1)			1 (1)
計	5 (3)	1	4 (2)	10 (5)

（ ）は女子学生で内数である。

文化科学研究科学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。また専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学
比較文化学専攻	文学
国際日本研究専攻	学術

学位論文の内容によっては学術

文化科学研究科地域・比較文化学専攻の教職員

現員（平成5年5月1日現在）　（人）

区分	教授	助教授	計	備考
地域文化学専攻	11	10	21	
比較文化学専攻	12	8	20	
計	23	18	41	

役職員

文化科学研究科長	崎山 理
地域文化学専攻長	小山 修三
比較文化学専攻長	黒田 悦子

事務局

管理部長	内藤 貞
研究協力課長	加藤 建夫
研究協力課共同利用係長	岡安 格雄
研究協力課共同利用係主任	大宮 典弘
総合研究大学院大学庶務係主任	西山 浩治
研究協力課共同利用係事務補佐員	龍本 美佐子
〃	宮脇 聖子

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する



国立民族学博物館を基盤として開設された総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻・比較文化学専攻は、博士課程後期3年だけである。

その受験資格は、修士課程修了者およびそれと同等以上の学力を有するものである。ただし、修士課程における専攻は、かならずしも民族学（文化人類学）のみに限定しない。民族学関連諸分野および理工系をふくめ、多様な学問分野の学生をうけいれる。

出身学科よりも、問題はその学生の研究者としての意欲と資質であろう。柔軟でバイタリティーにあふれ創造性にとむ学生を望んでいる。

民族学の場合は、フィールド・ワークが基本であるために、現地調査の期間を約1年はみておかなければならない。フィールドの期間もいれて3年で学位論文を書き上げるということは、かなり厳しい仕事であろうが、学生諸君はそのつもりで勉強してもらわねばならない。

全国から優秀な学生諸君が多数応募されることを期待している。

国立民族学博物館長

佐々木 高明

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館は、昭和49年6月に文部省所轄の国立大学共同利用機関として創設され、学術研究の発展及び教育活動の推進に資するため、世界の諸民族に関する資料を収集、保管し、もって公衆の観覧に供するとともに民族学に関する調査・研究を行うことを目的としている。この博物館に所属する研究者は、民族学（文化人類学）、言語学、民族技術、民族芸術、コンピュータ民族学などの専門家からなっている。

本博物館は、全国の大学の教員をはじめ民族学の研究者が利用する共同利用機関であり、全国の大学を中心とする研究者の協力のもとにさまざまな課題についての共同研究が行われ、民族学及び関連諸科学に関する研究センターの機能を果たしている。また、標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等を計画的・体系的に収集・整理・保存して、全国の研究者の利用に供するセンターとしての役割もになっている。

本博物館における研究にかかわる組織としては、研究部と情報管理施設がおかれている。研究部は、5つの部から構成されている。第1研究部は、東アジア・中央アジア・北アジア、第2研究部は、東南アジア・南アジア・西アジア、第3研究部は、ヨーロッパ・アフリカ、第4研究部は、アメリカ・オセアニア、第5研究部は、民族芸術・民族技術・民族言語・コンピュータ民族学を主要な研究対象とする。研究部では、客員教官を含め約80名の研究者が研究に従事している。情報管理施設では、研究者が収集した世界の諸民族の社会と文化に関する資料を整理、保管して、利用に供するとともに、諸情報の管理・検索システムの開発研究を行っている。本博物館には、高水準の情報処理装置が配備されている。

所蔵民族学資料　（平成5年4月1日）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	116,187点	レコード・コンパクトディスク	37,629点	日本語図書	136,264冊
国内資料	83,160点	テープ（言語）	6,109点	外国語図書	238,902冊
計	199,347点	テープ（音楽）	4,227点	計	375,166冊
		フィルム（16ミリ）	2,839点		
		ビデオ・テープ	2,419点	日本語雑誌	6,129種
		計	53,223点	外国語雑誌	4,772種
				計	10,901種
				マイクロ写真資料	2,389種

総合研究大学院大学について



学長　長倉三郎

1988年10月に創設された本学はやがて満5年を迎えようとしている。創設当時やその前の創設準備時代に遭遇したもろもろの生みの苦しみも、次第に美しい思い出のベールに包まれつつある。その間本学は、創設時に掲げた理想の実現に向かって着実な歩みを続けている。当初7基盤機関10専攻で出発したが、昨年度国際日本文化研究センター、国立天文台、核融合科学研究所が基盤機関として加わり、また本年度には国立極地研究所が参加して11基盤機関14専攻に発展した。それに応じて入学定員も48名から66名に増加している。

こうした規模の上の発展は目にとまり易いが、より本質的で重要なことは大学院の教育研究面の充実である。幸い優れた人材と施設・設備を有する基盤機関の力強い御協力により、各専攻に分散して進められている教育研究活動は言うまでもなく、総合性を具現するための全学的な活動も、当初予想された困難を乗り越えて、順調に展開している。まさに分散と総合の両輪がうまく回転し、両者のバランスのとれた教育研究活動が予期以上に力強く展開しているといってよいであろう。本年度の入学試験にあたっては、66名の入学定員に対し国の内外の90余の大学から168名の入学志願者が集まったが、これは本学の存在が次第に広く認識されつつあることのあらわれであろう。

国の財政上の困難に加え、政治、経済、社会のいろいろな分野で激変の嵐が吹き荒れている時期に本学が着実に発展できたのは、高等教育の変革の流れの中で大学院の整備充実が政策の柱としてとり上げられたことにもよるが、さらに本質的には、本学の専任及び併人の教職員の熱意あふれる御尽力、各基盤機関の御協力、文部省はじめ関係方面の温かい御支援によることはいうまでもない。この機会に心から感謝の意を表したい。

長年の懸案であった本学の新しいキャンパスの建設も本年度は着工できるものと期待している。それと共に、当初の計画で取り上げられた教育研究交流センターの整備充実や情報資料センターの創設に真剣に取り組まなければならない。

さらに加えて、新しい学問分野の開拓と必要な人材の養成を目的とする総合科学研究科の設置も進めなければならない。本年度は本学全体としての総合的な教育研究の基盤をソフト的にもハード的にも一段と整備充実し、さらなる発展のための出発点となる重要な年ともいえるであろう。いわば本学が幼年期・少年期を脱して青年期・壮年期に進む最後の仕上げの時期とも言える。気持ちを新たにして本学の発展に取り組み、稔り豊かな青年期・壮年期を迎えることができるよう努力したいと考えている。一層の御支援御協力を心からお願いしたい。

総合研究大学院大学の沿革

昭和57年6月　国立大学共同利用機関所長懇談会が「国立大学共同利用機関における大学院の設置について」を要望した。

昭和61年4月　国立大学共同利用機関所長懇談会が「大学院問題に関するワーキング・グループ」で検討した結果に基づき「総合研究大学院大学の基本構想について」を取りまとめた。
岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備調査室及び同創設準備調査委員会が設置された。

昭和62年3月　総合研究大学院大学創設準備調査委員会が「総合研究大学院の基本構想」を取りまとめた。

5月　岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備室及び同創設準備委員会が設置された。

7月　総合研究大学院大学創設準備委員会が「総合研究大学院大学（仮称）の創設準備について——中間まとめ」を取りまとめた。

昭和63年5月　国立学校設置法の一部を改正する法律が公布、施行された。（昭和63年法律第67号）

9月　総合研究大学院大学創設準備委員会が「総合研究大学院大学の創設準備について」取りまとめた。

10月　総合研究大学院大学開学（数物科学研究科、生命科学研究科）
初代学長に長倉三郎（理学博士）が就任

平成元年4月　文化科学研究科設置
学生受入れ・授業開始

平成2年1月　初代副学長に廣田榮治（理学博士）が就任

平成3年4月　教育研究交流センター設置

平成4年4月　文化科学研究科国際日本研究専攻・数物科学研究科天文科学専攻・数物科学研究科核融合科学専攻設置

平成5年4月　数物科学研究科極域科学専攻設置

総合研究大学院大学の教職員

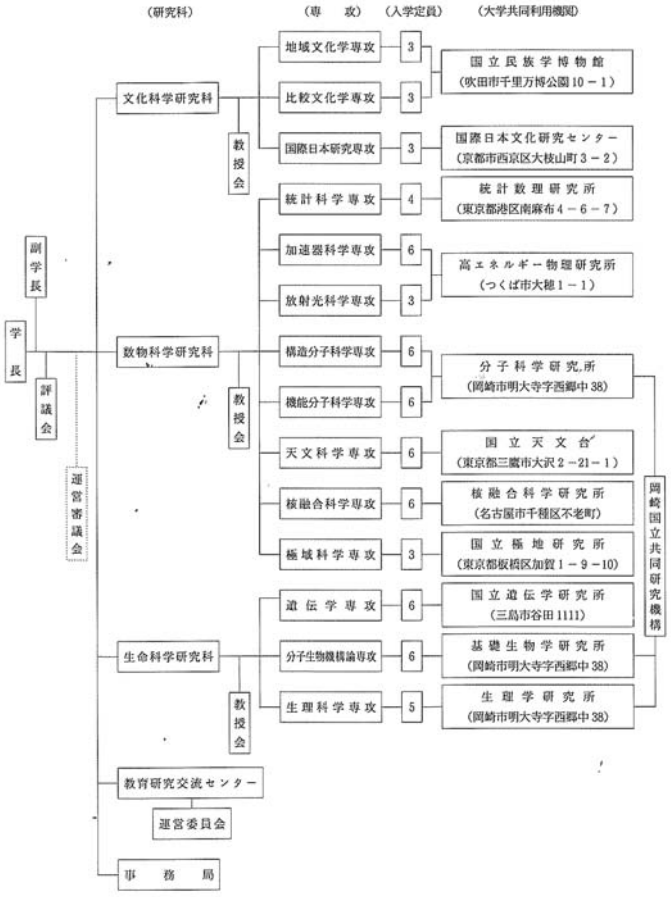
現員（平成5年5月1日現在）　（人）

区分	学長	副学長	教授	助教授	助手	事務官	技官	計
学長	1							1
副学長		1						1
事務局						33	2	35
文化科学研究科			35	28				63
数物科学研究科			104	102	133			339
生命科学研究科			34	25	34			93
教育研究交流センター			1					1
計	1	1	174	155	167	33	2	533

役職員

学長		長倉三郎　教授
副学長		廣田榮治　教授
文化科学研究科	研究科長	崎山　理　教授
	地域文化学専攻長	小山修三　教授
	比較文化学専攻長	黒田悦子　教授
	国際日本研究専攻長	濱口惠俊　教授
数物科学研究科	研究科長	安藤正海　教授
	統計科学専攻長	赤池弘次　教授
	加速器科学専攻長	菅原寛孝　教授
	放射光科学専攻長	岩崎　博　教授
	構造分子科学専攻長	吉原經太郎　教授
	機能分子科学専攻長	伊藤光男　教授
	天文科学専攻長	古在由秀　教授
	核融合科学専攻長	飯吉厚夫　教授
	極域科学専攻長	星合孝男　教授
生命科学研究科	研究科長	鈴木義昭　教授
	遺伝学専攻長	富澤純一　教授
	分子生物機構論専攻長	竹内郁夫　教授
	生理科学専攻長	濱　清　教授
事務局	事務局長	浮田雄二
	総務課長	山本　晃
	学務課長	坂部忠昭

総合研究大学院大学の組織



総合研究大学院大学の特色

■学部を持たない大学院だけの大学——いわゆる独立大学院——
■大学院の課程は、後期3年の博士課程
■教育研究は、10研究機関との緊密な連係・協力の下に実施
①教官組織は、各研究機関の教官で編成する。
②教官研究の大部分は、各研究機関の施設・設備を用いて実施する。
③各研究機関で行われている高度の研究活動に密着した教育・研究指導により、専門分野についての深い専門性をかん養する。
④大学共同利用機関の開かれた機能を生かし、各研究科・専攻間、国の内外の大学・大学院との交互交流を進めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際制等を培う。

国立学校設置法（抄）
（学校教育法第68条に定める国立大学）
第3条の3　学校教育法第68条に定める国立大学として、次に掲げる大学を置く。
1 ……
総合研究大学院大学
2 ……
3　総合研究大学院大学は、第9条の2に定める大学共同利用機関で政令で定めるものとの緊密な連係及び協力の下に教育研究を行うものとする。

※備　考　学校教育法
第68条　教育研究上特別の必要がある場合においては、第53条の規定にかかわらず、学部を置くことなく大学院を置くものを大学とすることができる。
（第53条・大学には学部を置くことを常例とする。ただし、当該大学の教育研究上の目的を達成するため有益かつ適切である場合においては、学部以外の教育研究上の組織を置くことができる。）

総合研究大学院大学について

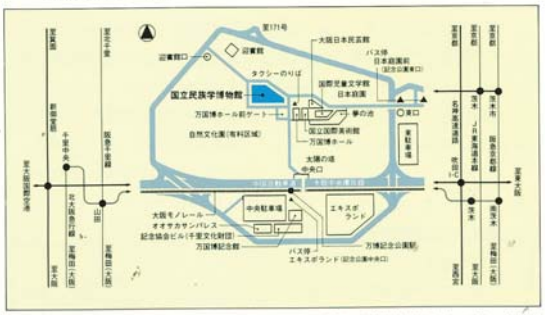
(1) 出　願　資　格
①修士の学位を有する者
②外国において修士の学位に相当する学位を授与された者
③大学を卒業した後、大学・研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
④その他、本学において、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

(2) 選　抜　方　法
選抜は、書類選考と面接により行う。
①書類選考
修士課程の履修状況等に関する調査書、修士論文及び付随する資料について行う。
②面　接
修士論文（作成中の者は、その修士論文についての研究の要旨）、修士論文のない者は発表した学術論文等、又は、これまでに行った研究の要旨及び志望研究内容を中心に行う。

(3) 修　了　要　件
本学に3年以上在学し、所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び試験に合格すること。
ただし、在学期間に関しては、優れた研究業績を上げた者については短縮することがある。

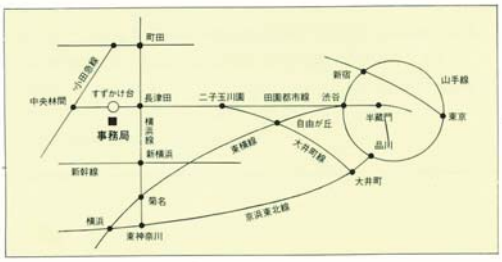
問い合わせ先

☆国立民族学博物館　管理部研究協力課共同利用係
〒565 大阪府吹田市千里万博公園10番1号
電 話 06—876—2151　内線8209・2020・8236
FAX 06—875—0401



●各駅よりバスで日本庭園前（記念公園東口）下車徒歩約13分。JR茨木駅・阪急茨木市駅（エキスポランド行き）。千里中央駅（阪急茨木市駅行き）。
●大阪モノレールで万博記念公園駅下車徒歩約15分（ただし、自然文化園は有料です）。
●タクシーは民博正面まではいることができます。

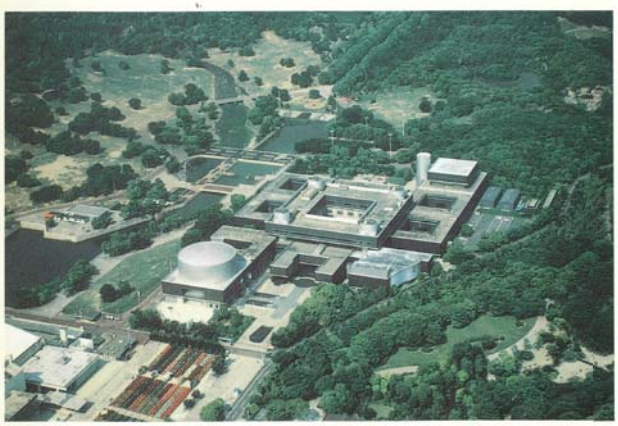
☆総合研究大学院大学　事務局
〒227 横浜市緑区長津田町4259（東京工業大学長津田キャンパス内）
電 話 045—922—1661
FAX 045—922—2338



1993. 9. 発行

総合研究大学院大学

地域文化学専攻
比較文化学専攻 概要



1994



もくじ

文化科学研究科について …… 1
専攻の概要 …… 2
地域文化学専攻 …… 2
比較文化学専攻 …… 5
文化科学研究科の学生 …… 8
文化科学研究科の学位 …… 8
平成5年度学位授与者数 …… 9
地域・比較文化学専攻の教職員 …… 9
地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する …… 10
国立民族学博物館の概要 …… 11
総合研究大学院大学について …… 12
総合研究大学院大学の沿革 …… 13
総合研究大学院大学の教職員 …… 14
総合研究大学院大学の組織 …… 15
総合研究大学院大学の特色 …… 16
入学者選抜方法等 …… 17

文化科学研究科について



研究科長　濱口惠俊

総合研究大学院大学は、学部をもたず大学院だけを置く国立大学として、昭和63年10月1日に開学したわが国最初の大学院大学である。文化科学研究科は、総合研究大学院大学の一研究科であり、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻の2専攻により、平成元年4月に設置され、平成4年度には、同じく大学共同利用機関である国際日本文化研究センターを基盤として国際日本研究専攻が増設された。

国立民族学博物館は、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究の場として重要な役割を果たすとともに、日本における民族学（文化人類学）の研究センターとしての機能をもつ。近年の国際化、国際交流の著しい進展と活発化、そして研究分野の拡大とこれにともなう研究課題の多様化は、民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めつつある。

国際日本文化研究センターは、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究ならびに世界の日本研究者に対する研究協力を行う機能をもつ。近年国際化の中で日本に対する関心が高まっており、「日本」に関する総合的な研究が世界的な規模で進められている。

このような現状をふまえ、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化に関して地域的・個別的に対象を設定し、教育研究を行う「地域文化学専攻」と、そのような諸民族の社会・技術・宗教・芸術等について通文化的手法に基づき教育研究を行う「比較文化学専攻」および国際的な視野で日本の文化と文明について教育研究を行う「国際日本研究専攻」の3専攻を置き、国際的・学際的な教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目指している。

専攻の概要

地域文化学専攻

専攻長　清水昭俊



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としている。本専攻においては、現地調査及びこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色



民族誌学的方法論に基づいた諸民族の個別文化の研究を主な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
アジア地域文化学	アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東アジア文化研究Ⅰ	教授 清水 昭俊 助教授 松山 利夫
			東アジア文化研究Ⅱ	助教授 横山 廣子
			東アジア文化研究Ⅲ	教授 周 達生 助教授 塚田 誠之
			東アジア文化研究特論Ⅰ	教授 清水 昭俊 助教授 松山 利夫
			東アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 横山 廣子
			東アジア文化研究特論Ⅲ	教授 周 達生 助教授 塚田 誠之
			東アジア文化研究演習Ⅰ	教授 周 達生 教授 清水 昭俊 助教授 松山 利夫 助教授 塚田 誠之
			東アジア文化研究演習Ⅱ	助教授 横山 廣子
			東アジア文化研究演習Ⅲ	教授 周 達生 助教授 塚田 誠之
			中央アジア文化研究	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			北アジア文化研究	教授 大塚 和義
			中央・北アジア文化研究特論Ⅰ	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			中央・北アジア文化研究特論Ⅱ	教授 大塚 和義
			中央・北アジア文化研究演習Ⅰ	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			中央・北アジア文化研究演習Ⅱ	教授 大塚 和義
	アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東南アジア文化研究Ⅰ	教授 田辺 繁治 助教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究Ⅱ	助教授 田村 克己 助教授 朝倉 敏夫
			東南アジア文化研究特論Ⅰ	教授 田辺 繁治 助教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 田村 克己 助教授 朝倉 敏夫
			東南アジア文化研究演習Ⅰ	教授 田辺 繁治 助教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究演習Ⅱ	助教授 田村 克己 助教授 杉島 敬志
			南アジア文化研究	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究特論	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究演習	教授 立川 武蔵
			西アジア文化研究	
			西アジア文化研究特論	
			西アジア文化研究演習	

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
ヨーロッパ・アフリカ地域文化学	ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	ヨーロッパ文化研究Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究Ⅱ	
			ヨーロッパ文化研究Ⅲ	教授 野村 雅一
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅱ	
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅲ	教授 野村 雅一
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ	
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅲ	教授 野村 雅一
	アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アフリカ文化研究Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究Ⅱ	教授 和田 正平
			アフリカ文化研究Ⅲ	
			アフリカ文化研究特論Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究特論Ⅱ	教授 和田 正平
			アフリカ文化研究特論Ⅲ	
			アフリカ文化研究演習Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究演習Ⅱ	教授 和田 正平
			アフリカ文化研究演習Ⅲ	
アメリカ・オセアニア地域文化学	アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アメリカ文化研究Ⅰ	
			アメリカ文化研究Ⅱ	助教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究Ⅲ	教授 友枝 啓泰
			アメリカ文化研究特論Ⅰ	
			アメリカ文化研究特論Ⅱ	助教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究特論Ⅲ	教授 友枝 啓泰
			アメリカ文化研究演習Ⅰ	
			アメリカ文化研究演習Ⅱ	助教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究演習Ⅲ	教授 友枝 啓泰
	オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	オセアニア文化研究Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究Ⅲ	助教授 秋道 智彌
			オセアニア文化研究特論Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究特論Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究特論Ⅲ	助教授 秋道 智彌
			オセアニア文化研究演習Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究演習Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究演習Ⅲ	助教授 秋道 智彌

比較文化学専攻

専攻長　藤井龍彦



民族社会、民族技術、民族宗教、民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としている。諸民族の文化の通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指す。本専攻においては、従来の民族学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色

理論民族学的方法論に基づいた通文化的研究を主要な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。研究にあたっては、現地調査に基づく第一次資料の活用を重視する。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。また、コンピュータなどによる情報処理を活用し客観的な比較研究を行う。



授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族社会・宗教学	民族社会	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治集団、法規範、所有と分配等に関する通文化的・理論的研究	民族社会研究Ⅰ	教授 松澤 員子
			民族社会研究Ⅱ	
			民族社会研究Ⅲ	
			民族社会研究Ⅳ	教授 端 信行
			民族社会研究Ⅴ	教授 藤井 龍彦
			民族社会研究特論Ⅰ	教授 松澤 員子
			民族社会研究特論Ⅱ	
			民族社会研究特論Ⅲ	教授 藤井 龍彦
			民族社会研究演習Ⅰ	教授 端 信行
			民族社会研究演習Ⅱ	
			民族社会研究演習Ⅲ	教授 松澤 員子
	民族宗教	諸民族の祭祀、神話、宇宙観等に関する通文化的・理論的研究	民族宗教研究Ⅰ	助教授 中牧 弘允
			民族宗教研究Ⅱ	
			民族宗教研究Ⅲ	教授 黒田 悦子
			民族宗教研究Ⅳ	助教授 石森 秀三
			民族宗教研究特論Ⅰ	助教授 中牧 弘允
			民族宗教研究特論Ⅱ	
			民族宗教研究特論Ⅲ	教授 黒田 悦子
			民族宗教研究演習Ⅰ	助教授 石森 秀三
			民族宗教研究演習Ⅱ	
			民族宗教研究演習Ⅲ	助教授 中牧 弘允
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究	民族技術研究Ⅰ	教授 山本 紀夫
			民族技術研究Ⅱ	教授 森田 恒之
			民族技術研究Ⅲ	助教授 吉本 忍
			民族技術研究Ⅳ	教授 石毛 直道
			民族技術研究Ⅴ	教授 大丸 弘
			民族技術研究特論Ⅰ	教授 山本 紀夫
			民族技術研究特論Ⅱ	助教授 吉本 忍
			民族技術研究特論Ⅲ	教授 大丸 弘
			民族技術研究演習Ⅰ	教授 森田 恒之
			民族技術研究演習Ⅱ	教授 石毛 直道
			民族技術研究演習Ⅲ	教授 山本 紀夫

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族言語・芸術学	民族言語	諸民族の言語、文字、伝達等に関する通文化的・理論的研究	民族言語研究Ⅰ	教授 崎山 理
			民族言語研究Ⅱ	助教授 長野 泰彦
			民族言語研究Ⅲ	
			民族言語研究Ⅳ	
			民族言語研究特論Ⅰ	教授 崎山 理
			民族言語研究特論Ⅱ	助教授 長野 泰彦
			民族言語研究特論Ⅲ	
			民族言語研究演習Ⅰ	
			民族言語研究演習Ⅱ	助教授 長野 泰彦
			民族言語研究演習Ⅲ	教授 崎山 理
			言語情報研究	教授 杉田 繁治 助教授 久保 正敏
			言語情報研究特論	教授 杉田 繁治 助教授 久保 正敏
			言語情報研究演習	教授 杉田 繁治 助教授 久保 正敏
	民族芸術	諸民族の音楽、芸能、文芸、造形等に関する通文化的・理論的研究	民族芸術研究Ⅰ	教授 藤井 知昭
			民族芸術研究Ⅱ	助教授 大森 康宏 助教授 吉田 憲司
			民族芸術研究Ⅲ	教授 杉村 棟 助教授 吉田 憲司
			民族芸術研究Ⅳ	教授 江口 一久
			民族芸術研究Ⅴ	教授 熊倉 功夫
			民族芸術研究特論Ⅰ	教授 藤井 知昭
			民族芸術研究特論Ⅱ	助教授 大森 康宏
			民族芸術研究特論Ⅲ	教授 杉村 棟 助教授 吉田 憲司
			民族芸術研究演習Ⅰ	教授 江口 一久
			民族芸術研究演習Ⅱ	助教授 大森 康宏
			民族芸術研究演習Ⅲ	教授 熊倉 功夫

文化科学研究科の学生

(1) 大学院入学定員及び現員（平成6年5月1日現在）

専攻	入学定員	現員 1年次	2年次	3年次	計	備考
地域文化学専攻	3	3	2	10〔3〕	15〔3〕	
比較文化学専攻	3	3〔1〕	3〔2〕	5	11〔3〕	
国際日本研究専攻	3	5〔2〕	※6〔3〕	2〔1〕	13〔6〕	※10月入学者2名含む
計	9	11〔3〕	11〔5〕	17〔4〕	39〔12〕	

〔 〕は留学生数で内数である。

(2) 外国人留学生数（平成6年5月1日現在）

	大学院生 1年次	2年次	3年次	計	備考
中華人民共和国	1	※3	3	7	※10月入学者含む
大韓民国		1	1	2	
インド		※1		1	※10月入学者
アルゼンチン	1			1	
フィンランド	1			1	
計	3	5	4	12	

文化科学研究科の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。また専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学 } 学位論文の内容によっては学術
比較文化学専攻	文学 }
国際日本研究専攻	学術

平成5年度学位授与者数

比較文化学専攻　　課程博士1名　　論文博士1名

文化科学研究科地域・比較文化学専攻の教職員

現員（平成6年5月1日現在）

区分	教授	助教授	計	備考
地域文化学専攻	13	10	23	
比較文化学専攻	13	8	21	
計	26	18	44	

役職員

文化科学研究科長	濱口惠俊
地域文化学専攻長	清水昭俊
比較文化学専攻長	藤井龍彦

事務局

管理部長	東府義之
研究協力課長	加藤建夫
研究協力課専門官	新谷吉成
研究協力課共同利用係長	岡安格雄
研究協力課共同利用係主任	大矢修
総合研究大学院大学庶務係主任	田中隆繁
研究協力課共同利用係事務補佐員	西村美穂
〃	久保尚子

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する



国立民族学博物館を基盤として開設された総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻・比較文化学専攻は、博士課程後期3年だけである。

その受験資格は、修士課程修了者およびそれと同等以上の学力を有するものである。ただし、修士課程における専攻は、かならずしも民族学（文化人類学）のみに限定しない。民族学関連諸分野および理工系をふくめ、多様な学問分野の学生をうけいれる。

出身学科よりも、問題はその学生の研究者としての意欲と資質であろう。柔軟でバイタリティーにあふれ創造性にとむ学生を望んでいる。

民族学の場合は、フィールド・ワークが基本であるために、現地調査の期間を約1年はみておかなければならない。フィールド・ワークの期間もいれて3年で学位論文を書き上げるということは、かなり厳しい仕事であろうが、学生諸君はそのつもりで勉強してもらわねばならない。

全国から優秀な学生諸君が多数応募されることを期待している。

国立民族学博物館長

佐々木　高　明

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館は、昭和49年6月に文部省所轄の国立大学共同利用機関として創設され、学術研究の発展及び教育活動の推進に資するため、世界の諸民族に関する資料を収集、保管し、もって公衆の観覧に供するとともに民族学に関する調査・研究を行うことを目的としている。この博物館に所属する研究者は、民族学（文化人類学）、言語学、民族技術、民族芸術、コンピュータ民族学などの専門家からなっている。

本博物館は、全国の大学の教員をはじめ民族学の研究者が利用する共同利用機関であり、全国の大学を中心とする研究者の協力のもとにさまざまな課題についての共同研究が行われ、民族学及び関連諸科学に関する研究センターの機能を果たしている。また、標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等を計画的・体系的に収集・整理・保存して、全国の研究者の利用に供するセンターとしての役割もになっている。

本博物館における研究にかかわる組織としては、研究部と情報管理施設がおかれている。研究部は、5つの部から構成されている。第1研究部は、東アジア・中央アジア・北アジア、第2研究部は、東南アジア・南アジア・西アジア、第3研究部は、ヨーロッパ・アフリカ、第4研究部は、アメリカ・オセアニア、第5研究部は、民族芸術・民族技術・民族言語・コンピュータ民族学を主要な研究対象とする。研究部では、客員教官を含め約80名の研究者が研究に従事している。情報管理施設では、研究者が収集した世界の諸民族の社会と文化に関する資料を整理、保管して、利用に供するとともに、諸情報の管理・検索システムの開発研究を行っている。本博物館には、高水準の情報処理装置が配備されている。

地域研究企画交流センターは、総合的な地域研究の推進を図るため平成6年6月に関連研究機関のネットワークの中心として機能すべく国立民族学博物館内に設置され、人文科学、社会科学、自然科学の諸分野を含めた世界の全ての地域を対象とした地域間比較研究を行っている。

所蔵民族学資料　（平成6年4月1日）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	123,593点	レコード・コンパクトディスク	38,530点	日本語図書	144,704冊
国内資料	83,346点	テープ（言語）	6,249点	外国語図書	248,320冊
計	206,939点	テープ（音楽）	4,466点	計	393,024冊
		フィルム（16ミリ）	2,959点		
		ビデオテープ・レーザーディスク	2,634点	日本語雑誌	6,518種
		計	54,838点	外国語雑誌	4,816種
				計	11,334種
				マイクロ写真資料	2,417種

総合研究大学院大学について



学長　長倉三郎

総合研究大学院大学は、1988年の創設以来これまでに、国の内外の119の大学から384名の入学者を迎え、94名の修了者を大学、研究機関、産業界その他に送り出した。このように各専攻の教育研究が順調に進んでいるのは、本学の基盤機関である11の大学共同利用機関の御協力によるもので感謝にたえない。

去る3月には横須賀市と葉山町にまたがる湘南国際村に予定していた新しいキャンパスの建設が始まり、これまで東京工業大学の御好意により長津田キャンパスの中に設けられていた本部を移転する計画が軌道に乗った。また平成6年度の政府予算で教育研究情報資料センターの設立が認められ、既に設けられている教育研究交流センターと共に当初予定していた2つのセンターが協力しながら本学の総合的かつ先導的な教育研究活動を推進する体制が整うことになる。こうした状況からみて、本学は創設期を終え、次の展開のための一つの節目を迎えつつあると言ってよいであろう。

本学固有のキャンパスを持つことによって、本部関係の施設、設備や夏の学校、学生セミナー、国際シンポジウムをはじめ全学的諸活動を実施するための会場や宿舎が整備され、本学全体としての総合的教育研究活動や交流の場が設けられることになり、その意義はきわめて大きい。同時にまた当初予定していた2つのセンターや現在学内で検討が進められている新しい研究科「総合先導科学研究科（仮称）」のためのスペースも確保できることになった。

新しいキャンパスの建設は、上に述べたハード面からの重要性に加えて、各専攻が分散している本学の一体化の象徴としてソフト面でも大きな役割を果たすことが期待される。本学の特色としての教育研究における分散と総合の調和をはかる媒体として、また本学独自の伝統を醸成して国際的なアイデンティティを確立するための精神的ふる里として新しいキャンパスに期待するところは大きい。

こうしたハード、ソフトの両面からみて重要な意味をもつ新しいキャンパスの建設が始まり、長年の念願がかなえられることになったのは、まことに有り難いことである。神奈川県が緑陰滞在型の国際交流拠点として計画した湘南国際村という本学の教育研究の理想実現にふさわしい場に用地を確保することについて、当初より格別の御尽力を賜った長洲神奈川県知事に深甚の謝意を表したい。また土地を提供していただいた三井不動産株式会社、種々御高配をいただいた文部省をはじめ関係各方面に心からお礼を申し上げたい。

本年3月には梅棹忠夫、西川哲治、千川純一、井口洋夫、大瀧仁志、松永　英、岡田節人、江橋節郎の諸先生に本学名誉教授の称号を贈った。本学の創設準備時代または創設当初において基盤機関の長として、研究科長や専攻長として格別の御尽力をいただいた先生方である。改めて敬意と感謝の意を表したい。これも本学が一つの節目を迎えたことを示すものといえるであろう。

総合研究大学院大学の沿革

昭和57年6月	国立大学共同利用機関所長懇談会が「国立大学共同利用機関における大学院の設置について」を要望した。
昭和61年4月	国立大学共同利用機関所長懇談会が「大学院問題に関するワーキング・グループ」で検討した結果に基づき「総合研究大学院大学の基本構想について」を取りまとめた。 岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備調査室及び同創設準備調査委員会が設置された。
昭和62年3月	総合研究大学院創設準備調査委員会が「総合研究大学院の基本構想」を取りまとめた。
5月	岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備室及び同創設準備委員会が設置された。
7月	総合研究大学院創設準備委員会が「総合研究大学院大学（仮称）の創設準備について——中間まとめ——」を取りまとめた。
昭和63年4月	岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院大学創設準備室及び同創設準備委員会が設置された。
5月	国立学校設置法の一部を改正する法律が公布、施行された。（昭和63年法律第67号）
9月	総合研究大学院大学創設準備委員会が「総合研究大学院大学の創設準備について」取りまとめた。
10月	総合研究大学院大学開学（数物科学研究科、生命科学研究科） 初代学長に長倉三郎（理学博士）が就任
平成元年4月	文化科学研究科設置 学生受入・授業開始
平成2年1月	初代副学長に廣田榮治（理学博士）が就任
平成3年4月	教育研究交流センター設置
平成4年4月	文化科学研究科国際日本研究専攻、数物科学研究科天文科学専攻、数物科学研究科核融合科学専攻設置 学生受入
平成5年4月	数物科学研究科極域科学専攻設置 学生受入
平成6年3月	葉山団地に本部共通棟着工
6月	教育研究情報資料センター設置

総合研究大学院大学の教職員

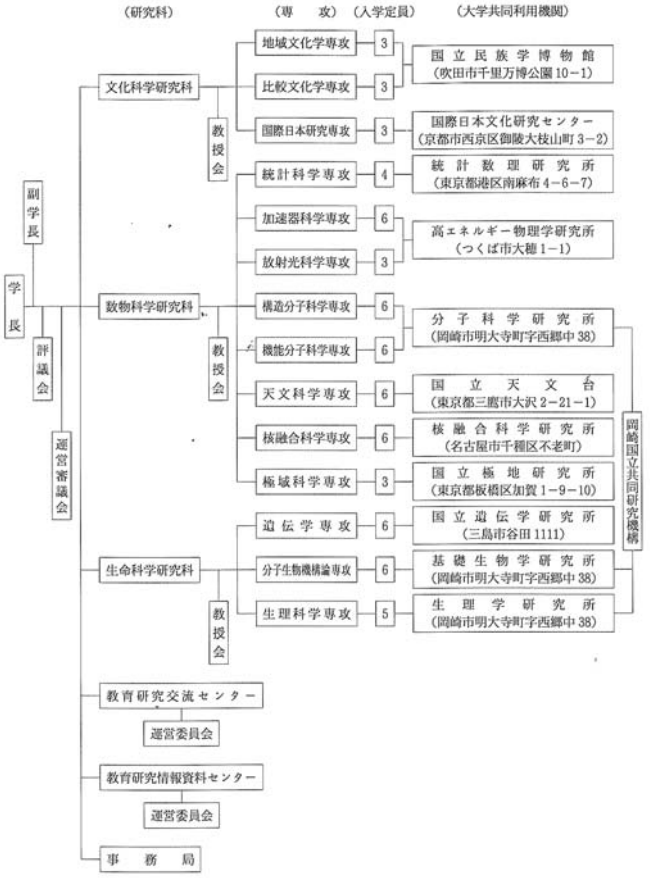
現員（平成6年5月1日現在）

区分	学長	副学長	教授	助教授	助手	事務官	技官	計
学長	1							1
副学長		1						1
事務局						33	2	35
文化科学研究科			40	26				66
数物科学研究科			105	95	132			332
生命科学研究科			33	28	32			93
教育研究交流センター			1					1
計	1	1	179	149	164	33	2	529

役職員

学長		長倉三郎　教授
副学長		廣田榮治　教授
文化科学研究科	研究科長	濱口惠俊　教授
	地域文化学専攻長	清水昭俊　教授
	比較文化学専攻長	藤井龍彦　教授
	国際日本研究専攻長	中西　進　教授
数物科学研究科	研究科長	木下　宙　教授
	統計科学専攻長	清水良一　教授
	加速器科学専攻長	菅原寛孝　教授
	放射光科学専攻長	木原元央　教授
	構造分子科学専攻長	吉原經太郎　教授
	機能分子科学専攻長	伊藤光男　教授
	天文科学専攻長	小平桂一　教授
	核融合科学専攻長	飯吉厚夫　教授
	極域科学専攻長	星合孝男　教授
生命科学研究科	研究科長	原田朋子　教授
	遺伝学専攻長	富澤純一　教授
	分子生物機構論専攻長	竹内郁夫　教授
	生理科学専攻長	濱　清　教授
教育研究交流センター	センター長	高畑尚之　教授
事務局	事務局長	山木俊助
	総務課長	山本　晃
	学務課長	坂部忠昭

総合研究大学院大学の組織



総合研究大学院大学の特色

■学部を持たない大学院だけの大学――いわゆる独立大学院大学――
■大学院の課程は、後期3年の博士課程
■教育研究は、11大学共同利用機関との連係・協力の下に実施
①教育組織は、各研究機関の教官で編成する。
②教育研究の大部分は、各研究機関の施設・設備を用いて実施する。
③各研究機関で行われている高度の研究活動に密着した教育・研究指導により、専門分野についての深い専門性をかん養する。
④大学共同利用機関の開かれた機能を生かし、各研究科・専攻間、国の内外の大学・大学院との相互交流を深めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際性等を培う。

国立学校設置法（抄）
（学校教育法第68条に定める国立大学）
第3条の3　学校教育法第68条に定める国立大学として、次に掲げる大学を置く。
……
総合研究大学院大学
2　……
3　総合研究大学院大学は、第9条の2に定める大学共同利用機関で政令で定めるものとの緊密な連係及び協力の下に教育研究を行うものとする。

※備　考　学校教育法
第68条　教育研究上特別の必要がある場合においては、第53条の規定にかかわらず、学部を置くことなく大学院を置くものを大学とすることができる。
第53条　大学には、学部を置くことを常例とする。ただし、当該大学の教育研究上の目的を達成するため有益かつ適切である場合においては、学部以外の教育研究上の基本となる組織を置くことができる。

入学者選抜方法等

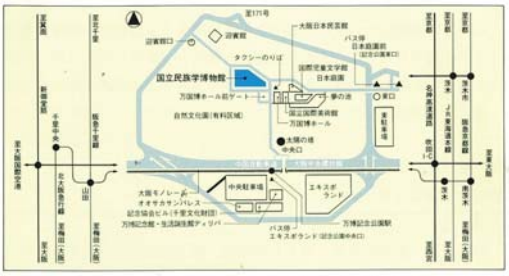
(1) 出願資格
①修士の学位を有する者
②外国において、修士の学位に相当する学位を授与された者
③大学を卒業した後、大学・研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
④その他、本学において、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

(2) 選抜方法
選抜は、書類選考と面接により行う。
①書類選考
修士課程の履修状況等に関する調査書、修士論文及び付随する資料について行う。
②面　接
修士論文（作成中の者は、その修士論文についての研究の要旨）、修士論文のない者は発表した学術論文等、又は、これまでに行った研究の要旨及び志望研究内容を中心に行う。

(3) 修了要件
本学に3年以上在学し、所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び試験に合格すること。
ただし、在学期間に関しては、特に優れた研究業績を上げた者については短縮して修了を認めることがある。

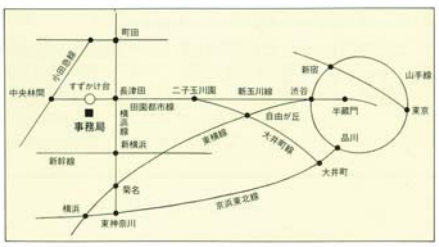
問い合わせ先

☆国立民族学博物館　管理部研究協力課共同利用係
〒565　大阪府吹田市千里万博公園10番1号
電　話　06−876−2151　内線8209・2020・8236
ＦＡＸ　06−876−2195



●阪急茨木市駅・JR茨木駅・千里中央駅よりバスで日本庭園前（記念公園東口）下車徒歩約13分
●大阪モノレールで万博記念公園駅下車徒歩約15分（ただし、自然文化園は有料です。）
●タクシーは民博職員通用口まで入ることができます。

☆総合研究大学院大学　事務局
〒227　横浜市緑区長津田町4259（東京工業大学長津田キャンパス内）
電　話　045−922−1661
ＦＡＸ　045−922−2338



1994. 9. 発行

総合研究大学院大学

地域文化学専攻
比較文化学専攻 概要



1995



もくじ

文化科学研究科について …… 1
専攻の概要 …… 2
地域文化学専攻 …… 2
比較文化学専攻 …… 5
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生 …… 8
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位 …… 8
平成6年度学位授与者数 …… 8
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教職員 …… 9
地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する …… 10
国立民族学博物館の概要 …… 11
総合研究大学院大学について …… 12
総合研究大学院大学の沿革 …… 13
総合研究大学院大学の教職員 …… 14
総合研究大学院大学の組織 …… 15
総合研究大学院大学の特色 …… 16
入学者選抜方法等 …… 17

文化科学研究科について



研究科長　清水昭俊

総合研究大学院大学は、学部をもたず大学院だけを置く国立大学として、昭和63年10月1日に開学したわが国最初の大学院大学である。文化科学研究科は、総合研究大学院大学の一研究科であり、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻の2専攻により、平成元年4月に設置され、平成4年度には、同じく大学共同利用機関である国際日本文化研究センターを基盤として国際日本研究専攻が増設された。

国立民族学博物館は、日本における民族学（文化人類学）の研究センターとしての機能をもち、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究を多角的に推進している。近年の国際化・国際交流の著しい進展と活発化、その一方での民族紛争の多発など、研究課題の多様化とこれにともなう研究分野の拡大は、民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めつつある。

国際日本文化研究センターは、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究ならびに世界の日本研究者に対する研究協力を行う機能をもつ。近年国際化の中で日本に対する関心が高まっており、「日本」に関する総合的な研究が世界的な規模で進められている。

この二つの研究機関を基盤として、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化に関して地域的・個別的に対象を設定し、教育研究を行う「地域文化学専攻」と、そのような諸民族の社会・技術・宗教・芸術等について通文化的手法に基づき教育研究を行う「比較文化学専攻」および国際的な視野で日本の文化と文明について教育研究を行う「国際日本研究専攻」の3専攻を置き、国際的・学際的な教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目指している。

専攻の概要

地域文化学専攻

専攻長　吉田集而



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としている。本専攻においては、現地調査及びこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色



民族誌学的方法論に基づいた諸民族の個別文化の研究を主な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者がら構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
アジア地域文化学	アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東アジア文化研究Ⅰ	教授 清水 昭俊 助教授 松山 利夫
			東アジア文化研究Ⅱ	助教授 横山 廣子
			東アジア文化研究Ⅲ	助教授 塚田 誠之
			東アジア文化研究特論Ⅰ	教授 清水 昭俊 助教授 松山 利夫
			東アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 横山 廣子
			東アジア文化研究特論Ⅲ	助教授 塚田 誠之
			東アジア文化研究演習Ⅰ	教授 清水 昭俊 助教授 松山 利夫 助教授 塚田 誠之 助教授 横山 廣子
			東アジア文化研究演習Ⅱ	
			東アジア文化研究演習Ⅲ	
			中央アジア文化研究	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			北アジア文化研究	教授 大塚 和義 助教授 佐々木史郎
			中央・北アジア文化研究特論Ⅰ	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			中央・北アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 佐々木史郎
			中央・北アジア文化研究演習Ⅰ	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			中央・北アジア文化研究演習Ⅱ	教授 大塚 和義
	アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東南アジア文化研究Ⅰ	教授 田邉 繁治 助教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究Ⅱ	助教授 田村 克己 助教授 朝倉 敏夫
			東南アジア文化研究特論Ⅰ	教授 田邉 繁治 助教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 田村 克己 助教授 朝倉 敏夫
			東南アジア文化研究演習Ⅰ	教授 田邉 繁治 助教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究演習Ⅱ	助教授 田村 克己 助教授 杉島 敬志
			南アジア文化研究	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究特論	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究演習	教授 立川 武蔵
			西アジア文化研究	
			西アジア文化研究特論	
			西アジア文化研究演習	

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
ヨーロッパ・アフリカ地域文化学	ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	ヨーロッパ文化研究Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究Ⅱ	
			ヨーロッパ文化研究Ⅲ	教授 野村 雅一
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅱ	
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅲ	教授 野村 雅一
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ	
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅲ	教授 野村 雅一
	アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アフリカ文化研究Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究Ⅱ	教授 和田 正平
			アフリカ文化研究Ⅲ	
			アフリカ文化研究特論Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究特論Ⅱ	教授 和田 正平
			アフリカ文化研究特論Ⅲ	
			アフリカ文化研究演習Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究演習Ⅱ	教授 和田 正平
			アフリカ文化研究演習Ⅲ	
アメリカ・オセアニア地域文化学	アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アメリカ文化研究Ⅰ	
			アメリカ文化研究Ⅱ	助教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究Ⅲ	教授 友枝 啓泰 教授 山田 睦男
			アメリカ文化研究特論Ⅰ	
			アメリカ文化研究特論Ⅱ	助教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究特論Ⅲ	教授 山田 睦男
			アメリカ文化研究演習Ⅰ	
			アメリカ文化研究演習Ⅱ	助教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究演習Ⅲ	教授 友枝 啓泰
	オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	オセアニア文化研究Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究Ⅲ	教授 秋道 智彌
			オセアニア文化研究特論Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究特論Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究特論Ⅲ	教授 秋道 智彌
			オセアニア文化研究演習Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究演習Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究演習Ⅲ	教授 秋道 智彌
共通			地域文化学特論Ⅰ	
			地域文化学特論Ⅱ	
			地域文化学演習Ⅰ	
			地域文化学演習Ⅱ	

※平成7年度の授業科目である。

比較文化学専攻

専攻長　端　信行



民族社会、民族技術、民族宗教、民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としている。諸民族の文化の通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指す。本専攻においては、従来の民族学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色

理論民族学的方法論に基づいた通文化的研究を主要な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。研究にあたっては、現地調査に基づく第一次資料の活用を重視する。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。また、コンピュータなどによる情報処理を活用し客観的な比較研究を行う。



授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族社会・宗教学	民族社会	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治集団、法規範、所有と分配等に関する通文化的・理論的研究	民族社会研究Ⅰ	助教授 杉本 良男
			民族社会研究Ⅱ	
			民族社会研究Ⅲ	
			民族社会研究Ⅳ	教授 端　信行
			民族社会研究Ⅴ	教授 藤井 龍彦
			民族社会研究特論Ⅰ	
			民族社会研究特論Ⅱ	
			民族社会研究特論Ⅲ	教授 藤井 龍彦
			民族社会研究演習Ⅰ	教授 端　信行
			民族社会研究演習Ⅱ	
			民族社会研究演習Ⅲ	助教授 杉本 良男
	民族宗教	諸民族の祭祀、神話、宇宙観等に関する通文化的・理論的研究	民族宗教研究Ⅰ	教授 中牧 弘允
			民族宗教研究Ⅱ	
			民族宗教研究Ⅲ	教授 黒田 悦子
			民族宗教研究Ⅳ	助教授 石森 秀三
			民族宗教研究特論Ⅰ	教授 中牧 弘允
			民族宗教研究特論Ⅱ	
			民族宗教研究特論Ⅲ	教授 黒田 悦子
			民族宗教研究演習Ⅰ	助教授 石森 秀三
			民族宗教研究演習Ⅱ	
			民族宗教研究演習Ⅲ	教授 中牧 弘允
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究	民族技術研究Ⅰ	教授 山本 紀夫
			民族技術研究Ⅱ	教授 森田 恒之
			民族技術研究Ⅲ	助教授 吉本　忍
			民族技術研究Ⅳ	教授 石毛 直道
			民族技術研究Ⅴ	教授 大丸　弘
			民族技術研究特論Ⅰ	教授 山本 紀夫
			民族技術研究特論Ⅱ	助教授 吉本　忍
			民族技術研究特論Ⅲ	教授 大丸　弘
			民族技術研究演習Ⅰ	教授 森田 恒之
			民族技術研究演習Ⅱ	教授 石毛 直道
			民族技術研究演習Ⅲ	教授 山本 紀夫

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族言語・芸術学	民族言語	諸民族の言語、文字、伝達等に関する通文化的・理論的研究	民族言語研究Ⅰ	教授 崎山 理
			民族言語研究Ⅱ	教授 長野 泰彦
			民族言語研究Ⅲ	
			民族言語研究Ⅳ	
			民族言語研究特論Ⅰ	教授 崎山 理
			民族言語研究特論Ⅱ	教授 長野 泰彦
			民族言語研究特論Ⅲ	
			民族言語研究演習Ⅰ	
			民族言語研究演習Ⅱ	教授 長野 泰彦
			民族言語研究演習Ⅲ	教授 崎山 理
			言語情報研究	教授 杉田 繁治 助教授 久保 正敏
			言語情報研究特論	教授 杉田 繁治 助教授 久保 正敏
			言語情報研究演習	教授 杉田 繁治 助教授 久保 正敏
	民族芸術	諸民族の音楽、芸能、文芸、造形等に関する通文化的・理論的研究	民族芸術研究Ⅰ	教授 藤井 知昭
			民族芸術研究Ⅱ	教授 大森 康宏 助教授 吉田 憲司
			民族芸術研究Ⅲ	教授 杉村 棟 助教授 吉田 憲司
			民族芸術研究Ⅳ	教授 江口 一久
			民族芸術研究Ⅴ	教授 熊倉 功夫
			民族芸術研究特論Ⅰ	教授 藤井 知昭
			民族芸術研究特論Ⅱ	教授 大森 康宏
			民族芸術研究特論Ⅲ	教授 杉村 棟 助教授 吉田 憲司
			民族芸術研究演習Ⅰ	教授 江口 一久
			民族芸術研究演習Ⅱ	教授 大森 康宏
			民族芸術研究演習Ⅲ	教授 熊倉 功夫
共通			比較文化学特論Ⅰ	
			比較文化学特論Ⅱ	
			比較文化学演習Ⅰ	
			比較文化学演習Ⅱ	

※平成7年度の授業科目である。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

(1) 大学院入学定員及び現員（平成7年5月1日現在）

専攻	入学定員	現員 1年次	2年次	3年次	計	備考
地域文化学専攻	3	2	3	10〔1〕	15〔1〕	
比較文化学専攻	3	3	3〔1〕	7〔2〕	13〔3〕	
計	6	5	6〔1〕	17〔3〕	28〔4〕	

〔 〕は留学生数で内数である。

(2) 外国人留学生数（平成7年5月1日現在）

	大学院生 1年次	2年次	3年次	計	備考
中華人民共和国			2	2	
大韓民国			1	1	
フィンランド		1		1	
計		1	3	4	

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。また専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野	
地域文化学専攻	文学	学位論文の内容によっては学術
比較文化学専攻	文学	

平成6年度学位授与者数

地域文化学専攻　課程博士2名
比較文化学専攻　課程博士1名

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教職員

現員（平成7年5月1日現在）

区分	教授	助教授	計	備考
地域文化学専攻	13	12	25	
比較文化学専攻	13	8	21	
計	26	20	46	

役職員

文化科学研究科長	清水昭俊
地域文化学専攻長	吉田集而
比較文化学専攻長	端信行

事務局

管理部長	東府義之
研究協力課長	伊藤憂彦
研究協力課専門官	新谷吉成
研究協力課共同利用係長	岡安格雄
研究協力課共同利用係主任	大矢修
総合研究大学院大学庶務係主任	田中隆繁
研究協力課共同利用係事務補佐員	西村美穂
〃	久保尚子

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する



国立民族学博物館を基盤として開設された総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻・比較文化学専攻は、博士課程後期3年だけである。

その受験資格は、修士課程修了者およびそれと同等以上の学力を有するものである。ただし、修士課程における専攻は、かならずしも民族学（文化人類学）のみに限定しない。民族学関連諸分野および理工系をふくめ、多様な学問分野の学生をうけいれる。

出身学科よりも、問題はその学生の研究者としての意欲と資質であろう。柔軟でバイタリティーにあふれ創造性にとむ学生を望んでいる。

民族学の場合は、フィールド・ワークが基本であるために、現地調査の期間を約1年はみておかなければならない。フィールド・ワークの期間もいれて3年で学位論文を書き上げるということは、かなり厳しい仕事であろうが、学生諸君はそのつもりで勉強してもらわねばならない。

全国から優秀な学生諸君が多数応募されることを期待している。

国立民族学博物館長
佐々木　高　明

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館は、昭和49年6月に文部省所轄の大学共同利用機関として創設され、学術研究の発展及び教育活動の推進に資するため、世界の諸民族に関する資料を収集、保管し、もって公衆の観覧に供するとともに民族学に関する調査・研究を行うことを目的としている。この博物館に所属する研究者は、民族学（文化人類学）、言語学、民族技術、民族芸術、コンピュータ民族学などの専門家からなっている。

本博物館は、全国の大学の教員をはじめ民族学の研究者が利用する共同利用機関であり、全国の大学を中心とする研究者の協力のもとにさまざまな課題についての共同研究が行われ、民族学及び関連諸科学に関する研究センターの機能を果たしている。また、標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等を計画的・体系的に収集・整理・保存して、全国の研究者の利用に供するセンターとしての役割もになっている。

本博物館における研究にかかわる組織としては、研究部と情報管理施設がおかれている。研究部は、5つの部から構成されている。第1研究部は、東アジア・中央アジア・北アジア、第2研究部は、東南アジア・南アジア・西アジア、第3研究部は、ヨーロッパ・アフリカ、第4研究部は、アメリカ・オセアニア、第5研究部は、民族芸術・民族技術・民族言語・コンピュータ民族学を主要な研究対象とする。研究部では、客員教官を含め約80名の研究者が研究に従事している。情報管理施設では、研究者が収集した世界の諸民族の社会と文化に関する資料を整理、保管して、利用に供するとともに、諸情報の管理・検索システムの開発研究を行っている。本博物館には、高水準の情報処理装置が配備されている。

地域研究企画交流センターは、総合的な地域研究の推進を図るため平成6年6月に関連研究機関のネットワークの中心として機能すべく国立民族学博物館内に設置され、人文科学、社会科学、自然科学の諸分野を含めた世界の全ての地域を対象とした地域間比較研究を行っている。

所蔵民族学資料

（平成7年4月1日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	127,833点	レコード・コンパクトディスク	39,695点	日本語図書	155,334冊
国内資料	83,357点	テープ（言語）	6,249点	外国語図書	258,523冊
計	211,190点	テープ（音楽）	4,470点	計	413,857冊
		フィルム（16ミリ）	2,972点		
		ビデオテープ・レーザーディスク	2,895点	日本語雑誌	6,791種
		計	56,281点	外国語雑誌	4,914種
				計	11,705種
				マイクロ写真資料	2,442種

総合研究大学院大学について



学長　廣田榮治

総合研究大学院大学の生みの親である長倉三郎初代学長が、平成7年3月31日付けで任期を終え、退官された。本学にとって誠に大きな出来事である。後を継ぐものとして、長倉前学長の掲げられた理想の実現に向け、全力を尽くす所存である。引続き各位のご指導、ご鞭撻、またご支援をお願い申しあげる次第である。

総合研究大学院大学は、「総合」と「分散」を2本の基本的な柱とし、独創性豊かで幅広い視野を持った若手研究者を養成することを目的として、昭和63年10月に開学した。11の大学共同利用機関を基盤機関とした「分散」の形式による博士後期課程の教育研究は、基盤機関をはじめ関係各位の絶大なご努力により順調に進行し、平成6年度末までに150名の課程博士を世の中に送りだすことができた。これと並行して、大学本部、とくに教育研究交流センターを中心に、全学的な「総合」を目指す活動を行ってきた。平成7年3月9、10の両日、葉山新キャンパス及び湘南国際村センターで行われた国際シンポジウム「文明と宇宙」は、その一つである。このシンポジウムは、初めての試みとして第3日目を一般公開することとし、3月11日場所をパシフィコ横浜に移し、一般から約350名の参加を得て行われた。

平成6年度、本学本部に教育研究情報資料センターが設置され、平成6年12月1日付けで、及川昭文教授が着任した。同センターは、葉山新キャンパス本部共通棟に学内ＬＡＮを敷設し、ファイルサーバを導入する等の活動を開始している。また平成7年度には、基盤機関・本部を結ぶ教育研究マルチメディアシステムの構築を予定し、本学の「総合」的活動の促進に資する計画である。

平成7年1月末、葉山新キャンパスに待望の本部共通棟が完成し、2月末には本部事務局及び教育研究交流センター、教育研究情報資料センターが、東京工業大学長津田キャンパスから葉山へ移転を完了した。6年半の長い間お世話になった東京工業大学にあらためて厚くお礼申し上げたい。平成7年3月24日には、新装の本部施設の披露の式典を執り行い、文部大臣、長洲神奈川県知事をはじめ関係各位から祝詞を頂戴した。この新しい葉山キャンパスへの本部移転をもって、本学の第1期が終了したということができよう。

平成7年度から始まる本学第2期は、平成7年4月1日付けで副学長に森脇和郎教授を迎えて開始された。この期の活動は、創設時にたてられた理想の具体化に向けられよう。その中でもっとも重要なのは、本学が目標とする「先導的学問分野創設」を具現するための総合先導科学研究科（仮称）の設置である。新研究科の基本構想は、「共同研究」、「ワークショップ」、「グループ研究」および調査検討委員会、設置準備委員会、同ワーキンググループ等の活動により、取りまとめられている。関係各方面のご理解を得つつ、全学挙げてその実現に邁進する所存である。さらに、本年度より予算措置された「外国人若手研究者研究体験フェローシップ」や東京工業大学、お茶の水女子大学等との単位互換、新しい計画である「湘南レクチャー」等により国際交流、大学間プログラムを一段と推進する計画である。

総合研究大学院大学の沿革

昭和57年6月	国立大学共同利用機関所長懇談会が「国立大学共同利用機関における大学院の設置について」を要望した。
昭和61年4月	国立大学共同利用機関所長懇談会が「大学院問題に関するワーキング・グループ」で検討した結果に基づき「総合研究大学院大学の基本構想について」を取りまとめた。 岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備調査室及び同創設準備調査委員会が設置された。
昭和62年3月	総合研究大学院創設準備調査委員会が「総合研究大学院の基本構想」を取りまとめた。
5月	岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備室及び同創設準備委員会が設置された。
7月	総合研究大学院創設準備委員会が「総合研究大学院大学（仮称）の創設準備について―中間まとめ―」を取りまとめた。
昭和63年4月	岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院大学創設準備室及び同創設準備委員会が設置された。
5月	国立学校設置法の一部を改正する法律が公布、施行された。（昭和63年法律第67号）
9月	総合研究大学院大学創設準備委員会が「総合研究大学院大学の創設準備について」取りまとめた。
10月	総合研究大学院大学開学（数物科学研究科、生命科学研究科） 初代学長に長倉三郎（理学博士）が就任
平成元年4月	文化科学研究科設置 文化科学、数物科学、生命科学の各研究科において学生受入、授業開始
平成2年1月	初代副学長に廣田榮治（理学博士）が就任
平成3年4月	教育研究交流センター設置
平成4年4月	文化科学研究科国際日本研究専攻、数物科学研究科天文科学専攻、及び核融合科学専攻設置 学生受入、授業開始
平成5年4月	数物科学研究科極域科学専攻設置 学生受入、授業開始
平成6年6月	教育研究情報資料センター設置
平成7年2月	葉山キャンパス開校
4月	2代学長に廣田榮治（理学博士）が就任

総合研究大学院大学の教職員

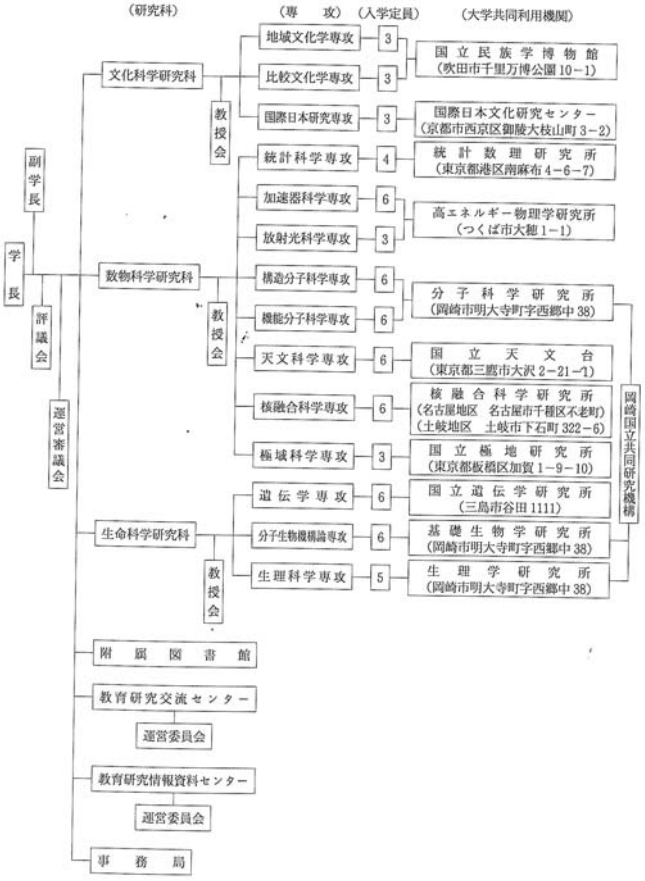
現員（平成7年5月1日現在）

区分	学長	副学長	教授	助教授	助手	事務官	技官	計
学長	1							1
副学長		1						1
事務局						34	2	36
文化科学研究科			41	31				72
数物科学研究科			105	107	131			343
生命科学研究科			34	24	31			89
教育研究交流センター			1					1
教育研究情報資料センター			1					1
計	1	1	182	162	162	34	2	544

役職員

学長		廣田榮治
副学長		森脇和郎
文化科学研究科	研究科長	清水昭俊 教授
	地域文化学専攻長	吉田集而 教授
	比較文化学専攻長	端信行 教授
	国際日本研究専攻長	飯田経夫 教授
数物科学研究科	研究科長	藤田順治 教授
	統計科学専攻長	清水良一 教授
	加速器科学専攻長	菅原寛孝 教授
	放射光科学専攻長	木原元央 教授
	構造分子科学専攻長	吉原經太郎 教授
	機能分子科学専攻長	伊藤光男 教授
	天文科学専攻長	小平桂一 教授
	核融合科学専攻長	飯吉厚夫 教授
	極域科学専攻長	平澤威男 教授
生命科学研究科	研究科長	山岸俊一 教授
	遺伝学専攻長	富澤純一 教授
	分子生物機構論専攻長	毛利秀雄 教授
	生理科学専攻長	直清 教授
附属図書館	館長事務取扱	森脇和郎
教育研究交流センター	センター長	高畑尚之 教授
教育研究情報資料センター	センター長事務取扱	森脇和郎
事務局	事務局長	山木俊助
	総務課長	中島節夫
	学務課長	玉木茂

総合研究大学院大学の組織



総合研究大学院大学の特色

■学部を持たない大学院だけの大学――いわゆる独立大学院大学――
■大学院の課程は、後期3年の博士課程
■教育研究は、11の大学共同利用機関との緊密な連係・協力の下に実施
①教官組織は、各研究機関の教官で編成する。
②教育研究の大部分は、各研究機関の施設・設備を用いて実施する。
③各研究機関で行われている高度の研究活動に密着した教育・研究指導により、専門分野についての深い専門性をかん養する。
④大学共同利用機関の開かれた機能を生かし、各研究科・専攻間、国の内外の大学・大学院との相互交流を深めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際性等を培う。

国立学校設置法（抄）
（学校教育法第68条に定める国立大学）
第3条の3　学校教育法第68条に定める国立大学として、次に掲げる大学を置く。
……
総合研究大学院大学
2　……
3　総合研究大学院大学は、第9条の2に定める大学共同利用機関で政令で定めるものとの緊密な連係及び協力の下に教育研究を行うものとする。

※備　考　学校教育法
第68条　教育研究上特別の必要がある場合においては、第53条の規定にかかわらず、学部を置くことなく大学院を置くものを大学とすることができる。
第53条　大学には、学部を置くことを常例とする。ただし、当該大学の教育研究上の目的を達成するため有益かつ適切である場合においては、学部以外の教育研究上の基本となる組織を置くことができる。

入学者選抜方法等

(1) 出願資格
①修士の学位を有する者
②外国において、修士の学位に相当する学位を授与された者
③大学を卒業し、又は外国において学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
④その他、本学において、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

(2) 選抜方法
選抜は、書類選考と面接により行う。
①書類選考
修士課程の履修状況等に関する調査書、修士論文及び付随する資料について行う。
②面　接
修士論文（作成中の者は、その修士論文についての研究の要旨）、修士論文のない者は発表した学術論文等、又は、これまでに行った研究の要旨及び志望研究内容を中心に行う。

(3) 修了要件
本学に3年以上在学し、所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び試験に合格すること。
ただし、在学期間に関しては、特に優れた研究業績を上げた者については短縮して修了を認めることがある。

問い合わせ先

☆国立民族学博物館　管理部研究協力課共同利用係
〒565　大阪府吹田市千里万博公園10番1号
電　話　06－876－2151　内線8209・8236・2020
ＦＡＸ　06－876－2195



●阪急茨木市駅・JR茨木駅・千里中央駅よりバスで日本庭園前（記念公園東口）下車徒歩約13分
●大阪モノレールで万博記念公園駅下車徒歩約15分（ただし、自然文化園は有料です。）
●タクシーは民博職員通用口まで入ることができます。

☆総合研究大学院大学　事務局
〒240-01　神奈川県三浦郡葉山町上山口字間門1560－35
電　話　0468－58－1500
ＦＡＸ　0468－58－1541





1995. 9. 発行

総合研究大学院大学

地域文化学専攻
比較文化学専攻 概要



1996



もくじ

文化科学研究科について …… 1
専攻の概要 …… 2
地域文化学専攻 …… 2
比較文化学専攻 …… 5
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生 …… 8
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位 …… 8
平成7年度学位授与者数 …… 8
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教職員 …… 9
地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する …… 10
国立民族学博物館の概要 …… 11
総合研究大学院大学について …… 12
総合研究大学院大学の沿革 …… 13
総合研究大学院大学の教職員 …… 14
総合研究大学院大学の組織 …… 15
総合研究大学院大学の特色 …… 16
入学者選抜方法等 …… 17

文化科学研究科について



研究科長　藤井龍彦

総合研究大学院大学は、学部をもたず大学院だけを置く国立大学として、昭和63年10月1日に開学した我が国最初の大学院大学である。文化科学研究科は、総合研究大学院大学の一研究科であり、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻の2専攻により、平成元年4月に設置され、平成4年度には、同じく大学共同利用機関である国際日本文化研究センターを基盤として国際日本研究専攻が増設された。

国立民族学博物館は、日本における民族学（文化人類学）の研究センターとしての機能をもち、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究を多角的に推進している。近年の国際化・国際交流の著しい進展と活発化、その一方での民族紛争の多発など、研究課題の多様化とこれに伴う研究分野の拡大は、民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めつつある。

国際日本文化研究センターは、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力を行う機能をもつ。近年国際化の中で日本に対する関心が高まっており、「日本」に関する総合的な研究が世界的な規模で進められている。

この二つの研究機関を基盤として、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化に関して地域的・個別的に対象を設定し、教育研究を行う「地域文化学専攻」と、そのような諸民族の社会・技術・宗教・芸術等について通文化的手法に基づき教育研究を行う「比較文化学専攻」及び国際的な視野で日本の文化と文明について教育研究を行う「国際日本研究専攻」の3専攻を置き、国際的・学際的な教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目指している。

専攻の概要

地域文化学専攻　専攻長　田邊繁治



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としている。本専攻においては、現地調査及びこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色



民族誌学的方法論に基づいた諸民族の個別文化の研究を主な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
アジア地域文化学	アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東アジア文化研究Ⅰ	教授 清水 昭俊 教授 松山 利夫
			東アジア文化研究Ⅱ	助教授 横山 廣子
			東アジア文化研究Ⅲ	助教授 塚田 誠之
			東アジア文化研究特論Ⅰ	教授 清水 昭俊 教授 松山 利夫
			東アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 横山 廣子
			東アジア文化研究特論Ⅲ	助教授 塚田 誠之
			東アジア文化研究演習Ⅰ	教授 清水 昭俊 教授 松山 利夫
			東アジア文化研究演習Ⅱ	助教授 横山 廣子
			東アジア文化研究演習Ⅲ	助教授 塚田 誠之
			中央アジア文化研究	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			北アジア文化研究	教授 大塚 和義 助教授 佐々木史郎
			中央・北アジア文化研究特論Ⅰ	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			中央・北アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 佐々木史郎
			中央・北アジア文化研究演習Ⅰ	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			中央・北アジア文化研究演習Ⅱ	教授 大塚 和義
	アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東南アジア文化研究Ⅰ	教授 田邉 繁治 助教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究Ⅱ	助教授 田村 克己 助教授 朝倉 敏夫
			東南アジア文化研究特論Ⅰ	教授 田邉 繁治 助教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 田村 克己 助教授 朝倉 敏夫
			東南アジア文化研究演習Ⅰ	教授 田邉 繁治 助教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究演習Ⅱ	助教授 田村 克己 助教授 杉島 敬志
			南アジア文化研究	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究特論	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究演習	教授 立川 武蔵
			西アジア文化研究	助教授 臼杵 陽
			西アジア文化研究特論	助教授 臼杵 陽
			西アジア文化研究演習	助教授 臼杵 陽

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
ヨーロッパ・アフリカ地域文化学	ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	ヨーロッパ文化研究Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究Ⅱ	
			ヨーロッパ文化研究Ⅲ	教授 野村 雅一
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅱ	
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅲ	教授 野村 雅一
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ	
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅲ	教授 野村 雅一
	アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アフリカ文化研究Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究Ⅱ	教授 和田 正平
			アフリカ文化研究Ⅲ	
			アフリカ文化研究特論Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究特論Ⅱ	教授 和田 正平
			アフリカ文化研究特論Ⅲ	
			アフリカ文化研究演習Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究演習Ⅱ	教授 和田 正平
			アフリカ文化研究演習Ⅲ	
アメリカ・オセアニア地域文化学	アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アメリカ文化研究Ⅰ	
			アメリカ文化研究Ⅱ	助教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究Ⅲ	教授 山田 睦男
			アメリカ文化研究特論Ⅰ	
			アメリカ文化研究特論Ⅱ	助教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究特論Ⅲ	教授 山田 睦男
			アメリカ文化研究演習Ⅰ	
			アメリカ文化研究演習Ⅱ	助教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究演習Ⅲ	教授 山田 睦男
	オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	オセアニア文化研究Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究Ⅲ	教授 秋道 智彌
			オセアニア文化研究特論Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究特論Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究特論Ⅲ	教授 秋道 智彌
			オセアニア文化研究演習Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究演習Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究演習Ⅲ	教授 秋道 智彌
共通			地域文化学特論Ⅰ	
			地域文化学特論Ⅱ	
			地域文化学演習Ⅰ	
			地域文化学演習Ⅱ	

※平成8年度の授業科目である。

比較文化学専攻

専攻長　中牧弘允



民族社会、民族技術、民族宗教、民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としている。諸民族の文化の通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指す。本専攻においては、従来の民族学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色

理論民族学的方法論に基づいた通文化的研究を主要な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。研究にあたっては、現地調査に基づく第一次資料の活用を重視する。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。また、コンピュータなどによる情報処理を活用し客観的な比較研究を行う。



授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族社会・宗教学	民族社会	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治集団、法規範、所有と分配等に関する通文化的・理論的研究	民族社会研究Ⅰ	助教授 杉本 良男
			民族社会研究Ⅱ	助教授 押川 文子
			民族社会研究Ⅲ	
			民族社会研究Ⅳ	教授 端 信行
			民族社会研究Ⅴ	教授 藤井 龍彦
			民族社会研究特論Ⅰ	教授 端 信行
			民族社会研究特論Ⅱ	
			民族社会研究特論Ⅲ	教授 藤井 龍彦
			民族社会研究演習Ⅰ	教授 端 信行
			民族社会研究演習Ⅱ	助教授 押川 文子
			民族社会研究演習Ⅲ	助教授 杉本 良男
	民族宗教	諸民族の祭祀、神話、宇宙観等に関する通文化的・理論的研究	民族宗教研究Ⅰ	教授 中牧 弘允
			民族宗教研究Ⅱ	
			民族宗教研究Ⅲ	教授 黒田 悦子
			民族宗教研究Ⅳ	教授 石森 秀三
			民族宗教研究特論Ⅰ	教授 中牧 弘允
			民族宗教研究特論Ⅱ	
			民族宗教研究特論Ⅲ	教授 黒田 悦子
			民族宗教研究演習Ⅰ	教授 石森 秀三
			民族宗教研究演習Ⅱ	
			民族宗教研究演習Ⅲ	教授 中牧 弘允
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究	民族技術研究Ⅰ	教授 山本 紀夫
			民族技術研究Ⅱ	教授 森田 恒之
			民族技術研究Ⅲ	助教授 吉本 忍
			民族技術研究Ⅳ	教授 石毛 直道
			民族技術研究Ⅴ	助教授 近藤 雅樹
			民族技術研究特論Ⅰ	教授 山本 紀夫
			民族技術研究特論Ⅱ	助教授 吉本 忍
			民族技術研究特論Ⅲ	助教授 近藤 雅樹
			民族技術研究演習Ⅰ	教授 森田 恒之
			民族技術研究演習Ⅱ	教授 石毛 直道
			民族技術研究演習Ⅲ	教授 山本 紀夫

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族言語・芸術学	民族言語	諸民族の言語、文字、伝達等に関する通文化的・理論的研究	民族言語研究Ⅰ	教授 崎山 理
			民族言語研究Ⅱ	教授 長野 泰彦
			民族言語研究Ⅲ	
			民族言語研究Ⅳ	
			民族言語研究特論Ⅰ	教授 崎山 理
			民族言語研究特論Ⅱ	教授 長野 泰彦
			民族言語研究特論Ⅲ	
			民族言語研究演習Ⅰ	
			民族言語研究演習Ⅱ	教授 長野 泰彦
			民族言語研究演習Ⅲ	教授 崎山 理
			言語情報研究	教授 杉田 繁治 助教授 久保 正敏
			言語情報研究特論	教授 杉田 繁治 助教授 久保 正敏
			言語情報研究演習	教授 杉田 繁治 助教授 久保 正敏
	民族芸術	諸民族の音楽、芸能、文芸、造形等に関する通文化的・理論的研究	民族芸術研究Ⅰ	
			民族芸術研究Ⅱ	教授 大森 康宏 助教授 吉田 憲司
			民族芸術研究Ⅲ	教授 杉村 棟 助教授 吉田 憲司
			民族芸術研究Ⅳ	教授 江口 一久
			民族芸術研究Ⅴ	教授 熊倉 功夫
			民族芸術研究特論Ⅰ	
			民族芸術研究特論Ⅱ	教授 大森 康宏
			民族芸術研究特論Ⅲ	教授 杉村 棟 助教授 吉田 憲司
			民族芸術研究演習Ⅰ	教授 江口 一久
			民族芸術研究演習Ⅱ	教授 大森 康宏
			民族芸術研究演習Ⅲ	教授 熊倉 功夫
共通			比較文化学特論Ⅰ 比較文化学特論Ⅱ 比較文化学演習Ⅰ 比較文化学演習Ⅱ	

※平成8年度の授業科目である。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

(1) 大学院入学定員及び現員（平成8年4月1日現在）

専攻	入学定員	現員 1年次	2年次	3年次	計	備考
地域文化学専攻	3	3	2	10	15	
比較文化学専攻	3	3	3	7〔3〕	13〔3〕	
計	6	6	5	17〔3〕	28〔3〕	

〔 〕は留学生数で内数である。

(2) 外国人留学生数（平成8年4月1日現在）

	大学院生 1年次	2年次	3年次	計	備考
中華人民共和国			1	1	
大韓民国			1	1	
フィンランド			1	1	
計			3	3	

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。また専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野	
地域文化学専攻	文学	学位論文の内容によっては学術
比較文化学専攻	文学	

平成7年度学位授与者数

地域文化学専攻　　課程博士2名
比較文化学専攻　　課程博士1名

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教職員

現員（平成8年4月1日現在）

区分	教授	助教授	計	備考
地域文化学専攻	13	12	25	
比較文化学専攻	14	7	21	
計	27	19	46	

役職員

文化科学研究科長	藤井龍彦
地域文化学専攻長	田邉繁治
比較文化学専攻長	中牧弘允

事務局

管理部長	小村久米夫
研究協力課長	伊藤憲彦
研究協力課専門官	新谷吉成
研究協力課共同利用係長	園田厚生
研究協力課共同利用係主任	大矢修
総合研究大学院大学庶務・企画調査係主任	田中隆繁
研究協力課共同利用係	西村美穂
〃	久保尚子

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する



国立民族学博物館を基盤として開設された総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻・比較文化学専攻は、博士課程後期3年だけである。

その受験資格は、修士課程修了者およびそれと同等以上の学力を有するものである。ただし、修士課程における専攻は、かならずしも民族学（文化人類学）のみに限定しない。民族学関連諸分野および理工系をふくめ、多様な学問分野の学生をうけいれる。

出身学科よりも、問題はその学生の研究者としての意欲と資質であろう。柔軟でバイタリティーにあふれ創造性にとむ学生を望んでいる。

民族学の場合は、フィールド・ワークが基本であるために、現地調査の期間を約1年はみておかなければならない。フィールド・ワークの期間もいれて3年で学位論文を書き上げるということは、かなり厳しい仕事であろうが、学生諸君はそのつもりで勉強してもらわねばならない。

全国から優秀な学生諸君が多数応募されることを期待している。

国立民族学博物館長

佐々木　高　明

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館は、昭和49年6月に文部省所轄の大学共同利用機関として創設され、学術研究の発展及び教育活動の推進に資するため、世界の諸民族に関する資料を収集、保管し、もって公衆の観覧に供するとともに民族学に関する調査・研究を行うことを目的としている。この博物館に所属する研究者は、民族学（文化人類学）、言語学、民族技術、民族芸術、コンピュータ民族学などの専門家からなっている。

本博物館は、全国の大学の教員をはじめ民族学の研究者が利用する共同利用機関であり、全国の大学を中心とする研究者の協力のもとにさまざまな課題についての共同研究が行われ、民族学及び関連諸科学に関する研究センターの機能を果たしている。また、標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等を計画的・体系的に収集・整理・保存して、全国の研究者の利用に供するセンターとしての役割もになっている。

本博物館における研究にかかわる組織としては、研究部と情報管理施設がおかれている。研究部は、5つの部から構成されている。第1研究部は、東アジア・中央アジア・北アジア、第2研究部は、東南アジア・南アジア・西アジア、第3研究部は、ヨーロッパ・アフリカ、第4研究部は、アメリカ・オセアニア、第5研究部は、民族芸術・民族技術・民族言語・コンピュータ民族学を主要な研究対象とする。研究部では、客員教官を含め約100名の研究者が研究に従事している。情報管理施設では、研究者が収集した世界の諸民族の社会と文化に関する資料を整理、保管して、利用に供するとともに、諸情報の管理・検索システムの開発研究を行っている。本博物館には、高水準の情報処理装置が配備されている。

地域研究企画交流センターは、総合的な地域研究の推進を図るため平成6年6月に関連研究機関のネットワークの中心として機能すべく国立民族学博物館内に設置され、人文科学、社会科学、自然科学の諸分野を含めた世界の全ての地域を対象とした地域間比較研究を行っている。

所蔵民族学資料　（平成8年4月1日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	131,022点	レコード・コンパクトディスク	40,901点	日本語図書	161,912冊
国内資料	83,393点	テープ（言語）	7,751点	外国語図書	267,073冊
計	214,415点	テープ（音楽）	5,706点	計	428,985冊
		フィルム（16ミリ）	2,985点		
		ビデオテープ・レーザーディスク	3,055点	日本語雑誌	7,637種
		計	60,398点	外国語雑誌	5,070種
				計	12,707種
				マイクロ写真資料	2,452種

総合研究大学院大学について



学長　廣田榮治

総合研究大学院大学本部が葉山新キャンパスに移転して、早くも1年が経過した。この間、基盤機関における教育研究は、関係各位の絶大なるご努力により、引続き順調に推移した。平成7年度末までに課程博士の学位を授与された者は223名に上り、論文博士も17名を数えた。平成8年度、本学への応募者は163名で、昨年度より30名の増であった。平成8年度4月入学者は、国費留学生を含め79名である。

基盤機関を中心としたこのような教育研究は、総合研究大学院大学の「分散」の形態である。本学のもう一つの柱である「総合」についても、共同研究、グループ研究等を通じて、全学的な活動を推進してきた。その中心目標が「総合先導科学研究科」の設置である。幸い平成7年度に調査費が措置された。これを受けて「総合先導科学研究科設置準備委員会」を改組拡充、その下に「光科学専門部会」、「生命体科学専門部会」を置き、設置準備を進めている。

平成7年度は、葉山新キャンパス完成に伴い、全学的なプログラムを一層推進することができた。平成7年4月24日、創設披露の時以来初めて統一入学式を挙行、それに引続いて学生セミナーを行った。平成8年度もこの方式を踏襲し、4月8日に入学式が行われた。平成7年夏葉山で行われたサマースクールに引続き、3人の招聘講師による一般社会人向けの講演会を、国立オリンピック記念青少年総合センターで開催した。平成8年度は葉山で国際シンポジウム「宇宙と生命のつながりを問う」を開催、引続き有楽町マリオンにおいて一般向けの講演会を行う予定である。従来本学が、いくつかの財団の協力により行ってきた「若手外国人研究者短期研究プログラム」が、平成7年度から予算化され、米、英、独3カ国から15名の研究者が参加した。「湘南レクチャー」は新しいプログラムの中のもっとも重要な一つである。第1回は、東京工業大学理学部の北原和夫教授の提案「非平衡系としての化学反応の基礎的諸問題」で、講師8名、大学院学生40名が参加した。平成8年度には2課題行う予定である。地域との連係を図るために、新たに「地域社会交流プログラム」を開始した。平成7年度は、極域科学専攻にお願いして「南極・北極から地球を観る」を行い、越冬隊長から直接電話による南極の状況の説明を聞くことができた。平成8年度も、本学教官学生を中心とした全学プログラムの一層の充実を諮る予定である。

本学長年の懸案であった「教育研究マルチメディアシステム」が、文部省を始めとする関係各位のご援助、教育研究情報資料センターを中心とする関係者の努力により完成、平成8年3月13日に完成披露式を行った。式後、テストケースとして教育研究情報資料センター運営委員会を、本マルチメディアシステムを用いて開催した。今後、講義、共同研究、各種会議に活用していく計画である。

平成7年8月16日付けでサントリー文化財団から出口正之教授が、同11月1日付けで高エネルギー物理学研究所から湯川哲之教授が、教育研究交流センターに着任した。出口教授はコーディネーション、湯川教授は総合先導科学研究科、光科学専攻の設置準備をそれぞれ担当する。同センター客員教授として、石和貞男教授（お茶の水女子大学理学部）、茅幸二教授（慶應義塾大学理工学部）が平成7年9月1日付けで着任された。平成8年度も引続き総合先導科学研究科の設置に協力いただく予定である。

総合研究大学院大学の沿革

昭和57年6月	国立大学共同利用機関所長懇談会が「国立大学共同利用機関における大学院の設置について」を要望
昭和61年4月	国立大学共同利用機関所長懇談会が「大学院問題に関するワーキング・グループ」で検討した結果に基づき「総合研究大学院大学の基本構想について」を取りまとめ 岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備調査室及び同創設準備調査委員会を設置
昭和62年3月	総合研究大学院創設準備調査委員会が「総合研究大学院の基本構想」を取りまとめ
5月	岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備室及び同創設準備委員会を設置
7月	総合研究大学院創設準備委員会が「総合研究大学院大学（仮称）の創設準備について――中間まとめ――」を取りまとめ
昭和63年4月	岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院大学創設準備室及び同創設準備委員会を設置
5月	国立学校設置法の一部を改正する法律が公布、施行（昭和63年法律第67号）
9月	総合研究大学院大学創設準備委員会が「総合研究大学院大学の創設準備について」を取りまとめ
10月	総合研究大学院大学開学（数物科学研究科、生命科学研究科） 初代学長に長倉三郎（理学博士）が就任
平成元年4月	文化科学研究科設置 文化科学、数物科学、生命科学の各研究科において学生受入、授業開始
平成2年1月	初代副学長に廣田榮治（理学博士）が就任
平成3年4月	教育研究交流センター設置
平成4年4月	文化科学研究科国際日本研究専攻、数物科学研究科天文科学専攻及び核融合科学専攻設置 学生受入、授業開始
平成5年4月	数物科学研究科極域科学専攻設置 学生受入、授業開始
平成6年6月	教育研究情報資料センター設置
平成7年2月	葉山キャンパス開校
4月	2代学長に廣田榮治（理学博士）が就任

総合研究大学院大学の教職員

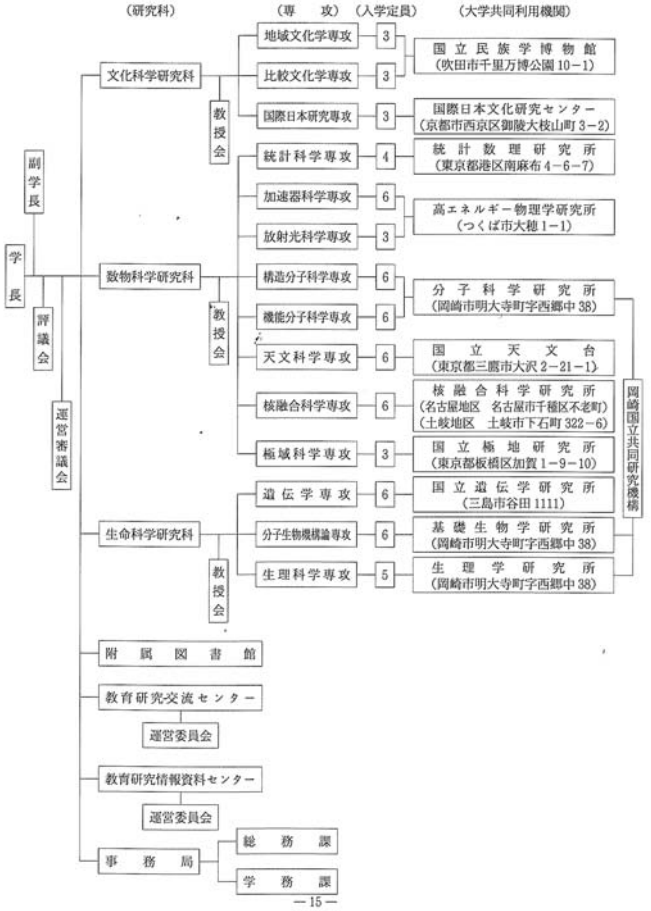
現　員（平成8年4月1日現在）

区分	学長	副学長	教授	助教授	助手	事務官	技官	計
学長	1							1
副学長		1						1
事務局						34	2	36
文化科学研究科			42	27				69
数物科学研究科			115	102	129			346
生命科学研究科			36	26	32			94
教育研究交流センター			3					3
教育研究情報資料センター			1					1
計	1	1	197	155	161	34	2	551

役職員

学長		廣田榮治
副学長		森脇和郎
文化科学研究科	研究科長	藤井龍彦
	地域文化学専攻長	田邉繁治
	比較文化学専攻長	中牧弘允
	国際日本研究専攻長	濱口惠俊
数物科学研究科	研究科長	小野延雄
	統計科学専攻長	清水良一
	加速器科学専攻長	菅原寛孝
	放射光科学専攻長	木原元央
	構造分子科学専攻長	吉原經太郎
	機能分子科学専攻長	伊藤光男
	天文科学専攻長	小平桂一
	核融合科学専攻長	飯吉厚夫
	極域科学専攻長	平澤威男
生命科学研究科	研究科長	江口吾朗
	遺伝学専攻長	富澤純一
	分子生物機構論専攻長	毛利秀雄
	生理科学専攻長	濱　清
附属図書館	館長事務取扱	森脇和郎
教育研究交流センター	センター長	高畑尚之
教育研究情報資料センター	センター長	及川昭文
事務局	事務局長	野中康義
	総務課長	馬場剛
	学務課長	玉木茂

総合研究大学院大学の組織



総合研究大学院大学の特色

■学部を持たない大学院だけの大学――いわゆる独立大学院大学――
■大学院の課程は、後期3年の博士課程
■教育研究は、11の大学共同利用機関との緊密な連係・協力の下に実施
①教官組織は、各研究機関の教官を本学に併任して編成する。
②教育研究の大部分は、各研究機関の施設・設備を用いて実施する。
③各研究機関で行われている高度の研究活動に密着した教育・研究指導により、専門分野についての深い専門性をかん養する。
④大学共同利用機関の開かれた機能を生かし、各研究科・専攻間、国の内外の大学・大学院との相互交流を深めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際性等を培う。

国立学校設置法（抄）
（学校教育法第68条に定める国立大学）
第3条の3　学校教育法第68条に定める国立大学として、次に掲げる大学を置く。
……
総合研究大学院大学
2 ……
3　総合研究大学院大学は、第9条の2に定める大学共同利用機関で政令で定めるものとの緊密な連係及び協力の下に教育研究を行うものとする。

※備　考　学校教育法
第68条　教育研究上特別の必要がある場合においては、第53条の規定にかかわらず、学部を置くことなく大学院を置くものを大学とすることができる。
第53条　大学には、学部を置くことを常例とする。ただし、当該大学の教育研究上の目的を達成するため有益かつ適切である場合においては、学部以外の教育研究上の基本となる組織を置くことができる。

入学者選抜方法等

(1) 出願資格
①修士の学位を有する者
②外国において修士の学位に相当する学位を授与された者
③大学を卒業し、又は外国において、学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
④その他本学において、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

(2) 選抜方法
選抜は、書類選考と面接により行う。
①書類選考
修士課程の履修状況等に関する調査書、修士論文及び付随する資料について行う。
②面　接
修士論文（作成中の者は、その修士論文についての研究の要旨）、修士論文のない者は発表した学術論文等、又は、これまでに行った研究の要旨及び志望研究内容を中心に行う。

(3) 修了要件
本学に3年以上在学し、所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び試験に合格すること。
ただし、在学期間に関しては、特に優れた研究業績を上げた者については短縮して修了を認めることがある。

問い合わせ先

☆国立民族学博物館　管理部研究協力課共同利用係
〒565　大阪府吹田市千里万博公園10番1号
電　話　06－876－2151　内線8209・8236・2020
ＦＡＸ　06－876－2195



●阪急茨木市駅・JR茨木駅・千里中央駅よりバスで日本庭園前（記念公園東口）下車徒歩約13分
●大阪モノレールで万博記念公園駅下車徒歩約15分（ただし、自然文化園は有料です。）
●タクシーは民博職員通用口まで入ることができます。

☆総合研究大学院大学　事務局
〒240-01　神奈川県三浦郡葉山町上山口字間門1560番35
電　話　0468－58－1500
ＦＡＸ　0468－58－1541





総合研究大学院大学

地域文化学専攻
比較文化学専攻 概要



1998



もくじ

文化科学研究科について …… 1
専攻の概要 …… 2
地域文化学専攻 …… 2
比較文化学専攻 …… 5
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生 …… 8
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位 …… 8
平成9年度学位授与者数 …… 8
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教職員 …… 9
地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する …… 10
国立民族学博物館の概要 …… 11
総合研究大学院大学について …… 12
総合研究大学院大学の沿革 …… 13
総合研究大学院大学の教職員 …… 14
総合研究大学院大学の組織 …… 15
総合研究大学院大学の特色 …… 16
出願資格等 …… 17

文化科学研究科について



研究科長　長野泰彦

総合研究大学院大学は、学部をもたず大学院だけを置く国立大学として、昭和63年10月1日に開学した我が国最初の大学院大学である。文化科学研究科は、総合研究大学院大学の一研究科であり、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻の2専攻により、平成元年4月に設置され、平成4年度には、同じく大学共同利用機関である国際日本文化研究センターを基盤として国際日本研究専攻が増設された。

国立民族学博物館は、日本における民族学（文化人類学）の研究センターとしての機能をもち、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究を多角的に推進している。近年の国際化・国際交流の著しい進展と活発化、その一方での民族紛争の多発など、研究課題の多様化・グローバル化とこれに伴う研究分野の拡大は、民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めつつある。

国際日本文化研究センターは、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力を行う機能をもつ。近年国際化の中で日本に対する関心が高まっており、「日本」に関する総合的な研究が世界的な規模で進められている。

この二つの研究機関を基盤として、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化に関して地域的・個別的に対象を設定し、教育研究を行う「地域文化学専攻」と、そのような諸民族の社会・技術・宗教・芸術等について通文化的手法に基づき教育研究を行う「比較文化学専攻」および国際的な視野で日本の文化と文明について教育研究を行う「国際日本研究専攻」の3専攻を置き、国際的・学際的な教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目指している。

専攻の概要

地域文化学専攻　専攻長　秋道智彌



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としている。本専攻においては、現地調査及びこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色



民族誌学的方法論に基づいた諸民族の個別文化の研究を主な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
アジア地域文化学	アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東アジア文化研究Ⅰ	教授 清水 昭俊 教授 松山 利夫
			東アジア文化研究Ⅱ	助教授 横山 廣子
			東アジア文化研究Ⅲ	助教授 塚田 誠之
			東アジア文化研究特論Ⅰ	教授 清水 昭俊 教授 松山 利夫
			東アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 横山 廣子
			東アジア文化研究特論Ⅲ	助教授 塚田 誠之
			東アジア文化研究演習Ⅰ	教授 清水 昭俊 教授 松山 利夫
			東アジア文化研究演習Ⅱ	助教授 塚田 誠之
			東アジア文化研究演習Ⅲ	助教授 横山 廣子
			中央アジア文化研究	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			北アジア文化研究	教授 大塚 和義 助教授 佐々木史郎
			中央・北アジア文化研究特論Ⅰ	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			中央・北アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 佐々木史郎
			中央・北アジア文化研究演習Ⅰ	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			中央・北アジア文化研究演習Ⅱ	教授 大塚 和義
	アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東南アジア文化研究Ⅰ	教授 田邉 繁治 助教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究Ⅱ	助教授 田村 克己 助教授 朝倉 敏夫
			東南アジア文化研究特論Ⅰ	教授 田邉 繁治 助教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 田村 克己 助教授 朝倉 敏夫
			東南アジア文化研究演習Ⅰ	教授 田邉 繁治 助教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究演習Ⅱ	助教授 田村 克己 助教授 杉島 敬志
			南アジア文化研究	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究特論	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究演習	
			西アジア文化研究	助教授 臼杵 陽
			西アジア文化研究特論	助教授 臼杵 陽
			西アジア文化研究演習	助教授 臼杵 陽

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
ヨーロッパ・アフリカ地域文化学	ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	ヨーロッパ文化研究Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究Ⅱ	
			ヨーロッパ文化研究Ⅲ	教授 野村 雅一
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅱ	
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅲ	教授 野村 雅一
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	助教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ	
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅲ	教授 野村 雅一
	アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アフリカ文化研究Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究Ⅱ	
			アフリカ文化研究Ⅲ	
			アフリカ文化研究特論Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究特論Ⅱ	
			アフリカ文化研究特論Ⅲ	
			アフリカ文化研究演習Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究演習Ⅱ	
			アフリカ文化研究演習Ⅲ	
アメリカ・オセアニア地域文化学	アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アメリカ文化研究Ⅰ	助教授 大津留智恵子
			アメリカ文化研究Ⅱ	教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究Ⅲ	教授 山田 睦男
			アメリカ文化研究特論Ⅰ	助教授 大津留智恵子
			アメリカ文化研究特論Ⅱ	教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究特論Ⅲ	教授 山田 睦男
			アメリカ文化研究演習Ⅰ	助教授 大津留智恵子
			アメリカ文化研究演習Ⅱ	教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究演習Ⅲ	教授 山田 睦男
	オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	オセアニア文化研究Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究Ⅲ	
			オセアニア文化研究特論Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究特論Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究特論Ⅲ	
			オセアニア文化研究演習Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究演習Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究演習Ⅲ	
基礎科目			地域文化学基礎演習Ⅰ	
			地域文化学基礎演習Ⅱ	
特別講義			サマースクール	
			学生セミナー	
			湘南レクチャー	

※平成10年度の授業科目である。

比較文化学専攻

専攻長　山本紀夫

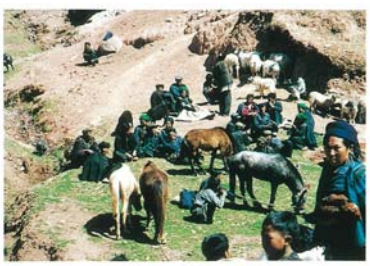


民族社会、民族技術、民族宗教、民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としている。諸民族の文化の通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指す。本専攻においては、従来の民族学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色

理論民族学的方法論に基づいた通文化的研究を主要な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。研究にあたっては、現地調査に基づく第一次資料の活用を重視する。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。また、コンピュータなどによる情報処理を活用し客観的な比較研究を行う。



授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族社会・宗教学	民族社会	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治集団、法規範、所有と分配等に関する通文化的・理論的研究	民族社会研究Ⅰ	助教授 杉本 良男
			民族社会研究Ⅱ	助教授 押川 文子
			民族社会研究Ⅲ	助教授 岸上 伸啓
			民族社会研究Ⅳ	教授 端 信行
			民族社会研究Ⅴ	教授 藤井 龍彦
			民族社会研究特論Ⅰ	教授 端 信行
			民族社会研究特論Ⅱ	助教授 岸上 伸啓
			民族社会研究特論Ⅲ	教授 藤井 龍彦
			民族社会研究演習Ⅰ	教授 端 信行
			民族社会研究演習Ⅱ	助教授 押川 文子
			民族社会研究演習Ⅲ	助教授 杉本 良男
	民族宗教	諸民族の祭祀、神話、宇宙観等に関する通文化的・理論的研究	民族宗教研究Ⅰ	教授 中牧 弘允
			民族宗教研究Ⅱ	
			民族宗教研究Ⅲ	教授 黒田 悦子
			民族宗教研究Ⅳ	教授 石森 秀三
			民族宗教研究特論Ⅰ	教授 中牧 弘允
			民族宗教研究特論Ⅱ	
			民族宗教研究特論Ⅲ	教授 黒田 悦子
			民族宗教研究演習Ⅰ	教授 石森 秀三
			民族宗教研究演習Ⅱ	
			民族宗教研究演習Ⅲ	教授 中牧 弘允
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究	民族技術研究Ⅰ	
			民族技術研究Ⅱ	教授 森田 恒之
			民族技術研究Ⅲ	教授 吉本 忍
			民族技術研究Ⅳ	
			民族技術研究Ⅴ	助教授 近藤 雅樹
			民族技術研究特論Ⅰ	
			民族技術研究特論Ⅱ	教授 吉本 忍
			民族技術研究特論Ⅲ	助教授 近藤 雅樹
			民族技術研究演習Ⅰ	教授 森田 恒之
			民族技術研究演習Ⅱ	
			民族技術研究演習Ⅲ	

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族言語・芸術学	民族言語	諸民族の言語、文字、伝達等に関する通文化的・理論的研究	民族言語研究Ⅰ	教授 崎山 理
			民族言語研究Ⅱ	教授 長野 泰彦
			民族言語研究Ⅲ	
			民族言語研究Ⅳ	
			民族言語研究特論Ⅰ	教授 崎山 理
			民族言語研究特論Ⅱ	教授 長野 泰彦
			民族言語研究特論Ⅲ	
			民族言語研究演習Ⅰ	
			民族言語研究演習Ⅱ	教授 長野 泰彦
			民族言語研究演習Ⅲ	教授 崎山 理
			言語情報研究	教授 杉田 繁治 教授 久保 正敏
			言語情報研究特論	教授 杉田 繁治 教授 久保 正敏
			言語情報研究演習	教授 杉田 繁治 教授 久保 正敏
	民族芸術	諸民族の音楽、芸能、文芸、造形等に関する通文化的・理論的研究	民族芸術研究Ⅰ	助教授 西尾 哲夫
			民族芸術研究Ⅱ	教授 大森 康宏 助教授 吉田 憲司
			民族芸術研究Ⅲ	助教授 吉田 憲司
			民族芸術研究Ⅳ	教授 江口 一久
			民族芸術研究Ⅴ	教授 熊倉 功夫
			民族芸術研究特論Ⅰ	助教授 西尾 哲夫
			民族芸術研究特論Ⅱ	教授 大森 康宏
			民族芸術研究特論Ⅲ	助教授 吉田 憲司
			民族芸術研究演習Ⅰ	教授 江口 一久
			民族芸術研究演習Ⅱ	教授 大森 康宏
			民族芸術研究演習Ⅲ	教授 熊倉 功夫
基礎科目			比較文化学基礎演習Ⅰ	
			比較文化学基礎演習Ⅱ	
特別講義			サマースクール 学生セミナー 湘南レクチャー	

※平成10年度の授業科目である。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

(1) 大学院入学定員及び現員（平成10年4月1日現在）

専攻	入学定員	現員 1年次	2年次	3年次	計	備考
地域文化学専攻	3	2	3	11	16	
比較文化学専攻	3	3	1	8	12	
計	6	5	4	19	28	

〔 〕は留学生数で内数である。

(2) 外国人留学生数（平成10年4月1日現在）

	大学院生 1年次	2年次	3年次	研究生	計	備考
フィンランド				1	1	
計				1	1	

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。また専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学
比較文化学専攻	文学

学位論文の内容によっては学術

平成9年度学位授与者数

地域文化学専攻　課程博士3名
比較文化学専攻　課程博士4名

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教職員

現員（平成10年4月1日現在）

区分	教授	助教授	計	備考
地域文化学専攻	13	11	24	
比較文化学専攻	14	8	22	
計	27	19	46	

役職員

文化科学研究科長	長野泰彦
地域文化学専攻長	秋道智彌
比較文化学専攻長	山本紀夫

事務局

管理部長	池之上忠教
研究協力課長	平山健一
研究協力課専門官	大畑良秋
研究協力課研究協力係長	園田厚生
総合研究大学院大学庶務・企画調査係主任	原直樹
研究協力課研究協力係	原野聖子
〃	高見麗花

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する



世界の諸民族の文化や社会を研究するのが民族学＝文化人類学である。その研究にあたっては幅広い視野が要求される。そこで、国立民族学博物館に設置された総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻では、修士課程で民族学関係の学科を専攻した者だけに限定せず、広い分野から学生の募集をおこなっている。民族学についての基礎知識をもつ者ならば、文化系、理工系の区別なしに応募できるのである。

博士課程後期3年に在籍しようとする学生は、研究者の卵である。自分で問題のありかを発見し、その問題の解決法を自分で考えるのが研究である。教官の指導に全面的に依存していたら、自立した研究者にはなれない。民族学研究の基礎となる、フィールド・ワークでは、一人で異文化の社会のなかで長期間滞在して調査することも必要となる。国立民族学博物館で勉強しようとする諸君には、優等生であることよりも、タフで、独創性にとんだ人物であることが期待される。

在学中に学位論文を書きあげ、博士の称号を取得して、卵ではなく、一人前の研究者としての資格を得てもらいたいのである。

国立民族学博物館長

石毛直道

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館は、昭和49年6月に文部省所轄の大学共同利用機関として創設され、学術研究の発展及び教育活動の推進に資するため、世界の諸民族に関する資料を収集、保管し、もって公衆の観覧に供するとともに民族学に関する調査・研究を行うことを目的としている。この博物館に所属する研究者は、民族学（文化人類学）、言語学、民族技術、民族芸術、コンピュータ民族学などの専門家からなっている。

本博物館は、全国の大学の教員をはじめ民族学の研究者が利用する共同利用機関であり、全国の大学を中心とする研究者の協力のもとにさまざまな課題についての共同研究が行われ、民族学及び関連諸科学に関する研究センターの機能を果たしている。また、標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等を計画的・体系的に収集・整理・保存して、全国の研究者の利用に供するセンターとしての役割もになっている。

本博物館における研究にかかわる組織としては、研究部と情報管理施設がおかれている。研究部は、従来地域別に分けられた4研究部と通文化的研究を行なう1研究部から成り立っていたが、平成10年4月に改組され、民族社会研究部、民族文化研究部、博物館民族学研究部、先端民族学研究部というディシプリンによる4研究部と、研究情報の収集・発信および新しい研究分野の開拓等を目指す民族学研究開発センターで構成されている。研究部では、客員教官を含め約100名の研究者が研究に従事している。情報管理施設では、研究者が収集した世界の諸民族の社会と文化に関する資料を整理、保管して、利用に供するとともに、諸情報の管理・検索システムの開発研究を行っている。本博物館には、高水準の情報処理装置が配備されている。

地域研究企画交流センターは、総合的な地域研究の推進を図るため平成6年6月に関連研究機関のネットワークの中心として機能すべく国立民族学博物館内に設置され、人文科学、社会科学、自然科学の諸分野を含めた世界の全ての地域を対象とした地域間比較研究を行っている。

所蔵民族学資料　（平成10年4月1日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	136,907点	レコード・コンパクトディスク	43,300点	日本語図書	175,985冊
国内資料	84,718点	テープ（言語）	7,887点	外国語図書	297,641冊
計	221,625点	テープ（音楽）	5,752点	計	473,626冊
		フィルム（16ミリ）	3,031点		
		ビデオテープ・レーザーディスク	3,773点	日本語雑誌	8,193種
		計	63,743点	外国語雑誌	5,397種
				計	13,590種
				マイクロ写真資料	2,495種

総合研究大学院大学について



学長　廣田榮治

総合研究大学院大学は昭和63年10月1日に開学した。本年9月30日で10年になる。この間、本学でいう「分散」の活動、すなわち本学に参加する大学共同利用機関における教育研究活動は順調に進行した。本年3月までに課程を修了して博士の学位を受けた者は342名、これに論文を提出して学位を取得した者53名を加えると、学位取得者の総数は395名に上る。直接学生の指導にあたられた教官各位のご努力、関係各位のご支援、ご鞭撻によるもので、あらためて感謝の意を表したい。一方、総研大のもう一つの理念「総合」の中心である先導科学研究科には、本年4月に2番目の専攻「光科学」の設置が認められ、松本吉泰教授が教育研究交流センターから配置換になった。「生命体科学」専攻には教授2名が新たに措置され、賓来聡、笠原正典両教授が国立遺伝学研究所、北海道大学医学部からそれぞれ着任した。平成11年度からの学生受入れに向け、先導科学研究科棟の建設を中心に引続き整備を進めているところである。

10年は一つの区切りとして適当な時期である。これまでの活動を振返り、将来への発展への縁（よすが）にしたいと考え、企画調査委員会を中心に、創立10周年記念事業を企画立案、実施へ向けて準備を開始している。その中心課題は点検・評価である。本学の設立の理念、その具体化に向けての取り組み、現在までに得られた成果等について、外国の研究者を含めた外部評価委員から忌憚のないご批判、改善に向けてのご助言をいただく計画である。博士前期課程、本部センターの整備充実、新専攻の設置等本学の将来への取り組みについても適切な指針を得たいと期待している。これらの結果は、10周年記念誌の主要部分としてとりまとめ、平成11年6月に開催予定の記念式典において配布したいと考えている。さらに、本学における教育研究活動の質的向上に資するため、「総合研究大学院大学教育研究交流基金」の設置を記念事業の一つとして取り上げることも計画している。

教育研究交流センターを中心とした全学プログラムも順調に進行している。平成9年度のサマースクールは「現代科学の諸断面Ⅴ－振動」というテーマで、平成9年9月24日～同27日にわたって行われた。平成10年度の国際シンポジウム「複雑系への戦略」（仮題）は統計科学専攻の教官が中心になって企画されており、平成11年3月頃開催の予定である。平成9年度に69名の参加者を迎えた若手外国人研究者短期研究プログラムは、本年度も80名の受入れを予定している。平成10年度の学生セミナーは岡崎地区の4専攻が担当し、「論争」というテーマについて入学式に引続き平成10年4月9日、10日の両日にわたって行われた。内容は、地球温暖化、生物進化、量子力学、文化相対主義と多彩であった。平成9年度の湘南レクチャーは「遺伝子の系統樹からみた生物進化」で、23機関から49名が参加した。平成10年度は「物理学的生命像」、「天文学と分光学－接点と課題」の2科目が行われる。地域社会交流プログラムも、地元の方々の知的関心の高さを反映して、順調に伸びている。平成9年10月4日には、天文科学専攻の教官による「葉山から宇宙を観る」が行われた。残念ながら天候に恵まれず、望遠鏡による天体観測はできなかったが、講演には約150名が出席した。平成10年5月3～5日には、ゲストに小松左京氏を迎え、三内丸山等の遺跡を中心としたシンポジウム「地下に真実、地にロマン－進化する考古学－」、それに先導科学に関する学術講演を開催したが、いずれも予想を上回る参加者を迎えた。

総合研究大学院大学の沿革

昭和57年6月	国立大学共同利用機関所長懇談会が「国立大学共同利用機関における大学院の設置について」を要望
昭和61年4月	国立大学共同利用機関所長懇談会が「大学院問題に関するワーキング・グループ」で検討した結果に基づき「総合研究大学院大学の基本構想について」を取りまとめ 岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備調査室及び同創設準備調査委員会を設置
昭和62年3月	総合研究大学院創設準備調査委員会が「総合研究大学院の基本構想」を取りまとめ
5月	岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備室及び同創設準備委員会を設置
7月	総合研究大学院創設準備委員会が「総合研究大学院大学（仮称）の創設準備について――中間まとめ――」を取りまとめ
昭和63年4月	岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院大学創設準備室及び同創設準備委員会を設置
5月	国立学校設置法の一部を改正する法律が公布、施行（昭和63年法律第67号）
9月	総合研究大学院大学創設準備委員会が「総合研究大学院大学の創設準備について」を取りまとめ
10月	総合研究大学院大学開学（数物科学研究科、生命科学研究科） 初代学長に長倉三郎（理学博士）が就任
平成元年4月	文化科学研究科設置 文化科学、数物科学、生命科学の各研究科において学生受入、授業開始
平成2年1月	初代副学長に廣田榮治（理学博士）が就任
平成3年4月	教育研究交流センター設置
平成4年4月	文化科学研究科に国際日本研究専攻、数物科学研究科に天文科学専攻及び核融合科学専攻設置 学生受入
平成5年4月	数物科学研究科に極域科学専攻設置 学生受入
平成6年6月	教育研究情報資料センター設置
平成7年2月	葉山キャンパス本部共通棟が竣工、移転
4月	2代学長に廣田榮治（理学博士）が就任 2代副学長に森脇和郎（理学博士）が就任
平成9年4月	先導科学研究科生命体科学専攻を設置 （学生受入は平成11年4月）
平成10年4月	先導科学研究科光科学専攻を設置 （学生受入は平成11年4月）

総合研究大学院大学の教職員

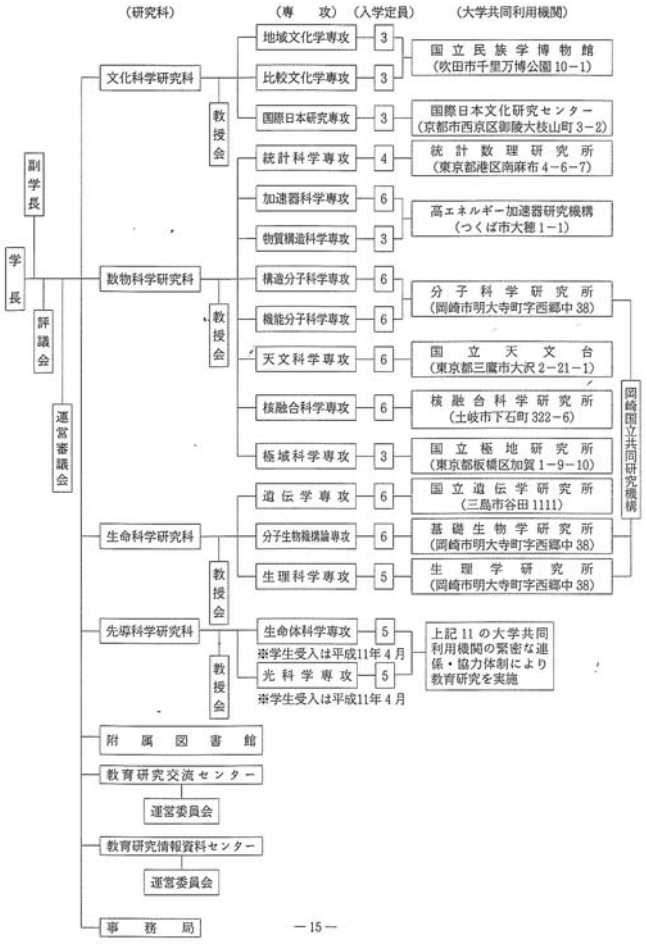
現　員（平成10年5月1日現在）

区分	学長	副学長	教授	助教授	助手	事務官	技官	計
学長	1							1
副学長		1						1
事務局						34	1	35
文化科学研究科			42	26				68
数物科学研究科			123	92	130			345
生命科学研究科			37	23	34			94
先導科学研究科			4					4
教育研究交流センター			2	1				3
教育研究情報資料センター			1					1
計	1	1	209	142	164	34	1	552

役　職　員

学長		廣田榮治
副学長		森脇和郎
文化科学研究科	研究科長	長野泰彦
	地域文化学専攻長	秋道智彌
	比較文化学専攻長	山本紀夫
	国際日本研究専攻長	井波律子
数物科学研究科	研究科長	高田耕治
	統計科学専攻長	清水良一
	加速器科学専攻長	木原元央
	物質構造科学専攻長	木村嘉孝
	構造分子科学専攻長	岩田末廣
	機能分子科学専攻長	伊藤光男
	天文科学専攻長	小平桂一
	核融合科学専攻長	飯吉厚夫
	極域科学専攻長	平澤威男
生命科学研究科	研究科長	園田泰伸
	遺伝学専攻長	堀田凱樹
	分子生物機構論専攻長	毛利秀雄
	生理科学専攻長	佐々木和夫
先導科学研究科	研究科長	高畑尚之
附属図書館	館長事務取扱	森脇和郎
教育研究交流センター	センター長	湯川哲之
教育研究情報資料センター	センター長	及川昭文
事務局	事務局長	笠井高芳
	総務課長	上口孝之
	学務課長	青山幸雄

総合研究大学院大学の組織



総合研究大学院大学の特色

■学部を持たない大学院だけの大学――いわゆる独立大学院大学――
■大学院の課程は、後期3年の博士課程
■教育研究は、11の大学共同利用機関との緊密な連係・協力の下に実施
①教官組織は、各研究機関の教官を本学に併任して編成する。
②教育研究の大部分は、各研究機関の施設・設備を用いて実施する。
③各研究機関で行われている高度の研究活動に密着した教育・研究指導により、専門分野についての深い専門性をかん養する。
④大学共同利用機関の開かれた機能を生かし、各研究科・専攻間、国の内外の大学・大学院との相互交流を深めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際性等を培う。

国立学校設置法（抄）
（学校教育法第68条に定める国立大学）
第3条の3　学校教育法第68条に定める国立大学として、次に掲げる大学を置く。
……
総合研究大学院大学
2　……
3　総合研究大学院大学は、第9条の2に定める大学共同利用機関で政令で定めるものとの緊密な連係及び協力の下に教育研究を行うものとする。

※備　考　学校教育法
第68条　教育研究上特別の必要がある場合においては、第53条の規定にかかわらず、学部を置くことなく大学院を置くものを大学とすることができる。
第53条　大学には、学部を置くことを常例とする。ただし、当該大学の教育研究上の目的を達成するため有益かつ適切である場合においては、学部以外の教育研究上の基本となる組織を置くことができる。

出願資格等

(1) 出願資格※
①修士の学位を有する者
②外国において、修士の学位に相当する学位を授与された者
③大学を卒業し、又は外国において、学校教育における16年の課程を修了した後、大学・研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
④その他本学において、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

(2) 選抜方法※
選抜は書類選考、修士論文又はそれに代わるものの審査及び面接により行う。
※詳細は募集要項を請求の上、確認して下さい。

募集要項請求先

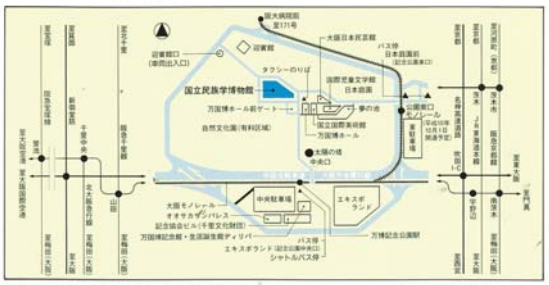
募集要項の請求を郵送で行う場合は、封筒の表に「学生募集要項請求（文化科学研究科）」と朱書し、裏には住所、氏名、連絡先電話番号を記載するとともに返信用封筒（角形2号・縦33.2cm×横24cm、受信者の住所、氏名、郵便番号を明記し、390円の切手を貼り付けたもの）を同封し、下記宛に行うこと。

〒240－0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
総合研究大学院大学事務局学務課

問い合わせ先

☆国立民族学博物館　管理部研究協力課研究協力係

〒565－8511　大阪府吹田市千里万博公園10番1号
電　話　06－876－2151（代表）
06－878－8236（専攻担当）
ＦＡＸ　06－876－2195



●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅よりバスで日本庭園前下車徒歩15分
●大阪モノレールで万博記念公園駅下車徒歩15分（ただし、公園中央口経由自然文化園は有料です）
●大阪モノレールで公園東口駅（H10年10月1日開通予定）下車、無料地域を通って徒歩約13分
●タクシーは民博職員通用口まで入ることができます。

☆総合研究大学院大学　事務局

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電　話　0468－58－1500（代表）
ＦＡＸ　0468－58－1541
ＵＲＬ　http：// www. soken. ac. jp /





総合研究大学院大学

地域文化学専攻
比較文化学専攻 概要



1999



もくじ

文化科学研究科について …… 1
専攻の概要 …… 2
地域文化学専攻 …… 2
比較文化学専攻 …… 5
担当教員の専門分野 …… 7
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生 …… 8
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教職員 …… 8
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位 …… 8
年度別学位記授与者数 …… 8
学位論文リスト …… 9
地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する …… 10
国立民族学博物館の概要 …… 11
総合研究大学院大学について …… 12
総合研究大学院大学の沿革 …… 13
総合研究大学院大学の教職員 …… 14
総合研究大学院大学の組織 …… 15
総合研究大学院大学の特色 …… 16
出願資格等 …… 17

文化科学研究科について



研究科長　長野泰彦

総合研究大学院大学は、学部をもたず大学院だけを置く国立大学として、昭和63年10月1日に開学した我が国最初の大学院大学である。文化科学研究科は、総合研究大学院大学の一研究科であり、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻の2専攻により、平成元年4月に設置され、平成4年度には、国際日本文化研究センターを基盤として国際日本研究専攻が、平成11年4月には国立歴史民俗博物館を基盤として日本歴史研究専攻が増設された。

国立民族学博物館は、日本における民族学（文化人類学）の研究センターとしての機能をもち、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究を多角的に推進している。近年の国際化・国際交流の著しい進展と活発化、その一方での民族紛争の多発など、研究課題の多様化・グローバル化とこれに伴う研究分野の拡大は、民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めつつある。

国際日本文化研究センターは、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力を行う機能をもつ。近年国際化の中で日本に対する関心が高まっており、「日本」に関する総合的な研究が世界的な規模で進められている。

国立歴史民俗博物館は、文献資料・民俗資料・考古資料を学際的に研究し、世界史的な広い視野からの日本歴史理解へのアプローチを開拓するとともに、国際的な日本歴史研究を推進している。

この三つの研究機関を基盤として、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化に関して地域的・個別的に対象を設定し、教育研究を行う「地域文化学専攻」と、そのような諸民族の社会・技術・宗教・芸術等について通文化的手法に基づき教育研究を行う「比較文化学専攻」、国際的な視野で日本の文化と文明について教育研究を行う「国際日本研究専攻」、および文献史学の枠にとらわれず、広く歴史学・民俗学・考古学など関連諸科学との共同により、総合的な日本歴史解明を目指した教育・研究を行う「日本歴史研究専攻」の4専攻を置き、国際的・学際的な教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目指している。

専攻の概要

地域文化学専攻　専攻長　松山利夫



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としている。本専攻においては、現地調査及びこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色



民族誌学的方法論に基づいた諸民族の個別文化の研究を主な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
アジア地域文化学	アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東アジア文化研究Ⅰ	教授 清水 昭俊 教授 松山 利夫
			東アジア文化研究Ⅱ	助教授 横山 廣子
			東アジア文化研究Ⅲ	助教授 塚田 誠之
			東アジア文化研究特論Ⅰ	教授 清水 昭俊 教授 松山 利夫
			東アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 横山 廣子
			東アジア文化研究特論Ⅲ	助教授 塚田 誠之
			東アジア文化研究演習Ⅰ	教授 清水 昭俊 教授 松山 利夫
			東アジア文化研究演習Ⅱ	助教授 塚田 誠之
			東アジア文化研究演習Ⅲ	助教授 横山 廣子
			中央アジア文化研究	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			北アジア文化研究	教授 大塚 和義 助教授 佐々木史郎
			中央・北アジア文化研究特論Ⅰ	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			中央・北アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 佐々木史郎
			中央・北アジア文化研究演習Ⅰ	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			中央・北アジア文化研究演習Ⅱ	教授 大塚 和義
	アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東南アジア文化研究Ⅰ	教授 田邉 繁治 助教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究Ⅱ	教授 田村 克己 助教授 朝倉 敏夫
			東南アジア文化研究特論Ⅰ	教授 田邉 繁治 助教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究特論Ⅱ	教授 田村 克己 助教授 朝倉 敏夫
			東南アジア文化研究演習Ⅰ	教授 田邉 繁治 助教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究演習Ⅱ	教授 田村 克己 助教授 杉島 敬志
			南アジア文化研究	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究特論	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究演習	
			西アジア文化研究	助教授 臼杵 陽
			西アジア文化研究特論	助教授 臼杵 陽
			西アジア文化研究演習	助教授 臼杵 陽

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
ヨーロッパ・アフリカ地域文化学	ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	ヨーロッパ文化研究Ⅰ	教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究Ⅱ	助教授 森 明子
			ヨーロッパ文化研究Ⅲ	教授 野村 雅一
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅰ	教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅱ	助教授 森 明子
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅲ	教授 野村 雅一
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ	助教授 森 明子
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅲ	教授 野村 雅一
	アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アフリカ文化研究Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究Ⅱ	教授 端 信行
			アフリカ文化研究Ⅲ	
			アフリカ文化研究特論Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究特論Ⅱ	教授 端 信行
			アフリカ文化研究特論Ⅲ	
			アフリカ文化研究演習Ⅰ	助教授 栗本 英世
			アフリカ文化研究演習Ⅱ	教授 端 信行
			アフリカ文化研究演習Ⅲ	
アメリカ・オセアニア地域文化学	アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アメリカ文化研究Ⅰ	助教授 大津留智恵子
			アメリカ文化研究Ⅱ	教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究Ⅲ	教授 山田 睦男
			アメリカ文化研究特論Ⅰ	助教授 大津留智恵子
			アメリカ文化研究特論Ⅱ	教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究特論Ⅲ	教授 山田 睦男
			アメリカ文化研究演習Ⅰ	助教授 大津留智恵子
			アメリカ文化研究演習Ⅱ	教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究演習Ⅲ	教授 山田 睦男
	オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	オセアニア文化研究Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究Ⅲ	
			オセアニア文化研究特論Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究特論Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究特論Ⅲ	
			オセアニア文化研究演習Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究演習Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究演習Ⅲ	
基礎科目			地域文化学基礎演習Ⅰ	
			地域文化学基礎演習Ⅱ	
特別講義			サマースクール	
			学生セミナー	

※平成11年度の授業科目である。

比較文化学専攻

専攻長　石森秀三



民族社会、民族技術、民族宗教、民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としている。諸民族の文化の通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指す。本専攻においては、従来の民族学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色

理論民族学的方法論に基づいた通文化的研究を主要な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。研究にあたっては、現地調査に基づく第一次資料の活用を重視する。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。また、コンピュータなどによる情報処理を活用し客観的な比較研究を行う。



授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族社会・宗教学	民族社会	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治集団、法規範、所有と分配等に関する通文化的・理論的研究	民族社会研究Ⅰ	教授 杉本 良男
			民族社会研究Ⅱ	教授 押川 文子
			民族社会研究Ⅲ	助教授 岸上 伸啓
			民族社会研究Ⅳ	
			民族社会研究Ⅴ	教授 藤井 龍彦
			民族社会研究特論Ⅰ	
			民族社会研究特論Ⅱ	助教授 岸上 伸啓
			民族社会研究特論Ⅲ	教授 藤井 龍彦
			民族社会研究演習Ⅰ	
			民族社会研究演習Ⅱ	教授 押川 文子
			民族社会研究演習Ⅲ	教授 杉本 良男
	民族宗教	諸民族の祭祀、神話、宇宙観等に関する通文化的・理論的研究	民族宗教研究Ⅰ	教授 中牧 弘允
			民族宗教研究Ⅱ	
			民族宗教研究Ⅲ	教授 黒田 悦子
			民族宗教研究Ⅳ	教授 石森 秀三
			民族宗教研究特論Ⅰ	教授 中牧 弘允
			民族宗教研究特論Ⅱ	
			民族宗教研究特論Ⅲ	教授 黒田 悦子
			民族宗教研究演習Ⅰ	教授 石森 秀三
			民族宗教研究演習Ⅱ	
			民族宗教研究演習Ⅲ	教授 中牧 弘允
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究	民族技術研究Ⅰ	
			民族技術研究Ⅱ	教授 森田 恒之
			民族技術研究Ⅲ	教授 吉本 忍
			民族技術研究Ⅳ	助教授 園田 直子
			民族技術研究Ⅴ	教授 近藤 雅樹
			民族技術研究特論Ⅰ	
			民族技術研究特論Ⅱ	教授 吉本 忍
			民族技術研究特論Ⅲ	教授 近藤 雅樹
			民族技術研究演習Ⅰ	教授 森田 恒之
			民族技術研究演習Ⅱ	助教授 園田 直子
			民族技術研究演習Ⅲ	
民族言語・芸術学	民族言語	諸民族の言語、文字、伝達等に関する通文化的・理論的研究	民族言語研究Ⅰ	教授 崎山 理
			民族言語研究Ⅱ	教授 長野 泰彦
			民族言語研究Ⅲ	助教授 西尾 哲夫
			民族言語研究Ⅳ	
			民族言語研究特論Ⅰ	教授 崎山 理
			民族言語研究特論Ⅱ	教授 長野 泰彦
			民族言語研究特論Ⅲ	助教授 西尾 哲夫
			民族言語研究演習Ⅰ	助教授 西尾 哲夫
			民族言語研究演習Ⅱ	教授 長野 泰彦
			民族言語研究演習Ⅲ	教授 崎山 理
			言語情報研究	教授 杉田 繁治 教授 久保 正敏
			言語情報研究特論	教授 杉田 繁治 教授 久保 正敏
			言語情報研究演習	教授 杉田 繁治 教授 久保 正敏

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族言語・芸術学	民族芸術	諸民族の音楽、芸能、文芸、造形等に関する通文化的・理論的研究	民族芸術研究Ⅰ	助教授 寺田吉孝
			民族芸術研究Ⅱ	教授 大森康宏 助教授 吉田憲司
			民族芸術研究Ⅲ	助教授 吉田憲司
			民族芸術研究Ⅳ	教授 江口一久
			民族芸術研究Ⅴ	教授 熊倉功夫
			民族芸術研究特論Ⅰ	助教授 寺田吉孝
			民族芸術研究特論Ⅱ	教授 大森康宏
			民族芸術研究特論Ⅲ	助教授 吉田憲司
			民族芸術研究演習Ⅰ	教授 江口一久
			民族芸術研究演習Ⅱ	教授 大森康宏
			民族芸術研究演習Ⅲ	教授 熊倉功夫
基礎科目			比較文化学基礎演習Ⅰ	
			比較文化学基礎演習Ⅱ	
特別講義			サマースクール 学生セミナー	

※平成11年度の授業科目である。

担当教員の専門分野

地域文化学専攻

清水昭俊（家族比較論・オセアニア研究）　松山利夫（オーストラリア先住民研究）　横山廣子（民族文化論・アジア社会人類学）
塚田誠之（歴史民族学・中国研究）　松原正毅（社会人類学〜東アジア・西アジア・中央アジア）　小長谷有紀（牧畜文化論、モンゴル研究）
大塚和義（アイヌ民族学・北アジア研究）　佐々木史郎（毛皮交易論・狩猟生態論）　由比濱省吾（東南アジア社会人類学）
移延敬志（東南アジア社会人類学）　吉村貞司（東南アジア文化人類学）　朝倉敏夫（韓国社会研究）
菊田悦子（博物館人類学・ブータン研究）　吉岡乾（国際関係論〜中東）　崖畑幹夫（言語学・言語政策論）
森　明子（中部ヨーロッパ文化人類学）　野村雅一（身体コミュニケーション論・舞踊研究）　菊本英紀（社会人類学・北東アフリカ研究）
端　信行（経済人類学・アフリカ民族学）　矢追由美恵子（アメリカ政治・外交）　八杉佳穂（言語人類学・中米文化史）
山田睦男（ラテンアメリカ史、ラテンアメリカ地域研究）　小山修三（計量人類学）　吉田集而（文化人類学〜オセアニア・東南アジア）

比較文化学専攻

杉本良男（社会人類学・南アジア研究）　坪井祐子（インド近現代社会史）　韓上鎮雨（文化人類学・北方民族研究）
藤井毅（歴史人類学）　中牧弘允（宗教人類学・経営人類学）　風呂本惇子（民族社会文化論・中米人類学）
岩竹美加子（観光文明学）　森田恒之（保存科学・民族技術）　吉本忍（民族工芸論・民族技術論）
園田直子（保存科学）　近藤信彰（日本物質文化論）　崎山理（言語人類学・オセアニア言語学）
長野泰彦（民族言語学・チベット・ビルマ語研究）　西尾哲夫（認識言語学・アラブ研究）　杉田繁治（コンピュータ民族学・文明学）
久保正敏（コンピュータ民族学・民族情報学）　寺田吉孝（民族音楽学・インド研究）　大森康宏（映像人類学・民族誌映画）
吉田憲司（博物館人類学・アフリカ研究）　古谷嘉章（民族言語学・口承文芸論）　熊倉功夫（日本文化史）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

(1)　大学院入学定員及び現員（平成11年4月1日現在）

専攻	入学定員	現員 1年次	2年次	3年次	計	備考
地域文化学専攻	3	6	2	8	16	
比較文化学専攻	3	1	3	6	10	
計	6	7	5	14	26	

（　）は留学生数で内数である。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教職員

現　　員（平成11年10月1日現在）

区分	教授	助教授	計	備考
地域文化学専攻	14	10	24	
比較文化学専攻	17	5	22	
計	31	15	46	

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。また専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野	
地域文化学専攻	文学	学位論文の内容によっては学術
比較文化学専攻	文学	

年度別学位記授与者数

	地域文化学専攻 課程博士	論文博士	比較文化学専攻 課程博士	論文博士	計
平成3年度			1		1
平成5年度			1	1	2
平成6年度	2		1		3
平成7年度	2		1		3
平成8年度		3			3
平成9年度	3		4		7
平成10年度	4	2			6
計	11	5	8	1	25

学位論文リスト

【課程博士】

『数学的手法を用いた文化分析の方法について』	小島三弘（比較）	［H4.3.31 学術］
『シドニーにおける都市アボリジニの研究　伝統と民族の創出』	鈴木清史（比較）	［H6.3.24 文学］
『オルドス・モンゴル族の社会構造－ヤスの機能とその歴史的変容－』	楊　海英（地域）	［H6.9.20 文学］
『ペルーにおける山の神信仰の現在性－アンデスの宗教的世界のダイナミズム－』	細谷広美（地域）	［H7.3.23 文学］
『ビルマにおけるウェイザー信仰の研究』	土佐桂子（比較）	［H7.3.23 文学］
『韓国社会の動態と「両班化」－忠清北道阿房郡における門中と儒式儀礼の検討を通して』	岡田浩樹（地域）	［H8.3.21 文学］
『中国杭嘉湖地方における喪葬伝承の研究』	曹　建南（地域）	［H8.3.21 文学］
『歌に表象される村落意識－奄美における「シマの歌」の研究－』	中原ゆかり（比較）	［H8.3.21 文学］
『四合院家屋の文化人類学的研究－人間と自然との相互作用の視点から』	杉山京子（地域）	［H10.3.24 文学］
『モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究－アルタイ・ハイラハ叙事詩を事例として－』	藤井麻湖（地域）	［H10.3.24 文学］
『カストム・メレシン－ヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および民間医療観の現代的位相』	白川千尋（地域）	［H10.3.24 文学］
『韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究』	李　善愛（比較）	［H10.3.24 文学］
『東南中国の漢族社会組織とその変容－閩南農村社会における宗族の研究』	潘　宏立（比較）	［H10.3.24 文学］
『芸の伝承－ジャワ島・チルボンの仮面舞踊を中心に』	福岡まどか（比較）	［H10.3.24 文学］
『Overt First and Second Person-Designating Terms in Japanese Discourse －A Pragmatic Perspective－』	Riikka Lansisalmi（比較）	［H10.3.24 文学］
『「二重の窮乏」下の平等理念－現代世界とキリバス南部環礁の社会生活－』	風間計博（地域）	［H10.9.30 文学］
『建築と文化・社会との相互作用－中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象として－』	粟原伸治（地域）	［H10.9.30 学術］
『カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容－宗教共同体と開発の視点から－』	子島　進（地域）	［H11.3.24 文学］
『地域主義運動における言語と知識人－エストニア南部ヴォル地方の事例から－』	寒水明子（地域）	［H11.3.24 学術］

【論文博士】

『An Areal-Typological Study of Middle American Indian Languages』	八杉佳穂	［H6.3.30 文学］
『農村女性からみたトルコの「近代化」－世俗主義、イスラーム、女性の相互関係』	中山紀子	［H9.3.24 文学］
『南タイにおける実践宗教－ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から－』	西井凉子	［H9.3.24 文学］
『セネガルの公権力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究』	小川　了	［H9.3.24 文学］
『メラネシアの政治的リーダーシップと開発－ソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐって－』	関根久雄	［H10.9.30 文学］
『南インドの農村におけるカースト内関係としての親族－コング・ヴェッラーラの事例研究－』	杉本星子	［H10.9.30 文学］

学位論文のテーマや研究手法は文化人類学（民族学）のそれに属するものであるが、近年文化人類学の扱う研究対象はグローバル化し、かつ、現代的な問題になりつつある。ここに提出される論文の内容と方法も、現地調査に基づく基礎的なモノグラフから、現代的なグローバル現象を分析するものまで多様である。後者に関しては、特に、女性の社会的地位（ジェンダー論、性差別）、開発に伴う社会の葛藤、先住民の権利、近代化の矛盾、などを論じた論文が多い。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する



世界の諸民族の文化や社会を研究するのが民族学＝文化人類学である。その研究にあたっては幅広い視野が要求される。そこで、国立民族学博物館に設置された総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻では、修士課程で民族学関係の学科を専攻した者だけに限定せず、広い分野から学生の募集をおこなっている。民族学についての基礎知識をもつ者ならば、文化系、理工系の区別なしに応募できるのである。

博士課程後期3年に在籍しようとする学生は、研究者の卵である。自分で問題のありかを発見し、その問題の解決法を自分で考えるのが研究である。教官の指導に全面的に依存していたら、自立した研究者にはなれない。民族学研究の基礎となる、フィールド・ワークでは、一人で異文化の社会のなかで長期間滞在して調査することも必要となる。国立民族学博物館で勉強しようとする諸君には、優等生であることよりも、タフで、独創性にとんだ人物であることが期待される。

在学中に学位論文を書きあげ、博士の称号を取得して、卵ではなく、一人前の研究者としての資格を得てもらいたいのである。

国立民族学博物館長

石　毛　直　道

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館は、昭和49年6月に文部省所轄の大学共同利用機関として創設され、学術研究の発展及び教育活動の推進に資するため、世界の諸民族に関する資料を収集、保管し、もって公衆の観覧に供するとともに民族学に関する調査・研究を行うことを目的としている。この博物館に所属する研究者は、民族学(文化人類学)、言語学、民族技術、民族芸術、コンピュータ民族学などの専門家からなっている。

本博物館は、全国の大学の教員をはじめ民族学の研究者が利用する共同利用機関であり、全国の大学を中心とする研究者の協力のもとにさまざまな課題についての共同研究が行われ、民族学及び関連諸科学に関する研究センターの機能を果たしている。また、標本資料、社会と文化に関する映像音響資料(写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽)、文献図書資料等を計画的・体系的に収集・整理・保存して、全国の研究者の利用に供するセンターとしての役割もになっている。

本博物館における研究にかかわる組織としては、研究部と情報管理施設がおかれている。研究部は、従来地域別に分けられた4研究部と通文化的研究を行なう1研究部から成り立っていたが、平成10年4月に改組され、民族社会研究部、民族文化研究部、博物館民族学研究部、先端民族学研究部というディシプリンによる4研究部と、研究情報の収集・発信および新しい研究分野の開拓等を目指す民族学研究開発センターで構成されている。研究部では、客員教官を含め約100名の研究者が研究に従事している。情報管理施設では、研究者が収集した世界の諸民族の社会と文化に関する資料を整理、保管して、利用に供するとともに、諸情報の管理・検索システムの開発研究を行っている。本博物館には、高水準の情報処理装置が配備されている。

地域研究企画交流センターは、総合的な地域研究の推進を図るため平成6年6月に関連研究機関のネットワークの中心として機能すべく国立民族学博物館内に設置され、人文科学、社会科学、自然科学の諸分野を含めた世界の全ての地域を対象とした地域間比較研究を行っている。

所蔵民族学資料　(平成11年4月1日現在)

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	140,197点	レコード・コンパクトディスク	44,063点	日本語図書	181,110冊
国内資料	85,380点	テープ(言語)	7,965点	外国語図書	306,688冊
計	225,577点	テープ(音楽)	6,216点	計	487,798冊
		フィルム(16ミリ)	3,031点		
		ビデオテープ・レーザーディスク	3,823点	日本語雑誌	8,453種
		計	65,098点	外国語雑誌	5,581種
				計	14,034種
				マイクロ写真資料	2,537種

総合研究大学院大学の沿革

昭和57年6月	国立大学共同利用機関所長懇談会が「国立大学共同利用機関における大学院の設置について」を要望
昭和61年4月	国立大学共同利用機関所長懇談会が「大学院問題に関するワーキング・グループ」で検討した結果に基づき「総合研究大学院大学の基本構想について」を取りまとめ 岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備調査室及び同創設準備調査委員会を設置
昭和62年3月	総合研究大学院創設準備調査委員会が「総合研究大学院の基本構想」を取りまとめ
5月	岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備室及び同創設準備委員会を設置
7月	総合研究大学院創設準備委員会が「総合研究大学院大学(仮称)の創設準備について——中間まとめ——」を取りまとめ
昭和63年4月	岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院大学創設準備室及び同創設準備委員会を設置
5月	国立学校設置法の一部を改正する法律が公布、施行(昭和63年法律第67号)
9月	総合研究大学院大学創設準備委員会が「総合研究大学院大学の創設準備について」を取りまとめ
10月	総合研究大学院大学開学(数物科学研究科、生命科学研究科) 初代学長に長倉三郎(理学博士)が就任
平成元年4月	文化科学研究科設置 文化科学、数物科学、生命科学の各研究科において学生受入、授業開始
平成2年1月	初代副学長に廣田榮治(理学博士)が就任
平成3年4月	教育研究交流センター設置
平成4年4月	文化科学研究科に国際日本研究専攻、数物科学研究科に天文科学専攻及び核融合科学専攻設置 学生受入
平成5年4月	数物科学研究科に極域科学専攻設置 学生受入
平成6年6月	教育研究情報資料センター設置
平成7年2月	葉山キャンパス本部共通棟が竣工、移転
4月	2代学長に廣田榮治(理学博士)が就任 2代副学長に森脇和郎(理学博士)が就任
平成9年4月	先導科学研究科生命体科学専攻を設置 (学生受入は平成11年4月)
平成10年4月	先導科学研究科光科学専攻を設置 (学生受入は平成11年4月) 数物科学研究科放射光科学専攻を物質構造科学専攻に名称変更
9月	葉山キャンパスにおいて先導科学研究科棟(3,060㎡)着工
平成11年4月	文化科学研究科に日本歴史研究専攻、数物科学研究科に素粒子原子核専攻設置、学生受入 先導科学研究科学生受入
6月	先導科学研究科棟竣工

総合研究大学院大学について



学長　廣田榮治

波乱に富んだ20世紀も2年足らずで終わる。世紀末にあわせたかのように、長らく支配的であった多くの社会システムが流動的になっている。学問の世界も例外ではない。科学の進歩は著しく、今もってその進み方にかげりは見られない。しかしながら、皮肉なことに、この進歩が分野の間の壁を高くしてしまった。ある領域の優れた成果が、他の分野の人間には、しばしばその意義すら理解できないのである。最近、研究のアカウンタビリティや人文・自然の融合が叫ばれるようになったが、デッドエンドに落ち込みかけている学問の危機に、人々がようやく気づき始めた表現である。高度の専門性とともに広い視点からの総合化が待望される所以である。

大学共同利用機関という一群の研究所の素晴らしい活躍は、残念なことに多くの人々に認識されていない。1960年代、日本では新しい学術体制の模索が急速に進んだ。従来学問の中核は大学にあった。このことは今日でも変わっていない。しかしながら、ある分野では研究の規模が大きくなり、人材、研究資金の重点的投入が避けられなくなった。こうして大学に付置研究所が生まれた。ところが、さらに分野の規模が大きく内実が深くなると、大学の中では他の部分との釣り合いが悪くなる。またそのような分野では国内・国際共同研究の推進などのために、機動性や自由度が格段に要請されるようになった。そこで登場した仕組みが大学共同利用機関である。1971年、つくば市に高エネルギー物理学研究所(高エネ研)が設置された。日本における新しい学術体制の幕開けである。その後、高エネ研に続いていくつかの大学共同利用機関が創設された。研究者層が厚く、優れた業績のある分野が選ばれた。高いレベルにある分野に国としてさらに集中的に投資し、研究のピークを作る。そうすれば周辺分野が、これに追随してレベルアップするという考えである。実に開出した学術政策であった。新設の他、大学付置や文部省直轄から改組されて大学共同利用機関の仲間入りしたものをあわせ、現在ではその数は18を数える。いずれも日本が世界に誇るトップクラスの研究所であり、大学共同利用機関のシステムは他に類例を見ない全く独創的なものである。研究のピークが第一の目標であるが、予期どおり周辺領域のレベルアップにも著しく貢献したことを強調したい。

大学共同利用機関が軌道に乗った1980年頃から、優れたスタッフ、高度に整備された施設、設備を大学院教育にという考えが湧き起こってきた。研究所の任務はいうまでもなく研究にある。また、一つの研究所の活動の範囲は、深いが狭い。これらのことから、新たに大学院大学を設置して、複数の大学共同利用機関がこれに「参加」するというアイデアが生まれた。こうして登場したのが総合研究大学院大学(総研大)である。開学は1988年10月1日、昨年9月30日で満10歳となった。当初、7研究所が参加し、10の専攻が3つの研究科(文化、数物、生命)に分かれて運営された。その後5機関が新たに加入し、高エネ研が素粒子原子核研究所、物質構造科学研究所を含む高エネルギー加速器研究機構に改組され、さらに総研大本部に先導科学研究科が設置されたので、平成11年度からは14機関、4研究科、18専攻になっている。1学年の定員は85名である。平成4年(1992年)3月以来本年3月までに総研大から博士の学位を授与された者は、課程416名、論文65名、合計481名に上っている。

大学共同利用機関で行われる大学院教育は、それぞれの分野で群を抜いた質の高いものであるが、総研大の目指すところはそれに止まらない。真の教育には深さと同時に広さがなければならない。学生諸君が、それぞれの領域において優れた専門家になるとともに、新しい学問の流れに柔軟に対応できる思考力、広い視野を備え、将来新しい分野を開拓できる能力を身につけられるように、研鑽の場を提供することをも目標としている。そのために、総研大本部に教育研究交流センター、教育研究情報資料センターを置き、14の研究所と連係協力して、全学的なプログラムを企画実施してきた。これらは異なる研究所の教官、学生の間の交流の場にもなっている。さらに一歩進んで、総研大は新しい学問分野創出を目指して活動を開始した。日本は経済的には先進諸国の仲間入りを果たしたと自他ともに認められているが、残念なことに、日本で生まれ育ち世界に進出していった学問は皆無に近い。この後進性を克服するために、14機関の総力を結集して、新分野の芽を育てようというわけである。上記先導科学研究科はそのために設置された。10年余にわたる研究所間の共同研究の結果、「生命体科学」と「光科学」が選ばれ、これらを先導科学研究科の専攻としてその育成を図ることとした。大学共同利用機関という独創的なシステムを基盤として、新しいユニークな高等教育研究の実験がいよいよ本番を迎える。

総合研究大学院大学の教職員

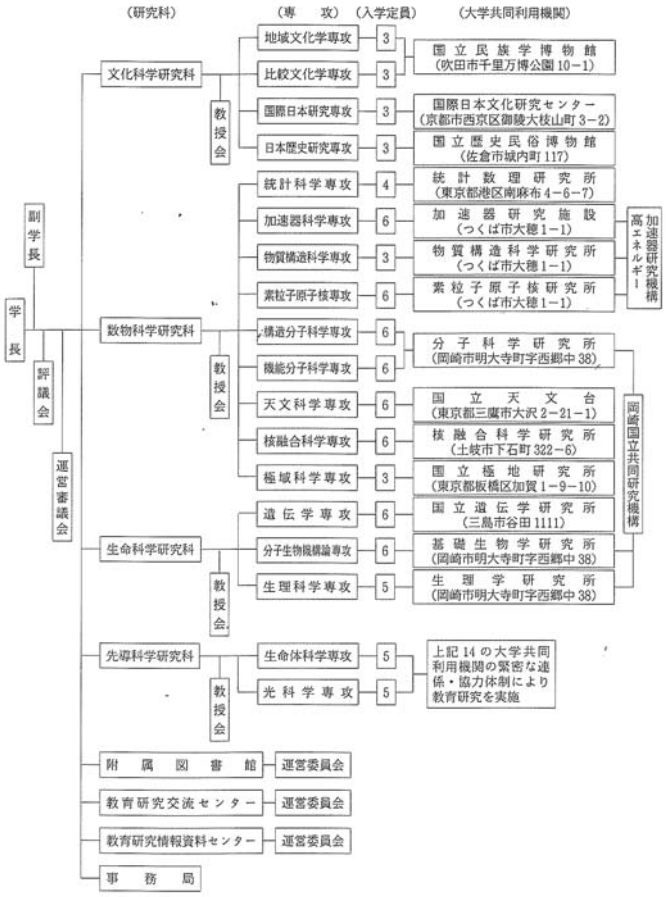
現員(平成11年5月1日現在)

区分	学長	副学長	教授	助教授	助手	事務官	技官	計
学長	1							1
副学長		1						1
事務局						36	1	37
文化科学研究科			58	42				100
数物科学研究科			148	111	158			417
生命科学研究科			40	21	33			94
先導科学研究科			15	15	2			32
教育研究交流センター			3					3
教育研究情報資料センター			1					1
計	1	1	265	189	193	36	1	686

役職員

学長		廣田榮治
副学長		森脇和郎
文化科学研究科	研究科長	長野泰彦
	地域文化学専攻長	松山利夫
	比較文化学専攻長	石森秀三
	国際日本研究専攻長	白幡洋三郎
	日本歴史研究専攻長	平川南
数物科学研究科	研究科長	田辺國士
	統計科学専攻長	清水良一
	加速器科学専攻長	木原元央
	物質構造科学専攻長	木村嘉孝
	素粒子原子核専攻長	山田作衛
	構造分子科学専攻長	茅幸二
	機能分子科学専攻長	中村宏樹
	天文科学専攻長	小平桂一
	核融合科学専攻長	藤原正巳
	極域科学専攻長	平澤威男
生命科学研究科	研究科長	村田紀夫
	遺伝学専攻長	堀田凱樹
	分子生物機構論専攻長	毛利秀雄
	生理科学専攻長	佐々木和夫
先導科学研究科	研究科長	高畑尚之
	生命体科学専攻長	宮来聰
	光科学専攻長	松本吉泰
附属図書館	館長事務取扱	森脇和郎
教育研究交流センター	センター長	湯川哲之
教育研究情報資料センター	センター長	及川昭文
事務局	事務局長	松村盾夫
	総務課長	一居利博
	学務課長	青山幸雄

総合研究大学院大学の組織



総合研究大学院大学の特色

■学部を持たない大学院だけの大学――いわゆる独立大学院大学――
■大学院の課程は、後期3年の博士課程
■教育研究は、14の大学共同利用機関との緊密な連係・協力の下に実施
①教官組織は、各研究機関の教官を本学に併任して編成する。
②教育研究の大部分は、各研究機関の施設・設備を用いて実施する。
③各研究機関で行われている高度の研究活動に密着した教育・研究指導により、専門分野についての深い専門性をかん養する。
④大学共同利用機関の開かれた機能を生かし、各研究科・専攻間、国の内外の大学・大学院との相互交流を深めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際性等を培う。

国立学校設置法（抄）
（学校教育法第68条に定める国立大学）
第3条の3　学校教育法第68条に定める国立大学として、次に掲げる大学を置く。
……
総合研究大学院大学
2 ……
3　総合研究大学院大学は、第9条の2に定める大学共同利用機関で政令で定めるものとの緊密な連係及び協力の下に教育研究を行うものとする。

※備　考　学校教育法
第68条　教育研究上特別の必要がある場合においては、第53条の規定にかかわらず、学部を置くことなく大学院を置くものを大学とすることができる。
第53条　大学には、学部を置くことを常例とする。ただし、当該大学の教育研究上の目的を達成するため有益かつ適切である場合においては、学部以外の教育研究上の基本となる組織を置くことができる。

出願資格等

(1) 出願資格※

次のいずれかに該当する者とします。
①修士の学位を有する者又は取得する見込みである者
②外国において、修士の学位に相当する学位の取得者又は取得する見込みである者
③大学を卒業し、又は外国において、学校教育における16年の課程を修了した後、大学・研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
④その他本学において、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

(2) 選抜方法※

選抜は書類選考、修士論文又はそれに代わるものの審査及び面接により行う。

※詳細は募集要項を請求の上、確認して下さい。

募集要項請求先

募集要項の請求を郵送で行う場合は、封筒の表に「学生募集要項請求（文化科学研究科）」と朱書し、裏には住所、氏名、連絡先電話番号を記載するとともに返信用封筒（角形2号・縦33.2cm×横24cm、受信者の住所、氏名、郵便番号を明記し、390円の切手を貼り付けたもの）を同封し、下記宛に行うこと。

〒240 - 0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
総合研究大学院大学事務局学務課学生厚生係

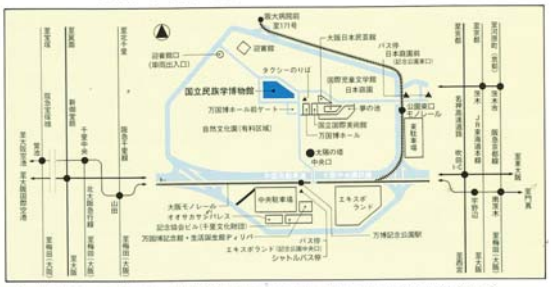


葉山キャンパス

問い合わせ先

☆国立民族学博物館　管理部研究協力課研究協力係

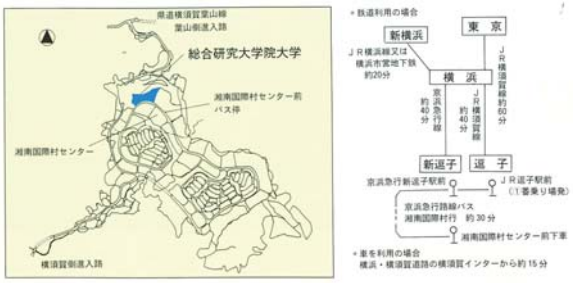
〒565 - 8511　大阪府吹田市千里万博公園10番1号
電　話　06−6876−2151（代表）
06−6878−8236（専攻担当）
ＦＡＸ　06−6876−2195



●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅よりバスで日本庭園前下車徒歩15分
●大阪モノレールで万博記念公園駅下車徒歩15分（ただし、公園中央口経由自然文化園は有料です）
●大阪モノレールで公園東口駅下車、無料地域を通って徒歩約13分
●タクシーは民博職員通用口まで入ることができます。

☆総合研究大学院大学　事務局

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電　話　0468−58−1500（代表）
ＦＡＸ　0468−58−1541
ＵＲＬ　http://www.soken.ac.jp/



総合研究大学院大学

地域文化学専攻
比較文化学専攻 概要



2000



もくじ

文化科学研究科について …… 1
専攻の概要 …… 2
地域文化学専攻 …… 2
比較文化学専攻 …… 5
担当教員の専門分野 …… 7
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生 …… 8
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教職員 …… 8
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位 …… 8
年度別学位記授与者数 …… 8
学位論文リスト …… 9
地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する …… 10
国立民族学博物館の概要 …… 11
総合研究大学院大学について …… 12
総合研究大学院大学の沿革 …… 13
総合研究大学院大学の教職員 …… 14
総合研究大学院大学の組織 …… 15
総合研究大学院大学の特色 …… 16
出願資格等 …… 17

文化科学研究科について



研究科長　井波律子

総合研究大学院大学は、学部をもたず大学院だけを置く国立大学として、昭和63年10月1日に開学した我が国最初の大学院大学である。文化科学研究科は、総合研究大学院大学の一研究科であり、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻の2専攻により、平成元年4月に設置され、平成4年度には、国際日本文化研究センターを基盤として国際日本研究専攻が、平成11年4月には国立歴史民俗博物館を基盤として日本歴史研究専攻が増設された。

国立民族学博物館は、日本における民族学（文化人類学）の研究センターとしての機能をもち、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究を多角的に推進している。近年の国際化・国際交流の著しい進展と活発化、その一方での民族紛争の多発など、研究課題の多様化・グローバル化とこれに伴う研究分野の拡大は、民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めつつある。

国際日本文化研究センターは、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力を行う機能をもつ。近年国際化の中で日本に対する関心が高まっており、「日本」に関する総合的な研究が世界的な規模で進められている。

国立歴史民俗博物館は、文献資料・民俗資料・考古資料を学際的に研究し、世界史的な広い視野からの日本歴史理解へのアプローチを開拓するとともに、国際的な日本歴史研究を推進している。

この三つの研究機関を基盤として、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化に関して地域的・個別的に対象を設定し、教育研究を行う「地域文化学専攻」と、そのような諸民族の社会・技術・宗教・芸術等について通文化的手法に基づき教育研究を行う「比較文化学専攻」、国際的な視野で日本の文化と文明について教育研究を行う「国際日本研究専攻」、および文献史学の枠にとらわれず、広く歴史学・民俗学・考古学など関連諸科学との共同により、総合的な日本歴史解明を目指した教育・研究を行う「日本歴史研究専攻」の4専攻を置き、国際的・学際的な教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目指している。

専攻の概要

地域文化学専攻　専攻長　田村克己



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としている。本専攻においては、現地調査及びこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色



民族誌学的方法論に基づいた諸民族の個別文化の研究を主な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
アジア地域文化学	アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東アジア文化研究Ⅰ	教授 松山 利夫 助教授 朝倉 敏夫
			東アジア文化研究Ⅱ	助教授 横山 廣子
			東アジア文化研究Ⅲ	助教授 塚田 誠之
			東アジア文化研究特論Ⅰ	教授 松山 利夫 助教授 朝倉 敏夫
			東アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 横山 廣子
			東アジア文化研究特論Ⅲ	助教授 塚田 誠之
			東アジア文化研究演習Ⅰ	教授 松山 利夫 助教授 朝倉 敏夫
			東アジア文化研究演習Ⅱ	助教授 塚田 誠之 助教授 横山 廣子
			東アジア文化研究演習Ⅲ	
			中央アジア文化研究	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			北アジア文化研究	教授 大塚 和義 助教授 佐々木史郎
			中央・北アジア文化研究特論Ⅰ	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			中央・北アジア文化研究特論Ⅱ	助教授 佐々木史郎
			中央・北アジア文化研究演習Ⅰ	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			中央・北アジア文化研究演習Ⅱ	教授 大塚 和義
	アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東南アジア文化研究Ⅰ	教授 田邉 繁治 教授 田村 克己
			東南アジア文化研究Ⅱ	教授 杉島 敬志 助教授 佐藤 浩司
			東南アジア文化研究特論Ⅰ	教授 田邉 繁治 教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究特論Ⅱ	教授 田村 克己 助教授 佐藤 浩司
			東南アジア文化研究演習Ⅰ	教授 田邉 繁治 教授 杉島 敬志
			東南アジア文化研究演習Ⅱ	教授 田村 克己 教授 杉島 敬志
			南アジア文化研究	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究特論	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究演習	
			西アジア文化研究	助教授 臼杵 陽
			西アジア文化研究特論	助教授 臼杵 陽
			西アジア文化研究演習	助教授 臼杵 陽

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
ヨーロッパ・アフリカ地域文化学	ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	ヨーロッパ文化研究Ⅰ	教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究Ⅱ	助教授 森 明子
			ヨーロッパ文化研究Ⅲ	教授 野村 雅一
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅰ	教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅱ	助教授 森 明子
			ヨーロッパ文化研究特論Ⅲ	教授 野村 雅一
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	教授 庄司 博史
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ	助教授 森 明子
			ヨーロッパ文化研究演習Ⅲ	教授 野村 雅一
	アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アフリカ文化研究Ⅰ	
			アフリカ文化研究Ⅱ	教授 端 信行
			アフリカ文化研究Ⅲ	
			アフリカ文化研究特論Ⅰ	
			アフリカ文化研究特論Ⅱ	教授 端 信行
			アフリカ文化研究特論Ⅲ	
			アフリカ文化研究演習Ⅰ	
			アフリカ文化研究演習Ⅱ	教授 端 信行
			アフリカ文化研究演習Ⅲ	
アメリカ・オセアニア地域文化学	アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アメリカ文化研究Ⅰ	助教授 大津留智恵子
			アメリカ文化研究Ⅱ	教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究Ⅲ	教授 山田 睦男
			アメリカ文化研究特論Ⅰ	助教授 大津留智恵子
			アメリカ文化研究特論Ⅱ	教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究特論Ⅲ	教授 山田 睦男
			アメリカ文化研究演習Ⅰ	助教授 大津留智恵子
			アメリカ文化研究演習Ⅱ	教授 八杉 佳穂
			アメリカ文化研究演習Ⅲ	教授 山田 睦男
	オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	オセアニア文化研究Ⅰ	教授 小山 修三 教授 久保 正敏
			オセアニア文化研究Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究Ⅲ	
			オセアニア文化研究特論Ⅰ	教授 小山 修三 教授 久保 正敏
			オセアニア文化研究特論Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究特論Ⅲ	
			オセアニア文化研究演習Ⅰ	教授 小山 修三
			オセアニア文化研究演習Ⅱ	教授 吉田 集而
			オセアニア文化研究演習Ⅲ	教授 久保 正敏
基礎科目			地域文化学基礎演習Ⅰ	
			地域文化学基礎演習Ⅱ	
特別講義			サマースクール	
			学生セミナー	

※平成12年度の授業科目である。

比較文化学専攻

専攻長　森田恒之



民族社会、民族技術、民族宗教、民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としている。諸民族の文化の通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指す。本専攻においては、従来の民族学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度の研究者の養成を行う。

教育研究の特色

理論民族学的方法論に基づいた通文化的研究を主要な目的としながら、教育と研究を一体化した体系のなかでおしすすめてゆく。その一環として、専門を異にする国立民族学博物館内外の複数の研究者から構成される共同研究組織への積極的な参加を求める。研究にあたっては、現地調査に基づく第一次資料の活用を重視する。

幅広い視野を有する研究者の養成を行うため、国立民族学博物館が所蔵する世界の諸民族の標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等の十分な活用をはかる。また、コンピュータなどによる情報処理を活用し客観的な比較研究を行う。



授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族社会・宗教学	民族社会	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治集団、法服範、所有と分配等に関する通文化的・理論的研究	民族社会研究Ⅰ	教授 杉本 良男
			民族社会研究Ⅱ	教授 押川 文子
			民族社会研究Ⅲ	助教授 岸上 伸啓
			民族社会研究Ⅳ	
			民族社会研究Ⅴ	教授 藤井 龍彦
			民族社会研究特論Ⅰ	
			民族社会研究特論Ⅱ	助教授 岸上 伸啓
			民族社会研究特論Ⅲ	教授 藤井 龍彦
			民族社会研究演習Ⅰ	
			民族社会研究演習Ⅱ	教授 押川 文子
			民族社会研究演習Ⅲ	教授 杉本 良男
	民族宗教	諸民族の祭祀、神話、宇宙観等に関する通文化的・理論的研究	民族宗教研究Ⅰ	教授 中牧 弘允
			民族宗教研究Ⅱ	
			民族宗教研究Ⅲ	教授 黒田 悦子
			民族宗教研究Ⅳ	教授 石森 秀三
			民族宗教研究特論Ⅰ	教授 中牧 弘允
			民族宗教研究特論Ⅱ	
			民族宗教研究特論Ⅲ	教授 黒田 悦子
			民族宗教研究演習Ⅰ	教授 石森 秀三
			民族宗教研究演習Ⅱ	
			民族宗教研究演習Ⅲ	教授 中牧 弘允
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究	民族技術研究Ⅰ	
			民族技術研究Ⅱ	教授 森田 恒之
			民族技術研究Ⅲ	教授 吉本 忍
			民族技術研究Ⅳ	助教授 園田 直子
			民族技術研究Ⅴ	教授 近藤 雅樹
			民族技術研究特論Ⅰ	
			民族技術研究特論Ⅱ	教授 吉本 忍
			民族技術研究特論Ⅲ	教授 近藤 雅樹
			民族技術研究演習Ⅰ	教授 森田 恒之
			民族技術研究演習Ⅱ	助教授 園田 直子
			民族技術研究演習Ⅲ	
民族言語・芸術学	民族言語	諸民族の言語、文字、伝達等に関する通文化的・理論的研究	民族言語研究Ⅰ	教授 崎山 理
			民族言語研究Ⅱ	教授 長野 泰彦
			民族言語研究Ⅲ	助教授 西尾 哲夫
			民族言語研究Ⅳ	
			民族言語研究特論Ⅰ	教授 崎山 理
			民族言語研究特論Ⅱ	教授 長野 泰彦
			民族言語研究特論Ⅲ	助教授 西尾 哲夫
			民族言語研究演習Ⅰ	助教授 西尾 哲夫
			民族言語研究演習Ⅱ	教授 長野 泰彦
			民族言語研究演習Ⅲ	教授 崎山 理
			言語情報研究	教授 杉田 繁治 助教授 山本 泰則
			言語情報研究特論	教授 杉田 繁治 助教授 山本 泰則
			言語情報研究演習	教授 杉田 繁治 助教授 山本 泰則

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族言語・芸術学	民族芸術	諸民族の音楽、芸能、文芸、造形等に関する通文化的・理論的研究	民族芸術研究Ⅰ	助教授 寺田吉孝
			民族芸術研究Ⅱ	教授 大森康宏 助教授 吉田憲司
			民族芸術研究Ⅲ	助教授 吉田憲司
			民族芸術研究Ⅳ	教授 江口一久
			民族芸術研究Ⅴ	教授 熊倉功夫
			民族芸術研究特論Ⅰ	助教授 寺田吉孝
			民族芸術研究特論Ⅱ	教授 大森康宏
			民族芸術研究特論Ⅲ	助教授 吉田憲司
			民族芸術研究演習Ⅰ	教授 江口一久
			民族芸術研究演習Ⅱ	教授 大森康宏
			民族芸術研究演習Ⅲ	教授 熊倉功夫
基礎科目			比較文化学基礎演習Ⅰ	
			比較文化学基礎演習Ⅱ	
特別講義			サマースクール 学生セミナー	

※平成12年度の授業科目である。

担当教員の専門分野

地域文化学専攻

松山利夫（オーストラリア先住民研究）
朝倉敏夫（韓国社会研究）
横山廣子（民族文化論・アジア社会人類学）
塚田誠之（歴史民族学・中国研究）
松原正毅（比較人類学〜東アジア・西アジア・中央アジア）
小長谷有紀（牧畜文化論、モンゴル研究）
大塚和義（アイヌ民族学・北アジア研究）
佐々木史郎（毛皮交易論・狩猟生態論）
田道繁治（東南アジア社会人類学）
印村克己（東南アジア文化人類学）
杉島敬志（東南アジア社会人類学）
佐藤浩司（建築人類学・東南アジア研究）
栗田靖之（博物館人類学・ブータン研究）
臼杵 陽（国際関係論〜中東）
庄司博史（言語学・言語政策論）
森 明子（小都ヨーロッパ文化人類学）
野村雅一（身体コミュニケーション論・梅原研究）
端 信行（経済人類学・アフリカ民族学）
大津留智恵子（アメリカ政治・外交）
八杉佳穂（言語人類学・中米文化史）
山田睦男（ラテンアメリカ史、ラテンアメリカ地域研究）
小山修三（計量人類学）
久保正敏（コンピュータ民族学・民族情報学）
吉田集而（文化人類学〜オセアニア・東南アジア）

比較文化学専攻

杉本良男（社会人類学・南アジア研究）
押川文子（インド近現代社会史）
岸上伸啓（文化人類学・北方民族研究）
藤井龍彦（服飾美史学）
中牧弘允（宗教人類学・経営人類学）
黒田悦子（民族社会文化論・中米人類学）
石森秀三（観光文明学）
森田恒之（保存科学・民族技術）
吉本 忍（民族工芸論・民族技術論）
関田直子（保存科学）
近藤雅樹（日本物質文化論）
崎山 理（言語人類学・オセアニア言語学）
長野泰彦（民族言語学・チベットビルマ語研究）
西尾哲夫（認識言語学・アラブ研究）
杉田繁治（コンピュータ民族学・文明学）
山本泰則（コンピュータ民族学）
寺田吉孝（民族音楽学・インド研究）
大森康宏（映像人類学・民族誌映画）
吉田憲司（博物館人類学・アフリカ研究）
江口一久（民族言語学・口承文芸論）
熊倉功夫（日本文化史）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

(1) 大学院入学定員及び現員（平成12年4月1日現在）

専攻	入学定員	現員 1年次	2年次	3年次	計	備考
地域文化学専攻	3	3	6	8	17	
比較文化学専攻	3	3	1	8	12	
計	6	6	7	16	29	

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教職員

現員（平成12年4月1日現在）

区分	教授	助教授	計	備考
地域文化学専攻	15	9	24	
比較文化学専攻	16	6	22	
計	31	15	46	

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。また専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野	
地域文化学専攻	文学	学位論文の内容によっては学術
比較文化学専攻	文学	

年度別学位記授与者数

	地域文化学専攻 課程博士	地域文化学専攻 論文博士	比較文化学専攻 課程博士	比較文化学専攻 論文博士	計
平成3年度			1		1
平成5年度			1	1	2
平成6年度	2		1		3
平成7年度	2		1		3
平成8年度		3			3
平成9年度	3		4		7
平成10年度	4	2			6
計	11	5	8	1	25

学位論文リスト

【課程博士】

『数学的手法を用いた文化分析の方法について』 小島三弘（比較） [H4.3.31 学術]
『シドニーにおける都市アボリジニの研究 伝統と民族の創出』 鈴木清史（比較） [H6.3.24 文学]
『オルドス・モンゴル族の社会構造－ヤスの機能とその歴史的変容－』 楊 海英（地域） [H6.9.20 文学]
『ペルーにおける山の神信仰の現在性－アンデスの宗教的世界のダイナミズム－』 細谷広美（地域） [H7.3.23 文学]
『ビルマにおけるウェイザー信仰の研究』 土佐桂子（比較） [H7.3.23 文学]
『韓国社会の動態と「両班化」－忠清北道阿房郡における門中と儒式儀礼の検討を通して』 岡田浩樹（地域） [H8.3.21 文学]
『中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究』 曹 建南（地域） [H8.3.21 文学]
『歌に表象される村落意識－奄美における「シマの歌」の研究－』 中牧ゆかり（比較） [H8.3.21 文学]
『四合院家屋の文化人類学的研究－人間と自然との相互作用の視点から』 杉山京子（地域） [H10.3.24 文学]
『モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究－アルタイ・ハイラハ叙事詩を事例として－』 藤井麻湖（地域） [H10.3.24 文学]
『カストム・メレシンーヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および民間医療観の現代的位相』 白川千尋（地域） [H10.3.24 文学]
『韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究』 李 善愛（比較） [H10.3.24 文学]
『東南中国の漢族社会組織とその変容－珠江デルタ農村社会における宗族の研究』 潘 宏立（比較） [H10.3.24 文学]
『芸の伝承－ジャワ島・チルボンの仮面舞踊を中心に』 福岡まどか（比較） [H10.3.24 文学]
『Overt First and Second Person-Designating Terms in Japanese Discourse －A Pragmatic Perspective－』 Riikka Lansisalmi（比較） [H10.3.24 文学]
『「二重の窮乏」下の平等理念－現代世界とキリバス南部環礁の社会生活－』 風間計博（地域） [H10.9.30 文学]
『建築と文化・社会との相互作用－中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象として－』 栗原伸治（地域） [H10.9.30 学術]
『カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容－宗教共同体と開発の視点から－』 子島 進（地域） [H11.3.24 文学]
『地域主義運動における言語と知識人－エストニア南部ヴォル地方の事例から－』 寒水明子（地域） [H11.3.24 学術]

【論文博士】

『An Areal-Typological Study of Middle American Indian Languages』 八杉佳穂 [H6.3.30 文学]
『農村女性からみたトルコの「近代化」－世俗主義、イスラーム、女性の相互関係』 中山紀子 [H9.3.24 文学]
『南タイにおける実践宗教－ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から－』 西井涼子 [H9.3.24 文学]
『セネガルの公権力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究』 小川 了 [H9.3.24 文学]
『メラネシアの政治的リーダーシップと開発－ソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐって－』 関根久雄 [H10.9.30 文学]
『南インドの農村におけるカースト内関係としての親族－コング・ヴェッラーラの事例研究－』 杉本星子 [H10.9.30 文学]

地域文化学専攻及び比較文化学専攻の出身者は、以下のようなところに在職し、教育研究に活躍している。愛媛大、沖縄県立芸術大、鹿児島純心女子大、川崎医療福祉大、関西外国語大、京都文教大、県立滋賀大、甲子園大、神戸大、静岡大、四天王寺国際仏教大、中部大、筑波大、帝塚山大、電力中央研究所、東京外国語大、長崎純心大、名古屋大、日本大、平安女学院大、宮崎公立大、日本大使館（専門調査員）、上海師範大［中国］、インドネシア学術総局、国立民族学博物館（COE研究員等）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する



世界の諸民族の文化や社会を研究するのが民族学＝文化人類学である。その研究にあたっては幅広い視野が要求される。そこで、国立民族学博物館に設置された総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻では、修士課程で民族学関係の学科を専攻した者だけに限定せず、広い分野から学生の募集をおこなっている。民族学についての基礎知識をもつ者ならば、文化系、理工系の区別なしに応募できるのである。

博士課程後期3年に在籍しようとする学生は、研究者の卵である。自分で問題のありかを発見し、その問題の解決法を自分で考えるのが研究である。教官の指導に全面的に依存していたら、自立した研究者にはなれない。民族学研究の基礎となる、フィールド・ワークでは、一人で異文化の社会のなかで長期間滞在して調査することも必要となる。国立民族学博物館で勉強しようとする諸君には、優等生であることよりも、タフで、独創性にとんだ人物であることが期待される。

在学中に学位論文を書きあげ、博士の称号を取得して、卵ではなく、一人前の研究者としての資格を得てもらいたいのである。

国立民族学博物館長

石 毛 直 道

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館は、昭和49年6月に文部省所轄の大学共同利用機関として創設され、学術研究の発展及び教育活動の推進に資するため、世界の諸民族に関する資料を収集、保管し、もって公衆の観覧に供するとともに民族学に関する調査・研究を行うことを目的としている。この博物館に所属する研究者は、民族学（文化人類学）、言語学、民族技術、民族芸術、コンピュータ民族学などの専門家からなっている。

本博物館は、全国の大学の教員をはじめ民族学の研究者が利用する共同利用機関であり、全国の大学を中心とする研究者の協力のもとにさまざまな課題についての共同研究が行われ、民族学及び関連諸科学に関する研究センターの機能を果たしている。また、標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等を計画的・体系的に収集・整理・保存して、全国の研究者の利用に供するセンターとしての役割もになっている。

本博物館における研究にかかわる組織としては、研究部と情報管理施設がおかれている。研究部は、従来地域別に分けられた4研究部と通文化的研究を行なう1研究部から成り立っていたが、平成10年4月に改組され、民族社会研究部、民族文化研究部、博物館民族学研究部、先端民族学研究部というディシプリンによる4研究部と、研究情報の収集・発信および新しい研究分野の開拓等を目指す民族学研究開発センターで構成されている。研究部では、客員教官を含め約100名の研究者が研究に従事している。情報管理施設では、研究者が収集した世界の諸民族の社会と文化に関する資料を整理、保管して、利用に供するとともに、諸情報の管理・検索システムの開発研究を行っている。本博物館には、高水準の情報処理装置が配備されている。

地域研究企画交流センターは、総合的な地域研究の推進を図るため平成6年6月に関連研究機関のネットワークの中心として機能すべく国立民族学博物館内に設置され、人文科学、社会科学、自然科学の諸分野を含めた世界の全ての地域を対象とした地域間比較研究を行っている。

所蔵民族学資料　（平成12年4月1日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	143,762点	レコード・コンパクトディスク	44,544点	日本語図書	193,281冊
国内資料	85,599点	テープ（言語）	7,965点	外国語図書	317,457冊
計	229,361点	テープ（音楽）	6,216点	計	510,738冊
		フィルム（16ミリ）	3,031点		
		ビデオテープ・レーザーディスク	4,050点	日本語雑誌	8,526種
		計	65,806点	外国語雑誌	5,644種
				計	14,170種

総合研究大学院大学について

学長　廣田榮治



波乱に富んだ20世紀も今年で終わる。本年はまた新しいミレニアムの幕開けにあたる。残念ながら、1000年はわれわれにとってあまりにも長い期間だ。よほど優れた予見能力を備えた人でない限り、この新しいミレニアムの行く末を見極めることは難しいし、また予測の意義は大衆には無縁に近い。しかし来年は新しい世紀の幕開けである。依然厳しい財政状況の渦中にあるとはいえ、大いに夢を語る時ではないだろうか。

わが国では数年前から行政改革が精力的に進められている。省庁の壁を除去し総理大臣に内閣府を配して指導性を強化すること、行政のスリム化によって国家財政の立て直しを図ることがその大きな目標である。貴重な税金で行う国の事業から「無駄」を省くことに不賛成を唱える人はいない。しかし、改革推進を焦るあまり、具体的な施策に用意周到さを欠くようなことがあれば、将来に禍根を残す。スリム化は、中央省庁の統廃合に加え、国の事業を「企画・立案」と「実施」に分け、前者のみを国に残し、後者を民間あるいは行政法人に移すという方針で実施されようとしている。そのために、「独立行政法人」という組織が新たに案出され、「通則法」によってその法的根拠が与えられた。一昨年あたりから、この独立行政法人を国立大学・大学共同利用機関（以下「国立大学等」）の改革の一つの選択肢とする考えが急に浮上してきた。2003年までに結論をえることが閣議決定されている。

このような政治の動きの背景に国立大学等を改革すべしという「世論」がある。確かにどのような組織でも必ず改めるべき点はある。その中でとくに何が問題なのであろうか。企業等の人々は国立大学は役に立つことをやっていない、という。確かに、一部のいわゆる実学に近い分野で活躍している教員を除くと、少なくともこれまでは、「役に立つ」ことは国立大学等の活動における第1の指導原理ではなかった。30年前、世界を吹き荒れた学生運動のときは「産業共同路線粉砕」と声高に叫ばれ、一時期「実学」の先生方は大学に近寄れなかったものである。それが一転して「産学協同路線」の推進である。国立大学の教員にも兼業が大幅に認められるようになった。ところが一方「公務員倫理法」が制定され、右顧左眄しながらの「協同路線」ではある。「役に立つ」ことを否定する教員は恐らくいないであろうし、できれば役に立ちたいと思っている人も少なくない。問題は「役に立つ」程度である。バテント等の技術移転・技術交流に伴う問題を解決し、しかるべき処遇上の措置をふまえ産と学の間の人事交流を活発化すれば、現制度の枠内でも、状況は相当改善されるのではないか。企業会計を導入し、大学人に経済観念を植え付けるべきであるという至極もっともらしい意見があるが、経済問題を大学へ過度に持ち込むことには大きなマイナス面が伴う。どのようにしてこれを補填するのか、妥当な案は見当たらない。国の財政制度を抜本的に変革しないで小手先の変更だけに終始するようでは、本質的な改善は恐らく望めないであろう。

もっとも大きな問題を取り上げたい。それはわが国の学術的レベルの問題である。先進国の中でも跳び抜けて低いレベルにある「インフラストラクチャー」や「高等教育・研究に対する国のGDPあたりの投資」を考えると、大学等の奮闘はむしろ評価されるべきである。もちろん、これらの言い分けに却座をかいているときではない。論文数等のアウトプットはすでに先進諸国のレベルに到達している。しかし、学術そのものに対する質的な寄与については、正直なところ二流に止まっている。わが国で生まれ、育って世界を席巻した学問分野がそもそもあったであろうか。寒心に堪えない状況である。「役に立つ」ことも結構であるが、21世紀の日本は、経済大国としての役割を卒業し、学術・文化の面からその存在を誇示したいものである。それには国立大学等の一層の奮起と各方面からの支援と督励が不可欠である。これが本当の改革ではないか。

云うまでもないことであるが、そもそも大学の役割は、絶えざる知的研鑽を通じて人類のあるべき姿を模索し、それに照らして社会が進むべき道を明らかにするとともに、必要に応じて助言、警告を与えることではなかったか。このような社会の木鐸たる役割は、「独立行政法人」化すれば、現行制度よりより良く達成できるものであろうか。厳しく問われなければならない。大学人のみならず、政治家を含め少なからぬ分野の方々から、「通則法」そのものを国立大学等に適用することは不可能（不適切）である旨の発言を聞く。もっともな意見である。今、大学にとって緊急の課題は、「独立行政法人化」のような制度改革ではなく、学術とくに「科学」と「社会」の関係である。新しい調和のとれた関係の構築である。

本学：総合研究大学院大学は、大学共同利用機関（基盤機関）との連係協力により、それぞれの基盤機関において大学院博士課程の教育・研究を行う（「分散」の活動）とともに、参加共同利用機関の知力を結集して、新しい学問分野の創出（「総合」の活動）を目指して努力を重ねてきた。前者においては、平成12年3月までに、課程博士481名、論文博士79名、合計560名の学位授与者を世の中に送り出した。後者においては、葉山本部に先導科学研究科を設置し、「生命体科学」、「光科学」両専攻に平成11年度から学生を受け入れ、実質的な活動を開始したところである。先導科学研究科棟は昨年成11年6月に完成したが、その披露を併せ、開学10周年の祝賀会を平成11年6月25日に開催した。そこでは創設以来10年にわたる活動の点検・評価と今後進むべき方向の検討結果を報告し、各界のご批判を仰いだ。以上の成果を受け、「分散」と「総合」の創設の理念の実現に向け一層の充実整備を図ることを基本方針として改めて確認したところである。中でも、上にも述べた「科学」と「社会」の新しい関係の構築は、東洋の一角にあるわが国が世界に先駆けて達成すべき重要課題の一つであって、本学は基盤機関との一層の連係協力の下に先導的な役割を果たしたいと考えている。

総合研究大学院大学の沿革

昭和57年6月	国立大学共同利用機関所長懇談会が「国立大学共同利用機関における大学院の設置について」を要望
昭和61年4月	国立大学共同利用機関所長懇談会が「大学院問題に関するワーキング・グループ」で検討した結果に基づき「総合研究大学院大学の基本構想について」を取りまとめ 岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備調査室及び同創設準備調査委員会を設置
昭和62年3月	総合研究大学院創設準備調査委員会が「総合研究大学院の基本構想」を取りまとめ
5月	岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院創設準備室及び同創設準備委員会を設置
7月	総合研究大学院創設準備委員会が「総合研究大学院大学（仮称）の創設準備について――中間まとめ――」を取りまとめ
昭和63年4月	岡崎国立共同研究機構に総合研究大学院大学創設準備室及び同創設準備委員会を設置
5月	国立学校設置法の一部を改正する法律が公布、施行（昭和63年法律第67号）
9月	総合研究大学院大学創設準備委員会が「総合研究大学院大学の創設準備について」を取りまとめ
10月	総合研究大学院大学開学（数物科学研究科、生命科学研究科） 初代学長に長倉三郎（理学博士）が就任
平成元年4月	文化科学研究科設置 文化科学、数物科学、生命科学の各研究科において学生受入、授業開始
平成2年1月	初代副学長に廣田榮治（理学博士）が就任
平成3年4月	教育研究交流センター設置
平成4年4月	文化科学研究科に国際日本研究専攻、数物科学研究科に天文科学専攻及び核融合科学専攻設置 学生受入
平成5年4月	数物科学研究科に極域科学専攻設置 学生受入
平成6年6月	教育研究情報資料センター設置
平成7年2月	葉山キャンパス本部共通棟が竣工、移転
4月	2代学長に廣田榮治（理学博士）が就任 2代副学長に森脇和郎（理学博士）が就任
平成9年4月	先導科学研究科生命体科学専攻を設置 （学生受入は平成11年4月）
平成10年4月	先導科学研究科光科学専攻を設置 （学生受入は平成11年4月） 数物科学研究科放射光科学専攻を物質構造科学専攻に名称変更
9月	葉山キャンパスにおいて先導科学研究科棟（3,060㎡）着工
平成11年4月	文化科学研究科に日本歴史研究専攻、数物科学研究科に素粒子原子核専攻設置、学生受入 先導科学研究科学生受入
6月	先導科学研究科棟竣工

総合研究大学院大学の教職員

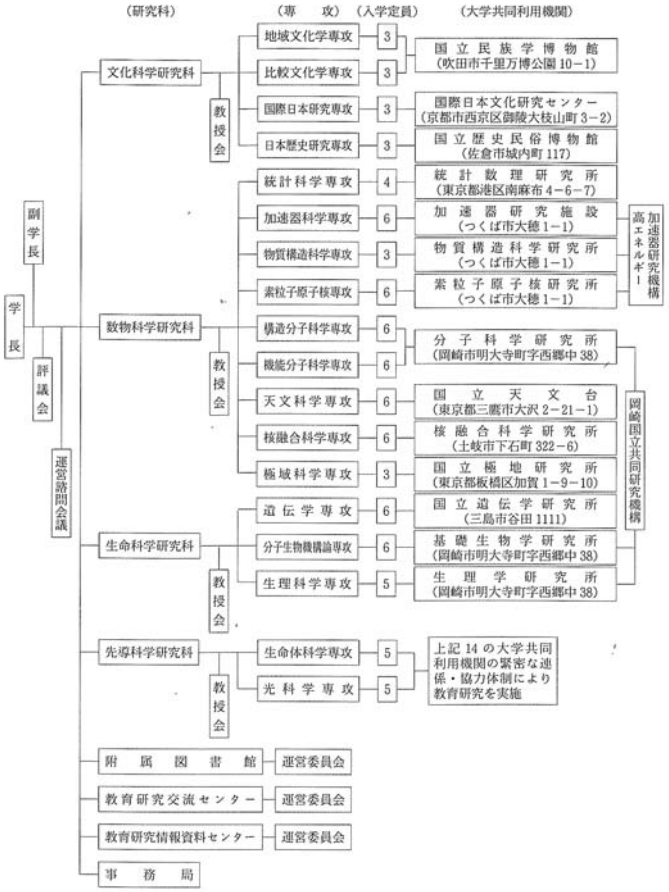
現　員（平成12年5月1日現在）

区分	学長	副学長	教授	助教授	助手	事務官	技官	計
学長	1							1
副学長		1						1
事務局						39	1	40
文化科学研究科			65	38				103
数物科学研究科			156	107	156			419
生命科学研究科			44	18	34			96
先導科学研究科			15	15	12			42
教育研究交流センター			3	1				4
教育研究情報資料センター			1					1
計	1	1	284	179	202	39	1	707

役　職　員

学長		廣田榮治
副学長		森脇和郎
文化科学研究科	研究科長	井波律子
	地域文化学専攻長	田村克己
	比較文化学専攻長	森田恒之
	国際日本研究専攻長	笠谷和比古
	日本歴史研究専攻長	平川南
数物科学研究科	研究科長	中村宏樹
	統計科学専攻長	清水良一
	加速器科学専攻長	木原元央
	物質構造科学専攻長	木村嘉孝
	素粒子原子核専攻長	山田作衛
	構造分子科学専攻長	茅幸二
	機能分子科学専攻長	小林速男
	天文科学専攻長	海部宣男
	核融合科学専攻長	藤原正巳
	極域科学専攻長	平澤威男
生命科学研究科	研究科長	嶋本伸雄
	遺伝学専攻長	堀田凱樹
	分子生物機構論専攻長	毛利秀雄
	生理科学専攻長	佐々木和夫
先導科学研究科	研究科長	高畑尚之
	生命体科学専攻長	寳來聰
	光科学専攻長	松本吉泰
附属図書館	館長事務取扱	森脇和郎
教育研究交流センター	センター長	湯川哲之
教育研究情報資料センター	センター長	及川昭文
事務局	事務局長	松村盾夫
	総務課長	大高弘士
	学務課長	青山幸雄

総合研究大学院大学の組織



総合研究大学院大学の特色

■学部を持たない大学院だけの大学――いわゆる独立大学院大学――
■大学院の課程は、後期3年の博士課程
■教育研究は、14の大学共同利用機関との緊密な連係・協力の下に実施
①教官組織は、各研究機関の教官を本学に併任して編成する。
②教育研究の大部分は、各研究機関の施設・設備を用いて実施する。
③各研究機関で行われている高度の研究活動に密着した教育・研究指導により、専門分野についての深い専門性をかん養する。
④大学共同利用機関の開かれた機能を生かし、各研究科・専攻間、国の内外の大学・大学院との相互交流を深めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際性等を培う。

国立学校設置法（抄）
（学校教育法第68条に定める国立大学）
第3条の3　学校教育法第68条に定める国立大学として、次に掲げる大学を置く。
1　総合研究大学院大学
2　……
3　総合研究大学院大学は、第9条の2に定める大学共同利用機関で政令で定めるものとの緊密な連係及び協力の下に教育研究を行うものとする。

※備　考　学校教育法
第68条　教育研究上特別の必要がある場合においては、第53条の規定にかかわらず、学部を置くことなく大学院を置くものを大学とすることができる。
第53条　大学には、学部を置くことを常例とする。ただし、当該大学の教育研究上の目的を達成するため有益かつ適切である場合においては、学部以外の教育研究上の基本となる組織を置くことができる。

出願資格等

(1) 出願資格 ※

次のいずれかに該当する者とします。

①修士の学位を有する者又は取得する見込みである者
②外国において、修士の学位に相当する学位の取得者又は取得する見込みである者
③大学を卒業し、又は外国において、学校教育における16年の課程を修了した後、大学・研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
④本学において、個別の入学資格審査により、修士の学位を有すると同等以上の学力があると認めた者で、24歳に達したもの
⑤その他本学において、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

(2) 選抜方法 ※

選抜は書類選考、修士論文又はそれに代わるものの審査及び面接により行う。

※詳細は募集要項を請求の上、確認して下さい。

募集要項請求先

募集要項の請求を郵送で行う場合は、封筒の表に「学生募集要項請求（文化科学研究科）」と朱書し、裏には住所、氏名、連絡先電話番号を記載するとともに返信用封筒（角形2号・縦33.2cm×横24cm、受信者の住所、氏名、郵便番号を明記し、390円の切手を貼り付けたもの）を同封し、下記宛に行うこと。

〒240−0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
総合研究大学院大学事務局学務課学生厚生係

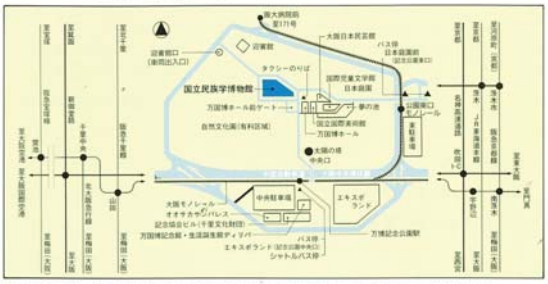


葉山キャンパス

問い合わせ先

☆国立民族学博物館　管理部研究協力課研究協力係

〒565−8511　大阪府吹田市千里万博公園10番1号
電　話　06−6876−2151（代表）
06−6878−8236（専攻担当）
ＦＡＸ　06−6876−2195



●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅よりバスで日本庭園前下車徒歩15分
●大阪モノレールで万博記念公園駅下車徒歩15分（ただし、公園中央口経由自然文化園は有料です）
●大阪モノレールで公園東口駅下車、無料地域を通って徒歩約13分
●タクシーは民博職員通用口まで入ることができます。

☆総合研究大学院大学　事務局

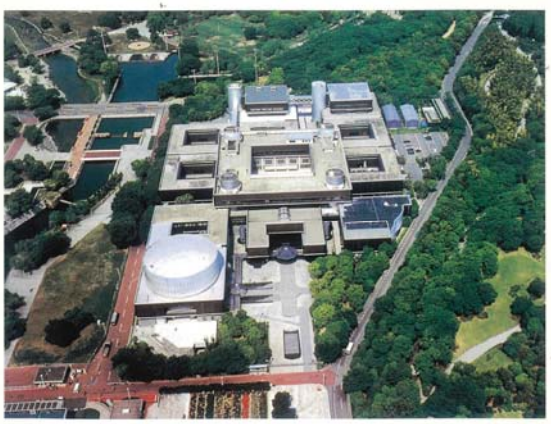
〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電　話　0468−58−1500（代表）
ＦＡＸ　0468−58−1541
ＵＲＬ　http://www.soken.ac.jp/





総合研究大学院大学

文化科学研究科
地域文化学専攻
比較文化学専攻 概要



2001

もくじ

文化科学研究科について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
専攻の概要
地域文化学専攻 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
授業科目 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2~3
担当教員の専門分野 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
比較文化学専攻 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
授業科目 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
担当教員の専門分野 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員 ・・・・・・・・・・・・・・ 5
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法と目的・・・・ 5
フィールドからみる世界 ~学生の研究フィールド・マップ~ ・・・・ 6~7
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生 ・・・・・・・・・・・・・・ 6
「卒業生」からのメッセージ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7,9
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位 ・・・・・・・・・・・・・・ 8
学位論文リスト ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8~9
年度別学位記授与者数 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する ・・・・・・ 10
入学者選抜試験倍率 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
合格者出身大学院機関別累計 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
合格者出身大学院地方別累計 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み ・・・・・・・・・・・・・・ 11
国立民族学博物館の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
総合研究大学院大学について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
総合研究大学院大学の教職員 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
総合研究大学院大学の組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
総合研究大学院大学の特色 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
出願資格等 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
募集要項請求先 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
問い合わせ先 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 裏表紙

文化科学研究科について



研究科長　田村克己

総合研究大学院大学は、学部をもたず大学院だけを置く国立大学として、昭和63年10月1日に開学した我が国最初の大学院大学である。文化科学研究科は、総合研究大学院大学の一研究科であり、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻の2専攻により、平成元年4月に設置され、平成4年度には、国際日本文化研究センターを基盤として国際日本研究専攻が、平成11年4月には国立歴史民俗博物館を基盤として日本歴史研究専攻が、平成13年4月にはメディア教育開発センターを基盤としてメディア社会文化専攻が増設された。

国立民族学博物館は、日本における民族学・文化人類学の研究センターとしての機能をもち、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究を多角的に推進している。近年の国際化・国際交流の著しい進展と活発化、その一方での民族紛争の多発など、研究課題の多様化・グローバル化とこれに伴う研究分野の拡大は、民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めつつある。

国際日本文化研究センターは、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力を行う機能をもつ。近年国際化の中で日本に対する関心が高まっており、「日本」に関する総合的な研究が世界的な規模で進められている。

国立歴史民俗博物館は、文献資料・民俗資料・考古資料を学際的に研究し、世界史的な広い視野からの日本歴史理解へのアプローチを開拓するとともに、国際的な日本歴史研究を推進している。

メディア教育開発センターは、高等教育におけるマルチメディアの利用を促進するための我が国における中核的機関であり、多様なメディアを高度に利用して行う教育の内容、方法等を研究開発し、その成果を提供することを目的として、先導的な研究を行っている。

この四つの研究機関を基盤として、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化に関して地域的・個別的に対象を設定し、教育研究を行う「地域文化学専攻」と、そのような諸民族の社会・技術・宗教・芸術等について通文化的手法に基づき教育研究を行う「比較文化学専攻」、国際的な視野で日本の文化と文明について教育研究を行う「国際日本研究専攻」、および文献史学の枠にとらわれず、広く歴史学・民俗学・考古学などと関連諸科学との共同により、総合的な日本歴史解明を目指した教育研究を行う「日本歴史研究専攻」、メディアと文化、社会、人間の相互作用について、学際的かつ総合的な教育を行う「メディア社会文化専攻」の5専攻を置き、国際的・学際的な教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目指している。

専攻の概要

地域文化学専攻　専攻長　八杉佳穂



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としている。本専攻においては、現地調査及びこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度の研究者の養成を行う。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
アジア地域文化学	アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東アジア文化研究Ⅰ~Ⅱ	教授 塚田 誠之
			東アジア文化研究特論Ⅰ~Ⅱ	教授 松山 利夫
			東アジア文化研究演習Ⅰ~Ⅱ	助教授 朝倉 敏夫
				助教授 横山 廣子
			中央アジア文化研究	教授 松原 正毅
				助教授 小長谷有紀
			北アジア文化研究	教授 大塚 和義
				助教授 佐々木史郎
			中央・北アジア文化研究特論Ⅰ~Ⅱ	教授 松原 正毅
				助教授 佐々木史郎
			中央・北アジア文化研究演習Ⅰ~Ⅱ	教授 大塚 和義
				助教授 小長谷有紀
	アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東南アジア文化研究Ⅰ~Ⅱ	教授 田邉 繁治
			東南アジア文化研究特論Ⅰ~Ⅱ	教授 田村 克己
			東南アジア文化研究演習Ⅰ~Ⅱ	助教授 佐藤 浩司
			南アジア文化研究	教授 栗田 靖之
			南アジア文化研究特論	
			南アジア文化研究演習	
			西アジア文化研究	助教授 臼杵 陽
			西アジア文化研究特論	
			西アジア文化研究演習	

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
ヨーロッパ・アフリカ地域文化学	ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	ヨーロッパ文化研究Ⅰ～Ⅲ ヨーロッパ文化研究特論Ⅰ～Ⅲ ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 野村 雅一 助教授 森 明子
	アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アフリカ文化研究Ⅰ～Ⅲ アフリカ文化研究特論Ⅰ～Ⅲ アフリカ文化研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 吉田 憲司
アメリカ・オセアニア地域文化学	アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アメリカ文化研究Ⅰ～Ⅲ アメリカ文化研究特論Ⅰ～Ⅲ アメリカ文化研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 八杉 佳穂 教授 山田 睦男 助教授 大津留智恵子
	オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	オセアニア文化研究Ⅰ～Ⅲ オセアニア文化研究特論Ⅰ～Ⅲ オセアニア文化研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 印東 道子 教授 久保 正敏 教授 小山 修三 教授 吉田 集而
基礎科目			地域文化学基礎演習Ⅰ 地域文化学基礎演習Ⅱ	(大学院ゼミ担当教員) (論文ゼミ担当教員)
共通			地域文化学特論Ⅰ～Ⅱ 比較文化学演習Ⅰ～Ⅱ	(共通科目担当教員)
特別講義			サマースクールⅠ～Ⅲ 学生セミナー 湘南レクチャーⅠ～Ⅵ	

※年度によって開講科目が異なる。

担当教員の専門分野

松山利夫（オーストラリア先住民研究）
塚田誠之（歴史民族学・中国研究）
大塚和義（アイヌ民俗学・北アジア研究）
田村克己（東南アジア文化人類学）
白幡 洋（国際関係論～中東）
吉田憲司（博物館人類学・アフリカ研究）
山田睦男（ラテンアメリカ史、ラテンアメリカ地域研究）
吉田集而（文化人類学～オセアニア・東南アジア）
朝倉敏夫（韓国社会研究）
松原正毅（社会人類学～夏アジア・西アジア・中央アジア）
佐々木史郎（毛皮交易論・狩猟生態論）
佐藤浩司（建築人類学・東南アジア研究）
森 明子（中部ヨーロッパ文化人類学）
大津留智恵子（アメリカ政治・外交）
小山修三（計量人類学）
印東道子（オセアニア考古学）
橋山源子（文化人類学、中国・東南アジア）
小長谷有紀（牧畜文化論、モンゴル研究）
田邉繁治（東南アジア社会人類学）
栗田靖之（博物館人類学・ブータン研究）
野村雅一（身体コミュニケーション論・指揮研究）
八杉佳穂（言語人類学・中米文化史）
久保正敏（コンピュータ民族学・民族協奏学）

比較文化学専攻

専攻長　大森康宏



民族社会、民族技術、民族宗教、民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としている。諸民族の文化の通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指す。本専攻においては、従来の民族学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度の研究者の養成を行う。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族社会・宗教学	民族社会	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治集団、法規範、所有と分配等に関する通文化的・理論的研究	民族社会研究Ⅰ～Ⅴ 民族社会研究特論Ⅰ～Ⅲ 民族社会研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 押川 文子 教授 杉本 良男 教授 藤井 龍彦 助教授 韓 敏 助教授 岸上 伸啓
	民族宗教	諸民族の祭祀、神話、宇宙観等に関する通文化的・理論的研究	民族宗教研究Ⅰ～Ⅳ 民族宗教研究特論Ⅰ～Ⅲ 民族宗教研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 石森 秀三 教授 中牧 弘允 助教授 林 勲男
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究	民族技術研究Ⅰ～Ⅴ 民族技術研究特論Ⅰ～Ⅲ 民族技術研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 近藤 雅樹 教授 森田 恒之 教授 吉本 忍 助教授 關 雄二 助教授 園田 直子
民族言語・芸術学	民族言語	諸民族の言語、文字、伝達等に関する通文化的・理論的研究	民族言語研究Ⅰ～Ⅳ 民族言語研究特論Ⅰ～Ⅲ 民族言語研究演習Ⅰ～Ⅲ 言語情報研究 言語情報研究特論 言語情報研究演習	教授 庄司 博史 教授 長野 泰彦 助教授 西尾 哲夫 教授 杉田 繁治 助教授 山本 泰則
	民族芸術	諸民族の音楽、芸能、文芸、造形等に関する通文化的・理論的研究	民族芸術研究Ⅰ～Ⅴ 民族芸術研究特論Ⅰ～Ⅲ 民族芸術研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 江口 一久 教授 大森 康宏 教授 熊倉 功夫 助教授 寺田 吉孝
基礎科目			比較文化学基礎演習Ⅰ 比較文化学基礎演習Ⅱ	(大学院ゼミ担当教員) (論文ゼミ担当教員)
共通			比較文化学特論Ⅰ～Ⅱ 比較文化学演習Ⅰ～Ⅱ	(共通科目担当教員)
特別講義			サマースクールⅠ～Ⅲ 学生セミナー 湘南レクチャーⅠ～Ⅵ	

※年度によって開講科目が異なる。

担当教員の専門分野

杉本良男（社会人類学・南アジア研究）
韓 敏（社会人類学・中国研究）
林 勲男（社会人類学・オセアニア研究）
森田恒之（保存科学・民族技術）
近藤雅樹（日本物質文化論）
西尾哲夫（認識言語学・アラブ研究）
寺田吉孝（民族音楽学・インド研究）
熊倉功夫（日本文化史）
押川文子（インド近現代社会史）
藤井龍彦（新大陸先史学）
石森秀三（観光文明学）
吉本 忍（民族工芸論・民族技術論）
庄司博史（言語学・言語政策論）
杉田繁治（コンピュータ民族学・文明学）
大森康宏（映像人類学・民族誌映画）
印東道子（オセアニア考古学）
岸上伸啓（文化人類学・北方民族研究）
中牧弘允（宗教人類学・経営人類学）
關 雄二（アンデス考古学・ラテンアメリカ研究）
園田直子（保存科学）
長野泰彦（民族言語学・チベット・ビルマ語研究）
山本泰則（コンピュータ民族学）
江口一久（民族言語学・口承文芸論）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員

現　員（平成13年4月1日現在）

区分	教授	助教授	計	備考
地域文化学専攻	15	8	23	
比較文化学専攻	15	8	23	基盤機関の長(民博館長)を含む
計	30	16	46	

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法と目的

教官の多くが地域文化学・比較文化学両専攻にまたがって教育研究の指導にあたっています。

教育研究の方法は、個別の教官による授業や研究指導と、複数の教官の指導のもとにおこなわれる共通のゼミナールからなっています。

共通のゼミナールには主に一年次生を対象とする「基礎演習Ⅰ」（通称「大学院ゼミナール」）と論文作成の指導を内容とする「基礎演習Ⅱ」（通称「論文ゼミナール」）があります。「大学院ゼミナール」は学生がそれぞれの研究計画を発表する「研究計画シリーズ」、各教官が交代で専門分野を講義する「テーマ・シリーズ」、一年の教育研究課程を受けた学生があらためて研究計画を発表する「リサーチプロポーザル・シリーズ」からなっています。

平成13年度からは、民族学・文化人類学の視点や方法論を批判的に摂取することを目的として、共通科目（特論または演習）が開講されています。

学生はおおむね一年次においてフィールドワーク（現地調査）の準備をおこない、おおむね二年次以降、指導教官の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教官による個別の指導や「論文ゼミナール」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

両専攻の教育研究の目的は——

①独創的な民族学・文化人類学の研究
②長期のフィールドワークでえられた資料にもとづく学位論文の作成
③広い視野をもった、人間性豊かな研究者の養成——です。



地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

大学院入学定員及び現員（平成13年4月1日現在）

専攻	入学定員	現員				備考
		1年次	2年次	3年次	計	
地域文化学専攻	3	2	3	11	16	
比較文化学専攻	3	6	3	7	16	
計	6	8	6	18	32	

地域文化学専攻及び比較文化学専攻の出身者は、以下のようなところに在職し、教育研究に活躍している。愛知大、沖縄県立芸術大、地方独立行政法人北海道立総合研究機構北方民族博物館、京都大、京都文教大、甲子園大、神戸大、滋賀県立大、静岡大、四天王寺国際仏教大、中部大、筑波大、帝塚山学院大、東京外国語大、長崎純心大、新潟大、日本大、ノーザンライツ・コンピューター、平安女学院大、四国立大、日本大院総（専門調査員）、上海師範大（中国）、インドネシア宗教研究、Espen/Ventus Polytechnic（フィリピン）、国立民族学博物館（COE研究員等）

「卒業生」からのメッセージⅠ

中部大学助教授　中山　紀子

1998年に入学し、1999年10月から2002年3月までの間休退学期間を含めて5年間在籍しました。最終文でも上から目線口調の口はれと言ってる「論文ゼミナール」です。調査を終了しただけ（とされる）学生が週間ものの講義指導や論文作成の過程までされるお粗末さのです。厳しいスタンスが魅力の一つです。授業時には主に先生方から、授業の終わってからは学生から打ちのめされます。相に活躍を終えて講を終みながら聞きて話すことも多々ました。しかし、自ら思考してくる論は発表内容だけでもくさまざまな方面に広がっていきます。そのような雰囲気を作りだしている教授や事業について、あまりはまた自分を知っていてなどなど。

講義の構成は「論文ゼミナール」の後に開いた二十ではありますがでした。私が在籍していた時期、学生は指導は「基礎」と講師を「特論」に分けられていました。（特論）の私は自分の勉強が忙しい時では主に、特別のある自分の学生により最終名を読み、同じような「特論」の特別を見つけては講を聞かに出き、講義するというこを繰り返していました。論文作成や講義期間といった忙しい時期を共にした特別からこそ講義を受けられました。自を越して話せる特別と話できかやってくれた最終月にはお感謝しています。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。又専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学
比較文化学専攻	文学
	学位論文の内容によっては学術

学位論文リスト

【課程博士】

「数学的手法を用いた文化分析の方法について」	小島 三弘（比較）	[H4.3.31 学術]
「シドニーにおける都市アボリジニの研究 伝統と民族の創出」	鈴木 清史（比較）	[H6.3.24 文学]
「オルドス・モンゴル族の社会構造ーヤスの機能とその歴史的変容ー」	楊 海英（地域）	[H6.9.20 文学]
「ペルーにおける山の神信仰の現在性ーアンデスの宗教的世界のダイナミズムー」	細谷 広美（地域）	[H7.3.23 文学]
「ビルマにおけるウェイザー信仰の研究」	土佐 桂子（比較）	[H7.3.23 文学]
「韓国社会の動態と『両班化』ー忠清北道阿房郡における門中と儒式儀礼の検討を通してー」	岡田 浩樹（地域）	[H8.3.21 文学]
「中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究」	曹 建南（地域）	[H8.3.21 文学]
「歌に表象される村落意識ー奄美における「シマの歌」の研究ー」	中原ゆかり（比較）	[H8.3.21 文学]
「四合院家屋の文化人類学的研究ー人間と自然との相互作用の視点から」	杉山 京子（地域）	[H10.3.24 文学]
「モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究ーアルタイ・ハイラハ叙事詩を事例としてー」	藤井 麻湖（地域）	[H10.3.24 文学]
「カストム・メレシンーヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および民間医療観の現代的位相」	白川 千尋（地域）	[H10.3.24 文学]
「韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究」	李 善愛（比較）	[H10.3.24 文学]
「東南中国の漢族社会組織とその変容ー閩南農村社会における宗族の研究」	潘 宏立（比較）	[H10.3.24 文学]
「芸の伝承ージャワ島・チルボンの仮面舞踊を中心に」	福岡まどか（比較）	[H10.3.24 文学]
「Overt First and Second Person-Designating Terms in Japanese Discourse ーA Pragmatic Perspectiveー」	Riikka Lansisalmi（比較）	[H10.3.24 文学]
「「二重の窮乏」下の平等理念ー現代世界とキリバス南部環礁の社会生活ー」	風間 計博（地域）	[H10.9.30 文学]
「建築と文化・社会との相互作用ー中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象としてー」	栗原 伸治（地域）	[H10.9.30 学術]
「カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容ー宗教共同体と開発の視点からー」	子島 進（地域）	[H11.3.24 文学]
「地域主義運動における言語と知識人ーエストニア南部ヴォル地方の事例からー」	寒水 明子（地域）	[H11.3.24 学術]
「英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究ー文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相ー」	塩路 有子（比較）	[H12.9.29 文学]
「北タイ・アカの家屋に関する研究ー家屋の形式とその変化への視点からー」	清水 郁郎（地域）	[H13.3.23 文学]
「韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化ー忠清南道公州市を中心として活動する薬草商人を例にー」	林 史樹（地域）	[H13.3.23 文学]
「現代インドネシアにおけるジャワ大衆演劇クトプラの研究」	青木 武信（比較）	[H13.3.23 文学]

【論文博士】

「An Areal-Typological Study of Middle American Indian Languages」	八杉 佳穂	[H6.3.30 文学]
「農村女性からみたトルコの「近代化」ー世俗主義、イスラーム、女性の相互関係」	中山 紀子	[H9.3.24 文学]
「南タイにおける実践宗教ームスリムと仏教徒が混住する村落の事例からー」	西井 凉子	[H9.3.24 文学]
「ヒネガルの公徳力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究」	小川 了	[H9.3.24 文学]
「メラネシアの政治的リーダーシップと開発ーソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐってー」	関根 久雄	[H10.9.30 文学]
「南インドの農村におけるカースト内関係としての親族ーコング・ヴェッラーラの事例研究ー」	杉本 星子	[H10.9.30 文学]
「アイヌ民族における神送りの研究ー沙流川流域を中心にー」	萱野 茂	[H13.3.23 学術]

年度別学位記授与者数

	地域文化学専攻		比較文化学専攻		計
	課程博士	論文博士	課程博士	論文博士	
平成3年度			1		1
平成5年度			1	1	2
平成6年度	2		1		3
平成7年度	2		1		3
平成8年度		3			3
平成9年度	3		4		7
平成10年度	4	2			6
平成12年度	2		2	1	5
計	13	5	10	2	30

「卒業生」からのメッセージⅡ

筑波大学専任講師 **関根 久雄**

総合研究大学院大学は、「奇妙な」大学である。世間一般が抱く「大学」あるいは「大学院」のイメージとは大きく異なる。そこには学部もなければ修士課程もない。ただ博士課程だけが設置されている。国立大学共同利用機関を「キャンパス」とし、分野ごとに研究科が日本各地に分散している。蔵書、研究施設ともに大変充実している。学生数よりも教官数の方が多い。教官がその大学の名称を用いて自己の所属先を外部者に述べることは少ない。つまり、大学そのものの知名度を上げるには、学生自身の努力に大幅に依存している（そのためか、世間的には現在もあまり知名度は高くない）。その他にも、些細なことを含めて「奇妙さ」をあげたら枚挙にいとまがない。

私が総合研究大学院大学を知ったのは、青年海外協力隊員としてソロモン諸島に滞在していた1988年であり、その大学が実際に動き出す前年であった。当時私は、協力隊の任期切れを翌年に控え、帰国後の進路として「大学院進学」を真剣に考えはじめていた。協力隊員活動を続ける過程で、日本を含め諸外国から贈られるさまざまな形式の援助が当初の思惑通りには機能せず、中途段階で崩壊していく姿に幾度となく遭遇した。そしてそれらのほとんどが、地元住民の文化的背景に配慮せず、援助する側の論理に基づいて行われていることも知った。開発（援助）とその開発がもたらされる地域社会の「文化」双方が、その文化の担い手たる地域住民に社会的、経済的利益をもたらすために共生することはできないのであろうか。私が現在も継続して行っている「開発と文化」に関わる研究の出発点はそこにあった。

しかし、1990年代はじめ頃までの人類学は、戦前の応用人類学や戦後の冷戦時代における「第3世界」諸国の秩序維持活動などとの関係から、開発現象をその学問領域において扱うことや、開発行為に直接的、間接的に関わる開発人類学をどこか白眼視する傾向にあった。この10年ほどの間にそのような学問的状況はほとんどみられなくなったが、当時は確実にそうであった。

総合研究大学院大学は、一般の大学における人類学の講座では扱いにくいテーマを志す「奇妙な」学生に対しても、その教官陣容の豊富さ、関心領域の広さなどから門戸を広げてくれる柔軟性がみられるように感じる。総合研究大学院大学の「奇妙さ」を、ハード、ソフト両面にわたり学生という立場からうまく利用することができれば、そこから得るものは決して少なくないはずである。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する



国立民族学博物館長 石毛直道

世界の諸民族の文化や社会を研究するのが民族学＝文化人類学である。その研究にあたっては幅広い視野が要求される。そこで、国立民族学博物館に設置された総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻では、修士課程で民族学関係の学科を専攻した者だけに限定せず、広い分野から学生の募集をおこなっている。民族学についての基礎知識をもつ者ならば、文化系、理工系の区別なしに応募できるのである。

博士課程後期3年に在籍しようとする学生は、研究者の卵である。自分で問題のありかを発見し、その問題の解決法を自分で考えるのが研究である。教官の指導に全面的に依存していたら、自立した研究者にはなれない。民族学研究の基礎となる、フィールド・ワークでは、一人で異文化の社会のなかで長期間滞在して調査することも必要となる。国立民族学博物館で勉強しようとする諸君には、優等生であることよりも、タフで、独創性にとんだ人物であることが期待される。

在学中に学位論文を書きあげ、博士の称号を取得して、卵ではなく、一人前の研究者としての資格を得てもらいたいのである。

入学者選抜試験倍率

	平成元年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	計
志願者数	24	26	19	37	34	25	23	40	27	22	17	23	31	348
合格者数	4	5	6(1)	9(3)	6	6	6(1)	6	6(2)	6(1)	7	6	8	81(8)
倍率	6	5.2	3.2	4.1	5.7	4.2	3.8	6.7	4.5	3.7	2.4	3.8	3.9	4.3

合格者出身大学院機関別累計

	平成元年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	計
国立	3	3	4(1)	7(3)	4	4	1	1	6(2)	4(1)	4	5	5	51(7)
私立	0	1	1	2	1	0	4(1)	5	0	2	2	<1>	3	21(1)<1>
海外	1	1	1	0	1	2	1	0	0	0	1	1	0	9
合計	4	5	6(1)	9(3)	6	6	6(1)	6	6(2)	6(1)	7	6<1>	8	81(8)<1>

合格者出身大学院地方別累計

	平成元年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	計
関東	1	1	3(1)	5(2)	2	3	4	4	4(2)	3(1)	4	2<1>	3	39(6)<1>
中部	0	1	0	1	1	1	0	2	0	2	0	0	0	8
近畿	1	2	2	2(1)	1	0	1(1)	0	1	1	2	3	4	20(2)
中国	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	4
九州	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
海外	1	1	1	0	1	2	1	0	0	0	1	1	0	9
合計	4	5	6(1)	9(3)	6	6	6(1)	6	6(2)	6(1)	7	6<1>	8	81(8)<1>

※（ ）は入学許可者で内数、〈 〉は重複で外数、平成2年合格者のうち海外機関出身のものは学部卒で資格認定による。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み

昭和63年10月 総合研究大学院大学開学【全学】
平成元年 4月 文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）設置、学生受入、授業開始
8月 サマースクール開催（国際シンポジウムと交互に陽年開催）【全学】
平成 3年 5月 文化科学研究科の担当で、学生セミナーを学生セミナーハウス（兵庫県三田市）及び民博にて開催【全学】
平成 4年 2月 岡山・兵庫方面へ文化科学研究科研修旅行
3月 比較文化学専攻において、課程博士による初めての学位授与
共同研究「人間をとりまく生物複合の歴史的変容」のシンポジウム「日本文化起源論をめぐる遺伝学と民族学の対話」を民博で開催【全学】
4月 カリキュラム改正
文化科学研究科に国際日本文化研究センターを基盤機関とする国際日本研究専攻設置、学生受入
7月 学生主催でエスニックパーティ開催（以後、毎年恒例の行事に）
平成 5年10月 大学院研究棟竣工、大学院研究室開設
11月 福井・金沢方面へ文化科学研究科研修旅行
平成 6年 3月 比較文化学専攻において、論文博士による初めての学位授与
9月 地域文化学専攻において、課程博士による初めての学位授与
12月 倉敷・大山方面へ文化科学研究科研修旅行
平成 7年 2月 葉山キャンパス本部共通棟が竣工、この年から入学式を同キャンパスにて総研大全体で挙行【全学】
12月 伊勢方面へ文化科学研究科研修旅行
平成 8年 4月 学生セミナーを文化科学研究科が担当【全学】
7月 湘南レクチャー「現代人類学の諸問題」開催【全学】
平成 9年 3月 国際シンポジウム「宇宙と生命・人間ー宇宙と人間のつながりを問う」のセッション5を文化科学研究科が担当【全学】
地域文化学専攻において、論文博士による初めての学位授与
6月 論文博士の申請受付を随時に
9月 課程博士の学位論文審査における予備審査を廃止
11月 大学院ゼミナール（地域文化学基礎演習Ⅰ・比較文化学基礎演習Ⅰ）、論文ゼミナール（地域文化学基礎演習Ⅱ・比較文化学基礎演習Ⅱ）の単位を必修に（10年度入学生より）
平成11年 4月 先導科学研究科学生受入（地域文化学・比較文化学両専攻併任教官の一部、先導科学研究科の併任に）【全学】
文化科学研究科に国立歴史民俗博物館を基盤機関とする日本歴史研究専攻設置、学生受入
11月 東京で大学説明会を実施（次年度以降は6月頃に実施）【全学】
平成12年 3月 教育研究委員会大学院改革ワーキンググループ最終報告書の提出
5月 フィールドワークについて教官と学生が懇談する「木曜喫茶室」開始
6月 民博ホームページの更新にともない、大学院教育のページを刷新
10月 専門の相談員によるメンタルヘルスに関する相談室開設（月1回）
「大学院教育に関する公開フォーラム」及び「オープンキャンパス」開催
平成13年 4月 共通科目（地域文化学特論Ⅰ・Ⅱ・同演習Ⅰ・Ⅱ、比較文化学特論Ⅰ・Ⅱ・同演習Ⅰ・Ⅱ）の充実、カリキュラム運営ワーキンググループ、研究指導調整委員会の設置など、教育研究体制の整備
地域文化学・比較文化学両専攻の同窓生ネットワーク発足
文化科学研究科にメディア教育開発センターを基盤機関とするメディア社会文化専攻設置、学生受入

※『民博通信』51（1991）、53（1991）、57（1992）、61（1993）、71（1996）、73（1996）、74（1996）、78（1997）、81（1998）、85（1999）、89（2000）各号所載の「大学院ニュース」等より作成

国立民族学博物館の概要



国立民族学博物館は、昭和49年6月に文部省所轄の大学共同利用機関として創設され、学術研究の発展及び教育活動の推進に資するため、世界の諸民族に関する資料を収集・保管し、もって公衆の観覧に供するとともに、民族学に関する調査・研究を行うことを目的としている。この博物館に所属する研究者は、民族学（文化人類学）、言語学、民族技術、民族芸術、コンピュータ民族学などの専門家からなっている。

本博物館は、全国の大学の教員をはじめ民族学の研究者が利用する共同利用機関であり、全国の大学を中心とする研究者の協力のもとにさまざまな課題についての共同研究が行われ、民族学及び関連諸科学に関する研究センターの機能を果たしている。また、標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等を計画的・体系的に収集・整理・保存して、全国の研究者の利用に供するセンターとしての役割もになっている。

本博物館における研究にかかわる組織としては、研究部と情報管理施設がおかれている。研究部は、従来地域別に分けられた4研究部と通文化的研究を行う1研究部から成り立っていたが、平成10年4月に改組され、民族社会研究部、民族文化研究部、博物館民族学研究部、先端民族学研究部というディシプリンによる4研究部と、研究情報の収集・発信および新しい研究分野の開拓等を目指す民族学研究開発センターで構成されている。研究部では、客員教官を含め約100名の研究者が研究に従事している。情報管理施設では、研究者が収集した世界の諸民族の社会と文化に関する資料を整理・保管して、利用に供するとともに、諸情報の管理・検索システムの開発研究を行っている。本博物館には、高水準の情報処理装置が配備されている。

地域研究企画交流センターは、総合的な地域研究の推進を図るため平成6年6月に関連研究機関のネットワークの中心として機能すべく国立民族学博物館内に設置され、人文科学、社会科学、自然科学の諸分野を含めた世界の全ての地域を対象とした地域間比較研究を行っている。

所蔵民族学資料

（平成13年4月1日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	146,844点	レコード・コンパクトディスク	45,021点	日本語図書	209,823冊
国内資料	87,991点	テープ（言語）	7,965点	外国語図書	343,596冊
計	234,835点	テープ（音楽）	8,371点	計	553,419冊
		フィルム（16ミリ）	3,031点		
		ビデオテープ・レーザーディスク	4,152点	日本語雑誌	8,923種
		計	68,540点	外国語雑誌	5,826種
				計	14,749種

総合研究大学院大学について



学長　小平桂一

総合研究大学院大学、略して「総研大」は、基礎学術分野の総合的発展と高度な知的市民の育成を目指して、大学院学生の教育を行うために、13年前〔1988年〕に設立されました。現在では、神奈川県の葉山町に大学本部を持ち、各地に置かれた15の国立学術研究機関等を基盤として、大学院生を分散配置し、ユニークな博士課程（後期）教育を展開しています。

これらの基盤機関は、人文系から自然科学系にわたる、各専門分野に設置された「大学共同利用機関」で、一大学では維持・運用できない大型最新の装置・設備・システムによる研究や、広範・大量な資料に基づく長期的研究、従来の大学講座の枠を超えた学問分野の研究などが行われています。全国の大学研究者や大学院生が、共同で利用し研究を進めているので、異なる地域や専門領域の間の交流や協力が促進され、新しい研究の芽や学際領域が伸び易い、優れた環境にあります。また、わが国を代表する大型・最新の設備や大量の基礎資料を備えているので、当該分野の国際的窓口となって、多くの国際共同研究も行われており、大学院生にも、早くから国際性を身につける種々の機会を提供しています。これから、大学・大学院教育が大きく変わろうとしているとき、わが国の高等学術研究・教育の要の一環として、これら「大学共同利用機関」の役割は、一層その重要性を増すものと確信します。

二十一世紀の国際社会では、各学問分野の深化と共に、多様な学問分野を総合する広い視野と知性が要求されることは、間違いありません。とりわけ、人文系学問の総合的推進や自然科学との融合が、重要な課題となることでしょう。そこに、異なる専門分野の諸基盤機関にまたがって設立され、「総合」と「分散」の両機能を果たすべき「総研大」の意義と使命があります。「総研大」教官の多くは、基盤機関の教官が併任していますが、学生教育に当たっては、専門研究領域・分野を超えて、「総研大」教官としての使命を自覚するよう願っています。また、進学を希望する学生も、単に専門分野で学位を取得しようとするだけでなく、「総研大」にふさわしい考え方や生き方を、少しでも学ぼうという意欲を持って臨むよう、大いに期待しています。

逝学にあたられた長倉三郎先生、基礎を築き上げられた廣田栄治先生を始めとする諸先達の努力により、今や「総研大」は「青年期」に入ろうとしています。折も折り、世界的な潮流の中でわが国も、国立大学の制度改革を断行しようとしています。多くの大学や研究所が、社会の短期的・直接的な要請に応えて教育・研究活動を行おうとするなかで、わが国の将来に欠くことのできない、長期的・基礎的な学術分野を理解し、あるいは担い、あるいは新しい道を切り開いていこうとする、高度な知的市民を育成することは、必須の国家的課題です。大学共同利用機関等を基盤とする「総研大」こそは、広範囲にわたる教官団の協力の下に、工夫を凝らして、「新しい大学院生」を育てていかなければなりません。基盤機関が地域的に分散している点は、ともすると、「総研大」の働きにとって負担になりがちですが、それを乗り越え活かす工夫も、していきたいと思っています。

関係各位には、引き続きご理解とご協力を賜りたく、ここに改めてお願い申し上げる次第です。

総合研究大学院大学の教職員

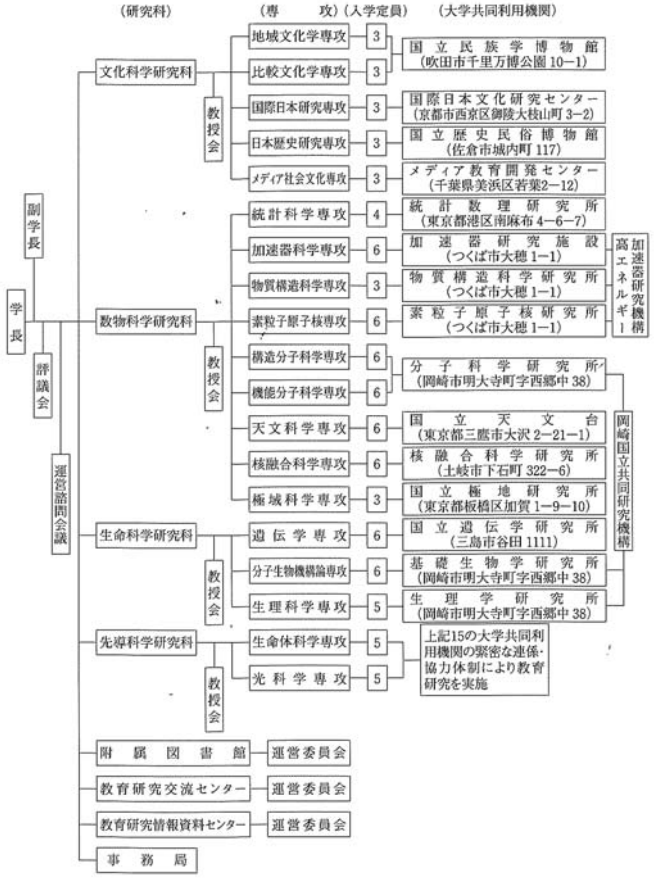
現員（平成13年4月1日現在）

区分	学長	副学長	教授	助教授	助手	事務官	技官	計
学長	1							1
副学長		1						1
事務局						40	1	41
文化学研究科			70	52				122
数物科学研究科			161	108	159			428
生命科学研究科			47	16	34			97
先導科学研究科			14	18	13			45
教育研究交流センター			3	1				4
教育研究情報資料センター			1					1
計	1	1	296	195	206	40	1	740

役職員

学長		小平桂一
副学長		高畑尚之
文化科学研究科	研究科長	田村克己
	地域文化学専攻長	八杉佳穂
	比較文化学専攻長	大森康宏
	国際日本研究専攻長	額賀富本宏
	日本歴史研究専攻長	西本豊弘
	メディア社会文化専攻長	永岡慶三
数物科学研究科	研究科長	那須奎一郎
	統計科学専攻長	清水良一
	加速器科学専攻長	神谷幸秀
	物質構造科学専攻長	木村嘉孝
	素粒子原子核専攻長	山田作衛
	構造分子科学専攻長	茅幸二
	機能分子科学専攻長	小林速男
	天文科学専攻長	海部宣男
	核融合科学専攻長	薩摩正巳
	極域科学専攻長	渡邉堯
生命科学研究科	研究科長	井本敬二
	遺伝学専攻長	堀田凱樹
	分子生物機構論専攻長	勝木元也
	生理科学専攻長	佐々木和夫
先導科学研究科	研究科長	松本吉泰
	生命体科学専攻長	資来聡
	光科学専攻長	井元信之
附属図書館	館長事務取扱	高畑尚之
教育研究交流センター	センター長	平田光司
教育研究情報資料センター	センター長	及川昭文
事務局	事務局長	小山五朗
	総務課長	大高弘士
	学務課長	中島庸介

総合研究大学院大学の組織



総合研究大学院大学の特色

■学部を持たない大学院だけの大学 ―いわゆる独立大学院大学―
■大学院の課程は、後期3年の博士課程
■教育研究は、15の大学共同利用機関との緊密な連係・協力の下に実施
①教官組織は、各研究機関の教官を本学に併任して編成する。
②教育研究の大部分は、各研究機関の施設・設備を用いて実施する。
③各研究機関で行われている高度の研究活動に密着した教育・研究指導により、専門分野についての深い専門性をかん養する。
④大学共同利用機関の開かれた機能を生かし、各研究科・専攻間、国の内外の大学・大学院との相互交流を深めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際性等を培う。

国立学校設置法（抄）
（学校教育法第68条に定める国立大学）
第3条の3　学校教育法第68条に定める国立大学として、次に掲げる大学を置く。

……
総合研究大学院大学
2　……
3　総合研究大学院大学は、第9条の2に定める大学共同利用機関で政令で定めるものとの緊密な連係及び協力の下に教育研究を行うものとする。

※備　考　　学校教育法
第68条　教育研究上特別の必要がある場合においては、第53条の規定にかかわらず、学部を置くことなく大学院を置くものを大学とすることができる。
第53条　大学には、学部を置くことを常例とする。ただし、当該大学の教育研究上の目的を達成するため有益かつ適切である場合においては、学部以外の教育研究上の基本となる組織を置くことができる。

出願資格等

(1) 出願資格※

次のいずれかに該当する者とします。

①修士の学位を有する者又は取得する見込みである者
②外国において、修士の学位に相当する学位の取得者又は取得する見込みである者
③大学を卒業し、又は外国において、学校教育における16年の課程を修了した後、大学・研究所等において、2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
④本学において、個別の入学資格審査により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、24歳に達したもの
⑤その他本学において、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

(2) 選抜方法※

選抜は書類選考、修士論文又はそれに代わるものの審査及び面接により行う。

※詳細は募集要項を請求の上、確認して下さい。

募集要項請求先

募集要項の請求を郵送で行う場合は、封筒の表に「学生募集要項請求（文化科学研究科）」と朱書し、裏には住所、氏名、連絡先電話番号を記載するとともに返信用封筒（角形2号・縦33.2cm×横24cm、受信者の住所、氏名、郵便番号を明記し、390円の切手を貼り付けたもの）を同封し、下記宛に行うこと。

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
総合研究大学院大学事務局学務課学生厚生係

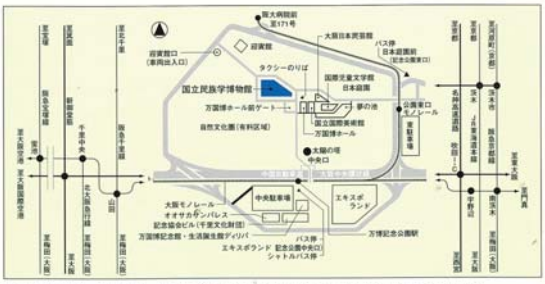


葉山キャンパス

問い合わせ先

☆国立民族学博物館　管理部研究協力課研究協力係

〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10番1号
電　話　06−6876−2151（代表）
06−6878−8236（専攻担当）
ＦＡＸ　06−6876−2195
ＵＲＬ　http://www.minpaku.ac.jp/　　E-mail　souken@idc.minpaku.ac.jp



●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅よりバスで日本庭園前下車徒歩15分
●大阪モノレールで万博記念公園駅下車徒歩15分（ただし、公園中央口経由自然文化園は有料です）
●大阪モノレールで公園東口駅下車、無料地域を通って徒歩約13分
●タクシーは民博職員通用口まで入ることができます。

☆総合研究大学院大学　事務局

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電　話　0468−58−1500（代表）
ＦＡＸ　0468−58−1541
ＵＲＬ　http://www.soken.ac.jp/



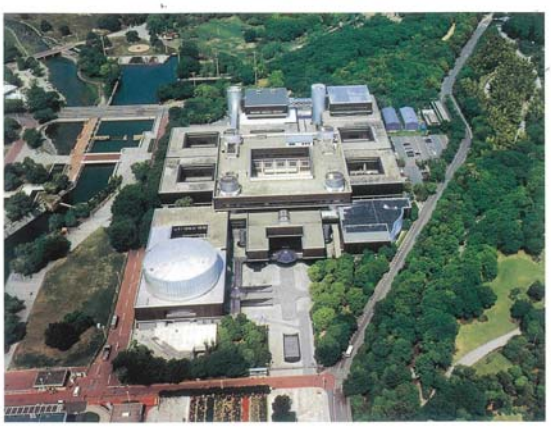


総合研究大学院大学

文化科学研究科

地域文化学専攻
比較文化学専攻

概要



2002

もくじ

文化科学研究科について …… 1
専攻の概要
地域文化学専攻 …… 2
授業科目 …… 2~3
担当教員の専門分野 …… 3
比較文化学専攻 …… 4
授業科目 …… 4
担当教員の専門分野 …… 5
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員 …… 5
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法と目的 …… 5
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位 …… 5
フィールドからみる世界 ～学生の研究フィールド・マップ～ …… 6~7
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生 …… 6
「卒業生」からのメッセージ …… 7,9
学位論文リスト …… 8~9
年度別学位記授与者数 …… 9
地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する …… 10
入学者選抜試験倍率 …… 10
合格者出身大学院機関別累計 …… 10
合格者出身大学院地方別累計 …… 10
地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み …… 11
国立民族学博物館の概要 …… 12
総合研究大学院大学について …… 13
総合研究大学院大学の教職員 …… 14
総合研究大学院大学の組織 …… 15
総合研究大学院大学の特色 …… 16
出願資格等 …… 17
募集要項請求先 …… 17
問い合わせ先 …… 裏表紙

文化科学研究科について



研究科長　田村克己

総合研究大学院大学は、学部をもたず大学院だけを置く国立大学として、昭和63年10月1日に開学した我が国最初の大学院大学である。文化科学研究科は、総合研究大学院大学の一研究科であり、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻の2専攻により、平成元年4月に設置され、平成4年度には、国際日本文化研究センターを基盤として国際日本研究専攻が、平成11年4月には国立歴史民俗博物館を基盤として日本歴史研究専攻が、平成13年4月にはメディア教育開発センターを基盤としてメディア社会文化専攻が増設された。

国立民族学博物館は、日本における民族学・文化人類学の研究センターとしての機能をもち、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究を多角的に推進している。近年の国際化・国際交流の著しい進展と活発化、その一方での民族紛争の多発など、研究課題の多様化・グローバル化とこれに伴う研究分野の拡大は、民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めつつある。

国際日本文化研究センターは、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力を行う機能をもつ。近年国際化の中で日本に対する関心が高まっており、「日本」に関する総合的な研究が世界的な規模で進められている。

国立歴史民俗博物館は、文献資料・民俗資料・考古資料を学際的に研究し、世界史的な広い視野からの日本歴史理解へのアプローチを開拓するとともに、国際的な日本歴史研究を推進している。

メディア教育開発センターは、高等教育におけるマルチメディアの利用を促進するための我が国における中核的機関であり、多様なメディアを高度に利用して行う教育の内容、方法等を研究開発し、その成果を提供することを目的として、先導的な研究を行っている。

この四つの研究機関を基盤として、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化に関して地域的・個別的に対象を設定し、教育研究を行う「地域文化学専攻」と、そのような諸民族の社会・技術・宗教・芸術等について通文化的手法に基づき教育研究を行う「比較文化学専攻」、国際的な視野で日本の文化と文明について教育研究を行う「国際日本研究専攻」、および文献史学の枠にとらわれず、広く歴史学・民俗学・考古学などと関連諸科学との共同により、総合的な日本歴史解明を目指した教育研究を行う「日本歴史研究専攻」、メディアと文化、社会、人間の相互作用について、学際的かつ総合的な教育を行う「メディア社会文化専攻」の5専攻を置き、国際的・学際的な教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目指している。

専攻の概要

地域文化学専攻

専攻長　塚田誠之



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としている。本専攻においては、現地調査及びこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度の研究者の養成を行う。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
アジア地域文化学	アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東アジア文化研究Ⅰ～Ⅲ 東アジア文化研究特論Ⅰ～Ⅲ 東アジア文化研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 松山 利夫 教授 朝倉 敏夫 教授 塚田 誠之 助教授 横山 廣子
			中央アジア文化研究	教授 松原 正毅 助教授 小長谷有紀
			北アジア文化研究	教授 大塚 和義 助教授 佐々木史郎
			中央・北アジア文化研究特論Ⅰ～Ⅱ	教授 松原 正毅 助教授 佐々木史郎
			中央・北アジア文化研究演習Ⅰ～Ⅱ	教授 大塚 和義 助教授 小長谷有紀
	アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東南アジア文化研究Ⅰ～Ⅱ 東南アジア文化研究特論Ⅰ～Ⅱ 東南アジア文化研究演習Ⅰ～Ⅱ	教授 田村 克己 助教授 佐藤 浩司
			南アジア文化研究 南アジア文化研究特論 南アジア文化研究演習	教授 栗田 靖之 教授 立川 武蔵
			西アジア文化研究 西アジア文化研究特論 西アジア文化研究演習	教授 臼杵 陽

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
ヨーロッパ・アフリカ地域文化学	ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	ヨーロッパ文化研究Ⅰ～Ⅲ ヨーロッパ文化研究特論Ⅰ～Ⅲ ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 野村 雅一 助教授 新免光比呂 助教授 森 明子
	アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アフリカ文化研究Ⅰ～Ⅲ アフリカ文化研究特論Ⅰ～Ⅲ アフリカ文化研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 吉田 憲司 教授 竹沢尚一郎
アメリカ・オセアニア地域文化学	アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アメリカ文化研究Ⅰ～Ⅲ アメリカ文化研究特論Ⅰ～Ⅲ アメリカ文化研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 八杉 佳穂 教授 山田 睦男
	オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	オセアニア文化研究Ⅰ～Ⅲ オセアニア文化研究特論Ⅰ～Ⅲ オセアニア文化研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 久保 正敏 教授 吉田 集而 教授 印東 道子
基礎科目			地域文化学基礎演習Ⅰ 地域文化学基礎演習Ⅱ	(大学院ゼミ担当教員) (論文ゼミ担当教員)
共通			地域文化学特論Ⅰ～Ⅱ 比較文化学演習Ⅰ～Ⅱ	(共通科目担当教員)
特別講義			サマースクールⅠ～Ⅲ 学生セミナー 湘南レクチャーⅠ～Ⅵ	

※年度によって開講科目が異なる。

担当教員の専門分野（五十音順）

朝倉敏夫（韓国社会研究）
大塚和義（アイヌ民族学・北アジア研究）
小長谷有紀（牧畜文化論、モンゴル研究）
新免光比呂（宗教学・朝鮮研究）
田村克己（東南アジア文化人類学）
松原正毅（民族人類学―北アジア・西アジア・中央アジア）
八杉佳穂（言語人類学・中米文化史）
吉田憲司（博物館人類学・アフリカ研究）
印東道子（オセアニア考古学）
久保正敏（コンピュータ民族学・民俗情報学）
佐々木史郎（毛皮交易論・狩猟生態論）
竹沢尚一郎（宗教人類学・アフリカ研究）
塚田誠之（歴史民族学・中国研究）
山田睦男（ラテンアメリカ史、ラテンアメリカ地域研究）
吉田集而（文化人類学―オセアニア・東南アジア）
臼杵陽（国際関係論―中東）
栗田靖之（博物館人類学・ブータン研究）
佐藤浩司（建築人類学・東南アジア研究）
立川武蔵（宗教哲学・南アジア研究）
野村雅一（身体コミュニケーション論・画像研究）
森明子（中部ヨーロッパ文化人類学）
横山廣子（文化人類学、中国・東南アジア）

比較文化学専攻

専攻長　杉本良男



民族社会、民族技術、民族宗教、民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としている。諸民族の文化の通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指す。本専攻においては、従来の民族学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度の研究者の養成を行う。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族社会・宗教学	民族社会	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治集団、法規範、所有と分配等に関する通文化的・理論的研究	民族社会研究Ⅰ～Ⅴ 民族社会研究特論Ⅰ～Ⅲ 民族社会研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 杉本 良男 教授 押川 文子 教授 藤井 龍彦 助教授 韓 敏 助教授 岸上 伸啓
	民族宗教	諸民族の祭祀、神話、宇宙観等に関する通文化的・理論的研究	民族宗教研究Ⅰ～Ⅳ 民族宗教研究特論Ⅰ～Ⅲ 民族宗教研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 石森 秀三 教授 中牧 弘允 助教授 林 勲男
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究	民族技術研究Ⅰ～Ⅴ 民族技術研究特論Ⅰ～Ⅲ 民族技術研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 近藤 雅樹 教授 吉本 忍 助教授 関 雄二 助教授 開田 直子 助教授 マシウス ピーター
民族言語・芸術学	民族言語	諸民族の言語、文字、伝達等に関する通文化的・理論的研究	民族言語研究Ⅰ～Ⅳ 民族言語研究特論Ⅰ～Ⅲ 民族言語研究演習Ⅰ～Ⅲ 言語情報研究 言語情報研究特論 言語情報研究演習	教授 庄司 博史 教授 長野 泰彦 助教授 西尾 哲夫 教授 杉田 繁治 助教授 山本 泰則
	民族芸術	諸民族の音楽、芸能、文芸、造形等に関する通文化的・理論的研究	民族芸術研究Ⅰ～Ⅴ 民族芸術研究特論Ⅰ～Ⅲ 民族芸術研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 江口 一久 教授 大森 康宏 教授 熊倉 功夫 助教授 寺田 吉孝
基礎科目			比較文化学基礎演習Ⅰ 比較文化学基礎演習Ⅱ	（大学院ゼミ担当教員） （論文ゼミ担当教員）
共通			比較文化学特論Ⅰ～Ⅱ 比較文化学演習Ⅰ～Ⅱ	（共通科目担当教員）
特別講義			サマースクールⅠ～Ⅲ 学生セミナー 瀬南レクチャーⅠ～Ⅵ	

※年度によって開講科目が異なる。

担当教員の専門分野（五十音順）

石森秀三（観光文明学）　江口一久（民族言語学・口承文芸論）　大森康宏（映像人類学・民族誌映画）
押川文子（インド近現代社会史）　韓敏（社会人類学・中国研究）　岸上伸啓（文化人類学・北方民族研究）
熊倉功夫（日本文化史）　近藤雅樹（日本物質文化論）　庄司博史（言語学・言語政策論）
杉田繁治（コンピュータ民族学・文明学）　杉本良男（社会人類学・南アジア研究）　開雄二（アンデス考古学・ラテンアメリカ研究）
関田直子（保存科学）　寺田吉孝（民族音楽学・インド研究）　中牧弘允（宗教人類学・経営人類学）
長野泰彦（民族言語学・チベットビルマ語研究）　西尾哲夫（認識言語学・アラブ研究）　林勲男（社会人類学・オセアニア研究）
Matthews, Peter J.（先史学・民族植物学）　藤井龍彦（新大陸先史学）　山本泰則（コンピュータ民族学）
吉本忍（民族工芸論・民族技術論）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員

現員（平成14年4月1日現在）

区分	教授	助教授	計	備考
地域文化学専攻	17	6	23	
比較文化学専攻	14	9	23	基盤機関の長（民博館長）を含む
計	31	15	46	

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法と目的

教官の多くが地域文化学・比較文化学両専攻にまたがって教育研究の指導にあたっています。

教育研究の方法は、個別の教官による授業や研究指導と、複数の教官の指導のもとにおこなわれる共通のゼミナールからなっています。

共通のゼミナールには主に一年次生を対象とする「基礎演習Ⅰ」（通称『大学院ゼミナール』）と論文作成の指導を内容とする「基礎演習Ⅱ」（通称『論文ゼミナール』）があります。

「大学院ゼミナール」は学生がそれぞれの研究計画を発表する『研究計画シリーズ』、各教官が交代で専門分野を講義する「テーマ・シリーズ」、一年の教育研究課程を受けた学生があらためて研究計画を発表する「リサーチプロポーザル・シリーズ」からなっています。

平成13年度からは、民族学・文化人類学の視点や方法論を批判的に摂取することを目的として、共通科目（特論または演習）が開講されています。

学生はおおむね一年次においてフィールドワーク（現地調査）の準備をおこない、おおむね二年次以降、指導教官の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教官による個別の指導や『論文ゼミナール』での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

両専攻の教育研究の目的は——

①独創的な民族学・文化人類学の研究

②長期のフィールドワークでえられた資料にもとづく学位論文の作成

③広い視野をもった、人間性豊かな研究者の養成——です。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。又専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学
比較文化学専攻	文学

学位論文の内容によっては学術



地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

大学院入学定員及び現員（平成14年4月1日現在）

専攻	入学定員	現員				備考
		1年次	2年次	3年次	計	
地域文化学専攻	3	4	2	13	19	
比較文化学専攻	3	4	6	7	17	
計	6	8	8	20	36	

地域文化学専攻第2回転入学者は、以下のような方々である。

愛媛大、沖縄県立芸術大、徳島島根心身子大、同岐阜薬科大、関西外国語大、京都大、京都文教大、甲子園大、神戸大、静岡大、同志社女子短期大、中部大、筑波大、帝塚山学院大、東京外国語大、長崎純心大、新潟大、日本大、ノーザンライツ・コンピューター、阪南大、平安女学院大、宮崎公立大、上海師範大（中国）、インドネシア学術院、Espro-Vientos Polytechnic（フィンランド）、国立民族学博物館（文部科学技官）

「卒業生」からのメッセージⅠ

中部大学助教授　中山　紀子

1996年に入学し、2001年10月から2002年3月までの現地調査期間を含めて5年間総研大に在籍しました。最終文でもっとも印象深いのは何と言っても「論文ゼミナール」です。調査を終了した（とされる）学生が順序立てて調査報告から論文作成の過程までさらされ集まるのですが、厳しいコメントが飛びかいます。授業時には正に先生方から、授業の時からつぶすからだめだめされます。初には場所を移して酒を飲みながら厳しくつぶすこともありました。しかし、皆も受けてくる論文報告内容だけでなくするする方向に広がっていきます。そのとき指摘を集めやすい各教官や事務について、あるいは本当は分析の仕方などなど。

講義の際には「論文ゼミナール」の前に聞いたことではありませんでした。私が在籍していた時期、学生は自由な「国境」と調和する「国境」におおまかに二分されていました。「国境」の考え方をの場面が変わっていく時ではなく、時間に余裕のある日の午前にふらりと総研を訪ね、同じような「国境」の時間を見つけては酒を飲みに出て、議論するということを繰り返していました。論文作成や調査報告といった厳しい時間を共にした仲間だからこそ議論を戦わせました。自分勝手で思考を時間に追われずにあれ総研にとらわれ勉強しています。

学位論文リスト

【課程博士】

『数学的手法を用いた文化分析の方法について』　小島　三弘（比較）［H4.3.31 学術］
『シドニーにおける都市アボリジニの研究　伝統と民族の創出』　鈴木　清史（比較）［H6.3.24 文学］
『オルドス・モンゴル族の社会構造－ヤスの機能とその歴史的変容－』　楊　海英（地域）［H6.9.20 文学］
『ペルーにおける山の神信仰の現在性－アンデスの宗教的世界のダイナミズム－』　細谷　広美（地域）［H7.3.23 文学］
『ビルマにおけるウェイザー信仰の研究』　土佐　桂子（比較）［H7.3.23 文学］
『韓国社会の動態と「両班化」－忠清北道阿房都における門中と儒式儀礼の検討を通して』　岡田　浩樹（地域）［H8.3.21 文学］
『中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究』　曹　建南（地域）［H8.3.21 文学］
『歌に表象される村落意識－奄美における「シマの歌」の研究－』　中原ゆかり（比較）［H8.3.21 文学］
『四合院家屋の文化人類学的研究－人間と自然との相互作用の視点から』　杉山　京子（地域）［H10.3.24 文学］
『モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究－アルタイ・ハイラハ叙事詩を事例として－』　藤井　麻湖（地域）［H10.3.24 文学］
『カストム・メレシシーヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および民間医療観の現代的位相』　白川　千尋（地域）［H10.3.24 文学］
『韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究』　李　善愛（比較）［H10.3.24 文学］
『東南中国の漢族社会組織とその変容－閩南農村社会における宗族の研究』　潘　宏立（比較）［H10.3.24 文学］
『芸の伝承－ジャワ島・チルボンの仮面舞踊を中心に』　福岡まどか（比較）［H10.3.24 文学］
『Overt First and Second Person-Designating Terms in Japanese Discourse －A Pragmatic Perspective－』　Riikka Lansisalmi（比較）［H10.3.24 文学］
『「二重の窮乏」下の平等理念－現代世界とキリバス南部環礁の社会生活－』　風間　計博（地域）［H10.9.30 文学］
『建築と文化・社会との相互作用－中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象として－』　梁原　伸治（地域）［H10.9.30 学術］
『カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容－宗教共同体と開発の視点から－』　子島　進（地域）［H11.3.24 文学］
『地域主義運動における言語と知識人－エストニア南部ヴォル地方の事例から－』　寒水　明子（地域）［H11.3.24 学術］
『英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究－文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相－』　塩路　有子（比較）［H12.9.29 文学］
『北タイ・アカの家屋に関する研究－家屋の形式とその変化への視点から－』　清水　郁郎（地域）［H13.3.23 文学］
『韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化－忠清南道公州市を中心として活動する薬草商人を例に－』　林　史樹（地域）［H13.3.23 文学］
『現代インドネシアにおけるジャワ大衆演劇クトプラの研究』　青木　武信（比較）［H13.3.23 文学］
『南ラオス村落社会における政治過程の研究－ンゲの村における「連帯」と闘争－』　中田　友子（地域）［H14.3.22 文学］
『20世紀前半のボリビアにおける先住民教育と植民地主義』　吉江　貫文（地域）［H14.3.22 文学］
『カメルーンにおける「商売の民」バミレケの都市人類学的研究』　野元　美佐（比較）［H14.3.22 文学］

【論文博士】

『An Areal-Typological Study of Middle American Indian Languages』　八杉　佳穂［H6.3.30 文学］
『農村女性からみたトルコの「近代化」－世俗主義、イスラーム、女性の相互関係』　中山　紀子［H9.3.24 文学］
『南タイにおける実践宗教－ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から－』　西井　凉子［H9.3.24 文学］
『セネガルの公権力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究』　小川　了［H9.3.24 文学］

『メラネシアの政治的リーダーシップと開発ーソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐってー』 関根　久雄［H10.9.30 文学］
『南インドの農村におけるカースト内関係としての親族ーコング・ヴェッラーラの事例研究ー』 杉本　星子［H10.9.30 文学］
『アイヌ民族における神送りの研究ー沙流川流域を中心にー』 萱野　茂［H13.3.23 学術］
『低湿地立地の遺跡にみる縄文時代木州西部地域の生業活動ー縄文時代早期末から中期初頭における若狭湾沿岸と琵琶湖周辺地域の動物考古学的考察ー』 内山　純蔵［H14.3.22 文学］
『考古学における数量化と数理的手法の研究』 及川　昭文［H14.3.22 学術］

年度別学位記授与者数

	地域文化学専攻		比較文化学専攻		計
	課程博士	論文博士	課程博士	論文博士	
平成３年度			1		1
平成５年度			1	1	2
平成６年度	2		1		3
平成７年度	2		1		3
平成８年度		3			3
平成９年度	3		4		7
平成10年度	4	2			6
平成12年度	2		2	1	5
平成13年度	2	1	1	1	5
計	15	6	11	3	35

「卒業生」からのメッセージⅡ

筑波大学専任講師　関根　久雄

総合研究大学院大学は、「奇妙な」大学である。世間一般が抱く「大学」あるいは「大学院」のイメージとは大きく異なる。そこには学部もなければ修士課程もない。ただ博士課程だけが設置されている。国立大学共同利用機関を「キャンパス」とし、分野ごとに研究科が日本各地に分散している。蔵書、研究施設ともに大変充実している。学生数よりも教官数の方が多い。教官がその大学の名称を用いて自己の所属先を外部者に述べることは少ない。つまり、大学そのものの知名度を上げるには、学生自身の努力に大幅に依存している（そのためか、世間的には現在もあまり知名度は高くない）。その他にも、些細なことを含めて「奇妙さ」をあげたら枚挙にいとまがない。

私が総合研究大学院大学を知ったのは、青年海外協力隊員としてソロモン諸島に滞在していた1988年であり、その大学が実際に動き出す前年であった。当時私は、協力隊の任期切れを翌年に控え、帰国後の進路として「大学院進学」を真剣に考えはじめていた。協力隊員活動を続ける過程で、日本を含め諸外国から贈られるさまざまな形式の援助が当初の思惑通りには機能せず、中途段階で崩壊していく姿に幾度となく遭遇した。そしてそれらのほとんどが、地元住民の文化的背景に配慮せず、援助する側の論理に基づいて行われていることも知った。開発（援助）とその開発が生みだされる地域社会の「文化」双方が、その文化の担い手たる地域住民に社会的、経済的利益をもたらすために共生することはできないのであろうか。私が現在も継続して行っている「開発と文化」に関わる研究の出発点はそこにあった。

しかし、1990年代はじめ頃までの人類学は、戦前の応用人類学や戦後の冷戦時代における「第3世界」諸国の秩序維持活動などとの関係から、開発現象をその学問領域において扱うことや、開発行為に直接的、間接的に関わる開発人類学をどこか白眼視する傾向にあった。この10年ほどの間にそのような学問的状況はほとんどみられなくなったが、当時は確実にそうであった。

総合研究大学院大学は、一般の大学における人類学の講座では扱いにくいテーマを恋す「奇妙な」学生に対しても、その教官陣容の豊富さ、関心領域の広さなどから門戸を広げてくれる柔軟性がみられるように感じる。総合研究大学院大学の「奇妙さ」を、ハード、ソフト両面にわたり学生という立場からうまく利用することができれば、そこから得るものは決して少なくないはずである。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する



国立民族学博物館長　石毛直道

世界の諸民族の文化や社会を研究するのが民族学＝文化人類学である。その研究にあたっては幅広い視野が要求される。そこで、国立民族学博物館に設置された総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻では、修士課程で民族学関係の学科を専攻した者だけに限定せず、広い分野から学生の募集をおこなっている。民族学についての基礎知識をもつ者ならば、文化系、理工系の区別なしに応募できるのである。

博士課程後期3年に在籍しようとする学生は、研究者の卵である。自分で問題のありかを発見し、その問題の解決法を自分で考えるのが研究である。教官の指導に全面的に依存していたら、自立した研究者にはなれない。民族学研究の基礎となる、フィールド・ワークでは、一人で異文化の社会のなかで長期間滞在して調査することも必要となる。国立民族学博物館で勉強しようとする諸君には、優等生であることよりも、タフで、独創性にとんだ人物であることが期待される。

在学中に学位論文を書きあげ、博士の称号を取得して、卵ではなく、一人前の研究者としての資格を得てもらいたいのである。

入学者選抜試験倍率

	平成元年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	計
志願者数	24	26	19	37	34	25	23	40	27	22	17	23	31	23	371
合格者数	4	7(2)	6(1)	9(3)	6	6	6(1)	6	6(2)	6(1)	7	6	8	8	91(10)
倍率	6	3.7	3.2	4.1	5.7	4.2	3.8	6.7	4.5	3.7	2.4	3.8	3.9	2.9	4.1

合格者出身大学院機関別累計

	平成元年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	計
国立	3	4(1)	4(1)	7(3)	4	4	1	1	6(2)	4(1)	4	5	5	4	56(8)
公立	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
私立	0	1	1	2	1	0	4(1)	5	0	2	2	<1>	3	1	22(1)<1>
海外	1	2(1)	1	0	1	2	1	0	0	0	1	1	0	2<1>	12(1)<1>
合計	4	7(2)	6(1)	9(3)	6	6	6(1)	6	6(2)	6(1)	7	6<1>	8	8<1>	91(10)<2>

合格者出身大学院地方別累計

	平成元年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	計
関東	1	2(1)	3(1)	5(2)	2	3	4	4	4(2)	3(1)	4	2<1>	3	3	43(7)<1>
中部	0	1	0	1	1	1	0	2	0	2	0	0	0	1	9
近畿	1	2	2	2(1)	1	0	1(1)	0	1	1	2	3	4	2	22(2)
中国	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4
九州	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
海外	1	2(1)	1	0	1	2	1	0	0	0	1	1	0	2<1>	12(1)<1>
合計	4	7(2)	6(1)	9(3)	6	6	6(1)	6	6(2)	6(1)	7	6<1>	8	8<1>	91(10)<2>

※（ ）は入学辞退者で内数、〈 〉は重複で外数、平成2年合格者のうち海外機関出身（1名）者は学部卒で資格認定による。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み

昭和63年10月　総合研究大学院大学開学【全学】
平成元年 4月　文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）設置、学生受入、授業開始
8月　サマースクール開催（国際シンポジウムと交互に隔年開催）【全学】
平成 3年 5月　文化科学研究科の担当で、学生セミナーを学生セミナーハウス（兵庫県三田市）及び民博にて開催【全学】
平成 4年 2月　岡山・兵庫方面へ文化科学研究科研修旅行
3月　比較文化学専攻において、課程博士による初めての学位授与
共同研究「人間をとりまく生物複合の歴史的変容」のシンポジウム「日本文化起源論をめぐる遺伝学と民族学の対話」を民博で開催【全学】
4月　カリキュラム改正
文化科学研究科に国際日本文化研究センターを基盤機関とする国際日本研究専攻設置、学生受入
7月　学生主催でエスニックパーティ開催（以後、毎年恒例の行事に）
平成 5年10月　大学院研究棟竣工、大学院研究室開設
11月　福井・金沢方面へ文化科学研究科研修旅行
平成 6年 3月　比較文化学専攻において、論文博士による初めての学位授与
9月　地域文化学専攻において、課程博士による初めての学位授与
12月　倉敷・大山方面へ文化科学研究科研修旅行
平成 7年 2月　葉山キャンパス本部共通棟が竣工、この年から入学式を同キャンパスにて総研大全体で挙行【全学】
12月　伊勢方面へ文化科学研究科研修旅行
平成 8年 4月　学生セミナーを文化科学研究科が担当【全学】
7月　湘南レクチャー「現代人類学の諸問題」開催【全学】
平成 9年 3月　国際シンポジウム「宇宙と生命・人間ー宇宙と人間のつながりを問う」のセッション5を文化科学研究科が担当【全学】
地域文化学専攻において、論文博士による初めての学位授与
6月　論文博士の申請受付を随時に
9月　課程博士の学位論文審査における予備審査を廃止
11月　大学院ゼミナール（地域文化学基礎演習Ⅰ・比較文化学基礎演習Ⅰ）、論文ゼミナール（地域文化学基礎演習Ⅱ・比較文化学基礎演習Ⅱ）の単位を必修に（10年度入学生より）
平成11年 4月　先導科学研究科学生受入（地域文化学・比較文化学両専攻併任教官の一部、先導科学研究科の併任に）【全学】
文化科学研究科に国立歴史民俗博物館を基盤機関とする日本歴史研究専攻設置、学生受入
11月　東京で大学説明会を実施（平成12、13年度は6月に実施）【全学】
平成12年 3月　教育研究委員会大学院改革ワーキンググループ最終報告書の提出
5月　フィールドワークについて教官と学生が懇談する「木曜喫茶室」開始
6月　民博ホームページの更新にともない、大学院教育のページを刷新
10月　専門の相談員によるメンタルヘルスに関する相談室開設（月1回）
「大学院教育に関する公開フォーラム」及び「オープンキャンパス」開催
平成13年 4月　共通科目（地域文化学特論ⅠⅡ・同演習ⅠⅡ、比較文化学特論ⅠⅡ・同演習ⅠⅡ）の充実、カリキュラム運営ワーキンググループ、研究指導調整委員会の設置など、教育研究体制の整備
地域文化学・比較文化学両専攻の同窓生ネットワーク発足
文化科学研究科にメディア教育開発センターを基盤機関とするメディア社会文化専攻設置、学生受入

※『民博通信』51（1991）、53（1991）、57（1992）、61（1993）、71（1996）、73（1996）、74（1996）、78（1997）、81（1998）、85（1999）、89（2000）各号所載の「大学院ニュース」等より作成

国立民族学博物館の概要



国立民族学博物館は、昭和49年6月に文部省所轄の大学共同利用機関として創設され、学術研究の発展及び教育活動の推進に資するため、世界の諸民族に関する資料を収集・保管し、もって公衆の観覧に供するとともに、民族学に関する調査・研究を行うことを目的としている。この博物館に所属する研究者は、民族学（文化人類学）、言語学、民族技術、民族芸術、コンピュータ民族学などの専門家からなっている。

本博物館は、全国の大学の教員をはじめ民族学の研究者が利用する共同利用機関であり、全国の大学を中心とする研究者の協力のもとにさまざまな課題についての共同研究が行われ、民族学及び関連諸科学に関する研究センターの機能を果たしている。また、標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等を計画的・体系的に収集・整理・保存して、全国の研究者の利用に供するセンターとしての役割もになっている。

本博物館における研究にかかわる組織としては、研究部と情報管理施設がおかれている。研究部は、従来地域別に分けられた4研究部と通文化的研究を行う1研究部から成り立っていたが、平成10年4月に改組され、民族社会研究部、民族文化研究部、博物館民族学研究部、先端民族学研究部というディシプリンによる4研究部と、研究情報の収集・発信および新しい研究分野の開拓等を目指す民族学研究開発センターで構成されている。研究部では、客員教官を含め約100名の研究者が研究に従事している。情報管理施設では、研究者が収集した世界の諸民族の社会と文化に関する資料を整理・保管して、利用に供するとともに、諸情報の管理・検索システムの開発研究を行っている。本博物館には、高水準の情報処理装置が配備されている。

地域研究企画交流センターは、総合的な地域研究の推進を図るため平成6年6月に関連研究機関のネットワークの中心として機能すべく国立民族学博物館内に設置され、人文科学、社会科学、自然科学の諸分野を含めた世界の全ての地域を対象とした地域間比較研究を行っている。

所蔵民族学資料

（平成14年4月1日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	153,414点	レコード・コンパクトディスク	45,484点	日本語図書	213,595冊
国内資料	88,607点	テープ（言語）	7,965点	外国語図書	353,556冊
計	242,021点	テープ（音楽）	8,371点	計	567,151冊
		フィルム（16ミリ）	3,031点		
		ビデオテープ・レーザーディスク	4,480点	日本語雑誌	8,996種
		計	69,331点	外国語雑誌	5,872種
				計	14,868種

総合研究大学院大学について



学長　小平桂一

総合研究大学院大学、略して「総研大」は、基礎学術分野の総合的発展と高度な知的市民の育成を目指して、大学院学生の教育を行うために、14年前〔1988年〕に設立されました。現在では、神奈川県の葉山町に大学本部を持ち、各地に置かれた16の国立学術研究機関等を基盤として、大学院生を分散配置し、ユニークな博士課程（後期）教育を展開しています。

これらの基盤機関は、人文系から自然科学系にわたる、各専門分野に設置された「大学共同利用機関」で、一大学では維持・運用できない大型最新の装置・設備・システムによる研究や、広範・大量な資料に基づく長期的研究、従来の大学講座の枠を超えた学問分野の研究などが行われています。全国の大学研究者や大学院生が、共同で利用し研究を進めているので、異なる地域や専門領域の間の交流や協力が促進され、新しい研究の芽や学際領域が伸び易い、優れた環境にあります。また、わが国を代表する大型・最新の設備や大量の基礎資料を備えているので、当該分野の国際的窓口となって、多くの国際共同研究も行われており、大学院生にも、早くから国際性を身につける種々の機会を提供しています。これから、大学・大学院教育が大きく変わろうとしているとき、わが国の高等学術研究・教育の要の一環として、これら「大学共同利用機関」の役割は、一層その重要性を増すものと確信します。

二十一世紀の国際社会では、各学問分野の深化と共に、多様な学問分野を総合する広い視野と知性が要求されることは、間違いありません。とりわけ、人文系学問の総合的推進や自然科学との融合が、重要な課題となることでしょう。そこに、異なる専門分野の諸基盤機関にまたがって設立され、「総合」と「分散」の両機能を果たすべき「総研大」の意義と使命があります。「総研大」教官の多くは、基盤機関の教官が併任していますが、学生教育に当たっては、専門研究領域・分野を超えて、「総研大」教官としての使命を自覚するよう願っています。また、進学を希望する学生も、単に専門分野で学位を取得しようとするだけでなく、「総研大」にふさわしい考え方や生き方を、少しでも学ぼうという意欲を持って臨むよう、大いに期待しています。

建学にあたられた長倉三郎先生、基礎を築き上げられた廣田栄治先生を始めとする諸先達の努力により、今や「総研大」は「青年期」に入ろうとしています。折も折り、世界的な潮流の中でわが国も、国立大学の制度改革を断行しようとしています。多くの大学や研究所が、社会の短期的・直接的な要請に応えて教育・研究活動を行おうとするなかで、わが国の将来に欠くことのできない、長期的・基礎的な学術分野を理解し、あるいは担い、あるいは新しい道を切り開いていこうとする、高度な知的市民を育成することは、必須の国家的課題です。大学共同利用機関等を基盤とする「総研大」こそは、広範囲にわたる教育団の協力の下に、工夫を凝らして、「新しい大学院生」を育てていかなければなりません。基盤機関が地域的に分散している点は、ともすると、「総研大」の働きにとって負担になりがちですが、それを乗り越え活かす工夫も、していきたいと思っています。

関係各位には、引き続きご理解とご協力を賜りたく、ここに改めてお願い申し上げる次第です。

総合研究大学院大学の教職員

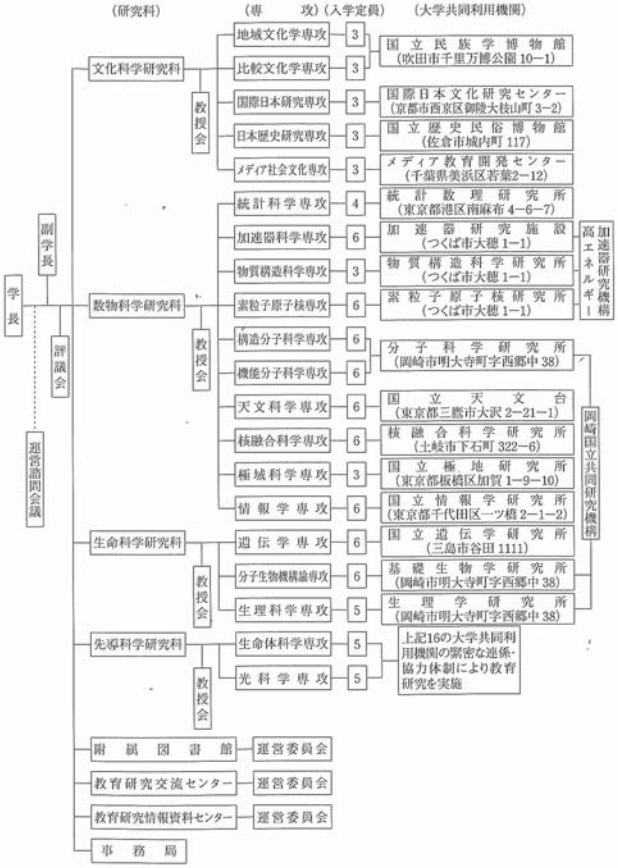
現員（平成14年4月1日現在）

区分	学長	副学長	教授	助教授	助手	事務官	技官	計
学長	1							1
副学長		1						1
事務局						40	1	41
文化学研究科			73	51				124
数物科学研究科			171	120	166			457
生命科学研究科			48	14	33			95
先導科学研究科			11	20	13			44
教育研究交流センター			3	1				4
教育研究情報資料センター			1					1
計	1	1	307	206	212	40	1	768

役職員

学長		小平桂一
副学長		高畑尚之
文化科学研究科	研究科長	田村克己
	地域文化学専攻長	塚田誠之
	比較文化学専攻長	杉本良男
	国際日本研究専攻長	園田英弘
	日本歴史研究専攻長	西本豊弘
	メディア社会文化専攻長	永岡慶三
数物科学研究科	研究科長	家正則
	統計科学専攻長	北川源四郎
	加速器科学専攻長	神谷幸秀
	物質構造科学専攻長	木村嘉孝
	素粒子原子核専攻長	山田作衛
	構造分子科学専攻長	茅幸二
	機能分子科学専攻長	小林速男
	天文科学専攻長	海部宣男
	核融合科学専攻長	藤原正巳
	極域科学専攻長	渡邉邉亜
	情報学専攻長	来松安晴
生命科学研究科	研究科長	西村幹夫
	遺伝学専攻長	堀田凱樹
	分子生物機構論専攻長	勝木元也
	生理科学専攻長	佐々木和夫
先導科学研究科	研究科長	松本吉泰
	生命体科学専攻長	資来聡
	光科学専攻長	井元信之
附属図書館	附属図書長	及川昭文
教育研究交流センター	センター長	平田光司
教育研究情報資料センター	センター長	及川昭文
事務局	事務局長	小山五朗
	総務課長	佐藤博之
	学務課長	中島康介

総合研究大学院大学の組織



総合研究大学院大学の特色

■学部を持たない大学院だけの大学 ——いわゆる独立大学院大学 ——
■大学院の課程は、後期3年の博士課程
■教育研究は、16の大学共同利用機関との緊密な連係・協力の下に実施
①教官組織は、各研究機関の教官を本学に併任して編成する。
②教育研究の大部分は、各研究機関の施設・設備を用いて実施する。
③各研究機関で行われている高度の研究活動に密着した教育・研究指導により、専門分野についての深い専門性をかん養する。
④大学共同利用機関の開かれた機能を生かし、各研究科・専攻間、国の内外の大学・大学院との相互交流を深めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際性等を培う。

国立学校設置法（抄）
（学校教育法第68条に定める国立大学）
第3条の3　学校教育法第68条に定める国立大学として、次に掲げる大学を置く。

……
総合研究大学院大学
2　……
3　総合研究大学院大学は、第9条の2に定める大学共同利用機関で政令で定めるものとの緊密な連係及び協力の下に教育研究を行うものとする。

※備考　学校教育法
第68条　教育研究上特別の必要がある場合においては、第53条の規定にかかわらず、学部を置くことなく大学院を置くものを大学とすることができる。
第53条　大学には、学部を置くことを常例とする。ただし、当該大学の教育研究上の目的を達成するため有益かつ適切である場合においては、学部以外の教育研究上の基本となる組織を置くことができる。

出願資格等

(1) 出願資格※

次のいずれかに該当する者とします。

①修士の学位を有する者又は平成15年3月までに取得する見込みである者
②外国において、修士の学位に相当する学位を授与された者又は平成15年3月までに授与される見込みがある者
③外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位に相当する学位を授与された者又は平成15年3月までに授与される見込みがある者
④大学を卒業し、又は外国において、平成15年3月までに2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑤外国において学校教育における16年の課程を修了した後、又は外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育おける16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、平成15年3月までに2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑥本学において、個別の入学資格審査により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、平成15年4月1日において24歳に達しているもの
⑦その他本学において、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

(2) 選抜方法※

選抜は書類選考、修士論文又はそれに代わるものの審査及び面接により行う。

※詳細は募集要項を請求の上、確認して下さい。

募集要項請求先

募集要項の請求を郵送で行う場合は、封筒の表に「学生募集要項請求（文化科学研究科）」と朱書し、裏には住所、氏名、連絡先電話番号を記載するとともに返信用封筒（角形2号・縦33.2cm×横24cm、受信者の住所、氏名、郵便番号を明記し、390円の切手を貼り付けたもの）を同封し、下記宛に行うこと。

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
総合研究大学院大学事務局学務課学生厚生係

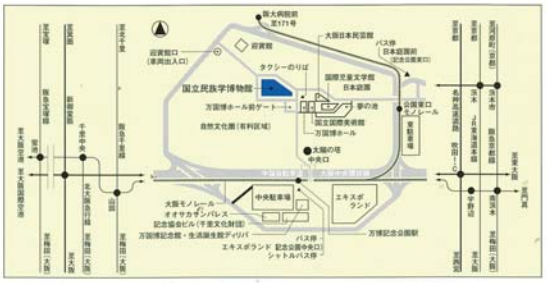


葉山キャンパス

問い合わせ先

☆国立民族学博物館　管理部研究協力課研究協力係

〒565・8511　大阪府吹田市千里万博公園10番1号
電　話　06—6876—2151　（代表）
06—6878—8236　（専攻担当）
ＦＡＸ　06—6876—2195
ＵＲＬ　http://www.minpaku.ac.jp/　E-mail　souken@idc.minpaku.ac.jp



●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅よりバスで日本庭園前下車徒歩15分
●大阪モノレールで万博記念公園駅下車徒歩15分（ただし、公園中央口経由自然文化園は有料です）
●大阪モノレールで公園東口駅下車、無料地域を通って徒歩約13分
●タクシーは民博職員通用口まで入ることができます。

☆総合研究大学院大学　事務局

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電　話　0468—58—1500　（代表）
ＦＡＸ　0468—58—1541
ＵＲＬ　http://www.soken.ac.jp/

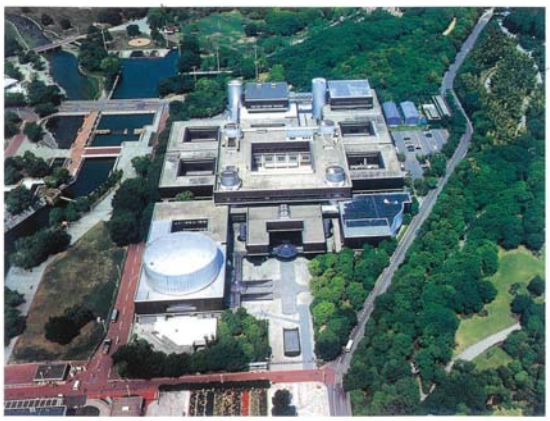




総合研究大学院大学

文化科学研究科

地域文化学専攻
比較文化学専攻　概要



2003

もくじ

文化科学研究科について …… 1
専攻の概要
地域文化学専攻 …… 2
授業科目 …… 2~3
担当教員の専門分野 …… 3
比較文化学専攻 …… 4
授業科目 …… 4
担当教員の専門分野 …… 5
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員 …… 5
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法と目的 …… 5
フィールドからみる世界 ～学生の研究フィールド・マップ～ …… 6~7
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生 …… 6
「卒業生」からのメッセージ …… 7, 9
学位論文リスト …… 8~9
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位 …… 9
地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する …… 10
合格者出身大学院機関別累計 …… 10
合格者出身大学院地方別累計 …… 10
地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み …… 11
入学者選抜試験倍率 …… 11
年度別学位記授与者数 …… 11
国立民族学博物館の概要 …… 12
総合研究大学院大学について …… 13
総合研究大学院大学の教職員 …… 14
総合研究大学院大学の組織 …… 15
総合研究大学院大学の特色 …… 16
出願資格等 …… 17
募集要項請求先 …… 17
問い合わせ先 …… 裏表紙

文化科学研究科について



研究科長　鈴木貞美

総合研究大学院大学は、学部をもたず大学院だけを置く国立大学として、昭和63年10月1日に開学した我が国最初の大学院大学である。文化科学研究科は、総合研究大学院大学の一研究科であり、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻の2専攻により、平成元年4月に設置され、平成4年4月には、国際日本文化研究センターを基盤として国際日本研究専攻が、平成11年4月には、国立歴史民俗博物館を基盤として日本歴史研究専攻が、平成13年4月にはメディア教育開発センターを基盤としてメディア社会文化専攻が、平成15年4月には、国文学研究資料館を基盤とする日本文学研究専攻が、それぞれ増設された。

国立民族学博物館は、日本における民族学・文化人類学の研究センターとしての機能をもち、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究を多角的に推進している。近年の国際化・国際交流の著しい進展と活発化、その一方での民族紛争の多発など、研究課題の多様化・グローバル化とこれに伴う研究分野の拡大は、民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めつつある。

国際日本文化研究センターは、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力を行う機能をもつ。近年国際化の中で日本に対する関心が高まっており、「日本」に関する総合的な研究が世界的な規模で進められている。

国立歴史民俗博物館は、文献資料・民俗資料・考古資料を学際的に研究し、世界史的な広い視野からの日本歴史理解へのアプローチを開拓するとともに、国際的な日本歴史研究を推進している。

メディア教育開発センターは、高等教育におけるマルチメディアの利用を促進するための我が国における中核的機関であり、多様なメディアを高度に利用して行う教育の内容、方法等を研究開発し、その成果を提供することを目的として、先導的な研究を行っている。

国文学研究資料館は、日本全国に散在する前近代1,200年間の文献資料を調査研究し、その収集、整理、保存にあたり、日本文学研究者の利用に供している。

この五つの研究機関を基盤として、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化に関して地域的・個別的に対象を設定し、教育研究を行う「地域文化学専攻」と、そのような諸民族の社会・技術・宗教・芸術等について通文化的手法に基づき教育研究を行う「比較文化学専攻」、国際的な視野で日本の文化と文明について教育研究を行う「国際日本研究専攻」、および文献史学の枠にとらわれず、広く歴史学・民俗学・考古学などと関連諸科学との共同により、総合的な日本歴史解明を目指した教育研究を行う「日本歴史研究専攻」、メディアと文化、社会、人間の相互作用について、学際的かつ総合的な教育を行う「メディア社会文化専攻」、そして、文化科学の視点から文学資源の実態、作品の形成と享受の動態、その制度・環境などを総合的に研究する「日本文学研究専攻」の6専攻を置き、国際的・学際的な教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目指している。

専攻の概要

地域文化学専攻

専攻長　朝倉敏夫



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としている。本専攻においては、現地調査及びこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度の研究者の養成を行う。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
アジア地域文化学	アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東アジア文化研究Ⅰ～Ⅲ 東アジア文化研究特論Ⅰ～Ⅲ 東アジア文化研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 大塚和義 教授 朝倉敏夫 教授 塚田誠之 助教授 横山廣子
			中央アジア文化研究 北アジア文化研究 中央・北アジア文化研究特論Ⅰ～Ⅱ 中央・北アジア文化研究演習Ⅰ～Ⅱ	教授 松原正毅 教授 小長谷有紀 教授 佐々木史郎
	アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	東南アジア文化研究Ⅰ～Ⅱ 東南アジア文化研究特論Ⅰ～Ⅱ 東南アジア文化研究演習Ⅰ～Ⅱ	教授 田村克己 教授 田邊繁治 助教授 佐藤浩司
			南アジア文化研究 南アジア文化研究特論 南アジア文化研究演習	教授 立川武蔵
			西アジア文化研究 西アジア文化研究特論 西アジア文化研究演習	教授 白梅陽

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
ヨーロッパ・アフリカ地域文化学	ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	ヨーロッパ文化研究Ⅰ～Ⅲ ヨーロッパ文化研究特論Ⅰ～Ⅲ ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ～Ⅲ	助教授 新免光比呂 助教授 森明子 助教授 宇田川妙子
	アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アフリカ文化研究Ⅰ～Ⅲ アフリカ文化研究特論Ⅰ～Ⅲ アフリカ文化研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 竹沢尚一郎
アメリカ・オセアニア地域文化学	アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	アメリカ文化研究Ⅰ～Ⅲ アメリカ文化研究特論Ⅰ～Ⅲ アメリカ文化研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 八杉佳穂 教授 山本紀夫 教授 山田睦男
	オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究	オセアニア文化研究Ⅰ～Ⅲ オセアニア文化研究特論Ⅰ～Ⅲ オセアニア文化研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 松山利夫 教授 印東道子 助教授 林勲男
基礎科目			地域文化学基礎演習Ⅰ 地域文化学基礎演習Ⅱ	(大学院ゼミ担当教員) (論文ゼミ担当教員)
共通			地域文化学特論Ⅰ～Ⅱ 地域文化学演習Ⅰ～Ⅱ	(共通科目担当教員)
特別講義			学生セミナー 湘南レクチャーⅠ～Ⅵ	

※年度によって開講科目が異なる。

担当教員の専門分野（五十音順）

朝倉敏夫（韓国社会研究）
宇田川妙子（南ヨーロッパ研究・性研究）
佐々木史郎（毛皮交易論・辞領生態論）
竹沢尚一郎（宗教人類学・アフリカ研究）
田村克己（東南アジア文化人類学）
松原正毅（社会人類学～東・西・中央アジア）
八杉佳穂（言語人類学・中米文化史）
横山廣子（文化人類学、中国・東南アジア）
印東道子（オセアニア考古学）
大塚和義（アイヌ民族学・北アジア研究）
佐藤浩司（琉球人類学・東南アジア研究）
立川武蔵（宗教哲学・南アジア研究）
塚田誠之（歴史民族学・中国研究）
松山利夫（オーストラリア先住民研究）
山田睦男（ラテンアメリカおよびラテンアメリカ出研究）
白梅陽（国際関係論～中東）
小長谷有紀（牧畜文化論、モンゴル研究）
新免光比呂（宗教学・家族研究）
田邊繁治（東南アジア社会人類学）
林勲男（社会人類学・オセアニア研究）
森明子（中部ヨーロッパ文化人類学）
山本紀夫（民族植物学）

比較文化学専攻

専攻長　庄司博史



民族社会、民族技術、民族宗教、民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としている。諸民族の文化の通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指す。本専攻においては、従来の民族学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度の研究者の養成を行う。

授業科目

大講座	教育研究指導分野	概要	授業科目	担当教員
民族社会・宗教学	民族社会	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治集団、法規範、所有と分配等に関する通文化的・理論的研究	民族社会研究Ⅰ～Ⅴ 民族社会研究特論Ⅰ～Ⅲ 民族社会研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 杉本良男 教授 押川文子 教授 藤井龍彦 助教授 岸上伸啓 助教授 韓敏
	民族宗教	諸民族の祭祀、神話、宇宙観等に関する通文化的・理論的研究	民族宗教研究Ⅰ～Ⅳ 民族宗教研究特論Ⅰ～Ⅲ 民族宗教研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 中牧弘允 教授 野村雅一 教授 石森秀三
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究	民族技術研究Ⅰ～Ⅴ 民族技術研究特論Ⅰ～Ⅲ 民族技術研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 近藤雅樹 教授 吉本忍 助教授 關雄二 助教授 園田直子 助教授 ピーター・J・マシウス
民族言語・芸術学	民族言語	諸民族の言語、文字、伝達等に関する通文化的・理論的研究	民族言語研究Ⅰ～Ⅳ 民族言語研究特論Ⅰ～Ⅲ 民族言語研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 庄司博史 教授 長野泰彦 助教授 西尾哲夫
			言語情報研究 言語情報研究特論 言語情報研究演習	教授 久保正敏 助教授 山本泰則
	民族芸術	諸民族の音楽、芸能、文芸、造形等に関する通文化的・理論的研究	民族芸術研究Ⅰ～Ⅴ 民族芸術研究特論Ⅰ～Ⅲ 民族芸術研究演習Ⅰ～Ⅲ	教授 大森康宏 教授 吉田憲司 教授 佃倉功夫 教授 江口一久 助教授 寺田吉孝
基礎科目			比較文化学基礎演習Ⅰ 比較文化学基礎演習Ⅱ	(大学院ゼミ担当教員) (論文ゼミ担当教員)
共通			比較文化学特論Ⅰ～Ⅱ 比較文化学演習Ⅰ～Ⅱ	(共通科目担当教員)
特別講義			学生セミナー 湘南レクチャーⅠ～Ⅵ	

※年度によって開講科目が異なる。

担当教員の専門分野（五十音順）

石森秀三（観光文明学）
江口一久（民族言語学・口承文芸論）
大森康宏（映像人類学・民族誌映画）
押川文子（インド近現代社会史）
韓　敏（社会人類学・中国研究）
岸上伸啓（文化人類学・北方民族研究）
久保正敏（コンピューター民族学・民族植物学）
儀倉玲夫（日本文化史）
近藤雅樹（日本物質文化論）
庄司博史（言語学・言語政策論）
杉本良男（社会人類学・南アジア研究）
關　雄二（アンデス考古学・ラテンアメリカ研究）
園田直子（保存科学）
寺田吉孝（民族音楽学・インド研究）
中牧弘允（宗教人類学・経営人類学）
長野泰彦（民族言語学・チベットビルマ語研究）
西尾哲夫（認識言語学・アラブ研究）
野村雅一（身体コミュニケーション論・掏児研究）
Matthews, Peter J.（先史学・民族植物学）
藤井龍彦（新大陸美史学）
山本泰則（コンピュータ民族学）
吉田憲司（博物館人類学・アフリカ研究）
吉本　忍（民族工芸論・民族技術論）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員

現　員（平成15年4月1日現在）

区　分	教　授	助 教 授	計	備　考
地域文化学専攻	17	6	23	基盤機関の長（民博館長）を含む
比較文化学専攻	15	8	23	
計	32	14	46	

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法と目的

教官の多くが地域文化学・比較文化学両専攻にまたがって教育研究の指導にあたっています。

教育研究の方法は、個別教官による授業や研究指導と、複数の教官の指導のもとに行われる共通のゼミナールからなっています。

共通のゼミナールには主として一年生を対象とする「基礎演習Ⅰ」（通称「大学院ゼミナール」）と論文作成の指導を内容とする「基礎演習Ⅱ」（通称「論文ゼミナール」）があります。

「大学院ゼミナール」は学生がそれぞれの研究計画を発表する「研究計画シリーズ」、各教官が交代で専門分野を講義する「テーマ・シリーズ」、一年の教育研究課程を受けた学生が改めて研究計画を発表する「リサーチプロポーザル・シリーズ」からなっています。

平成13年度からは、民族学・文化人類学の視点や方法論を批判的に摂取することを目的として、共通科目（特論又は演習）が開講されています。

学生はおおむね一年次においてフィールドワーク（現地調査）の準備をおこない、おおむね二年次以降、指導教官の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教官による個別の指導や「論文ゼミナール」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

両専攻の教育研究の目的は――

①独創的な民族学・文化人類学の研究

②長期のフィールドワークで得られた資料にもとづく学位論文の作成

③広い視野をもった、人間性豊かな研究者の養成――です。



地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

大学院入学定員及び現員（平成15年4月1日現在）

専　攻	入学定員	現　員				備　考
		1年次	2年次	3年次	計	
地域文化学専攻	3	2	4	13	19	
比較文化学専攻	3	5	4	11	20	
計	6	7	8	24	39	

地域文化学専攻及び比較文化学専攻の出身者は、以下のようなところに首職し、教育研究に活躍している。愛媛大学、沖縄県立芸術大学、鹿児島純心女子大学、川崎医療福祉大学、関西外国語大学、神田外語大学、京都大学、京都文教大学、神戸大学、静岡大学、岡大学立命館大学、中部大学、筑波大学、帝塚山学院大学、東京外国語大学、長崎純心大学、新潟大学、日本大学、ノーザンライツ・コンピュータ、阪南大学、平安女学院大学、宮崎公立大学、上海師範大学（中国）、インドネシア学術研究局、Laurea Polytechnic（フィンランド）、国立民族学博物館（研究機関研究員等）

「卒業生」からのメッセージⅠ

中部大学助教授　中山　紀子

1988年に入学し、1991年10月から1993年10月までの間地域調査期間を含めて5年間滞在しました。最初はてもっとも印象深いのは1年目に出ていた「論文ゼミナール」です。講義を終了した（とされる）学生が順番に自分の調査地から論文指導の助言をそれぞれ発表するものです。新しいフィールドが増えていき、指導時には主に先生方から、指導が終わってからは学生から自分のめざめます。特に印象的な事として教官者みなから厳しく指摘を受けることもありました。しかし、指導を受けてくると論点が自分の中でもうさまざまな方面に広がっていきます。それらを整理する能力のない者等学年度について、あるいは多方面な自分自身についてもなると、講義の構造は「論文ゼミナール」の前に置かれることではありませんでした。私が在籍していた時期、学生は共同住宅「白樺」と呼ばれる「白樺」にねおまわりに「ふれていました。「白樺」の私は自分の指導が受けいれて、時間には毎日のあるほどの学生による勉強会も活発。同じような「白樺」の時間を経つけて「白樺」を訪れる教えに出き、講義をおもいうことを聞かせていました。論文作成や情報収集といった思いい時間を共にした時間からこそ講義を聞き上げました。自を新しく広がる時間と広がるめてくれた経験および心よりお感謝しています。

学位論文リスト

【課程博士】

『数学的手法を用いた文化分析の方法について』	小島　三弘（比較）	【H4.3.31 学術】
『シドニーにおける都市アボリジニの研究　伝統と民族の創出』	鈴木　清史（比較）	【H6.3.24 文学】
『オルドス・モンゴル族の社会構造ーヤスの機能とその歴史的変容ー』	楊　海英（地域）	【H6.9.20 文学】
『ペルーにおける山の神信仰の現在性ーアンデスの宗教的世界のダイナミズムー』	細谷　広美（地域）	【H7.3.23 文学】
『ビルマにおけるウェイザー信仰の研究』	土佐　桂子（比較）	【H7.3.23 文学】
『韓国社会の動態と「両班化」ー忠清北道阿所郡における門中と儒式祭礼の検討を通してー』	岡田　浩樹（地域）	【H8.3.21 文学】
『中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究』	曽　廷南（地域）	【H8.3.21 文学】
『歌に表象される村落意識ー奄美における「シマの歌」の研究ー』	中原ゆかり（比較）	【H8.3.21 学術】
『四合院家屋の文化人類学的研究ー人間と自然との相互作用の視点から』	杉山　京子（地域）	【H10.3.24 文学】
『モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究ーアルタイ・ハイラハ叙事詩を事例としてー』	藤井　麻湖（地域）	【H10.3.24 文学】
『カストム・メレシンーヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および民間医療観の現代的位相』	白川　千尋（地域）	【H10.3.24 文学】
『韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究』	李　善愛（比較）	【H10.3.24 文学】
『東南中国の漢族社会組織とその変容ー閩南農村社会における宗族の研究』	潘　宏立（比較）	【H10.3.24 文学】
『芸の伝承ージャワ島・チルボンの仮面舞踊を中心にー』	福岡まどか（比較）	【H10.3.24 文学】
『Overt First and Second Person-Designating Terms in Japanese Discourse ーA Pragmatic Perspectiveー』	Riikka Lansisalmi（比較）	【H10.3.24 文学】
『「二重の窮乏」下の平等理念ー現代世界とキリバス南部環礁の社会生活ー』	風間　計博（地域）	【H10.9.30 文学】
『建築と文化・社会との相互作用ー中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象としてー』	栗原　伸治（地域）	【H10.9.30 学術】
『カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容ー宗教共同体と開発の視点からー』	子島　進（地域）	【H11.3.24 文学】
『地域主義運動における言語と知識人ーエストニア南部ヴォル地方の事例からー』	寒水　明子（地域）	【H11.3.24 学術】
『英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究ー文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相ー』	塩路　有子（比較）	【H12.9.29 文学】
『北タイ・アカの家屋に関する研究ー家屋の形式とその変化への視点からー』	清水　郁郎（地域）	【H13.3.23 文学】
『韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化ー忠清南道公州市を中心として活動する薬草商人を例にー』	林　史樹（地域）	【H13.3.23 文学】
『現代インドネシアにおけるジャワ大衆演劇クプラの研究』	青木　武信（比較）	【H13.3.23 文学】
『南ラオス村落社会における政治過程の研究ーンゲの村における「連帯」と闘争ー』	中田　友子（地域）	【H14.3.22 文学】
『20世紀前半のポリビアにおける先住民教育と植民地主義』	吉江　貴文（地域）	【H14.3.22 文学】
『カメルーンにおける「商売の民」バミレケの都市人類学的研究』	野元　美佐（比較）	【H14.3.22 文学】
『タイ式医療の構築とタイ・マッサージ社会的文脈による雑感的知識の多様性ー』	飯田　淳子（地域）	【H15.3.24 文学】

【論文博士】

『An Areal-Typological Study of Middle American Indian Languages』	八杉　佳穂	【H6.3.30 文学】
『農村女性からみたトルコの「近代化」ー世俗主義、イスラーム、女性の相互関係』	中山　紀子	【H9.3.24 文学】
『南タイにおける実践宗教ームスリムと仏教徒が混住する村落の事例からー』	西井　涼子	【H9.3.24 文学】
『セネガルの公職力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究』	小川　了	【H9.3.24 文学】

『メラネシアの政治的リーダーシップと開発ーソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐってー』	関根　久雄	【H10.9.30 文学】
『南インドの農村におけるカースト内関係としての親族ーコング・ヴェッラーラの事例研究ー』	杉本　星子	【H10.9.30 文学】
『アイヌ民族における神送りの研究ー沙流川流域を中心にー』	萱野　茂	【H13.3.23 学術】
『低湿地立地の遺跡にみる縄文時代木州西部地域の生業活動ー縄文時代早期末から中期初頭における若狭湾沿岸と琵琶湖周辺地域の動物考古学的考察ー』	内山　純蔵	【H14.3.22 文学】
『考古学における数量化と数理的手法の研究』	及川　昭文	【H14.3.22 学術】
『総管信仰ー近世江南農村社会と民間宗教ー』	濱島　敦俊	【H14.9.30 学術】
『中国の食事方法ー歴史人類学的考察ー』	西澤　治彦	【H15.3.24 文学】
『台湾原住民のイノシシ（Sus scrofa taivanus）狩猟の民族考古学的研究：動物遺存体研究の方法論構築にむけて』	野林　厚志	【H15.3.24 学術】

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。又専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専　攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文　学
比較文化学専攻	文　学

学位論文の内容によっては学術

「卒業生」からのメッセージⅡ

筑波大学専任講師　関根　久雄

総合研究大学院大学は、「奇妙な」大学である。世間一般が抱く「大学」あるいは「大学院」のイメージとは大きく異なる。そこには学部などなければ修士課程もない。ただ博士課程だけが設置されている。国立大学共同利用機関を「キャンパス」とし、分野ごとに研究科が日本各地に分散している。蔵書、研究施設ともに大変充実している。学生数よりも教官数の方が多い。教官がその大学の名称を用いて自己の所属先を外部者に述べることは少ない。つまり、大学そのものの知名度を上げるには、学生自身の努力に大幅に依存している（そのためか、世間的には現在もあまり知名度は高くない）。その他にも、些細なことを含めて「奇妙さ」をあげたら枚挙にいとまがない。

私が総合研究大学院大学を知ったのは、青年海外協力隊員としてソロモン諸島に滞在していた1988年であり、その大学が実際に動き出す前年であった。当時私は、協力隊の任期切れを翌年に控え、帰国後の進路として「大学院進学」を真剣に考えはじめていた。協力隊員活動を続ける過程で、日本を含め諸外国から贈られるさまざまな形式の援助が当初の思惑通りには機能せず、中途段階で崩壊していく姿に幾度となく遭遇した。そしてそれらのほとんどが、地元住民の文化的背景に配慮せず、援助する側の論理に基づいて行われていることも知った。開発（援助）とその開発が生みだされる地域社会の「文化」双方が、その文化の担い手たる地域住民に社会的、経済的利益をもたらすために共生することはできないのであろうか。私が現在も継続して行っている「開発と文化」に関わる研究の出発点はそこにあった。

しかし、1990年代はじめ頃までの人類学は、戦前の応用人類学や戦後の冷戦時代における「第3世界」諸国の秩序維持活動などとの関係から、開発現象をその学問領域において扱うことや、開発行為に直接的、間接的に関わる開発人類学をどこか白眼視する傾向にあった。この10年ほどの間にそのような学問的状況はほとんどみられなくなったが、当時は確実にそうであった。

総合研究大学院大学は、一般の大学における人類学の講座では扱いにくいテーマを志す「奇妙な」学生に対しても、その教官陣容の豊富さ、関心領域の広さなどから門戸を広げてくれる柔軟性がみられるように感じる。総合研究大学院大学の「奇妙さ」を、ハード、ソフト両面にわたり学生という立場からうまく利用することができれば、そこから得るものは決して少なくないはずである。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する



国立民族学博物館長　松園万亀雄

民族学＝文化人類学は世界の諸民族の文化や社会を研究する学問です。いまは世界各地で人、モノ、情報が急激な勢いで飛び交い、移動している時代です。かつては当然とされていた社会の秩序がこわされ、混乱と葛藤が世界を覆っています。民族学を研究する者にとっては、挑戦的な課題がつぎつぎに突きつけられているといわなければなりません。それだけに人間と社会についての斬新な着想をつむぎだすための、幅広い視野と豊かな想像力が私たちには求められています。

国立民族学博物館には、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置されています。博士課程後期3年に在籍しようとする学生は、近い将来、大学や研究機関で教育研究にたずさわり、また民族学＝文化人類学の知識を応用して、日本や世界の人々の生活に実践的にかかわる仕事に就くことになります。

国立民族学博物館は優秀な教授陣を擁しており、また文献資料その他の研究環境の面でもわが国随一である、と私は自信をもっていうことができます。入学されるみなさんは在学中に学位論文を書きあげ、一人前の研究者として社会に飛び立ってほしいものです。

合格者出身大学院機関別累計

平成	元年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	計
国立	3	4(1)	4(1)	7(3)	4	4	1	1	6(2)	4(1)	4	5	5	4	5	61(8)
公立	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
私立	0	1	1	2	1	0	4(1)	5	0	2	2	(1)	3	1	1	23(1) (1)
海外	1	2(1)	1	0	1	2	1	0	0	0	1	1	0	2(1)	1	13(1) (1)
合計	4	7(2)	6(1)	9(3)	6	6	6(1)	6	6(2)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	98(10) (2)

合格者出身大学院地方別累計

平成	元年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	計
関東	1	2(1)	3(1)	5(2)	2	3	4	4	4(2)	3(1)	4	2(1)	3	3	2	45(7) (1)
中部	0	1	0	1	1	1	0	2	0	2	0	0	0	1	1	10
近畿	1	2	2	2(1)	1	0	1(1)	0	1	1	2	3	4	2	3	25(2)
中国	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4
九州	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
海外	1	2(1)	1	0	1	2	1	0	0	0	1	1	0	2(1)	1	13(1) (1)
合計	4	7(2)	6(1)	9(3)	6	6	6(1)	6	6(2)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	98(10) (2)

※（ ）は入学辞退者で内数。（ ）は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身（1名）者は学部卒で資格認定による。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み

昭和63年10月　総合研究大学院大学開学【全学】
平成元年 4月　文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）設置、学生受入、授業開始
8月　サマースクール開催（国際シンポジウムと交互に隔年開催）【全学】
平成 4年 3月　比較文化学専攻において、課程博士による初めての学位授与
4月　文化科学研究科に国際日本文化研究センターを基盤機関とする国際日本研究専攻設置、学生受入
平成 5年10月　大学院研究棟竣工、大学院研究室開設
平成 6年 3月　比較文化学専攻において、論文博士による初めての学位授与
9月　地域文化学専攻において、課程博士による初めての学位授与
平成 7年 2月　葉山キャンパス本部共通棟が竣工、この年から入学式を同キャンパスにて総研大全体で挙行【全学】
平成 8年 4月　学生セミナーを文化科学研究科が担当【全学】
平成 9年 3月　地域文化学専攻において、論文博士による初めての学位授与
9月　課程博士の学位論文審査における予備審査を廃止
平成11年 4月　先導科学研究科学生受入（地域文化学・比較文化学両専攻併任教官の一部、先導科学研究科の併任に）【全学】
文化科学研究科に国立歴史民俗博物館を基盤機関とする日本歴史研究専攻設置、学生受入
11月　東京で大学説明会を実施（平成12、13年度は6月に実施）【全学】
平成12年 5月　フィールドワークについて教官と学生が懇談する「木曜喫茶室」開始
10月　専門の相談員によるメンタルヘルスに関する相談室開設（月1回）
「大学院教育に関する公開フォーラム」及び「オープンキャンパス」開催
平成13年 4月　地域文化学・比較文化学両専攻の同窓生ネットワーク発足
文化科学研究科にメディア教育開発センターを基盤機関とするメディア社会文化専攻設置、学生受入
平成15年 4月　文化科学研究科に国文学研究資料館を基盤機関とする日本文学研究専攻設置、学生受入

入学者選抜試験倍率

平成	元年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	計
志願者数	24	26	19	37	34	25	23	40	27	22	17	23	31	23	28	399
合格者数	4	7(2)	6(1)	9(3)	6	6	6(1)	6	6(2)	6(1)	7	6	8	8	7	98(10)
倍率	6.0	3.7	3.2	4.1	5.7	4.2	3.8	6.7	4.5	3.7	2.4	3.8	3.9	2.9	4.0	4.1

※（ ）は入学辞退者で内数。

年度別学位記授与者数

	地域文化学専攻		比較文化学専攻		計
	課程博士	論文博士	課程博士	論文博士	
平成 3 年度			1		1
平成 5 年度	-		1	1	2
平成 6 年度	2		1		3
平成 7 年度	2		1		3
平成 8 年度		3			3
平成 9 年度	3		4		7
平成10年度	4	2			6
平成12年度	2		2	1	5
平成13年度	2	1	1	1	5
平成14年度	1	2		1	4
計	16	8	11	4	39

国立民族学博物館の概要



国立民族学博物館は、昭和49年6月に文部省所轄の大学共同利用機関として創設され、学術研究の発展及び教育活動の推進に資するため、世界の諸民族に関する資料を収集・保管し、もって公衆の観覧に供するとともに、民族学に関する調査・研究を行うことを目的としている。この博物館に所属する研究者は、民族学（文化人類学）、言語学、民族技術、民族芸術、コンピュータ民族学などの専門家からなっている。

本博物館は、全国の大学の教員をはじめ民族学の研究者が利用する共同利用機関であり、全国の大学を中心とする研究者の協力のもとにさまざまな課題についての共同研究が行われ、民族学及び関連諸科学に関する研究センターの機能を果たしている。また、標本資料、社会と文化に関する映像音響資料（写真、映像フィルム、ビデオテープ、音声言語、民族音楽）、文献図書資料等を計画的・体系的に収集・整理・保存して、全国の研究者の利用に供するセンターとしての役割もになっている。

本博物館における研究にかかわる組織としては、研究部と情報管理施設がおかれている。研究部は、従来地域別に分けられた4研究部と通文化的研究を行う1研究部から成り立っていたが、平成10年4月に改組され、民族社会研究部、民族文化研究部、博物館民族学研究部、先端民族学研究部というディシプリンによる4研究部と、研究情報の収集・発信および新しい研究分野の開拓等を目指す民族学研究開発センターで構成されている。研究部では、客員教官を含め約100名の研究者が研究に従事している。情報管理施設では、研究者が収集した世界の諸民族の社会と文化に関する資料を整理・保管して、利用に供するとともに、諸情報の管理・検索システムの開発研究を行っている。本博物館には、高水準の情報処理装置が配備されている。

地域研究企画交流センターは、総合的な地域研究の推進を図るため平成6年6月に関連研究機関のネットワークの中心として機能すべく国立民族学博物館内に設置され、人文科学、社会科学、自然科学の諸分野を含めた世界の全ての地域を対象とした地域間比較研究を行っている。

所蔵民族学資料

（平成15年4月1日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	165,250点	レコード・コンパクトディスク	46,025点	日本語図書	218,794冊
国内資料	88,642点	テープ（言語）	7,965点	外国語図書	373,422冊
計	253,892点	テープ（音楽）	8,371点	計	592,216冊
		フィルム（16ミリ）	3,032点		
		ビデオテープ・レーザーディスク	4,545点	日本語雑誌	9,052種
		計	69,938点	外国語雑誌	6,006種
				計	15,058種

総合研究大学院大学について



学長　小平桂一

総合研究大学院大学、略して「総研大」は、基礎学術分野の総合的発展と高度な知的市民の育成を目指して、大学院学生の教育を行うために、14年前〔1988年〕に設立されました。現在では、神奈川県の葉山町に大学本部を持ち、各地に置かれた16の国立学術研究機関等を基盤として、大学院生を分散配置し、ユニークな博士課程（後期）教育を展開しています。

これらの基盤機関は、人文系から自然科学系にわたる、各専門分野に設置された「大学共同利用機関」で、一大学では維持・運用できない大型最新の装置・設備・システムによる研究や、広範・大量な資料に基づく長期的研究、従来の大学講座の枠を超えた学問分野の研究などが行われています。全国の大学研究者や大学院生が、共同で利用し研究を進めているので、異なる地域や専門領域の間の交流や協力が促進され、新しい研究の芽や学際領域が伸び易い、優れた環境にあります。また、わが国を代表する大型・最新の設備や大量の基礎資料を備えているので、当該分野の国際的窓口となって、多くの国際共同研究も行われており、大学院生にも、早くから国際性を身につける種々の機会を提供しています。これから、大学・大学院教育が大きく変わろうとしているとき、わが国の高等学術研究・教育の要の一環として、これら「大学共同利用機関」の役割は、一層その重要性を増すものと確信します。

二十一世紀の国際社会では、各学問分野の深化と共に、多様な学問分野を総合する広い視野と知性が要求されることは、間違いありません。とりわけ、人文系学問の総合的推進や自然科学との融合が、重要な課題となることでしょう。そこに、異なる専門分野の諸基盤機関にまたがって設立され、「総合」と「分散」の両機能を果たすべき「総研大」の意義と使命があります。「総研大」教官の多くは、基盤機関の教官が併任していますが、学生教育に当たっては、専門研究領域・分野を超えて、「総研大」教官としての使命を自覚するよう願っています。また、進学を希望する学生も、単に専門分野で学位を取得しようとするだけでなく、「総研大」にふさわしい考え方や生き方を、少しでも学ぼうという意欲を持って臨むよう、大いに期待しています。

建学にあたられた長倉三郎先生、基礎を築き上げられた廣田栄治先生を始めとする諸先達の努力により、今や「総研大」は「青年期」に入ろうとしています。折も折り、世界的な潮流の中でわが国も、国立大学の制度改革を断行しようとしています。多くの大学や研究所が、社会の短期的・直接的な要請に応えて教育・研究活動を行おうとするなかで、わが国の将来に欠くことのできない、長期的・基礎的な学術分野を理解し、あるいは担い、あるいは新しい道を切り開いていこうとする、高度な知的市民を育成することは、必須の国家的課題です。大学共同利用機関等を基盤とする「総研大」こそは、広範囲にわたる教官団の協力の下に、工夫を凝らして、「新しい大学院生」を育てていかなければなりません。基盤機関が地域的に分散している点は、ともすると、「総研大」の働きにとって負担になりがちですが、それを乗り越え活かす工夫も、していきたいと思っています。

関係各位には、引き続きご理解とご協力を賜りたく、ここに改めてお願い申し上げる次第です。

総合研究大学院大学の教職員

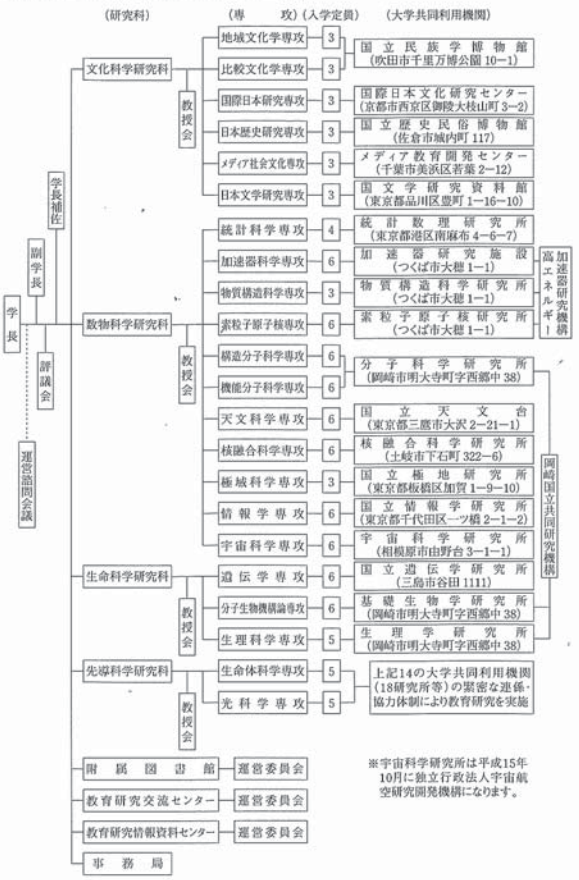
現員（平成15年4月1日現在）

区分	学長	副学長	教授	助教授	助手	事務官	技官	計
学長	1							1
副学長		1						1
事務局						40	1	41
文化学研究科			73	51				124
数物科学研究科			171	120	166			457
生命科学研究科			48	14	33			95
先導科学研究科			11	20	13			44
教育研究交流センター			3	1				4
教育研究情報資料センター			1					1
計	1	1	307	206	212	40	1	768

役職員

学長		小平桂一
副学長		高畑尚之
学長補佐（評価担当）		湯川哲之
文化科学研究科	研究科長	鈴木貞美
	地域文化学専攻長	朝倉敏夫
	比較文化学専攻長	庄司博史
	国際日本研究専攻長	宇野隆夫
	日本歴史研究専攻長	新谷尚紀
	メディア社会文化専攻長	黒須正明
	日本文学研究専攻長	安永尚志
数物科学研究科	研究科長	家正則
	副研究科長	岩田正義
		西生武彦
	統計科学専攻長	麻北四郎
	加速器科学専攻長	川渥幸秀
	物質構造科学専攻長	神谷篤
	素粒子原子核専攻長	小岡林誠二
	構造分子科学専攻長	苹幸男
	機能分子科学専攻長	小林速男
	天文科学専攻長	海部宣修
	核融合科学専攻長	本島亞
	極域科学専攻長	波多興
	情報学専攻長	末松安晴
	宇宙科学専攻長	鶴田浩一郎
生命科学研究科	研究科長	西村幹夫
	遺伝学専攻長	堀田凱樹
	分子生物機構論専攻長	勝木元也
	生理科学専攻長	水野昇
先導科学研究科	研究科長	松本泰典
	生命体科学専攻長	笠原正典
	光科学専攻長	井元信之
附属図書館	附属図書長	及川昭文
教育研究交流センター	センター長	平田光司
教育研究情報資料センター	センター長	湯川哲之
事務局	事務局長	小山五郎
	総務課長	佐藤博之
	学務課長	佐藤仁

総合研究大学院大学の組織



総合研究大学院大学の特色

■学部を持たない大学院だけの大学 ——いわゆる独立大学院大学——

■大学院の課程は、後期3年の博士課程

■教育研究は、14の大学共同利用機関との緊密な連係・協力の下に実施

①教官組織は、各研究機関の教官を本学に併任して編成する。

②教育研究の大部分は、各研究機関の施設・設備を用いて実施する。

③各研究機関で行われている高度の研究活動に密着した教育・研究指導により、専門分野についての深い専門性をかん養する。

④大学共同利用機関の開かれた機能を生かし、各研究科・専攻間、国の内外の大学・大学院との相互交流を深めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際性を培う。

国立学校設置法（抄）

（学校教育法第68条に定める国立大学）

第3条の3　学校教育法第68条に定める国立大学として、次に掲げる大学を置く。

……

総合研究大学院大学

2 ……

3　総合研究大学院大学は、第9条の2に定める大学共同利用機関で政令で定めるものとの緊密な連係及び協力の下に教育研究を行うものとする。

※備　考　学校教育法

第68条　教育研究上特別の必要がある場合においては、第53条の規定にかかわらず、学部を置くことなく大学院を置くものを大学とすることができる。

第53条　大学には、学部を置くことを常例とする。ただし、当該大学の教育研究上の目的を達成するため有益かつ適切である場合においては、学部以外の教育研究上の基本となる組織を置くことができる。

出願資格等

（1）出願資格※

次のいずれかに該当する者とします。

①修士の学位を有する者又は平成16年3月までに取得する見込みがある者

②外国において、修士の学位に相当する学位を授与された者又は平成16年3月までに授与される見込みがある者

③外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位に相当する学位を授与された者又は平成16年3月までに授与される見込みがある者

④大学を卒業し、大学、研究所等において、平成16年3月までに2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

⑤外国において学校教育における16年の課程を修了した後、又は外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、平成16年3月までに2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

⑥本学において個別の入学資格審査により修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で平成16年4月1日において24歳に達しているもの

⑦その他本学において修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

（2）選抜方法※

選抜は書類選考、修士論文又はそれに代わるものの審査及び面接により行う。

※詳細は募集要項を請求の上、確認して下さい。

募集要項請求先

募集要項の請求を郵送で行う場合は、封筒の表に「学生募集要項請求（文化科学研究科地域文化学専攻・比較文化学専攻）」と朱書し、裏には住所、氏名、郵便番号を記載するとともに返信用封筒（角形2号・縦33.2㎝×横24㎝、受信者の住所、氏名、郵便番号を明記し、390円切手を貼り付けたもの）を同封し、下記宛に行うこと。

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
総合研究大学院大学事務局学務課学生厚生係

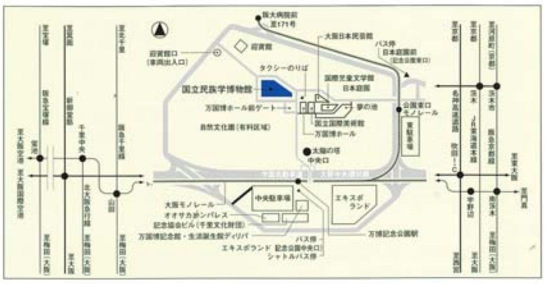


葉山キャンパス

問い合わせ先

☆国立民族学博物館　管理部研究協力課研究協力係

〒565・8511　大阪府吹田市千里万博公園10番1号
電　話　06−6876−2151　（代表）
　　　　06−6878−8236　（専攻担当）
ＦＡＸ　06−6876−2195
ＵＲＬ　http://www.minpaku.ac.jp/　　E-mail　souken@idc.minpaku.ac.jp



- ●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅よりバスで日本庭園前下車徒歩15分
- ●大阪モノレールで万博記念公園駅下車徒歩15分（ただし、公園中央口経由自然文化園は有料です）
- ●大阪モノレールで公園東口駅下車、無料地域を通って徒歩約13分
- ●タクシーは民博職員通用口まで入ることができます。

☆総合研究大学院大学　事務局

〒240・0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電　話　046−858−1500　（代表）
ＦＡＸ　046−858−1541
ＵＲＬ　http://www.soken.ac.jp/





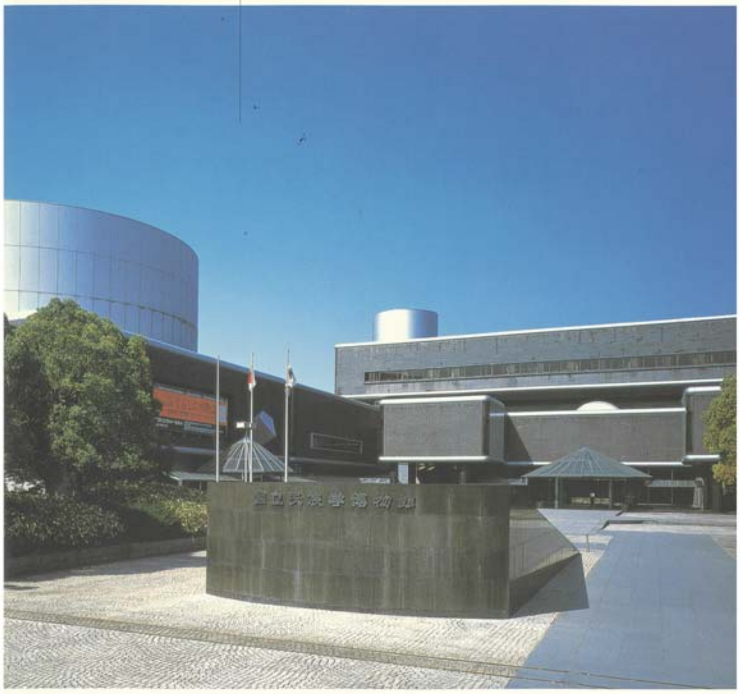
'04

総合研究大学院大学
文化科学研究科

The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies

地域文化学専攻
比較文化学専攻
概要

Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies



目　次

文化科学研究科について　1

専攻の概要　2
地域文化学専攻　2
比較文化学専攻　3
地域文化学専攻授業概要　4
比較文化学専攻授業概要　6
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員　8
担当教員の専門分野　8
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法と目的　9
フィールドから見る世界〜学生の研究フィールドマップ〜　10
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生　10
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位　12
学位論文リスト　12
地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する　14
国立民族学博物館の概要　15
地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み　16
年度別学位記授与者数　16
入学者選抜試験倍率　16
合格者出身大学院機関別累計　16
合格者出身大学院地方別累計　16

総合研究大学院大学について　17
ごあいさつ　17
創設の趣旨・目的　18
総合研究大学院大学の特徴　18
大学の組織　19
出願資格等　20
募集要項請求先　21

問い合わせ先



文化科学研究科について

研究科長　鈴木　貞美

総合研究大学院大学は、学部をもたず大学院だけを置く国立大学として、昭和63年10月1日に開学した我が国最初の大学院大学である。文化科学研究科は、総合研究大学院大学の一研究科であり、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻の2専攻により、平成元年4月に設置され、平成4年4月には、国際日本文化研究センターを基盤として国際日本研究専攻が、平成11年4月には、国立歴史民俗博物館を基盤として日本歴史研究専攻が、平成13年4月にはメディア教育開発センターを基盤としてメディア社会文化専攻が、平成15年4月には、国文学研究資料館を基盤とする日本文学研究専攻が、それぞれ増設された。

国立民族学博物館は、日本における民族学・文化人類学の研究センターとしての機能をもち、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究を多角的に推進している。近年の国際化・国際交流の著しい進展と活発化、その一方での民族紛争の多発など、研究課題の多様化・グローバル化とこれに伴う研究分野の拡大は、民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めつつある。

国際日本文化研究センターは、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力を行う機能をもつ。近年国際化の中で日本に対する関心が高まっており、「日本」に関する総合的な研究が世界的な規模で進められている。

国立歴史民俗博物館は、文献資料・民俗資料・考古資料を学際的に研究し、世界史的な広い視野からの日本歴史理解へのアプローチを開拓するとともに、国際的な日本歴史研究を推進している。

メディア教育開発センターは、高等教育におけるマルチメディアの利用を促進するための我が国における中核的機関であり、多様なメディアを高度に利用して行う教育の内容、方法等を研究開発し、その成果を提供することを目的として、先導的な研究を行っている。

国文学研究資料館は、日本全国に散在する前近代1200年間の文献資料を調査研究し、その収集、整理、保存にあたり、日本文学研究者の利用に供している。

この五つの研究機関を基盤として、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化に関して地域的・個別的に対象を設定し、教育研究を行う「地域文化学専攻」と、そのような諸民族の社会・技術・宗教・芸術等について通文化的手法に基づき教育研究を行う「比較文化学専攻」、国際的な視野で日本の文化と文明について教育研究を行う「国際日本研究専攻」、および文献史学の枠にとらわれず、広く歴史学・民俗学・考古学などと関連諸科学との共同により、総合的な日本歴史解明を目指した教育研究を行う「日本歴史研究専攻」、メディアと文化、社会、人間の相互作用について、学際的かつ総合的な教育を行う「メディア社会文化専攻」、そして、文化科学の視点から文学資源の実態、作品の形成と享受の動態、その制度・環境などを総合的に研究する「日本文学研究専攻」の6専攻を置き、国際的・学際的な教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目指している。

1

専攻の概要

地域文化学専攻



専攻長 印東 道子

アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としている。本専攻においては、現地調査及びこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度の研究者の養成を行う。

教育研究指導分野の概要

大講座	教育研究指導分野	概要
アジア地域文化学	アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
	アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
ヨーロッパ・アフリカ地域文化学	ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
	アフリカ地域文化学	アフリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アメリカ・オセアニア地域文化学	アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
	オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
基礎科目		
共通		
特別講義		

比較文化学専攻



専攻長 吉田 憲司

民族社会、民族技術、民族宗教、民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としている。諸民族の文化の通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指す。本専攻においては、従来の民族学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度の研究者の養成を行う。

教育研究指導分野の概要

大講座	教育研究指導分野	概要
民族社会・宗教学	民族社会	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治集団、法規範、所有と分配等に関する通文化的・理論的研究
	民族宗教	諸民族の祭祀、神話、宇宙観等に関する通文化的・理論的研究
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究
民族言語・芸術学	民族言語	諸民族の言語、文字、伝達等に関する通文化的・理論的研究
	民族芸術	諸民族の音楽、芸能、文芸、造形等に関する通文化的・理論的研究
基礎科目		
共通		
特別講義		



ゼミの様子



院生室の様子

地域文化学専攻授業概要（平成16年度）

	授業科目	授業科目の内容	担当教員	
アジア地域文化Ⅰ	東アジア文化研究Ⅰ（日本）	日本の社会と文化に関する講述	教授	大塚 和義
	東アジア文化研究Ⅱ（朝鮮半島）	朝鮮半島の社会と文化に関する講述	教授	朝倉 敏夫
	東アジア文化研究Ⅲ（中国）	中国に居住する諸民族の社会と文化の特性についての講述	教授	塚田 誠之
			助教授	横山 廣子
	東アジア文化研究特論Ⅰ	日本及び周辺諸民族の先住民文化に関する講述	教授	大塚 和義
	東アジア文化研究特論Ⅱ	中国 東南アジアにおける社会変動に関する講述	助教授	横山 廣子
	東アジア文化研究特論Ⅲ	中国南部諸民族の歴史民族学的研究に関する講述	教授	塚田 誠之
	東アジア文化研究演習Ⅰ	東アジアにおける生活文化の研究に関する演習	教授	朝倉 敏夫
	東アジア文化研究演習Ⅱ	中国西南部におけるエスニシティに関する演習	助教授	横山 廣子
	東アジア文化研究演習Ⅲ	中国南部における移住と文化の動態に関する演習	教授	塚田 誠之
	中央アジア文化研究	中央アジア地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教授	松原 正毅
			教授	小長谷有紀
	北アジア文化研究	北アジアの伝統的生業に関する講述	教授	佐々木史郎
	中央・北アジア文化研究特論Ⅰ	トルコ及びモンゴルの社会と文化に関する講述	教授	松原 正毅
	中央・北アジア文化研究特論Ⅱ	北アジア社会の生業を特徴づける狩猟・漁撈採集民の現状に関する講述	教授	佐々木史郎
	中央・北アジア文化研究演習Ⅰ	中央アジア諸民族の遊牧と農耕の文化に関する演習	教授	小長谷有紀
	中央・北アジア文化研究演習Ⅱ	北アジアのシャマニズムの世界観に関する演習	教授	佐々木史郎
アジア地域文化Ⅱ	東南アジア文化研究Ⅰ（大陸部）	東南アジア大陸部に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教授	田村 克己
			助教授	野林 厚志
	東南アジア文化研究Ⅱ（島嶼部）	東南アジア島嶼部に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授	佐藤 浩司
	東南アジア文化研究特論Ⅰ	東南アジアの宗教と政治に関する講述	教授	田村 克己
			助教授	野林 厚志
	東南アジア文化研究特論Ⅱ	東南アジアの建築人類学に関する講述	助教授	佐藤 浩司
	東南アジア文化研究演習Ⅰ	東南アジア大陸部の仏教信仰に関する演習	教授	田村 克己
	東南アジア文化研究演習Ⅱ	東南アジアの生活財に関する演習	助教授	佐藤 浩司
	南アジア文化研究	南アジアに居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授	三尾 稔
	南アジア文化研究特論	ヒマラヤ地域、とくにブータン以東に居住する諸民族について講述する		
	南アジア文化研究演習	インドにおける伝統文化、宗教とナショナリズムについての諸問題について演習する	助教授	三尾 稔
	西アジア文化研究	中東地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教授	臼杵 陽
	西アジア文化研究特論	アラブ世界の民族・宗派関係に関する講述	教授	臼杵 陽
	西アジア文化研究演習	中東・イスラーム文化に関する演習	教授	臼杵 陽
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ文化研究Ⅰ（東ヨーロッパ）	東ヨーロッパ地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授	新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究Ⅱ（中部ヨーロッパ）	中部ヨーロッパ地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授	森 明子
	ヨーロッパ文化研究Ⅲ（南ヨーロッパ）	南ヨーロッパ地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授	宇田川妙子
	ヨーロッパ文化研究特論Ⅰ	バルカン諸民族の社会と文化に関する講述	助教授	新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究特論Ⅱ	ドイツ・オーストリアの社会と文化に関する講述	助教授	森 明子
	ヨーロッパ文化研究特論Ⅲ	地中海周辺の社会と文化に関する講述	助教授	宇田川妙子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	ヨーロッパ東部の文化研究に関する演習	助教授	新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ	中部ヨーロッパの生活文化研究に関する演習	助教授	森 明子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅲ	ヨーロッパ南部の文化研究に関する演習	助教授	宇田川妙子

	授業科目	授業科目の内容	担当教員	
アフリカ地域文化	アフリカ文化研究Ⅰ（東部）	アフリカ東部地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述		
	アフリカ文化研究Ⅱ（中南部）	アフリカ中南部地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述		
	アフリカ文化研究Ⅲ（西部）	アフリカ西部地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教授	竹沢尚一郎
	アフリカ文化研究特論Ⅰ	国家および無国家社会の代表的民族誌に拠って、アフリカ東部地域の社会と文化について講述する		
	アフリカ文化研究特論Ⅱ	さまざまなメディアによるアフリカ文化の表象のあり方を検討し、その問題点と可能性を考察する		
	アフリカ文化研究特論Ⅲ	アフリカの歴史と文化に関する講述	教授	竹沢尚一郎
	アフリカ文化研究演習Ⅰ	アフリカ諸民族が営む農耕・牧畜・漁撈・狩猟・採集など多様な生業形態と、人間と環境との関係についての演習		
	アフリカ文化研究演習Ⅱ	アフリカ諸民族の文化の動態に関する演習		
	アフリカ文化研究演習Ⅲ	アフリカ諸民族の儀礼と宗教に関する演習	教授	竹沢尚一郎
アメリカ地域文化	アメリカ文化研究Ⅰ（北米）	北米地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授	寺田 吉孝
	アメリカ文化研究Ⅱ（中米）	中米地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教授	八杉 佳穂
	アメリカ文化研究Ⅲ（南米）	南米地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教授	山本 紀夫
	アメリカ文化研究特論Ⅰ	アメリカ合衆国の多文化主義と政治の関係についての講述		
	アメリカ文化研究特論Ⅱ	中米諸民族の歴史と文化に関する講述	教授	八杉 佳穂
	アメリカ文化研究特論Ⅲ	南米諸民族の歴史と文化に関する講述	教授	山本 紀夫
	アメリカ文化研究演習Ⅰ	北米における都市研究の諸問題に関する演習	助教授	寺田 吉孝
	アメリカ文化研究演習Ⅱ	中米諸民族の言語文化に関する演習	教授	八杉 佳穂
	アメリカ文化研究演習Ⅲ	中南米における都市研究の諸問題に関する演習		
オセアニア地域文化	オセアニア文化研究Ⅰ	オーストラリアに居住する先住民の社会と文化に関する講述	教授	松山 利夫
	オセアニア文化研究Ⅱ（ニューギニア）	ニューギニアの社会と文化に関する講述		
	オセアニア文化研究Ⅲ（島嶼部）	オセアニア島嶼部に生活する人々の社会と文化に関する講述	教授	印東 道子
	オセアニア文化研究特論Ⅰ	グローカリズムの観点における、先住民文化の情報学的・メディア論的講述	教授	松山 利夫
	オセアニア文化研究特論Ⅱ	ニューギニアの自然災害と文化についての講述	助教授	林 勲男
	オセアニア文化研究特論Ⅲ	オセアニアの伝統的土器文化についての講述	教授	印東 道子
	オセアニア文化研究演習Ⅰ	オーストラリア・アボリジニの儀礼・宗教に関する演習	教授	松山 利夫
	オセアニア文化研究演習Ⅱ	オセアニア諸民族文化の動態に関する演習	助教授	林 勲男
	オセアニア文化研究演習Ⅲ	オセアニア先史社会における環境適応に関する演習	教授	印東 道子
基礎科目	地域文化学基礎演習Ⅰ	民族学・文化人類学の先端的理論を講述し、各地域における実情の検証とともにその理論を批判的に研究する	助教授	宇田川妙子
	地域文化学基礎演習Ⅱ	地域文化を中心とする民族学・文化人類学研究の理論的・方法論的枠組を明確にする研究をゼミナール形式で行う	教授	印東 道子
共通	地域文化学特論Ⅰ	地域文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての講述		
	地域文化学特論Ⅱ	地域文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての講述		
	地域文化学演習Ⅰ	地域文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての演習		
	地域文化学演習Ⅱ	地域文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての演習		
特別講義	サマースクールⅠ～Ⅲ	講師による特別講義		
	学生セミナー	学生相互及び教員とのセミナー		
	湘南レクチャーⅠ～Ⅵ	講師による特別講義		

※年度によって開講科目が異なる

比較文化学専攻授業概要（平成16年度）

	授業科目	授業科目の内容	担当教員	
民族社会	民族社会研究Ⅰ（家族・親族）	世界の諸民族の家族・親族・婚姻などについての講述	教　授	杉本　良男
	民族社会研究Ⅱ（政治）	世界の諸民族における政治形態とその動態についての講述	教　授	押川　文子
	民族社会研究Ⅲ（法）	世界の諸民族の法規範・慣習法などについての講述	助教授	岸上　伸啓
	民族社会研究Ⅳ（社会構造）	諸民族の社会構造を、その文化構造や経済的仕組みなどとの関わりにおいて論じる	助教授	韓　敏
	民族社会研究Ⅴ（社会生態）	世界の諸民族の市場・流通・交換などの社会形態についての講述	教　授	出口　正之
	民族社会研究特論Ⅰ	多民族社会の中国における社会構造の比較研究に関する講述	助教授	韓　敏
	民族社会研究特論Ⅱ	北方先住諸民族の伝統社会の比較研究に関する講述	助教授	岸上　伸啓
	民族社会研究特論Ⅲ	諸民族社会とNPO・NGOの比較研究に関する講述	教　授	出口　正之
	民族社会研究演習Ⅰ	中国における国民文化・地域文化・民族文化の再編成についての演習	助教授	韓　敏
	民族社会研究演習Ⅱ	現代南アジアの社会論：教育を中心に	教　授	押川　文子
	民族社会研究演習Ⅲ	世界の諸地域における植民地主義とナショナリズムの問題について比較検討する	教　授	杉本　良男
民族宗教	民族宗教研究Ⅰ（宗教行動）	世界の諸民族の祭祀や宗教運動などの宗教行動について、日本の祭や新宗教運動との比較を意図しながら講述する	教　授	中牧　弘允
	民族宗教研究Ⅱ（神話）	世界の諸民族の神話・神観念などについての講述		
	民族宗教研究Ⅲ（儀礼）	儀礼と祭りの構造・過程・意味について講述する	教　授	野村　雅一
	民族宗教研究Ⅳ（世界観）	世界の諸民族の宇宙観・聖俗観などについての講述	教　授	石森　秀三
	民族宗教研究特論Ⅰ	アメリカやブラジルなどにおける日本宗教を民族宗教としてとらえその展開・受容・変容に関して講述する	教　授	中牧　弘允
	民族宗教研究特論Ⅱ	ミクロネシア諸民族の宇宙観の比較研究に関する講述	教　授	石森　秀三
	民族宗教研究特論Ⅲ	オセアニアにおける伝統宗教の変容と外来宗教の受容についての講述		
	民族宗教研究演習Ⅰ	宗教と観光のホモロジー（相同）など、宗教観光に関する演習	教　授	石森　秀三
	民族宗教研究演習Ⅱ	地中海地域諸民族の世界観とその歴史的変遷に関する演習	教　授	野村　雅一
	民族宗教研究演習Ⅲ	アマゾン地域を中心とする南アメリカを対象に、諸民族の宗教行動と外来宗教の影響に関する比較研究を行う。	教　授	中牧　弘允
民族技術	民族技術研究Ⅰ（生産技術）	世界の諸民族における農耕技術などについての講述	助教授	關　雄二
	民族技術研究Ⅱ（保存技術）	技術と太平洋諸島への人の移住	助教授	マシウス、ピーター
	民族技術研究Ⅲ（製作技術）	世界の諸民族の生産や生活用具などにかかわる製作技術についての講述	教　授	吉本　忍
	民族技術研究Ⅳ（素材調査）	世界の諸民族の生活用具にかかわる技法や素材などの自然科学的調査法の講述	助教授	園田　直子
	民族技術研究Ⅴ（生活技術）	世界の諸民族の生活技術を対象に、技術の保持、および創意の背景となる文化の態様についての講述	教　授	近藤　雅樹
	民族技術研究特論Ⅰ	南アメリカの先史社会の生業技術に関する講述	助教授	關　雄二
	民族技術研究特論Ⅱ	インドネシア染織技術の比較研究に関する講述	教　授	吉本　忍
	民族技術研究特論Ⅲ	日本の近・現代における物質文化を流通と形態比較の視点から講述する	教　授	近藤　雅樹
	民族技術研究演習Ⅰ	植物のドメスティケーションについての植物学的、民族学的、考古学的アプローチ	助教授	マシウス、ピーター
	民族技術研究演習Ⅱ	伝統的ならびに近現代の民族絵画における技法と素材の比較研究	助教授	園田　直子
	民族技術研究演習Ⅲ	アンデスの環境利用と文明形成に関する演習	助教授	關　雄二

	授業科目	授業科目の内容	担当教員	
民族言語	民族言語研究Ⅰ（言語理論）	言語人類学の諸問題、研究対象を一般言語学に言及しつつ対比的に概説する	教　授	庄司　博史
	民族言語研究Ⅱ（言語論）	諸論のあり方が言語形式に現れる幾つかのトピックについて研究論文の講読と批判を行う	教　授	長野　泰彦
	民族言語研究Ⅲ（比較言語）	世界の諸民族の言語と非言語的表現などの比較についての講述	助教授	西尾　哲夫
	民族言語研究Ⅳ（文学）	世界の諸民族の文学と口頭伝承などの比較についての講述		
	民族言語研究特論Ⅰ	類型学的観点からウラル諸語と近隣諸語を比較する	教　授	庄司　博史
	民族言語研究特論Ⅱ	チベット・ビルマ系諸語の歴史を再構するための方法とその結果についての講述を行う	教　授	長野　泰彦
	民族言語研究特論Ⅲ	セム系諸語の比較研究に関する講述	助教授	西尾　哲夫
	民族言語研究演習Ⅰ	言語の類型論的方法に関する演習	助教授	西尾　哲夫
	民族言語研究演習Ⅱ	言語の実地調査法、記述言語学の方法、言語事実の解釈方法等について講述し、言語データの扱い方をインフォーマントを使って演習する	教　授	長野　泰彦
	民族言語研究演習Ⅲ	少数言語の実態、言語運動、言語政策の調査分析について演習する	教　授	庄司　博史
	言語情報研究	世界の諸民族の文字使用についてその統計的性質、テキストの検索インデックスの手法などについて講述する	教　授	久保　正敏
	言語情報研究特論	コンピュータ民族学の手法について詳述し、比較民族学を進めるために留意すべき問題点を講述する	教　授	久保　正敏
	言語情報研究演習（情報処理）	コンピュータを用いた民族資料情報の管理・分析・活用方法について演習を行う	助教授	山本　泰則
民族芸術	民族芸術研究Ⅰ（比較音楽）	世界の諸民族の音楽・芸術文化の比較についての講述	助教授	笹原　亮二
	民族芸術研究Ⅱ（映像民族誌）	世界の諸民族の映像とのかかわりに関する比較構造研究	教　授	大森　康宏
	民族芸術研究Ⅲ（民族美術）	世界の諸民族の美術形態や構造、機能などについての講述	教　授	吉田　憲司
	民族芸術研究Ⅳ（民族文芸）	世界の諸民族の口承文芸を通文化的な視点より関連諸分野をも視野に入れ考察し講述する	教　授	江口　一久
	民族芸術研究Ⅴ（民族芸能）	世界の芸術をめぐる表象の政治性、権力性について講述及び討論する	助教授	川口　幸也
	民族芸術研究特論Ⅰ	日本の民族芸能に関する講述	助教授	笹原　亮二
	民族芸術研究特論Ⅱ	西欧社会における映画、映像の比較研究に関する講述	教　授	大森　康宏
	民族芸術研究特論Ⅲ	諸民族の造形についての表象様式について批判的に検討する	教　授	吉田　憲司
	民族芸術研究演習Ⅰ	中央アフリカにおける口承文芸の資料を用いて分析、比較方法を講述する。口承文芸資料の扱い方をトレーニングする	教　授	江口　一久
	民族芸術研究演習Ⅱ	映像音響の技術的研究と実技演習	教　授	大森　康宏
	民族芸術研究演習Ⅲ	芸術文化の表現の諸問題に関する演習	助教授	川口　幸也
基礎科目	比較文化学基礎演習Ⅰ	民族学・文化人類学の先端的理論を講述し、通文化的研究における実情の検証とともに、その理論を批判的に研究する	教　授	中牧　弘允
	比較文化学基礎演習Ⅱ	比較文化を中心とする民族学・文化人類学研究の理論的・方法論的枠組を明確にする研究をゼミナール形式で行う	助教授	西尾　哲夫
共通	比較文化学特論Ⅰ	比較文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての講述	教　授	野村　雅一
	比較文化学特論Ⅱ	比較文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての講述		
	比較文化学演習Ⅰ	比較文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての演習		
	比較文化学演習Ⅱ	比較文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての演習		
特別講義	サマースクールⅠ～Ⅲ	講師による特別講義		
	学生セミナー	学生相互及び教員とのセミナー		
	湘南レクチャーⅠ～Ⅵ	講師による特別講義		

※年度によって開講科目が異なる

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員

現員（平成16年4月1日現在）

区　分	教　授	助教授	計	備　考
地域文化学専攻	14	9	23	基盤機関の長（民博館長）を含む
比較文化学専攻	14	9	23	
計	28	18	46	

担当教員の専門分野（五十音順）

地域文化学専攻

朝倉敏夫（韓国社会研究）
印東道子（オセアニア考古学）
臼杵　陽（国際関係論・中東地域研究）
宇田川妙子（南ヨーロッパ研究・性研究）
大塚和義（アイヌ民族学・北アジア研究）
小長谷有紀（遊牧社会論・モンゴル研究）
佐々木史郎（文化人類学・北アジア研究）
佐藤浩司（民族建築学）
新免光比呂（宗教学・東欧研究）
竹沢尚一郎（宗教人類学・西アフリカ研究）
田村克己（東南アジア文化人類学）
塚田誠之（歴史民族学・中国研究）
寺田吉孝（民族音楽学・インド研究）
野林厚志（民族考古学、オーストロネシア文化論、台湾研究）
林　勲男（社会人類学・オセアニア研究）
松園万亀雄（社会人類学）
松原正毅（社会人類学・遊牧社会論）
松山利夫（オーストラリア先住民研究）
三尾　稔（文化人類学・南アジア研究）
森　明子（中部ヨーロッパ文化人類学）
八杉佳穂（言語人類学・中米文化史）
山本紀夫（民族植物学）
横山廣子（文化人類学・中国社会研究）

比較文化学専攻

石森秀三（観光文明学）
江口一久（民族言語学・口承文芸論）
大森康宏（映像人類学・民族誌映画）
押川文子（インド近現代社会史）
岸上伸啓（文化人類学・北方文化研究）
川口幸也（アフリカ同時代美術、展示表象論）
久保正敏（コンピュータ民族学・民族情報学）
韓　敏（社会人類学・中国研究）
近藤雅樹（民俗学・民具研究）
笹原亮二（民俗学・民俗芸能研究）
庄司博史（言語学・言語政策論）
杉本良男（社会人類学・南アジア研究）
關　雄二（アンデス考古学・ラテンアメリカ研究）
園田直子（保存科学）
出口正之（比較NPO研究）
中牧弘允（宗教人類学・経営人類学・ブラジル研究）
長野泰彦（言語学・チベットビルマ語研究）
西尾哲夫（認識言語学・アラブ研究）
野村雅一（身体コミュニケーション論・南欧民族学）
Matthews, Peter J.（先史学・民族植物学）
山本泰則（文化資源情報学）
吉田憲司（博物館人類学・アフリカ研究）
吉本　忍（民族工芸論・民族技術論）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法と目的

教員の多くが地域文化学・比較文化学両専攻にまたがって教育研究の指導にあたっています。

教育研究の方法は、個別の教員による授業や研究指導と、複数の教員の指導のもとに行われる共通のゼミナールからなっています。

共通のゼミナールには主として一年生を対象とする「基礎演習Ⅰ」（通称「大学院ゼミナール」）と論文作成の指導を内容とする「基礎演習Ⅱ」（通称「論文ゼミナール」）があります。

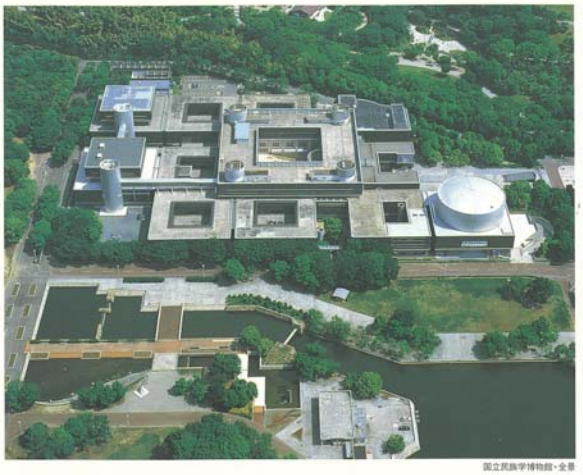
「大学院ゼミナール」は学生がそれぞれの研究計画を発表する「研究計画シリーズ」、各教員が交代で専門分野を講義する「テーマ・シリーズ」、一年の教育研究課程を受けた学生があらためて研究計画を発表する「リサーチプロポーザル・シリーズ」からなっています。

平成13年度からは、民族学・文化人類学の視点や方法論を批判的に摂取することを目的として、共通科目（特論又は演習）が開講されています。

学生はおおむね一年次においてフィールドワーク（現地調査）の準備をおこない、おおむね二年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミナール」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

両専攻の教育研究の目的は――

① 独創的な民族学・文化人類学の研究
② 長期のフィールドワークで得られた資料にもとづく学位論文の作成
③ 広い視野をもった、人間性豊かな研究者の養成――です。



国立民族学博物館・全景

フィールドから見る世界 ～学生の研究フィールドマップ～



地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

大学院入学定員及び現員（平成19年4月1日現在）

専攻	入学定員	現員 1年次	2年次	3年次	計
地域文化学専攻	2	1	2	11	14
比較文化学専攻	3	3	5	16	24
計	5	4	7	27	38

地域文化学専攻・比較文化学専攻は平成16年4月1日設置

「卒業生」からのメッセージⅠ

（総合研究大学院大学 名誉教授 専攻 教授） 桜田誉子（平成11年修了）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を終了した者には、博士の学位を授与する。又専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学
比較文化学専攻	文学

学位論文の内容によっては学術

学位論文リスト

【課程博士】

「数学的手法を用いた文化分析の方法について」	小島三弘（比較）	[H4.3.31 学術]
「シドニーにおける都市アボリジニの研究　伝統と民族の創出」	鈴木清史（比較）	[H6.3.24 文学]
「オルドス・モンゴル族の社会構造―ヤスの機能とその歴史的変容―」	楊　海英（地域）	[H6.9.20 文学]
「ペルーにおける山の神信仰の現在性 ―アンデスの宗教的世界のダイナミズム―」	細谷広美（地域）	[H7.3.23 文学]
「ビルマにおけるウェイザー信仰の研究」	土佐桂子（比較）	[H7.3.23 文学]
「韓国社会の動態と「両班化」 ―忠清北道阿房郡における門中と儒式儀礼の検討を通して」	岡田浩樹（地域）	[H8.3.21 文学]
「中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究」	曹　建南（地域）	[H8.3.21 文学]
「歌に表象される部村意識―奄美における「シマの歌」の研究―」	中原ゆかり（比較）	[H8.3.21 文学]
「四合院家屋の文化人類学的研究―人間と自然との相互作用の視点から」	杉山京子（地域）	[H10.3.24 文学]
「モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究 ―アルタイ・ハイラハ叙事詩を事例として―」	藤井麻湖（地域）	[H10.3.24 文学]
「カストム・メレシン―ヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および 民間医療観の現代的位相」	白川千尋（地域）	[H10.3.24 文学]
「韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究」	李　善愛（比較）	[H10.3.24 文学]
「東南中国の漢族社会組織とその変容―閩南農村社会における宗族の研究」	潘　宏立（比較）	[H10.3.24 文学]
「芸の伝承―ジャワ島・チルボンの仮面舞踏を中心に」	福岡まどか（比較）	[H10.3.24 文学]
「Overt First and Second Person-Designating Terms in Japanese Discourse ―A Pragmatic Perspective―」	Riikka Lansisalmi（比較）	[H10.3.24 文学]
「「二重の窮乏」下の平等理念―現代世界とキリバス南部環礁の社会生活―」	風間計博（地域）	[H10.9.30 文学]
「建築と文化・社会との相互作用 ―中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象として―」	栗原伸治（地域）	[H10.9.30 学術]
「カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容 ―宗教共同体と開発の視点から―」	子島　進（地域）	[H11.3.24 文学]
「地域主義運動における言語と知識人 ―エストニア南部ヴォル地方の事例から―」	寒水明子（地域）	[H11.3.24 学術]
「英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究 ―文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相―」	塩路有子（比較）	[H12.9.29 文学]
「北タイ・アカの家屋に関する研究―家屋の形式とその変化への視点から―」	清水郁郎（地域）	[H13.3.23 文学]
「韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化 ―忠清南道公州市を中心として活動する薬草商人を例に―」	林　史樹（地域）	[H13.3.23 文学]
「現代インドネシアにおけるジャワ大衆演劇クトプラの研究」	青木武信（比較）	[H13.3.23 文学]
「南ラオス村落社会における政治過程の研究 ―シゲの村における「連帯」と闘争―」	中田友子（地域）	[H14.3.22 文学]
「20世紀前半のボリビアにおける先住民教育と植民地主義」	吉江貴文（地域）	[H14.3.22 文学]
「カメルーンにおける「商売の民」バミレケの都市人類学的研究」	野元美佐（比較）	[H14.3.22 文学]
「タイ式医療の構築とタイ・マッサージ ―社会的文脈による権威的知識の多様性―」	飯田淳子（地域）	[H15.3.24 文学]

【論文博士】

「An Areal-Typological Study of Middle American Indian Languages」	八杉佳穂	[H6.3.30 文学]
「農村女性からみたトルコの「近代化」―世俗主義、イスラーム、女性の相互関係」	中山紀子	[H9.3.24 文学]
「南タイにおける実践宗教―ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から―」	西井凉子	[H9.3.24 文学]
「セネガルの公権力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究」	小川　了	[H9.3.24 文学]
「メラネシアの政治的リーダーシップと開発 ―ソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐって―」	関根久雄	[H10.9.30 文学]
「南インドの農村におけるカースト内関係としての親族 ―コング・ヴェッラーラの事例研究―」	杉本星子	[H10.9.30 文学]
「アイヌ民族における神送りの研究―沙流川流域を中心に―」	萱野　茂	[H13.3.23 学術]
「低湿地立地の遺跡にみる縄文時代本州西部地域の生業活動 ―縄文時代早期末から 中期初頭における若狭湾沿岸と琵琶湖周辺地域の動物考古学的考察―」	内山純蔵	[H14.3.22 文学]
「考古学における数量化と数理的手法の研究」	及川昭文	[H14.3.22 学術]
「総管信仰―近世江南農村社会と民間宗教―」	濱島敦俊	[H14.9.30 学術]
「中国の食事方法―歴史人類学的考察―」	西澤治彦	[H15.3.24 文学]
「台湾原住民のイノシシ（*Sus scrofa taivanus*）狩猟の民族考古学的研究: 動物遺存体研究の方法論構築にむけて」	野林厚志	[H15.3.24 学術]

「卒業生」からのメッセージⅡ

筑波大学大学院 人文社会科学研究科 助教授 関根久雄（平成8年3月 単位取得退学、平成10年9月 博士（文学））

総合研究大学院大学は、「奇妙な」大学である。世間一般が抱く「大学」あるいは「大学院」のイメージとは大きく異なる。そこには学部もなければ修士課程もない。ただ博士課程だけが設置されている。国立大学共同利用機関を「キャンパス」とし、分野ごとに研究科が日本各地に分散している。蔵書、研究施設ともに大変充実している。学生数よりも教官数の方が多い。教官がその大学の名称を用いて自己の所属先を外部者に述べることは少ない。つまり、大学そのものの知名度を上げるには、学生自身の努力に大幅に依存している(そのためか、世間的には現在もあまり知名度は高くない)。その他にも、些細なことを含めて「奇妙さ」をあげたら枚挙にいとまがない。

私が総合研究大学院大学を知ったのは、青年海外協力隊員としてソロモン諸島に滞在していた1988年であり、その大学が実際に動き出す前年であった。当時私は、協力隊の任期切れを翌年に控え、帰国後の進路として「大学院進学」を真剣に考えはじめていた。協力隊員活動を続ける過程で、日本を含め諸外国から贈られるさまざまな形式の援助が当初の思惑通りには機能せず、中途段階で崩壊していく姿に幾度となく遭遇した。そしてそれらのほとんどが、地元住民の文化的背景に配慮せず、援助する側の論理に基づいて行われていることも知った。開発（援助）とその開発がもたらされる地域社会の「文化」双方が、その文化の担い手たる地域住民に社会的、経済的利益をもたらすために共生することはできないのであろうか。私が現在も継続して行っている「開発と文化」に関わる研究の出発点はそこにあった。

しかし、1990年代はじめ頃までの人類学は、戦前の応用人類学や戦後の冷戦時代における「第3世界」諸国の秩序維持活動などとの関係から、開発現象をその学問領域において扱うことや、開発行為に直接的、間接的に関わる開発人類学をどこか白眼視する傾向にあった。この10年ほどの間にそのような学問的状況はほとんどみられなくなったが、当時は確実にそうであった。

総合研究大学院大学は、一般の大学における人類学の講座では扱いにくいテーマを志す「奇妙な」学生に対しても、その教官陣容の豊富さ、関心領域の広さなどから門戸を広げてくれる柔軟性がみられるように感じる。総合研究大学院大学の「奇妙さ」を、ハード、ソフト両面にわたり学生という立場からうまく利用することができれば、そこから得るものは決して少なくないはずである。



地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する

国立民族学博物館長　松園　万亀雄

民族学＝文化人類学は世界の諸民族の文化や社会を研究する学問です。いまは世界各地で人、モノ、情報が急激な勢いで飛び交い、移動している時代です。かつては当然とされていた社会の秩序がこわされ、混乱と葛藤が世界を覆っています。民族学を研究する者にとっては、挑戦的な課題がつぎつぎに突きつけられているといわねばなりません。それだけに人間と社会についての斬新な着想をつむぎだすための、幅広い視野と豊かな想像力が私たちには求められています。

国立民族学博物館には、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置されています。博士課程後期3年に在籍しようとする学生は、近い将来、大学や研究機関で教育研究にたずさわり、また民族学＝文化人類学の知識を応用して、日本や世界の人々の生活に実践的にかかわる仕事に就くことになります。

国立民族学博物館は優秀な教授陣を擁しており、また文献資料その他の研究環境の面でも我が国随一である、と私は自信をもっていうことができます。入学されるみなさんは在学中に学位論文を書きあげ、一人前の研究者として社会に飛び立ってほしいものです。



国立民族学博物館・南アジア展示場

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館（民博）は、わが国における民族学（文化人類学）の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立された。民博は、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究を進め、学術情報を集積する一方、その成果を展示やデータベースの提供などの博物館機能を通じて広く社会に公開することを使命としている。1989年には、総合研究大学院大学の文化科学研究科地域文化学専攻と比較文化学専攻が民博を基盤機関として設置され、民博での博士後期課程の教育が開始された。また、1994年には、地域研究企画交流センターが新たに設けられた。このセンターは、既存の関連研究機関をネットワーク化し、総合的な地域研究を推進するための中心組織として、民博内に設置されたものである。

以上のように、国立民族学博物館は、「博物館をもつ研究所」であり、世界的にみても類例のない規模と機能を有しているが、博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっている。民博の展示は、常設展示と特別展示とで構成されている。このうち常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなる。一方、特別展示は、特定のテーマに焦点を当て、年に数回、期間を限って開催されている。

民博は、2004年4月より、国立大学と足並みをそろえて、法人組織となった。法人の正式名称は、「大学共同利用機関法人人間文化研究機構」であるが、民博は、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所とともに、その一員として再出発した。法人化にともない、民博の研究部も、従来の4研究部2センター体制から3研究部（民族社会、民族文化、先端人類科学）3センター（研究戦略センター、文化資源研究センター、地域研究企画交流センター）体制に組織替えがなされた。研究活動の機動性を高めるとともに、その成果をより広くわかりやすく社会に伝えていくための措置である。民族学（文化人類学）を基礎としつつ、機関と分野の別を超えて、人間文化の総合的理解に至ろうとする、民博の新たな活動が始まっている。

所蔵民族学資料（平成16年4月1日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	166,461点	レコード・コンパクトディスク	46,116点	日本語図書	220,482冊
国内資料	88,774点	テープ（言語）	7,965点	外国語図書	371,501冊
計	255,235点	テープ（音楽）	8,371点	計	591,983冊
		フィルム（16ミリ）	3,033点	日本語雑誌	9,110冊
		ビデオテープ・レーザーディスク	4,588点	外国語雑誌	6,081冊
		計	70,073点	計	15,191冊

地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み

昭和63年10月　総合研究大学院大学開学【全学】
平成元年4月　文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）設置、学生受入、授業開始
平成4年4月　文化科学研究科に国際日本文化研究センターを基盤機関とする国際日本研究専攻設置、学生受入
平成7年2月　葉山キャンパス本部共通棟が竣工、この年から入学式を同キャンパスにて総研大全体で挙行【全学】
平成11年4月　先導科学研究科学生受入（地域文化学・比較文化学両専攻併任教官の一部、先導科学研究科の併任に）【全学】
文化科学研究科に国立歴史民俗博物館を基盤機関とする日本歴史研究専攻設置、学生受入
平成12年10月　「オープンキャンパス」開催（年1回）
平成13年4月　地域文化学・比較文化学両専攻の同窓生ネットワーク発足
文化科学研究科にメディア教育開発センターを基盤機関とするメディア社会文化専攻設置、学生受入
平成15年4月　文化科学研究科に国文学研究資料館を基盤機関とする日本文学研究専攻設置、学生受入

年度別学位記授与者数

	地域文化学専攻		比較文化学専攻		計
	課程博士	論文博士	課程博士	論文博士	
平成3年度			1		1
平成5年度			1	1	2
平成6年度	2		1		3
平成7年度	2		1		3
平成8年度		3			3
平成9年度	3		4		7
平成10年度	4	2			6
平成12年度	2		2	1	5
平成13年度	1	1	2	1	5
平成14年度	1	1		2	4
計	15	7	12	5	39

入学者選抜試験倍率

平成	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年
志願者数	23	40	27	22	17	23	31	23	28	18
合格者数	6(1)	6	6(2)	6(1)	7	6	8	8	7	6
倍率	3.8	6.7	4.5	3.7	2.4	3.8	3.9	2.9	4.0	3.0

※（ ）は入学辞退者で内数。

合格者出身大学院機関別累計

平成	元年~6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	計
国立	26(5)	1	1	6(2)	4(1)	4	5	5	4	5	3	64(8)
公立	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
私立	5	4(1)	5	0	2	2	(1)	3	1	1	2(1)	25(1)(2)
海外	7(1)	1	0	0	0	1	1	0	2(1)	1	1	14(1)(1)
合計	38(6)	6(1)	6	6(2)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	6(1)	104(10)(3)

※（ ）は入学辞退者で内数。〈 〉内は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身（1名）者は学部卒で資格認定による。

合格者出身大学院地方別累計

平成	元年~6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	計
関東	16(4)	4	4	4(2)	3(1)	4	2(1)	3	3	2	2	47(7)(1)
中部	4	0	2	0	2	0	0	0	1	1	1	11
近畿	8(1)	1(1)	0	1	1	2	3	4	2	3	2(1)	27(2)(1)
中国	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	4
九州	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
海外	7(1)	1	0	0	0	1	1	0	2(1)	1	1	14(1)(1)
合計	38(6)	6(1)	6	6(2)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	6(1)	104(10)(3)

※（ ）は入学辞退者で内数。〈 〉内は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身（1名）者は学部卒で資格認定による。

総合研究大学院大学について



ごあいさつ

総合研究大学院大学長　小平　桂一

総合研究大学院大学、略して「総研大」は、基礎学術分野の総合的発展と高度な研究的資質を備えた知的市民の育成を目指して、大学院学生の教育を行なうために、16年前（1988年）に設立されました。現在では、神奈川県の葉山町に大学本部を持ち、各地に置かれた18の国立学術研究機関等を基盤として、大学院生を分散配置し、ユニークな博士課程教育を展開しています。これらの基盤機関は、人文系から自然科学系にわたる、各専門分野に設置された「大学共同利用機関」で、一大学では維持・運用できない大型最新の装置・設備・システムによる研究や、広範・大量な資料に基づく長期的研究、従来の大学講座の枠を超えた学問分野の研究などが行われています。

全国の大学研究者や大学院生が、共同で利用し研究を進めているので、異なる地域や専門領域の間の交流や協力が促進され、新しい研究の芽や学際領域が伸び易い、優れた環境にあります。また、わが国を代表する大型・最新の設備や大量の基礎資料を備えているので、当該分野の国際的窓口となって、多くの国際共同研究も行われており、大学院生にも、早くから国際性を身につける種々の機会を提供しています。これから、大学・大学院教育が大きく変わろうとしているとき、わが国の高等学術研究・教育の要の一環として、これら「大学共同利用機関」の役割は、一層その重要性を増すものと確信します。

二十一世紀の国際社会では、各学問分野の深化と共に、多様な学問分野を総合する広い視野と知性が要求されることは、間違いありません。とりわけ、人文系学問の総合的推進や自然科学との融合が、重要な課題となることでしょう。そこに、異なる専門分野の諸基盤機関にまたがって設立され、「総合」と「分散」の両機能を果たすべき「総研大」の意義と使命があります。「総研大」教員の多くは、基盤機関の教員が併任していますが、学生教育に当たっては、専門研究領域・分野を超えて、「総研大」教員としての使命を自覚するよう願っています。また、進学を希望する学生も、単に専門分野で学位を取得しようとするだけでなく、「総研大」にふさわしい考え方や生き方を、少しでも学ぼうという意欲を持って臨むよう、大いに期待しています。

建学にあたられた長倉三郎先生、基礎を築き上げられた廣田榮治先生を始めとする諸先達の努力により、今や「総研大」は「青年期」に入ろうとしています。折も折り、世界的な潮流の中でわが国も、国立大学の制度改革を断行しつつあります。多くの大学や研究所が、社会の短期的・直接的な要請に応えて教育・研究活動を行なおうとするなかで、わが国の将来に欠くことのできない、長期的・基礎的な学術分野を理解し、あるいは担い、あるいは新しい道を切り開いていこうとする、高度な知的市民を育成することは、必須の国家的課題です。大学共同利用機関等を基盤とする「総研大」こそは、広範囲にわたる教員団の協力の下に、工夫を凝らして、「新しい大学院生」を育てていかなければなりません。基盤機関が地域的に分散している点は、ともすると、「総研大」の働きにとって負担になりがちですが、それを乗り越え活かす工夫も、していきたいと思っています。関係各位には、引き続きご理解とご協力を賜りたく、ここに改めてお願い申し上げる次第です。

創設の趣旨・目的

近年、従来の学問分野の枠を越えた独創的、国際的な学術研究の推進や、科学の新しい流れを創造する先導的学問分野の開拓の重要性が強く要請されております。

本学は、このような要請に対応する研究者を養成するため、学問諸分野で先端的な研究を行い、国内外の研究者の共同研究の推進に中心的な役割を果たしている大学共同利用機関の最先端を行く高度で優れた研究環境を活用した、我が国最初の大学院大学として創設されました。本学は、学術研究の新しい流れに先導的に対応できる、幅広い視野を持った国際的で独創性豊かな研究者を養成します。また、従来の学問分野の枠を越えた独創的、国際的な学術研究の推進並びに先導的学問分野を開拓します。

総合研究大学院大学の特徴

博士課程のみの大学院大学

■修士課程修了後からの後期3年博士課程
（生命科学研究科を除く5研究科）
■学部卒業後からの5年一貫博士課程（生命科学研究科）
■複数指導教員体制 ―学生1人に対し教員2～3人が対応―
■少数精鋭主義 ―明確な目的意識のもとに集まる入学者―

葉山本部・大学共同利用機関等での教育研究活動

■世界最先端研究である教員集団
■異分野間の研究者と交流できる日常環境
■先導的学問分野の開拓 ―未来への架け橋―

国際色豊かな研究環境の中での活動

■開かれた研究環境
■一世界の最先端研究技術・研究者の交流拠点―
■一幅広い視野・柔軟な思考力が身に付く―
■一世界標準が身に付く―

世界最高水準の資料・施設・設備の中での研究活動

■国際的にも僅少で学術的価値のある文献・資料を利用
■データベース化された学術データを利用
■世界規模の加速器・望遠鏡、観測用ロケット・衛星を利用
■プラズマ発生装置、南極観測基地などを利用

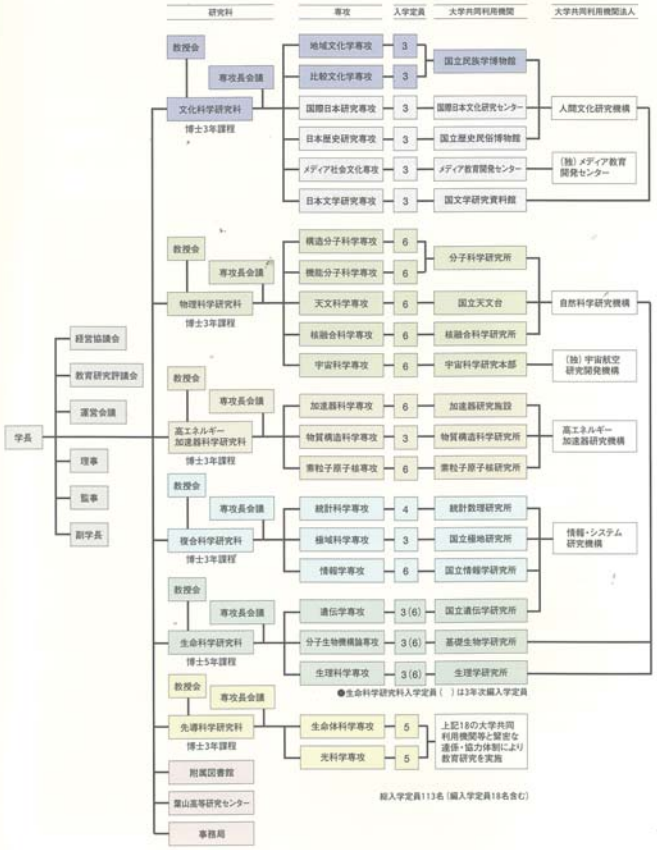
分散型教育研究



総合型教育研究



大学の組織



出願資格等

(1) 出願資格

次のいずれかに該当する者とする。
①修士の学位又は専門職学位を有する者及び平成17年3月までに取得する見込みがある者
②外国において、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び平成17年3月までに授与される見込みがある者
③外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び平成17年3月までに授与される見込みがある者
④大学を卒業し、大学、研究所等において、平成17年3月までに2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑤外国において学校教育における16年の課程を修了した後、又は外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、平成17年3月までに2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑥本学において、個別の入学資格審査により、修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、平成17年4月1日において24歳に達しているもの
（④、⑤、又は⑥により出願しようとする者は、事前に本学で実施する「学力の認定」を受ける必要がある）

(2) 選抜方法（文化科学研究科）

選抜は、書類選考、修士論文又はそれに代わるものの審査及び面接により行う。
①書類選考
志望研究内容等、その他研究科が提出を求めた資料について行う。
②修士論文等の審査
修士の学位を有する者及び修士課程在学中の者については修士論文、また学力認定により出願資格が認められた者については刊行された論文又は著作を審査する。
③面接
面接は書類選考・論文審査合格者についてのみ行うものとする。書類選考・論文審査の合否は面接日の約1週間前までに、入学願書に記載された連絡先に文章で個別に連絡する。（なお、合否通知が面接日の1週間前を過ぎても到着しない場合は、面接場所の担当係まで問い合わせること。）
面接は、主として修士論文（修士論文のない者は発表した学術論文等又はこれまでに行った研究の要旨）の内容及び志望研究内容について行う。
○詳細は募集要項を請求のうえ確認してください。

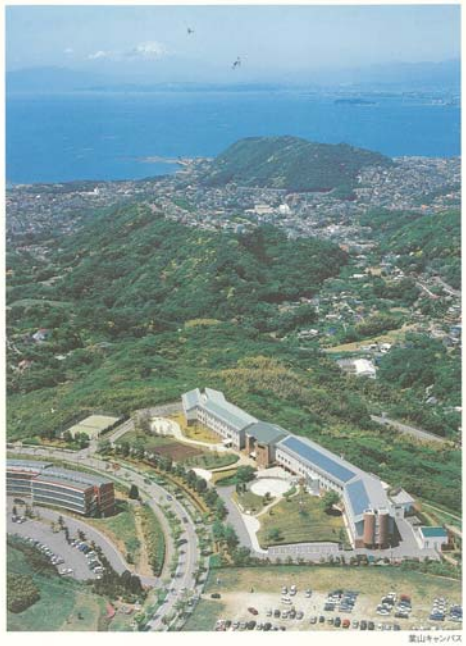
(3) 修了要件

本研究科の専攻に3年以上在学し、所定の単位数以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び試験に合格すること。
ただし、特に優れた研究業績を上げた者については、在学期間を短縮して修了を認めることがある。

募集要項請求先

募集要項の請求を郵送で行う場合は、封筒の表に「学生募集要項請求（文化科学研究科地域文化学専攻・比較文化学専攻）」と朱書し、裏には住所、氏名、郵便番号を記載するとともに返信用封筒（角形2号・縦33.2cm×横24cm、受信者の住所、氏名、郵便番号を明記し、390円切手を貼り付けたもの）を同封し、下記宛に行うこと。

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
総合研究大学院大学事務局教育研究企画室



葉山キャンパス

問い合わせ先

国立民族学博物館
管理部研究協力課研究協力係

〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151（代表）
06-6878-8236（専攻担当）　URL http://www.minpaku.ac.jp/
FAX 06-6878-8479　E-mail souken@idc.minpaku.ac.jp

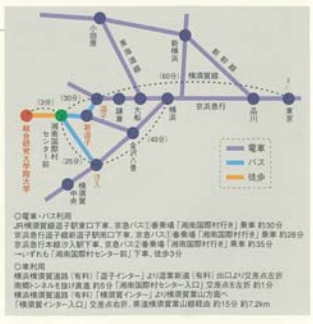


●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅よりバスで日本庭園前下車徒歩15分
●大阪モノレールで万博記念公園駅下車徒歩15分（ただし、公園中央口経由自然文化園は有料です）
●大阪モノレールで公園東口駅下車、無料地域を通って徒歩約13分　●タクシーは民博職員通用口まで入ることができます。

総合研究大学院大学　事務局

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電話 046-858-1500（代表）
FAX 046-858-1541
URL http://www.souken.ac.jp/





○電車・バス利用
JR横須賀線逗子駅東口下車、京急バス「湘南国際村行き」乗車 約30分
京浜急行逗子新駅逗子駅東口下車、京急バス「湘南国際村行き」乗車 約28分
京浜急行本線汐入駅下車、京急バス乗車「湘南国際村行き」乗車 約35分
→いずれも「湘南国際村センター前」下車、徒歩3分
○車利用
横浜横須賀道路（有料）「逗子インター」より国道新道（有料）出口より交差点左折
湘南ベンネルを抜け直進 約5分「湘南国際村センター入口」交差点を左折 約1分
横浜横須賀道路（有料）「横須賀インター」より横須賀葉山方面へ
「横須賀インター入口」交差点右折、県道横須賀葉山線経由 約15分 約7.2km

'05 総合研究大学院大学
文化科学研究科
The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies

地域文化学専攻
比較文化学専攻
概要
Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies



目 次

文化科学研究科について	1
専攻の概要	2
地域文化学専攻	2
比較文化学専攻	3
地域文化学専攻授業概要	4
比較文化学専攻授業概要	6
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員	8
担当教員の専門分野	8
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法と目的	9
フィールドから見る世界〜学生の研究フィールドマップ〜	10
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生	10
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位	12
学位論文リスト	12
地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する	14
国立民族学博物館の概要	15
地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み	16
年度別学位授与者数	16
入学者選抜試験倍率	16
合格者出身大学院機関別累計	16
合格者出身大学院地方別累計	16
総合研究大学院大学について	17
ごあいさつ	17
創設の趣旨・目的	18
総合研究大学院大学の特徴	18
大学の組織	19
出願資格等	20
募集要項請求先	21
問い合わせ先	



文化科学研究科について

研究科長 新谷 尚紀

総合研究大学院大学は、学部をもたず大学院だけを置く国立大学として、昭和63年（1988）10月1日に開学した我が国最初の大学院大学です。文化科学研究科は、総合研究大学院大学の一研究科であり、まず、平成元年（1989）4月に、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻の二専攻の設置から出発しました。その後、平成4年（1992）4月には、国際日本文化研究センターを基盤として国際日本研究専攻が、平成11年（1999）4月には、国立歴史民俗博物館を基盤として日本歴史研究専攻が、平成13年（2001）4月にはメディア教育開発センターを基盤としてメディア社会文化専攻が、平成15年（2003）4月には、国文学研究資料館を基盤とする日本文学研究専攻が、それぞれ増設されました。そして、平成16年（2004）4月からは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構が設立され、四つの研究機関（国立民族学博物館、国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館及び国文学研究資料館）と独立行政法人メディア教育開発センターをあわせた五つの研究機関を基盤とし国立大学法人総合研究大学院大学文化科学研究科となりました。

国立民族学博物館は、日本における民族学・文化人類学の研究センターとしての機能をもち、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究を多角的に推進しています。近年の国際化・国際交流の著しい進展と活発化、その一方での民族紛争の多発など、研究課題の多様化・グローバル化とこれに伴う研究分野の拡大は、民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めつつあります。国際日本文化研究センターは、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力を行う機能をもつ研究機関です。近年の国際化の中で日本に対する関心が高まっており、「日本」に関する総合的な研究が世界的な規模で進められています。国立歴史民俗博物館は、文献資料・民俗資料・考古資料を学際的に研究することによって新しい歴史学の創造を目指している研究機関で、世界史的な広い視野からの日本歴史理解へのアプローチを開拓するとともに、国際的な日本歴史研究を推進しています。メディア教育開発センターは、高等教育におけるマルチメディアの利用を促進するための我が国における中核的機関であり、多様なメディアを高度に利用して行う教育の内容、方法等を研究開発し、その成果を提供することを目的として、先導的な研究を行っています。国文学研究資料館は日本全国に散在する前近代1,200年間の文献資料を調査研究し、その収集、整理、保存にあたっている研究機関で、その資料情報を広く日本文学研究者の利用に供しています。

この五つの研究機関を基盤として、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化に関して地域的・個別的に対象を設定して教育研究を行う「地域文化学専攻」と、そのような諸民族の社会・技術・宗教・芸術等について通文化的手法に基づき教育研究を行う「比較文化学専攻」、国際的な視野で日本文化と文明について教育研究を行う「国際日本研究専攻」、および文献史学の枠にとらわれず、広く歴史学・考古学・民俗学を中心に関連諸科学との協業により、総合的な日本歴史解明を目指した教育研究を行う「日本歴史研究専攻」、メディアと文化、社会、人間の相互作用について、学際的かつ総合的な教育を行う「メディア社会文化専攻」、そして、文化科学の視点から文学資源の実態、作品の形成と享受の動態、その制度・環境などを総合的に研究する視点に立って教育研究を行う「日本文学研究専攻」、の六専攻を置き、国際的・学際的な教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目指しています。

専攻の概要

地域文化学専攻



専攻長 小長谷 有紀

アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としている。本専攻においては、現地調査及びこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度の研究者の養成を行う。

教育研究指導分野の概要

大講座	教育研究指導分野	概要
アジア地域文化学	アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
	アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
ヨーロッパ・アフリカ地域文化学	ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
	アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アメリカ・オセアニア地域文化学	アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
	オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
基礎科目		
共通科目		
総合教育科目		

比較文化学専攻



専攻長　野村　雅一

民族社会、民族技術、民族宗教、民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としている。諸民族の文化の通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指す。本専攻においては、従来の民族学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度の研究者の養成を行う。

教育研究指導分野の概要

大課座	教育研究指導分野	概要
民族社会・宗教学	民族社会	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治集団、法規範、所有と分配等に関する通文化的・理論的研究
	民族宗教	諸民族の祭祀、神話、宇宙観等に関する通文化的・理論的研究
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究
民族言語・芸術学	民族言語	諸民族の言語、文字、伝達等に関する通文化的・理論的研究
	民族芸術	諸民族の音楽、芸能、文芸、造形等に関する通文化的・理論的研究
基礎科目		
共通科目		
総合教育科目		



ゼミの様子



院生室の様子

地域文化学専攻授業概要（平成17年度）

	授業科目	授業科目の内容	担当教員	
アジア地域文化I	東アジア文化研究I	東アジア社会と文化に関する講述	助教授	野林　厚志
	東アジア文化研究II	朝鮮半島の社会と文化に関する講述	教　授	朝倉　敏夫
	東アジア文化研究III	中国に居住する諸民族の社会と文化の特性についての講述	教　授 助教授	塚田　誠之 横山　廣子
	東アジア文化研究特論I	日本及び周辺諸民族の先住民文化に関する講述	助教授	野林　厚志
	東アジア文化研究特論II	中国 東南アジアにおける社会変動に関する講述	助教授	横山　廣子
	東アジア文化研究特論III	中国南部諸民族の歴史民族学的研究に関する講述	教　授	塚田　誠之
	東アジア文化研究演習I	東アジアにおける生活文化の研究に関する演習	教　授	朝倉　敏夫
	東アジア文化研究演習II	中国西南部におけるエスニシティに関する演習	助教授	横山　廣子
	東アジア文化研究演習III	中国南部における移住と文化の動態に関する演習	教　授	塚田　誠之
	中央アジア文化研究	中央アジア地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教　授	小長谷有紀
	北アジア文化研究	北アジアの伝統的生業に関する講述	教　授	佐々木史郎
	中央・北アジア文化研究特論I	モンゴルの社会と文化に関する講述	教　授	小長谷有紀
	中央・北アジア文化研究特論II	北アジア社会の生業を特徴づける狩猟・漁撈採集民の現状に関する講述	教　授	佐々木史郎
	中央・北アジア文化研究演習I	中央アジア諸民族の遊牧と農耕の文化に関する演習	教　授	小長谷有紀
	中央・北アジア文化研究演習II	北アジアのシャマニズム的世界観に関する演習	教　授	佐々木史郎
アジア地域文化II	東南アジア文化研究I（大陸部）	東南アジア大陸部に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教　授	田村　克己
	東南アジア文化研究II（島嶼部）	東南アジア島嶼部に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授	佐藤　浩司
	東南アジア文化研究特論I	東南アジアの宗教と政治に関する講述	教　授	田村　克己
	東南アジア文化研究特論II	東南アジアの建築人類学に関する講述	助教授	佐藤　浩司
	東南アジア文化研究演習I	東南アジア大陸部の仏教儀礼に関する演習	教　授	田村　克己
	東南アジア文化研究演習II	東南アジアの生活財に関する演習	助教授	佐藤　浩司
	南アジア文化研究	南アジアに居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授	三尾　稔
	南アジア文化研究特論	ヒマラヤ地域、とくにネパールに居住する諸民族について講述する	助教授	南　真木人
	南アジア文化研究演習	インドにおける伝統文化、宗教とナショナリズムについての問題について演習する	助教授	三尾　稔
	西アジア文化研究	中東地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教　授	臼杵　陽
	西アジア文化研究特論	アラブ世界の民族・宗派関係に関する講述	教　授	臼杵　陽
	西アジア文化研究演習	中東・イスラーム文化に関する演習	教　授	臼杵　陽
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ文化研究I（東ヨーロッパ）	東ヨーロッパ地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授	新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究II（中部ヨーロッパ）	中部ヨーロッパ地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授	森　明子
	ヨーロッパ文化研究III（南ヨーロッパ）	南ヨーロッパ地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授	宇田川妙子
	ヨーロッパ文化研究特論I	バルカン諸民族の社会と文化に関する講述	助教授	新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究特論II	ドイツ・オーストリアの社会と文化に関する講述	助教授	森　明子
	ヨーロッパ文化研究特論III	地中海周辺の社会と文化に関する講述	助教授	宇田川妙子
	ヨーロッパ文化研究演習I	ヨーロッパ東部の文化研究に関する演習	助教授	新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究演習II	中部ヨーロッパの生活文化研究に関する演習	助教授	森　明子
	ヨーロッパ文化研究演習III	ヨーロッパ南部の文化研究に関する演習	助教授	宇田川妙子

	授業科目	授業科目の内容	担当教員	
アフリカ地域文化	アフリカ文化研究I（東部）	アフリカ東部地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述		
	アフリカ文化研究II（中南部）	アフリカ中南部地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教　授	吉田　憲司
	アフリカ文化研究III（西部）	アフリカ西部地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教　授	竹沢尚一郎
	アフリカ文化研究特論I	国家および無国家社会の代表的民族誌に拠って、アフリカ東部地域の社会と文化について講述する		
	アフリカ文化研究特論II	さまざまなメディアによるアフリカ文化の表象のあり方を検討し、その問題点と可能性を考察する	教　授	吉田　憲司
	アフリカ文化研究特論III	アフリカの歴史と文化に関する講述	教　授	竹沢尚一郎
	アフリカ文化研究演習I	アフリカ諸民族が営む農耕・牧畜・漁撈・狩猟・採集など多様な生業形態と、人間と環境との関係についての演習		
	アフリカ文化研究演習II	アフリカ諸民族の文化の動態に関する演習	教　授	吉田　憲司
	アフリカ文化研究演習III	アフリカ諸民族の儀礼と宗教に関する演習	教　授	竹沢尚一郎
アメリカ地域文化	アメリカ文化研究I（北米）	北米地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授	寺田　吉孝
	アメリカ文化研究II（中米）	中米地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教　授	八杉　佳穂
	アメリカ文化研究III（南米）	南米地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教　授	山本　紀夫
	アメリカ文化研究特論I	アメリカ合衆国の多文化主義と政治の関係についての講述	助教授	寺田　吉孝
	アメリカ文化研究特論II	中米諸民族の歴史と文化に関する講述	教　授	八杉　佳穂
	アメリカ文化研究特論III	南米諸民族の歴史と文化に関する講述	教　授	山本　紀夫
	アメリカ文化研究演習I	北米における都市研究の諸問題に関する演習	助教授	寺田　吉孝
	アメリカ文化研究演習II	中米諸民族の言語文化に関する演習	教　授	八杉　佳穂
	アメリカ文化研究演習III	南米における環境と生業に関する演習	教　授	山本　紀夫
オセアニア地域文化	オセアニア文化研究I	オーストラリアに居住する先住民の社会と文化に関する講述	教　授	松山　利夫
	オセアニア文化研究II（ニューギニア）	ニューギニアの社会と文化に関する講述	助教授	林　勲男
	オセアニア文化研究III（島嶼部）	オセアニア島嶼部に生活する人々の社会と文化に関する講述	教　授	印東　道子
	オセアニア文化研究特論I	グローカリズムの観点における、先住民文化の情報学的・メディア論的講述	教　授	松山　利夫
	オセアニア文化研究特論II	ニューギニアの自然災害と文化についての講述	助教授	林　勲男
	オセアニア文化研究特論III	オセアニアの伝統的土器文化についての講述	教　授	印東　道子
	オセアニア文化研究演習I	オーストラリア・アボリジニの儀礼・宗教に関する演習	教　授	松山　利夫
	オセアニア文化研究演習II	オセアニア諸民族文化の動態に関する演習	助教授	林　勲男
	オセアニア文化研究演習III	オセアニア先史社会における環境適応に関する演習	教　授	印東　道子
基礎科目	地域文化学基礎演習I	民族学・文化人類学の先端的理論を講述し、各地域における実情の検証とともにその理論を批判的に研究する		
	地域文化学基礎演習II	地域文化を中心とする民族学・文化人類学研究の理論的・方法論的枠組を明確にする研究をゼミナール形式で行う		
共通科目	地域文化学特論I	地域文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての講述	教　授	印東　道子
	地域文化学特論II	地域文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての講述	教　授	山本　紀夫
	地域文化学演習I	地域文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての演習	助教授	横山　廣子
	地域文化学演習II	地域文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての演習		
総合教育科目	学生セミナー			
	総研大レクチャーI〜III			

※年度によって開講科目が異なる

比較文化学専攻授業概要（平成17年度）

	授業科目	授業科目の内容	担当教員	
民族社会	民族社会研究I（家族・親族）	世界の諸民族の家族・親族・婚姻などについての講述	教　授	杉本　良男
	民族社会研究II（政治）	世界の諸民族における政治形態とその動態についての講述	教　授	押川　文子
	民族社会研究III（法）	世界の諸民族の法概念・慣習法などについての講述	助教授	岸上　伸啓
	民族社会研究IV（社会構造）	諸民族の社会構造を、その文化構造や経済的仕組みなどとの関わりにおいて論じる	助教授	韓　敏
	民族社会研究V（社会生態）	世界の諸民族の市場・流通・交換などの社会形態についての講述	教　授	出口　正之
	民族社会研究特論I	多民族社会の中国における社会構造の比較研究に関する講述	助教授	韓　敏
	民族社会研究特論II	北方先住諸民族の伝統社会の比較研究に関する講述	助教授	岸上　伸啓
	民族社会研究特論III	諸民族社会とNPO・NGOの比較研究に関する講述	教　授	出口　正之
	民族社会研究演習I	中国における国民文化・地域文化・民族文化の再編成についての演習	助教授	韓　敏
	民族社会研究演習II	現代南アジアの社会論：教育を中心に	教　授	押川　文子
	民族社会研究演習III	世界の諸地域における植民地主義とナショナリズムの問題について比較検討する	教　授	杉本　良男
民族宗教	民族宗教研究I（宗教行動）	世界の諸民族の祭祀や宗教運動などの宗教行動について、日本の祭や新宗教運動との比較を意図しながら講述する	教　授	中牧　弘允
	民族宗教研究II（神話）	世界の諸民族の神話・神観念などについての講述		
	民族宗教研究III（儀礼）	儀礼と祭りの構造・過程・意味について講述する	助教授	笹原　亮二
	民族宗教研究IV（世界観）	世界の諸民族の宇宙観・聖俗観などについての講述	教　授	石森　秀三
	民族宗教研究特論I	アメリカやブラジルなどにおける日本宗教を民族宗教としてとらえその展開・受容・変容に関して講述する	教　授	中牧　弘允
	民族宗教研究特論II	ミクロネシア諸民族の宇宙観の比較研究に関する講述	教　授	石森　秀三
	民族宗教研究特論III	オセアニアにおける伝統宗教の変容と外来宗教の受容についての講述	教　授	小林　繁樹
	民族宗教研究演習I	宗教と観光のホモロジー（相同）など、宗教観光に関する演習	教　授	石森　秀三
	民族宗教研究演習II	地中海地域諸民族の世界観とその歴史的変遷に関する演習	教　授	野村　雅一
	民族宗教研究演習III	アマゾン地域を中心とする南アメリカを対象に、諸民族の宗教行動と外来宗教の影響に関する比較研究を行う	教　授	中牧　弘允
民族技術	民族技術研究I（生産技術）	世界の諸民族における農耕技術などについての講述	助教授	飯　雄二
	民族技術研究II（保存技術）	技術と太平洋諸島への人の移住	助教授	マシウス、ピーター
	民族技術研究III（製作技術）	世界の諸民族の生産や生活用具などにかかわる製作技術についての講述	教　授	吉本　忍
	民族技術研究IV（素材調査）	世界の諸民族の生活用具にかかわる技法や素材などの自然科学的調査法の講述	助教授	園田　直子
	民族技術研究V（生活技術）	世界の諸民族の生活技術を対象に、技術の保持、および創意の背景となる文化の態様についての講述	教　授	近藤　雅樹
	民族技術研究特論I	南アメリカの先史社会の生業技術に関する講述	助教授	飯　雄二
	民族技術研究特論II	インドネシア染織技術の比較研究に関する講述	教　授	吉本　忍
	民族技術研究特論III	日本の近・現代における物質文化を流通と形態比較の視点から講述する	教　授	近藤　雅樹
	民族技術研究演習I	植物のドメスティケーションについての植物学的、民族学的、考古学的アプローチ	助教授	マシウス、ピーター
	民族技術研究演習II	伝統的ならびに近現代の民族誌画における技法と素材の比較研究	助教授	園田　直子
	民族技術研究演習III	アンデスの環境利用と文明形成に関する演習	助教授	飯　雄二

	授業科目	授業科目の内容	担当教員	
民族言語	民族言語研究Ⅰ（言語理論）	言語人類学の諸問題、研究対象を一般言語学に言及しつつ対比的に概説する	教授	庄司 博史
	民族言語研究Ⅱ（言語論）	話題のあり方が言語形式に現れる幾つかのトピックについて研究論文の講読と批判を行う	教授	長野 泰彦
	民族言語研究Ⅲ（比較言語）	世界の諸民族の言語と非言語的表現などの比較についての講述	助教授	西尾 哲夫
	民族言語研究Ⅳ（文学）	世界の諸民族の文学と口頭伝承などの比較についての講述	教授	野村 雅一
	民族言語研究特論Ⅰ	類型学的観点からウラル諸語と近隣諸語を比較する	教授	庄司 博史
	民族言語研究特論Ⅱ	チベット・ビルマ系諸語の歴史を再構するための方法とその結果についての講述を行う	教授	長野 泰彦
	民族言語研究特論Ⅲ	セム系諸語の比較研究に関する講述	助教授	西尾 哲夫
	民族言語研究演習Ⅰ	言語の類型論的方法に関する演習	助教授	西尾 哲夫
	民族言語研究演習Ⅱ	言語の実地調査法、記述言語学の方法、言語事実の解釈方法等について講述し、言語データの扱い方をインフォーマントを使って演習する	教授	長野 泰彦
	民族言語研究演習Ⅲ	少数言語の諸相、言語運動、言語政策の調査分析について演習する	教授	庄司 博史
	言語情報研究	世界の諸民族の文字使用についてその統計的性質、テキストの検索インデックスの手法などについて講述する	教授	久保 正敏
	言語情報研究特論	コンピュータ民族学の手法について詳述し、比較民族学を進めるために留意すべき問題点を講述する	教授	久保 正敏
	言語情報研究演習（情報処理）	コンピュータを用いた民族資料情報の管理・分析・活用方法について演習を行う	助教授	山本 泰則
民族芸術	民族芸術研究Ⅰ（比較芸能）	世界の諸民族の芸能の比較についての講述	助教授	笹原 亮二
	民族芸術研究Ⅱ（映像民族誌）	世界の諸民族の映像とのかかわりに関する比較構造研究	教授	大森 康宏
	民族芸術研究Ⅲ（民族造形）	世界の諸民族の造形の構造、機能などについての講述	教授	小林 繁樹
	民族芸術研究Ⅳ（民族音楽）	世界の諸民族の音文化を通文化的な視点より関連諸分野をも視野に入れ考察し講述する	助教授	福岡 正太
	民族芸術研究Ⅴ（民族芸能）	世界の芸術をめぐる表象の政治性、権力性について講述及び討論する	助教授	川口 幸也
	民族芸術研究特論Ⅰ	日本の民族芸能に関する講述	助教授	笹原 亮二
	民族芸術研究特論Ⅱ	西欧社会における映画、映像の比較研究に関する講述	教授	大森 康宏
	民族芸術研究特論Ⅲ	諸民族の造形についての表象様式について批判的に検討する	教授	小林 繁樹
	民族芸術研究演習Ⅰ	東南アジアにおける民族音楽の資料を用いて分析、比較方法を講述する。音響資料の扱い方をトレーニングする	助教授	福岡 正太
	民族芸術研究演習Ⅱ	映像音響の技術的研究と実技演習	教授	大森 康宏
	民族芸術研究演習Ⅲ	芸術文化の表現の諸問題に関する演習	助教授	川口 幸也
基礎科目	比較文化学基礎演習Ⅰ	民族学・文化人類学の先端的理論を講述し、通文化的研究における実情の検証とともに、その理論を批判的に研究する		
	比較文化学基礎演習Ⅱ	比較文化を中心とする民族学・文化人類学研究の理論的・方法論的枠組を明確にする研究をゼミナール形式で行う		
共通科目	比較文化学特論Ⅰ	比較文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての講述	教授	庄司 博史
	比較文化学特論Ⅱ	比較文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての講述		
	比較文化学演習Ⅰ	比較文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての演習		
	比較文化学演習Ⅱ	比較文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての演習		
総合研究科目	学生セミナー			
	総研大レクチャーⅠ～Ⅲ			

※年度によって開講科目が異なる

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員

現員（平成17年4月1日現在）

区分	教授	助教授	計	備考
地域文化学専攻	13	10	23	基盤機関の長（民博館長）を含む
比較文化学専攻	13	10	23	人間文化研究機構理事（1名）を含む
計	26	20	46	

担当教員の専門分野（五十音順）

地域文化学専攻

朝倉敏夫（韓国社会研究）
印東道子（オセアニア考古学）
臼杵 陽（国際関係論・中東地域研究）
宇田川妙子（南ヨーロッパ研究・性研究）
小長谷有紀（遊牧社会論・モンゴル研究）
佐々木史郎（文化人類学・北アジア研究）
佐藤浩司（民族建築学）
新免光比呂（宗教学・東欧研究）
竹沢尚一郎（宗教人類学・西アフリカ研究）
田村克己（東南アジア文化人類学）
塚田誠之（歴史民族学・中国研究）
寺田吉孝（民族音楽学・インド研究）
野林厚志（民族考古学・台湾／中国研究）
林 勲男（社会人類学・オセアニア研究）
松園万亀雄（社会人類学）
松山利夫（オーストラリア先住民研究）
三尾 稔（文化人類学・南アジア研究）
南 真木人（生態人類学・南アジア研究）
森 明子（文化人類学・中部ヨーロッパ研究）
八杉佳穂（言語人類学・中米文化史）
山本紀夫（民族植物学）
横山廣子（文化人類学・中国社会研究）
吉田憲司（博物館人類学・アフリカ研究）

比較文化学専攻

石森秀三（観光文明学・文化開発論）
大森康宏（映像人類学・民族誌映画）
押川文子（インド近現代社会史）
川口幸也（アフリカ同時代美術、展示表象論）
韓 敏（社会人類学・中国研究）
岸上伸啓（文化人類学・北方文化研究）
久保正敏（コンピュータ民族学・民族情報学）
小林繁樹（文化人類学・博物館学）
近藤雅樹（民俗学・民具研究）
笹原亮二（民俗学・民俗芸能研究）
庄司博史（言語学・言語政策論）
杉本良男（社会人類学・南アジア研究）
園 雄二（アンデス考古学・ラテンアメリカ研究）
園田直子（保存科学）
出口正之（比較NPO研究）
中牧弘允（宗教人類学・経営人類学・ブラジル研究）
長野泰彦（言語学・チベットビルマ語研究）
西尾哲夫（言語人類学・アラブ研究）
野村雅一（身体コミュニケーション論・南欧民族学）
福岡正太（民族音楽学・東南アジア研究）
Matthews, Peter J.（先史学・民族植物学）
山本泰則（文化資源情報学）
吉本 忍（民族工芸論・民族技術論）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法と目的

教員の多くが地域文化学・比較文化学両専攻にまたがって教育研究の指導にあたっています。

教育研究の方法は、個別の教員による授業や研究指導と、複数の教員の指導のもとに行われる共通のゼミナールからなっています。

共通のゼミナールには主として1年生を対象とする「基礎演習Ⅰ」（通称「1年生ゼミナール」）と論文作成の指導を内容とする「基礎演習Ⅱ」（通称「論文ゼミナール」）があります。

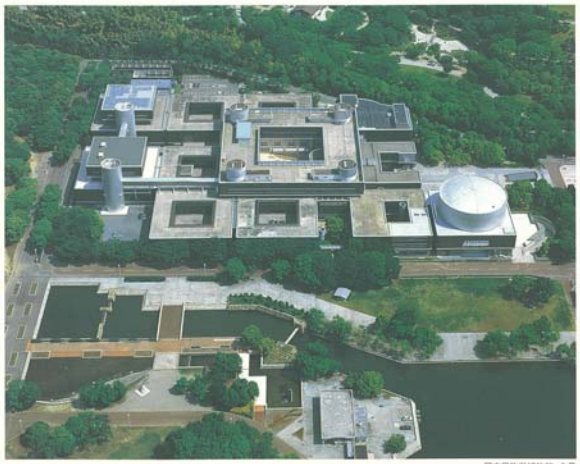
「1年生ゼミナール」は学生がそれぞれの研究計画を発表する「研究計画シリーズ」、各教員が交代で専門分野の講義をおこない、それに基づいて議論を進める「テーマ・シリーズ」、1年の教育研究課程を受けた学生があらためて研究計画を発表する「リサーチプロポーザル・シリーズ」からなっています。

平成13年度からは、民族学・文化人類学の視点や方法論を批判的に摂取することを目的として、共通科目（特論又は演習）が開講されています。

学生はおおむね1年次において現地調査（フィールドワーク）の準備をおこない、2年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミナール」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

両専攻の教育研究の目的は――

① 独創的な民族学・文化人類学の研究
② 長期のフィールドワークで得られた資料にもとづく学位論文の作成
③ 広い視野をもった、専門的教養を養うこと――です。



国立民族学博物館・全景

フィールドから見る世界 ～学生の研究フィールドマップ～



地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

大学院入学定員及び現員（平成17年4月1日現在）

専攻	入学定員	現員				備考
		1年次	2年次	3年次	計	
地域文化学専攻	3	3	5	15	23	
比較文化学専攻	3	3	5	17	25	
計	6	6	10	32	48	

総合研究大学院大学博士後期課程（文化科学研究科）入学定員は、以下のとおりとなっている。
国立民族学博物館、国際日本文化研究センター、総合研究大学院大学、北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、東京工業大学、一橋大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、岡山大学、広島大学、九州大学、奈良先端科学技術大学院大学、北陸先端科学技術大学院大学、総合研究大学院大学、国際基督教大学、学習院大学、早稲田大学、上智大学、東京理科大学、明治大学、立教大学、中央大学、法政大学、日本大学、東洋大学、駒澤大学、専修大学、北海学園大学、東北学院大学、東洋大学、関西大学、関西学院大学、同志社大学、立命館大学、龍谷大学、佛教大学、奈良大学、奈良女子大学、帝塚山大学、武庫川女子大学、甲南大学、神戸学院大学、広島修道大学、比治山大学、福岡大学、西南学院大学、久留米大学、熊本大学、鹿児島大学、琉球大学、東京外国語大学、東京学芸大学、東京農工大学、東京医科歯科大学、千葉大学、埼玉大学、筑波大学、筑波技術大学、横浜国立大学、静岡大学、名古屋工業大学、豊橋技術科学大学、三重大学、滋賀大学、京都教育大学、京都工芸繊維大学、奈良教育大学、和歌山大学、鳥取大学、島根大学、岡山大学、広島大学、山口大学、徳島大学、香川大学、愛媛大学、高知大学、九州大学、佐賀大学、長崎大学、熊本大学、大分大学、宮崎大学、鹿児島大学、琉球大学、東京藝術大学、東京医科歯科大学、東京外国語大学、東京芸術大学、名古屋市立大学、京都市立芸術大学、大阪市立大学、神戸市外国語大学、兵庫県立大学、奈良県立大学、岡山県立大学、広島市立大学、北九州市立大学、福岡女子大学、長崎県立大学、熊本県立大学、沖縄県立芸術大学、Leuven Polytechnic（ベルギー）、国立民族学博物館（韓国国際研究部）

「卒業生」からのメッセージ1

（大学院博物館学専攻 修了 現在 国立民族学博物館 助教授）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を終了した者には、博士の学位を授与する。又専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学
比較文化学専攻	文学

学位論文の内容によっては学術

学位論文リスト

【課程博士】

「数学的手法を用いた文化分析の方法について」	小島三弘（比較）	[H4.3.31 学術]
「シドニーにおける都市アボリジニの研究　伝統と民族の創出」	鈴木清史（比較）	[H6.3.24 文学]
「オルドス・モンゴル族の社会構造―ヤスの機能とその歴史的変容―」	楊　海英（地域）	[H6.9.20 文学]
「ペルーにおける山の神信仰の現在性 ―アンデスの宗教的世界のダイナミズム―」	細谷広美（地域）	[H7.3.23 文学]
「ビルマにおけるウェイザー信仰の研究」	土佐桂子（比較）	[H7.3.23 文学]
「韓国社会の動態と「両班化」 ―忠清北道阿房郡における門中と儒式儀礼の検討を通して」	岡田浩樹（地域）	[H8.3.21 文学]
「中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究」	曹　建南（地域）	[H8.3.21 文学]
「歌に表象される落村意識―奄美における「シマの歌」の研究―」	中原ゆかり（比較）	[H8.3.21 文学]
「四合院家屋の文化人類学的研究―人間と自然との相互作用の視点から」	杉山京子（地域）	[H10.3.24 文学]
「モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究 ―アルタイ・ハイラハ叙事詩を事例として―」	藤井麻湖（地域）	[H10.3.24 文学]
「カストム・メレシン―ヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および 民間医療観の現代的位相」	白川千尋（地域）	[H10.3.24 文学]
「韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究」	李　善愛（比較）	[H10.3.24 文学]
「東南中国の漢族社会組織とその変容―閩南農村社会における宗族の研究」	潘　宏立（比較）	[H10.3.24 文学]
「芸の伝承―ジャワ島・チルボンの仮面舞踏を中心に」	福岡まどか（比較）	[H10.3.24 文学]
「Overt First and Second Person-Designating Terms in Japanese Discourse ―A Pragmatic Perspective―」	Riikka Lansisalmi （比較）	[H10.3.24 文学]
「「二重の窮乏」下の平等理念―現代世界とキリバス南部環礁の社会生活―」	風間計博（地域）	[H10.9.30 文学]
「建築と文化・社会との相互作用 ―中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象として―」	栗原伸治（地域）	[H10.9.30 学術]
「カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容 ―宗教共同体と開発の視点から―」	子島　進（地域）	[H11.3.24 文学]
「地域主義運動における言語と知識人 ―エストニア南部ヴォル地方の事例から―」	寒水明子（地域）	[H11.3.24 学術]
「英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究 ―文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相―」	塩路有子（比較）	[H12.9.29 文学]
「北タイ・アカの家屋に関する研究―家屋の形式とその変化への視点から―」	清水郁郎（地域）	[H13.3.23 文学]
「韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化 ―忠清南道公州市を中心として活動する薬草商人を例に―」	林　史樹（地域）	[H13.3.23 文学]
「現代インドネシアにおけるジャワ大衆演劇クトプラの研究」	青木武信（比較）	[H13.3.23 文学]
「南ラオス村落社会における政治過程の研究 ―シダの村における「連帯」と闘争―」	中田友子（地域）	[H14.3.22 文学]
「20世紀前半のボリビアにおける先住民教育と植民地主義」	吉江貴文（地域）	[H14.3.22 文学]
「カメルーンにおける「商売の民」バミレケの都市人類学的研究」	野元美佐（比較）	[H14.3.22 文学]
「タイ式医療の構築とタイ・マッサージ ―社会的文脈による権威的知識の多様性―」	飯田淳子（地域）	[H15.3.24 文学]

「インドネシア・スンダの食文化―言語人類学的観点から―」	阿良田麻里子（地域）	[H17.3.24 文学]
「韓国の仮面劇「固城五広大」の伝承と演戯者 ―解放後の韓国社会における民俗芸能の変遷から―」	高　正子（地域）	[H17.3.24 文学]

【論文博士】

「An Areal-Typological Study of Middle American Indian Languages」	八杉佳穂	[H6.3.30 文学]
「農村女性からみたトルコの「近代化」―世俗主義、イスラーム、女性の相互関係」	中山紀子	[H9.3.24 文学]
「南タイにおける実践宗教―ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から―」	西井涼子	[H9.3.24 文学]
「セネガルの公権力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究」	小川　了	[H9.3.24 文学]
「メラネシアの政治的リーダーシップと開発 ―ソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐって―」	関根久雄	[H10.9.30 文学]
「南インドの農村におけるカースト内関係としての親族 ―コング・ヴェッラーラの事例研究―」	杉本星子	[H10.9.30 文学]
「アイヌ民族における神送りの研究―沙流川流域を中心に―」	萱野　茂	[H13.3.23 学術]
「低湿地立地の遺跡にみる縄文時代本州西部地域の生業活動―縄文時代早期末から 中期初頭における若狭湾沿岸と琵琶湖周辺地域の動物考古学的考察―」	内山純蔵	[H14.3.22 文学]
「考古学における数量化と数理的手法の研究」	及川昭文	[H14.3.22 学術]
「総管信仰―近世江南農村社会と民間宗教―」	濱島敦俊	[H14.9.30 学術]
「中国の食事方法―歴史人類学的考察―」	西澤治彦	[H15.3.24 文学]
「台湾原住民のイノシシ（*Sus scrofa taivanus*）狩猟の民族考古学的研究： 動物遺存体研究の方法論構築にむけて」	野林厚志	[H15.3.24 学術]
「The Transformation and Social Functions of the sNang zhig Family and its Monastery ―An Ethnographic Description of the Bon Tradition in Amdo」	才譲　太	[H16.9.30 学術]
「利用者の視点にたった博物館の理念と活動様式の研究」	春谷知夫	[H16.9.30 文学]
「トビニタイ文化の集団構成と生計戦略 ―北海道東部における「中世アイヌ社会」成立に至る一階梯―」	大西秀之	[H17.3.24 文学]

「卒業生」からのメッセージII

阪南大学　国際コミュニケーション学部　助教授　**塩路有子**（平成12年9月修了）

総合研究大学院大学の文化科学研究科は、大阪千里万博記念公園の中の国立民族学博物館に併設されている。私は、大学院生時代、その広い公園の緑の中を歩いて通学した。そこは、交通アクセスがあまりよくない。知る人ぞ知る「陸の孤島」である。しかし、その孤島は、豊富な知的資源をもっていた。幅広いテーマと多様な地域を専門とする研究者（教員）がおり、全国そして海外からの研究者が参加する共同研究会やシンポジウムが開かれる。大学院生は、自分の研究テーマや関心領域と程度に応じて、それらの知的資源に触れることができる。大学院の論文ゼミナールでは、教員たちの各研究領域からの指摘や質問を受け、あるときは自分の研究に関する議論が白熱する。つまり、そうして多様な角度から自分の研究を捉えなおす機会を与えてくれる。それは、今から思うと、実に得がたい貴重な経験だった。さらに、共同研究会やシンポジウムは、その分野の専門家である研究者が議論を交わす場であるため、その分野の最先端で何が問題とされているかを知る絶好の機会である。私は、英国を研究対象地域とし、観光人類学という新しい研究分野を志していた。その意味でも、多角的な視座と最先端の議論は、重要で価値あるものだった。それらの知的経験は、他では得られなかっただろうと振り返ると、「陸の孤島」も決して悪くはない。



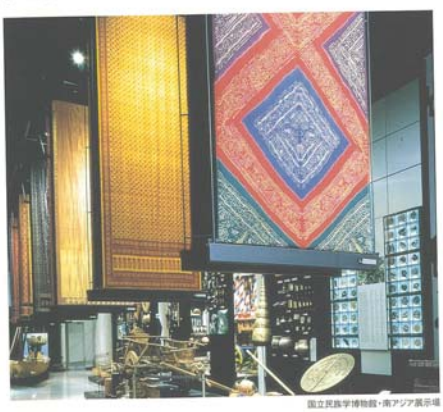
地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する

国立民族学博物館長　**松園　万亀雄**

文化人類学＝民族学は世界の諸民族の文化や社会を研究する学問です。いまは世界各地で人、モノ、情報が急激な勢いで飛び交い、移動している時代です。かつては当然とされていた社会の秩序がこわされ、混乱と葛藤が世界を覆っています。民族学を研究する者にとっては、挑戦的な課題がつぎつぎに突きつけられているといわねばなりません。それだけに人間と社会についての斬新な着想をつむぎだすための、幅広い視野と豊かな想像力が私たちには求められています。

国立民族学博物館には、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置されています。博士課程後期3年に在籍しようとする学生は、近い将来、大学や研究機関で教育研究にたずさわり、また文化人類学＝民族学の知識を応用して、日本や世界の人々の生活に実践的にかかわる仕事に就くことになります。

国立民族学博物館は優秀な教授陣を擁しており、また文献資料その他の研究環境の面でも我が国随一である、と私は自信をもっていうことができます。入学されるみなさんは在学中に学位論文を書きあげ、一人前の研究者として社会に飛び立ってほしいものです。



国立民族学博物館・南アジア展示場

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館（民博）は、わが国における民族学（文化人類学）の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立された。民博は、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究を進め、学術情報を集積する一方、その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することを使命としている。1989年には、総合研究大学院大学の文化科学研究科地域文化学専攻と比較文化学専攻が民博を基盤機関として設置され、民博での博士後期課程の教育が開始された。また、1994年には、地域研究企画交流センターが新たに設けられた。このセンターは、既存の関連研究機関をネットワーク化し、総合的な地域研究を推進するための中心組織として、民博内に設置されたものである。

以上のように、国立民族学博物館は、「博物館をもつ研究所」として世界的にみても類例のない規模と機能を有している。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっている。民博の展示は、常設展示と特別展示とで構成されている。このうち常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなる。一方、特別展示は、特定のテーマに焦点を当て、年に数回、期間を限って開催されている。

民博は、2004年4月より、国立大学と足並みをそろえて、法人組織となった。法人の正式名称は、「大学共同利用機関法人人間文化研究機構」であるが、民博は、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所とともに、その一員として再出発した。法人化にともない、民博の研究部も、従来の4研究部2センター体制から3研究部（民族社会、民族文化、先端人類科学）3センター（研究戦略センター、文化資源研究センター、地域研究企画交流センター）体制に組織替えがなされた。研究活動の機動性を高めるとともに、その成果をより広くわかりやすく社会に伝えていくための措置である。民族学（文化人類学）を基礎としつつ、機関と分野の別を超えて、人間文化の総合的理解に至ろうとする、民博の新たな活動が始まっている。

所蔵民族学資料（平成17年4月1日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	166,715点	映像資料	6,872点	日本語図書	229,648冊
国内資料	88,829点	音響資料	62,447点	外国語図書	381,576冊
計	255,544点	計	69,319点	計	611,224冊
				日本語雑誌	9,204冊
				外国語雑誌	6,213冊
				計	15,417冊

地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み

昭和63年10月　総合研究大学院大学開学【全学】
平成元年4月　文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）設置、学生受入、授業開始
平成4年4月　文化科学研究科に国際日本文化研究センターを基盤機関とする国際日本研究専攻設置、学生受入
平成7年2月　葉山キャンパス本部共通棟が竣工、この年から入学式を同キャンパスにて総研大全体で挙行【全学】
平成11年4月　先導科学研究科学生受入（地域文化学・比較文化学両専攻併任教官の一部、先導科学研究科の併任に）【全学】
文化科学研究科に国立歴史民俗博物館を基盤機関とする日本歴史研究専攻設置、学生受入
平成12年10月　「オープンキャンパス」開催（年1回）
平成13年4月　地域文化学・比較文化学両専攻の同窓生ネットワーク発足
文化科学研究科にメディア教育開発センターを基盤機関とするメディア社会文化専攻設置、学生受入
平成15年4月　文化科学研究科に国文学研究資料館を基盤機関とする日本文学研究専攻設置、学生受入

年度別学位授与者数

	地域文化学専攻		比較文化学専攻		計
	課程博士	論文博士	課程博士	論文博士	
平成3年度			1		1
平成5年度			1	1	2
平成6年度	2		1		3
平成7年度	2		1		3
平成8年度		3			3
平成9年度	3		4		7
平成10年度	4	2			6
平成12年度	2		2	1	5
平成13年度	1	1	2	1	5
平成14年度	1	1		2	4
平成16年度	2	3			5
計	17	10	12	5	44

入学者選抜試験倍率

平成	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年
志願者数	40	27	22	17	23	31	23	28	18	19
合格者数	6	6(2)	6(1)	7	6	8	8	7	6	7(1)
倍率	6.7	4.5	3.7	2.4	3.8	3.9	2.9	4.0	3.0	2.7

※（ ）は入学辞退者で内数。

合格者出身大学院機関別累計

平成	元年～7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	計
国立	27(5)	1	6(2)	4(1)	4	5	5	4	5	3	4(1)	68(9)
公立	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
私立	9(1)	5	0	2	2	(1)	3	1	1	2(1)	2	27(1)(2)
海外	8(1)	0	0	0	1	1	0	2(1)	1	1	1	15(1)(1)
合計	44(7)	6	6(2)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	6(1)	7(1)	111(11)(3)

※（ ）は入学辞退者で内数。（ ）内は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身（1名）者は学部卒で資格認定による。

合格者出身大学院地方別累計

平成	元年～7年	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	計
北海道	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
関東	20(4)	4	4(2)	3(1)	4	2(1)	3	3	2	2	1	48(7)(1)
中部	4	2	0	2	0	0	0	1	1	1	1(1)	12(1)
近畿	9(2)	0	1	1	2	3	4	2	3	2(1)	3	30(2)(1)
中国	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4
九州	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
海外	8(1)	0	0	0	1	1	0	2(1)	1	1	1	15(1)(1)
合計	44(7)	6	6(2)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	6(1)	7(1)	111(11)(3)

※（ ）は入学辞退者で内数。（ ）内は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身（1名）者は学部卒で資格認定による。

総合研究大学院大学について



ごあいさつ

総合研究大学院大学長　小平　桂一

総合研究大学院大学、略して「総研大」は、基礎学術分野の総合的発展と高度な研究的資質を備えた知的市民の育成を目指して、大学院学生の教育を行なうために、1988年に設立されました。現在では、神奈川県の葉山町に大学本部を持ち、各地に置かれた18の国立学術研究機関等を基盤として、大学院生を分散配置し、ユニークな博士課程教育を展開しています。これらの基盤機関は、人文系から自然科学系にわたる、各専門分野に設置された「大学共同利用機関」で、一大学では維持・運用できない大型最新の装置・設備・システムによる研究や、広範・大量な資料に基づく長期的研究、従来の大学講座の枠を超えた学問分野の研究などが行われています。

全国の大学研究者や大学院生が、共同で利用し研究を進めているので、異なる地域や専門領域の間の交流や協力が促進され、新しい研究の芽や学際領域が伸び易い、優れた環境にあります。また、わが国を代表する大型・最新の設備や大量の基礎資料を備えているので、当該分野の国際的窓口となって、多くの国際共同研究も行われており、大学院生にも、早くから国際性を身につける種々の機会を提供しています。これから、大学・大学院教育が大きく変わろうとしているとき、わが国の高等学術研究・教育の要の一環として、これら「大学共同利用機関」の役割は、一層その重要性を増すものと確信します。

二十一世紀の国際社会では、各学問分野の深化と共に、多様な学問分野を総合する広い視野と知性が要求されることは、間違いありません。とりわけ、人文系学問の総合的推進や自然科学との融合が、重要な課題となることでしょう。そこに、異なる専門分野の諸基盤機関にまたがって設立され、「総合」と「分散」の両機能を果たすべき「総研大」の意義と使命があります。「総研大」教員の多くは、基盤機関の教員が併任していますが、学生教育に当たっては、専門研究領域・分野を超えて、「総研大」教員としての使命を自覚するよう願っています。また、進学を希望する学生も、単に専門分野で学位を取得しようとするだけでなく、「総研大」にふさわしい考え方や生き方を、少しでも学ぼうという意欲を持って臨むよう、大いに期待しています。

建学にあたられた長倉三郎先生、基礎を築き上げられた廣田榮治先生を始めとする諸先達の努力により、今や「総研大」は「青年期」に入ろうとしています。折も折り、世界的な潮流の中でわが国も、国立大学の制度改革を断行しようとしています。多くの大学や研究所が、社会の短期的・直接的な要請に応えて教育・研究活動を行なおうとするなかで、わが国の将来に欠くことのできない、長期的・基礎的な学術分野を理解し、あるいは担い、あるいは新しい道を切り開いていこうとする、高度な知的市民を育成することは、必須の国家的課題です。大学共同利用機関等を基盤とする「総研大」こそは、広範囲にわたる教員団の協力の下に、工夫を凝らして、「新しい大学院生」を育てていかなければなりません。基盤機関が地域的に分散している点は、ともすると、「総研大」の働きにとって負担になりがちですが、それを乗り越え活かす工夫も、していきたいと思っています。
関係各位には、引き続きご理解とご協力を賜りたく、ここに改めてお願い申し上げる次第です。

創設の趣旨・目的

近年、従来の学問分野の枠を越えた独創的、国際的な学術研究の推進や、科学の新しい流れを創造する先導的学問分野の開拓の重要性が強く要請されております。

本学は、このような要請に対応する研究者を養成するため、学問諸分野で先端的な研究を行い、国内外の研究者の共同研究の推進に中心的な役割を果たしているく大学共同利用機関＞の最先端を行く高度で優れた研究環境を活用した、我が国最初の大学院大学として創設されました。本学は、学術研究の新しい流れに先導的に対応できる、幅広い視野を持った国際的で独創性豊かな研究者を養成します。また、従来の学問分野の枠を越えた独創的、国際的な学術研究の推進並びに先導的学問分野を開拓します。

総合研究大学院大学の特徴

我が国唯一の博士教育制度を採用

■博士5年教育と博士後期3年教育を実施　ー新しい研究大学院を目指してー
■複数指導教員体制　ー学生1人に対し教員2～3人が対応ー
■少数精鋭主義　ー明確な目的意識のもとに集まる入学者ー

葉山本部・大学共同利用機関等での全学教育研究事業

■世界最先端研究者である教員集団
■異分野間の研究者と交流できる日常環境
■先導的学問分野の開拓

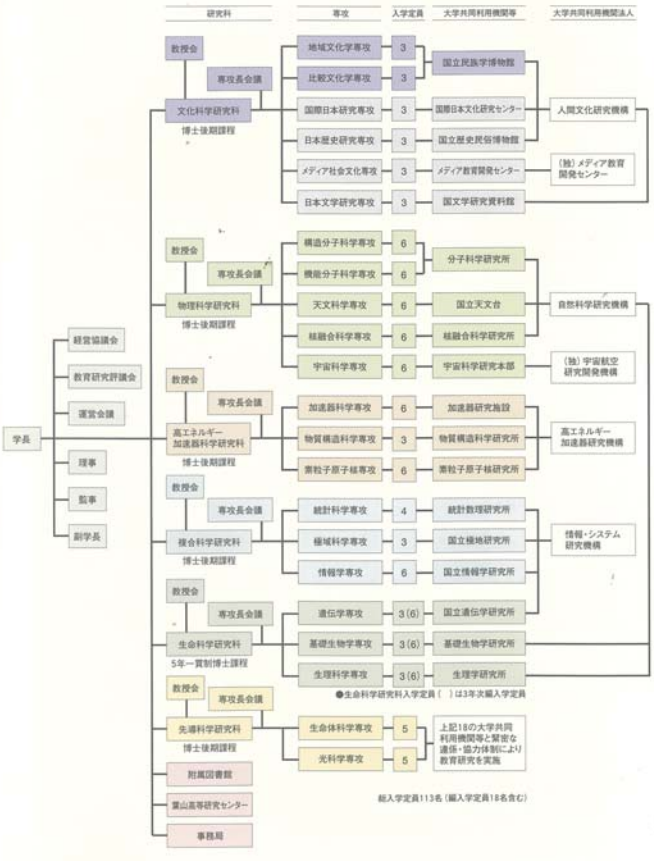
国際色豊かな研究環境の中での活動

■開かれた研究環境
■世界の最先端研究技術・研究者の交流拠点
■幅広い視野・柔軟な思考力が身に付く
■世界標準が身に付く

世界最高水準の資料・施設・設備の中での研究活動

■国際的にも僅少で学術的価値のある文献・資料を利用
■データベース化された学術データを利用
■世界規模の加速器・望遠鏡、観測用ロケット・衛星を利用
■プラズマ発生装置、南極観測基地などを利用

大学の組織



出願資格等

(1) 出願資格

次のいずれかに該当する者とする。

①修士の学位又は専門職学位を有する者及び平成18年3月までに取得する見込みがある者
②外国において、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び平成18年3月までに授与される見込みがある者
③外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び平成18年3月までに授与される見込みがある者
④我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者
⑤大学を卒業し、大学、研究所等において、平成18年3月までに2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑥外国において学校教育における16年の課程を修了した後、又は外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、平成18年3月までに2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑦本学において、個別の入学資格審査により、修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、平成18年4月1日において24歳に達しているもの
（⑤、⑥又は⑦により出願しようとする者は、事前に本学で実施する「学力の認定」を受ける必要がある）

(2) 選抜方法（文化科学研究科）

選抜は、書類選考、修士論文又はそれに代わるものの審査及び面接により行う。

①書類選考
志望研究内容等、その他研究科が提出を求めた資料について行う。
②修士論文等の審査
修士の学位を有する者及び修士課程在学中の者については修士論文、また学力認定により出願資格が認められた者については刊行された論文又は著作を審査する。
③面接
面接は書類選考・論文審査合格者についてのみ行うものとする。書類選考・論文審査の合否は面接日の約1週間前までに、入学願書に記載された連絡先に文章で個別に連絡する。（なお、合否通知が面接日の1週間前を過ぎても到着しない場合は、総合研究大学院大学事務局教育研究企画室学生厚生係まで問い合わせること。）
面接は、主として修士論文（修士論文のない者は発表した学術論文等又はこれまでに行った研究の要旨）の内容及び志望研究内容について行う。

◎詳細は募集要項を請求のうえ確認してください。

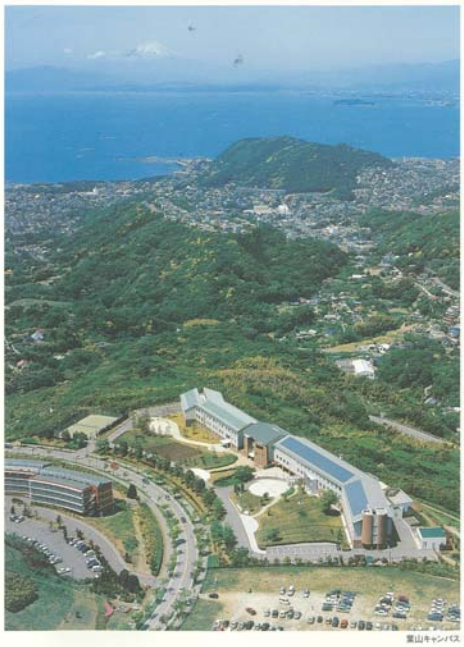
(3) 修了要件

本研究科の専攻に3年以上在学し、所定の単位数以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び試験に合格すること。
ただし、特に優れた研究業績を上げた者については、在学期間を短縮して修了を認めることがある。

募集要項請求先

募集要項の請求を郵送で行う場合は、封筒の表に「学生募集要項請求（文化科学研究科地域文化学専攻・比較文化学専攻）」と朱書し、裏には住所、氏名、郵便番号を記載するとともに返信用封筒（角形2号・縦33.2cm×横24cm、受信者の住所、氏名、郵便番号を明記し、340円切手を貼り付けたもの）を同封し、下記宛に行うこと。

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
総合研究大学院大学事務局教育研究企画室



葉山キャンパス

問い合わせ先

国立民族学博物館
管理部研究協力課研究協力係

〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151（代表）
06-6878-8236（専攻担当）　URL http://www.minpaku.ac.jp/
FAX 06-6878-8479　E-mail souken@idc.minpaku.ac.jp

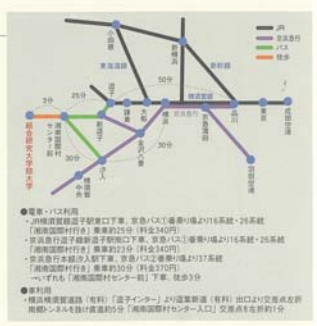


●大阪モノレールで公園東口駅下車、無料地域を通って徒歩約13分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅よりバスで日本庭園前下車徒歩15分
●大阪モノレールで万博記念公園駅下車徒歩15分（ただし、公園中央口経由自然文化園は有料です）
●タクシーは民博職員通用口まで入ることができます。

総合研究大学院大学　事務局

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電話 046-858-1500（代表）
FAX 046-858-1541
URL http://www.soken.ac.jp/





'06 総合研究大学院大学
文化科学研究科
The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies

地域文化学専攻
比較文化学専攻
概要
Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies



目　次

文化科学研究科について	1
専攻の概要	2
地域文化学専攻	2
比較文化学専攻	3
地域文化学専攻授業概要	4
比較文化学専攻授業概要	6
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員	8
担当教員の専門分野	8
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法と目的	9
フィールドから見る世界～学生の研究フィールドマップ～	10
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生	10
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位	12
学位論文リスト	12
地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する	14
国立民族学博物館の概要	15
地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み	16
年度別学位授与者数	16
入学者選抜試験倍率	16
合格者出身大学院機関別累計	16
合格者出身大学院地方別累計	16
総合研究大学院大学について	17
ごあいさつ	17
創設の趣旨・目的	18
総合研究大学院大学の特徴	18
大学の教育研究組織	19
出願資格等	20
募集要項請求先	21
問い合わせ先	



文化科学研究科について

研究科長　新谷　尚紀

総合研究大学院大学は、学部をもたず大学院だけを置く国立大学として、昭和63年（1988）10月1日に開学した我が国最初の大学院大学です。文化科学研究科は、総合研究大学院大学の一研究科であり、まず、平成元年（1989）4月に、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻の二専攻の設置から出発しました。その後、平成4年（1992）4月には、国際日本文化研究センターを基盤として国際日本研究専攻が、平成11年（1999）4月には、国立歴史民俗博物館を基盤として日本歴史研究専攻が、平成13年（2001）4月にはメディア教育開発センターを基盤としてメディア社会文化専攻が、平成15年（2003）4月には、国文学研究資料館を基盤とする日本文学研究専攻が、それぞれ増設されました。そして、平成16年（2004）4月からは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構が設立され、四つの研究機関（国立民族学博物館、国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館及び国文学研究資料館）と独立行政法人メディア教育開発センターをあわせた五つの研究機関を基盤とし国立大学法人総合研究大学院大学文化科学研究科となりました。

国立民族学博物館は、日本における民族学・文化人類学の研究センターとしての機能をもち、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究を多角的に推進しています。近年の国際化・国際交流の著しい進展と活発化、その一方での民族紛争の多発など、研究課題の多様化・グローバル化とこれに伴う研究分野の拡大は、民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めつつあります。国際日本文化研究センターは、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力を行う機能をもつ研究機関です。近年の国際化の中で日本に対する関心が高まっており、「日本」に関する総合的な研究が世界的な規模で進められています。国立歴史民俗博物館は、文献資料・民俗資料・考古資料を学際的に研究することによって新しい歴史学の創造を目指している研究機関で、世界史的な広い視野からの日本歴史理解へのアプローチを開拓するとともに、国際的な日本歴史研究を推進しています。メディア教育開発センターは、高等教育におけるマルチメディアの利用を促進するための我が国における中核的機関であり、多様なメディアを高度に利用して行う教育の内容、方法等を研究開発し、その成果を提供することを目的として、先導的な研究を行っています。国文学研究資料館は日本全国に散在する前近代1,200年間の文献資料を調査研究し、その収集、整理、保存にあたっている研究機関で、その資料情報を広く日本文学研究者の利用に供しています。

この五つの研究機関を基盤として、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化に関して地域的・個別的に対象を設定して教育研究を行う「地域文化学専攻」と、そのような諸民族の社会・技術・宗教・芸術等について通文化的手法に基づき教育研究を行う「比較文化学専攻」、国際的な視野で日本文化と文明について教育研究を行う「国際日本研究専攻」、および文献史学の枠にとらわれず、広く歴史学・考古学・民俗学を中心に関連諸科学との協業により、総合的な日本歴史解明を目指した教育研究を行う「日本歴史研究専攻」、メディアと文化、社会、人間の相互作用について、学際的かつ総合的な教育を行う「メディア社会文化専攻」、そして、文化科学の視点から文学資源の実態、作品の形成と享受の動態、その制度・環境などを総合的に研究する視点に立って教育研究を行う「日本文学研究専攻」、の六専攻を置き、国際的・学際的な教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目指しています。

専攻の概要

地域文化学専攻



専攻長　小長谷　有紀

アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としている。本専攻においては、現地調査及びこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度の研究者の養成を行う。

教育研究指導分野の概要

大講座	教育研究指導分野	概要
アジア地域文化学	アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
	アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
ヨーロッパ・アフリカ地域文化学	ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
	アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アメリカ・オセアニア地域文化学	アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
	オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
基礎科目		
共通科目		
総合教育科目		

比較文化学専攻



専攻長　岸上　伸啓

社会、技術、宗教、言語、芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としている。諸民族の文化の通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指す。本専攻においては、従来の文化人類学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度な専門性をもった研究者の養成を行う。

教育研究指導分野の概要

大講座	教育研究指導分野	概要
民族社会・宗教学	民族社会	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治集団、法規範、所有と分配等に関する通文化的・理論的研究
	民族宗教	諸民族の祭祀、神話、宇宙観等に関する通文化的・理論的研究
民族技術学	民族技術	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究
民族言語・芸術学	民族言語	諸民族の言語、文字、伝達等に関する通文化的・理論的研究
	民族芸術	諸民族の音楽、芸能、文芸、造形等に関する通文化的・理論的研究
基礎科目		
共通科目		
総合教育科目		



ゼミの様子



院生室の様子

地域文化学専攻授業概要（平成18年度）

	授業科目	授業科目の内容	担当教員
アジア地域文化I	東アジア文化研究 I	東アジア社会と文化に関する講述	助教授 野林 厚志
	東アジア文化研究 II	朝鮮半島の社会と文化に関する講述	教 授 朝倉 敏夫
	東アジア文化研究 III	中国における諸民族の社会と文化に関する講述	教 授 塚田 誠之 助教授 横山 廣子
	東アジア文化研究特論 I	日本及び周辺諸民族の先住民文化に関する講述	助教授 野林 厚志
	東アジア文化研究特論 II	中国・東南アジアにおける社会変動に関する講述	助教授 横山 廣子
	東アジア文化研究特論III	中国南部諸民族の歴史民族学的研究に関する講述	教 授 塚田 誠之
	東アジア文化研究演習 I	東アジアにおける生活文化の研究に関する演習	教 授 朝倉 敏夫
	東アジア文化研究演習 II	中国西南部におけるエスニシティに関する演習	助教授 横山 廣子
	東アジア文化研究演習 III	中国南部における移住と文化の動態に関する演習	教 授 塚田 誠之
	中央アジア文化研究	中央アジア地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教 授 小長谷有紀
	北アジア文化研究	北アジアの伝統的生業に関する講述	教 授 佐々木史郎
	中央・北アジア文化研究特論 I	モンゴルの社会と文化に関する講述	教 授 小長谷有紀
	中央・北アジア文化研究特論 II	北アジア社会の生業を特徴づける狩猟・漁撈採集民の現状に関する講述	教 授 佐々木史郎
	中央・北アジア文化研究演習 I	中央アジア諸民族の遊牧と農耕の文化に関する演習	教 授 小長谷有紀
	中央・北アジア文化研究演習 II	北アジアのシャマニズム的世界観に関する演習	教 授 佐々木史郎
アジア地域文化II	東南アジア文化研究 I（大陸部）	東南アジア大陸部に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教 授 田村 克己
	東南アジア文化研究 II（島嶼部）	東南アジア島嶼部に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授 佐藤 浩司
	東南アジア文化研究特論 I	東南アジアの宗教と政治に関する講述	教 授 田村 克己
	東南アジア文化研究特論 II	東南アジアの建築人類学に関する講述	助教授 佐藤 浩司
	東南アジア文化研究演習 I	東南アジア大陸部の仏教信仰に関する演習	教 授 田村 克己
	東南アジア文化研究演習 II	東南アジアの生活財に関する演習	助教授 佐藤 浩司
	南アジア文化研究	南アジアに居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授 三尾 稔
	南アジア文化研究特論	ヒマラヤ地域、とくにネパールに居住する諸民族に関する講述	助教授 南 真木人
	南アジア文化研究演習	インドにおける伝統文化、宗教とナショナリズムについての諸問題について演習する	助教授 三尾 稔
	西アジア文化研究	中東地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授 西尾 哲夫
	西アジア文化研究特論	アラブ世界の民衆文化に関する講述	助教授 西尾 哲夫
	西アジア文化研究演習	中東・イスラーム文化に関する演習	助教授 西尾 哲夫
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ文化研究 I（東ヨーロッパ）	東ヨーロッパ地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授 新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究 II（中部ヨーロッパ）	中部ヨーロッパの歴史と文化に関する講述	助教授 森 明子
	ヨーロッパ文化研究 III（南ヨーロッパ）	南ヨーロッパ地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	助教授 宇田川妙子
	ヨーロッパ文化研究特論 I	バルカン諸民族の社会と文化に関する講述	助教授 新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究特論 II	ドイツ・オーストリアの社会と文化に関する講述	助教授 森 明子
	ヨーロッパ文化研究特論III	地中海周辺の社会と文化に関する講述	助教授 宇田川妙子
	ヨーロッパ文化研究演習 I	ヨーロッパ東部の文化研究に関する演習	助教授 新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究演習 II	中部ヨーロッパの生活文化研究に関する演習	助教授 森 明子
	ヨーロッパ文化研究演習III	ヨーロッパ南部の文化研究に関する演習	助教授 宇田川妙子

	授業科目	授業科目の内容	担当教員
アフリカ地域文化	アフリカ文化研究 I	アフリカに居住する諸民族の社会に関する講述	助教授 三島 禎子
	アフリカ文化研究 II	アフリカに居住する諸民族の文化に関する講述	
	アフリカ文化研究III	アフリカに居住する諸民族の歴史に関する講述	教 授 竹沢尚一郎
	アフリカ文化研究特論 I	国家および無国家社会の代表的民族誌による アフリカ諸社会と文化についての講述	助教授 三島 禎子
	アフリカ文化研究特論 II	さまざまなメディアによるアフリカ文化の表象のあり方を検討し、 その問題点と可能性を考察する	
	アフリカ文化研究特論III	アフリカの歴史と文化の表象に関する講述	教 授 竹沢尚一郎
	アフリカ文化研究演習 I	アフリカ諸民族の人口動態と移動に関する演習	助教授 三島 禎子
	アフリカ文化研究演習 II	アフリカ諸民族の文化の動態に関する演習	
	アフリカ文化研究演習III	アフリカ諸民族の儀礼と宗教に関する演習	教 授 竹沢尚一郎
アメリカ地域文化	アメリカ文化研究 I（北米）	北米地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	
	アメリカ文化研究 II（中米）	中米地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教 授 八杉 佳穂
	アメリカ文化研究III（南米）	南米地域に居住する諸民族の社会と文化に関する講述	教 授 山本 紀夫
	アメリカ文化研究特論 I	ラテンアメリカの歴史人類学に関する講述	助教授 齋藤 晃
	アメリカ文化研究特論 II	中米諸民族の歴史と文化に関する講述	教 授 八杉 佳穂
	アメリカ文化研究特論III	南米諸民族の歴史と文化に関する講述	教 授 山本 紀夫
	アメリカ文化研究演習 I	ラテンアメリカの歴史人類学に関する演習	助教授 齋藤 晃
	アメリカ文化研究演習 II	中米諸民族の言語文化に関する演習	教 授 八杉 佳穂
	アメリカ文化研究演習III	南米における環境と生業に関する演習	教 授 山本 紀夫
オセアニア地域文化	オセアニア文化研究 I	オーストラリアに居住する先住民の社会と文化に関する講述	教 授 松山 利夫
	オセアニア文化研究 II	オセアニアにおける植民地性に関する講述	助教授 林 勲男
	オセアニア文化研究III（島嶼部）	オセアニア島嶼部に生活する人々の社会と文化に関する講述	教 授 印東 道子
	オセアニア文化研究特論 I	グローカリズムの観点における、 先住民文化の情報学的・メディア論的講述	教 授 松山 利夫
	オセアニア文化研究特論 II	ニューギニアの自然災害と文化についての講述	助教授 林 勲男
	オセアニア文化研究特論III	オセアニアの伝統的土器文化についての講述	教 授 印東 道子
	オセアニア文化研究演習 I	オーストラリア・アボリジニの儀礼・宗教に関する演習	教 授 松山 利夫
	オセアニア文化研究演習 II	オセアニア諸民族文化の動態に関する演習	助教授 林 勲男
	オセアニア文化研究演習III	オセアニア先史社会における環境適応に関する演習	教 授 印東 道子
基礎科目	地域文化学基礎演習 I	民族学・文化人類学の先端的理論を講述し、各地域における 実情の検証とともにその理論を批判的に研究する	助教授 新免光比呂
	地域文化学基礎演習 II	地域文化を中心とする民族学・文化人類学研究の理論的・ 方法論的枠組を明確にする研究をゼミナール形式で行う	助教授 齋藤 晃
共通科目	地域文化学特論 I	地域文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての講述	助教授 森 明子
	地域文化学特論 II	地域文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての講述	教 授 竹沢尚一郎
	地域文化学演習 I	地域文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての演習	
	地域文化学演習 II	地域文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての演習	
総合教育科目	学生セミナー		
	超研大レクチャー I ～III		

※年度によって開講科目が異なる

比較文化学専攻授業概要（平成18年度）

	授業科目	授業科目の内容	担当教員
民族社会	民族社会研究 I（家族・親族）	世界の諸民族の家族・親族・婚姻などについての講述	教 授 杉本 良男
	民族社会研究 II	世界の諸民族における近代的な組織形態についての講述	助教授 平井京之介
	民族社会研究III（法）	世界の先住民族にかかわる法制度や政治協定についての講述	教 授 岸上 伸啓
	民族社会研究IV（社会構造）	諸民族の社会構造を、その文化構造や 経済的仕組みなどとの関わりにおいて論じる	助教授 韓 敏
	民族社会研究V（社会生態）	世界の諸民族の市場・流通・交換などの社会形態についての講述	教 授 出口 正之
	民族社会研究特論 I	多民族社会の中国における社会構造の比較研究に関する講述	助教授 韓 敏
	民族社会研究特論 II	北方先住民族の社会と文化の比較研究に関する講述	教 授 岸上 伸啓
	民族社会研究特論III	諸民族社会とNPO-NGOの比較研究に関する講述	教 授 出口 正之
	民族社会研究演習 I	中国における国民文化・地域文化・民族文化の再編成についての演習	助教授 韓 敏
	民族社会研究演習 II	現代東南アジアの社会についての演習	助教授 平井京之介
	民族社会研究演習III	世界の諸地域における植民地主義と ナショナリズムの問題について比較検討する	教 授 杉本 良男
民族宗教	民族宗教研究 I（宗教行動）	仏教の諸民族の祭祀や宗教運動などの宗教行動について、 日本の祭や新宗教運動との比較を意図しながら講述する	教 授 中牧 弘允
	民族宗教研究 II（呪術・科学）	世界の諸民族の呪術と科学に対する認識についての講述	助教授 白川 千尋
	民族宗教研究III（儀礼）	儀礼と祭りの構造・過程・意味について講述する	助教授 笹原 亮二
	民族宗教研究IV（世界観）	世界の諸民族の世界観・聖俗観などについての講述	助教授 白川 千尋
	民族宗教研究特論 I	アメリカやブラジルなどにおける日本宗教を民族宗教としてとらえ その展開・受容・変容に関して講述する	教 授 中牧 弘允
	民族宗教研究特論 II	メラネシア諸民族の宇宙観の比較研究に関する講述	助教授 白川 千尋
	民族宗教研究特論III	オセアニアにおける伝統宗教の変容と外来宗教の受容についての講述	教 授 小林 繁樹
	民族宗教研究演習 I	宗教と観光のホモロジー（相同）など、宗教観光に関する演習	
	民族宗教研究演習 II	地中海地域諸民族の世界観とその歴史的変遷に関する演習	
	民族宗教研究演習III	アマゾン地域を中心とする南アメリカを対象に、 諸民族の宗教行動と外来宗教の影響に関する比較研究を行う	教 授 中牧 弘允
民族技術	民族技術研究 I（生産技術）	世界の諸民族における農耕技術などについての講述	教 授 關 雄二
	民族技術研究 II（保存技術）	技術と太平洋諸島への人の移住	助教授 マシウス, ピーター
	民族技術研究III（製作技術）	世界の諸民族の生産や生活用具などにかかわる 製作技術についての講述	教 授 吉本 忍
	民族技術研究IV（素材調査）	世界の諸民族の生活用具にかかわる技法や素材などの 自然科学的調査法の講述	助教授 園田 直子
	民族技術研究V（生活技術）	世界の諸民族の生活技術を対象に、技術の保持、および 創意の背景となる文化の態様についての講述	教 授 近藤 雅樹
	民族技術研究特論 I	南アメリカの先史社会の生業技術に関する講述	教 授 關 雄二
	民族技術研究特論 II	インドネシア染織技術の比較研究に関する講述	教 授 吉本 忍
	民族技術研究特論III	日本の近・現代における物質文化を 流通と形態比較の視点から講述する	教 授 近藤 雅樹
	民族技術研究演習 I	農業の歴史――植物学的、民族学的、考古学的アプローチ	助教授 マシウス, ピーター
	民族技術研究演習 II	伝統的なろびに近現代の民族絵画における技法と素材の比較研究	助教授 園田 直子
	民族技術研究演習III	アンデスの環境利用と文明形成に関する演習	教 授 關 雄二

	授業科目	授業科目の内容	担当教員
民族言語	民族言語研究 I（言語理論）	言語人類学の諸問題、研究対象を一般言語学に言及しつつ 対比的に概説する	教 授 庄司 博史
	民族言語研究 II（言語論）	認識のあり方が言語形式に現れる幾つかのトピックについて 研究論文の講読と批判を行う	
	民族言語研究III（比較言語）	世界の諸民族の言語を対象とする比較研究（比較言語学・ 対照言語学・言語類型論・その他）の方法に関する講述	助教授 菊澤 律子
	民族言語研究IV（文学）	世界の諸民族の言語と非言語的表現などの比較についての講述	
	民族言語研究特論 I	類型学的観点からウラル諸語と近隣諸語を比較する	教 授 庄司 博史
	民族言語研究特論 II	チベット・ビルマ系諸語の歴史を 再構するための方法についての講述	
	民族言語研究特論III	オーストロネシア諸語の比較研究に関する講述	助教授 菊澤 律子
	民族言語研究演習 I	言語の類型論的研究に関する演習	助教授 菊澤 律子
	民族言語研究演習 II	言語の実地調査法、記述言語学の方法、言語事実の 解釈方法等についての講述	
	民族言語研究演習III	少数言語の実態、言語運動、言語政策の調査分析について演習する	教 授 庄司 博史
	言語情報研究	世界の諸民族の文字使用についてその統計的性質、 テキストの検索インデックスの手法などについて講述する	教 授 久保 正敏
	言語情報研究特論	コンピュータ民族学の手法について評述し、 比較民族学を進めるために留意すべき問題点を講述する	教 授 久保 正敏
	言語情報研究演習 （民族資料情報学）	コンピュータを用いた民族資料情報の管理・分析・活用方法に ついて演習を行う	助教授 山本 泰則
民族芸術	民族芸術研究 I（比較芸能）	世界の諸民族の芸能の比較についての講述	助教授 笹原 亮二
	民族芸術研究 II（映像民族誌）	世界の諸民族の映像とのかかわりに関する比較構造研究	教 授 大森 康宏
	民族芸術研究III（民族造形）	世界の諸民族の造形の構造、機能などについての講述	教 授 小林 繁樹
	民族芸術研究IV（民族音楽）	世界の諸民族の音文化を通文化的な視点より 関連諸分野をも視野に入れ考察し講述する	助教授 寺田 吉孝 助教授 福岡 正太
	民族芸術研究V（民族芸能）	世界の芸術・芸能をめぐる表象の政治性、権力性について 講述及び討論する	教 授 吉田 憲司 助教授 川口 幸也
	民族芸術研究特論 I	日本の民族芸能に関する講述	助教授 笹原 亮二
	民族芸術研究特論 II	西欧社会における映画、映像の比較研究に関する講述	教 授 大森 康宏
	民族芸術研究特論III	諸民族の造形についての表象様式について批判的に検討する	教 授 吉田 憲司
	民族芸術研究演習 I	東南アジアの音楽資料を例に、音楽の分析、 比較方法を講述する。音響資料の扱い方もトレーニングする	助教授 福岡 正太
	民族芸術研究演習 II	映像音響の技術的研究と実技演習	教 授 大森 康宏
	民族芸術研究演習III	芸術文化の表現の諸問題に関する演習	助教授 川口 幸也
基礎科目	比較文化学基礎演習 I	民族学・文化人類学の先端的理論を講述し、通文化的研究に おける実情の検証とともに、その理論を批判的に研究する	助教授 寺田 吉孝
	比較文化学基礎演習 II	比較文化を中心とする民族学・文化人類学研究の理論的・ 方法論的枠組を明確にする研究をゼミナール形式で行う	助教授 平井京之介
共通科目	比較文化学特論 I	比較文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての講述	教 授 中牧 弘允
	比較文化学特論 II	比較文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての講述	教 授 岸上 伸啓
	比較文化学演習 I	比較文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての演習	教 授 吉田 憲司
	比較文化学演習 II	比較文化に関する民族学・文化人類学の理論や方法についての演習	
総合教育科目	学生セミナー		
	超研大レクチャー I ～III		

※年度によって開講科目が異なる

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員

現員（平成18年4月1日現在）

区　分	教　授	助教授	計	備　考
地域文化学専攻	11	12	23	基盤機関の長（民博館長）を含む
比較文化学専攻	12	11	23	
計	23	23	46	

担当教員の専門分野（五十音順）

地域文化学専攻

- 朝倉敏夫（韓国社会研究）
- 佐藤浩司（民族建築学）
- 野林厚志（民族考古学・台湾／中国研究）
- 南　真木人（生態人類学・南アジア研究）
- 印東道子（オセアニア考古学）
- 新免光比呂（宗教学・東欧研究）
- 林　勲男（民害人類学・オセアニア研究）
- 森　明子（文化人類学・中部ヨーロッパ研究）
- 宇田川妙子（南ヨーロッパ研究・性研究）
- 竹沢尚一郎（宗教人類学・アフリカ研究）
- 松園万亀雄（社会人類学）
- 八杉佳穂（言語人類学・中米文化史）
- 小長谷有紀（遊牧社会論・モンゴル研究）
- 田村克己（東南アジア文化人類学）
- 松山利夫（文化人類学・オーストラリア先住民研究）
- 山本紀夫（民族植物学）
- 齋藤　晃（歴史民族学・ラテンアメリカ研究）
- 塚田誠之（歴史民族学・中国研究）
- 三尾　稔（文化人類学・南アジア研究）
- 横山廣子（文化人類学・中国社会研究）
- 佐々木史郎（文化人類学・北アジア研究）
- 西尾哲夫（言語人類学・アラブ研究）
- 三島禎子（文化人類学・西アフリカ研究）

比較文化学専攻

- 大森康宏（映像人類学・民族誌映画）
- 小林繁樹（文化人類学・博物館学）
- 關　雄二（アンデス考古学・ラテンアメリカ研究）
- 福岡正太（民族音楽学・東南アジア研究）
- 川口幸也（アフリカ同時代美術、展示表象論）
- 近藤雅樹（民俗学・民具研究）
- 園田直子（保存科学）
- Matthews, Peter J.（先史学・民族植物学）
- 韓　敏（社会人類学・中国研究）
- 笹原亮二（民俗学・民俗芸能研究）
- 出口正之（比較NPO研究）
- 山本泰則（博物館情報学）
- 菊澤律子（言語学・オーストロネシア諸語）
- 庄司博史（言語学・言語政策論）
- 寺田吉孝（民族音楽学・インド研究）
- 吉田憲司（博物館人類学・アフリカ研究）
- 岸上伸啓（文化人類学・北方文化研究）
- 白川千尋（文化人類学・開発人類学）
- 中牧弘允（宗教人類学・経営人類学・ブラジル研究）
- 吉本　忍（民族工芸論・民族技術論）
- 久保正敏（コンピュータ民族学・民族情報学）
- 杉本良男（社会人類学・南アジア研究）
- 平井京之介（経済人類学・東南アジア研究）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法と目的

教員が地域文化学・比較文化学両専攻に分かれて教育研究の指導にあたっています。

教育研究の方法は、個別の教員による授業や研究指導と、複数の教員の指導のもとに行われる共通のゼミナールからなっています。

共通のゼミナールには主として1年生を対象とする「基礎演習I」（通称「1年生ゼミナール」）と論文作成の指導を内容とする「基礎演習II」（通称「論文ゼミナール」）があります。

「1年生ゼミナール」は学生がそれぞれの研究計画を発表する「研究計画シリーズ」、各教員が交代で専門分野の講義をおこない、それに基づいて議論を進める「テーマ・シリーズ」、1年の教育研究課程を受けた学生があらためて研究計画を発表する「リサーチプロポーザル・シリーズ」からなっています。

平成13年度からは、民族学・文化人類学の視点や方法論を批判的に摂取することを目的として、共通科目（特論又は演習）が開講されています。

学生はおおむね1年次において現地調査（フィールドワーク）の準備をおこない、2年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミナール」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

両専攻の教育研究の目的は――

① 独創的な民族学・文化人類学の研究
② 長期のフィールドワークで得られた資料にもとづく学位論文の作成
③ 広い視野をもった、専門的教養を養うこと――です。



国立民族学博物館・全景

フィールドから見る世界 ～学生の研究フィールドマップ～



地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

大学院入学定員及び現員（平成18年4月1日現在）

専　攻	入学定員	現員			
		1年次	2年次	3年次	計
地域文化学専攻	5	6	5	11	17
比較文化学専攻	5	2	5	11	18
計	10	8	10	22	35

特別研究学生及び外国人研究生等の在籍者は、以下のとおりとなっている。（教育研究に協力している。）

愛知淑徳大学、愛媛大学、大阪市立大学、沖縄県立芸術大学、岡山大学教育学部、奈良教育大学、奈良県立大学、神戸市外国語大学、関西外国語大学、関西学院大学、京都工芸繊維大学、京都産業大学、京都女子大学、京都大学、甲南大学、甲南女子大学、国際基督教大学、国立民族学博物館、滋賀大学、滋賀県立大学、島根大学、同志社大学、同志社女子大学、奈良大学、奈良教育大学、奈良女子大学、広島市立大学、平安女学院大学、武蔵野美術大学（大学院）、インドネシア学術振興（リポテング）、Laurea Polytechnic（フィンランド）、国立民族学博物館

「卒業生」からのメッセージ I

（大阪国際大学・大学院国際交流研究科 准教授　飯田淳子（平成11年修了））

振り返ってみると、最初と比べると、まだ人前・教育的役割のない学生にとって、人類学に必要な知識や研究方法を学ぶことができたと、つくづく思います。最初入った頃とそれなりの研究者の仲間に入れてもらえるようになるまでの研究者の時代、その後の学術振興会の教育を体現しています。現在、私はこれらの研究者の活動に関心で留学を続けることができています。これらのなかで、あるいは学生時代に、幅広い分野をカバーする教育を受けることができたことは、私にとって大きな財産となっています。

一般で活躍する卒業生は研究者ではありませんが、その際にも私たちの研究の幅広さが役に立っていると思います。最終的に人文学のため、これらの教育を実践する自信に繋がっています。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を終了した者には、博士の学位を授与する。又専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専　攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文　学
比較文化学専攻	文　学

学位論文の内容によっては学術

学位論文リスト

【課程博士】

「数字的手法を用いた文化分析の方法について」	小島三弘（比較）	[H4.3.31 学術]
「シドニーにおける都市アボリジニの研究　伝統と民族の創出」	鈴木清史（比較）	[H6.3.24 文学]
「オルドス・モンゴル族の社会構造―ヤスの機能とその歴史的変容―」	楊　海英（地域）	[H6.9.20 文学]
「ペルーにおける山の神信仰の現在性―アンデスの宗教的世界のダイナミズム―」	細谷広美（地域）	[H7.3.23 文学]
「ビルマにおけるウェイザー信仰の研究」	土佐桂子（比較）	[H7.3.23 文学]
「韓国社会の動態と「両班化」 ―忠清北道阿部都における門中と儒式儀礼の検討を通して」	岡田浩樹（地域）	[H8.3.21 文学]
「中国杭嘉湖地方における喪葬伝承の研究」	曹　建南（地域）	[H8.3.21 文学]
「歌に表象される喜村意識―奄美における「シマの歌」の研究―」	中原ゆかり（比較）	[H8.3.21 文学]
「四合院家屋の文化人類学的研究―人間と自然との相互作用の視点から」	杉山京子（地域）	[H10.3.24 文学]
「モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究 ―アルタイ・ハラハ叙事詩を事例として―」	藤井麻湖（地域）	[H10.3.24 文学]
「カストム・メレシ―ヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および 民間医療観の現代的位相」	白川千尋（地域）	[H10.3.24 文学]
「韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究」	李　善愛（比較）	[H10.3.24 文学]
「東南中国の漢族社会組織とその変容―閩南農村社会における宗族の研究」	潘　宏立（比較）	[H10.3.24 文学]
「芸の伝承―ジャワ島・チルボンの仮面舞踏を中心に」	福岡まどか（比較）	[H10.3.24 文学]
「Overt First and Second Person-Designating Terms in Japanese Discourse ―A Pragmatic Perspective―」	Riikka Lansisalmi（比較）	[H10.3.24 文学]
「「二重の窮乏」下の平等理念―現代世界とキリバス南部環礁の社会生活―」	風間計博（地域）	[H10.9.30 文学]
「建築と文化・社会との相互作用―中国黄土高原の家洞住居・集落を対象として―」	栗原伸治（地域）	[H10.9.30 学術]
「カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容―宗教共同体と開発の視点から―」	子島　進（地域）	[H11.3.24 文学]
「地域主義運動における言語と知識人―エストニア南部ヴォル地方の事例から―」	寒水明子（地域）	[H11.3.24 学術]
「英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究 ―文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相―」	塩路有子（比較）	[H12.9.29 文学]
「北タイ・アカの家屋に関する研究―家屋の形式とその変化への視点から―」	清水郁郎（地域）	[H13.3.23 文学]
「韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化 ―忠清南道公州市を中心として活動する薬草商人を例に―」	林　史樹（地域）	[H13.3.23 文学]
「現代インドネシアにおけるジャワ大衆演劇クトプラの研究」	吉木武信（比較）	[H13.3.23 文学]
「南ラオス村落社会における政治過程の研究―シダの村における「連帯」と調争―」	中田友子（地域）	[H14.3.22 文学]
「20世紀前半のポリビアにおける先住民教育と植民地主義」	吉江貴文（地域）	[H14.3.22 文学]
「カメルーンにおける「商売の民」バミレケの都市人類学的研究」	野元美佐（比較）	[H14.3.22 文学]
「タイ式医療の構築とタイ・マッサージ―社会的文脈による権威的知識の多様性―」	飯田淳子（地域）	[H15.3.24 文学]
「インドネシア・スンダの食文化―言語人類学的観点から―」	阿良田麻里子（地域）	[H17.3.24 文学]
「韓国の仮面劇「固城五広大」の伝承と演戯者 ―解放後の韓国社会における民俗芸能の変遷から―」	高　正子（地域）	[H17.3.24 文学]
「帰還と離散のはざまで―ウクライナ―地方都市におけるユダヤ人巡礼の民族誌―」	赤尾　光春（地域）	[H17.9.30 学術]
「イスラエルにおけるアラブ人キリスト教徒のアイデンティティの様態 ―ガリラヤ地方・メルキト派カトリック信徒の事例研究―」	菅瀬　晶子（地域）	[H18.3.24 文学]
「トンガ王国の土地制度―グローバル化のなかの伝統―」	森本利恵（地域）	[H18.3.24 文学]
「パラライカの鳴り響く空間：1917～68年における社会主義の文化の生成」	大家（柚木）かおり（地域）	[H18.3.24 学術]

【論文博士】

「An Areal-Typological Study of Middle American Indian Languages」	八杉佳穂	[H6.3.30 文学]
「農村女性からみたトルコの「近代化」—世俗主義、イスラーム、女性の相互関係」	中山紀子	[H9.3.24 文学]
「南タイにおける実践宗教—ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から—」	西井涼子	[H9.3.24 文学]
「セネガルの公権力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究」	小川　了	[H9.3.24 文学]
「メラネシアの政治的リーダーシップと開発 —ソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐって—」	関根久雄	[H10.9.30 文学]
「南インドの農村におけるカースト内関係としての親族—コング・ヴェッラーラの事例研究—」	杉本星子	[H10.9.30 文学]
「アイヌ民族における神送りの研究—沙流川流域を中心に—」	萱野　茂	[H13.3.23 学術]
「低湿地立地の遺跡にみる縄文時代木州西部地域の生業活動—縄文時代早期末から中期初頭における若狭湾沿岸と琵琶湖周辺地域の動物考古学的考察—」	内山純蔵	[H14.3.22 文学]
「考古学における数量化と数理的手法の研究」	及川昭文	[H14.3.22 学術]
「総管信仰—近世江南農村社会と民間宗教—」	濱島敦俊	[H14.9.30 学術]
「中国の食事方法—歴史人類学的考察—」	西澤治彦	[H15.3.24 文学]
「台湾原住民のイノシシ（*Sus scrofa taivanus*）狩猟の民族考古学的研究: 動物遺存体研究の方法論構築にむけて」	野林厚志	[H15.3.24 学術]
「The Transformation and Social Functions of the sNang zhig Family and its Monastery —An Ethnographic Description of the Bon Tradition in Amdo」	才譲　太	[H16.9.30 学術]
「利用者の視点にたった博物館の理念と活動様式の研究」	布谷知夫	[H16.9.30 文学]
「トビニタイ文化の集団構成と生計戦略 —北海道東部における「中世アイヌ社会」成立に至る一階梯—」	大西秀之	[H17.3.24 文学]
「アットゥシの歴史に関する基礎的研究—アイヌ伝統文化の再検討の試みとして—」	本田優子	[H17.9.30 文学]
「カナダ・イヌイットの食物分配に関する文化人類学的研究—先住民社会の変容と再生産—」	岸上伸啓	[H18.3.24 文学]
「タイ中部農村における相互行為の民族誌的研究」	高城　玲	[H18.3.24 文学]
「東ネパールにおける半餓いの生産活動と放牧地をめぐる社会関係」	渡辺和之	[H18.3.24 文学]

「卒業生」からのメッセージII

阪南大学　国際コミュニケーション学部　助教授　塩路有子（平成12年9月修了）

総合研究大学院大学の文化科学研究科は、大阪千里万博記念公園の中の国立民族学博物館に併設されている。私は、大学院生時代、その広い公園の緑の中を歩いて通学した。そこは、交通アクセスがあまりよくない。知る人ぞ知る「陸の孤島」である。しかし、その孤島は、豊富な知的資源をもっていた。幅広いテーマと多様な地域を専門とする研究者（教員）がおり、全国そして海外からの研究者が参加する共同研究会やシンポジウムが開かれる。大学院生は、自分の研究テーマや関心領域と程度に応じて、それらの知的資源に触れることができる。大学院の論文ゼミナールでは、教員たちの各研究領域からの指摘や質問を受け、あるときは自分の研究に関する議論が白熱する。つまり、そうして多様な角度から自分の研究を捉えなおす機会を与えてくれる。それは、今から思うと、実に得がたい貴重な経験だった。さらに、共同研究会やシンポジウムは、その分野の専門家である研究者が議論を交わす場であるため、その分野の最先端で何が問題とされているかを知る絶好の機会である。私は、英国を研究対象地域とし、観光人類学という新しい研究分野を志していた。その意味でも、多角的な視座と最先端の議論は、重要で価値あるものだった。それらの知的経験は、他では得られなかっただろうと振り返ると、「陸の孤島」も決して悪くはない。



地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する

国立民族学博物館長　松園　万亀雄

文化人類学＝民族学は世界の諸民族の文化や社会を研究する学問です。いまは世界各地で人、モノ、情報が急激な勢いで飛び交い、移動している時代です。かつては当然とされていた社会の秩序がこわされ、混乱と葛藤が世界を覆っています。民族学を研究する者にとっては、挑戦的な課題がつぎつぎに突きつけられているといわねばなりません。それだけに人間と社会についての新鮮な着想をつむぎだすための、幅広い視野と豊かな想像力が私たちには求められています。

国立民族学博物館には、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置されています。博士課程後期3年に在籍しようとする学生は、近い将来、大学や研究機関で教育研究にたずさわり、また文化人類学＝民族学の知識を応用して、日本や世界の人々の生活に実践的にかかわる仕事に就くことになります。

国立民族学博物館は優秀な教授陣を擁しており、また文献資料その他の研究環境の面でも我が国随一である、と私は自信をもっていることができます。入学されるみなさんは在学中に学位論文を書きあげ、一人前の研究者として社会に飛び立ってほしいものです。



国立民族学博物館・南アジア展示場

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館(民博)は、わが国における民族学（文化人類学）の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立された。民博は、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究を進め、学術情報を集積する一方、その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することを使命としている。1989年には、総合研究大学院大学の文化科学研究科地域文化学専攻と比較文化学専攻が民博を基盤機関として設置され、民博での博士後期課程の教育が開始された。

以上のように、国立民族学博物館は、「博物館をもつ研究所」として世界的にみても類例のない規模と機能を有している。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっている。民博の展示は、常設展示と特別展示とで構成されている。このうち常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなる。一方、特別展示は、特定のテーマに焦点を当て、年に数回、期間を限って開催されている。

民博は、2004年4月より、国立大学と足並みをそろえて、法人組織となった。法人の正式名称は、「大学共同利用機関法人人間文化研究機構」であるが、民博は、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所とともに、その一員として再出発した。2006年度から、民博の研究部は、3研究部（民族社会、民族文化、先端人類科学）2センター（研究戦略センター、文化資源研究センター）体制に組織替えがなされた。研究活動の機動性を高めるとともに、その成果をより広くわかりやすく社会に伝えていくための措置である。民族学（文化人類学）を基礎としつつ、機関と分野の別を超えて、人間文化の総合的理解に至ろうとする、民博の新たな活動が始まっている。

所蔵民族学資料（平成18年4月1日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	167,585点	映像資料	6,872点	日本語図書	231,060冊
国内資料	88,851点	音響資料	62,453点	外国語図書	356,055冊
計	256,436点	計	69,325点	計	587,115冊
				日本語雑誌	9,373冊
				外国語雑誌	6,213冊
				計	15,586冊

地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み

昭和63年10月	総合研究大学院大学開学【全学】
平成元年4月	文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）設置、学生受入、授業開始
平成7年2月	葉山キャンパス本部共通棟が竣工、この年から入学式を同キャンパスにて総研大全体で挙行【全学】
平成11年4月	先導科学研究科学生受入（地域文化学・比較文化学両専攻併任教官の一部、先導科学研究科の併任）【全学】
平成12年10月	「オープンキャンパス」開催（年1回）
平成13年4月	地域文化学・比較文化学両専攻の同窓生ネットワーク発足
平成17年4月	関西4大学との学生交流に関する協定を締結、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、大阪大学大学院人間科学研究科、神戸大学大学院総合人間科学研究科、および京都文教大学大学院文化人類学研究科との単位互換授業の開講開始

年度別学位授与者数

	地域文化学専攻		比較文化学専攻		計
	課程博士	論文博士	課程博士	論文博士	
平成3年度			1		1
平成5年度			1	1	2
平成6年度	2		1		3
平成7年度	2		1		3
平成8年度		3			3
平成9年度	3		4		7
平成10年度	4	2			6
平成12年度	2		2	1	5
平成13年度	1	1	2	1	5
平成14年度	1	1		2	4
平成16年度	2	3			5
平成17年度	4	2		2	8
計	21	12	12	7	52

入学者選抜試験倍率

平成	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年
志願者数	27	22	17	23	31	23	28	18	19	7
合格者数	6(2)	6(1)	7	6	8	8	7	6	7(1)	6(1)
倍率	4.5	3.7	2.4	3.8	3.9	2.9	4.0	3.0	2.7	1.2

※（ ）は入学辞退者で内数。

合格者出身大学院機関別累計

平成	元年～8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	計
国立	28(5)	6(2)	4(1)	4	5	5	4	5	3	4(1)	2(1)	70(10)
公立	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
私立	14(1)	0	2	2	(1)	3	1	1	2(1)	2	4	31(1)(2)
海外	8(1)	0*	0	1	1	0	2(1)	1	1	1	0	15(1)(1)
合計	50(7)	6(2)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	6(1)	7(1)	6(1)	117(12)(3)

※（ ）は入学辞退者で内数。（ ）内は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身（1名）者は学部卒で資格認定による。

合格者出身大学院地方別累計

平成	元年～8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	計
北海道	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
関東	24(4)	4(2)	3(1)	4	2(1)	3	3	2	2	1	3	51(7)(1)
中部	6	0	2	0	0	0	1	1	1	1(1)	0	12(1)
近畿	9(2)	1	1	2	3	4	2	3	2(1)	3	2	32(2)(1)
中国	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	4
九州	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1)	2(1)
海外	8(1)	0	0	1	1	0	2(1)	1	1	1	0	15(1)(1)
合計	50(7)	6(2)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	6(1)	7(1)	6(1)	117(12)(3)

※（ ）は入学辞退者で内数。（ ）内は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身（1名）者は学部卒で資格認定による。

総合研究大学院大学について



ごあいさつ

総合研究大学院大学長　小平　桂一

総合研究大学院大学、略して「総研大」は、基礎学術分野の総合的発展と高度な研究的資質を備えた知的市民の育成を目指して、大学院学生の教育を行なうために、1988年に設立されました。現在では、神奈川県の葉山町に大学本部を持ち、各地に置かれた18の国立学術研究機関等を基盤として、大学院生を分散配置し、ユニークな博士課程教育を展開しています。これらの基盤機関の中心は、人文系から自然科学系にわたる、各専門分野に設置された「大学共同利用機関」で、一大学では維持・運用できない大型最新の装置・設備・システムによる研究や、広範・大量な資料に基づく長期的研究、従来の大学講座の枠を超えた学問分野の研究などが行われています。

全国の大学研究者や大学院生が、共同で利用し研究を進めているので、異なる地域や専門領域の間の交流や協力が促進され、新しい研究の芽や学際領域が伸び易い、優れた環境にあります。また、わが国を代表する大型・最新の設備や大量の基礎資料を備えているので、当該分野の国際的窓口となって、多くの国際共同研究も行われており、大学院生にも、早くから国際性を身につける種々の機会を提供しています。これから、大学・大学院教育が大きく変わろうとしているとき、わが国の高等学術研究・教育の要の一環として、これら大学共同利用機関等の役割は、一層その重要性を増すものと確信します。

二十一世紀の国際社会では、各学問分野の深化と共に、多様な学問分野を総合する広い視野と知性が要求されることは、間違いありません。とりわけ、人文系学問の総合的推進や自然科学との融合が、重要な課題となることでしょう。そこに、異なる専門分野の諸基盤機関にまたがって設立され、「総合」と「分散」の両機能を果たすべき「総研大」の意義と使命があります。「総研大」教員の多くは、基盤機関の教員が併任していますが、学生教育に当たっては、専門研究領域・分野を超えて、「総研大」教員としての使命を自覚するよう願っています。また、進学を希望する学生も、単に専門分野で学位を取得しようとするだけでなく、「総研大」にふさわしい考え方や生き方を、少しでも学ぼうという意欲を持って臨むよう、大いに期待しています。

建学にあたられた長倉三郎先生、基礎を築き上げられた廣田榮治先生を始めとする諸先達の努力により、今や「総研大」は「青年期」に入ろうとしています。折も折り、世界的な潮流の中でわが国も、国立大学の制度改革を断行しつつあります。多くの大学や研究所が、社会の短期的・直接的な要請に応えて教育・研究活動を行なおうとするなかで、わが国の将来に欠くことのできない、長期的・基礎的な学術分野を理解し、あるいは担い、あるいは新しい道を切り開いていこうとする、高度な知的市民を育成することは、必須の国家的課題です。大学共同利用機関等を基盤とする「総研大」こそは、広範囲にわたる教員団の協力の下に、工夫を凝らして、「新しい大学院生」を育てていかなければなりません。基盤機関が地域的に分散している点は、ともすると、「総研大」の働きにとって負担になりがちですが、それを乗り越え活かす工夫も、していきたいと思っています。関係各位には、引き続きご理解とご協力を賜りたく、ここに改めてお願い申し上げる次第です。

創設の趣旨・目的

近年、従来の学問分野の枠を越えた独創的、国際的な学術研究の推進や、科学の新しい流れを創造する先導的学問分野の開拓の重要性が強く要請されております。

本学は、このような要請に対応する研究者を養成するため、学問諸分野で先端的な研究を行い、国内外の研究者の共同研究の推進に中心的な役割を果たしているく大学共同利用機関＞の最先端を行く高度で優れた研究環境を活用した、我が国最初の大学院大学として創設されました。

本学は、学術研究の新しい流れに先導的に対応できる、幅広い視野を持った国際的で独創性豊かな研究者を養成します。また、従来の学問分野の枠を越えた独創的、国際的な学術研究の推進並びに先導的学問分野を開拓します。

総合研究大学院大学の特徴

我が国唯一の博士教育制度を採用

■柔軟な国際基準の博士課程を実施　— 新しい研究大学院を目指して —
■複数指導教員体制　— 個別指導と集団指導体制の併用 —
■少数精鋭主義　— 明確な目的意識のもとに集まる入学者 —

葉山本部・大学共同利用機関等での全学教育研究事業

■世界最先端研究者である教員集団
■異分野間の研究者と交流できる日常環境
■先導的学問分野の開拓

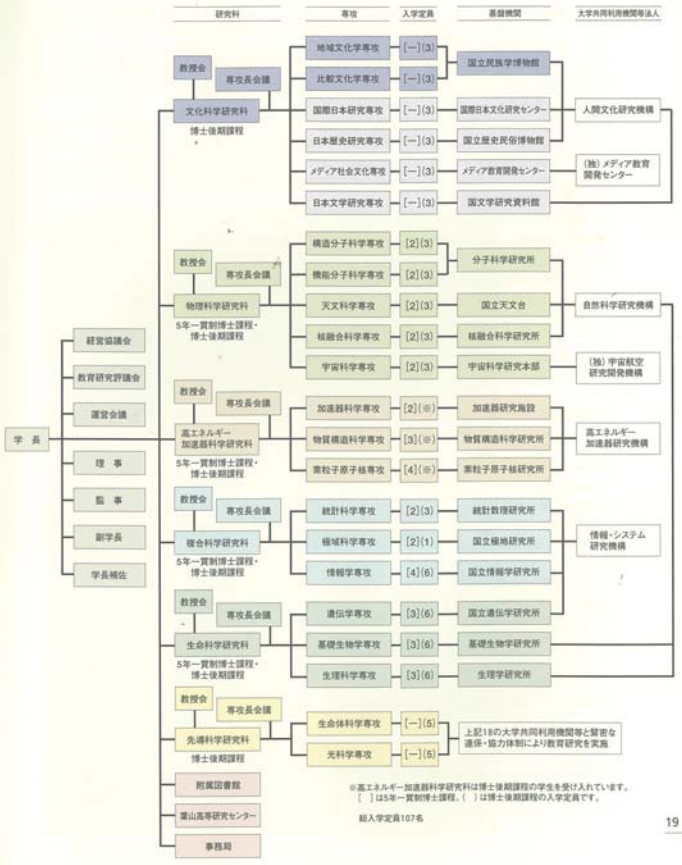
国際色豊かな研究環境の中での活動

■開かれた研究環境
■世界の最先端研究技術・研究者の交流拠点
■幅広い視野・柔軟な思考力が身に付く
■世界標準が身に付く

世界最高水準の資料・施設・設備の中での研究活動

■国際的にも僅少で学術的価値のある文献・資料を利用
■データベース化された学術データを利用
■世界規模の加速器・望遠鏡、観測用ロケット・衛星を利用
■プラズマ発生装置、南極観測基地などを利用

大学の教育研究組織



出願資格等

(1) 出願資格

次のいずれかに該当する者とする。

①修士の学位又は専門職学位を有する者及び平成19年3月までに取得する見込みがある者
②外国において、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び平成19年3月までに授与される見込みがある者
③外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び平成19年3月までに授与される見込みがある者
④我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者
⑤大学を卒業し、大学、研究所等において、平成19年3月までに2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑥外国において学校教育における16年の課程を修了した後、又は外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、平成19年3月までに2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑦本学において、個別の入学資格審査により、修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、平成19年4月1日において24歳に達しているもの
（⑤、⑥又は⑦により出願しようとする者は、事前に本学で実施する「学力の認定」を受ける必要がある）

(2) 選抜方法（文化科学研究科）

選抜は、書類選考、修士論文又はそれに代わるものの審査及び面接により行う。

①書類選考
志望研究内容等、その他研究科が提出を求めた資料について行う。
②修士論文等の審査
修士の学位を有する者及び修士課程在学中の者については修士論文、また学力認定により出願資格が認められた者については刊行された論文又は著作を審査する。
③面接
面接は書類選考・論文審査合格者についてのみ行うものとする。書類選考・論文審査の合否は面接日の約1週間前までに、入学願書に記載された連絡先に文章で個別に連絡する。
（なお、合否通知が面接日の1週間前を過ぎても到着しない場合は、総合研究大学院大学学務課学生厚生係まで問い合わせること。）
面接は、主として修士論文（修士論文のない者は発表した学術論文等又はこれまでに行った研究の要旨）の内容及び志望研究内容について行う。
◎詳細は募集要項を請求のうえ確認すること。

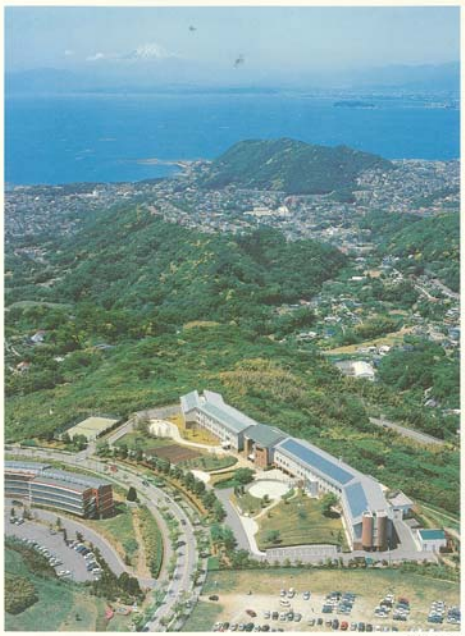
(3) 修了要件

本研究科の専攻に3年以上在学し、所定の単位数以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び試験に合格すること。
ただし、特に優れた研究業績を上げた者については、在学期間を短縮して修了を認めることがある。

募集要項請求先

【募集要項の請求方法】
下記メールアドレスに、以下の必要事項を記入し、送信してください。
(1) 郵便番号 (2) 住所 (3) 氏名 (4) 電話番号
(5) 希望する募集要項→「平成19年度4月入学 文化科学研究科 地域文化学専攻・比較文化学専攻」
と記入してください。
メールアドレス：kousei@soken.ac.jp

【問合せ先】総合研究大学院大学 学務課 学生厚生係
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
TEL：046-858-1525, 1526



葉山キャンパス

問い合わせ先

国立民族学博物館
管理部研究協力課研究協力係

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151（代表）
06-6878-8236（専攻担当） URL http://www.minpaku.ac.jp/
FAX 06-6878-8479 E-mail souken@idc.minpaku.ac.jp

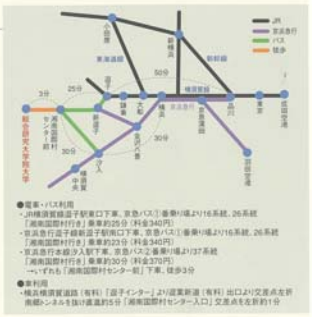


●大阪モノレールで公園東口駅下車、無料地域を通って徒歩約13分
●大阪モノレールで万博記念公園駅下車、徒歩約15分（ただし、公園中央口経由自然文化園は有料です）
●阪急茨木市駅・JR茨木駅より阪急バス113系統「自然文化園・日本庭園中央」下車徒歩約5分、または117系統「日本庭園前」下車徒歩約15分
●北大阪急行千里中央駅より阪急バス112系統「日本庭園前」下車徒歩約15分
●タクシーは民博職員通用口まで入ることができます。

総合研究大学院大学　事務局

〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電話 046-858-1500（代表）
FAX 046-858-1541
URL http://www.soken.ac.jp/



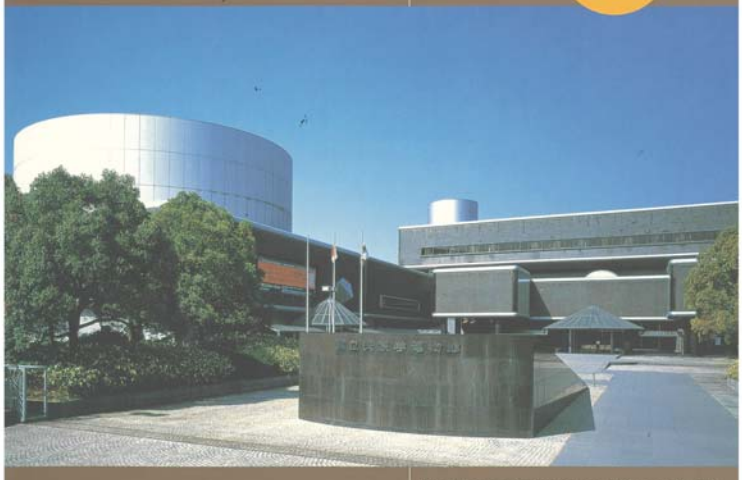


●電車・バス利用
・JR横須賀線逗子駅東口下車、京急バス①番乗り場より16系統、26系統「湘南国際村行き」乗車約25分（料金340円）
・京浜急行逗子線新逗子駅改口下車、京急バス①番乗り場より16系統、26系統「湘南国際村行き」乗車約22分（料金340円）
・京浜急行本線汐入駅下車、京急バス②番乗り場より37系統「湘南国際村行き」乗車約30分（料金370円）
→いずれも「湘南国際村センター前」下車、徒歩3分
●車利用
・横浜横須賀道路（有料）「逗子インター」より逗葉新道（有料）出口より交差点左折
南郷トンネルを抜け直進約5分「湘南国際村センター入口」交差点を左折約1分

総合研究大学院大学
文化科学研究科

地域文化学専攻
比較文化学専攻

概要 '07



The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies

Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies

Summary '07

目 次

文化科学研究科について	1
専攻の概要	2
地域文化学専攻	2
比較文化学専攻	3
地域文化学専攻授業概要	4
比較文化学専攻授業概要	6
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員	8
担当教員の専門分野	8
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法	9
フィールドから見る世界 ～学生の研究フィールド・マップ～	10
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生	10
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位	12
学位論文リスト	12
地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する	14
国立民族学博物館の概要	15
地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み	16
年度別学位記授与者数	16
入学者選抜試験倍率	16
合格者出身大学院機関別累計	16
合格者出身大学院地方別累計	16
総合研究大学院大学について	17
ごあいさつ	17
総合研究大学院大学の特徴	18
大学の教育研究組織	19
出願資格等	20
募集要項請求先	21
問合せ先	

文化科学研究科について



研究科長　黒須正明

総合研究大学院大学（略して総研大）は、学部をもたず大学院だけから構成される国立大学として、昭和63年（1988）10月1日に開学した我が国最初の大学院大学です。現在、総研大には全部で6つの研究科がありますが、文化科学研究科は、その研究科の1つで、総研大唯一の文系の研究科です。

まず、平成元年（1989）4月に、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻の2専攻の設置から出発しました。その後、平成4年（1992）4月には、国際日本文化研究センターを基盤として国際日本研究専攻が、平成11年（1999）4月には、国立歴史民俗博物館を基盤として日本歴史研究専攻が、平成13年（2001）4月にはメディア教育開発センターを基盤としてメディア社会文化専攻が、平成15年（2003）4月には、国文学研究資料館を基盤とする日本文学研究専攻が、それぞれ増設されました。そして、平成16年（2004）4月からは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構が設立され、四つの研究機関（国立民族学博物館、国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館及び国文学研究資料館）と独立行政法人メディア教育開発センターをあわせた5つの研究機関を基盤とし国立大学法人総合研究大学院大学文化科学研究科となりました。現在、総研大の他の研究科では5年一貫制といって、博士課程前期（修士）の方々も受け入れていますが、文化科学研究科だけは博士課程後期（博士）だけから構成されています。

研究科を構成している5つの基盤機関は以下のとおりです。

・国立民族学博物館は、日本における文化人類学・民族学の研究センターとしての機能をもち、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究を多角的に推進しています。近年の国際化・国際交流の著しい進展と活発化、その一方での民族紛争の多発など、研究課題の多様化・グローバル化とこれに伴う研究分野の拡大は、文化人類学・民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めつつあります。

・国際日本文化研究センターは、日本文化や日本社会に関する国際的・学際的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力を行う機能をもつ研究機関です。近年の国際化の中で日本に対する関心が高まっており、「日本」に関する総合的な研究が世界的な規模で進められています。

・国立歴史民俗博物館は、文献資料・民俗資料・考古資料を学際的に研究することによって新しい歴史学の創造を目指している研究機関で、世界史的な広い視野からの日本歴史理解へのアプローチを開拓するとともに、国際的な日本歴史研究を推進しています。

・メディア教育開発センターは、高等教育におけるインターネットなどのマルチメディアの利用を促進するための我が国における中核的機関であり、多様なメディアを高度に利用して行う教育の内容、方法等を研究開発し、その成果を提供することを目的として、先導的な研究を行っています。

・国文学研究資料館は日本全国に散在する前近代1,200年間の文献資料を調査研究し、その収集、整理、保存にあたっている研究機関で、その資料情報を広く日本文学研究者の利用に供しています。

この5つの研究機関を基盤として、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化に関して地域的・個別的に対象を設定して教育研究を行う「地域文化学専攻」と、そのような諸民族の社会・技術・宗教・芸術等について通文化的手法に基づき教育研究を行う「比較文化学専攻」、国際的な視野で日本文化と文明について教育研究を行う「国際日本研究専攻」、および文献史学の枠にとらわれず、広く歴史学・考古学・民俗学を中心に関連諸科学との協業により、総合的な日本歴史解明を目指した教育研究を行う「日本歴史研究専攻」、メディアと文化、社会、人間の相互作用について、学際的かつ総合的な教育を行う「メディア社会文化専攻」、そして、文化科学の視点から文学資源の実態、作品の形成と享受の動態、その制度・環境などを総合的に研究する視点に立って教育研究を行う「日本文学研究専攻」、の6専攻を置き、国際的・学際的な教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目指しています。まだ全専攻ではありませんが、長期履修制度の導入を行うなど新しい取り組みにも積極的で、また助成金を得て、研究科全体として専攻横断型の教育体制の確立を試行しています。

専攻の概要

地域文化学専攻



専攻長　竹沢尚一郎

アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカおよびオセアニア等に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの民族がもつ歴史や、他民族、国家、世界経済との関係に考慮をはらいながら、民族誌的方法に基づいた文化の記述と構造の把握を目的とする。本専攻においては、現地調査およびこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する、高度な専門性を持った研究者の養成を行う。

教育研究指導分野の概要

分野	概要
アジア地域文化 I	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する諸民族の、政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アジア地域文化 II	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する諸民族の、政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する諸民族の、政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する諸民族の、政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する諸民族の、政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する諸民族の、政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
基礎科目	地域文化学に関する基礎演習および博士論文作成のための演習
共通科目	地域文化学に関する基礎的な講義
総合教育科目	

比較文化学専攻



専攻長　岸上伸啓

社会、宗教、技術、言語および芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性と多様性を理論的に明らかにすることを目的としている。通文化的研究を行うことによって、文化の内部に存在する法則の発見と定立を目指すとともに、文化間の多様性を把握する。本専攻においては、従来の文化人類学的方法論に加えて、情報科学や文化資源研究、隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめ、高度な専門性を持った研究者の養成を行う。

教育研究指導分野の概要

分野	概要
比較社会研究	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治、法、経済等に関する通文化的・理論的研究
比較宗教研究	諸民族の呪術、祭祀、神話、宇宙観、宗教等に関する通文化的・理論的研究
比較技術研究	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究
比較言語研究	諸民族の言語、文字、コミュニケーション、言語政策等に関する通文化的・理論的研究
比較芸術研究	諸民族の音楽、芸能、文芸、工芸、造形等に関する通文化的・理論的研究
文化資源研究	博物館人類学、博物館情報学、保存科学、および文化資源に関する理論的・実践的研究
基礎科目	比較文化学に関する基礎演習および博士論文作成のための演習
共通科目	比較文化学に関する基礎的な講義
総合教育科目	



ゼミの様子



院生室の様子

地域文化学専攻授業概要（平成19年度）

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員	
アジア地域文化 I	東アジア文化研究	東アジアの諸民族の文化と歴史	准教授	野林　厚志
	東アジア文化研究特論 I	中国における文化変化と社会	准教授	横山　廣子
	東アジア文化研究特論 II	東アジアにおける都市空間		
	東アジア文化研究演習 I	中国南部諸民族の歴史民族学的研究に関する講述 ―「クリエーティング・ザ・チワン」講話を通じて	教　授	塚田　誠之
	東アジア文化研究演習 II	朝鮮半島を中心とした東アジアにおける社会と文化	教　授	朝倉　敏夫
	北・中央アジア文化研究	モンゴル遊牧社会論	教　授	小長谷有紀
	北・中央アジア文化研究特論	北アジア狩猟採集文化研究	教　授	佐々木史郎
	北・中央アジア文化研究演習 I	社会主義的近代化の比較研究		
	北・中央アジア文化研究演習 II	北・中央アジアの旧社会主義諸国におけるポスト社会主義の比較		
アジア地域文化 II	東南アジア文化研究	東南アジアの住文化研究	准教授	佐藤　浩司
	東南アジア文化研究特論	東南アジアにおける都市空間		
	東南アジア文化研究演習 I	東南アジア諸社会の文化とその変容	教　授	田村　克己
	東南アジア文化研究演習 II	東南アジアの旧社会主義諸国におけるポスト社会主義の比較		
	南アジア文化研究	インドのナショナリズムと宗教	准教授	三尾　稔
	南アジア文化研究特論	ネパールの民族運動と現代政治	准教授	南　真木人
	南アジア文化研究演習 I	インドの都市の社会と文化		
	南アジア文化研究演習 II	インドにおける生活宗教の実践の多様性		
	西アジア文化研究	アラブ・イスラム世界の音文化	教　授	西尾　哲夫
	西アジア文化研究特論	アラビアンナイトと中東世界の女性観		
	西アジア文化研究演習 I	現代中東における部族と国家		
	西アジア文化研究演習 II	現代イスラム世界における聖者信仰		
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ文化研究	東欧の政治文化と宗教	准教授	新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究特論	南ヨーロッパのジェンダー・セクシュアリティ	准教授	宇田川妙子
	ヨーロッパ文化研究演習 I	シティズンシップの系譜学	教　授	森　明子
	ヨーロッパ文化研究演習 II	空間と場所の人類学		
アフリカ地域文化	アフリカ文化研究	移動する商業民の民族文化と経済倫理	准教授	三島　禅子
	アフリカ文化研究特論	アフリカ史研究の諸課題		
	アフリカ文化研究演習 I	アフリカ地域の生態人類学	教　授	池谷　和信
	アフリカ文化研究演習 II	民族誌再考	教　授	竹沢尚一郎
アメリカ地域文化	アメリカ文化研究	中米文化研究	教　授	八杉　佳穂
	アメリカ文化研究特論	南アメリカのエスノヒストリー	准教授	齋藤　晃
	アメリカ文化研究演習 I	文字と言語		
	アメリカ文化研究演習 II	ラテンアメリカにおける史料調査		
オセアニア地域文化	オセアニア文化研究	災害と文化の人類学	准教授	林　勲男
	オセアニア文化研究特論	オセアニアにおける土器文化の諸相	教　授	印東　道子
	オセアニア文化研究演習 I	アボリジナル史の人類学的構築	教　授	松山　利夫
	オセアニア文化研究演習 II	土地権法と先住民権原法 ―その人類学的解釈―		

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
基礎科目	地域文化学基礎演習 I	地域文化研究に関する基礎演習	准教授　三島　禎子
	地域文化学基礎演習 II	地域文化研究に関する基礎演習	准教授　野林　厚志
	地域文化学演習 I	博士論文作成のための演習	教　授　森　明子
	地域文化学演習 II	博士論文作成のための演習	准教授　齋藤　晃
共通科目	地域文化学特論 I	宗教学的理解の特質について	准教授　新免光比呂
	地域文化学特論 II	人類学的思考の歴史	教　授　竹沢尚一郎

※年度によって開講科目が異なる

地域文化学専攻の人材養成目的

民族学・文化人類学の分野を中心とする諸科学に関して高度な専門知識をもち、世界の諸地域における多様な文化について、現地調査等を通じて優れた研究をおこなう研究者および高度な専門性をもって国際的見地から社会に貢献しうる人材の育成を目的とする。

地域文化学専攻の教育方針

地域文化学専攻を置く国立民族学博物館は、世界の諸地域における多様な文化に関して図書資料や標本資料、映像音響資料等のさまざまな情報を集積している研究施設であり、国内外の多くの研究者の参画によって運営される共同利用機関である。こうした利点を活かして、質の高い研究に支えられた教育をおこなう。
また、長期の現地調査や国際会議での成果公開、組織的研究の運営等、研究活動に必要な能力開発を目指す。
研究指導は指導教員を中心としつつ、学生ごとにその研究テーマに応じたアドバイザリーグループを構成して、専攻に属する教員全体で指導する体制をとる。

地域文化学専攻の求める学生像

世界の多様な地域社会や地域文化について広い関心を持ち、とりわけ民族学・文化人類学の基礎研究に強い意欲を持って、在学中の研究活動を遂行することができる学生。

比較文化学専攻授業概要（平成19年度）

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
比較社会研究	比較社会研究 I	コミュニティの人類学	准教授　平井京之介
	比較社会研究 II	中国の社会人類学 —欧米・日本・中国のパースペクティブ	准教授　韓　敏
	比較社会研究特論 I	言説学的視点から見たグローバルな市民社会	教　授　出口　正之
	比較社会研究特論 II	社会・文化に関する人類学的アプローチ	教　授　岸上　伸啓
	比較社会研究演習 I	宗教とナショナリズム	教　授　杉本　良男
	比較社会研究演習 II	民族社会の比較研究	
	比較社会研究演習 III	民族社会に関する研究方法	
比較宗教研究	比較宗教研究	呪術と科学の文化人類学	准教授　白川　千尋
	比較宗教研究特論	日本宗教と日系宗教の研究	教　授　中牧　弘允
	比較宗教研究演習 I	南アメリカの宗教	
	比較宗教研究演習 II	太平洋島嶼部の呪術と宗教	
比較技術研究	比較技術研究 I	近現代における生産技術に対する意識変化	
	比較技術研究 II	インカ帝国研究の動向	教　授　關　雄二
	比較技術研究特論	コレクションと検索システムを活用した民族技術の比較研究	教　授　近藤　雅樹
	比較技術研究演習 I	アジアと太平洋地域における民族植物学と技術	准教授　Matthews,Peter J.
	比較技術研究演習 II	手織機の型式と機織り技術	教　授　吉本　忍
比較言語研究	比較言語研究	言語類型論研究における諸問題	准教授　菊澤　律子
	比較言語研究特論	母語と母語教育について	
	比較言語研究演習 I	少数言語のとらえ方	教　授　庄司　博史
	比較言語研究演習 II	オーストロネシア比較言語学	
比較芸術研究	比較芸術研究 I	伝統芸能の映像記録	准教授　福岡　正太
	比較芸術研究 II	日常的・実践的な身体技法としての芸能伝承論	准教授　笹原　亮二
	比較芸術研究特論	日本の民俗芸能の歴史的展開と多様性	
	比較芸術研究演習 I	北米・ハワイのアジア系音楽	准教授　寺田　吉孝
	比較芸術研究演習 II	アイヌの工芸	教　授　佐々木利和
文化資源研究	文化資源研究	博物館における資料管理	教　授　園田　直子
	文化資源研究特論	絵画における技法、素材の比較研究	
	文化資源研究演習 I	文化資源の情報モデル論、情報処理論、アーカイブズ論、知的財産権の議論、メディア・リテラシー論、などの講述と議論	教　授　久保　正敏
	文化資源研究演習 II	博物館情報学	准教授　山本　泰則
	博物館研究	博物館の歴史と政治性	准教授　川口　幸也
	博物館研究特論	博物館人類学	教　授　吉田　憲司
	博物館研究演習 I	文化人類学・民族学博物館における展示と活用	教　授　小林　繁樹
	博物館研究演習 II	博物館の多様性と可能性	

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
基礎科目	比較文化学基礎演習 I	比較文化研究に関する基礎演習	教　授　出口　正之
	比較文化学基礎演習 II	比較文化研究に関する基礎演習	准教授　笹原　亮二
	比較文化学演習 I	博士論文作成のための演習	教　授　庄司　博史
	比較文化学演習 II	博士論文作成のための演習	准教授　白川　千尋
共通科目	比較文化学特論 I	アンデス文明における複合社会の成立と工芸品生産	教　授　關　雄二
	比較文化学特論 II	マイノリティの音楽実践	准教授　寺田　吉孝

※年度によって開講科目が異なる

比較文化学専攻の人材養成目的

文化と社会の諸問題や文化の表象等に関して幅広い専門知識をもち、人間社会の文化について、比較研究等を通じて優れた研究をおこなう研究者および高度な専門性をもって社会的な実践をおこないうる人材の育成を目的とする。

比較文化学専攻の教育方針

比較文化学専攻を置く国立民族学博物館は、文化と社会の諸問題や文化の表象等に関して図書資料や標本資料、映像音響資料等のさまざまな情報を集積している研究施設であり、展示等の博物館活動を通じて広く社会と連携している共同利用機関である。こうした利点を活かし、理論や実践と結びついた研究に支えられた教育をおこなう。
また、現地調査や論文発表等の研究遂行能力に加え、研究の成果を社会に還元するうえで必要な能力の開発を目指す。
研究指導は指導教員を中心としつつ、学生ごとにその研究テーマに応じたアドバイザリーグループを構成して、専攻に属する教員全体で指導する体制をとる。

比較文化学専攻の求める学生像

人間の社会や文化について広い関心を持ち、とりわけ学問的な理論化やその社会的な応用に強い意欲を持って、在学中の研究活動を遂行することができる学生。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員

現員（平成19年4月1日現在）

区　分	教　授	准教授	計	備　考
地域文化学専攻	13	10	23	基盤機関の長（民博館長）を含む
比較文化学専攻	13	10	23	
計	26	20	46	

担当教員の専門分野（五十音順）

地域文化学専攻

朝倉敏夫（韓国社会研究）
池谷和信（環境人類学・南部アフリカ研究）
印東道子（オセアニア考古学）
宇田川妙子（南ヨーロッパ研究・性研究）
小長谷有紀（遊牧社会論・モンゴル研究）
齋藤　晃（歴史人類学・ラテンアメリカ研究）
佐々木史郎（文化人類学・北アジア研究）
佐藤浩司（民族建築学）
新免光比呂（宗教学・東欧研究）
竹沢尚一郎（歴史人類学・アフリカ研究）
田村克己（東南アジア文化人類学）
塚田誠之（歴史民族学・中国研究）
西尾哲夫（言語人類学・アラブ研究）
野林厚志（民族考古学・台湾／中国研究）
林　勲男（狩猟人類学・オセアニア研究）
松園万亀雄（社会人類学）
松山利夫（文化人類学・オーストラリア先住民研究）
三尾　稔（文化人類学・南アジア研究）
三島禎子（文化人類学・西アフリカ研究）
南　真木人（生態人類学・南アジア研究）
森　明子（文化人類学・中部ヨーロッパ研究）
八杉佳穂（言語人類学・中米文化史）
横山廣子（文化人類学・中国社会研究）

比較文化学専攻

川口幸也（アフリカ同時代美術・展示表象論）
韓　敏（社会人類学・中国研究）
菊澤律子（言語学・オーストロネシア諸語）
岸上伸啓（文化人類学・北方文化研究）
久保正敏（コンピュータ民族学・民族情報学）
小林繁樹（造形人類学、造形文化学、博物館学）
近藤雅樹（民俗学・民具研究）
佐々木利和（アイヌ民族史、日本近世史）
笹原亮二（民俗学・民俗芸能研究）
庄司博史（言語学・言語政策論）
白川千尋（文化人類学・オセアニア研究）
杉本良男（社会人類学・南アジア研究）
關　雄二（アンデス考古学・ラテンアメリカ研究）
園田直子（保存科学）
出口正之（比較NPO研究）
寺田吉孝（民族音楽学・インド研究）
中牧弘允（宗教人類学・経営人類学・ブラジル研究）
平井京之介（経済人類学・東南アジア研究）
福岡正太（民族音楽学・東南アジア研究）
Matthews, Peter J.（先史学・民族植物学）
山本泰則（博物館情報学）
吉田憲司（博物館人類学・アフリカ研究）
吉本　忍（民族工芸論・民族技術論）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法

教員が地域文化学・比較文化学両専攻に分かれて教育研究の指導にあたっています。

教育研究の方法は、個別の教員による授業や研究指導と、複数の教員の指導のもとに行われる共通のゼミナールからなっています。

共通のゼミナールには主として1年生を対象とする「基礎演習I」および「基礎演習II」（通称「1年生ゼミナール」）と、論文作成の指導を内容とする「演習I」および「演習II」（通称「論文ゼミナール」）があります。

「1年生ゼミナール」は学生がそれぞれの研究計画を発表する「研究計画シリーズ」、各教員が交代で専門分野の講義をおこない、それに基づいて議論を進める「テーマ・シリーズ」、ゼミでの教育研究の成果をもとに各学生があらためて2年次以降の研究計画を発表する「リサーチプロポーザル・シリーズ」からなっています。

平成13年度からは、文化人類学・民族学などの視点や方法論を批判的に摂取することを目的として、共通科目（特論又は演習）が開講されています。

学生はおおむね1年次において現地調査（フィールドワーク）の準備をおこない、2年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミナール」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

両専攻の教育研究の目的は――

① 独創的な文化人類学・民族学の研究
② 長期のフィールドワークで得られた資料にもとづく学位論文の作成
③ 広い視野をもった、専門的教養を養うこと――です。



国立民族学博物館・全景



地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

大学院入学定員及び現員（平成19年4月1日現在）

専攻	入学定員	現員				備考
		1年次	2年次	3年次	計	
地域文化学専攻	3	5	3	8	16	
比較文化学専攻	3	4	2	13	19	
計	6	9	5	21	35	

博士後期課程の入学定員は、文化学研究科全体で定員。

野元美佐（平成19年3月修了）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。又専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻 比較文化学専攻	文学 文学 } 学位論文の内容によっては学術

学位論文リスト

【課程博士】

『数学的手法を用いた文化分析の方法について』	小島三弘（比較）	[H4.3.31 学術]
『シドニーにおける都市アボリジニの研究　伝統と民族の創出』	鈴木清史（比較）	[H6.3.24 文学]
『オルドス・モンゴル族の社会構造―ヤスの機能とその歴史的変容―』	楯　海英（地域）	[H6.9.20 文学]
『ペルーにおける山の神信仰の場在性―アンデスの宗教的世界のダイナミズム―』	細谷広美（地域）	[H7.3.23 文学]
『ビルマにおけるウェイザー信仰の研究』	土佐桂子（比較）	[H7.3.23 文学]
『韓国社会の動態と「両班化」―忠清北道阿丹郡における門中と儒式儀礼の検討を通して』	岡田浩樹（地域）	[H8.3.21 文学]
『中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究』	曹　建南（地域）	[H8.3.21 文学]
『歌に表象される落村意識―奄美における「シマの歌」の研究―』	中原ゆかり（比較）	[H8.3.21 文学]
『四合院家屋の文化人類学的研究―人間と自然との相互作用の視点から』	杉山京子（地域）	[H10.3.24 文学]
『モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究―アルタイ・ハイラル叙事詩を事例として―』	藤井麻湖（地域）	[H10.3.24 文学]
『カストム・メレシ―ヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および民間医療観の現代的位相』	白川千尋（地域）	[H10.3.24 文学]
『韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究』	李　善愛（比較）	[H10.3.24 文学]
『東南中国の漢族社会組織とその変容―閩南農村社会における宗族の研究』	潘　宏立（比較）	[H10.3.24 文学]
『宮の伝承―ジャワ島・チルボンの仮面舞踊を中心に』	福岡まどか（比較）	[H10.3.24 文学]
『Overt First and Second Person-Designating Terms in Japanese Discourse ―A Pragmatic Perspective―』	Riikka Lansisalmi（比較）	[H10.3.24 文学]
『「二重の窮乏」下の平等理念―現代世界とキリバス南部環礁の社会生活―』	風間計博（地域）	[H10.9.30 文学]
『建築と文化・社会との相互作用―中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象として―』	栗原伸治（地域）	[H10.9.30 学術]
『カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容―宗教共同体と開発の視点から―』	子島　進（地域）	[H11.3.24 文学]
『地域主義運動における言語と知識人―エストニア南部ヴォル地方の事例から―』	宮水明子（地域）	[H11.3.24 学術]
『英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究―文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相―』	塩路有子（比較）	[H12.9.29 文学]
『北タイ・アカの家屋に関する研究―家屋の形式とその変化への視点から―』	清水郁郎（地域）	[H13.3.23 文学]
『韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化―忠清南道公州市を中心として活動する薬草商人を例に―』	林　史樹（地域）	[H13.3.23 文学]
『現代インドネシアにおけるジャワ大衆演劇クトプラの研究』	青木武信（比較）	[H13.3.23 文学]
『南ラオス村落社会における政治過程の研究―シゲの村における「遺棄」と闘争―』	中田友子（地域）	[H14.3.22 文学]
『20世紀前半のポリビアにおける先住民教育と植民地主義』	吉江貴文（地域）	[H14.3.22 文学]
『カメルーンにおける「商売の民」バミレケの都市人類学的研究』	野元美佐（比較）	[H14.3.22 文学]
『タイ式医療の構築とタイ・マッサージ―社会的文脈による権威的知識の多様性―』	飯田淳子（地域）	[H15.3.24 文学]
『インドネシア・スンダの食文化―言語人類学的観点から―』	阿良田麻里子（地域）	[H17.3.24 文学]
『韓国の仮面劇「固城五広大」の伝承と演戯者―解放後の韓国社会における民俗芸能の変遷から―』	高　正子（地域）	[H17.3.24 文学]
『帰還と離散のはざまで―ウクライナ一地方都市におけるユダヤ人追礼の民族誌―』	赤尾　光春（地域）	[H17.9.30 学術]
『イスラエルにおけるアラブ人キリスト教徒のアイデンティティの様態―ガリラヤ地方・メルキト派カトリック信徒の事例研究―』	菅瀬　晶子（地域）	[H18.3.24 文学]
『トンガ王国の土地制度―グローバル化のなかの伝統―』	森本利恵（地域）	[H18.3.24 文学]
『パラライカの鳴り響く空間：1917～48年における社会主義の文化の生成』	大家（柚木）かおり（地域）	[H18.3.24 学術]

『フィジーにおける植民地主義とインド系移民社会―砂糖キビ栽培地域の村落社会における文化の動態―』	村田晶子（比較）	[H18.9.29 文学]
『上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的研究』	飯國有佳子（地域）	[H19.3.23 文学]
『「護り」の身体技法に関する映像人類学研究―インドネシア・ミナンカバウの事例から―』	村尾静二（比較）	[H19.3.23 文学]
『離散と故郷―ヨルダンのパレスチナ系住民にみられる帰属意識とナショナリズム―』	錦田愛子（地域）	[H19.3.23 文学]
『「子ども域」の文化人類学的研究―バングラデシュ農村社会の子ども―』	南出和余（比較）	[H19.3.23 文学]

【論文博士】

『An Areal-Typological Study of Middle American Indian Languages』	八杉佳穂	[H6.3.30 文学]
『農村女性からみたトルコの「近代化」―世俗主義、イスラーム、女性の相互関係』	中山紀子	[H9.3.24 文学]
『南タイにおける実践宗教―ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から―』	西井凉子	[H9.3.24 文学]
『セネガルの公権力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究』	小川　了	[H9.3.24 文学]
『メラネシアの政治的リーダーシップと開発―ソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐって―』	関根久雄	[H10.9.30 文学]
『南インドの農村におけるカースト内関係としての親族―コング・ヴェッラーラの事例研究―』	杉本星子	[H10.9.30 文学]
『アイヌ民族における神送りの研究―沙流川流域を中心に―』	萱野　茂	[H13.3.23 学術]
『低湿地立地の遺跡にみる縄文時代本州西部地域の生業活動 ―縄文時代早期末から中期初頭における若狭湾沿岸と琵琶湖周辺地域の動物考古学的考察―』	内山純蔵	[H14.3.22 文学]
『考古学における数量化と数理的手法の研究』	及川昭文	[H14.3.22 学術]
『経管信仰―近世江南農村社会と民間宗教―』	濱島敦俊	[H14.9.30 学術]
『中国の食事方法―歴史人類学的考察―』	西澤治彦	[H15.3.24 文学]
『台湾原住民のイノシシ（Sus scrofa taivanus）狩猟の民族考古学的研究：動物遺存体研究の方法論構築にむけて』	野林厚志	[H15.3.24 学術]
『The Transformation and Social Functions of the sNang zhig Family and its Monastery ―An Ethnographic Description of the Bon Tradition in Amdo』	才譲　太	[H16.9.30 学術]
『利用者の視点にたった博物館の理念と活動様式の研究』	布谷知夫	[H16.9.30 文学]
『トビニタイ文化の集団構成と生計戦略―北海道東部における「中世アイヌ社会」成立に至る一階梯―』	大西秀之	[H17.3.24 文学]
『アットゥシの歴史に関する基礎的研究―アイヌ伝統文化の再検討の試みとして―』	本田優子	[H17.9.30 文学]
『カナダ・イヌイットの食物分配に関する文化人類学的研究―先住民社会の変容と再生産―』	岸上伸啓	[H18.3.24 文学]
『タイ中部農村における相互行為の民族誌的研究』	高城　玲	[H18.3.24 文学]
『東ネパールにおける半銅いの生産活動と放牧地をめぐる社会関係』	渡辺和之	[H18.3.24 文学]

「卒業生」からのメッセージII

総合研究大学院大学 葉山高等研究センター 上級研究員 村尾静二（平成19年3月修了）

総研大・文化科学研究科（地域文化学・比較文化学専攻）に入学すると、日々多くの時間を国立民族学博物館で過ごすなか、研究生活を送ることになります。これは、進学を検討されている学生の方々にとって、初めての体験になることでしょう。研究の場としての国立民族学博物館の特色は、なによりも人的資源の豊かさにあります。幅広い地域・分野を専門とする教員（研究者）の層は厚く、大学院生の数を凌ぎます。大学院生は論文ゼミナールを主催し、同僚や多くの教員と議論をたたかわせるなかで自らの研究をより分析的かつ総合的なものに仕立てていきます。また、定期的に開催される共同研究会や国際シンポジウムには、全国そして世界から研究者が集います。大学院生は自らの関心に応じて参加し、そこで最先端の議論を知り、多様な人的交流を図ることができるのです。一方、ここは物質的資源も豊かです。世界の文化に関する標本資料や文献は充実しており、諸民族の文化を常に身近に感じながら研究を進めることができます。さらには、博物館活動をささえる施設や機材を活用することにより、一般の大学では実現しにくい専門性の高い研究に取り組むことも可能となるのです。両専攻に入学されたら、この恵まれた研究環境を存分に活用し、充実した研究生活を送ってください。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する



国立民族学博物館長　松園 万亀雄

文化人類学=民族学は世界の諸民族の文化や社会を研究する学問です。いまは世界各地で人、モノ、情報が急激な勢いで飛び交い、移動している時代です。かつては当然とされていた社会の秩序がこわされ、混乱と葛藤が世界を覆っています。民族学を研究する者にとっては、挑戦的な課題がつぎつぎに突きつけられているといわねばなりません。それだけに人間と社会についての斬新な着想をつむぎだすための、幅広い視野と豊かな想像力が私たちには求められています。

国立民族学博物館には、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置されています。博士課程後期3年に在籍しようとする学生は、近い将来、大学や研究機関で教育研究にたずさわり、また文化人類学=民族学の知識を応用して、日本や世界の人々の生活に実践的にかかわる仕事に就くことになります。

国立民族学博物館は優秀な教授陣を擁しており、また文献資料その他の研究環境の面でも我が国随一であると、私は自信をもっていうことができます。入学されるみなさんは在学中に学位論文を書きあげ、一人前の研究者として社会に飛び立ってほしいものです。



国立民族学博物館・南アジア展示場

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館（民博）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立された。民博は、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究を進め、学術情報を集積する一方、その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することを使命としている。1989年には、総合研究大学院大学の文化科学研究科地域文化学専攻と比較文化学専攻が民博を基盤機関として設置され、民博での博士後期課程の教育が開始された。

以上のように、国立民族学博物館は、「博物館をもつ研究所」として世界的にみても類例のない規模と機能を有している。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっている。民博の展示は、常設展示と特別展示とで構成されている。このうち常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなる。一方、特別展示は、特定のテーマに焦点を当て、年に数回、期間を限って開催されている。

民博は、2004年4月より、国立大学と足並みをそろえて、法人組織となった。法人の正式名称は、「大学共同利用機関法人人間文化研究機構」であるが、民博は、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所とともに、その一員として再出発した。2006年度から、民博の研究部は、3研究部（民族社会、民族文化、先端人類科学）2センター（研究戦略センター、文化資源研究センター）体制に組織替えがなされた。研究活動の機動性を高めるとともに、その成果をより広くわかりやすく社会に伝えていくための措置である。文化人類学・民族学を基礎としつつ、機関と分野の別を超えて、人間文化の総合的理解に至ろうとする、民博の新たな活動が始まっている。

所蔵民族学資料（平成19年4月1日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	167,993点	映像資料	6,895点	日本語図書	235,190冊
国内資料	88,882点	音響資料	62,453点	外国語図書	361,264冊
計	256,875点	計	69,348点	計	596,454冊
				日本語雑誌	9,608誌
				外国語雑誌	6,425誌
				計	16,033誌

地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み

昭和63年10月	総合研究大学院大学開学【全学】
平成元年4月	文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）設置、学生受入、授業開始
平成7年2月	葉山キャンパス本部共通棟が竣工、この年から入学式を同キャンパスにて総研大全体で挙行【全学】
平成11年4月	先導科学研究科学生受入（地域文化学・比較文化学両専攻併任教官の一部、先導科学研究科の併任に）【全学】
平成12年10月	「オープンキャンパス」開催（年1回）
平成13年4月	地域文化学・比較文化学両専攻の同窓生ネットワーク発足
平成17年4月	関西4大学との学生交流に関する協定を締結、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、大阪大学大学院人間科学研究科、神戸大学大学院総合人間科学研究科（平成19年度より国際文化学研究科および人間発達環境学研究科に改組）、および京都文教大学大学院文化人類学研究科との単位互換授業の開講開始

年度別学位授与者数

	地域文化学専攻		比較文化学専攻		計
	課程博士	論文博士	課程博士	論文博士	
平成3年度			1		1
平成5年度			1	1	2
平成6年度	2		1		3
平成7年度	2		1		3
平成8年度		3			3
平成9年度	3		4		7
平成10年度	4	2			6
平成12年度	2		2	1	5
平成13年度	1	1	2	1	5
平成14年度	1	1		2	4
平成16年度	2	3			5
平成17年度	4	2		2	8
平成18年度	2		3		5
計	23	12	15	7	57

入学者選抜試験倍率

平成	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年
志願者数	22	17	23	31	23	28	18	19	7	18
合格者数	6(1)	7	6	8	8	7	6	7(1)	6(1)	7
倍率	3.7	2.4	3.8	3.9	2.9	4.0	3.0	2.7	1.2	2.6

※（ ）は入学辞退者で内数。

合格者出身大学院機関別累計

平成	元年~9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	計
国立	34(7)	4(1)	4	5	5	4	5	3	4(1)	2(1)	2	72(10)
公立	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2
私立	14(1)	2	2	(1)	3	1	1	2(1)	2	4	1	32(1)(2)
海外	8(1)	0	1	1	0	2(1)	1	1	1	0	3	18(1)(1)
合計	56(9)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	6(1)	7(1)	6(1)	7	124(12)(3)

※（ ）は入学辞退者で内数。（ ）内は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身（1名）者は学部卒で資格認定による。

合格者出身大学院地方別累計

平成	元年~9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	計
北海道	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
関東	28(6)	3(1)	4	2(1)	3	3	2	2	1	3	2	53(7)(1)
中部	6	2	0	0	0	1	1	1	1(1)	0	0	12(1)
近畿	10(2)	1	2	3	4	2	3	2(1)	3	2	2	34(2)(1)
中国	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	4
九州	1	0	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	2(1)
海外	8(1)	0	1	1	0	2(1)	1	1	1	0	3	18(1)(1)
合計	56(9)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	6(1)	7(1)	6(1)	7	124(12)(3)

※（ ）は入学辞退者で内数。（ ）内は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身（1名）者は学部卒で資格認定による。

総合研究大学院大学について

ごあいさつ



総合研究大学院大学長　小平 桂一

総合研究大学院大学、略して「総研大」は、基礎学術分野の総合的発展と高度な研究的資質を備えた知的市民の育成を目指して、大学院学生の教育を行なうために、1988年に設立されました。現在では、神奈川県の葉山町に大学本部を持ち、各地に置かれた18の国立学術研究機関等を基盤として大学院生を分散配置し、ユニークな博士課程教育を展開しています。これらの基盤機関の中心は、人文系から自然科学系にわたる、各専門分野に設置された「大学共同利用機関」で、一大学では維持・運用できない大型最新の装置・設備・システムによる研究や、広範・大量な資料に基づく長期的研究、従来の大学講座の枠を超えた学問分野の研究などが行われています。

全国の大学研究者や大学院生が、共同で利用し研究を進めているので、異なる地域や専門領域の間の交流や協力が促進され、新しい研究の芽や学際領域が伸び易い、優れた環境にあります。また、わが国を代表する大型・最新の設備や大量の基礎資料を備えているので、当該分野の国際的窓口となって、多くの国際共同研究も行われており、大学院生にも、早くから国際性を身につける種々の機会を提供しています。これから、大学・大学院教育が大きく変わろうとしているとき、わが国の高等学術研究・教育の要の一環として、これら大学共同利用機関等の役割は、一層その重要性を増すものと確信します。

二十一世紀の国際社会では、各学問分野の深化と共に、多様な学問分野を総合する広い視野と知性が要求されることは、間違いありません。とりわけ、人文系学問の総合的推進や自然科学との融合が、重要な課題となることでしょう。そこに、異なる専門分野の諸基盤機関にまたがって設立され、「総合」と「分散」の両機能を果たすべき「総研大」の意義と使命があります。「総研大」教員の多くは、基盤機関の教員ですが、学生教育に当たっては、専門研究領域・分野を超えて、「総研大」教員としての使命を自覚するよう願っています。また、進学を希望する学生も、単に専門分野で学位を取得しようとするだけでなく、「総研大」にふさわしい考え方や生き方を、少しでも学ぼうという意欲を持って臨むよう、大いに期待しています。

建学にあたられた長倉三郎先生、基礎を築き上げられた廣田榮治先生を始めとする諸先達の努力により、今や「総研大」は「成熟期」に入ろうとしています。折も折り、世界的な潮流の中でわが国も、国立大学の制度改革を断行しつつあります。多くの大学や研究所が、社会の短期的・直接的な要請に応えて教育・研究活動を行なおうとするなかで、わが国の将来に欠くことのできない、長期的・基礎的な学術分野を理解し、あるいは担い、あるいは新しい道を切り開いていこうとする、高度な知的市民を育成することは、必須の国家的課題です。大学共同利用機関等を基盤とする「総研大」こそは、広範囲にわたる教員団の協力の下に、工夫を凝らして、「新しい大学院生」を育てていかなければなりません。基盤機関が地域的に分散している点は、ともすると、「総研大」の働きにとって負担になりがちですが、逆にそれを乗り越え活かす工夫も、効果を発揮し始めています。関係各位には、引き続きご理解とご協力を賜りたく、ここに改めてお願い申し上げる次第です。

総合研究大学院大学の特徴

特色ある博士課程教育
- 5年一貫制博士課程制度と博士後期課程制度の併用
- 基盤機関の研究現場を活用した教育プログラム
- 個の能力に即した教育プログラム
- 社会人学生・留学生受入れプログラム

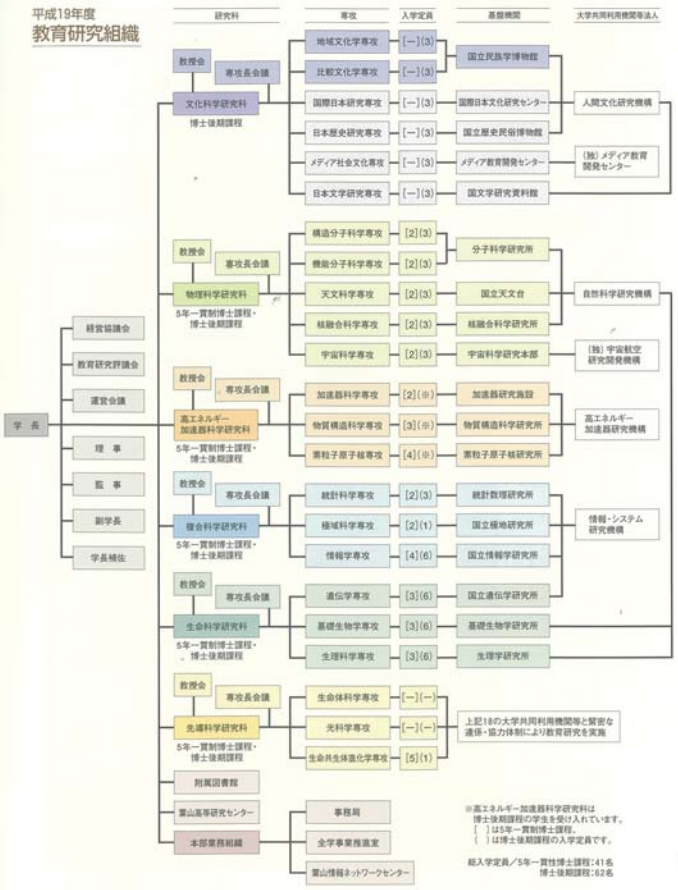
高い専門性の養成
- 各専攻分野の最先端研究者による研究指導
- 多様な専門教育プログラム
- 学位取得プロセス管理プログラム／長倉研究奨励賞
- 基盤機関が有する世界最高水準の資料・施設・設備の活用

広い視野の養成
- 専攻・研究科間の共同教育研究事業
- 総合科目遠隔授業プログラム
- 全学学生セミナー
- 全学学術交流会

国際的通用性の養成
- 最先端研究技術・研究者の交流拠点における教育
- プレゼンテーション能力養成プログラム
- 海外学生派遣事業
- 国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムの活用

分野横断的・先導的学問分野の創出
- 葉山高等研究センターにおけるプロジェクト研究の推進
- 先導科学研究科における総合的な教育研究の実施
- 「科学と社会」プログラムの全学的な展開
- 修了生を中心とした学術交流ネットワーク

平成19年度 教育研究組織



出願資格等

(1) 出願資格

次のいずれかに該当する者とする。
①修士の学位又は専門職学位を有する者及び入学の前月までに取得する見込みがある者
②外国において、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みがある者
③外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みがある者
④我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者
⑤大学を卒業し、大学、研究所等において、入学の前月までに2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑥外国において学校教育における16年の課程を修了した後、又は外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、入学の前月までに2年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑦本学において、個別の入学資格審査により、修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、入学の月の1日において24歳に達しているもの
（⑤、⑥又は⑦により出願しようとする者は、事前に本学で実施する「学力の認定」を受ける必要がある）

(2) 選抜方法（文化科学研究科）

選抜は、書類選考、修士論文又はそれに代わるものの審査及び面接により行う。
①書類選考
志望研究内容等、その他研究科が提出を求めた資料について行う。
②修士論文等の審査
修士の学位を有する者及び修士課程在学中の者については修士論文、また学力認定により出願資格が認められた者については刊行された論文又は著作を審査する。
③面接
面接は書類選考・論文審査合格者についてのみ行うものとする。書類選考・論文審査の合否は面接日の約1週間前までに、入学願書に記載された連絡先に文章で個別に連絡する。
（なお、合否通知が面接日の1週間前を過ぎても到着しない場合は、総合研究大学院大学学務課学生厚生係まで問い合わせること。）
面接は、主として修士論文（修士論文のない者は発表した学術論文等又はこれまでに行った研究の要旨）の内容及び志望研究内容について行う。
◎詳細は募集要項を請求のうえ確認してください。

(3) 修了要件

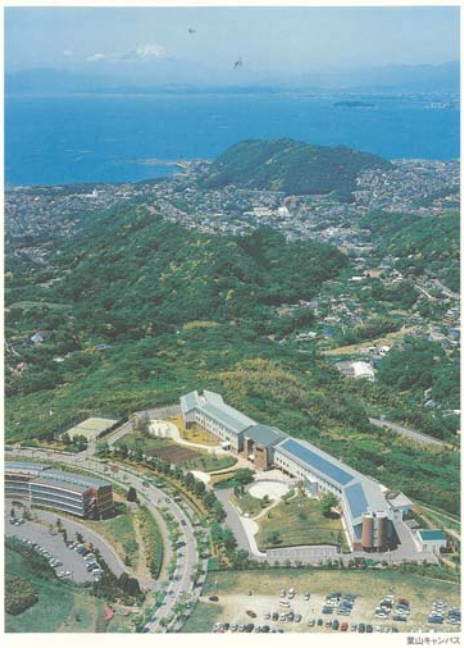
本研究科の専攻に3年以上在学し、所定の単位数以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び試験に合格すること。
ただし、特に優れた研究業績を上げた者については、在学期間を短縮して修了を認めることがある。

募集要項請求先

〈募集要項の請求方法〉
下記メールアドレスに、以下の必要事項を記入し、送信してください。
(1) 郵便番号 (2) 住所 (3) 氏名 (4) 電話番号
(5) 希望する募集要項→「平成20年度4月入学 文化科学研究科地域文化学専攻・比較文化学専攻（希望する募集要項の種類：1）」と記入してください。※配付は8月上旬頃から開始します。

メールアドレス：kousei@soken.ac.jp

問合せ先
総合研究大学院大学 学務課 学生厚生係
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
TEL：046-858-1525, 1526


葉山キャンパス

問合せ先

国立民族学博物館　管理部研究協力課研究協力係

〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151（代表）06-6878-8236（専攻担当）FAX 06-6878-8479
URL http://www.minpaku.ac.jp/　E-mail souken@idc.minpaku.ac.jp

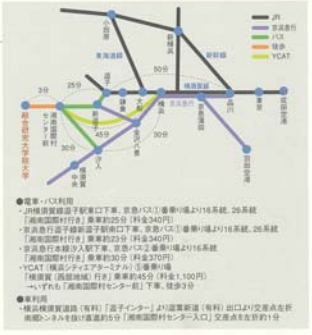


●大阪モノレールで公園東口駅下車、無料地域を通って徒歩約13分
●大阪モノレールで万博記念公園駅下車、徒歩約15分（ただし、公園中央口経由自然文化園は有料です）
●阪急茨木市駅・JR茨木駅より阪急バス113系統「自然文化園・日本庭園中央」下車徒歩約5分、または阪急バス117系統・近鉄バス24系統・近鉄バス25系統「日本庭園前」下車徒歩約15分
●北大阪急行千里中央駅より阪急バス112系統「日本庭園前」下車徒歩約15分
●タクシーは万博記念公園・日本庭園前駐車場まで乗り入れることができます。下車徒歩約5分。

総合研究大学院大学　事務局

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電話 046-858-1500（代表）
FAX 046-858-1541
URL http://www.soken.ac.jp/





●電車・バス利用
・JR横須賀線逗子駅東口下車、京急バス「①番乗り場より16系統、26系統「湘南国際村行き」乗車約25分（料金340円）
・京浜急行逗子線新逗子駅前口下車、京急バス「①番乗り場より16系統、26系統「湘南国際村行き」乗車約23分（料金340円）
・京浜急行本線久入駅下車、京急バス②番乗り場より16系統「湘南国際村行き」乗車約30分（料金370円）
・YCAT（横浜シティエアターミナル）⑤番乗り場「横須賀（西部地域）行き」乗車約45分（料金1,100円）→いずれも「湘南国際村センター前」下車、徒歩3分
●車利用
・横浜横須賀道路（有料）「逗子インター」より国道新道（有料）出口より交差点左折南郷トンネルを抜け直進約5分「湘南国際村センター入口」交差点を左折約1分

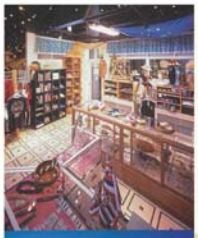


総合研究大学院大学
文化科学研究科
地域文化学専攻
比較文化学専攻　概要'08

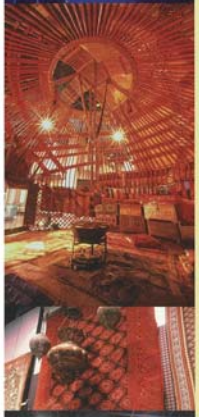
The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies

Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies
Summary

大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立民族学博物館











目次

文化科学研究科について　1

専攻の概要
- 地域文化学専攻　2
- 比較文化学専攻　3
- 地域文化学専攻授業概要　4
- 比較文化学専攻授業概要　6
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員　8
- 担当教員の専門分野　8
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法　9
- フィールドからみる世界〜学生の研究フィールド・マップ〜　10
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生　10
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位　12
- 学位論文リスト　12
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する　14
- 国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要　15
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み　16
- 年度別学位記授与者数　16
- 入学者選抜試験倍率　16
- 合格者出身大学院機関別累計　16
- 合格者出身大学院地方別累計　16

総合研究大学院大学について
- 学長あいさつ　17
- 総合研究大学院大学の特徴　18
- 大学の教育研究組織　19
- 出願資格等　20
- 募集要項請求先　21

問合せ先

文化科学研究科について



研究科長　黒須 正明

総合研究大学院大学（略して総研大）は、学部をもたず大学院だけから構成される国立大学として、昭和63年（1988）10月1日に開学した我が国最初の大学院大学です。現在、総研大には全部で6つの研究科がありますが、文化科学研究科は、その研究科の1つで、総研大唯一の文系の研究科です。

まず、平成元年（1989）4月に、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻の2専攻の設置から出発しました。その後、平成4年（1992）4月には、国際日本文化研究センターを基盤として国際日本研究専攻が、平成11年（1999）4月には、国立歴史民俗博物館を基盤として日本歴史研究専攻が、平成13年（2001）4月にはメディア教育開発センターを基盤としてメディア社会文化専攻が、平成15年（2003）4月には、国文学研究資料館を基盤とする日本文学研究専攻が、それぞれ増設されました。そして、平成16年（2004）4月からは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構が設立され、4つの研究機関（国立民族学博物館、国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館及び国文学研究資料館）と独立行政法人メディア教育開発センターをあわせた5つの研究機関を基盤とし国立大学法人総合研究大学院大学文化科学研究科となりました。現在、総研大の他の研究科では5年一貫制といって、博士課程前期（修士）の方々も受け入れていますが、文化科学研究科だけは博士課程後期（博士）だけから構成されています。

研究科を構成している5つの基盤機関は以下のとおりです。

・国立民族学博物館は、日本における文化人類学・民族学の研究センターとしての機能をもち、世界の諸民族の社会と文化の学際的研究を多角的に推進しています。近年の国際化・国際交流の著しい進展と活発化、その一方での民族紛争の多発など、研究課題の多様化・グローバル化とこれに伴う研究分野の拡大は、文化人類学・民族学の国際的かつ学際的必要性をますます強めつつあります。

・国際日本文化研究センターは、日本文化や日本社会に関する国際的・学際的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力を行う機能をもつ研究機関です。近年の国際化の中で日本に対する関心が高まっており、「日本」に関する総合的な研究が世界的な規模で進められています。

・国立歴史民俗博物館は、文献資料・民俗資料・考古資料を学際的に研究することによって新しい歴史学の創造を目指している研究機関で、世界史的な広い視野からの日本歴史理解へのアプローチを開拓するとともに、国際的な日本歴史研究を推進しています。

・メディア教育開発センターは、高等教育におけるインターネットなどのマルチメディアの利用を促進するための我が国における中核的機関であり、多様なメディアを高度に利用して行う教育の内容、方法等を研究開発し、その成果を提供することを目的として、先導的な研究を行っています。

・国文学研究資料館は日本全国に散在する前近代1,200年間の文献資料を調査研究し、その収集、整理、保存にあたっている研究機関で、その資料情報を広く日本文学研究者の利用に供しています。

この5つの研究機関を基盤として、文化科学研究科は、世界の諸民族の社会と文化に関して地域的・個別的に対象を設定して教育研究を行う「地域文化学専攻」と、そのような諸民族の社会・技術・宗教・芸術等について通文化的手法に基づき教育研究を行う「比較文化学専攻」、国際的な視野で日本文化と文明について教育研究を行う「国際日本研究専攻」、および文献史学の枠にとらわれず、広く歴史学・考古学・民俗学を中心に関連諸科学との協業により、総合的な日本歴史解明を目指した教育研究を行う「日本歴史研究専攻」、メディアと文化、社会、人間の相互作用について、学際的かつ総合的な教育を行う「メディア社会文化専攻」。そして、文化科学の視点から文学資源の実態、作品の形成と享受の動態、その制度・環境などを総合的に研究する視点に立って教育研究を行う「日本文学研究専攻」。の6専攻を置き、国際的・学際的な教育研究を通して、各界で活躍し得る視野の広い、国際性豊かな人材の養成を目指しています。まだ全専攻ではありませんが、長期履修制度の導入を行うなど新しい取り組みにも積極的で、また助成金を得て、研究科全体として専攻横断型の教育体制の確立を試行しています。

地域文化学専攻

専攻長　竹沢 尚一郎



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ及びオセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的とする。本専攻においては、現地調査およびこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する、高度な専門性を持った研究者の養成を行う。

教育研究指導分野の概要

分野	概要
アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
基礎科目	地域文化学に関する基礎演習および博士論文作成のための演習
共通科目	地域文化学に関する基礎的な講義
総合教育科目	全学共通、各研究科、専攻を超えて実施する学生セミナーや総研大レクチャー（集中講義）など

比較文化学専攻

専攻長　近藤 雅樹



本専攻では、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術という５つの研究分野に加え、新たに文化資源研究と名付けた分野を開設した。諸民族文化の比較研究により、各々に通底する普遍的な法則の発見と理論的解明を目指す。従来の文化人類学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入し、新しい研究方法の開発を積極的にすすめて高度な専門性を持った研究者を養成する。

教育研究指導分野の概要

分野	概要
比較社会研究	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治、法、経済等に関する通文化的・理論的研究
比較宗教研究	諸民族の呪術、祭祀、神話、宇宙観、宗教等に関する通文化的・理論的研究
比較技術研究	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究
比較言語研究	諸民族の言語、文字、コミュニケーション、言語政策等に関する通文化的・理論的研究
比較芸術研究	諸民族の音楽、芸能、文芸、工芸、造形等に関する通文化的・理論的研究
文化資源研究	博物館人類学、博物館情報学、保存科学、および文化資源に関する理論的・実践的研究
基礎科目	比較文化学に関する基礎演習および博士論文作成のための演習
共通科目	比較文化学に関する基礎的な講義
総合教育科目	全学共通、各研究科、専攻を超えて実施する学生セミナーや総研大レクチャー（集中講義）など

地域文化学専攻授業概要（平成20年度）

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
アジア地域文化Ⅰ	東アジア文化研究	東アジアの諸民族の文化と歴史	准教授　野林 厚志
	東アジア文化研究特論Ⅰ	中国における文化変化と社会	准教授　横山 廣子
	東アジア文化研究特論Ⅱ	東アジアにおける都市空間	
	東アジア文化研究演習Ⅰ	中国南部諸民族の歴史民族学的研究に関する講述	教　授　塚田 誠之
	東アジア文化研究演習Ⅱ	朝鮮半島を中心とした東アジアにおける社会と文化	教　授　朝倉 敏夫
	北・中央アジア文化研究	モンゴル遊牧社会論	教　授　小長谷有紀
	北・中央アジア文化研究特論	北アジア狩猟採集文化研究	教　授　佐々木史郎
	北・中央アジア文化研究演習Ⅰ	社会主義的近代化の比較研究	
	北・中央アジア文化研究演習Ⅱ	北・中央アジアの旧社会主義諸国におけるポスト社会主義の比較	
アジア地域文化Ⅱ	東南アジア文化研究	東南アジアの住文化研究	准教授　佐藤 浩司
	東南アジア文化研究特論	東南アジアにおける都市空間	
	東南アジア文化研究演習Ⅰ	東南アジア諸社会の文化とその変容	教　授　田村 克己
	東南アジア文化研究演習Ⅱ	東南アジアの旧社会主義諸国におけるポスト社会主義の比較	
	南アジア文化研究	インドのナショナリズムと宗教	准教授　三尾 稔
	南アジア文化研究特論	ネパールの民族運動と現代政治	准教授　南 真木人
	南アジア文化研究演習Ⅰ	インドの都市の社会と文化	
	南アジア文化研究演習Ⅱ	インドにおける生活宗教の実践の多様性	
	西アジア文化研究	中東イスラム社会における民衆文化	教　授　西尾 哲夫
	西アジア文化研究特論	アラビアンナイトと中東世界の女性観	
	西アジア文化研究演習Ⅰ	現代中東における部族と国家	
	西アジア文化研究演習Ⅱ	現代イスラム世界における聖者信仰	
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ文化研究	東欧の政治文化と宗教	准教授　新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究特論	南ヨーロッパのジェンダー・セクシュアリティ	准教授　宇田川妙子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	シティズンシップの系譜学	教　授　森　明子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ	空間と場所の人類学	
アフリカ地域文化	アフリカ文化研究	アフリカ地域の民族文化と経済倫理	准教授　三島 禎子
	アフリカ文化研究特論	アフリカ史研究の諸課題	
	アフリカ文化研究演習Ⅰ	アフリカ地域の生態人類学	教　授　池谷 和信
	アフリカ文化研究演習Ⅱ	民族誌再考	教　授　竹沢尚一郎
アメリカ地域文化	アメリカ文化研究	中米文化研究	教　授　八杉 佳穂
	アメリカ文化研究特論	南アメリカのエスノヒストリー	准教授　齋藤 晃
	アメリカ文化研究演習Ⅰ	文字と言語	
	アメリカ文化研究演習Ⅱ	ラテンアメリカにおける史料調査	
オセアニア地域文化	オセアニア文化研究	災害と文化の人類学	准教授　林　勲男
	オセアニア文化研究特論	オセアニアにおける土器文化の諸相	教　授　印東 道子
	オセアニア文化研究演習Ⅰ	アボリジナル史の人類学的構築	教　授　松山 利夫
	オセアニア文化研究演習Ⅱ	土地権法と先住民権原法―その人類学的解釈―	

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
基礎科目	地域文化学基礎演習Ⅰ	地域文化研究に関する基礎演習	教　授　池谷 和信
	地域文化学基礎演習Ⅱ	地域文化研究に関する基礎演習	准教授　野林 厚志
	地域文化学演習Ⅰ	博士論文作成のための演習	教　授　森　明子
	地域文化学演習Ⅱ	博士論文作成のための演習	教　授　佐々木史郎
共通科目	地域文化学特論Ⅰ	家族・親族とジェンダーに関する人類学的研究：その再考と新たな潮流の可能性	准教授　宇田川妙子
	地域文化学特論Ⅱ	人類学的思考の歴史	教　授　竹沢尚一郎

※年度によって開講科目が異なる。

地域文化学専攻の人材養成目的

民族学・文化人類学の分野を中心とする諸科学に関して高度な専門知識をもち、世界の諸地域における多様な文化について、現地調査等を通じて優れた研究をおこなう研究者および高度な専門性をもって国際的見地から社会に貢献しうる人材の育成を目的とする。

地域文化学専攻の教育方針

地域文化学専攻を置く国立民族学博物館は、世界の諸地域における多様な文化に関して図書資料や標本資料、映像音響資料等のさまざまな情報を集積している研究施設であり、国内外の多くの研究者の参画によって運営される大学共同利用機関である。こうした利点を活かして、質の高い研究に支えられた教育をおこなう。
また、長期の現地調査や国際会議での成果公開や、組織的研究の運営等の研究活動に必要な能力開発をめざす。
研究指導は指導教員を中心としつつ、学生ごとにその研究テーマに応じたアドバイザリーグループを構成して、専攻に属する教員全体で指導する体制をとる。

地域文化学専攻の求める学生像

世界の多様な地域社会や地域文化について広い関心をもち、とりわけ民族学・文化人類学の基礎研究に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。





比較文化学専攻授業概要（平成20年度）

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
比較社会研究	比較社会研究Ⅰ	コミュニティの人類学	准教授　平井京之介
	比較社会研究Ⅱ	中国の社会人類学 ―欧米・日本・中国のパースペクティブ	准教授　韓　敏
	比較社会研究特論Ⅰ	言政学的視点から見たグローバルな市民社会	教　授　出口 正之
	比較社会研究特論Ⅱ	社会・文化に関する人類学的アプローチ	教　授　岸上 伸啓
	比較社会研究演習Ⅰ	宗教とナショナリズム	教　授　杉本 良男
	比較社会研究演習Ⅱ	極北人類学の研究動向と研究課題	教　授　岸上 伸啓
	比較社会研究演習Ⅲ	民族社会に関する研究方法	
比較宗教研究	比較宗教研究	呪術と科学の文化人類学	准教授　白川 千尋
	比較宗教研究特論	日本宗教と日系宗教の研究	教　授　中牧 弘允
	比較宗教研究演習Ⅰ	南アメリカの宗教	
	比較宗教研究演習Ⅱ	太平洋島嶼部の呪術と宗教	准教授　白川 千尋
比較技術研究	比較技術研究Ⅰ	近現代における生産技術に対する意識変化	
	比較技術研究Ⅱ	インカ帝国研究の動向	教　授　関　雄二
	比較技術研究特論	コレクションと検索システムを活用した民族技術の比較研究	教　授　近藤 /雅樹
	比較技術研究演習Ⅰ	アジアと太平洋地域における民族植物学と技術	准教授　Mattews, Peter J.
	比較技術研究演習Ⅱ	手織機の型式と機織り技術	教　授　吉本 忍
比較言語研究	比較言語研究	歴史（比較）言語学の方法	准教授　菊澤 律子
	比較言語研究特論	母語と母語教育について	
	比較言語研究演習Ⅰ	少数言語のとらえ方	教　授　庄司 博史
	比較言語研究演習Ⅱ	オーストロネシア比較言語学	
比較芸術研究	比較芸術研究Ⅰ	伝統芸能の映像記録	准教授　福岡 正太
	比較芸術研究Ⅱ	日常的・実践的な身体技法としての芸能伝承論	准教授　菅原 亮二
	比較芸術研究特論	日本の民俗芸能の歴史的展開と多様性	
	比較芸術研究演習Ⅰ	北米・ハワイのアジア系音楽	准教授　寺田 吉孝
	比較芸術研究演習Ⅱ	アイヌの工芸	教　授　佐々木利和
文化資源研究	文化資源研究	博物館における資料管理	教　授　園田 直子
	文化資源研究特論	絵画における技法、素材の比較研究	
	文化資源研究演習Ⅰ	文化資源の情報モデル論、情報処理論、アーカイブズ論、知的財産権の議論、メディア・リテラシー論、などの講述と議論	教　授　久保 正敏
	文化資源研究演習Ⅱ	博物館情報学	准教授　山本 泰則
	博物館研究	博物館の歴史と政治性	准教授　川口 幸也
	博物館研究特論	博物館人類学	教　授　吉田 憲司
	博物館研究演習Ⅰ	文化人類学・民族学博物館における展示と活用	教　授　小林 繁樹
	博物館研究演習Ⅱ	博物館の多様性と可能性	

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
基礎科目	比較文化学基礎演習Ⅰ	比較文化研究に関する基礎演習	教　授　出口 正之
	比較文化学基礎演習Ⅱ	比較文化研究に関する基礎演習	准教授　笹原 亮二
	比較文化学演習Ⅰ	博士論文作成のための演習	准教授　菊澤 律子
	比較文化学演習Ⅱ	博士論文作成のための演習	教　授　佐々木利和
共通科目	比較文化学特論Ⅰ	宗教人類学	准教授　白川 千尋
	比較文化学特論Ⅱ	社会人類学	教　授　杉本 良男

※年度によって開講科目が異なる。

比較文化学専攻の人材養成目的

文化と社会の諸問題や文化の表象等に関して、現地調査と比較研究にもとづく幅広い専門知識をもつ研究者であり、なおかつ、その高度な専門性をもって社会的な実践をおこないうる人材の育成を目標とする。

比較文化学専攻の教育方針

比較文化学専攻を置く国立民族学博物館は、国内外の大学や博物館等の諸研究機関とともに大規模な調査研究を推進するために設立された大学共同利用機関である。その一方で、展示や講演会、一般社会人を対象としたゼミナール等の活動を通じて広く社会と連携している「開かれた博物館」としての機能も有している。
世界各地の諸民族に関する生活のさまざまな場面で必要とされる標本資料の他にも映像音響記録資料・文献図書資料等を膨大に蓄積している利点を活かし、理論と実践とに結びついた研究に支えられた教育をおこなって、学術論文や学会発表はもとより、研究成果の社会還元に不可欠な情報発信能力を練磨する。
学生個々の研究テーマに応じたアドバイザリー＝グループを構成し、切磋琢磨する環境の中で、指導教員を中心に、専攻に所属する教員全体が指導にあたっている。

比較文化学専攻の求める学生像

人間の社会や文化について広い関心を抱き、とりわけ学問的な理論化やその社会的な応用に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。





地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員

現員（平成20年4月1日現在）

区　分	教　授	准教授	計	備　考
地域文化学専攻	13	10	23	基盤機関の長（民博館長）を含む
比較文化学専攻	13	10	23	
計	26	20	46	

担当教員の専門分野（五十音順）

地域文化学専攻

朝倉 敏夫（韓国社会研究）
池谷 和信（環境人類学・南部アフリカ研究）
印東 道子（オセアニア考古学・民族学）
宇田川 妙子（南ヨーロッパ研究・性研究）
小長谷 有紀（遊牧社会論・モンゴル研究）
齋藤 晃（歴史人類学・ラテンアメリカ研究）
佐々木 史郎（文化人類学・北アジア研究）
佐藤 浩司（民族建築学）
新免 光比呂（宗教学・葬祭研究）
竹沢 尚一郎（歴史人類学・アフリカ研究）
田村 克己（東南アジア文化人類学）
塚田 誠之（歴史民族学・中国研究）
西尾 哲夫（言語人類学・アラブ研究）
野林 厚志（民族考古学・台湾／中国研究）
林　勲男（災害人類学・オセアニア研究）
松園 万亀雄（社会人類学）
松山 利夫（文化人類学・オーストラリア先住民研究）
三尾　稔（文化人類学・南アジア研究）
三島 禎子（文化人類学・西アフリカ研究）
南 真木人（生態人類学・南アジア研究）
森　明子（文化人類学・中部ヨーロッパ研究）
八杉 佳穂（言語人類学・中米文化史）
横山 廣子（文化人類学・中国社会研究）

比較文化学専攻

川口 幸也（アフリカ同時代美術・展示表象論）
韓　敏（社会人類学・中国研究）
菊澤 律子（言語学・オーストロネシア諸語）
岸上 伸啓（文化人類学・北方文化研究）
久保 正敏（コンピュータ民族学・民族情報学）
小林 繁樹（造具人類学、造形文化学、博物館学）
近藤 雅樹（民俗学・民具研究）
佐々木 利和（アイヌ民族史、日本近世史）
笹原 亮二（民俗学・民俗芸能研究）
庄司 博史（言語学・言語政策論）
白川 千尋（文化人類学・オセアニア研究）
杉本 良男（社会人類学・南アジア研究）
関　雄二（アンデス考古学・ラテンアメリカ研究）
園田 直子（保存科学）
出口 正之（比較NPO研究）
寺田 吉孝（民族音楽学・インド研究）
中牧 弘允（宗教人類学・経営人類学・ブラジル研究）
平井 京之介（社会人類学・東南アジア研究）
福岡 正太（民族音楽学・東南アジア研究）
Matthews, Peter J.（先史学・民族植物学）
山本 泰則（博物館情報学）
吉田 憲司（博物館人類学・アフリカ研究）
吉本　忍（民族工芸論・民族技術論）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法

教員が地域文化学・比較文化学両専攻に分かれて教育研究の指導にあたっています。

教育研究の方法は、個別の教員による授業や研究指導と、複数の教員の指導のもとに行われる共通のゼミナールからなっています。

共通のゼミナールには、１年生を対象とする「基礎演習Ⅰ」および「基礎演習Ⅱ」（通称「１年生ゼミナール」）と、博士論文作成の指導を内容とする「演習Ⅰ」および「演習Ⅱ」（通称「論文ゼミナール」）があります。

「１年生ゼミナール」は学生がそれぞれの研究計画を発表する「研究計画シリーズ」、各教員が交代で専門分野の講義をおこない、それに基づいて議論を進める「テーマ・シリーズ」、１年の教育研究課程を受けた学生があらためて研究計画を発表する「リサーチプロポーザル・シリーズ」からなっています。

平成13年度からは、民族学・文化人類学の視点や方法論を批判的に摂取することを目的として、共通科目が開講されています。

学生はおおむね１年次において現地調査（フィールドワーク）の準備をおこない、２年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミナール」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

両専攻の教育研究の目的は――

① 独創的な民族学・文化人類学の研究
② 長期のフィールドワークで得られた資料にもとづく学位論文の作成
③ 広い視野をもった、専門的教養を養うこと――です。



国立民族学博物館・全景



地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

大学院入学定員および現員（平成20年4月1日現在）

専攻	入学定員	現員			
		1期生	2期生	3期生	計
地域文化学専攻	3	2	3	11	16
比較文化学専攻	3	2	4	15	21
計	6	4	7	26	37

●博士後期課程は、2年の標準修業年限を超えて在学する場合があります。また下記のほかに、博士課程に編入学、転入学、再入学、社会人入学、外国人留学生、科目等履修生、聴講生、研究生等があります。

メッセージ I

山田 香織（平成5年3月修了）

総研大在籍中は、ウェイイン王朝おおよそ一〇年、アッシュールバニパル王の治世を中心に、それを支える人びと様々な姿を追いかけました。現在は、ロンドンの大英博物館で収蔵文化財に関する研究に携わっています。

私の専門はオリエント考古学です。総研大と基盤機関である人間文化研究機構には、世界各地の様々な研究者や研究資料が集まっています。先生方の講義や演習、大学院ゼミでの発表などによって、日々さまざまな文化について自分の知識が広がったことが、現在の仕事に非常に役立っています。さらに、ネットワークを通じて、人びとの価値観や関心、生活様式の理解についても広がりました。文化資産を含め、広く深く学ぶ際に、基礎となる学問観を築いてくれたと感じています。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。又専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）
比較文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）

学位論文リスト

課程博士

数学的手法を用いた文化分析の方法について	小島 三弘（比較）	[H4.3.31 学術]
シドニーにおける都市アボリジニの研究　伝統と民族の創出	鈴木 清史（比較）	[H6.3.24 文学]
オルドス・モンゴル族の社会構造―ヤスの機能とその歴史的変容―	楊 海英（地域）	[H6.9.20 文学]
ペルーにおける山の神信仰の現在性―アンデスの宗教的世界のダイナミズム―	柳谷 広美（地域）	[H7.3.23 文学]
ビルマにおけるウェイザー信仰の研究	土佐 桂子（比較）	[H7.3.23 文学]
韓国社会の動態と「両班化」―忠清北道同族部における門中と儀式儀礼の検討を通して	岡田 浩樹（地域）	[H8.3.21 文学]
中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究	曹 建南（地域）	[H8.3.21 文学]
歌に表象される村落意識―奄美における「シマの歌」の研究―	中原ゆかり（比較）	[H8.3.21 文学]
四合院家屋の文化人類学的研究―人間と自然との相互作用の視点から	杉山 京子（地域）	[H10.3.24 文学]
モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究―アルタイ・ハイラハ叙事詩を事例として―	藤井 麻湖（地域）	[H10.3.24 文学]
カストム・メレシン―ヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および民間医療観の現代的位相	白川 千尋（地域）	[H10.3.24 文学]
韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究	李 善愛（比較）	[H10.3.24 文学]
東南中国の漢族社会組織とその変容―閩南農村社会における宗族の研究	潘 宏立（比較）	[H10.3.24 文学]
昔の伝承―ジャワ島・チルボンの仮面舞踏を中心に	福岡まどか（比較）	[H10.3.24 文学]
Overt First and Second Person ― Designating Terms in Japanese Discourse ― A Pragmatic Perspective ―	Riikka Lansisalmi（比較）	[H10.3.24 文学]
「二重の窮乏」下の平等理念―現代世界とキリバス南部環礁の社会生活―	風間 計博（地域）	[H10.9.30 文学]
建築と文化・社会との相互作用―中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象として―	栗原 伸治（地域）	[H10.9.30 学術]
カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容―宗教共同体と開発の視点から―	子島 進（地域）	[H11.3.24 文学]
地域主義運動における言語と知識人―エストニア南部ヴォル地方の事例から―	寒水 明子（地域）	[H11.3.24 学術]
英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究―文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相―	塩路 有子（比較）	[H12.9.29 文学]
北タイ・アカの家屋に関する研究―家屋の形式とその変化への視点から―	清水 郁郎（地域）	[H13.3.23 文学]
韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化―忠清南道公州市を中心として活動する薬草商人を例に―	林 史樹（地域）	[H13.3.23 文学]
現代インドネシアにおけるジャワ大衆演劇クトプラの研究	青木 武信（比較）	[H13.3.23 文学]
南ラオス村落社会における政治過程の研究―ンゲの村における「連帯」と闘争―	中田 友子（地域）	[H14.3.22 文学]
20世紀前半のポリビアにおける先住民教育と植民地主義	吉江 貴文（地域）	[H14.3.22 文学]
カメルーンにおける「商売の民」バミレケの都市人類学的研究	野元 美佐（比較）	[H14.3.22 文学]
タイ式医療の構築とタイ・マッサージ―社会的文脈による権威的知識の多様性―	飯田 淳子（地域）	[H15.3.24 文学]
インドネシア・スンダの食文化―言語人類学的観点から―	阿良田麻里子（地域）	[H17.3.24 文学]
韓国の仮面劇「国城五広大」の伝承と演劇者―解放後の韓国社会における民俗芸能の変遷から―	高 正子（地域）	[H17.3.24 文学]
帰還と離散のはざまで―ウクライナ一地方都市におけるユダヤ人巡礼の民族誌―	赤尾 光春（地域）	[H17.9.30 学術]
イスラエルにおけるアラブ人キリスト教徒のアイデンティティの様態―ガリラヤ地方・メルキト派カトリック信徒の事例研究―	菅瀬 晶子（地域）	[H18.3.24 文学]
トンガ王国の土地制度―グローバル化のなかの伝統―	森本 利恵（地域）	[H18.3.24 文学]
バラライカの鳴り響く空間：1917～48年における社会主義の文化の生成	大家（柚木）かおり（地域）	[H18.3.24 学術]

フィジーにおける植民地主義とインド系移民社会―砂糖キビ栽培地域の村落社会における文化の動態―	村田 晶子（比較）	[H18.9.29 文学]
上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的研究	飯国有佳子（地域）	[H19.3.23 文学]
「護り」の身体技法に関する映像人類学研究―インドネシア・ミナンカバウの事例から―	村尾 静二（比較）	[H19.3.23 文学]
離散と故郷―ヨルダンのパレスチナ系住民にみられる帰属意識とナショナリズム―	錦田 愛子（地域）	[H19.3.23 文学]
「子ども域」の文化人類学的研究―バングラデシュ農村社会の子ども―	南出 和余（比較）	[H19.3.23 文学]
参加型開発を通した女性の自己変容過程に関する人類学的研究―北インド農村社会を事例として―	笹野美佐子（比較）	[H19.9.28 文学]
「場」と「パフォーマンス」に関する人類学的研究―トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として―	栄山 知子（比較）	[H19.9.28 文学]
フェラインの民族誌―ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション―	山田 香織（地域）	[H20.3.19 文学]
水上人と呼ばれる人々―広東珠江デルタの漢族エスニシティとその変容―	長沼さやか（地域）	[H20.3.19 文学]
在米コリアンのサンフランシスコ日本町―マルチカルチャーのエスニックタウン―	小谷 幸子（比較）	[H20.3.19 文学]

論文博士

An Areal―Typological Study of Middle American Indian Languages	八杉 佳穂	[H6.3.30 文学]
農村女性からみたトルコの「近代化」―世俗主義、イスラーム、女性の相互関係	中山 紀子	[H9.3.24 文学]
南タイにおける実践宗教―ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から―	西井 涼子	[H9.3.24 文学]
セネガルの公権力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究	小川 了	[H9.3.24 文学]
メラネシアの政治的リーダーシップと開発―ソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐって―	関根 久雄	[H10.9.30 文学]
南インドの農村におけるカースト内関係としての親族―ユング・ヴェッラーラの事例研究―	杉本 星子	[H10.9.30 文学]
アイヌ民族における神送りの研究―沙流川流域を中心に―	菅野 茂	[H13.3.23 学術]
低湿地立地の遺跡にみる縄文時代本州西部地域の生業活動―縄文時代早期末から中期初頭における若狭湾沿岸と琵琶湖周辺地域の動物考古学的考察―	内山 純蔵	[H14.3.22 文学]
考古学における数量化と数理的手法の研究	及川 昭文	[H14.3.22 学術]
総管信仰―近世江南農村社会と民間宗教―	濱島 敦俊	[H14.9.30 学術]
中国の食事方法―歴史人類学的考察―	西澤 治彦	[H15.3.24 文学]
台湾原住民のイノシシ（Sus scrofa taivanus）狩猟の民族考古学的研究：動物遺存体研究の方法論構築にむけて	野林 厚志	[H15.3.24 学術]
The Transformation and Social Functions of the sNang zhig Family and its Monastery ―An Ethnographic Description of the Bon Tradition in Amdo	才譲 太	[H16.9.30 学術]
利用者の視点にたった博物館の理念と活動様式の研究	布谷 知夫	[H16.9.30 文学]
トビニタイ文化の集団構成と生計戦略―北海道東部における「中世アイヌ社会」成立に至る一階梯―	大西 秀之	[H17.3.24 文学]
アットゥシの歴史に関する基礎的研究―アイヌ伝統文化の再検討の試みとして―	本田 優子	[H17.9.30 文学]
カナダ・イヌイットの食物分配に関する文化人類学的研究―先住民社会の変容と再生産―	岸上 伸啓	[H18.3.24 文学]
タイ中部農村における相互行為の民族誌的研究	高城 玲	[H18.3.24 文学]
東ネパールにおける半飼いの生産活動と放牧地をめぐる社会関係	渡辺 和之	[H18.3.24 文学]
「アイヌ風俗画」の研究―近世北海道におけるアイヌと美術	新明 英仁	[H19.9.28 文学]

「卒業生」からのメッセージ II

鹿児島国際大学　国際文化学部人間文化学科 専任講師　野元 美佐（平成14年3月修了）

総研大文化科学研究科の院生生活を振り返ると、大変優れた研究環境に自分がいたことにため息がでる。様々な地域・専門の研究者が揃い、直接指導を受けることができる。民族学博物館の資料をいつでも見に行くことができる。自分が研究する「カメルーン」の本棚がある図書室がある。国内外から研究者が集う共同研究会やシンポジウムが頻繁に開かれ、希望すれば参加できる。これ以上の知的財産、刺激に満ちた環境が他にあるだろうか。ため息がでるのは、私が在籍中この環境を十分利用したとは言い難いからだ。これから入学する人には、ぜひこの環境を精一杯活用して欲しい。

宝の持ち腐れをした私ではあるが、総研大時代に重要な財産を得たことも事実である。論文執筆の苦しさは、院生仲間と励まし合って乗り越えた。今でも研究者として友人としてつき合いが続く。良き指導者にも多く出会えた。厳しくも暖かい指導を受けたことが、今の自分を支えていると痛感している。



地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する

国立民族学博物館長　松園 万亀雄

文化人類学＝民族学は世界の諸民族の文化や社会を研究する学問です。いまは世界各地で人、モノ、情報が急激な勢いで飛び交い、移動している時代です。かつては当然とされていた社会の秩序がこわされ、混乱と葛藤が世界を覆っています。民族学を研究する者にとっては、挑戦的な課題がつぎつぎに突きつけられているといわねばなりません。それだけに人間と社会についての斬新な着想をつむぎだすための、幅広い視野と豊かな想像力が私たちには求められています。

国立民族学博物館には、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置されています。博士課程後期3年に在籍しようとする学生は、近い将来、大学や研究機関で教育研究にたずさわり、また文化人類学＝民族学の知識を応用して、日本や世界の人々の生活に実践的にかかわる仕事に就くことになります。

国立民族学博物館は優秀な教授陣を擁しており、また文献資料その他の研究環境の面でも我が国随一であると、私は自信をもっていうことができます。入学されるみなさんは在学中に学位論文を書きあげ、一人前の研究者として社会に飛び立ってほしいものです。

国立民族学博物館・東アジア 日本の文化展示場



国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要

国立民族学博物館（民博）は、わが国における文化人類学（民族学）の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。民博は、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究を進め、学術情報を集積する一方、その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することを使命としています。1989年には、総合研究大学院大学の文化科学研究科地域文化学専攻と比較文化学専攻が民博を基盤機関として設置され、民博での博士後期課程の教育が開始されました。

以上のように、国立民族学博物館は「博物館をもつ研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。民博の展示は、常設展示と特別展示とで構成されており、このうち常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示は、特定のテーマに焦点を当て、年に数回、期間を限って開催されています。

民博は、2004年4月より、国立大学と足並みをそろえて、法人組織となりました。法人の正式名称は、「大学共同利用機関法人人間文化研究機構」ですが、民博は、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所とともに、その一員として再出発しました。2006年度から、民博の研究部は、3研究部（民族社会、民族文化、先端人類科学）2センター（研究戦略センター、文化資源研究センター）体制に組織替えがなされました。研究活動の機動性を高めるとともに、その成果をより広くわかりやすく社会に伝えていくための措置です。文化人類学（民族学）を基礎としつつ、機関と分野の別を超えて、人間文化の総合的理解に至ろうとする、民博の新たな活動が始まっているのです。

所蔵民族学資料（平成20年4月1日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	168,978点	映像資料	6,915点	日本語図書	240,092冊
国内資料	88,882点	音響資料	62,453点	外国語図書	365,149冊
計	257,860点	計	69,368点	計	605,241冊
				日本語雑誌	9,693誌
				外国語雑誌	6,545誌
				計	16,238誌

地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み

昭和63年10月　総合研究大学院大学開学【全学】
平成元年 4月　文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）設置、学生受入、授業開始
平成 7年 2月　葉山キャンパス本部共通棟が竣工、この年から入学式を同キャンパスにて総研大全体で挙行【全学】
平成11年 4月　先導科学研究科学生受入（地域文化学・比較文化学両専攻併任教官の一部、先導科学研究科の併任に）【全学】
平成12年10月　「オープンキャンパス」開催（年1回）
平成13年 4月　地域文化学・比較文化学両専攻の同窓生ネットワーク発足
平成17年 4月　関西4大学との学生交流に関する協定を締結、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、大阪大学大学院人間科学研究科、神戸大学大学院総合人間科学研究科（平成19年度より国際文化学研究科および人間発達環境学研究科に改組）、および京都文教大学大学院文化人類学研究科との単位互換授業の開講開始

年度別学位授与者数

	平成	3年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	12年	13年	14年	16年	17年	18年	19年	計
地域文化学専攻	課程博士	0	0	2	2	0	3	4	2	1	1	2	4	2	2	25
	論文博士	0	0	0	0	3	0	2	0	1	1	3	2	0	1	13
比較文化学専攻	課程博士	1	1	1	1	0	4	0	2	2	0	0	0	3	3	18
	論文博士	0	1	0	0	0	0	0	1	1	2	0	2	0	0	7
	計	1	2	3	3	3	7	6	5	5	4	5	8	5	6	63

入学者選抜試験倍率

平成	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年
志願者数	22	17	23	31	23	28	18	19	8	18	15
合格者数	6(1)	7	6	8	8	7	6	7(1)	6(1)	7	4
倍　率	3.7	2.4	3.8	3.9	2.9	4	3	2.7	1.3	2.6	3.8

※（　）は入学辞退者で内数。

合格者出身大学院機関別累計

平成	元年~9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	計
国立	34(7)	4(1)	4	5	5	4	5	3	4(1)	2(1)	2	2	74(10)
公立	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2
私立	14(1)	2	2	(1)	3	1	1	2(1)	2	4	1	2	34(1) (2)
海外	8(1)	0	1	1	0	2(1)	1	1	1	0	3	0	18(1) (1)
合計	56(9)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	6(1)	7(1)	6(1)	7	4	128(12) (3)

※（　）は入学辞退者で内数。（　）内は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身（1名）者は学部卒で資格認定による。

合格者出身大学院地方別累計

平成	元年~9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	計
北海道	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
関東	28(6)	3(1)	4	2(1)	3	3	2	2	1	3	2	0	53(7) (1)
中部	6	2	0	0	0	1	1	1	1(1)	0	0	0	12(1)
近畿	10(2)	1	2	3	4	2	3	2(1)	3	2	2	2	36(2) (1)
中国	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	6
九州	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	2(1)
海外	8(1)	0	1	1	0	2(1)	1	1	1	0	3	0	18(1) (1)
合計	56(9)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	6(1)	7(1)	6(1)	7	4	128(12) (3)

※（　）は入学辞退者で内数。（　）内は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身者（1名）は学部卒で資格認定による。

総合研究大学院大学について

学長あいさつ



総合研究大学院大学長　高畑 尚之

総合研究大学院大学（略して、総研大）は、学術研究の新しい流れに先導的に対応し、創造性豊かな視野の広い研究者を養成することを目的として昭和63年10月に設立されました。翌年の平成元年の4月に第一期生を受入れて以来、平成19年度末までに1995名の入学者を迎え、1200名近い修了生を国内外の大学、研究機関、産業界などに送り出してきました。この間に国立大学は法人化され、日本の高等教育は大きな変革期に入りました。法人化とともに総研大で行った大きな改革は、理系の研究科に従来の博士後期課程の他に5年一貫制博士課程を併設したことです。この併設の趣旨は学生受入れ制度の弾力化にありましたが、教員の大学院教育に対する意識に大きな影響を及ぼし、教育の質の向上にもつながる結果となりました。

元来、総研大は（開学当時は国立）大学共同利用機関が有する優れた研究環境と人材を活用してトップクラスの研究者を養成するという、関係者のかねてからの強い希望を実現した新しい大学院システムです。大学共同利用機関とは、国内外の大学研究者が共同で利用できる大型の研究施設・設備あるいは貴重な学術資料等を保有する我が国独自の方式による研究機関のことです。総研大は、このような機関の設置する18研究所等を基盤とする大学院だけの大学（大学院大学）として、他大学にはない特色があります。もっとも顕著な点は、大学院教育を研究の現場において直接実施していることです。大学共同利用機関では国際性豊かな専門的研究が行われていますが、本学のミッションにはこのような研究現場で育成される高い専門性と国際的通用性が謳ってあります。

専攻が学術的にも地理的にも分散している本学にとって、独自の伝統を醸成して国際的なアイデンティティを確立することは創設以来の課題であります。したがって、これと関係した本学のもうひとつの重要なミッションが、教育の面では各専攻の専門分野を超えた広い視野を持つ人材を養成することであり、研究面では新しい研究分野を分野横断的に開拓することであります。大学本部のある葉山キャンパスでは、このような「分散」の総合化を図る目的でさまざまな教育研究活動を展開してきました。その成果のひとつが、葉山と専攻の連携を基礎に設置した先導科学研究科であります。今後はこのような葉山を介した連携に加え、専攻間の教育研究ネットワークを構築、強化することが望まれます。とりわけ、文理融合的な教育研究プロジェクトの推進は、総研大らしい成果をもたらすものと期待されます。

本年、総研大は創設20周年を迎えています。この20年間、総研大創設の理念は色あせることなく、初代学長の長倉三郎先生から猿田圭治先生、小平桂一先生に引き継がれ、実質化してまいりました。その一方で、大学を取り巻く状況は大きく変化し、国民の大学に対する期待もこれまで以上に高まっています。これには、科学技術に基づく現代文明が大きな転換期にさしかかっているなかで、社会に対する大学の果たすべき役割がますます重要になってきていることもありましょう。こうした時代にあって、総研大はその建学の精神に則り優れた教育研究活動を展開し、それによって社会に貢献できるように努力をする所存です。そのひとつの試みとして、大学の能力を挙げた特色ある教育研究プロジェクトを企画しています。また、本部と専攻のあるそれぞれの地域では積極的な情報発信や交流事業を行い、地域から理解され、愛される大学であるように努力する所存です。関係各位には、総研大の一層の発展のために引き続きご理解とご協力を賜りますように、ここに改めてお願い申し上げる次第です。

総合研究大学院大学の特徴

特色ある博士課程教育
- 5年一貫制博士課程制度と博士後期課程制度の併用
- 基盤機関の研究現場を活用した教育プログラム
- 個の能力に即した教育プログラム
- 社会人学生・留学生受入れプログラム

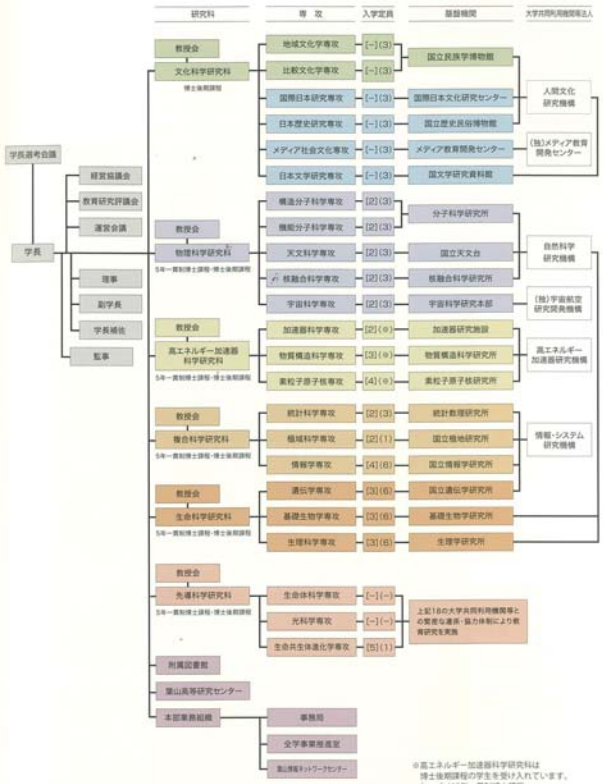
高い専門性の養成
- 各専攻分野の最先端研究者による研究指導
- 多様な専門教育プログラム
- 学位取得プロセス管理プログラム／長倉研究奨励賞
- 基盤機関が有する世界最高水準の資料・施設・設備の活用

広い視野の養成
- 専攻・研究科間の共同教育研究事業
- 総合科目遠隔授業プログラム
- 全学学生セミナー
- 全学学術交流会

国際的通用性の養成
- 最先端研究技術・研究者の交流拠点における教育
- プレゼンテーション能力養成プログラム
- 海外学生派遣事業
- 国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムの活用

分野横断的・先導的学問分野の創出
- 葉山高等研究センターにおけるプロジェクト研究の推進
- 先導科学研究科における総合的な教育研究の実施
- 「科学と社会」プログラムの全学的な展開
- 修了生を中心とした学術交流ネットワーク

平成20年度 教育研究組織



出願資格等

(1) 出願資格

次のいずれかに該当する者とする。

①修士の学位又は専門職学位を有する者及び入学の前月までに取得する見込みがある者

②外国において、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みがある者

③外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みがある者

④我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者

⑤大学を卒業し、大学、研究所等において、入学の前月までに２年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

⑥外国において学校教育における16年の課程を修了した後、又は外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、入学の前月までに２年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

⑦本学において、個別の入学資格審査により、修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、入学の月の１日において24歳に達しているもの

（⑤、⑥又は⑦により出願しようとする者は、事前に本学で実施する「学力の認定」を受ける必要がある）

(2) 選抜方法（文化科学研究科）

選抜は、書類選考、修士論文又はそれに代わるものの審査及び面接により行う。

①書類選考

志望研究内容等、その他研究科が提出を求めた資料について行う。

②修士論文等の審査

修士の学位を有する者及び修士課程在学中の者については修士論文、また学力認定により出願資格が認められた者については刊行された論文又は著作を審査する。

③面接

面接は書類選考・論文審査合格者についてのみ行うものとする。書類選考・論文審査の合否は面接日の約1週間前までに、入学願書に記載された連絡先に文章で個別に連絡する。

（なお、合否通知が面接日の１週間前を過ぎても到着しない場合は、総合研究大学院大学学務課学生厚生係まで問い合わせること。）

面接は、主として修士論文（修士論文のない者は発表した学術論文等又はこれまでに行った研究の要旨）の内容及び志望研究内容について行う。

◎詳細は募集要項を請求のうえ確認してください。

(3) 修了要件

本研究科の専攻に３年以上在学し、所定の単位数以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び試験に合格すること。

ただし、特に優れた研究業績を上げた者については、在学期間を短縮して修了を認めることがある。

募集要項請求先

《募集要項の請求方法》

下記メールアドレスに、以下の必要事項を記入し、送信してください。

(1) 郵便番号 (2) 住所 (3) 氏名 (4) 電話番号

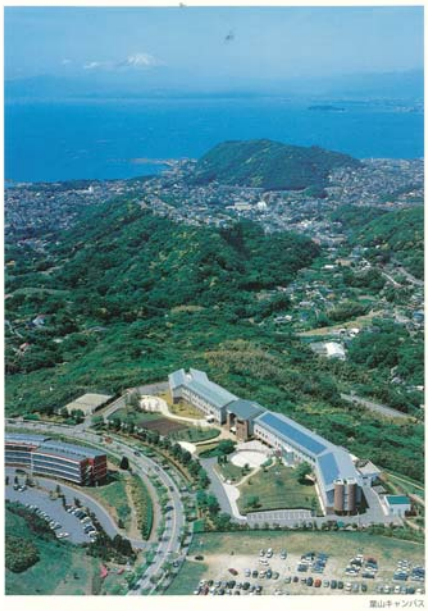
(5) 希望する募集要項→「平成21年度４月入学 文化科学研究科地域文化学専攻・比較文化学専攻（希望する募集要項の種類：1）」と記入してください。

※配布は８月上旬頃から開始します。

メールアドレス：kousei@ml.soken.ac.jp

問合せ先

総合研究大学院大学 学務課 学生厚生係
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
TEL：046-858-1525, 1526



葉山キャンパス

問合せ先

国立民族学博物館 管理部研究協力課研究協力係

〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151（代表）　06-6878-8236（専攻担当）　FAX 06-6878-8479
URL http://www.minpaku.ac.jp/　E-mail souken@idc.minpaku.ac.jp



●北大阪急行・大阪モノレール千里中央駅から阪急バスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から阪急バスで「自然文化園・日本庭園中央」下車、徒歩約5分
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口」で下車、自然文化園（入園料250円）を通って徒歩約15分
●タクシーは万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れることができます。下車、徒歩約5分

総合研究大学院大学 事務局

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電話 046-858-1500（代表）　FAX 046-858-1542
URL http://www.soken.ac.jp/





携帯サイト
URL http://daigakujc.jp/sokendai/



総合研究大学院大学
文化科学研究科

地域文化学専攻
比較文化学専攻 概要'09

The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies

Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies
Summary

大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立民族学博物館











目次

文化科学研究科について 1

専攻の概要
- 地域文化学専攻 2
- 比較文化学専攻 3
- 地域文化学専攻授業概要 4
- 比較文化学専攻授業概要 6
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員 8
- 担当教員の専門分野 8
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法 9
- フィールドからみる世界～学生の研究フィールド・マップ～ 10
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生 10
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位 12
- 学位論文リスト 12
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する 14
- 国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要 15
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み 16
- 年度別学位記授与者数 16
- 入学者選抜試験倍率 16
- 合格者出身大学院機関別累計 16
- 合格者出身大学院地方別累計 16
- 修了生等の就職先 16

総合研究大学院大学について
- 学長あいさつ 17
- 総合研究大学院大学の特徴 18
- 大学の教育研究組織 19
- 出願資格等 20
- 募集要項請求先 21

問合せ先

文化科学研究科について



研究科長　大髙 洋司

総合研究大学院大学，略して「総研大」は，学部をもたず大学院だけから成る国立大学として，昭和63年（1988）10月１日に開学しました。現在，全部で６つの研究科から構成されていますが，他の研究科が全て理系であるのに対して，文化科学研究科は唯一の文系研究科です。

研究科の成り立ちは，まず平成元年（1989）４月に，大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻が設置されました。その後，平成４年（1992）４月に，国際日本文化研究センターを基盤とする国際日本研究専攻，平成11年（1999）４月に，国立歴史民俗博物館を基盤とする日本歴史研究専攻，平成13年（2001）４月にメディア教育開発センター（21年４月より放送大学に業務移管）を基盤とするメディア社会文化専攻，平成15年（2003）４月に，国文学研究資料館を基盤とする日本文学研究専攻が順次増設され，６専攻となりました。平成16年（2004）４月からは，大学共同利用機関法人人間文化研究機構が設立され，４つの研究機関（国立民族学博物館，国際日本文化研究センター，国立歴史民俗博物館，国文学研究資料館）と独立行政法人メディア教育開発センター（上記参照）をあわせた５つの研究機関を基盤として，国立大学法人総合研究大学院大学文化科学研究科として現在に至っています。なお，総研大の他の研究科は，博士課程前期（修士）の学生を受け入れる５年一貫制を採用していますが，文化科学研究科は，博士課程後期（博士）のみから成っていることを申し添えます。

次に，各専攻の概要をご紹介します。

・地域文化学専攻は，アジア・アフリカ・ヨーロッパ・アメリカ・オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とし，それぞれの文化の特性や歴史性を考慮しながら，民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としています。現地調査と，これに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度な研究者の養成を行っています。

・比較文化学専攻は，民族社会・民族技術・民族宗教・民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して，その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としています。従来の文化人類学的方法論に加えて，情報科学や文化資源研究，隣接諸科学の成果を導入して，新しい研究方法の開発を積極的に進めながら，高度な研究者の養成を行っています。

・国際日本研究専攻は，人文科学・社会科学・自然科学にわたる総合的な日本研究を進めるために，「教育・研究指導分野」として，全教員の指導による単一の「国際日本研究」を設けている点に特色があります。また，国際的な立場から「日本研究」の理論的・方法論的な指導を行う共通必修科目を設けています。これらの推進により，創造的で高度な専門的視野、学際性、総合性を備えた研究者を育成します。

・日本歴史研究専攻は，日本の歴史と文化について，資料に基づいた高度な総合的能力をもつ研究者，また広い視野と国際的な感覚をもち，社会に貢献できる人材の育成を目指しています。基盤機関である国立歴史民俗博物館の豊富な収蔵資料と資料情報を活用し，自然科学的な分析を行うために整備された高度な研究設備を利用しながら，歴史学・考古学・民俗学・自然科学を含めた関連諸学の専門研究者から，多様な視点の，実地調査を含む学際的な研究指導を受けることができます。

・メディア社会文化専攻は，高度情報通信社会において，メディアと通信技術と，社会・文化・人間とが，相互にどのように作用し合うかを，学際的・総合的に解明する研究と教育を行っています。メディアと人間の間のインタラクションを，関連諸科学の成果と方法を統合し，先端的なメディア技術を駆使しながら解明して，総合的メディア研究の新たな分野を生み出す，創造的研究者を養成します。

・日本文学研究専攻は，基盤機関である国文学研究資料館が集積した膨大な原典資料を活用しながら，専門的な調査・分析を進める能力と共に，一方でそうした専門性を相対化する広い視野と国際感覚を併せ持った，先進的な日本文学研究者の育成を目指しています。複数指導体制によって，日本文学ばかりでなく，文学情報・記録情報・書物交流など，関連分野の専門研究者から，多様な指導を受けることができます。

以上の６専攻（民博から２専攻）は，それぞれが日本を代表する研究機関を基盤として，すでに多くの学位取得者，専門研究者を輩出し，またそのための努力を重ねていますが，同時に，文化科学研究科全体として，学生の専門研究を支援し，また専攻同士の横断連携を推進する事業を推進しております。

地域文化学専攻

専攻長　池谷 和信



アジア，アフリカ，ヨーロッパ，アメリカ及びオセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら，民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的とする。本専攻においては，現地調査およびこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する，高度な専門性を持った研究者の養成を行う。

教育研究指導分野の概要

分　野	概　要
アジア地域文化Ⅰ	東アジア，中央アジア，北アジア地域に居住する諸民族の政治，経済，法，社会などの諸制度や技術，宗教，言語，芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アジア地域文化Ⅱ	東南アジア，南アジア，西アジア地域に居住する諸民族の政治，経済，法，社会などの諸制度や技術，宗教，言語，芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する諸民族の政治，経済，法，社会などの諸制度や技術，宗教，言語，芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する諸民族の政治，経済，法，社会などの諸制度や技術，宗教，言語，芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する諸民族の政治，経済，法，社会などの諸制度や技術，宗教，言語，芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する諸民族の政治，経済，法，社会などの諸制度や技術，宗教，言語，芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
基礎科目	地域文化学に関する基礎演習および博士論文作成のための演習
共通科目	地域文化学に関する基礎的な講義
総合教育科目	全学共通。各研究科，専攻を超えて実施する学生セミナーや総研大レクチャー（集中講義）など

比較文化学専攻

専攻長　近藤 雅樹



本専攻では、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術という５つの研究分野に加え、新たに文化資源研究と名付けた分野を開設した。諸民族文化の比較研究により、各々に通底する普遍的な法則の発見と理論的解明を目指す。従来の文化人類学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入し、新しい研究方法の開発を積極的にすすめて高度な専門性を持った研究者を養成する。

教育研究指導分野の概要

分　野	概　要
比較社会研究	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治、法、経済等に関する通文化的・理論的研究
比較宗教研究	諸民族の呪術、祭祀、神話、宇宙観、宗教等に関する通文化的・理論的研究
比較技術研究	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究
比較言語研究	諸民族の言語、文字、コミュニケーション、言語政策等に関する通文化的・理論的研究
比較芸術研究	諸民族の音楽、芸能、文芸、工芸、造形等に関する通文化的・理論的研究
文化資源研究	博物館人類学、博物館情報学、保存科学、および文化資源に関する理論的・実践的研究
基礎科目	比較文化学に関する基礎演習および博士論文作成のための演習
共通科目	比較文化学に関する基礎的な講義
総合教育科目	全学共通。各研究科、専攻を超えて実施する学生セミナーや総研大レクチャー（集中講義）など

地域文化学専攻授業概要（平成21年度）

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
アジア地域文化Ⅰ	東アジア文化研究	台湾原住民族の文化と歴史	准教授　野林　厚志
	東アジア文化研究特論Ⅰ	中国における文化変容と社会	准教授　横山　廣子
	東アジア文化研究特論Ⅱ	東アジアにおける都市空間	
	東アジア文化研究演習Ⅰ	中国南部諸民族の歴史民族学的研究に関する講述	教　授　塚田　誠之
	東アジア文化研究演習Ⅱ	朝鮮半島を中心とした東アジアにおける社会と文化	教　授　朝倉　敏夫
	北・中央アジア文化研究	モンゴル遊牧社会論	教　授　小長谷有紀
	北・中央アジア文化研究特論	北アジア狩猟採集文化研究	教　授　佐々木史郎
	北・中央アジア文化研究演習Ⅰ	社会主義的近代化の比較研究	
	北・中央アジア文化研究演習Ⅱ	北・中央アジアの旧社会主義諸国におけるポスト社会主義の比較	
アジア地域文化Ⅱ	東南アジア文化研究	東南アジアの住文化研究	准教授　佐藤　浩司
	東南アジア文化研究特論	東南アジアにおける都市空間	
	東南アジア文化研究演習Ⅰ	東南アジア諸社会の文化とその変容	教　授　田村　克己
	東南アジア文化研究演習Ⅱ	東南アジアの旧社会主義諸国におけるポスト社会主義の比較	
	南アジア文化研究	インドのナショナリズムと宗教	准教授　三尾　稔
	南アジア文化研究特論	ネパールの民族運動と現代政治	准教授　南　真木人
	南アジア文化研究演習Ⅰ	インドの都市の社会と文化	
	南アジア文化研究演習Ⅱ	インドにおける生活宗教の実践の多様性	
	西アジア文化研究	中東イスラム社会における民衆文化	教　授　西尾　哲夫
	西アジア文化研究特論	アラビアンナイトと中東世界の女性観	
	西アジア文化研究演習Ⅰ	現代中東における部族と国家	
	西アジア文化研究演習Ⅱ	現代イスラム世界における聖者信仰	
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ文化研究	東欧の政治文化と宗教	准教授　新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究特論	南ヨーロッパのジェンダー・セクシュアリティ	准教授　宇田川妙子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	商品化	教　授　森　明子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ	空間と場所の人類学	
アフリカ地域文化	アフリカ文化研究	民族文化と経済倫理	准教授　三島　禎子
	アフリカ文化研究特論	アフリカ史研究の諸課題	
	アフリカ文化研究演習Ⅰ	アフリカ地域の生態人類学	教　授　池谷　和信
	アフリカ文化研究演習Ⅱ	排除と包摂の社会科学	教　授　竹沢尚一郎
アメリカ地域文化	アメリカ文化研究	中米文化研究	教　授　八杉　佳穂
	アメリカ文化研究特論	南アメリカのエスノヒストリー	准教授　齋藤　晃
	アメリカ文化研究演習Ⅰ	地域発展の民族誌	准教授　鈴木　紀
	アメリカ文化研究演習Ⅱ	ラテンアメリカにおける史料調査	
オセアニア地域文化	オセアニア文化研究	災害と文化の人類学	准教授　林　勲男
	オセアニア文化研究特論	オセアニアにおける土器文化の諸相	教　授　印東　道子
	オセアニア文化研究演習Ⅰ	アボリジナル史の人類学的構築	教　授　松山　利夫
	オセアニア文化研究演習Ⅱ	土地権法と先住民権原法 ―その人類学的解釈―	

比較文化学専攻授業概要（平成21年度）

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
比較社会研究	比較社会研究Ⅰ	コミュニティの人類学	准教授　平井京之介
	比較社会研究Ⅱ	中国の社会人類学 ―欧米・日本・中国のパースペクティブ	准教授　韓　敏
	比較社会研究特論Ⅰ	NPOのガバナンス問題：文化・法とダイナミクス	教　授　出口　正之
	比較社会研究特論Ⅱ	社会・文化に関する人類学的アプローチ	
	比較社会研究演習Ⅰ	宗教とナショナリズム	教　授　杉本　良男
	比較社会研究演習Ⅱ	文化人類学の研究動向と研究課題	教　授　岸上　伸啓
	比較社会研究演習Ⅲ	民族社会に関する研究方法	
比較宗教研究	比較宗教研究	呪術と科学の文化人類学	准教授　白川　千尋
	比較宗教研究特論	日本宗教と日系宗教の研究	教　授　中牧　弘允
	比較宗教研究演習Ⅰ	アメリカ合衆国におけるリフォーム運動とライフスタイル	教　授　鈴木　七美
	比較宗教研究演習Ⅱ	太平洋島嶼部の呪術と宗教	
比較技術研究	比較技術研究Ⅰ	近現代における生産技術に対する意識変化	
	比較技術研究Ⅱ	インカ帝国研究の動向	教　授　関　雄二
	比較技術研究特論	コレクションと検索システムを活用した民族技術の比較研究	教　授　近藤　雅樹
	比較技術研究演習Ⅰ	アジアと太平洋地域における民族植物学と技術	准教授　Matthews, Peter J.
	比較技術研究演習Ⅱ	手織機の型式と機織り技術	教　授　吉本　忍
比較言語研究	比較言語研究	フィールド言語学の基礎	准教授　菊澤　律子
	比較言語研究特論	言語類型論	教　授　長野　泰彦
	比較言語研究演習Ⅰ	少数言語のとらえ方	教　授　庄司　博史
	比較言語研究演習Ⅱ	チベット・ビルマ歴史言語学	教　授　長野　泰彦
比較芸術研究	比較芸術研究Ⅰ	伝統芸能の映像記録	准教授　福岡　正太
	比較芸術研究Ⅱ	日常的・実践的な身体技法としての芸能伝承論	准教授　笹原　亮二
	比較芸術研究特論	日本の民俗芸能の歴史的展開と多様性	
	比較芸術研究演習Ⅰ	北米・ハワイのアジア系音楽	教　授　寺田　吉孝
	比較芸術研究演習Ⅱ	アイヌの工芸	教　授　佐々木利和
文化資源研究	文化資源研究	博物館における資料管理	教　授　園田　直子
	文化資源研究特論	絵画における技法、素材の比較研究	
	文化資源研究演習Ⅰ	文化資源の情報モデル論、情報処理論、アーカイブズ論、知的財産権の議論、メディア・リテラシー論、などの講述と議論	教　授　久保　正敏
	文化資源研究演習Ⅱ	博物館情報学	准教授　山本　泰則
	博物館研究	博物館の歴史と政治性	准教授　川口　幸也
	博物館研究特論	博物館人類学	教　授　吉田　憲司
	博物館研究演習Ⅰ	文化人類学・民族学博物館における展示と活用	教　授　小林　繁樹
	博物館研究演習Ⅱ	博物館の多様性と可能性	

分　野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
基礎科目	地域文化学基礎演習Ⅰ	地域文化研究に関する基礎演習	教　授　塚田　誠之
	地域文化学基礎演習Ⅱ	地域文化研究に関する基礎演習	准教授　鈴木　紀
	地域文化学演習Ⅰ	博士論文作成のための演習	准教授　佐藤　浩司
	地域文化学演習Ⅱ	博士論文作成のための演習	教　授　佐々木史郎
共通科目	地域文化学特論Ⅰ	開発研究と民族誌	准教授　鈴木　紀
	地域文化学特論Ⅱ	「国際移民」研究の現在	准教授　南　真木人

※年度によって開講科目が異なる。

地域文化学専攻の人材養成目的

文化人類学・民族学の分野を中心とする諸科学に関して高度な専門知識をもち、世界の諸地域における多様な文化について、現地調査等を通じて優れた研究をおこなう研究者および高度な専門性をもって国際的見地から社会に貢献しうる人材の育成を目的とする。

地域文化学専攻の教育方針

地域文化学専攻を置く国立民族学博物館は、世界の諸地域における多様な文化に関して図書資料や標本資料、映像音響資料等のさまざまな情報を集積している研究施設であり、国内外の多くの研究者の参画によって運営される大学共同利用機関である。こうした利点を活かして、質の高い研究に支えられた教育をおこなう。
また、長期の現地調査や国際会議での成果公開や、組織的研究の運営等の研究活動に必要な能力開発をめざす。
研究指導は指導教員を中心としつつ、学生ごとにその研究テーマに応じたアドバイザリーグループを構成して、専攻に属する教員全体で指導する体制をとる。

地域文化学専攻の求める学生像

世界の多様な地域社会や地域文化について広い関心をもち、とりわけ文化人類学・民族学の基礎研究に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。





分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
基礎科目	比較文化学基礎演習Ⅰ	比較文化研究に関する基礎演習	准教授　韓　敏
	比較文化学基礎演習Ⅱ	比較文化研究に関する基礎演習	教　授　杉本 良男
	比較文化学演習Ⅰ	博士論文作成のための演習	准教授　菊澤 律子
	比較文化学演習Ⅱ	博士論文作成のための演習	教　授　佐々木利和
共通科目	比較文化学特論Ⅰ	社会・文化に関する人類学的アプローチ	教　授　岸上 伸啓
	比較文化学特論Ⅱ	織機と織物	教　授　吉本 忍

※年度によって開講科目が異なる。

比較文化学専攻の人材養成目的

文化と社会の諸問題や文化の表象等に関して、現地調査と比較研究にもとづく幅広い専門知識をもつ研究者であり、なおかつ、その高度な専門性をもって社会的な実践をおこないうる人材の育成を目標とする。

比較文化学専攻の教育方針

比較文化学専攻を置く国立民族学博物館は、国内外の大学や博物館等の諸研究機関とともに大規模な調査研究を推進するために設立された大学共同利用機関である。その一方で、展示や講演会、一般社会人を対象としたゼミナール等の活動を通じて広く社会と連携している「開かれた博物館」としての機能も有している。

世界各地の諸民族に関する生活のさまざまな場面で必要とされる標本資料の他にも映像音響記録資料・文献図書資料等を膨大に蓄積している利点を活かし、理論と実践とに結びついた研究に支えられた教育をおこなって、学術論文や学会発表はもとより、研究成果の社会還元に不可欠な情報発信能力を練磨する。

学生個々の研究テーマに応じたアドバイザリーグループを構成し、切磋琢磨する環境の中で、指導教員を中心に、専攻に所属する教員全体が指導にあたっている。

比較文化学専攻の求める学生像

人間の社会や文化について広い関心を抱き、とりわけ学問的な理論化やその社会的な応用に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。





地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員

現員（平成21年4月1日現在）

区分	教授	准教授	計	備考
地域文化学専攻	13	11	24	基盤機関の長（民博館長）を含む
比較文化学専攻	16	9	25	
計	29	20	49	

担当教員の専門分野（五十音順）

地域文化学専攻

朝倉 敏夫（韓国社会研究）
池谷 和信（環境人類学・南部アフリカ研究）
印東 道子（オセアニア考古学）
宇田川 妙子（南ヨーロッパ研究・性研究）
小長谷 有紀（牧畜文化論・モンゴル研究）
齋藤 晃（ラテンアメリカ歴史人類学）
佐々木 史郎（文化人類学・北アジア研究）
佐藤 浩司（民族建築学）
新免 光比呂（宗教学・東欧研究）
鈴木 紀（開発人類学・ラテンアメリカ文化論）
須藤 健一（社会人類学）
竹沢 尚一郎（宗教人類学・西アフリカ研究）
田村 克己（東南アジア文化人類学）
塚田 誠之（歴史民族学・中国研究）
西尾 哲夫（認識言語学・アラブ研究）
野林 厚志（民族考古学・台湾研究）
林 勲男（社会人類学・オセアニア研究）
松山 利夫（オーストラリア先住民研究）
三尾 稔（文化人類学・南アジア研究）
三島 禎子（文化人類学・西アフリカ研究）
南 真木人（生態人類学・南アジア研究）
森 明子（中部ヨーロッパ文化人類学）
八杉 佳穂（言語人類学・中米文化史）
横山 廣子（文化人類学・中国社会研究）

比較文化学専攻

川口 幸也（アフリカ同時代美術・展示表象論）
韓 敏（社会人類学・中国研究）
菊澤 律子（言語学・オーストロネシア諸語）
岸上 伸啓（文化人類学・北方文化研究）
久保 正敏（民族情報学・メディア文化論・コンピュータ民族学・オーストラリア研究）
小林 繁樹（文化人類学・博物館学）
近藤 雅樹（民俗学・民具研究）
佐々木 利和（アイヌ民族史、日本近世史）
笹原 亮二（民俗学・民俗芸能研究）
庄司 博史（言語学・言語政策論）
白川 千尋（文化人類学・開発人類学）
杉本 良男（社会人類学・南アジア研究）
鈴木 七美（文化人類学・医療文化、ライフデザイン研究・欧米医療社会史研究）
關 雄二（アンデス考古学・ラテンアメリカ研究）
園田 直子（保存科学）
出口 正之（NPO・メセナ・フィランソロピー）
寺田 吉孝（民族音楽学・インド研究）
長野 泰彦（言語学・チベットビルマ語研究）
中牧 弘允（宗教人類学・経営人類学）
平井 京之介（経済人類学・東南アジア研究）
福岡 正太（民族音楽学・東南アジア研究）
Matthews, Peter J.（先史学・民族植物学）
山本 泰則（博物館情報学）
吉田 憲司（博物館人類学・アフリカ研究）
吉本 忍（民族工芸論・民族技術論）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法

教員が地域文化学・比較文化学両専攻に分かれて教育研究の指導にあたっています。

教育研究の方法は、個別の教員による授業や研究指導と、複数の教員の指導のもとに行われる共通のゼミナールからなっています。

共通のゼミナールには、１年生を対象とする「基礎演習Ⅰ」および「基礎演習Ⅱ」（通称「１年生ゼミナール」）と、博士論文作成の指導を内容とする「演習Ⅰ」および「演習Ⅱ」（通称「論文ゼミナール」）があります。「１年生ゼミナール」は学生がそれぞれの研究計画を発表する「研究計画シリーズ」、各教員が交代で専門分野の講義をおこない、それに基づいて議論を進める「テーマ・シリーズ」、１年の教育研究課程を受けた学生があらためて研究計画を発表する「リサーチプロポーザル・シリーズ」からなっています。

平成13年度からは、文化人類学・民族学の視点や方法論を批判的に摂取することを目的として、共通科目が開講されています。

学生はおおむね１年次において現地調査（フィールドワーク）の準備をおこない、２年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミナール」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

両専攻の教育研究の目的

① 独創的な文化人類学・民族学の研究
② 長期のフィールドワークで得られた資料にもとづく学位論文の作成
③ 広い視野をもった、専門的教養を養う



国立民族学博物館・全景



地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。又専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）
比較文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）

学位論文リスト

課程博士

数字的手法を用いた文化分析の方法について	小島 三弘（比較）	[H4.3.31 学術]
シドニーにおける都市アボリジニの研究 伝統と民族の創出	鈴木 清史（比較）	[H6.3.24 文学]
オルドス・モンゴル族の社会構造―ヤスの機能とその歴史的変容―	楊 海英（地域）	[H6.9.20 文学]
ペルーにおける山の神信仰の現在性―アンデスの宗教的世界のダイナミズム―	細谷 広美（地域）	[H7.3.23 文学]
ビルマにおけるウェイザー信仰の研究	土佐 桂子（比較）	[H7.3.23 文学]
韓国社会の動態と「両班化」―忠清北道阿原郡における門中と儀式儀礼の検討を通して	岡田 浩樹（地域）	[H8.3.21 文学]
中国抗嘉湖地方における養蚕伝承の研究	曹 建南（地域）	[H8.3.21 文学]
歌に表象される村落意識―奄美における「シマの歌」の研究―	中原ゆかり（比較）	[H8.3.21 文学]
四合院家屋の文化人類学的研究―人間と自然との相互作用の視点から	杉山 京子（地域）	[H10.3.24 文学]
モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究―アルタイ・ハイラハ叙事詩を事例として―	藤井 麻湖（地域）	[H10.3.24 文学]
カストム・メレシン ―ヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および民間医療観の現代的位相	白川 千尋（地域）	[H10.3.24 文学]
韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究	李 善愛（比較）	[H10.3.24 文学]
東南中国の漢族社会組織とその変容―閩南農村社会における宗族の研究	潘 宏立（比較）	[H10.3.24 文学]
芸の伝承―ジャワ島・チレボンの仮面舞踊を中心に	福岡まどか（比較）	[H10.3.24 文学]
Overt First and Second Person ― Designating Terms in Japanese Discourse ―A Pragmatic Perspective―	Riikka Lansisalmi（比較）	[H10.3.24 文学]
「二重の窮乏」下の平等理念―現代世界とキリバス南部環礁の社会生活―	風間 計博（地域）	[H10.9.30 文学]
建築と文化・社会との相互作用―中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象として―	葉原 伸治（地域）	[H10.9.30 学術]
カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容―宗教共同体と開発の視点から―	子島 進（地域）	[H11.3.24 文学]
地域主義運動における言語と知識人―エストニア南部ヴォル地方の事例から―	寒水 明子（地域）	[H11.3.24 学術]
英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究―文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相―	塩路 有子（比較）	[H12.9.29 文学]
北タイ・アカの家屋に関する研究―家屋の形式とその変化への視点から―	清水 郁郎（地域）	[H13.3.23 文学]
韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化―忠清南道公州市を中心として活動する葉草商人を例に―	林 史樹（地域）	[H13.3.23 文学]
現代インドネシアにおけるジャワ大衆演劇クトプラの研究	青木 武信（比較）	[H13.3.23 文学]
南ラオス村落社会における政治過程の研究―シダの村における「連帯」と闘争―	中田 友子（地域）	[H14.3.22 文学]
20世紀前半のボリビアにおける先住民教育と植民地主義	吉江 貴文（地域）	[H14.3.22 文学]
カメルーンにおける「痕売の民」バミレケの都市人類学的研究	野元 美佐（比較）	[H14.3.22 文学]
タイ武医療の構築とタイ・マッサージ―社会的文脈による権威的知識の多様性―	飯田 淳子（地域）	[H15.3.24 文学]
インドネシア・スンダの食文化―言語人類学的観点から―	阿良田麻里子（地域）	[H17.3.24 文学]
韓国の仮面劇「固城五広大」の伝承と演劇者―解放後の韓国社会における民俗芸能の変遷から―	高 正子（地域）	[H17.3.24 文学]
帰還と離散のはざまで―ウクライナ―地方都市におけるユダヤ人巡礼の民族誌―	赤尾 光春（地域）	[H17.9.30 学術]
イスラエルにおけるアラブ人キリスト教徒のアイデンティティの様態―ガリラヤ地方・メルキト派カトリック信徒の事例研究―	菅瀬 晶子（地域）	[H18.3.24 文学]
トンガ王国の土地制度―グローバル化のなかの伝統―	森本 利恵（地域）	[H18.3.24 文学]
バラライカの鳴り響く空間：1917～48年における社会主義の文化の生成	大家（柚木）かおり（地域）	[H18.3.24 学術]
フィジーにおける植民地主義とインド系移民社会―砂糖キビ栽培地域の村落社会における文化の動態―	村田 晶子（比較）	[H18.9.29 文学]
上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的研究	飯國有佳子（地域）	[H19.3.23 文学]
「護り」の身体技法に関する映像人類学研究―インドネシア・ミナンカバウの事例から―	村尾 静二（比較）	[H19.3.23 文学]
離散と故郷―ヨルダンのパレスチナ系住民にみられる帰属意識とナショナリズム―	錦田 愛子（地域）	[H19.3.23 文学]
「子ども域」の文化人類学的研究―バングラデシュ農村社会の子ども―	南出 和余（比較）	[H19.3.23 文学]
参加型開発を通した女性の自己変容過程に関する人類学的研究―北インド農村社会を事例として―	菅野美佐子（比較）	[H19.9.28 文学]
「場」と「パフォーマンス」に関する人類学的研究―トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として―	米山 知子（比較）	[H19.9.28 文学]
フェラインの民族誌―ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション―	山田 香織（地域）	[H20.3.19 文学]
水上人と呼ばれる人々―広東珠江デルタの漢族エスニシティとその変容―	長沼さやか（地域）	[H20.3.19 文学]
在米コリアンのサンフランシスコ日本町―マルチカルチャーのエスニックタウン―	小谷 幸子（比較）	[H20.3.19 文学]
インド農村社会における不妊経験の人類学的研究	松尾 瑞穂（比較）	[H20.9.30 文学]
韓国における老人の食―老人福祉施設を中心に―	守屋亜紀子（地域）	[H21.3.24 文学]

論文博士

An Areal―Typological Study of Middle American Indian Languages	八杉 佳穂	[H6.3.30 文学]
農村女性からみたトルコの「近代化」―世俗主義、イスラーム、女性の相互関係	中山 紀子	[H9.3.24 文学]
南タイにおける実践宗教―ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から―	西井 凉子	[H9.3.24 文学]
セネガルの公権力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究	小川 了	[H9.3.24 文学]
メラネシアの政治的リーダーシップと開発―ソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐって―	関根 久雄	[H10.9.30 文学]
南インドの農村におけるカースト内関係としての親族―コング・ヴェッラーラの事例研究―	杉本 星子	[H10.9.30 文学]
アイヌ民族における神送りの研究―沙流川流域を中心に―	萱野 茂	[H13.3.23 学術]
低湿地立地の遺跡にみる縄文時代本州西部地域の生業活動―縄文時代早期末から中期初頭における若狭湾沿岸と琵琶湖周辺地域の動物考古学的考察―	内山 純蔵	[H14.3.22 文学]
考古学における数量化と数理的手法の研究	及川 昭文	[H14.3.22 学術]
総管信仰―近世江南農村社会と民間宗教―	濱島 敦俊	[H14.9.30 学術]
中国の食事方法―歴史人類学的考察―	西澤 治彦	[H15.3.24 文学]
台湾原住民のイノシシ（Sus scrofa taivanus）狩猟の民族考古学的研究：動物遺存体研究の方法論構築にむけて	野林 厚志	[H15.3.24 学術]
The Transformation and Social Functions of the sNang zhig Family and its Monastery ―An Ethnographic Description of the Bon Tradition in Amdo	才譲 太	[H16.9.30 学術]
利用者の視点にたった博物館の理念と活動様式の研究	布谷 知夫	[H16.9.30 文学]
トビニタイ文化の集団構成と生計戦略―北海道東部における「中世アイヌ社会」成立に至る一階梯―	大西 秀之	[H17.3.24 文学]
アットゥシの歴史に関する基礎的研究―アイヌ伝統文化の再検討の試みとして―	本田 優子	[H17.9.30 文学]
カナダ・イヌイットの食物分配に関する文化人類学的研究―先住民社会の変容と再生産―	岸上 伸啓	[H18.3.24 文学]
タイ中部農村における相互行為の民族誌的研究	高城 玲	[H18.3.24 文学]
東ネパールにおける羊飼いの生産活動と放牧地をめぐる社会関係	渡辺 和之	[H18.3.24 文学]
「アイヌ風俗画」の研究―近世北海道におけるアイヌと美術	新明 英仁	[H19.9.28 文学]

卒業生の声

東北学院大学文学部歴史学科 講師
加藤 幸治（平成18年度入学）

ぜいたくな大学院である。約25万点をこえる標本資料にアクセスできる。国内外の60万冊の図書資料は使い放題。高水準なシンポジウムや講演会に参加できる。世界中の研究者と出会う機会がある。教員数は学生よりも多い。学生が利用できる資源には、まったく事欠かない。

ゼミでは、指導教員だけでなく、コメントをいただきたい先生や、関連する分野の先生に出席をお願いし、指導をいただく。自分の望むアドバイザリー・グループを、自ら編成するのである。より完ったアドバイスがほしい場合は、業務の合間をぬってアポをとり、思いの丈をぶつけてみる。ここに通う学生は、どれだけ教員にかまってもらえる努力をするかが重要である。

思い返してみれば、総研大の学生生活は、ただ論文を書きすすめるだけのものではなかった。先生方や様々な研究者のみならず、みんぱくの多くの職員とも関わりあいながら、研究者として必要なあらゆる作法を身につける場でもあった。"陸の孤島"での厳しくも刺激的なキャンパスライフは、ひとつのフィールドワークでもあった。

日本学術振興会 特別研究員PD（京都大学地域研究統合情報センター）
南出 和余（平成13年度入学・平成19年3月修了）

博士論文では、バングラデシュ農村社会を事例に、子どもの生活世界と社会化の過程に注目し、おとなが「子ども」に許す猶予領域と、そのなかでの子どもの主体的行為が交差する領域を「子ども域」という新たな概念で示した。現在私は論文執筆と同時に、調査研究の手法として映像を用いている。総研大在学中に大森康宏教授が担当する映像セミナーに参加したのがきっかけで、映像制作を行うようになった。今では、映像を自らの研究に用いるだけでなく、大学教育の一環として教えている。総研大に来ていなければ、映像に取り組むことはなかっただろう。

このように、総研大では、自分が計画していた研究だけでなく、多くの機会と研究者、そして仲間に出会い、新たな可能性を開くことができる。世界各地のさまざまな研究や人類学の最先端に日常的に触れ得る環境が、何より総研大のメリットである。これから入学される方には、ぜひこれを最大限に活かし、研究者としてのスタートを築いてもらいたい。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する



国立民族学博物館長 **須藤 健一**

国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館を備えた世界で唯一の文化人類学・民族学の研究センターです。60名の研究者たちは、「知の先べ・知の奥へ。」をスローガンに世界各地で、グローバリゼーションの動きを受容し、あるいはそれに抗いながら独自の社会と固有の文化を維持ないし創造している人びとの営みを研究しています。一方で、世界の諸民族の生活や考えをより深く理解するために民族資料や映像音響資料などの収集につとめ、「もの」をとおして文化を表現する展示活動も行っています。

文化人類学・民族学は、現地の人びとと生活をともにしながら日常生活から地球規模の影響をも視野に入れて人間の社会と文化を現場で研究する学問です。異文化に生きる人びとを理解するためには幅広い視野、柔軟な思考と豊かな想像力が求められます。そして、収集したデータを独創的な着想から分析して論理的に記述する手法が大事です。

みんぱくには、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置され、文化人類学をはじめ言語学、宗教学、生態学、先史学、民族音楽学そして博物館学などを研究する優秀な教授陣がいます。そのうえ、民族標本、文献図書や映像音響などの豊富な資料を所蔵しており、研究環境の点ではわが国随一の大学院であるといえます。

私たちは、皆さんが人類学の研究課題を追求し、博士論文を書きあげて一人前の研究者として社会に飛び立つことを支援するのを楽しみにしています。

国立民族学博物館・アフリカ展示



国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要

国立民族学博物館（民博）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。民博は、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究を進め、学術情報を集積する一方、その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することを使命としています。1989年には、総合研究大学院大学の文化科学研究科地域文化学専攻と比較文化学専攻が民博を基盤機関として設置され、民博での博士後期課程の教育が開始されました。

以上のように、国立民族学博物館は「博物館をもつ研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。民博の展示は、常設展示と特別展示とで構成されており、このうち常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示は、特定のテーマに焦点を当て、年に数回、期間を限って開催されています。

民博は、2004年４月より、国立大学と足並みをそろえて、法人組織となりました。法人の正式名称は、「大学共同利用機関法人人間文化研究機構」ですが、民博は、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所とともに、その一員として再出発しました。また民博の研究部は、３研究部（民族社会、民族文化、先端人類科学）２センター（研究戦略センター、文化資源研究センター）体制に組織替えがなされました。研究活動の機動性を高めるとともに、その成果をより広くわかりやすく社会に伝えていくための措置です。文化人類学（民族学）を基礎としつつ、機関と分野の別を超えて、人間文化の総合的理解に至ろうとする、民博の新たな活動が始まっているのです。

所蔵民族学資料（平成21年4月1日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	172,668点	映像資料	7,698点	日本語図書	243,722冊
国内資料	101,826点	音響資料	62,453点	外国語図書	369,640冊
計	274,494点	計	70,151点	計	613,362冊
				日本語雑誌	9,682種
				外国語雑誌	6,594種
				計	16,276種

地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み

昭和63年10月　総合研究大学院大学開学【全学】
平成元年 4月　文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）設置、学生受入、授業開始
平成 7年 2月　葉山キャンパス本部共通棟が竣工、この年から入学式を同キャンパスにて総研大全体で挙行【全学】
平成11年 4月　先導科学研究科学生受入（地域文化学・比較文化学両専攻併任教官の一部、先導科学研究科の併任に）【全学】
平成12年10月　「オープンキャンパス」開催（年１回）
平成13年 4月　地域文化学・比較文化学両専攻の同窓生ネットワーク発足
平成17年 4月　関西４大学との学生交流に関する協定を締結、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、大阪大学大学院人間科学研究科、神戸大学大学院総合人間科学研究科（平成19年度より国際文化学研究科および人間発達環境学研究科に改組）、および京都文教大学大学院文化人類学研究科との単位互換授業の開講開始

年度別学位授与者数

	平成	3年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	12年	13年	14年	16年	17年	18年	19年	20年	計
地域文化学専攻	課程博士	0	0	2	2	0	3	4	2	1	1	2	4	2	2	1	26
	論文博士	0	0	0	0	3	0	2	0	1	1	3	2	0	1	0	13
比較文化学専攻	課程博士	1	1	1	1	0	4	0	2	2	0	0	0	3	3	1	19
	論文博士	0	1	0	0	0	0	0	1	1	2	0	2	0	0	0	7
	計	1	2	3	3	3	7	6	5	5	4	5	8	5	6	2	65

入学者選抜試験倍率

平成	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年
志願者数	22	17	23	31	23	28	18	19	8	18	15	13
合格者数	6(1)	7	6	8	8	7	6	7(1)	6(1)	7	4	4
倍率	3.7	2.4	3.8	3.9	2.9	4	3	2.7	1.3	2.6	3.8	3.3

※（　）は入学辞退者で内数。

合格者出身大学院機関別累計

平成	元年～9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	計
国立	34(7)	4(1)	4	5	5	4	5	3	4(1)	2(1)	2	2	4	78(10)
公立	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	2
私立	14(1)	2	2	(1)	3	1	1	2(1)	2	4	1	2	0	34(1)(2)
海外	8(1)	0	1	1	0	2(1)	1	1	1	0	3	0	0	18(1)(1)
合計	56(9)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	6(1)	7(1)	6(1)	7	4	4	132(12)(3)

※（　）は入学辞退者で内数。（　）内は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身（1名）者は学部卒で資格認定による。

合格者出身大学院地方別累計

平成	元年～9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	計
北海道	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
東北	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
関東	28(6)	3(1)	4	2(1)	3	3	2	2	1	3	2	0	2	55(7)(1)
中部	6	2	0	0	0	1	1	1	1(1)	0	0	0	1	13(1)
近畿	10(2)	1	2	3	4	2	3	2(1)	3	2	2	2	0	36(2)(1)
中国	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	6
九州	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	0	2(1)
海外	8(1)	0	1	1	0	2(1)	1	1	1	0	3	0	0	18(1)(1)
合計	56(9)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	6(1)	7(1)	6(1)	7	4	4	132(12)(3)

※（　）は入学辞退者で内数。（　）内は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身（1名）は学部卒で資格認定による。

修了生等の就職先

●地域文化学専攻および比較文化学専攻の出身者は、以下のようなところに在職し、教育研究に活躍している。

総合研究大学、愛媛大学、大阪大学、沖縄県立芸術大学、帯広大谷短期大学、鹿児島国際大学、鹿児島純心女子大学、神奈川大学、川崎医療福祉大学、関西外国語大学、神田外語大学、京都文教大学、神戸情報大学院大学、神戸大学、滋賀県立大学、静岡大学、四天王寺国際仏教大学、大同工業大学、中部大学、琉球大学、東京外国語大学、東北学院大学、東洋大学、長崎純心大学、日本大学、阪南大学、広島市立大学、平安女学院大学、宮崎公立大学、インドネシア学術総局〔インドネシア〕、上海師範大学〔中国〕、ライデン大学〔オランダ〕、総合研究大学院大学、国立民族学博物館

学長あいさつ



総合研究大学院大学長　**高畑 尚之**

京都大学理学部卒、九州大学で理学博士号取得。国立遺伝学研究所研究員、助手、助教授を経て1992年本学教育研究交流センター教授に就任。2001年より副学長。2004年から2008年3月まで理事・副学長。2008年4月より現職。2003年9月に日本遺伝学会木原賞、2006年8月に日本進化学会学会賞木村賞を受賞。2002年The American Academy of Arts and Sciences 外国人名誉会員。2003年分子生物進化学会長に就任。

総合研究大学院大学（以下、総研大）は、学術研究の新しい流れに先導的に対応できる、視野の広い創造性豊かな研究者を養成することを目的として昭和63年10月に設立され、翌年の平成元年４月に第一期生を受入れました。それ以来昨年度末までに、1250名をこえる博士課程修了生を国内外の大学、研究機関、産業界などに送り出しました。また、社会人に授与した論文博士の数は190に達しています。この間に、日本の社会は大きく変貌を遂げ、高等教育の在り方も国立大学の法人化を契機として大きな変革期に入りました。法人化とともに総研大で行った改革には、理系の研究科に従来の博士後期課程の他に５年一貫制博士課程を併設したことがあります。この併設の趣旨は学生受入れ制度の弾力化にありましたが、教員の大学院教育に対する意識に大きな影響を及ぼし、教育の質の向上につながる結果となりました。しかしながら、国立大学を取り巻く状況はますます厳しくなっており、各大学にはなお一層の創意と工夫が必要となっています。とくに、来年度からの第2期中期目標・計画においては、自主自律性、機能別分化および業務運営の効率化が各大学に強く求められています。

総研大は、大学共同利用機関が有する優れた研究環境と人材を活用してトップクラスの研究者を養成する、という世界でも類例のないコンセプトのもとに設立されました。大学共同利用機関とは、国内外の大学研究者が共同で利用できる大型の研究施設・設備あるいは貴重な学術資料等を保有する研究機関のことであり、我が国に固有の仕組みであります。総研大は、このような大学共同利用研究所等を基盤として発足した学部をもたない大学院だけの大学（大学院大学）ですが、この組織的な特色はそのまま教育研究の特色となっています。もっとも顕著な点は、大学院教育を研究の現場において直接実施していることです。大学共同利用機関では国際性豊かな専門的研究が行われていますが、このことが本学の教育研究の目標として高い専門性と国際的通用性を掲げている所以となっています。

一方、専攻が学術的にも地理的にも分散している本学にとっては、独自の伝統を醸成して国際的なアイデンティティを確立することも創設以来の目標であります。この目標を達成するために、教育面では各専攻の専門分野を超えた広い視野を持つ人材を養成することを、研究面では新しい研究分野を分野横断的に開拓することを目指しています。大学本部のある葉山キャンパスでは、このような「分散」の総合化を図る目的でさまざまな教育研究活動を展開してきました。今後はこのような葉山を介した連携に加え、専攻間の教育研究ネットワークを構築、強化することが望まれます。とりわけ、文理融合的な教育研究プロジェクトの推進は、総研大らしい成果をもたらすものと期待されます。

昨年、総研大は創設20周年を迎えました。この間、創設の理念は色あせることなく、初代学長の長倉三郎先生から廣田榮治先生と小平桂一先生に引き継がれ、実質化してまいりました。言うまでもないことですが、本学に限らず各大学が行っている高等教育は、知識基盤社会を支える柱です。この公共性のために、国民は大学を支援し、その成果を期待しています。とくに、科学と技術に基づく現代文明が大きな転換期にあるとき、社会に対する大学の果たすべき役割が軽減されることはないでしょう。こうした時代にあって、総研大はその建学の精神に則り、優れた教育研究活動を展開し、社会に貢献できるように努力をする所存です。そのひとつの試みとして、昨年暮れには、総研大の総力を結集するための合同フォーラムを開催しました。本年はその範囲に加えて、知名度の向上を意図した全学的なイベントとして合同フォーラムを実施する計画でいます。また、科学と社会に関する教育プログラムを全学的に展開する準備を進めています。こうした活動と同時に、各専攻においては地域に向けた情報発信や交流事業を積極的に行い、地元の理解と応援のもとに一層充実したキャンパス造りを目指していただきたいと思います。関係各位には、総研大の一層の発展のために引き続きご理解とご協力を賜りますようにに、ここに改めてお願い申し上げます。

総合研究大学院大学の特徴

（総研大 2009～2010概覧より）

特色ある博士課程教育
- 5年一貫制博士課程制度と博士後期課程制度の併用
- 基盤機関の研究現場を活用した教育プログラム
- 個の能力に即した教育プログラム
- 社会人学生・留学生受入れプログラム

高い専門性の育成
- 各専攻分野の最先端研究者による研究指導
- 多様な専門教育プログラム
- 学位取得プロセス管理プログラム／長倉研究奨励賞
- 基盤機関が有する世界最高水準の資料・施設・設備の活用

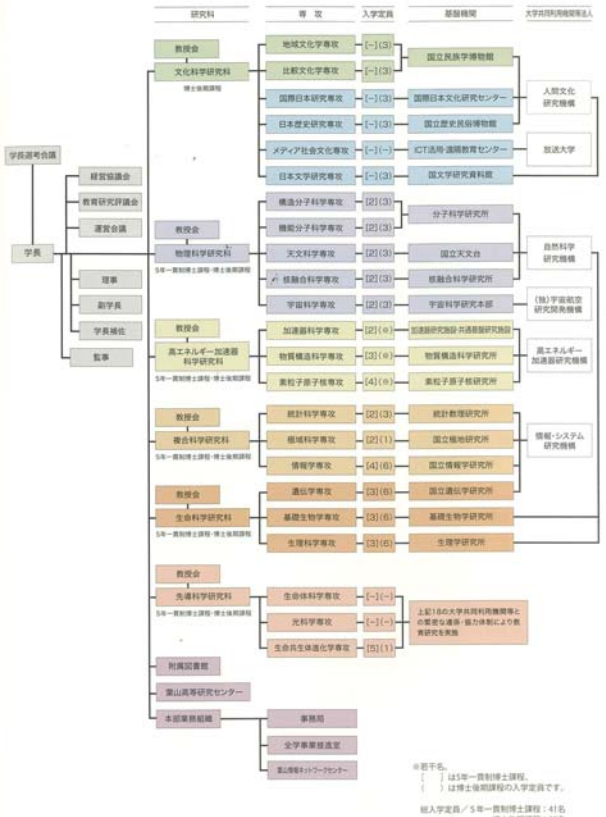
広い視野の養成
- 専攻・研究科間の共同教育研究事業
- 総合科目遠隔授業プログラム
- 全学学生セミナー
- 全学学術交流会

国際的通用性の確保
- 最先端研究技術・研究者の交流拠点における教育
- プレゼンテーション能力養成プログラム
- 海外学生派遣事業
- 国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムの活用

分野横断的・先導的学問分野の創出
- 葉山高等研究センターにおけるプロジェクト研究の推進
- 先導科学研究科における総合的な教育研究の実施
- 「科学と社会」プログラムの全学的な展開
- 修了生を中心とした学術交流ネットワーク

平成21年度 教育研究組織

（総研大 2009～2010概覧より）



※若干名。
〔　〕は5年一貫制博士課程。
（　）は博士後期課程の入学定員です。

総入学定員／5年一貫制博士課程：41名
博士後期課程：59名

出願資格等

（1）出願資格

次のいずれかに該当する者とする。

①修士の学位又は専門職学位を有する者及び入学の前月までに取得する見込みがある者

②外国において、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みがある者

③外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みがある者

④我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者

⑤大学を卒業し、大学、研究所等において、入学の前月までに２年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

⑥外国において学校教育における16年の課程を修了した後、又は外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、入学の前月までに２年以上研究に従事した者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

⑦本学において、個別の入学資格審査により、修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、入学の月の１日において24歳に達しているもの

（⑤、⑥又は⑦により出願しようとする者は、事前に本学で実施する「学力の認定」を受ける必要がある）

（2）選抜方法（文化科学研究科）

選抜は、書類選考、修士論文又はそれに代わるものの審査及び面接により行う。

①書類選考

志望研究内容等、その他研究科が提出を求めた資料について行う。

②修士論文等の審査

修士の学位を有する者及び修士課程在学中の者については修士論文、また学力認定により出願資格が認められた者については刊行された論文又は著作を審査する。

③面接

面接は書類選考・論文審査合格者についてのみ行うものとする。書類選考・論文審査の合否は面接日の約1週間前までに、入学願書に記載された連絡先に文章で個別に連絡する。

（なお、合否通知が面接日の１週間前を過ぎても到着しない場合は、総合研究大学院大学学務課学生厚生係まで問い合わせること。）

面接は、主として修士論文（修士論文のない者は発表した学術論文等又はこれまでに行った研究の要旨）の内容及び志望研究内容について行う。

◎詳細は募集要項を請求のうえ確認してください。

（3）修了要件

本研究科の専攻に３年以上在学し、所定の単位数以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び試験に合格すること。

ただし、特に優れた研究業績を上げた者については、在学期間を短縮して修了を認めることがある。

募集要項請求先

《募集要項の請求方法》

下記メールアドレスに、以下の必要事項を記入し、送信してください。

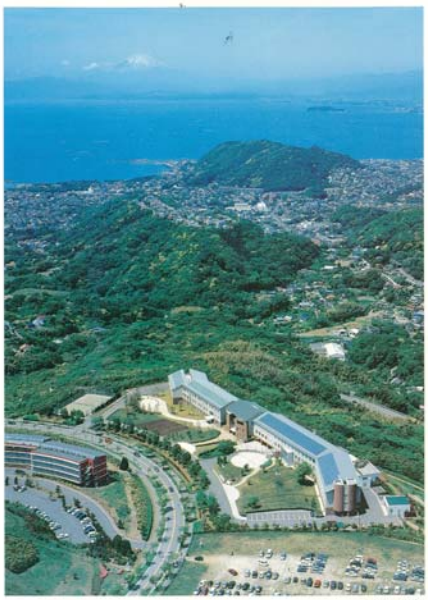
(1) 郵便番号 (2) 住所 (3) 氏名 (4) 電話番号

(5) 希望する募集要項→「平成22年度４月入学 文化科学研究科地域文化学専攻・比較文化学専攻（希望する募集要項の種類：1)」と記入してください。

※配布は８月上旬頃から開始します。

メールアドレス：kousei@ml.soken.ac.jp

問合せ先
総合研究大学院大学 学務課 学生厚生係
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
TEL：046-858-1525, 1526



葉山キャンパス

問合せ先

国立民族学博物館 管理部研究協力課研究協力係
〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151(代表)　06-6878-8236(専攻担当)　FAX 06-6878-8479
URL http://www.minpaku.ac.jp/　E-mail souken@idc.minpaku.ac.jp



●大阪モノレールで「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車徒歩約15分
自然文化園（有料区域）を通ってこられる場合、自然文化園ゲート脇の券売機で本館（国立民族学博物館）の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。また、「公園東口駅」からは、自然文化園を通行せずに来館できます。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車徒歩約15分。また、茨木方面からは、「自然文化園・日本庭園中央」経由のバスが時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

総合研究大学院大学 事務局
〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電話 046-858-1500(代表)　FAX 046-858-1542
URL http://www.soken.ac.jp/





●電車・バス利用
・京急線快速逗子駅東口下車
▶京急バス1番乗り場より16.系統・26.系統「湘南国際村」行き、「湘南国際村センター前」下車
乗車時間：約25分　運賃：340円
▶京急バス3番乗り場より「湘南佐島ちずさの丘」行き、「湘南国際村関門入口調整池」下車
乗車時間：約20分　運賃：320円
・京急急行逗子新駅東口下車
▶京急バス1番乗り場より16.系統・26.系統「湘南国際村」行き、「湘南国際村センター前」下車
乗車時間：約23分　運賃：340円
▶京急バス3番乗り場より「湘南佐島ちずさの丘」行き、「湘南国際村関門入口調整池」下車
乗車時間：約18分　運賃：320円
・京急急行本線浦入駅下車
▶京急バス1番乗り場より16.系統「湘南国際村」行き、「湘南国際村センター前」下車
乗車時間：約30分　運賃：370円
・YCAT
▶横浜シティーエアーターミナル6番乗り場「横須賀（西部地域）」行き、「湘南国際村センター前」下車　乗車時間：約45分　運賃：1,100円
注）「湘南国際村センター前」下車後歩3分、「湘南国際村関門入口調整池」下車徒歩10分

●駐車場
・横浜横須賀道路「有料」「逗子インター」より国道新道「有料」出口より交差点左折
・池崎トンネルを抜け直進約5分「湘南国際村センター入口」交差点を左折約1分

携帯サイト
URL http://daigakujc.jp/sokendai/



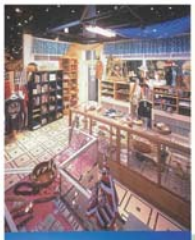
総合研究大学院大学
文化科学研究科

地域文化学専攻
比較文化学専攻　概要'10

The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies

Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies
Summary

国立民族学博物館







目次

文化科学研究科について 1

専攻の概要
- 地域文化学専攻 2
- 比較文化学専攻 3
- 地域文化学専攻授業概要 4
- 比較文化学専攻授業概要 6
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員 8
- 担当教員の専門分野 8
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法 9
- フィールドからみる世界～学生の研究フィールド・マップ～ 10
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生 10
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位 12
- 学位論文リスト 12
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する 14
- 国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要 15
- 地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み 16
- 年度別学位記授与者数 16
- 入学者選抜試験倍率 16
- 合格者出身大学院機関別累計 16
- 合格者出身大学院地方別累計 16
- 修了生等の就職先 16

総合研究大学院大学について
- 学長あいさつ 17
- 総合研究大学院大学の特徴 18
- 大学の教育研究組織 19
- 出願資格等 20
- 募集要項請求先 21

問合せ先

文化科学研究科について



研究科長 大髙 洋司

総合研究大学院大学、略して「総研大」は、学部をもたず大学院だけから成る国立大学として、昭和63年（1988）10月1日に開学しました。現在、全部で6つの研究科から構成されていますが、他の研究科が全て理系であるのに対して、文化科学研究科は唯一の文系研究科です。

研究科の成り立ちは、まず平成元年（1989）4月に、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻が設置されました。その後、平成4年（1992）4月に、国際日本文化研究センターを基盤とする国際日本研究専攻、平成11年（1999）4月に、国立歴史民俗博物館を基盤とする日本歴史研究専攻、平成13年（2001）4月にメディア教育開発センター（21年4月より放送大学に業務移管）を基盤とするメディア社会文化専攻、平成15年（2003）4月に、国文学研究資料館を基盤とする日本文学研究専攻が順次増設され、6専攻となりました。平成16年（2004）4月からは、大学共同利用機関法人人間文化研究機構が設立され、4つの研究機関（国立民族学博物館、国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館）と独立行政法人メディア教育開発センター（上記参照）をあわせた5つの研究機関を基盤として、国立大学法人総合研究大学院大学文化科学研究科として現在に至っています。なお、総研大の他の研究科は、博士課程前期（修士）の学生を受け入れる5年一貫制を採用していますが、文化科学研究科は、博士課程後期（博士）のみから成っていることを申し添えます。

次に、各専攻の概要をご紹介します。

- 地域文化学専攻は、アジア・アフリカ・ヨーロッパ・アメリカ・オセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とし、それぞれの文化の特性や歴史性を考慮しながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としています。現地調査と、これに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度な研究者の養成を行っています。
- 比較文化学専攻は、民族社会・民族技術・民族宗教・民族芸術等を中心とした諸民族の文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としています。従来の文化人類学的方法論に加えて、情報科学や文化資源研究、隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的に進めながら、高度な研究者の養成を行っています。
- 国際日本研究専攻は、人文科学・社会科学・自然科学にわたる総合的な日本研究を進めるために、「教育・研究指導分野」として、全教員の指導による単一の「国際日本研究」を設けている点に特色があります。また、国際的な立場から「日本研究」の理論的・方法論的な指導を行う共通必修科目を設けています。これらの推進により、創造的で高度な専門的視野、学際性、総合性を備えた研究者を育成します。
- 日本歴史研究専攻は、日本の歴史と文化について、資料に基づいた高度な総合的能力をもつ研究者、また広い視野と国際的な感覚をもち、社会に貢献できる人材の育成を目指しています。基盤機関である国立歴史民俗博物館の豊富な収蔵資料と資料情報を活用し、自然科学的な分析を行うために整備された高度な研究設備を利用しながら、歴史学・考古学・民俗学・自然科学を含めた関連諸学の専門研究者から、多様な視点の、実地調査を含む学際的な研究指導を受けることができます。
- メディア社会文化専攻は、高度情報通信社会において、メディアと通信技術と、社会・文化・人間とが、相互にどのように作用し合うかを、学際的・総合的に解明する研究と教育を行っています。メディアと人間の間のインタラクションを、関連諸科学の成果と方法を統合し、先端的なメディア技術を駆使しながら解明して、総合的メディア研究の新たな分野を生み出す、創造的研究者を養成します。
- 日本文学研究専攻は、基盤機関である国文学研究資料館が集積した膨大な原典資料を活用しながら、専門的な調査・分析を進める能力と共に、一方でそうした専門性を相対化する広い視野と国際感覚を併せ持った、先進的な日本文学研究者の育成を目指しています。複数指導体制によって、日本文学ばかりでなく、文学情報・記録情報・書物交流など、関連分野の専門研究者から、多様な指導を受けることができます。

以上の6専攻（民博から2専攻）は、それぞれが日本を代表する研究機関を基盤として、すでに多くの学位取得者、専門研究者を輩出し、またそのための努力を重ねていますが、同時に、文化科学研究科全体として、学生の専門研究を支援し、また専攻同士の横断連携を推進する事業を推進しております。

専攻の概要

地域文化学専攻

専攻長 池谷 和信



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ及びオセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的とする。本専攻においては、現地調査およびこれに基づく個別文化の記述的研究を積極的に推進する、高度な専門性を持った研究者の養成を行う。

教育研究指導分野の概要

分野	概要
アジア地域文化I	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アジア地域文化II	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
基礎科目	地域文化学に関する基礎演習および博士論文作成のための演習
共通科目	地域文化学に関する基礎的な講義
総合教育科目	全学共通、各研究科、専攻を超えて実施する学生セミナーや総研大レクチャー（集中講義）など

比較文化学専攻

専攻長 寺田 吉孝



本専攻では、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術、文化資源研究という6つの研究分野がある。諸民族文化の比較研究により、各々に通底する普遍的な法則の発見と理論的解明を目指す。従来の文化人類学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入し、新しい研究方法の開発を積極的にすすめて高度な専門性を持った研究者を養成する。

教育研究指導分野の概要

分野	概要
比較社会研究	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治、法、経済等に関する通文化的・理論的研究
比較宗教研究	諸民族の呪術、祭祀、神話、宇宙観、宗教等に関する通文化的・理論的研究
比較技術研究	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究
比較言語研究	諸民族の言語、文字、コミュニケーション、言語政策等に関する通文化的・理論的研究
比較芸術研究	諸民族の音楽、芸能、文芸、工芸、造形等に関する通文化的・理論的研究
文化資源研究	博物館人類学、博物館情報学、保存科学、および文化資源に関する理論的・実践的研究
基礎科目	比較文化学に関する基礎演習および博士論文作成のための演習
共通科目	比較文化学に関する基礎的な講義
総合教育科目	全学共通、各研究科、専攻を超えて実施する学生セミナーや総研大レクチャー（集中講義）など

地域文化学専攻授業概要（平成22年度）

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
アジア地域文化Ⅰ	東アジア文化研究	台湾原住民族の文化と歴史	准教授　野林　厚志
	東アジア文化研究特論Ⅰ	中国における文化変容と社会	准教授　横山　廣子
	東アジア文化研究特論Ⅱ		
	東アジア文化研究演習Ⅰ	中国南部諸民族の歴史民族学的研究に関する講述	教　授　塚田　誠之
	東アジア文化研究演習Ⅱ	朝鮮半島を中心とした東アジアにおける社会と文化	教　授　朝倉　敏夫
	北・中央アジア文化研究	モンゴル遊牧社会論	教　授　小長谷有紀
	北・中央アジア文化研究特論	北アジア狩猟採集文化研究	教　授　佐々木史郎
	北・中央アジア文化研究演習Ⅰ		
	北・中央アジア文化研究演習Ⅱ		
アジア地域文化Ⅱ	東南アジア文化研究	東南アジアの住文化研究	准教授　佐藤　浩司
	東南アジア文化研究特論		
	東南アジア文化研究演習Ⅰ	東南アジア諸社会における精霊信仰	教　授　田村　克己
	東南アジア文化研究演習Ⅱ		
	南アジア文化研究	インドのナショナリズムと宗教	准教授　三尾　稔
	南アジア文化研究特論	ネパールの現代政治と社会的包摂	准教授　南　真木人
	南アジア文化研究演習Ⅰ		
	南アジア文化研究演習Ⅱ		
	西アジア文化研究	中東イスラム社会における民衆文化	教　授　西尾　哲夫
	西アジア文化研究特論		
	西アジア文化研究演習Ⅰ		
	西アジア文化研究演習Ⅱ		
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ文化研究	東欧の政治文化と宗教	准教授　新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究特論	南ヨーロッパのジェンダー・セクシュアリティ	准教授　宇田川妙子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	ヨーロッパ・エスノロジーの展開	教　授　森　明子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ		
アフリカ地域文化	アフリカ文化研究	人の移動に関する文化的研究	准教授　三島　禎子
	アフリカ文化研究特論		
	アフリカ文化研究演習Ⅰ	アフリカ地域の生態人類学	教　授　池谷　和信
	アフリカ文化研究演習Ⅱ	排除と包摂の社会科学	教　授　竹沢尚一郎
アメリカ地域文化	アメリカ文化研究	中米文化研究	教　授　八杉　佳穂
	アメリカ文化研究特論	南アメリカのエスノヒストリー	准教授　齋藤　晃
	アメリカ文化研究演習Ⅰ		
	アメリカ文化研究演習Ⅱ		
オセアニア地域文化	オセアニア文化研究	自然災害と対峙する社会と文化	准教授　林　勲男
	オセアニア文化研究特論	オセアニアにおける土器文化の諸相	教　授　印東　道子
	オセアニア文化研究演習Ⅰ		
	オセアニア文化研究演習Ⅱ		

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
基礎科目	地域文化学基礎演習Ⅰ	地域文化研究に関する基礎演習	教　授　塚田　誠之
	地域文化学基礎演習Ⅱ	地域文化研究に関する基礎演習	教　授　竹沢尚一郎
	地域文化学演習Ⅰ	博士論文作成のための演習	准教授　佐藤　浩司
	地域文化学演習Ⅱ	博士論文作成のための演習	准教授　横山　廣子
共通科目	地域文化学特論Ⅰ	言語と文化	教　授　八杉　佳穂
	地域文化学特論Ⅱ	人類学の理論と方法	教　授　竹沢尚一郎

※年度によって開講科目が異なる。

地域文化学専攻の人材養成目的

文化人類学・民族学の分野を中心とする諸科学に関して高度な専門知識をもち、世界の諸地域における多様な文化について、現地調査等を通じて優れた研究をおこなう研究者および高度な専門性をもって国際的見地から社会に貢献しうる人材の育成を目的とする。

地域文化学専攻の教育方針

地域文化学専攻を置く国立民族学博物館は、世界の諸地域における多様な文化に関して図書資料や標本資料、映像音響資料等のさまざまな情報を集積している研究施設であり、国内外の多くの研究者の参画によって運営される大学共同利用機関である。こうした利点を活かして、質の高い研究に支えられた教育をおこなう。
また、長期の現地調査や国際会議での成果公開や、組織的研究の運営等の研究活動に必要な能力開発をめざす。
研究指導は指導教員を中心としつつ、学生ごとにその研究テーマに応じたアドバイザリーグループを構成して、専攻に属する教員全体で指導する体制をとる。

地域文化学専攻の求める学生像

世界の多様な地域社会や地域文化について広い関心をもち、とりわけ文化人類学・民族学の基礎研究に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。





比較文化学専攻授業概要（平成22年度）

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
比較社会研究	比較社会研究Ⅰ	コミュニティの人類学	准教授　平井京之介
	比較社会研究Ⅱ	中国の社会人類学 ―欧米・日本・中国のパースペクティブ	准教授　韓　敏
	比較社会研究特論Ⅰ		
	比較社会研究特論Ⅱ	社会・文化に関する人類学的アプローチ	教　授　岸上　伸啓
	比較社会研究演習Ⅰ	宗教とナショナリズム	教　授　杉本　良男
	比較社会研究演習Ⅱ	文化人類学の研究動向と研究課題	教　授　岸上　伸啓
	比較社会研究演習Ⅲ	社会と経済に関する人類学的アプローチ	准教授　鈴木　紀
比較宗教研究	比較宗教研究	呪術と科学の文化人類学	准教授　白川　千尋
	比較宗教研究特論	日本宗教と日系宗教の研究	教　授　中牧　弘允
	比較宗教研究演習Ⅰ	アメリカ合衆国におけるリフォーム運動とライフスタイル	教　授　鈴木　七美
	比較宗教研究演習Ⅱ		
比較技術研究	比較技術研究Ⅰ		
	比較技術研究Ⅱ	インカ帝国研究の動向	教　授　関　雄二
	比較技術研究特論	「みんぱく」のコレクションと検索システムを活用した民族技術の比較研究	教　授　近藤　雅樹
	比較技術研究演習Ⅰ	アジアと太平洋地域における民族植物学と技術	准教授　Matthews, Peter J.
	比較技術研究演習Ⅱ	手織機の型式と機織り技術	教　授　吉本　忍
比較言語研究	比較言語研究	フィールド言語学の基礎	准教授　菊澤　律子
	比較言語研究特論	言語類型論	教　授　長野　泰彦
	比較言語研究演習Ⅰ	少数言語のとらえ方	教　授　庄司　博史
	比較言語研究演習Ⅱ	オーストロネシア比較言語学	准教授　菊澤　律子
比較芸術研究	比較芸術研究Ⅰ	無形文化遺産の映像記録	准教授　福岡　正太
	比較芸術研究Ⅱ	日常的・実践的な身体技法としての芸能伝承論	准教授　笹原　亮二
	比較芸術研究特論		
	比較芸術研究演習Ⅰ	北米・ハワイのアジア系音楽	教　授　寺田　吉孝
	比較芸術研究演習Ⅱ		
文化資源研究	文化資源研究	博物館における資料管理	教　授　園田　直子
	文化資源研究特論		
	文化資源研究演習Ⅰ	文化資源の情報モデル論、情報処理論、アーカイブズ論、知的財産権の議論、メディア・リテラシー論、などの講述と議論	教　授　久保　正敏
	文化資源研究演習Ⅱ	博物館情報学	准教授　山本　泰則
	博物館研究	博物館の歴史と政治性	准教授　川口　幸也
	博物館研究特論	博物館人類学	教　授　吉田　憲司
	博物館研究演習Ⅰ	文化人類学・民族学博物館における展示と活用	教　授　小林　繁樹
	博物館研究演習Ⅱ		

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
基礎科目	比較文化学基礎演習Ⅰ	比較文化研究に関する基礎演習	准教授　鈴木　紀
	比較文化学基礎演習Ⅱ	比較文化研究に関する基礎演習	准教授　川口　幸也
	比較文化学演習Ⅰ	博士論文作成のための演習	准教授　韓　敏
	比較文化学演習Ⅱ	博士論文作成のための演習	教　授　中牧　弘允
共通科目	比較文化学特論Ⅰ	アメリカ考古学における遺物分析方法の研究	教　授　関　雄二
	比較文化学特論Ⅱ	博物館人類学の最前線2010―表象の詩学と政治学	教　授　吉田　憲司

※年度によって開講科目が異なる。

比較文化学専攻の人材養成目的

文化と社会の諸問題や文化の表象等に関して、現地調査と比較研究にもとづく幅広い専門知識をもつ研究者であり、なおかつ、その高度な専門性をもって社会的な実践をおこないうる人材の育成を目標とする。

比較文化学専攻の教育方針

比較文化学専攻を置く国立民族学博物館は、国内外の大学や博物館等の諸研究機関とともに大規模な調査研究を推進するために設立された大学共同利用機関である。その一方で、展示や講演会、一般社会人を対象としたゼミナール等の活動を通じて広く社会と連携している「開かれた博物館」としての機能も有している。
世界各地の諸民族に関する生活のさまざまな場面で必要とされる標本資料の他にも映像音響記録資料・文献図書資料等を膨大に蓄積している利点を活かし、理論と実践とに結びついた研究に支えられた教育をおこなって、学術論文や学会発表はもとより、研究成果の社会還元に不可欠な情報発信能力を練磨する。
学生個々の研究テーマに応じたアドバイザリーグループを構成し、切磋琢磨する環境の中で、指導教員を中心に、専攻に所属する教員全体が指導にあたっている。

比較文化学専攻の求める学生像

人間の社会や文化について広い関心を抱き、とりわけ学問的な理論化やその社会的な応用に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。





地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員

現員（平成22年4月1日現在）

区　分	教　授	准教授	計	備　考
地域文化学専攻	12	10	22	基盤機関の長（民博館長）を含む
比較文化学専攻	14	10	24	
計	26	20	46	

担当教員の専門分野（五十音順）

地域文化学専攻

朝倉 敏夫（韓国社会研究）
池谷 和信（環境人類学・南部アフリカ研究）
印東 道子（オセアニア考古学）
宇田川 妙子（南ヨーロッパ研究・性研究）
小長谷 有紀（牧畜文化論・モンゴル研究）
齋藤 晃（ラテンアメリカ歴史人類学）
佐々木 史郎（文化人類学・北アジア研究）
佐藤 浩司（民族建築学）
新免 光比呂（宗教学・東欧研究）
須藤 健一（社会人類学）
竹沢 尚一郎（宗教人類学・西アフリカ研究）
田村 克己（東南アジア文化人類学）
塚田 誠之（歴史民族学・中国研究）
西尾 哲夫（認識言語学・アラブ研究）
野林 厚志（民族考古学・台湾研究）
林 勲男（社会人類学・オセアニア研究）
三尾 稔（文化人類学・南アジア研究）
三島 禎子（文化人類学・西アフリカ研究）
南 真木人（生態人類学・南アジア研究）
森 明子（中部ヨーロッパ文化人類学）
八杉 佳穂（言語人類学・中米文化史）
横山 廣子（文化人類学・中国社会研究）

比較文化学専攻

川口 幸也（アフリカ同時代美術・展示表象論）
韓 敏（社会人類学・中国研究）
菊澤 律子（言語学・オーストロネシア諸語）
岸上 伸啓（文化人類学・北方文化研究）
久保 正敏（医療情報学・メディア文化論・コンピュータ民族学・オーストラリア研究）
小林 繁樹（文化人類学・博物館学）
近藤 雅樹（民俗学・民具研究）
笹原 亮二（民俗学・民俗芸能研究）
庄司 博史（言語学・言語政策論）
白川 千尋（文化人類学・開発人類学）
杉本 良男（社会人類学・南アジア研究）
鈴木 七美（文化人類学・医療文化、ライフデザイン研究・欧米医療社会史研究）
鈴木 紀（開発人類学・ラテンアメリカ文化論）
關 雄二（アンデス考古学・ラテンアメリカ研究）
園田 直子（保存科学）
寺田 吉孝（民族音楽学・インド研究）
長野 泰彦（言語学・チベット・ビルマ語研究）
中牧 弘允（宗教人類学・経営人類学）
平井 京之介（経済人類学・東南アジア研究）
福岡 正太（民族音楽学・東南アジア研究）
Matthews, Peter J.（先史学・民族植物学）
吉田 憲司（博物館人類学・アフリカ研究）
吉本 忍（民族工芸論・民族技術論）
山本 泰則（博物館情報学）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法

教員が地域文化学・比較文化学両専攻に分かれて教育研究の指導にあたっています。

教育研究の方法は、個別の教員による授業や研究指導と、複数の教員の指導のもとに行われる共通のゼミナールからなっています。

共通のゼミナールには、１年生を対象とする「基礎演習Ⅰ」および「基礎演習Ⅱ」（通称「１年生ゼミナール」）と、博士論文作成の指導を内容とする「演習Ⅰ」および「演習Ⅱ」（通称「論文ゼミナール」）があります。

「１年生ゼミナール」は学生がそれぞれの研究計画を発表する「研究計画シリーズ」、各教員が交代で専門分野の講義をおこない、それに基づいて議論を進める「テーマ・シリーズ」、１年の教育研究課程を受けた学生があらためて研究計画を発表する「リサーチプロポーザル・シリーズ」からなっています。

平成13年度からは、文化人類学・民族学の視点や方法論を批判的に摂取することを目的として、共通科目が開講されています。

学生はおおむね１年次において現地調査（フィールドワーク）の準備をおこない、２年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミナール」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

両専攻の教育研究の目的

① 独創的な文化人類学・民族学の研究
② 長期のフィールドワークで得られた資料にもとづく学位論文の作成
③ 広い視野をもった、専門的教養を養う



国立民族学博物館・全景



地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

大学院入学定員および現員（平成22年4月1日現在）

専　攻	入学定員	現　員			
		1年次	2年次	3年次	計
地域文化学専攻	3	5	3	10	12
比較文化学専攻	3	4	2	12	18
計	6	9	5	22	30

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。又専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）
比較文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）

学位論文リスト

課程博士

数学的手法を用いた文化分析の方法について	小島 三弘（比較）	[H4.3.31 学術]
シドニーにおける都市アボリジニの研究　伝統と民族の創出	鈴木 清史（比較）	[H6.3.24 文学]
オルドス・モンゴル族の社会構造―ヤスの機能とその歴史的変容―	楊 海英（地域）	[H6.9.20 文学]
ペルーにおける山の神信仰の現在性―アンデスの宗教的世界のダイナミズム―	細谷 広美（地域）	[H7.3.23 文学]
ビルマにおけるウェイザー信仰の研究	土佐 桂子（比較）	[H7.3.23 文学]
韓国社会の動態と「両班化」―忠清北道阿原郡における門中と儒式儀礼の検討を通して	岡田 浩樹（地域）	[H8.3.21 文学]
中国杭嘉湖地方における蚕養伝承の研究	曹 建南（地域）	[H8.3.21 文学]
歌に表象される村落意識―奄美における「シマの歌」の研究―	中原ゆかり（比較）	[H8.3.21 文学]
四合院家屋の文化人類学的研究―人間と自然との相互作用の視点から	杉山 京子（地域）	[H10.3.24 文学]
モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究 ―アルタイ・ハイラハ叙事詩を事例として―	藤井 麻湖（地域）	[H10.3.24 文学]
カストム・メレシン　―ヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および民間医療観の現代的位相	白川 千尋（地域）	[H10.3.24 文学]
韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究	李 善愛（比較）	[H10.3.24 文学]
東南中国の漢族社会組織とその変容―閩南農村社会における宗族の研究	潘 宏立（比較）	[H10.3.24 文学]
芸の伝承―ジャワ島・チルボンの仮面舞踏を中心に	福岡まどか（比較）	[H10.3.24 文学]
Overt First and Second Person－Designating Terms in Japanese Discourse ―A Pragmatic Perspective―	Riikka Lansisalmi（比較）	[H10.3.24 文学]
「二重の窮乏」下の平等理念―現代世界とキリバス南部環礁の社会生活―	風間 計博（地域）	[H10.9.30 文学]
建築と文化・社会との相互作用―中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象として―	巽原 伸治（地域）	[H10.9.30 学術]
カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容―宗教共同体と開発の視点から―	子島 進（地域）	[H11.3.24 文学]
地域主義運動における言語と知識人―エストニア南部ヴォル地方の事例から―	寒水 明子（地域）	[H11.3.24 学術]
英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究 ―文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相―	塩路 有子（比較）	[H12.9.29 文学]
北タイ・アカの家屋に関する研究―家屋の形式とその変化への視点から―	清水 郁郎（地域）	[H13.3.23 文学]
韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化 ―忠清南道公州市を中心として活動する薬草商人を例に―	林 史樹（地域）	[H13.3.23 文学]
現代インドネシアにおけるジャワ大衆演劇クトプラの研究	青木 武信（比較）	[H13.3.23 文学]
南ラオス村落社会における政治過程の研究―シゲの村における「連帯」と闘争―	中田 友子（地域）	[H14.3.22 文学]
20世紀前半のボリビアにおける先住民教育と植民地主義	吉江 貴文（地域）	[H14.3.22 文学]
カメルーンにおける「商売の民」バミレケの都市人類学的研究	野元 美佐（比較）	[H14.3.22 文学]
タイ式医療の構築とタイ・マッサージ―社会的文脈による権威的知識の多様性―	飯田 淳子（地域）	[H15.3.24 文学]
インドネシア・スンダの食文化―言語人類学的観点から―	阿良田麻里子（地域）	[H17.3.24 文学]
韓国の仮面劇「固城五広大」の伝承と演戯者 ―解放後の韓国社会における民俗芸能の変遷から―	高 正子（地域）	[H17.3.24 文学]
帰還と離散のはざまで―ウクライナ一地方都市におけるユダヤ人巡礼の民族誌―	赤尾 光春（地域）	[H17.9.30 学術]
イスラエルにおけるアラブ人キリスト教徒のアイデンティティの様態 ―ガリラヤ地方・メルキト派カトリック信徒の事例研究―	菅瀬 晶子（地域）	[H18.3.24 文学]
トンガ王国の土地制度―グローバル化のなかの伝統―	森本 利恵（地域）	[H18.3.24 文学]
パラライカの鳴り響く空間：1917～48年における社会主義の文化の生成	大家（柚木）かおり（地域）	[H18.3.24 学術]
フィジーにおける植民地主義とインド系移民社会 ―砂糖キビ栽培地域の村落社会における文化の動態―	村田 晶子（比較）	[H18.9.29 文学]
上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的研究	飯国有佳子（地域）	[H19.3.23 文学]
「護り」の身体技法に関する映像人類学研究―インドネシア・ミナンカバウの事例から―	村尾 静二（比較）	[H19.3.23 文学]
離散と故郷―ヨルダンのパレスチナ系住民にみられる帰属意識とナショナリズム―	錦田 愛子（地域）	[H19.3.23 文学]
「子ども城」の文化人類学的研究―バングラデシュ農村社会の子ども―	南出 和余（比較）	[H19.3.23 文学]

参加型開発を通した女性の自己変容過程に関する人類学的研究 ―北インド農村社会を事例として―	菅野美佐子（比較）	[H19.9.28 文学]
「場」と「パフォーマンス」に関する人類学的研究 ―トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として―	米山 知子（比較）	[H19.9.28 文学]
フェラインの民族誌―ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション―	山田 香織（地域）	[H20.3.19 文学]
水上人と呼ばれる人々―広東珠江デルタの漢族エスニシティとその変容―	長沼さやか（地域）	[H20.3.19 文学]
在米コリアンのサンフランシスコ日本町―マルチカルチャーのエスニックタウン―	小谷 幸子（比較）	[H20.3.19 文学]
インド農村社会における不妊経験の人類学的研究	松尾 瑞穂（比較）	[H20.9.30 文学]
韓国における老人の食―老人福祉施設を中心に―	守屋亜記子（地域）	[H21.3.24 文学]
日本の先史時代における植物性食料の加工と利用：残存デンプン分析法の理論と応用	渋谷 綾子（比較）	[H22.3.24 文学]

論文博士

An Areal—Typological Study of Middle American Indian Languages	八杉 佳穂	[H6.3.30 文学]
農村女性からみたトルコの「近代化」―世俗主義、イスラーム、女性の相互関係	中山 紀子	[H9.3.24 文学]
南タイにおける実践宗教―ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から―	西井 凉子	[H9.3.24 文学]
セネガルの公権力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究	小川 了	[H9.3.24 文学]
メラネシアの政治的リーダーシップと開発 ―ソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐって―	関根 久雄	[H10.9.30 文学]
南インドの農村におけるカースト内関係としての親族―コング・ヴェッラーラの事例研究―	杉本 星子	[H10.9.30 文学]
アイヌ民族における神送りの研究―沙流川流域を中心に―	笠野 茂	[H13.3.23 学術]
低湿地立地の遺跡にみる縄文時代末州西部地域の生業活動 ―縄文時代早期末から中期初頭における黎明湾沿岸と琵琶湖周辺地域の動物考古学的考察―	内山 純蔵	[H14.3.22 文学]
考古学における数量化と数理的手法の研究	及川 昭文	[H14.3.22 学術]
総管信仰―近世江南農村社会と民間宗教―	濱島 敦俊	[H14.9.30 学術]
中国の食事方法―歴史人類学的考察―	西澤 治彦	[H15.3.24 文学]
台湾原住民のイノシシ（Sus scrofa taivanus）狩猟の民族考古学的研究： 動物遺存体研究の方法論構築におけて	野林 厚志	[H15.3.24 学術]
The Transformation and Social Functions of the sNang zhig Family and its Monastery —An Ethnographic Description of the Bon Tradition in Amdo	才旦 太	[H16.9.30 学術]
利用者の視点にたった博物館の理念と活動様式の研究	布谷 知夫	[H16.9.30 文学]
トビニタイ文化の集団構成と生計戦略―北海道東部における「中世アイヌ社会」成立に至る一階梯―	大西 秀之	[H17.3.24 文学]
アットゥシの歴史に関する基礎的研究―アイヌ伝統文化の再検討の試みとして―	本田 優子	[H17.9.30 文学]
カナダ・イヌイットの食物分配に関する文化人類学的研究―先住民社会の変容と再生産―	岸上 伸啓	[H18.3.24 文学]
タイ中部農村における相互行為の民族誌的研究	高城 玲	[H18.3.24 文学]
東ネパールにおける羊飼いの生産活動と放牧地をめぐる社会関係	渡辺 和之	[H18.3.24 文学]
「アイヌ風俗画」の研究―近世北海道におけるアイヌと美術	新明 英仁	[H19.9.28 文学]
国際線客室乗務員の接客業務と勤務体制―仕事の人類学的研究―	八巻 惠子	[H21.9.30 文学]
シャーマニズムによるエスニシティの探求 ―ポスト社会主義期におけるモンゴル・ブリヤートの事例を中心として	島村 一平	[H22.3.24 文学]

卒業生の声

京都外国語大学　専任教員
河上（小谷）幸子（平成20年3月学位取得）

総研大・民博で私が過ごした6年間は、贅沢で有り難い時間であった。その理由は3つある。まずひとつ目は、フィールドワーク中心の学生生活を支えるサポート体制が整っていたこと。特に私が在学中は、ビデオカメラなどの機材は個人で購入しなくても、借りることができる制度があり助かった。次にふたつ目の理由としては、多様な見解を受け入れてくれる研究環境で、研究に取り組めたこと。民博の院生ゼミは研究室ごとではなく、院生全体で行われる。それゆえに、発表者はテーマもフィールドも異なる人たちを相手に苦戦を繰り広げることになる。だが、このゼミ発表が、博士論文の公開審査への準備をしてくれたのだと思う。最後の理由は、民博が国内外の魅力ある研究者を集める共同利用研究機関であるということに関連する。共同研究会・調査への参加、海外客員教授の通訳やお世話係、シンポジウムのアルバイトなど、学業以外の仕事の機会も多い。こうした仕事を通して、精力的な活動を重ねる先輩研究者たちの仕事を間近で見る機会に恵まれたことは、何よりの財産となった。

新潟国際情報大学　専任教員
松尾 瑞穂（平成20年9月学位取得）

人類学を学ぶ学部生だったころ、憧れの民博へ初めて行ったことは今でも覚えている。ただ民博のことは知っていても、そこで大学院教育が行われているなど、当時は全く知らなかった。それが、博士課程と外来研究員も含めて計8年もお世話になっただから、出会いとは本当に不思議なものである。

総研大はとにかく恵まれた大学院である。民博にある豊富な図書資料、院生よう多い教授陣、毎週のように開催される研究会やシンポジウム。これらの資源は院生にも開かれており、自ら挑んでいけば、これ以上ないというくらい素晴らしい研究環境に身を置くことが可能である。このことは、他でもない総研大で学ぶことの一番のメリットだ。その反面、自分で行動しなければ、何も得られないという厳しさもある。総研大生には、いい意味でのタフさが求められるのではないかと思う。

離れてしみじみ懐かしく思うのは、総研大で経験した沢山の先生方や院生同士との語らいである。総研大に入学するみなさんには、時に研究室で、時に飲み屋で交わされる濃密な語らいをぜひ満喫してもらいたいと思う。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する



国立民族学博物館長　**須藤 健一**

国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館をそなえた世界で唯一の文化人類学・民族学の研究所です。60名の教員たちは、「知の先へ。知の奥へ。」をスローガンに世界各地で、グローバリゼーションの動きを受容し、あるいはそれに抗いながら独自の社会と固有の文化を維持ないし創造している人びとの営みを研究しています。一方で、世界の諸民族の生活や考えをより深く理解するために民族資料や映像音響資料などの収集につとめ、「もの」をとおして文化を表現する展示活動も行っています。

文化人類学・民族学は、現地の人びとと生活をともにしながら日常生活から地球規模の影響をも視野に入れて人間の社会と文化を現場で研究する学問です。異文化に生きる人びとを理解するためには幅広い視野、柔軟な思考と豊かな想像力が求められます。そして、収集したデータを独創的な着想から分析して論理的に記述する手法が大事です。

みんぱくには、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置され、文化人類学をはじめ言語学、宗教学、生態学、先史学、民族音楽学そして博物館学などを研究する優秀な教授陣がいます。そのうえ、民族標本、文献図書や映像音響などの豊富な資料を所蔵しており、研究環境の点ではわが国随一の大学院であるといえます。

私たちは、皆さんが人類学の研究課題を追求し、博士論文を書きあげて一人前の研究者として社会に飛び立つことを支援するのを楽しみにしています。

国立民族学博物館・アフリカ展示



国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要

国立民族学博物館（民博）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。民博は、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究を進め、学術情報を集積する一方、その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することを使命としています。1989年には、総合研究大学院大学の文化科学研究科地域文化学専攻と比較文化学専攻が民博を基盤機関として設置され、民博での博士後期課程の教育が開始されました。

以上のように、国立民族学博物館は「博物館をもつ研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。民博の展示は、常設展示と特別展示で構成されており、このうち常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示は、特定のテーマに焦点を当て、年に数回、期間を限って開催されています。

民博は、2004年4月より、国立大学と足並みをそろえて、法人組織となりました。法人の正式名称は、「大学共同利用機関法人人間文化研究機構」ですが、民博は、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所とともに、その一員として再出発しました。その後、2009年10月には6番目の大学共同利用機関として新たに国立国語研究所が設置されました。また民博の研究部は、3研究部（民族社会、民族文化、先端人類科学）2センター（研究戦略センター、文化資源研究センター）体制に組織替えがなされました。研究活動の機動性を高めるとともに、その成果をより広くわかりやすく社会に伝えていくための措置です。文化人類学・民族学を基礎としつつ、機関と分野の別を超えて、人間文化の総合的理解に至ろうとする、民博の新たな活動が始まっているのです。

所蔵民族学資料（平成22年4月1日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	173,308点	映像資料	7,769点	日本語図書	246,528冊
国内資料	101,990点	音響資料	62,651点	外国語図書	374,655冊
計	275,298点	計	70,420点	計	621,183冊
				日本語雑誌	9,724種
				外国語雑誌	6,590種
				計	16,314種

地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み

昭和63年10月　総合研究大学院大学開学【全学】
平成 元年 4月　文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）設置、学生受入、授業開始
平成 7年 2月　葉山キャンパス本部共通棟が竣工、この年から入学式を同キャンパスにて総研大全体で挙行【全学】
平成11年 4月　先導科学研究科学生受入（地域文化学・比較文化学両専攻併任教官の一部、先導科学研究科の併任）【全学】
平成12年10月　「オープンキャンパス」開催（年1回）
平成13年 4月　地域文化学・比較文化学両専攻の同窓生ネットワーク発足
平成17年 4月　関西4大学との学生交流に関する協定を締結、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、大阪大学大学院人間科学研究科、神戸大学大学院総合人間科学研究科（平成19年度より国際文化学研究科および人間発達環境学研究科に改組）、および京都文教大学大学院文化人類学研究科との単位互換授業の開講開始

年度別学位授与者数

	平成	3年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	12年	13年	14年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	計
地域文化学専攻	課程博士	0	0	2	2	0	3	4	2	1	1	2	4	2	2	1	0	26
	論文博士	0	0	0	0	3	0	2	0	1	1	3	2	0	1	0	1	14
比較文化学専攻	課程博士	1	1	1	1	0	4	0	2	2	0	0	0	3	3	1	1	20
	論文博士	0	1	0	0	0	0	0	1	1	2	0	2	0	0	0	1	8
	計	1	2	3	3	3	7	6	5	5	4	5	8	5	6	2	3	68

入学者選抜試験倍率

平成	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年
志願者数	22	17	23	31	23	28	18	19	8	18	15	13	10
合格者数	6(1)	7	6	8	8	7	6	7(1)	6(1)	7	4	4	5
倍　率	3.7	2.4	3.8	3.9	2.9	4	3	2.7	1.3	2.6	3.8	3.3	2

※（　）は入学辞退者で内数。

合格者出身大学院機関別累計

平成	元年~9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	計
国　立	34(7)	4(1)	4	5	5	4	5	3	4(1)	2(1)	2	2	4	3	81(10)
公　立	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	2
私　立	14(1)	2	2	(1)	3	1	1	2(1)	2	4	1	2	0	1	35(1)(2)
海　外	8(1)	0	1	1	0	2(1)	1	1	1	0	3	0	0	1	19(1)(1)
合　計	56(9)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	6(1)	7(1)	6(1)	7	4	4	5	137(12)(3)

※（　）は入学辞退者で内数。（　）内は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身（1名）者は学部卒で資格認定による。

合格者出身大学院地方別累計

平成	元年~9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	計
北海道	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
東　北	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
関　東	28(6)	3(1)	4	2(1)	3	3	2	2	1	3	2	0	2	1	56(7)(1)
中　部	〃6	2	0	0	0	1	1	1	1(1)	0	0	0	1	0	13(1)
近　畿	10(2)	1	2	3	4	2	3	2(1)	3	2	2	2	0	3	39(2)(1)
中　国	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	6
九　州	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	0	0	2(1)
海　外	8(1)	0	1	1	0	2(1)	1	1	1	0	3	0	0	1	19(1)(1)
合　計	56(9)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	6(1)	7(1)	6(1)	7	4	4	5	137(12)(3)

※（　）は入学辞退者で内数。（　）内は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身者（1名）は学部卒で資格認定による。

修了生等の就職先

●地域文化学専攻および比較文化学専攻の出身者は、以下のようなところに在職し、教育研究に活躍している。
愛知淑徳大学、愛媛大学、大阪大学、沖縄県立芸術大学、帯広大谷短期大学、鹿児島国際大学、鹿児島純心女子大学、神奈川大学、川崎医療福祉大学、関西外国語大学、神田外語大学、京都外国語大学、京都文教大学、神戸大学、神戸市外国語大学、神戸山手大学、国際教養大学、静岡大学、四天王寺大学、芝浦工業大学、成蹊大学、大阪工業大学、中部大学、筑波大学、天理大学、東京外国語大学、東北学院大学、東洋大学、長崎純心大学、新潟国際情報大学、日本大学、阪南大学、広島大学、広島市立大学、宮崎公立大学、桃山学院大学、インドネシア学術総局［インドネシア］、上海師範大学［中国］、ライデン大学［オランダ］、総合研究大学院大学、国立民族学博物館

学長あいさつ



総合研究大学院大学長　**高畑 尚之**

京都大学理学部卒、九州大学で理学博士号取得、国立遺伝学研究所研究員、助手、助教授を経て1992年本学教育研究交流センター教授に就任、2001年より副学長、2004年から2008年1月まで理事・副学長、2008年4月より現職、2003年9月に日本遺伝学会木原賞、2006年8月に日本遺伝学会学会賞木村賞を受賞、2002年The American Academy of Arts and Sciences 外国人名誉会員、2003年分子生物進化学会長に就任。

総合研究大学院大学（以下、総研大）は、学術研究の新しい流れに先導的に対応できる、視野の広い創造性豊かな研究者を養成することを目的として昭和63年10月に設立され、翌年の平成元年４月に第一期生を受入れました。それ以来21年間に、1300名をこえる博士課程修了生を国内外の大学、研究機関、産業界などに送り出しました。また、論文博士は200名近くに達しています。この間に、日本の社会は大きく変貌を遂げ、高等教育の在り方も国立大学の法人化を契機として大きな変革期に入りました。法人化とともに総研大で行った改革には、従来の博士後期課程に５年一貫制博士課程を併設したことがあります。この併設の趣旨は学生受入れ制度の弾力化にありましたが、教員の大学院教育に対する意識に大きな影響を及ぼし、教育の質の向上につながる結果となりました。

総研大は、大学共同利用機関が有する優れた研究環境と人材を活用してトップクラスの研究者を養成する、という世界でも類例のないコンセプトのもとに設立されました。大学共同利用機関とは、国内外の大学研究者が共同で利用できる研究機関のことであり、我が国に固有の仕組みであります。総研大は、大学共同利用機関を基盤（総研大では基盤機関と呼称）として発足した学部をもたない大学院だけの大学（大学院大学）ですが、この組織的な特色はそのまま教育研究の特色となっています。もっとも顕著な点は、大学院教育を各基盤機関の研究の現場において直接実施していることです。基盤機関では国際性豊かな専門的研究が行われていますが、この事実が本学の教育目標である「高い専門性」と「国際的通用性」の養成に対応しています。

本学の基盤機関に置かれた専攻は、学術的にも地理的にも分散しています。そのため、専門分野を超えた密接な連係協力のもとに、大学としての一体性を確立することと、「広い視野」を持つ人材を養成することが創設以来の大きな目標です。この目標に向かって、大学本部のある葉山キャンパスでは、専攻の自立性を尊重しつつ「分散」の総合化を図る教育研究活動を展開してきました。今後は、専攻間の教職員や学生同士あるいは修了生間でさまざまな学術交流ネットワークを構築し、一層密接な連係協力を推進する所存です。

本学に限らず各大学が行っている高等教育は、21世紀の社会を支える柱です。この公共性のために、国民は大学を支援しその成果を期待しています。とくに、科学と技術に基づく現代文明が大きな転換期にあるとき、社会に対する大学の果たすべき役割が軽減されることはないでしょう。こうした時代にあって、総研大はその建学の精神に則り、優れた教育研究活動を展開し社会に貢献できるように努めます。関係各位には、総研大の一層の発展のために引き続きご理解とご協力を賜りますように、ここに改めてお願い申し上げます。

総合研究大学院大学について

総合研究大学院大学の特徴

（総研大 2010〜2011要覧より）

特色ある博士課程教育
- 5年一貫制博士課程制度と博士後期課程制度の併用
- 基盤機関の研究現場を活用した教育プログラム
- 個の能力に即した教育プログラム
- 社会人学生・留学生受入れプログラム

高い専門性の育成
- 各専攻分野の最先端研究者による研究指導
- 多様な専門教育プログラム
- 学位取得プロセス管理プログラム／長倉研究奨励賞
- 基盤機関が有する世界最高水準の資料・施設・設備の活用

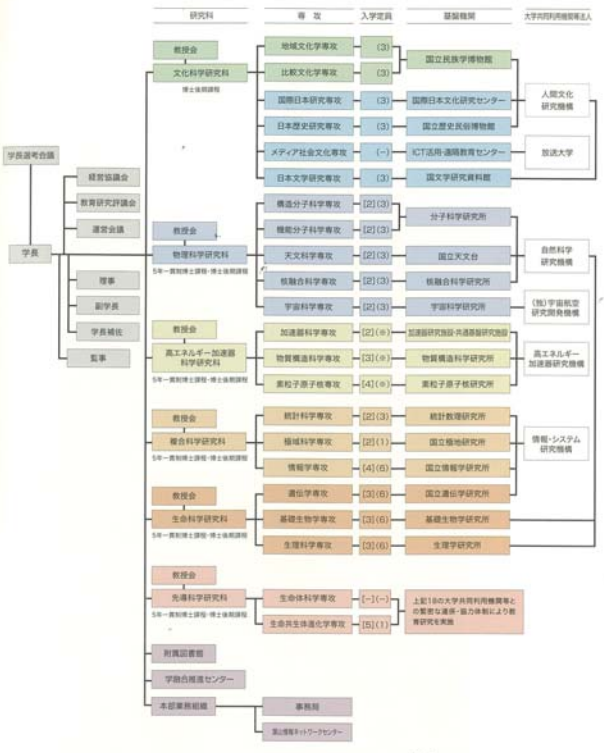
広い視野の養成
- 専攻・研究科間の共同教育研究事業
- 総合科目遠隔授業プログラム
- 全学学生セミナー
- 全学学術交流会

国際的通用性の確保
- 最先端研究技術・研究者の交流拠点における教育
- プレゼンテーション能力養成プログラム
- 海外学生派遣事業
- 国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムの活用

分野横断的・先導的学問分野の創出
- 学融合推進センターにおける主要四事業の推進
- 先導科学研究科における総合的な教育研究の実施
- 「科学と社会」プログラムの全学的な展開
- 修了生を中心とした学術交流ネットワーク

平成22年度 教育研究組織

（総研大 2010〜2011要覧より）



※若干名。
（　）は5年一貫制博士課程、
［　］は博士後期課程の入学定員です。

総入学定員／5年一貫制博士課程：41名
博士後期課程：59名

出願資格等

（1）出願資格

次のいずれかに該当する者とする。

①修士の学位又は専門職学位を有する者及び入学の前月までに取得する見込みの者

②外国において、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者

③外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者

④我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者

⑤大学を卒業し、大学、研究所等において、２年以上研究に従事した者及び入学の前月までに２年以上研究に従事することとなる見込みの者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

⑥外国において学校教育における16年の課程を修了した後、又は外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、２年以上研究に従事した者及び入学の前月までに２年以上研究に従事することとなる見込みの者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

⑦本学において、個別の入学資格審査により、修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、入学の前月末日までに24歳に達しているもの

（⑤、⑥又は⑦により出願しようとする者は、事前に本学で実施する「学力の認定」を受ける必要がある）

（2）選抜方法（文化科学研究科）

選抜は、書類選考、修士論文又はそれに代わるものの審査及び面接により行う。

①書類選考

志望研究内容等、その他研究科が提出を求めた資料について行う。

②修士論文等の審査

修士の学位を有する者及び修士課程在学中の者については修士論文、また学力認定により出願資格が認められた者については刊行された論文又は著作を審査する。

③面接

面接は書類選考・論文審査合格者についてのみ行うものとする。書類選考・論文審査の合否は面接日の約1週間前までに、入学願書に記載された連絡先に文章で個別に連絡する。

（なお、合否通知が面接日の１週間前を過ぎても到着しない場合は、総合研究大学院大学学務課学生厚生係まで問い合わせること。）

面接は、主として修士論文（修士論文のない者は発表した学術論文等又はこれまでに行った研究の要旨）の内容及び志望研究内容について行う。

◎詳細は募集要項を請求のうえ確認してください。

（3）修了要件

本研究科の専攻に３年以上在学し、所定の単位数以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び試験に合格すること。

ただし、特に優れた研究業績を上げた者については、在学期間を短縮して修了を認めることがある。

募集要項請求先

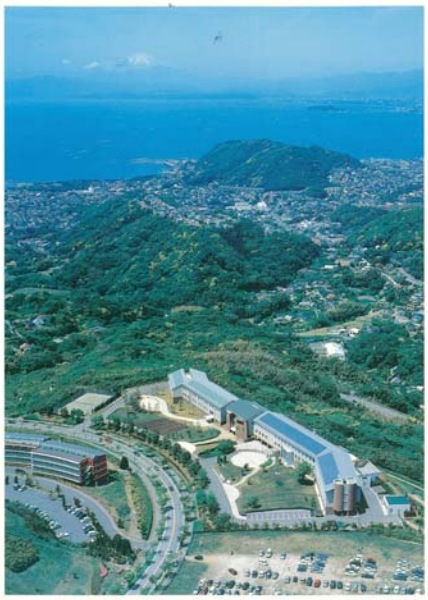
〈募集要項の請求方法〉

下記メールアドレスに、以下の必要事項を記入し、送信してください。
(1) 郵便番号 (2) 住所 (3) 氏名 (4) 電話番号
(5) 希望する募集要項→「平成23年度4月入学 文化科学研究科地域文化学専攻・比較文化学専攻（希望する募集要項の種類：1)」と記入してください。
※配布は8月下旬頃から開始します。

メールアドレス：kousei@ml.soken.ac.jp

問合せ先

総合研究大学院大学 学務課 学生厚生係
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
TEL：046-858-1525, 1526



葉山キャンパス

問合せ先

国立民族学博物館 管理部研究協力課研究協力係
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151(代表) 06-6878-8236(専攻担当) FAX 06-6878-8479
URL http://www.minpaku.ac.jp/ E-mail souken@idc.minpaku.ac.jp



●大阪モノレールで「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車徒歩約15分
自然文化園（有料区域）を通ってこられる場合、自然文化園ゲート脇の券売機で本館（国立民族学博物館）の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。また、「公園東口駅」からは、自然文化園を通行せずに来館できます。
●バスで阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅から「日本庭園前」下車徒歩約15分。また、茨木方面からは、「自然文化園・日本庭園中央」下車徒歩約7分（1時間に1本程度）。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

総合研究大学院大学 事務局
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町(湘南国際村)
電話 046-858-1500(代表) FAX 046-858-1542
URL http://www.soken.ac.jp/





携帯サイト
URL http://daigakujc.jp/sokendai/



総合研究大学院大学
文化科学研究科

地域文化学専攻
比較文化学専攻 概要'11

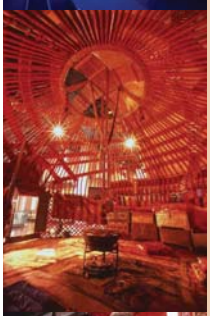
The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies

Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies
Overview '11

国立民族学博物館











目次

文化科学研究科について	1
専攻の概要	
地域文化学専攻	2
比較文化学専攻	3
地域文化学専攻授業概要	4
比較文化学専攻授業概要	6
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員	8
担当教員の専門分野	8
地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法	9
フィールドからみる世界〜学生の研究フィールド・マップ〜	10
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生	10
地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位	12
学位論文リスト	12
地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する	14
国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要	15
地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み	16
年度別学位記授与者数	16
入学者選抜試験倍率	16
合格者出身大学院機関別累計	16
合格者出身大学院地方別累計	16
修了生等の就職先	16
総合研究大学院大学について	
学長あいさつ	17
総合研究大学院大学の特徴	18
大学の教育研究組織	19
出願資格等	20
募集要項請求先	21
問合せ先	

専攻の概要

文化科学研究科について



研究科長　塚田 誠之

総合研究大学院大学、略して「総研大」は、学部をもたず大学院だけから成る国立大学として、昭和63年（1988）10月１日に開学しました。現在、全部で６つの研究科から構成されていますが、他の研究科が全て理系であるのに対して、文化科学研究科は唯一の文系研究科です。

研究科の成り立ちは、まず平成元年（1989）４月に、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻が設置されました。その後、平成4年（1992）４月に、国際日本文化研究センターを基盤とする国際日本研究専攻、平成11年（1999）４月に、国立歴史民俗博物館を基盤とする日本歴史研究専攻、平成13年（2001）４月にメディア教育開発センターを基盤とするメディア社会文化専攻、平成15年（2003）４月に、国文学研究資料館を基盤とする日本文学研究専攻が順次増設され、６専攻となりました。

国立大学の法人化に伴い、平成16年（2004）４月からは、新たに大学共同利用機関法人人間文化研究機構が設立され、４つの研究機関（国立民族学博物館、国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館）が属することとなり、独立行政法人メディア教育開発センターをあわせた５つの研究機関が基盤となりました。そして、平成21年（2009）４月に、独立行政法人メディア教育開発センターが、放送大学内に設置されたICT活用・遠隔教育センターに業務が移管され、現在に至っています。なお、総研大の他の研究科は、博士課程前期（修士）の学生を受け入れる５年一貫制を採用していますが、文化科学研究科は、博士課程後期（博士）のみから成っていることを申し添えます。次に、各専攻の概要をご紹介します。

・地域文化学専攻は、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ及びオセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とします。各々の文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としています。現地調査に基づいて個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度な専門性を持った研究者の養成を行います。

・比較文化学専攻は、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術、文化資源という６つの研究分野があります。諸民族文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としています。従来の文化人類学的方法論に加えて、情報科学や文化資源研究、隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめながら高度な専門性を持った研究者を養成します。

・国際日本研究専攻は、人文科学・社会科学・自然科学にわたる総合的な日本研究を進めるために、教育・研究指導分野として、全教員の指導による単一の「国際日本研究」を設けている点に特色があります。また、国際的な立場から日本研究の理論的・方法論的な指導を行う共通必修科目を設けています。これらの推進により、創造的で高度な専門的視野、学際性、総合性を備えた研究者を育成します。

・日本歴史研究専攻は、日本の歴史と文化について、資料に基づいた高度な総合的能力をもつ研究者、また広い視野と国際的な感覚をもち、社会に貢献できる人材の育成を目指しています。基盤機関である国立歴史民俗博物館の豊富な収蔵資料と資料情報を活用し、自然科学的な分析を行うために整備された高度な研究設備を利用しながら、歴史学・考古学・民俗学・自然科学を含めた関連諸学の専門研究者から、多様な視点の、実地調査を含む学際的な研究指導を受けることができます。

・メディア社会文化専攻は、高度情報通信社会において、メディアと通信技術と、社会・文化・人間とが、相互にどのように作用し合うかを、学際的・総合的に解明する研究と教育を行っています。メディアと人間の間のインタラクションを、関連諸科学の成果と方法を統合し、先端的なメディア技術を駆使しながら解明して、総合的メディア研究の新たな分野を生み出す、創造的研究者を養成します。

・日本文学研究専攻は、基盤機関である国文学研究資料館が集積した膨大な原典資料を活用しながら、専門的な調査・分析を進める能力と共に、一方でそうした専門性を相対化する広い視野と国際感覚を併せ持った、先進的な日本文学研究者の育成を目指しています。複数指導体制によって、日本文学ばかりでなく、文学情報・記録情報・書物交流など、関連分野の専門研究者から、多様な指導を受けることができます。

以上の６専攻（民博から２専攻）は、それぞれが日本を代表する研究機関を基盤として、すでに多くの学位取得者、専門研究者を輩出し、またそのための努力を重ねていますが、同時に、文化科学研究科全体として、学生の専門研究を支援し、また専攻同士の横断連携を推進する事業を推進しております。

地域文化学専攻

専攻長　久保 正敏



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ及びオセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とする。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的とする。本専攻においては、現地調査に基づいて個別文化の記述的研究を積極的に推進する、高度な専門性を持った研究者の養成を行う。

教育研究指導分野の概要

分　野	概　要
アジア地域文化Ⅰ	東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アジア地域文化Ⅱ	東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アフリカ地域文化	アフリカ地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
アメリカ地域文化	アメリカ地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
オセアニア地域文化	オセアニア地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究
基礎科目	地域文化学に関する基礎演習および博士論文作成のための演習
共通科目	地域文化学に関する基礎的な講義
総合教育科目	全学共通。各研究科、専攻を超えて実施する学生セミナーや総研大レクチャー（集中講義）など

地域文化学専攻授業概要（平成23年度）

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
アジア地域文化Ⅰ	東アジア文化研究	台湾原住民族の文化と歴史	准教授　野林 厚志
	東アジア文化研究特論Ⅰ	中国における文化変容と社会	准教授　横山 廣子
	東アジア文化研究特論Ⅱ		
	東アジア文化研究演習Ⅰ	中国南部諸民族の歴史民族学的研究に関する講述	教　授　塚田 誠之
	東アジア文化研究演習Ⅱ	朝鮮半島を中心とした東アジアにおける社会と文化	教　授　朝倉 敏夫
	北・中央アジア文化研究	モンゴル遊牧社会論	教　授　小長谷有紀
	北・中央アジア文化研究特論	北アジア狩猟採集文化研究	教　授　佐々木史郎
	北・中央アジア文化研究演習Ⅰ		
	北・中央アジア文化研究演習Ⅱ		
アジア地域文化Ⅱ	東南アジア文化研究	東南アジアの住文化研究	准教授　佐藤 浩司
	東南アジア文化研究特論		
	東南アジア文化研究演習Ⅰ	東南アジア諸社会における精霊信仰	教　授　田村 克己
	東南アジア文化研究演習Ⅱ		
	南アジア文化研究	インドのナショナリズムと宗教	准教授　三尾　稔
	南アジア文化研究特論	ネパールの現代政治と社会的包摂	准教授　南　真木人
	南アジア文化研究演習Ⅰ		
	南アジア文化研究演習Ⅱ		
	西アジア文化研究	中東イスラム社会における民衆文化	教　授　西尾 哲夫
	西アジア文化研究特論		
	西アジア文化研究演習Ⅰ		
	西アジア文化研究演習Ⅱ		
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ文化研究	東欧の政治文化と宗教	准教授　新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究特論	南ヨーロッパのジェンダー・セクシュアリティ	准教授　宇田川妙子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	ソシアルなるものを問う	教　授　森　明子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ		
アフリカ地域文化	アフリカ文化研究		
	アフリカ文化研究特論		
	アフリカ文化研究演習Ⅰ	アフリカ地域の生態人類学	教　授　池谷 和信
	アフリカ文化研究演習Ⅱ	排除と包摂の社会科学	教　授　竹沢尚一郎
アメリカ地域文化	アメリカ文化研究	中米文化研究	教　授　八杉 佳穂
	アメリカ文化研究特論	南アメリカのエスノヒストリー	准教授　齋藤　晃
	アメリカ文化研究演習Ⅰ		
	アメリカ文化研究演習Ⅱ		
オセアニア地域文化	オセアニア文化研究	自然災害と対峙する社会と文化	准教授　林　勲男
	オセアニア文化研究特論	オセアニアにおける土器文化の諸相	教　授　印東 道子
	オセアニア文化研究演習Ⅰ	オーストラリアにおける先住民文化	教　授　久保 正敏
	オセアニア文化研究演習Ⅱ		

比較文化学専攻

専攻長　寺田 吉孝



本専攻では、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術、文化資源という６つの研究分野がある。諸民族文化の比較研究により、各々に通底する普遍性の発見と理論的解明を目指す。従来の文化人類学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入し、新しい研究方法の開発を積極的にすすめて高度な専門性を持った研究者を養成する。

教育研究指導分野の概要

分　野	概　要
比較社会研究	諸民族の家族、親族、地域共同体、政治、法、経済等に関する通文化的・理論的研究
比較宗教研究	諸民族の呪術、祭祀、神話、宇宙観、宗教等に関する通文化的・理論的研究
比較技術研究	諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究
比較言語研究	諸民族の言語、文字、コミュニケーション、言語政策等に関する通文化的・理論的研究
比較芸術研究	諸民族の音楽、芸能、文芸、工芸、造形等に関する通文化的・理論的研究
文化資源研究	博物館人類学、博物館情報学、保存科学、および文化資源に関する理論的・実践的研究
基礎科目	比較文化学に関する基礎演習および博士論文作成のための演習
共通科目	比較文化学に関する基礎的な講義
総合教育科目	全学共通。各研究科、専攻を超えて実施する学生セミナーや総研大レクチャー（集中講義）など

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
基礎科目	地域文化学基礎演習 I	地域文化研究に関する基礎演習	准教授　新免光比呂
	地域文化学基礎演習 II	地域文化研究に関する基礎演習	教　授　竹沢尚一郎
	地域文化学演習 I	博士論文作成のための演習	准教授　南　真木人
	地域文化学演習 II	博士論文作成のための演習	准教授　横山　廣子
共通科目	地域文化学特論 I	環境人類学	教　授　池谷　和信
	地域文化学特論 II	人類学的地域研究と他分野との連携	准教授　林　勲男

※年度によって開講科目が異なる。

地域文化学専攻の人材養成目的

文化人類学・民族学の分野を中心とする諸科学に関して高度な専門知識をもち、世界の諸地域における多様な文化について、現地調査等を通じて優れた研究をおこなう研究者および高度な専門性をもって国際的見地から社会に貢献しうる人材の育成を目的とする。

地域文化学専攻の教育方針

地域文化学専攻を置く国立民族学博物館は、世界の諸地域における多様な文化に関して図書資料や標本資料、映像音響資料等のさまざまな資料と情報を集積している研究施設であり、国内外の多くの研究者の参画によって運営される大学共同利用機関である。こうした利点を活かして、質の高い研究に支えられた教育をおこなう。
また、長期の現地調査や国際会議での成果公開や、組織的研究の運営等の研究活動に必要な能力開発をめざす。
研究指導は指導教員を中心としつつ、学生ごとにその研究テーマに応じたアドバイザリーグループを構成して、専攻に属する教員全体で指導する体制をとる。

地域文化学専攻の求める学生像

世界の多様な地域社会や地域文化について広い関心をもち、とりわけ文化人類学・民族学の基礎研究に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。





比較文化学専攻授業概要（平成23年度）

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
比較社会研究	比較社会研究 I	コミュニティの人類学	准教授　平井京之介
	比較社会研究 II	中国の社会人類学 ―欧米・日本・中国のパースペクティブ	教　授　韓　敏
	比較社会研究特論 I		
	比較社会研究特論 II	社会・文化に関する人類学的アプローチ	教　授　岸上　伸啓
	比較社会研究演習 I	宗教とナショナリズム	教　授　杉本　良男
	比較社会研究演習 II	文化人類学の研究動向と研究課題	教　授　岸上　伸啓
	比較社会研究演習 III	社会と経済に関する人類学的アプローチ	准教授　鈴木　紀
比較宗教研究	比較宗教研究	呪術と科学の文化人類学	准教授　白川　千尋
	比較宗教研究特論	日本宗教と日系宗教の研究	教　授　中牧　弘允
	比較宗教研究演習 I	アメリカ合衆国におけるリフォーム運動とライフスタイル	教　授　鈴木　七美
	比較宗教研究演習 II		
比較技術研究	比較技術研究 I		
	比較技術研究 II	物質文化研究からみた複合社会形成	教　授　関　雄二
	比較技術研究特論	「みんぱく」のコレクションと検索システムを活用した民族技術の比較研究	教　授　近藤　雅樹
	比較技術研究演習 I	アジアと太平洋地域における民族植物学と技術	准教授　Matthews, Peter J.
	比較技術研究演習 II	手織機の型式と機織り技術	教　授　吉本　忍
比較言語研究	比較言語研究	フィールド言語学の基礎	准教授　菊澤　律子
	比較言語研究特論		
	比較言語研究演習 I	少数言語のとらえ方	教　授　庄司　博史
	比較言語研究演習 II	オーストロネシア比較言語学	准教授　菊澤　律子
比較芸術研究	比較芸術研究 I	無形文化遺産の映像記録	准教授　福岡　正太
	比較芸術研究 II	日常的・実践的な身体技法としての芸能伝承論	教　授　笹原　亮二
	比較芸術研究特論		
	比較芸術研究演習 I	北米・ハワイのアジア系音楽	教　授　寺田　吉孝
	比較芸術研究演習 II		
文化資源研究	文化資源研究	博物館における資料管理	教　授　園田　直子
	文化資源研究特論		
	文化資源研究演習 I		
	文化資源研究演習 II	博物館情報学	准教授　山本　泰則
	博物館研究	博物館の歴史と政治性	准教授　川口　幸也
	博物館研究特論	博物館人類学	教　授　吉田　憲司
	博物館研究演習 I	文化人類学・民族学博物館における展示と活用	教　授　小林　繁樹
	博物館研究演習 II		

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員
基礎科目	比較文化学基礎演習 I	比較文化研究に関する基礎演習	教　授　近藤　雅樹
	比較文化学基礎演習 II	比較文化研究に関する基礎演習	准教授　川口　幸也
	比較文化学演習 I	博士論文作成のための演習	教　授　吉田　憲司
	比較文化学演習 II	博士論文作成のための演習	教　授　中牧　弘允
共通科目	比較文化学特論 I	移民言語と地域少数言語 ―国家と政策とのかかわりから	教　授　庄司　博史
	比較文化学特論 II	観光人類学	教　授　韓　敏

※年度によって開講科目が異なる。

比較文化学専攻の人材養成目的

文化と社会の諸問題や文化の表象等に関して、現地調査と比較研究にもとづく幅広い専門知識をもつ研究者であり、なおかつ、その高度な専門性をもって社会的な実践をおこないうる人材の育成を目標とする。

比較文化学専攻の教育方針

比較文化学専攻を置く国立民族学博物館は、国内外の大学や博物館等の諸研究機関とともに大規模な調査研究を推進するために設立された大学共同利用機関である。その一方で、展示や講演会、一般社会人を対象としたゼミナール等の活動を通じて広く社会と連携している「開かれた博物館」としての機能も有している。
世界各地の諸民族に関する生活のさまざまな場面で必要とされる標本資料の他にも映像音響記録資料・文献図書資料等を膨大に蓄積している利点を活かし、理論と実践とに結びついた研究に支えられた教育をおこなって、学術論文や学会発表はもとより、研究成果の社会還元に不可欠な情報発信能力を練磨する。
学生個々の研究テーマに応じたアドバイザリーグループを構成し、切磋琢磨する環境の中で、指導教員を中心に、専攻に所属する教員全体が指導にあたっている。

比較文化学専攻の求める学生像

人間の社会や文化について広い関心を抱き、とりわけ学問的な理論化やその社会的な応用に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。





地域文化学専攻・比較文化学専攻の教員

現員（平成23年4月1日現在）

区分	教授	准教授	計	備考
地域文化学専攻	13	10	23	基盤機関の長（民博館長）を含む
比較文化学専攻	14	8	22	
計	27	18	45	

担当教員の専門分野（五十音順）

地域文化学専攻

朝倉 敏夫（あさくら としお）
（韓国社会研究）

池谷 和信（いけや かずのぶ）
（環境人類学・南部アフリカ研究）

印東 道子（いんとう みちこ）
（オセアニア考古学）

宇田川 妙子（うだがわ たえこ）
（南ヨーロッパ研究・性研究）

久保 正敏（くぼ まさとし）
（民族情報学・メディア文化論・コンピュータ民族学・オーストラリア研究）

小長谷 有紀（こながや ゆき）
（牧畜文化論・モンゴル研究）

齋藤 晃（さいとう あきら）
（ラテンアメリカ歴史人類学）

佐々木 史郎（ささき しろう）
（文化人類学・北アジア研究）

佐藤 浩司（さとう こうじ）
（民族建築学）

新免 光比呂（しんめん みつひろ）
（宗教学・東欧研究）

須藤 健一（すどう けんいち）
（社会人類学）

竹沢 尚一郎（たけざわ しょういちろう）
（宗教人類学・西アフリカ研究）

田村 克己（たむら かつみ）
（東南アジア文化人類学）

塚田 誠之（つかだ しげゆき）
（歴史民族学・中国研究）

西尾 哲夫（にしお てつお）
（認識言語学・アラブ研究）

野林 厚志（のばやし あつし）
（民族考古学・台湾研究）

林 勲男（はやし いさお）
（社会人類学・オセアニア研究）

三尾 稔（みお みのる）
（文化人類学・南アジア研究）

三島 禎子（みしま ていこ）
（文化人類学・西アフリカ研究）

南 真木人（みなみ まきと）
（生態人類学・南アジア研究）

森 明子（もり あきこ）
（中部ヨーロッパ文化人類学）

八杉 佳穂（やすぎ よしほ）
（言語人類学・中米文化史）

横山 廣子（よこやま ひろこ）
（文化人類学・中国社会研究）

比較文化学専攻

川口 幸也（かわぐち ゆきや）
（アフリカ同時代美術・展示表象論）

韓 敏（ハン ミン）
（社会人類学・中国研究）

菊澤 律子（きくさわ りつこ）
（言語学・オーストロネシア諸語）

岸上 伸啓（きしがみ のぶひろ）
（文化人類学・北方文化研究）

小林 繁樹（こばやし しげき）
（文化人類学・博物館学）

近藤 雅樹（こんどう まさき）
（民俗学・民具研究）

笹原 亮二（ささはら りょうじ）
（民俗学・民俗芸能研究）

庄司 博史（しょうじ ひろし）
（言語学・言語政策論）

白川 千尋（しらかわ ちひろ）
（文化人類学・開発人類学）

杉本 良男（すぎもと よしお）
（社会人類学・南アジア研究）

鈴木 七美（すずき ななみ）
（文化人類学・医療文化、ライフデザイン研究・欧米医療社会史研究）

鈴木 紀（すずき もとい）
（開発人類学・ラテンアメリカ文化論）

關 雄二（せき ゆうじ）
（アンデス考古学・ラテンアメリカ研究）

園田 直子（そのだ なおこ）
（保存科学）

寺田 吉孝（てらだ よしたか）
（民族音楽学・インド研究）

中牧 弘允（なかまき ひろちか）
（宗教人類学・経営人類学）

平井 京之介（ひらい きょうのすけ）
（経済人類学・東南アジア研究）

福岡 正太（ふくおか しょうた）
（民族音楽学・東南アジア研究）

Matthews, Peter J.
（先史学・民族植物学）

山本 泰則（やまもと やすのり）
（博物館情報学）

吉田 憲司（よしだ けんじ）
（博物館人類学・アフリカ研究）

吉本 忍（よしもと しのぶ）
（民族工芸論・民族技術論）

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育研究の方法

教員が地域文化学・比較文化学両専攻に分かれて教育研究の指導にあたっています。

教育研究の方法は、個別の教員による授業や研究指導と、複数の教員の指導のもとに行われる共通のゼミナールからなっています。

共通のゼミナールには、１年生を対象とする「基礎演習Ⅰ」および「基礎演習Ⅱ」（通称「１年生ゼミナール」）と、博士論文作成の指導を内容とする「演習Ⅰ」および「演習Ⅱ」（通称「論文ゼミナール」）があります。

「１年生ゼミナール」は学生がそれぞれの研究計画を発表する「研究計画シリーズ」、各教員が交代で専門分野の講義をおこない、それに基づいて議論を進める「テーマ・シリーズ」、１年の教育研究課程を受けた学生があらためて研究計画を発表する「リサーチプロポーザル・シリーズ」からなっています。

平成13年度からは、文化人類学・民族学の視点や方法論を批判的に摂取することを目的として、共通科目が開講されています。

学生はおおむね１年次において現地調査（フィールドワーク）の準備をおこない、２年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミナール」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

両専攻の教育研究の目的

① 独創的な文化人類学・民族学の研究

② 長期のフィールドワークで得られた資料にもとづく学位論文の作成

③ 広い視野をもった、専門的教養を養う



国立民族学博物館・全景



地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。又専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）
比較文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）

学位論文リスト

課程博士

数学的手法を用いた文化分析の方法について	小島　三弘（比較）	[H4.3.31 学術]
シドニーにおける都市アボリジニの研究　伝統と民族の創出	鈴木　清史（比較）	[H6.3.24 文学]
オルドス・モンゴル族の社会構造―ヤスの機能とその歴史的変容―	楊　　海英（地域）	[H6.9.20 文学]
ペルーにおける山の神信仰の現在性―アンデスの宗教的世界のダイナミズム―	細谷　広美（地域）	[H7.3.23 文学]
ビルマにおけるウェイザー信仰の研究	士佐　桂子（比較）	[H7.3.23 文学]
韓国社会の動態と「両班化」 ―忠清北道阿房都における門中と儒式儀礼の検討を通して	岡田　浩樹（地域）	[H8.3.21 文学]
中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究	曹　　建南（地域）	[H8.3.21 文学]
歌に表象される村落意識―奄美における「シマの歌」の研究―	中原ゆかり（比較）	[H8.3.21 文学]
四合院家屋の文化人類学的研究―人間と自然との相互作用の視点から	杉山　京子（地域）	[H10.3.24 文学]
モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究 ―アルタイ・ハイラハ叙事詩を事例として―	藤井　麻湖（地域）	[H10.3.24 文学]
カストム・メレシン　―ヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および民間医療観の現代的位相	白川　千尋（地域）	[H10.3.24 文学]
韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究	李　　善愛（比較）	[H10.3.24 文学]
東南中国の漢族社会組織とその変容―閩南農村社会における宗族の研究	潘　　宏立（比較）	[H10.3.24 文学]
芸の伝承―ジャワ島・チルボンの仮面舞踏を中心に	福岡まどか（比較）	[H10.3.24 文学]
Overt First and Second Person－Designating Terms in Japanese Discourse ―A Pragmatic Perspective―	Riikka Lansisalmi（比較）	[H10.3.24 文学]
「二重の窮乏」下の平等理念―現代世界とキリバス南部環礁の社会生活―	風間　計博（地域）	[H10.9.30 文学]
建築と文化・社会との相互作用―中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象として―	栗原　伸治（地域）	[H10.9.30 学術]
カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容―宗教共同体と開発の視点から―	子島　　進（地域）	[H11.3.24 文学]
地域主義運動における言語と知識人―エストニア南部ヴォル地方の事例から―	寒水　明子（地域）	[H11.3.24 学術]
英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究 ―文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相―	塩路　有子（比較）	[H12.9.29 文学]
北タイ・アカの家屋に関する研究―家屋の形式とその変化への視点から―	清水　郁郎（地域）	[H13.3.23 文学]
韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化 ―忠清南道公州市を中心として活動する薬草商人を例に―	林　　史樹（地域）	[H13.3.23 文学]
現代インドネシアにおけるジャワ大衆演劇クトプラの研究	青木　武信（比較）	[H13.3.23 文学]
南ラオス村落社会における政治過程の研究―ンゲの村における「連帯」と闘争―	中田　友子（地域）	[H14.3.22 文学]
20世紀前半のボリビアにおける先住民教育と植民地主義	吉江　貴文（地域）	[H14.3.22 文学]
カメルーンにおける「商売の民」バミレケの都市人類学的研究	野元　美佐（比較）	[H14.3.22 文学]
タイ式医療の構築とタイ・マッサージ―社会的文脈による権威的知識の多様性―	飯田　淳子（地域）	[H15.3.24 文学]
インドネシア・スンダの食文化―言語人類学的観点から―	阿良田麻里子（地域）	[H17.3.24 文学]
韓国の仮面劇「固城五広大」の伝承と演戯者―解放後の韓国社会における民俗芸能の変遷から―	高　　正子（地域）	[H17.3.24 文学]
帰還と離散のはざまで―ウクライナ一地方都市におけるユダヤ人巡礼の民族誌―	赤尾　光春（地域）	[H17.9.30 学術]
イスラエルにおけるアラブ人キリスト教徒のアイデンティティの様態 ―ガリラヤ地方・メルキト派カトリック信徒の事例研究―	菅瀬　晶子（地域）	[H18.3.24 文学]
トンガ王国の土地制度―グローバル化のなかの伝統―	森本　利恵（地域）	[H18.3.24 文学]
パラライカの鳴り響く空間：1917～48年における社会主義の文化の生成	大家（柚木）かおり（地域）	[H18.3.24 学術]
フィジーにおける植民地主義とインド系移民社会―砂糖キビ栽培地域の村落社会における文化の動態―	村田　晶子（比較）	[H18.9.29 文学]
上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的研究	飯田有佳子（地域）	[H19.3.23 文学]
「護り」の身体技法に関する映像人類学研究―インドネシア・ミナンカバウの事例から―	村尾　静二（比較）	[H19.3.23 文学]
離散と故郷―ヨルダンのバレスチナ系住民にみられる帰属意識とナショナリズム―	錦田　愛子（地域）	[H19.3.23 文学]
「子ども域」の文化人類学的研究―バングラデシュ農村社会の子ども―	南出　和余（比較）	[H19.3.23 文学]
参加型開発を通した女性の自己変容過程に関する人類学的研究 ―北インド農村社会を事例として―	菅野美佐子（比較）	[H19.9.28 文学]
「場」と「パフォーマンス」に関する人類学的研究 ―トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として―	米山　知子（比較）	[H19.9.28 文学]
フェラインの民族誌―ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション―	山田　香織（地域）	[H20.3.19 文学]
水上人と呼ばれる人々―広東珠江デルタの漢族エスニシティとその変容―	長沼さやか（地域）	[H20.3.19 文学]
在米コリアンのサンフランシスコ日本町―マルチカルチャーのエスニックタウン―	小谷　幸子（比較）	[H20.3.19 文学]
インド農村社会における不妊経験の人類学的研究	松尾　瑞穂（比較）	[H20.9.30 文学]
韓国における老人の食―老人福祉施設を中心に―	守屋亜紀子（地域）	[H21.3.24 文学]
日本の先史時代における植物性食料の加工と利用：残存デンプン分析法の理論と応用	渋谷　綾子（比較）	[H22.3.24 文学]
農業技術改善の民俗誌―紀ノ川下流域村落の一七～二〇世紀前半における動向の分析	加藤　幸治（比較）	[H22.9.30文学]
オーストラリア先住民ヨルタ・ヨルタの環境管理のための先住民運動に関する文化人類学的研究	友永　雄吾（地域）	[H23.3.24文学]
現代タイ社会における開発と僧侶―僧侶による社会貢献とネットワーク形成に焦点をあてて―	岡部真由美（地域）	[H23.3.24文学]
現代東南中国における宗親会の民族誌的研究―国家との関係を中心として	陳　　夏晗（比較）	[H23.3.24文学]

論文博士

An Areal―Typological Study of Middle American Indian Languages	八杉　佳穂	[H6.3.30 文学]
農村女性からみたトルコの「近代化」―世俗主義、イスラーム、女性の相互関係	中山　紀子	[H9.3.24 文学]
南タイにおける実践宗教―ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から―	西井　涼子	[H9.3.24 文学]
セネガルの公権力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究	小川　　了	[H9.3.24 文学]
メラネシアの政治的リーダーシップと開発―ソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐって―	関根　久雄	[H10.9.30 文学]
南インドの農村におけるカースト内関係としての親族―コンゴ・ヴェッラーラの事例研究―	杉本　星子	[H10.9.30 文学]
アイヌ民族における神送りの研究―沙流川流域を中心に―	萱野　　茂	[H13.3.23 学術]
低湿地立地の遺跡にみる縄文時代本州西部地域の生業活動 ―縄文時代早期末から中期初頭における若狭湾沿岸と琵琶湖周辺地域の動物考古学的考察―	内山　純蔵	[H14.3.22 文学]
考古学における数量化と数理的手法の研究	及川　昭文	[H14.3.22 学術]
総管信仰―近世江南農村社会と民間宗教―	濱島　敦俊	[H14.9.30 学術]
中国の食事方法―歴史人類学的考察―	西澤　治彦	[H15.3.24 文学]
台湾原住民のイノシシ（Sus scrofa taivanus）狩猟の民族考古学的研究： 動物遺存体研究の方法論構築にむけて	野林　厚志	[H15.3.24 学術]
The Transformation and Social Functions of the sNang zhig Family and its Monastery ―An Ethnographic Description of the Bon Tradition in Amdo	才譲　　太	[H16.9.30 学術]
利用者の視点にたった博物館の理念と活動様式の研究	布谷　知夫	[H16.9.30 文学]
トビニタイ文化の集団構成と生計戦略―北海道東部における「中世アイヌ社会」成立に至る一階梯―	大西　秀之	[H17.3.24 文学]
アットゥシの歴史に関する基礎的研究―アイヌ伝統文化の再検討の試みとして―	本田　優子	[H17.9.30 文学]
カナダ・イヌイットの食物分配に関する文化人類学的研究―先住民社会の変容と再生産―	岸上　伸啓	[H18.3.24 文学]
タイ中部農村における相互行為の民族誌的研究	高城　　玲	[H18.3.24 文学]
東ネパールにおける羊飼いの生産活動と放牧地をめぐる社会関係	渡辺　和之	[H18.3.24 文学]
「アイヌ風俗画」の研究―近世北海道におけるアイヌと美術	新明　英仁	[H19.9.28 文学]
国際線客室乗務員の接客業務と勤務体制―仕事の人類学的研究―	八巻　惠子	[H21.9.30 文学]
シャーマニズムによるエスニシティの探求―ポスト社会主義期におけるモンゴル・ブリヤートの事例を中心として	島村　一平	[H22.3.24 文学]
活用される職祖伝承―近・現代日本における木工挽物の担い手と木地屋「根元地」―	木村　裕樹	[H22.9.30文学]
先住民学習の理論と実践―ポストコロニアル人類学の活用―	中山　京子	[H22.9.30学術]
スリランカにおけるエステート・タミルのアイデンティティと「ジャーティヤ」をめぐる人類学的研究	鈴木　晋介	[H23.3.24文学]

卒業生の声

広島大学総合博物館　学芸職員

渋谷 綾子（平成22年3月学位取得）

私が総研大・民博で過ごした５年間は、研究環境に非常に恵まれていた。一番の理由は、研究の実施に必要な実験機器類を自由に利用することができたことである。私の研究テーマは、日本の旧石器時代や縄文時代の植物食について、世界各地の考古学調査で近年導入された残存デンプン粒分析を用いて解明することである。研究を進めるためには生物顕微鏡や顕微鏡カメラなどの機器類やクリーンルームなどの設備を必要とした。これらは私個人で導入することは非常に難しいが、幸いにも、民博の動植物標本資料室にある機器類を利用する許可が得られたため、分析や実験を着実に進めていくことができた。

また院生ゼミでは、研究テーマや分野の異なる院生たち、教授陣を相手に研究発表を行うため、他分野の研究者に対して自分の研究成果を理解してもらうための訓練を積むことができた。これは、学会や研究会での研究発表において非常に役に立った。

このような恵まれた環境が、学位論文として研究成果をまとめる基盤となったと思う。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　助教

錦田 愛子（平成19年3月学位取得）

総研大の学生が学ぶ国立民族学博物館は、人類学を専門とする研究者の関西における一大拠点である。指導を頂ける教授陣は、自身の研究においても高い水準を誇られ、その厳しい目を私たち学生にも容赦なく向けて下さる。試験の場となる論文ゼミでは、先生方と学生の双方から鋭い質問が投げかけられ、本格的な議論を味わうことができる。これらの経験は、私が卒業後に研究者としてさまざまな議論の場に参加する上で、大きく役に立っていると思う。

他の地域を研究する学生との雑談や、研究発表、エスニック・パーティーへの参加などは、自分の専門地域以外について見識を深め、理解の糸口をつかむ格好の機会だ。これらの耳学問は、単に興味深いばかりでなく、比較の視野をも開いてくれる。総研大の学生は、必ずしももともと人類学を専門とする人ばかりではないため、基礎を理解するための文献講読や情報交換も、希望次第では可能である。

大学院もひとつのフィールドであり、努力次第でさまざまな収穫を得ることができる。新しく入学される皆さんには、自分なりの総研大ライフを開拓していって欲しい。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する



国立民族学博物館長　須藤 健一

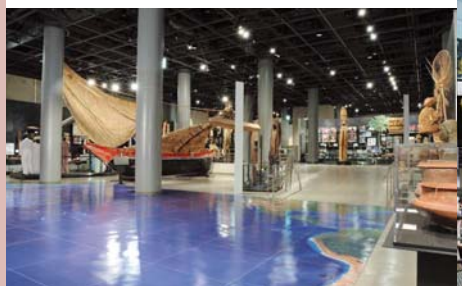
国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館をそなえた世界でもユニークな文化人類学・民族学の研究所です。60名の教員たちは、「地の先へ。知の奥へ。」をモットーに世界各地で、グローバリゼーションの動きを受容し、あるいはそれに抗いながら独自の社会と固有の文化を維持ないし創造している人びとの営みを研究しています。一方で、世界の諸民族の生活や考えをより深く理解するために民族資料や映像音響資料などの収集につとめ、「もの」をとおして文化を表現する展示活動も行っています。

文化人類学・民族学は、現地の人びとと生活をともにしながら日常生活から地球規模の影響をも視野に入れて人間の社会と文化を現場で研究する学問です。異文化に生きる人びとを理解するためには幅広い視野、柔軟な思考と豊かな想像力が求められます。そして、独創的な着想から収集したデータを分析して論理的に記述する手法が大事です。

みんぱくには、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置され、文化人類学をはじめ言語学、宗教学、生態学、先史学、民族音楽学そして博物館学などを研究する優秀な教授陣がいます。そのうえ、民族標本、文献図書や映像音響などの豊富な資料を所蔵しており、研究環境の点ではわが国随一の大学院であるといえます。

私たちは、皆さんが人類学の研究課題を追求し、博士論文を書きあげて一人前の研究者として社会に飛び立つことを支援するのを楽しみにしています。

左：オセアニア展示
右上：アメリカ展示
右下：音楽展示







国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要

国立民族学博物館（民博）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。民博は、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究を進め、学術情報を集積する一方、その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することを使命としています。1989年には、総合研究大学院大学の文化科学研究科地域文化学専攻と比較文化学専攻が民博を基盤機関として設置され、民博での博士後期課程の教育が開始されました。

以上のように、国立民族学博物館は「博物館をもつ研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。民博の展示は、常設展示と特別展示とで構成されており、このうち常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示は、特定のテーマに焦点を当て、年に数回、期間を限って開催されています。

民博は、2004年４月より、国立大学と足並みをそろえて、法人組織となりました。法人の正式名称は、「大学共同利用機関法人人間文化研究機構」ですが、民博は、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所とともに、その一員として再出発しました。その後、2009年10月には６番目の大学共同利用機関として新たに国立国語研究所が設置されました。また民博の研究部は、３研究部（民族社会、民族文化、先端人類科学）２センター（研究戦略センター、文化資源研究センター）体制に組織替えがなされました。研究活動の機動性を高めるとともに、その成果をより広くわかりやすく社会に伝えていくための措置です。文化人類学・民族学を基礎としつつ、機関と分野の別を超えて、人間文化の総合的理解に至ろうとする、民博の新たな活動が始まっているのです。

所蔵民族学資料（平成23年4月1日現在）

標本資料		映像音響資料		文献図書資料	
海外資料	174,194点	映像資料	7,805点	日本語図書	251,490冊
国内資料	102,113点	音響資料	62,651点	外国語図書	379,448冊
計	276,307点	計	70,456点	計	630,938冊
				日本語雑誌	9,806種
				外国語雑誌	6,610種
				計	16,416種

地域文化学専攻・比較文化学専攻の歩み

昭和63年10月　総合研究大学院大学開学【全学】
平成 元年 4月　文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）設置、学生受入、授業開始
平成 7年 2月　葉山キャンパス本部共通棟が竣工、この年から入学式を同キャンパスにて総研大全体で挙行【全学】
平成 11年 4月　先導科学研究科学生受入（地域文化学・比較文化学両専攻併任教官の一部、先導科学研究科の併任に）【全学】
平成 12年10月　「オープンキャンパス」開催（年１回）
平成 13年 4月　地域文化学・比較文化学両専攻の同窓生ネットワーク発足
平成 17年 4月　関西４大学との学生交流に関する協定を締結、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、大阪大学大学院人間科学研究科、神戸大学大学院総合人間科学研究科（平成19年度より国際文化学研究科および人間発達環境学研究科に改組）、および京都文教大学大学院文化人類学研究科との単位互換授業の開講開始

年度別学位授与者数

	平　成	3年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	12年	13年	14年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	計
地域文化学専攻	課程博士	0	0	2	2	0	3	4	2	1	1	2	4	2	2	1	0	2	28
	論文博士	0	0	0	0	3	0	2	0	1	1	3	2	0	1	0	1	0	14
比較文化学専攻	課程博士	1	1	1	1	0	4	0	2	2	0	0	0	3	3	1	1	2	22
	論文博士	0	1	0	0	0	0	0	1	1	2	0	2	0	0	0	1	3	11
	計	1	2	3	3	3	7	6	5	5	4	5	8	5	6	2	3	7	75

入学者選抜試験倍率

平　成	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年
志願者数	22	17	23	31	23	28	18	19	8	18	15	13	10	10
合格者数	6(1)	7	6	8	8	7	6	7(1)	6(1)	7	4	4	5	3(1)
倍　率	3.7	2.4	3.8	3.9	2.9	4	3	2.7	1.3	2.6	3.8	3.3	2	2.5

※（　）は入学辞退者で内数。

合格者出身大学院機関別累計

平　成	元年~9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	計
国　立	34(7)	4(1)	4	5	5	4	5	3	4(1)	2(1)	2	2	4	3	2(1)	83(11)
公　立	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
私　立	14(1)	2	2	〈1〉	3	1	1	2〈1〉	2	4	1	2	0	1	1	36(1)〈2〉
海　外	8(1)	0	1	1	0	2〈1〉	1	1	1	0	3	0	0	1	0	19(1)〈1〉
合　計	56(9)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	6(1)	7(1)	6(1)	7	4	4	5	3(1)	140(13)〈3〉

※（　）は入学辞退者で内数。〈　〉内は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身（1名）者は学部卒で資格認定による。

合格者出身大学院地方別累計

平　成	元年~9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	計
北海道	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
東　北	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
関　東	28(6)	3(1)	4	2(1)	3	3	2	2	1	3	2	0	2	1	0	56(7)〈1〉
中　部	6	2	0	0	0	1	1	1	1(1)	0	0	0	1	0	0	13(1)
近　畿	10(2)	1	2	3	4	2	3	2(1)	3	2	2	2	0	3	2(1)	41(3)〈1〉
中　国	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	6
九　州	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1)	0	0	0	0	1	3(1)
海　外	8(1)	0	1	1	0	2〈1〉	1	1	1	0	3	0	0	1	0	19(1)〈1〉
合　計	56(9)	6(1)	7	6(1)	8	8(1)	7	6(1)	7(1)	6(1)	7	4	4	5	3(1)	140(13)〈3〉

※（　）は入学辞退者で内数。〈　〉内は重複で外数。平成2年合格者のうち海外機関出身者（1名）は学部卒で資格認定による。

修了生等の就職先

●地域文化学専攻および比較文化学専攻の出身者は、以下のようなところに在職し、教育研究に活躍している。

愛知淑徳大学、愛媛大学、大阪大学、大谷大学、沖縄県立芸術大学、帯広大谷短期大学、鹿児島国際大学、鹿児島純心女子大学、神奈川大学、川崎医療福祉大学、関西外国語大学、神田外語大学、京都外国語大学、京都文教大学、神戸大学、神戸市外国語大学、神戸山手大学、滋賀県立大学、静岡大学、四天王寺大学、芝浦工業大学、成蹊大学、大同工業大学、中部大学、筑波大学、天理大学、東京外国語大学、東北学院大学、東洋大学、長崎純心大学、新潟国際情報大学、日本大学、阪南大学、広島大学、広島市立大学、宮崎公立大学、桃山学院大学、インドネシア学術総局［インドネシア］、上海師範大学［中国］、ライデン大学［オランダ］、北京大学［中国］、総合研究大学院大学、国立民族学博物館

学長あいさつ



総合研究大学院大学長　高畑 尚之

京都大学理学部卒、九州大学で理学博士号取得。国立遺伝学研究所研究員、助手、助教授を経て1992年本学教育研究交流センター教授に就任。2001年より副学長。2004年から2008年3月まで理事・副学長。2008年4月より現職。2003年9月に日本遺伝学会木原賞、2006年8月に日本進化学会学会賞木村賞を受賞。2002年The American Academy of Arts and Sciences 外国人名誉会員、2003年分子生物進化学会長に就任。

総合研究大学院大学（以下、総研大）は、大学共同利用機関が有する優れた人材と研究環境を活用して博士課程の教育を行い一流の研究者を養成する、という世界でも類例のないコンセプトのもとに昭和63年10月に設立されました。大学共同利用機関とは、各研究分野において日本全国の大学が共同に利用できる研究所のことです。各大学共同利用機関はそれぞれの研究分野の中核拠点としての機能、また研究者コミュニティの取りまとめ役としての機能や国際的な共同研究を推進する機能を果たしています。

総研大はこのような大学共同利用機関を研究科・専攻の基盤機関とする、学部をもたない大学院だけの大学（独立大学院大学）です。この独特の制度はそのまま総研大教育の特色となっています。もっとも顕著な点は、大学院教育が各基盤機関の研究の現場において直接実施されることです。基盤機関では専門性の高い国際的な研究活動が実施されていますが、それを活用して「高い専門性」と「国際的な通用性」を養成することを目指しています。

一方、総研大の基盤機関あるいは専攻全体をみると、文化、歴史、情報、生命、エネルギー、物質、宇宙など実に多様な分野の研究が行われています。したがって、この学術的な多様性を活用して、「広い視野」を持つ人材を養成することがもう１つの大きな教育目標です。広い視野の養成には、必ずしも複数の専門領域に精通する必要はありません。しかし、自分の領域とは異なる領域における問題や課題は何かを理解することが必要です。逆に、自らの専門領域については真摯に、かつ厳密に理解してもらわねばなりません。したがって、視野の広さとは、自分の専門的な知識を他の知識に結合することであり、知識全体の中に位置づける能力のことなのです。

学生のみなさんには、こうした総研大の制度的特色や教育目標のもとに、機会を追求して大きな課題に挑戦されることを願っています。容易に成功しそうなものを選ぶようでは、大きな成果は得られません。そのとき大学の果たすべき役割は、学生一人ひとりの強みがより大きく展開できるように指導・支援し、学んだことがやがて人生や仕事で使えるようにすることにあります。

本学に限らず各大学が行っている高等教育は、「知識（基盤）社会」を支える柱です。しかし、知識社会への移行はようやく広く認識されるようになってきたところであり、多くの分野でこれまでとは全く異なった考えや仕組みを創造しなくてはならない状況にあります。大学院教育に関してもその役割と機能を見直し、責任を負うべき成果を明らかにしなければなりません。総研大においては、人材養成目的の検証、基礎教育のあり方、他機関との連携などさまざまな課題や期待があります。社会や大学のこうした移行時に、関係各位には総研大の一層の発展のためにご理解とご協力を賜りますようにお願い申し上げます。

総合研究大学院大学の特徴

（総研大 2011～2012要覧より）

特色ある博士課程教育

- 5年一貫制博士課程制度と博士後期課程制度の併用
- 基盤機関の研究現場を活用した教育プログラム
- 個の能力に即した教育プログラム
- 社会人学生・留学生受入れプログラム

高い専門性の育成

- 各専攻分野の最先端研究者による研究指導
- 多様な専門教育プログラム
- 学位取得プロセス管理プログラム／長倉研究奨励賞
- 基盤機関が有する世界最高水準の資料・施設・設備の活用

広い視野の養成

- 専攻・研究科間の共同教育研究事業
- 総合科目遠隔授業プログラム
- 全学学生セミナー
- 全学学術交流会

国際的通用性の確保

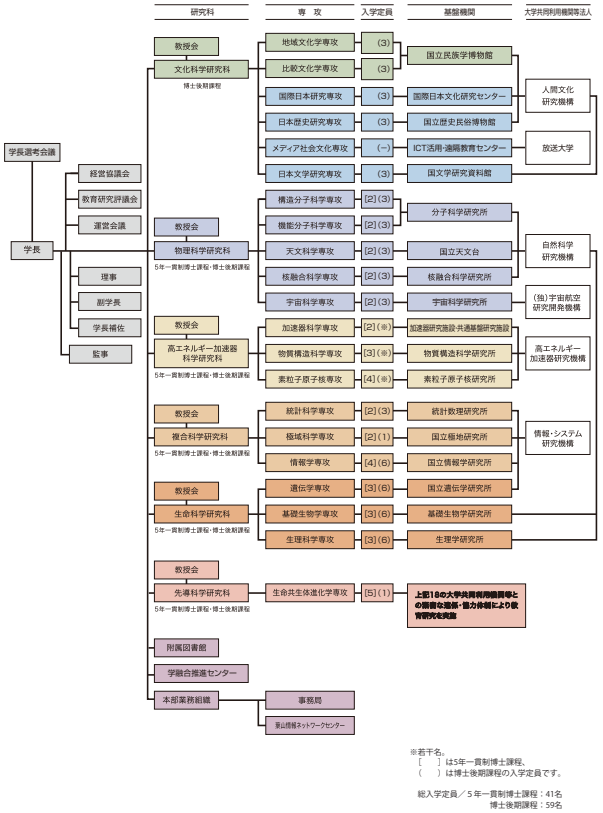
- 最先端研究技術・研究者の交流拠点における教育
- プレゼンテーション能力養成プログラム
- 海外学生派遣事業
- 国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムの活用

分野横断的・先導的学問分野の創出

- 学融合推進センターにおける主要四事業の推進
- 先導科学研究科における総合的な教育研究の実施
- 「科学と社会」プログラムの全学的な展開
- 修了生を中心とした学術交流ネットワーク

平成23年度 教育研究組織

（総研大 2011～2012要覧より）



※若干名。
[　] は5年一貫制博士課程、
（　）は博士後期課程の入学定員です。

総入学定員／5年一貫制博士課程：41名
博士後期課程：59名

出願資格等

（1）出願資格

次のいずれかに該当する者とする。

①修士の学位又は専門職学位を有する者及び入学の前月までに取得する見込みの者

②外国において、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者

③外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者

④我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者

⑤学校教育法施行規則第156条第４号の規定により、国際連合大学の課程を修了し、修士の学位に相当する学位を授与された者

⑥大学を卒業し、大学、研究所等において、２年以上研究に従事した者及び入学の前月までに２年以上研究に従事することとなる見込みの者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

⑦外国において学校教育における16年の課程を修了した後、又は外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、２年以上研究に従事した者及び入学の前月までに２年以上研究に従事することとなる見込みの者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者

⑧本学において、個別の入学資格審査により、修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、入学の前月末日までに24歳に達しているもの

（⑥～⑧により出願しようとする者は、事前に本学で実施する出願資格認定審査によって「学力の認定」を受ける必要がある）

（2）選抜方法（文化科学研究科）

選抜は、書類選考、修士論文又はそれに代わるものの審査及び面接により行う。

①書類選考

志望研究内容等、その他研究科が提出を求めた資料について行う。

②修士論文等の審査

修士の学位を有する者及び修士課程在学中の者については修士論文、また出願資格認定審査により出願資格が認められた者については刊行された論文又は著作を審査する。

③面接

面接は書類選考・論文審査合格者についてのみ行うものとする。書類選考・論文審査の合否は面接日の約1週間前までに、入学願書に記載された連絡先に文章で個別に連絡する。

（なお、合否通知が面接日の１週間前を過ぎても到着しない場合は、総合研究大学院大学学務課学生厚生係まで問い合わせること。）

面接は、主として修士論文（修士論文のない者は発表した学術論文等又はこれまでに行った研究の要旨）の内容及び志望研究内容について行う。

◎詳細は募集要項を請求のうえ確認してください。

（3）修了要件

本研究科の専攻に３年以上在学し、所定の単位数以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び試験に合格すること。

ただし、特に優れた研究業績を上げた者については、在学期間を短縮して修了を認めることがある。

募集要項請求先

《募集要項の請求方法》

下記メールアドレスに、以下の必要事項を記入し、送信してください。

（1）郵便番号（2）住所（3）氏名（4）電話番号

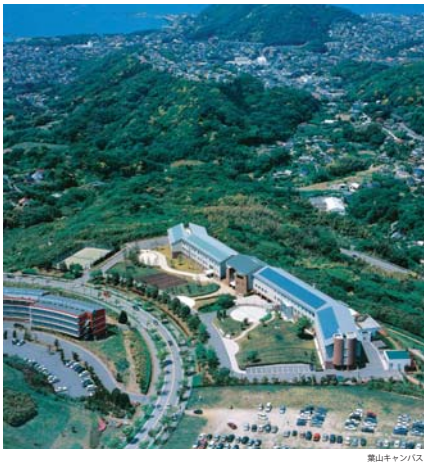
（5）希望する募集要項→「平成24年度４月入学 文化科学研究科地域文化学専攻・比較文化学専攻（希望する募集要項の種類：1）」と記入してください。

※配布は８月下旬頃から開始します。

メールアドレス：kousei@ml.soken.ac.jp

問合せ先

総合研究大学院大学 学務課 学生厚生係
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
TEL：046-858-1525, 1526

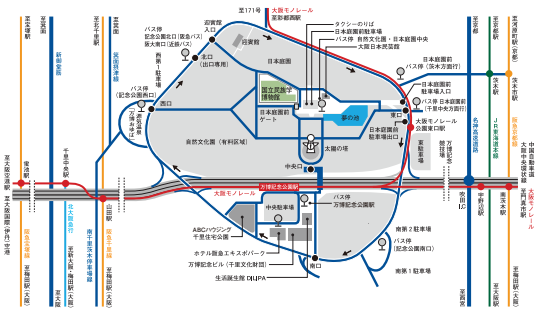


葉山キャンパス

問合せ先

国立民族学博物館 管理部研究協力課研究協力係

〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151(代表)　06-6878-8236(専攻担当)　FAX 06-6878-8479
URL http://www.minpaku.ac.jp/　E-mail souken@idc.minpaku.ac.jp

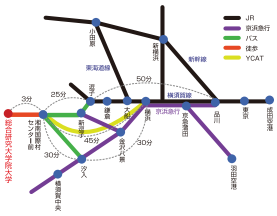


●大阪モノレールで「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車徒歩約15分
自然文化園（有料区域）を通ってこられる場合、自然文化園ゲート脇の券売機で本館（国立民族学博物館）の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。また、「公園東口駅」からは、自然文化園を通行せずに来館できます。
●バスで阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅から「日本庭園前」下車徒歩約15分。また、茨木方面からは、「自然文化園・日本庭園中央」下車徒歩約7分（1時間に1本程度）。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

総合研究大学院大学 事務局

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電話 046-858-1500(代表)　FAX 046-858-1542
URL http://www.soken.ac.jp/





●電車・バス利用
・JR 横須賀線逗子駅東口下車
▶京急バス①番乗り場より16系統-26系統「湘南国際村」行き、「湘南国際村センター前」下車
乗車時間：約25分　運賃：340円
▶京急バス③番乗り場より「湘南佐島なぎさの丘」行き、「湘南国際村関門河調整池」下車
乗車時間：約20分　運賃：320円
・京浜急行逗子・葉山逗子駅東口下車
▶京急バス①番乗り場より16系統-26系統「湘南国際村」行き、「湘南国際村センター前」下車
乗車時間：約25分　運賃：340円
▶京急バス①番乗り場より「湘南佐島なぎさの丘」行き、「湘南国際村関門河調整池」下車
乗車時間：約18分　運賃：320円
・京浜急行本線�space入駅下車
▶京急バス②番乗り場より16系統「湘南国際村」行き、「湘南国際村センター前」下車
乗車時間：約30分　運賃：370円
・YCAT
▶横浜シティーエアーターミナル小番乗り場「横須賀西部」行き（電力中央研究所行きバス）、「湘南国際村センター前」下車　乗車時間：約45分　運賃：900円
（注）「湘南国際村センター前」下車徒歩3分、「湘南国際村関門河調整池」下車徒歩10分

●車利用
・横浜横須賀道路（有料）「逗子インター」より逗葉新道（有料）出口より交差点左折
南郷トンネルを抜け直進約5分「湘南国際村センター入口」交差点を左折約1分

携帯サイト
URL http://daigakujc.jp/sokendai/

The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies

Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies

Overview '12



総合研究大学院大学
文化科学研究科

地域文化学専攻
比較文化学専攻

概要 '12

国立民族学博物館

目　次

人間と世界を究める

地域文化学・比較文化学専攻の魅力……1
文化科学研究科について……2
地域文化学・比較文化学専攻について……3

みんぱくで学ぶ

地域文化学専攻
担当教員一覧……4
在学生の声　堀田あゆみ……5
比較文化学専攻
担当教員一覧……6
在学生の声　サウセド・ダニエル……7

世界で学ぶ

学生の研究フィールド……8
在学生の研究テーマ……10
卒業生の声　小河久志　岡部真由美……11

2012年度開講科目　授業概要……12

学位論文を書く

過去の学位論文一覧……16

Q & A……18

みんぱくについて

館長挨拶……20
国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要……21

総合研究大学院大学について

学長挨拶……22
総研大の特徴・組織図……23

入学案内……24

連絡先……裏表紙





人間と世界を究める

地域文化学専攻・比較文化学専攻の魅力

1．充実した教授陣

学生数をうわまわる教授陣は、学生一人一人の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また両専攻の教員は各分野の第一線で活躍する研究者であるため、最新の研究動向に基づいた指導を行うことができます。

2．豊富な情報源

日本における民族学（文化人類学）関連の最大の資料類が揃っています。また、館が主催する数多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通して、国内外の優秀な研究者との交流が容易になります。

3．各種の支援制度

授業料免除制度や奨学金、学会発表やフィールドワークへの援助など、充実した研究支援が受けられます。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育とは？

地域・比較文化学専攻では、以下の３点を目的とする教育活動を行っています。

① 独創的な文化人類学・民族学の研究
② 長期のフィールドワークで得られた資料にもとづく学位論文の作成
③ 広い視野をもった、専門的教養を養う

指導体制

個別指導と共同指導を組み合わせたユニークな指導体制を採用しています。各院生には正副２名の指導教員が指名され、入学から学位取得まで、これらの教員が中心となって日常的な指導をおこないます。一方、ゼミにおいては共同指導体制を取り入れています。ゼミは各４名の教員が担当し、研究の内容だけでなく発表の方法などに関する指導をおこないます。担当委員以外の教員にもゼミへの参加を求めることができ、また基本的に専攻長もゼミに出席するため、正副の指導教員を含めると10人前後の教員からコメントを得ることができます。

スケジュール

学生はおおむね１年次において「１年生ゼミ」での指導をもとに現地調査（フィールドワーク）の準備をおこない、２年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミ」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

文化科学研究科について



研究科長
塚田 誠之

総合研究大学院大学、略して「総研大」は、学部をもたず大学院だけから成る国立大学として、昭和63年（1988）10月１日に開学しました。現在、全部で６つの研究科から構成されていますが、他の研究科が全て理系であるのに対して、文化科学研究科は唯一の文系研究科です。

研究科の成り立ちは、まず平成元年（1989）４月に、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻が設置されました。その後、平成４年（1992）４月に、国際日本文化研究センターを基盤とする国際日本研究専攻、平成11年（1999）４月に、国立歴史民俗博物館を基盤とする日本歴史研究専攻、平成13年（2001）４月にメディア教育開発センターを基盤とするメディア社会文化専攻、平成15年（2003）４月に、国文学研究資料館を基盤とする日本文学研究専攻が順次増設され、６専攻となりました。

国立大学の法人化に伴い、平成16年（2004）４月からは、新たに大学共同利用機関法人人間文化研究機構が設立され、４つの研究機関（国立民族学博物館、国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館）が属することとなり、独立行政法人メディア教育開発センターをあわせた５つの研究機関が基盤となりました。そして、平成21年（2009）４月に、独立行政法人メディア教育開発センターが、放送大学内に設置されたICT活用・遠隔教育センターに業務が移管され、現在に至っています。なお、総研大の他の研究科は、博士課程前期（修士）の学生を受け入れる５年一貫制を採用していますが、文化科学研究科は、博士課程後期（博士）のみから成っていることを申し添えます。次に、各専攻の概要をご紹介します。

・地域文化学専攻は、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ及びオセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とします。各々の文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としています。現地調査に基づいて個別文化の記述的研究を積極的に推進する高度な専門性を持った研究者の養成を行います。
・比較文化学専攻は、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術、文化資源という６つの研究分野があります。諸民族文化の比較研究を通して、その普遍性を理論的に明らかにすることを目的としています。従来の文化人類学的方法論に加えて、情報科学や文化資源研究、隣接諸科学の成果を導入して、新しい研究方法の開発を積極的にすすめながら高度な専門性を持った研究者を養成します。
・国際日本研究専攻は、人文科学・社会科学・自然科学にわたる総合的な日本研究を進めるために、教育・研究指導分野として、全教員の指導による単一の「国際日本研究」を設けている点に特色があります。また、国際的な立場から日本研究の理論的・方法論的な指導を行う共通必修科目を設けています。これらの推進により、創造的で高度な専門的視野、学際性、総合性を備えた研究者を育成します。
・日本歴史研究専攻は、日本の歴史と文化について、資料に基づいた高度な総合的能力をもつ研究者、また広い視野と国際的な感覚をもち、社会に貢献できる人材の育成を目指しています。基盤機関である国立歴史民俗博物館の豊富な収蔵資料と資料情報を活用し、自然科学的な分析を行うために整備された高度な研究設備を利用しながら、歴史学・考古学・民俗学・自然科学を含めた関連諸学の専門研究者から、多様な視点の、実地調査を含む学際的な研究指導を受けることができます。
・メディア社会文化専攻は、高度情報通信社会において、メディアと通信技術と、社会・文化・人間とが、相互にどのように作用し合うかを、学際的・総合的に解明する研究と教育を行っています。メディアと人間の間のインタラクションを、関連諸科学の成果と方法を統合し、先端的なメディア技術を駆使しながら解明して、総合的メディア研究の新たな分野を生み出す、創造的研究者を養成します。（現在は学生募集を停止しています。）
・日本文学研究専攻は、基盤機関である国文学研究資料館が集積した膨大な原典資料を活用しながら、専門的な調査・分析を進める能力と共に、一方でそうした専門性を相対化する広い視野と国際感覚を併せ持った、先進的な日本文学研究者の育成を目指しています。複数指導体制によって、日本文学ばかりでなく、文学情報・記録情報・書物交流など、関連分野の専門研究者から、多様な指導を受けることができます。

以上の６専攻（民博から２専攻）は、それぞれが日本を代表する研究機関を基盤として、すでに多くの学位取得者、専門研究者を輩出し、またそのための努力を重ねていますが、同時に、文化科学研究科全体として、学生の専門研究を支援し、また学術交流フォーラムの実施・『総研大文化科学研究』の刊行など専攻同士の横断連携を推進する事業を推進しております。

地域文化学・比較文化学専攻について

地域文化学専攻
専攻長　久保 正敏



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ及びオセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とします。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としています。本専攻においては、現地調査に基づいて個別文化の記述的研究を積極的に推進する、高度な専門性を持った研究者の養成を行います。

求める学生像…世界の多様な地域社会や地域文化について広い関心をもち、とりわけ文化人類学・民族学の基礎研究に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。

比較文化学専攻
専攻長　鈴木 七美



本専攻では、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術、文化資源という６つの研究分野があります。諸民族文化の比較研究により、各々に通底する普遍性の発見と理論的解明を目指しています。従来の文化人類学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入し、新しい研究方法の開発を積極的にすすめて高度な専門性を持った研究者を養成します。

求める学生像…人間の社会や文化について広い関心を抱き、とりわけ学問的な理論化やその社会的な応用に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。

両専攻のあゆみ

平成元年４月　文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）設置、学生受入、授業開始
平成12年10月　「オープンキャンパス」開催（年１回）
平成13年４月　地域文化学・比較文化学両専攻の同窓生ネットワーク発足
平成17年４月　下記 関西４大学との学生交流に関する協定を締結、単位互換授業の開講開始
・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
・大阪大学大学院人間科学研究科
・神戸大学大学院総合人間科学研究科
（平成19年度より国際文化学研究科および人間発達環境学研究科に改組）
・京都文教大学大学院文化人類学研究科

みんぱくで学ぶ

地　域　文　化　学　専　攻

担当教員一覧（平成24年度）26名

朝倉 敏夫（韓国社会研究）
池谷 和信（環境人類学・南部アフリカ研究）
印東 道子（オセアニア考古学）
宇田川 妙子（南ヨーロッパ研究・性研究）
樫永 真佐夫（東南アジア文化人類学）
久保 正敏（民族情報学・コンピュータ民族学・オーストラリア研究）
小長谷 有紀（牧畜文化論・モンゴル研究）
齋藤 晃（ラテンアメリカ歴史人類学）
佐々木 史郎（文化人類学・北アジア研究）
佐藤 浩司（民族建築学）
新免 光比呂（宗教学・東欧研究）
須藤 健一（社会人類学）
竹沢 尚一郎（宗教人類学・西アフリカ研究）
田村 克己（東南アジア文化人類学）
塚田 誠之（歴史民族学・中国研究）
西尾 哲夫（認識言語学・アラブ研究）
野林 厚志（民族考古学・台湾研究）
信田 敏宏（社会人類学・東南アジア研究）
林 勲男（社会人類学・オセアニア研究）
三尾 稔（文化人類学・南アジア研究）
三島 禎子（文化人類学・西アフリカ研究）
南 真木人（生態人類学・南アジア研究）
森 明子（中部ヨーロッパ文化人類学）
八杉 佳穂（言語人類学・中米文化史）
山中 由里子（比較文学・比較文化）
横山 廣子（文化人類学・中国社会研究）





Voice 在学生の声

地域文化学専攻
堀田 あゆみ（平成20年度入学）

1998年、みんぱく（国立民族学博物館）で特別展『大モンゴル展―草原の遊牧文明』が開かれた。当時高校生で、モンゴルにただならぬ関心を寄せていた私は、３度も来館しては１日中入り浸っていた。その時は、自分が研究を志してみんぱくに戻ってくることになるとは、思いもよらなかった。

高校卒業後にモンゴルへ留学し、ますます興味が深まった。もっと学びたいとモンゴルを追いかけているうちに、みんぱくの大学院にたどり着く。正確には、総合研究大学院大学文化科学研究科の博士課程だということを知った。

入学後は総研大のリサーチ・トレーニング制度を活用して、毎年モンゴルで調査をおこなってきた。遊牧民世帯に住みこんで、生活の中にあるモノをすべて記録し、モノにまつわる話を聞き取ったりしていた。そうして集めたデータを発表したところ、モノの情報を博物館の展示に活かしてはどうかという話がうまれ、私が調査していた遊牧民一家のゲル（住居）と家財道具をみんぱくが買い取ることになった。

そのゲルは、みんぱくの特別展示場で開催された『今和次郎　採取講義―考現学の今』で演示された。私は実行委員として携わり、ともに生活していた遊牧民一家の暮らしと調査の様子をモノで再現した。14年前のあの場所で、自分の研究成果の一部が公開されたことは、驚きであり感動でもあった。かつて自分がそうであったように、研究は誰かの糧となるためのものだということを実感した。





比 較 文 化 学 専 攻

担当教員一覧（平成24年度）23名

飯田 卓
（生態人類学・漁民研究）

韓 敏
（社会人類学・中国研究）

菊澤 律子
（言語学・オーストロネシア諸語）

岸上 伸啓
（文化人類学・北方文化研究）

小林 繁樹
（道具人類学・文化人類学・博物館学）

近藤 雅樹
（民俗学・民具研究）

笹原 亮二
（民俗学・民俗芸能研究）

庄司 博史
（言語学・言語政策論）

白川 千尋
（文化人類学・開発人類学）

杉本 良男
（社会人類学・南アジア研究）

鈴木 七美
（医療人類学・医療社会史）

鈴木 紀
（開発人類学・ラテンアメリカ文化論）

關 雄二
（アンデス考古学・ラテンアメリカ研究）

園田 直子
（保存科学）

陳 天璽
（社会人類学・移住、移動者研究）

寺田 吉孝
（民族音楽学・インド研究）

日髙 真吾
（保存科学）

平井 京之介
（経済人類学・東南アジア研究）

廣瀬 浩二郎
（日本宗教史・民俗学）

福岡 正太
（民族音楽学・東南アジア研究）

Matthews, Peter J.
（先史学・民族植物学）

吉田 憲司
（博物館人類学・アフリカ研究）

吉本 忍
（民族工芸論・民族技術論）



みんぱくで学ぶ

Voice 在学生の声

比較文化学専攻
サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ（平成20年度入学）

私の研究テーマは現代ペルーにおけるパブリック考古学です。具体的には、一般の人々と考古学者の関係性について研究しています。考古学者は遺跡と遺物について、学術的な関心を持っています。彼らの関心は客観的であり、遺跡と遺物を「研究資料」と定義します。一方で、一般の人々は客観的な関心よりも主観的な関心を持ちます。遺跡と遺物を通して、自分の習慣と家族の歴史についての関心を持っています。遺跡と遺物の保護活動のためには、この二つの立場を理解しなければなりません。

この研究を行うためには様々な分野から切り込んでいくことが必要です。考古学だけではなく、文化人類学、歴史学、民族学など多様な分野からの観点を持たなければなりません。総研大と民博はこのような研究を行うには最も良い環境であると考えます。様々な分野の先生がいるため、自分の研究を様々な観点から議論することができます。また、民博には文化人類学の文献に関しては日本の中で最良とも言える図書室がありますので、参考文献を探しやすいというメリットもあります。海外における研究調査又は成果発表については総研大のサポートを受けることができるので、世界中の研究者と交流することができます。研究者として、総研大と民博は最高の環境の一つであると思っています。





在学生の研究テーマ

- 先住民族による自然資源の利用に関する環境人類学的研究
  —ニカラグア共和国・ミスキートによるウミガメ漁の事例—
- 社会主義的政策下における牧畜社会の変容—中国内モンゴル・シリンゴル盟における開発を事例に—
- Pre- Hispanic rituals and ceremonial architecture in Peru's north central Highlands
- ベトナム北部山岳少数民族モン族社会の労働に関する民族誌的研究
- 男女間のバーバルコミュニケーション—酒場を背景として—
- 近現代アジアにおける民族衣装をまとった聖母像—フィリピンと日本の事例を中心に—
- 北海道西興部村における動物利用の歴史的変容に関する人類学的研究
- 韓国と日本における墓と葬送儀礼の変容—「自然葬」の発生と定着を中心に
- 先史アンデス形成期における社会動態
- An Anthropological Study of Non-government Education among the Ethnic Communities in the Northern (Barind) Region of Bangladesh
- TEXTILE AND IDENTITY : A PERSPECTIVE FROM ASIA AND AMERICA.
- メキシコ・ユカタン地方における先住民言語マヤユカテコ語とスペイン語の言語接触について
  —音声学及び言語人類学的視点から—
- ラオス北部サムヌア地方における「伝統」織物の技術伝承とその変容
- 沖縄島嶼地域における社会変化をめぐる民族誌的研究—池間島のカツオ漁の衰退に伴う地域社会の適応—
- ウランバートル市のゲル地区に見られる住民の廃棄行動とその変容
- 台湾原住民族の農耕活動の変容過程とその現代的意味についての人類学的研究
- ブルキナファソのソンガイ居住村における簡易技術移転プロジェクトの人類学的研究
- 現代ペルーにおける考古学の活用とパブリック考古学
- カナダ少数・先住民族の社会・文化的変化に関する研究
- 移住者の生業とホスト社会との関係：
  韓国社会と日本社会に華僑移住者が生業の為に持ち込んだモノを中心に
- 造形活動にたずさわる人びと—ナイジェリア、「ヨルバの聖地」イレ・イフェの現在から
- 音の環境にみる音楽観の社会的形成：芸能と都市の音を手がかりに
- 西安「回民街」における回族社会の構造
- スーダン内戦後のヌバ山地の生活再建に関する、平和の人類学的研究
- バングラデシュの銅合金製品と人びととの関わりからみる「地域らしさ」の考察
- 地域社会の発展プロセスと独自性を維持するメカニズムの解明
- 先住民の被曝問題に関する文化人類学的研究
  —合州国ニューメキシコ州ラグナ・プエブロ保留地内ウラン鉱山跡を中心に

Voice 卒業生の声

総合地球環境学研究所　プロジェクト研究員
小河 久志（平成24年3月学位取得）

私の研究テーマは、タイ南部におけるイスラームの今日的動態を、ムスリムの宗教実践を事例に、国家やグローバルなイスラーム復興運動、インド洋津波災害の影響を踏まえて明らかにすることだった。こうした自身の研究を進めるうえで不可欠だったのが、宗教や災害、東南アジアに関する知識、視点であった。日本における人類学・民族学研究の一大センターである民博には、これらの分野を専門とする教授陣がおり、折に触れて私の研究に有益なコメントを下さった。その中心的な場が全体ゼミだった。入学１年目から発表が義務付けられるゼミには、院生とともに多数の教員が参加し、発表者に対して忌憚のない意見を投げかける。それは、当時の私にとって（他の院生にとっても）恐ろしいものだったが、今振り返ると自身の研究を深化する上で無くてはならない機会だったと思う。

民博ではまた、多くの友人にも恵まれた。研究するテーマや地域は違えども、院生は１つ屋根の下で研究に励む同学の士。時に院生室、時に居酒屋、時に下宿先で、研究に限らず様々なことを語り合った彼らは、民博で得られたかけがえのない財産の１つである。

他にも民博には、豊富な蔵書を誇る図書館があり、館内で頻繁に開かれる研究会には全国から著名な研究者が参加する。このような恵まれた環境を活かすも殺すも自分次第。新入生の皆さんには、民博が持つ豊富なリソースをフルに活用して、充実した研究生活を送って頂きたい。

国立民族学博物館外来研究員（日本学術振興会特別研究員 PD）
岡部 真由美（平成23年3月学位取得）

広大な万博記念公園に浮かぶ陸の孤島、民博。その民博内でも、奥の奥にあるのが大学院生室。駅から遠く、周辺にはコンビニも居酒屋もない。これだけ不便なのに、この大学院では、新入生を欠いたことがないばかりか、６年、７年…と長居する学生が少なくない。私もそうした学生の一人であった。一体、何がそれほど魅力的なのか？

まずは人。ここに集まる学生と教員は、研究テーマも対象地域もかなりバラエティに富んでおり、論文ゼミで、鋭い質問や建設的なコメントを飛ばし合っている。このゼミでの発表は、学位論文の口頭試問、学会・研究会での発表の際に大いに役立つ。次にモノ。学生は、民博が所蔵する数多くの標本、映像・音響ならびに文献図書の資料にアクセスできるし、必要に応じて調査用の機材を借りることができる。最後に、機会。民博で頻繁に開催される共同研究会やシンポジウムは、第一線で活躍する研究者たちの最新の研究成果を知る、絶好の機会である。また、それに関連する準備やアテンド等、学生の手伝う仕事は、教室では学べない知識や経験を身につける貴重な機会でもある。このような恵まれた研究環境は、この大学院の最大の魅力だ。

しかし、この環境を活かすためには、自ら積極的に行動しなければならない。大学院に漂う、温かくも厳しい空気。私は、これこそが、この大学院のもうひとつの魅力だと思う。新入生の皆さんには、ぜひ、個性豊かな先輩や教員に囲まれながら、「大人の大学院」の虜になってほしい。

地域文化学専攻および比較文化学専攻の出身者は、以下のようなところに在職し、教育研究に活躍しています。

愛知淑徳大学、愛媛大学、大阪大学、大谷大学、沖縄県立芸術大学、帯広大谷短期大学、鹿児島国際大学、鹿児島純心女子大学、神奈川大学、川崎医療福祉大学、関西外国語大学、神田外語大学、京都外国語大学、京都大学、京都文教大学、神戸大学、神戸市外国語大学、神戸山手大学、成蹊大学、滋賀県立大学、静岡大学、四天王寺大学、芝浦工業大学、大阪工業大学、中部大学、筑波大学、天理大学、東京外国語大学、東北学院大学、東洋大学、長崎純心大学、新潟国際情報大学、日本大学、阪南大学、広島大学、広島市立大学、宮崎公立大学、桃山学院大学、インドネシア学術総局［インドネシア］、上海師範大学［中国］、北京大学［中国］、ライデン大学［オランダ］、総合地球環境学研究所、総合研究大学院大学、国立民族学博物館

世界で学ぶ

地域文化学専攻開講科目（平成24年度）講義概要抜粋

アジア地域文化Ⅰ

東アジア、中央アジア、北アジア地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究

東アジア文化研究　教 授 野林 厚志
台湾原住民族の文化と歴史について講述する。先住民運動、植民地主義、文化表象といった脈絡でとらえていく。

東アジア文化研究特論Ⅰ　准教授 横山 廣子
中国やその周辺のアジア各地で見られる文化変容に関わる現状を把握するとともに、それをどのようなアプローチによって研究しうるかについて、具体的な研究事例を通して考える。

東アジア文化研究演習Ⅰ　教 授 塚田 誠之
中国南部諸民族の民族集団とその文化の形成史について、とくに広西の壮族に焦点をあてた講述を行い、民族史研究の新たな研究の可能性を探ることを目的とする。

東アジア文化研究演習Ⅱ　教 授 朝倉 敏夫
朝鮮半島を中心として東アジアにおける社会と文化に関する演習を行う。

北・中央アジア文化研究　教 授 小長谷有紀
モンゴル遊牧社会の歴史的変容について、牧畜の特質とその変容という視点から解説する。

北・中央アジア文化研究特論　教 授 佐々木史郎
ロシア領のシベリア、極東地域に広がる大森林地帯（タイガ）に展開する狩猟採集活動を生態的側面と文化的側面の双方から分析する

アジア地域文化Ⅱ

東南アジア、南アジア、西アジア地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究

東南アジア文化研究　准教授 佐藤 浩司
・東南アジアの住文化をいかに理解するか
・建築人類学フィールドワークの方法

東南アジア文化研究特論　准教授 信田 敏宏
東南アジアにおける開発過程の実態を関連文献の批判的読解を通して、受講者の研究地域とも比較しながら全員で議論する。

東南アジア文化研究演習Ⅰ　教 授 田村 克己
東南アジア諸社会、ことに大陸部を中心に精霊信仰を取り上げ、ヒトと霊とモノの関係を考察する。

東南アジア文化研究演習Ⅱ　准教授 樫永真佐夫
東南アジアはきわめて地理的、文化的に多様である。この授業では、東南アジア大陸部を中心に取り扱う。各地の民俗や文化がどのように継承されているか、従来の村落社会研究を踏まえて考える。

南アジア文化研究　准教授 三尾 稔
特に「ヒンドゥー教」の形成と変容に焦点をあて、植民地支配から現代の宗教ナショナリズムに至るまでの歴史的経緯をたどり、インドの「宗教」伝統の動態に迫る。

南アジア文化研究特論　准教授 南 真木人
現代政治における社会的包摂をめぐる問題群をネパールにおける社会運動の過程から考察する。

西アジア文化研究　教 授 西尾 哲夫
イスラム的価値観と対立するものとして取り上げられることの多い芸能や舞踊について講義する。

西アジア文化研究特論　准教授 山中由里子
物と言説の有機的な結びつきについて、物質文化研究とテクスト研究の双方向から考察する。

ヨーロッパ地域文化

ヨーロッパ地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究

ヨーロッパ文化研究　准教授 新免光比呂
授業ではフィールドワークに基づいて政治文化と宗教について歴史的に考察する。

ヨーロッパ文化研究特論　准教授 宇田川妙子
南ヨーロッパにおける性（ジェンダー／セクシュアリティ／セックス）の実態を、民族誌的文献や歴史的文献をとおして詳細に分析・考察するとともに、性が彼らの文化全体の中で意味するところの一端を解明していくことを目的とする。

ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ　教 授 森 明子
ソシアルなる概念の構築をめぐって論じた研究書を講読し、議論する。

アフリカ地域文化

アフリカ地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究

アフリカ文化研究　准教授 三島 禎子
今日の人の移動に関して、地理的拡大と歴史的動態に着目し、移動にともなう経済活動を民族文化の側面から考察し、アフリカ経済の過去と現在を再考する。

アフリカ文化研究演習Ⅰ　教 授 池谷 和信
アフリカの狩猟採集民、牧畜民、農耕民を対象にした生態人類学の研究動向をふまえて、アフリカ文化を理解するための研究方法や視点について論講する。

アフリカ文化研究演習Ⅱ　教 授 竹沢尚一郎
アフリカ社会のエスノグラフィーを読む。近年の良質なエスノグラフィーを取り上げ、6冊程度を読み込む予定である。

アメリカ地域文化

アメリカ地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究

アメリカ文化研究　教 授 八杉 佳穂
学生のもっている問題点を深めるため、共通する話題を取りあげて、これまでの西欧中心主義的学問観を改め直す材料を提供していく。

アメリカ文化研究特論　准教授 齋藤 晃
16世紀初めのヨーロッパ人との接触以後の南アメリカの先住民の社会と文化の歴史的変遷を跡づける。

オセアニア地域文化

オセアニア地域に居住する諸民族の政治、経済、法、社会などの諸制度や技術、宗教、言語、芸術等にかかわる地域文化に関する総合的・記述的研究

オセアニア文化研究　准教授 林 勲男
自然災害への社会や文化による対応の在り方について、平穏時、発災時の緊急対応、復旧・復興活動、災害の記憶・記録、防災活動などに焦点を当てながら、人類学的視点から具体的な事例をもって検討する。

オセアニア文化研究特論　教 授 印東 道子
オセアニアにおける土器文化の諸相を自然環境との関連においてみてゆく。

オセアニア文化研究演習Ⅰ　教 授 久保 正敏
オーストラリアへの人の移動から説き起こし、先住民文化の形成と変遷について、自然環境・政治状況との関係性の視点で議論を深める。

基礎科目

地域文化学に関する基礎演習（1年生ゼミ）および博士論文作成のための演習（論文ゼミ）

【1年生ゼミ】
地域文化学基礎演習Ⅰ　准教授 新免光比呂
地域文化学基礎演習Ⅱ　准教授 信田 敏宏
1年生を対象とし、地域文化研究に関する基礎的な知識を養うとともに、博士論文作成のための調査の準備を行なう。
1. 研究計画シリーズ…おもに修士論文研究と今後の研究課題について報告し、参加者と教員で検討する。
2. テーマシリーズ…10のテーマに関して1回完結の講義を実施する。
3. リサーチプロポーザル…各自は、博士研究のためのリサーチプロポーザルを発表し、参加者と教員で検討する。

【論文ゼミ】
地域文化学演習Ⅰ　准教授 南 真木人
地域文化学演習Ⅱ　准教授 三島 禎子
地域文化学専攻の学生が博士論文を作成するために、理論的な枠組みや現地調査の成果を報告し、検討する。
1. 博士論文のための調査を終了した者は、現地調査の概要と博士論文の全体の構想について報告する。
2. 博士論文を執筆中の者は、特定の章を報告し、参加者と教員で検討する。

共通科目

地域文化学に関する基礎的な講義

地域文化学特論Ⅰ　教 授 野林 厚志
近年、さまざまなかたちで、物質文化研究が再評価されているようだが、ものの研究の基本は、実際にものを観察し、手に取り、その形状を把握し、それが人々にどのように認識され、どのように扱われているかを理解することを前提とした講義である。

地域文化学特論Ⅱ　教 授 田村 克己
東南アジアの事例を中心に、土着信仰、民間信仰、あるいはアニミズムといわれる宗教的実践を取り上げ、その宗教体系における位置づけ、それをめぐる人類学的思考について、ともに考える。



比較文化学専攻開講科目（平成24年度）講義概要抜粋

比較社会研究

諸民族の家族、親族、地域共同体、政治、法、経済等に関する通文化的・理論的研究

比較社会研究Ⅰ　准教授 平井京之介
人びとがコミュニティに参加し、そこから公共的なるものが作り上げられていく過程について検討する。

比較社会研究Ⅱ　教 授 韓 敏
1990年代以降の大陸中国に関する社会人類学研究の新しい動向を取り上げる。

比較社会研究特論Ⅰ　准教授 陳 天璽
在日外国人、華人ディアスポラ、日系人ディアスポラ、無国籍者など、具体的な事例を通し、アジアにおける移民とディアスポラについて講義する。

比較社会研究特論Ⅱ　教 授 岸上 伸啓
1960年代以降の人類学的アプローチおよび概念について紹介し、批判的に検討を加える。

比較社会研究演習Ⅰ　教 授 杉本 良男
現代世界が抱える宗教とナショナリズムの問題につき、各地の事例から比較検討する。

比較社会研究演習Ⅱ　教 授 岸上 伸啓
各自の研究課題をどのように調査・研究すべきかについて検討し、博士論文作成のための調査研究計画書作成の準備を行う。

比較社会研究演習Ⅲ　准教授 鈴木 紀
小規模生産者がグローバル経済に参入していく際に必要とされる能力発展のプロセスについて比較考察する。

比較宗教研究

諸民族の呪術、祭祀、神話、宇宙観、宗教等に関する通文化的・理論的研究

比較宗教研究　准教授 白川 千尋
地域社会の人々の間における呪術と科学の相互関係に関する理解を深めるために必要な理論的枠組みについて検討することを目的とする。

比較宗教研究演習Ⅰ　教 授 鈴木 七美
多文化状況や生活の激変を経験する高齢者のウェルビーイングを考えることをとおして、多様な文化的価値観・文化資源の共有に向けた具体的実践について議論し、地域生活者が共生環境を創出する意義と方途について考察を深める。

比較技術研究

諸民族の生産技術、製作技術、生活技術等に関する通文化的・理論的研究

比較技術研究Ⅰ　准教授 飯田 卓
伝播論にもとづく技術論・物質文化論を紹介し、現代における技術をとらえるうえでの問題点を明らかにする。

比較技術研究Ⅱ　教 授 關 雄二
アメリカ考古学における複合社会研究を紹介するとともに、各学生が持つフィールドワークのデータとつなげていく作業を試みる。

比較技術研究特論　教 授 近藤 雅樹
本館が所蔵する標本資料とデータベースをもとに、任意の地域もしくは通文化的に用具の分類設定を行い、データベースと実際の標本資料の観察から得られた情報に加えて、自らの保有情報をもとに、地域文化の概要を物質文化論の観点から考察する。

比較技術研究演習Ⅰ　准教授 Matthews, Peter J.
民族植物学の理論的・実践的基盤を紹介し、この分野における研究の進展について概観するとともに、今後の取り組むべき研究課題について論じる。

比較技術研究演習Ⅱ　教 授 吉本 忍
世界の諸民族のもとに見いだされる手織機の諸類型とそれらの分布、ならびに手織機の類型ごとの機織り技術の特徴と織物の基本的な形状や組織についての基礎的な理解をはかる。

比較言語研究

諸民族の言語、文字、コミュニケーション、言語政策等に関する通文化的・理論的研究

比較言語研究　准教授 菊澤 律子
言語としての手話の位置づけと、手話を言語として記述するために必要な言語学の基礎を学ぶ。

比較言語研究演習Ⅰ　教 授 庄司 博史
少数言語の定義、少数言語の実態、言語運動、言語政策、移民言語の調査分析について演習する。

比較言語研究演習Ⅱ　准教授 菊澤 律子
比較言語学においてここ数十年間にめざましい研究成果があげられてきたオーストロネシア語話を概観しながら、比較言語学の理論的背景を理解し、その手法を実際の言語分析に応用できるようになることを目標とする。

比較芸術研究

諸民族の音楽、芸能、文芸、工芸、造形等に関する通文化的・理論的研究

比較芸術研究Ⅰ 准教授 福岡 正太

映像制作の企画立案、取材コーディネート、取材実施、情報整備、編集、試写などの一連の過程に実践的にかかわりながら、映像の制作や資料の扱い方、無形文化遺産の記録を支える理論と方法論を学ぶ。

比較芸術研究Ⅱ 教 授 笹原 亮二

この授業では、芸能を文化的・社会的な身体技法としてとらえ、様々な角度から考えてゆく。

比較芸術研究演習Ⅰ 教 授 寺田 吉孝

本演習では、これまで看過されがちであったアジア系アメリカ人の文化的独自性および創造性に焦点をあて、新しく創り出される音楽と彼らのアイデンティティ創出の関係を考察する。

文化資源研究

博物館人類学、博物館情報学、保存科学、および文化資源に関する理論的・実践的研究

文化資源研究 教 授 園田 直子

世界の諸民族の生活用具をいかに学術資料としての価値を損ねることなく維持保存していくかの方法論を学ぶ。

文化資源研究特論 准教授 日髙 真吾

文化資源のなかでも文化財に注目し、特に国内の災害においてどのような体制のもと救援活動が展開されるのか、博物館としてどのような協力があり得るのかについて学ぶ。

博物館研究特論 教 授 吉田 憲司

博物館人類学に関する先端的研究の動向を紹介するとともに、人類学の実践における博物館機能の活用の方途を、各履修者の研究テーマに合わせた形で追究する。

博物館研究演習Ⅰ 教 授 小林 繁樹

文化人類学・民族学に関する博物館展示とそれに関連する事業、ワークショップやイベントなどの具体的な活用について研究し演習する。

博物館研究演習Ⅱ 准教授 廣瀬浩二郎

近年の日本における「ユニバーサル・ミュージアム」（誰もが楽しめる博物館）をめざす動向を紹介し、さらに世界各国の先進事例を比較検討する。誰もが楽しめるミュージアムを具体化するためにはさまざまな切り口があるが、本演習では「視覚障害者」と「さわる展示」に注目したい。

基礎科目

比較文化学に関する基礎演習（1年生ゼミ）および博士論文作成のための演習（論文ゼミ）

【1年生ゼミ】

比較文化学基礎演習Ⅰ 教 授 近藤 雅樹

比較文化学基礎演習Ⅱ 准教授 陳 天璽

1年生を対象とし、比較文化研究に関する基礎的な知識を養うとともに、博士論文作成のための調査の準備を行なう。

1. 研究計画シリーズ…おもに修士論文研究と今後の研究課題について報告し、参加者と教員で検討する。
2. テーマシリーズ…10のテーマに関して1回完結の講義を実施する。
3. リサーチプロポーザル…各自は、博士研究のためのリサーチプロポーザルを発表し、参加者と教員で検討する。

【論文ゼミ】

比較文化学演習Ⅰ 准教授 白川 千尋

比較文化学演習Ⅱ 教 授 吉田 憲司

比較文化学専攻の学生が博士論文を作成するために、理論的な枠組みや現地調査の成果を報告し、検討する。

1. 博士論文のための調査を終了した者は、現地調査の概要と博士論文の全体の構想について報告する。
2. 博士論文を執筆中の者は、特定の章を報告し、参加者と教員で検討する。

共通科目

比較文化学に関する基礎的な講義

比較文化学特論Ⅰ 教 授 小林 繁樹

人類文化における「道具」の理解を進め、「道具」を創造する可能性を検討する。

比較文化学特論Ⅱ 准教授 福岡 正太

映像は、記録の手段あるいは創作的表現の媒体など、多様な可能性をもっている。それを踏まえた上で、映像による芸能の民族誌のあり方について理解を深める。



学位論文を書く

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。又専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専 攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）
比較文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）

学位論文リスト

【課程博士】

数学的手法を用いた文化分析の方法について	小島 三弘（比較）	[H4.3.31 学術]
シドニーにおける都市アボリジニの研究 伝統と民族の創出	鈴木 清史（比較）	[H6.3.24 文学]
オルドス・モンゴル族の社会構造―ヤスの機能とその歴史的変容―	楊 海英（地域）	[H6.9.20 文学]
ペルーにおける山の神信仰の現在性―アンデスの宗教的世界のダイナミズム―	細谷 広美（地域）	[H7.3.23 文学]
ビルマにおけるウェイザー信仰の研究	土佐 桂子（比較）	[H7.3.23 文学]
韓国社会の動態と「両班化」―忠清北道阿房郡における門中と儀式儀礼の検討を通して	岡田 浩樹（地域）	[H8.3.21 文学]
中国杭嘉湖地方における養蚕従事の研究	曹 建南（地域）	[H8.3.21 文学]
歌に表象される落村意識―毬美における「シマの歌」の研究―	中原ゆかり（比較）	[H8.3.21 文学]
四合院家屋の文化人類学的研究―人間と自然との相互作用の視点から	杉山 京子（地域）	[H10.3.24 文学]
モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究 ―アルタイ・ハイラハ叙事詩を事例として―	藤井 麻湖（地域）	[H10.3.24 文学]
カストム・メレシン―ヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および民間医療観の現代的位相	白川 千尋（地域）	[H10.3.24 文学]
韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究	李 善愛（比較）	[H10.3.24 文学]
東南中国の漢族社会組織とその変容―閩南農村社会における宗族の研究	潘 宏立（比較）	[H10.3.24 文学]
芸の伝承―ジャワ島・チルボンの仮面舞踊を中心に	福岡まどか（比較）	[H10.3.24 文学]
Overt First and Second Person-Designating Terms in Japanese Discourse ―A Pragmatic Perspective―	Riikka Lansisalmi（比較）	[H10.3.24 文学]
「二重の窮乏」下の平等理念―現代世界とキリバス南部環礁の社会生活―	風間 計博（地域）	[H10.9.30 文学]
建築と文化・社会との相互作用―中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象として―	栗原 伸治（地域）	[H10.9.30 学術]
カラーコラムにおけるイスマイール派の変容―宗教共同体と開発の視点から―	子島 進（地域）	[H11.3.24 文学]
地域主義運動における言語と知識人―エストニア南部ヴォル地方の事例から―	寒水 明子（地域）	[H11.3.24 学術]
英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究 ―文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相―	塩路 有子（比較）	[H12.9.29 文学]
北タイ・アカの家屋に関する研究―家屋の形式とその変化への視点から―	清水 郁郎（地域）	[H13.3.23 文学]
韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化 ―忠清南道公州市を中心として活動する薬草商人を例に―	林 史樹（地域）	[H13.3.23 文学]
現代インドネシアにおけるジャワ大衆演劇クトプラの研究	青木 武信（比較）	[H13.3.23 文学]
南ラオス村落社会における政治過程の研究―シゲの村における「連帯」と闘争―	中田 友子（地域）	[H14.3.22 文学]
20世紀前半のボリビアにおける先住民教育と植民地主義	吉江 貴文（地域）	[H14.3.22 文学]
カメルーンにおける「商売の民」バミレケの都市人類学的研究	野元 美佐（比較）	[H14.3.22 文学]
タイ式医療の構築とタイ・マッサージ―社会的文脈による権威的知識の多様性―	飯田 淳子（地域）	[H15.3.24 文学]
インドネシア・スンダの食文化―言語人類学的観点から―	阿良田麻里子（地域）	[H17.3.24 文学]
韓国の仮面劇「固城五広大」の伝承と演劇者―解放後の韓国社会における民俗芸能の変遷から―	高 正子（地域）	[H17.3.24 文学]
帰還と離散のはざまで―ウクライナ一地方都市におけるユダヤ人巡礼の民族誌―	赤尾 光春（地域）	[H17.9.30 学術]
イスラエルにおけるアラブ人キリスト教徒のアイデンティティの様態 ―ガリラヤ地方・メルキト派カトリック信徒の事例研究―	菅瀬 晶子（地域）	[H18.3.24 文学]
トンガ王国の土地制度―グローバル化のなかの伝統―	森本 利恵（地域）	[H18.3.24 文学]
バラライカの鳴り響く空間：1917～48年における社会主義の文化の生成	大家（柚木）かおり（地域）	[H18.3.24 学術]
フィジーにおける植民地主義とインド系移民社会 ―砂糖キビ栽培地域の村落社会における文化の動態―	村田 晶子（比較）	[H18.9.29 文学]
上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的研究	飯國有佳子（地域）	[H19.3.23 文学]
「護り」の身体技法に関する映像人類学研究―インドネシア・ミナンカバウの事例から―	村尾 静二（比較）	[H19.3.23 文学]
離散と故郷―ヨルダンのバレスチナ系住民にみられる帰属意識とナショナリズム―	錦田 愛子（地域）	[H19.3.23 文学]
「子ども城」の文化人類学的研究 ―バングラデシュ農村社会の子ども―	南出 和余（比較）	[H19.3.23 文学]
参加型開発を通した女性の自己変容過程に関する人類学的研究―北インド農村社会を事例として―	菅野美佐子（比較）	[H19.9.28 文学]

「場」と「パフォーマンス」に関する人類学的研究 ―トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として―	米山 知子（比較）	[H19.9.28 文学]
フェラインの民族誌―ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション―	山田 香織（地域）	[H20.3.19 文学]
水上人と呼ばれる人々―広東珠江デルタの漢族エスニシティとその変容―	長沼さやか（地域）	[H20.3.19 文学]
在米コリアンのサンフランシスコ日本町―マルチカルチャーのエスニックタウン―	小谷 幸子（比較）	[H20.3.19 文学]
インド農村社会における不妊経験の人類学的研究	松尾 瑞穂（比較）	[H20.9.30 文学]
韓国における老人の食―老人福祉施設を中心に―	守屋亜記子（地域）	[H21.3.24 文学]
日本の先史時代における植物性食料の加工と利用：残存デンプン分析法の理論と応用	渋谷 綾子（比較）	[H22.3.24 文学]
農業技術改善の民俗誌－紀ノ川下流域村落の一七～二〇世紀前半における動向の分析－	加藤 幸治（比較）	[H22.9.30 文学]
オーストラリア先住民ヨルタ・ヨルタの環境管理のための先住民運動に関する文化人類学的研究	友永 雄吾（地域）	[H23.3.24 文学]
現代タイ社会における開発と僧侶－僧侶による社会貢献とネットワーク形成に焦点をあてて－	阿部真由美（地域）	[H23.3.24 文学]
現代東南中国における宗親会の民族誌的研究―国家との関係を中心として	陳 夏暐（比較）	[H23.3.24 文学]
ヨーグルトをめぐる言説の生成と展開 ―社会主義期からポスト社会主義期にかけてのブルガリアを中心に―	マリア・ヨトヴァ（比較）	[H23.9.30 文学]
無文字社会における歴史記憶の生成と継承 －南エチオピア牧畜民ボラナにおける口承史の分析をとおして－	大場 千景（地域）	[H24.3.23 文学]
カオダイ教ハノイ聖室の民族誌的研究－ベトナム北部地域の都市における女性たちの社会関係－	伊藤まり子（地域）	[H24.3.23 文学]
周辺イスラームのダイナミズム－タイ南部村落におけるイスラーム復興運動と宗教実践の変容－	小河 久志（地域）	[H24.3.23 文学]

【論文博士】

An Areal-Typological Study of Middle American Indian Languages	八杉 佳穂	[H6.3.30 文学]
農村女性からみたトルコの「近代化」―世俗主義、イスラーム、女性の相互関係	中山 紀子	[H9.3.24 文学]
南タイにおける実践宗教―ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から―	西井 凉子	[H9.3.24 文学]
セネガルの公権力とインフォーマル・セクター―に関する民族学的研究	小川 了	[H9.3.24 文学]
メラネシアの政治的リーダーシップと開発 ―ソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐって―	関根 久雄	[H10.9.30 文学]
南インドの農村におけるカースト内関係としての親族―コング・ヴェッラーラの事例研究―	杉本 星子	[H10.9.30 文学]
アイヌ民族における神送りの研究―沙流川流域を中心に―	萱野 茂	[H13.3.23 学術]
低湿地立地の遺跡にみる縄文時代木州西部地域の生業活動 ―縄文時代早期末から中期初頭における若狭湾沿岸と琵琶湖周辺地域の動物考古学的考察―	内山 純蔵	[H14.3.22 文学]
考古学における数量化と数理的手法の研究	及川 昭文	[H14.3.22 学術]
総管信仰―近世江南農村社会と民間宗教―	濱島 敦俊	[H14.9.30 学術]
中国の食事方法―歴史人類学的考察―	西澤 治彦	[H15.3.24 文学]
台湾原住民のイノシシ（Sus scrofa taivanus）狩猟の民族考古学的研究： 動物遺存体研究の方法論構築にむけて	野林 厚志	[H15.3.24 学術]
The Transformation and Social Functions of the sNang zhig Family and its Monastery －An Ethnographic Description of the Bon Tradition in Amdo	才譲 太	[H16.9.30 学術]
利用者の視点にたった博物館の理念と活動様式の研究	布谷 知夫	[H16.9.30 文学]
トビニタイ文化の集団構成と生計戦略 ―北海道東部における「中世アイヌ社会」成立に至る一階梯―	大西 秀之	[H17.3.24 文学]
アットゥシの歴史に関する基礎的研究―アイヌ伝統文化の再検討の試みとして―	本田 優子	[H17.9.30 文学]
カナダ・イヌイットの食物分配に関する文化人類学的研究―先住民社会の変容と再生産―	岸上 伸啓	[H18.3.24 文学]
タイ中部農村における相互行為の民族誌的研究	高城 玲	[H18.3.24 文学]
東ネパールにおける羊飼いの生産活動と放牧地をめぐる社会関係	遠迫 和之	[H18.3.24 文学]
「アイヌ風俗画」の研究―近世北海道におけるアイヌと美術	新明 英仁	[H19.9.28 文学]
国際線客室乗務員の接客業務と勤務体制－仕事の人類学的研究－	八巻 恵子	[H21.9.30 文学]
シャーマニズムによるエスニシティの探求 ―ポスト社会主義期におけるモンゴル・ブリヤートの事例を中心として	島村 一平	[H22.3.24 文学]
活用される職祖伝承－近・現代日本における木工挽物の担い手と木地屋「根元地」－	木村 裕樹	[H22.9.30 文学]
先住民学習の理論と実践－ポストコロニアル人類学の活用－	中山 京子	[H22.9.30 学術]
スリランカにおけるエステート・タミルのアイデンティティと 「ジャーティヤ」をめぐる人類学的研究	鈴木 晋介	[H23.3.24 文学]
小集落から見た初期国家の形成過程－先スペイン期中央アンデスのワリ国家を事例として－	土井 正樹	[H24.3.23 文学]

年度別学位授与者数

平成		3年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	12年	13年	14年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	計
地域文化学専攻	課程博士	0	0	2	2	0	3	4	2	1	1	2	4	2	2	1	0	2	3	31
	論文博士	0	0	0	0	3	0	2	0	1	1	3	2	0	1	0	1	0	0	14
比較文化学専攻	課程博士	1	1	1	1	0	4	0	2	2	0	0	0	3	3	1	1	2	1	23
	論文博士	0	1	0	0	0	0	0	1	1	2	0	2	0	0	0	1	3	1	12
計		1	2	3	3	3	7	6	5	5	4	5	8	5	6	2	3	7	5	80

Q 国立民族学博物館に地域文化学専攻と比較文化学専攻の二専攻がありますが、これらはどのようにちがいますか？

A 地域と比較のいずれに比重を置くかにより二専攻に別れているものの、共にフィールドワークを研究の根幹においているため、共通する部分も多く、密接な相互交流があります。また、専攻間に指導上の棲み分けはなく、院生がどちらの専攻に所属していても、両専攻に所属する教員の指導を受けることができるというメリットがあります。

Q 地域文化学専攻と比較文化学専攻で学ぶことができるのは、文化人類学・民族学だけでしょうか？

A そんなことはありません。両専攻には、考古学、民俗学、建築学、情報学、言語学、音楽学、博物館学、保存科学など幅広い分野を専門とする教員がそろっているので、それらの分野でも研究を行うことができます。また、教員の陣容は年度によって変化することがあるので、希望研究内容と当専攻の教育体制との整合性について不明な点がある方は、事前にお問い合わせください。

Q 受験する前に希望する指導教員をかならず決めておく必要がありますか？

A 必要条件ではありませんが、強くお勧めします。また、受験を申請する前に希望指導教員に連絡を取れば、入学後の研究の見通しを立てる一助となるでしょう。

Q 研究支援制度にはどんなものがありますか？

A 研究に関連する様々な業務を行いながら給与を得ることができる「リサーチ・アシスタント（RA）制度」や、学会における発表やフィールドワークに対して支援をおこなう「リサーチ・トレーニング（RT）事業」があります。学内の奨学金制度はありませんが、外部研究資金調達のための申請書の書き方などについても指導を行っています。

Q 長期の現地調査をするときには、授業料が免除されますか？

A 長期フィールドワークを行う期間中は、休学が認められています。在学中に支払う授業料の総額が減額されるわけではありませんが、フィールドワークを行う学期中に授業料を払う必要はありません。

Q 地域文化学専攻と比較文化学専攻に入学すると、かならず長期の現地調査をしなければなりませんか？また、国内での現地調査も可能でしょうか？

A 実際には長期のフィールドワークを行う学生が多いのですが、研究の目的や内容によっては独自のフィールドワークの形を決めていくことも可能です。たとえば、継続した長期調査のかわりに短期の調査を繰り返しおこなうことで調査可能なテーマも存在します。また、調査対象は海外だけではありません。これまでにも数多くの卒業生が、国内のフィールドワークに基づいた博士論文を完成させています。

Q 学部や修士課程で文化人類学・民族学を専攻しなかったのですが、地域文化学専攻や比較文化学専攻を受験することはできますか？

A 大学などで正規に文化人類学・民族学を学んだ経験がなくても受験することは可能です。しかし、入学後に志望研究が遂行可能であるか見通しをつけるためにも、関連図書などを精読し、少なくとも人類学やフィールドワークに関する基本的な考え方について理解しておいたほうがよいでしょう。この作業は、何をするために当専攻を受験するのかを整理するためにも役立つはずです。

Q 受験する前に調査予定地域の現地語を習得している必要がありますか？

A 入学時にフィールドの言語を習得していることは望ましいのですが、受験の必要条件ではありません。入学前の習得が難しい言語が存在するだけでなく、それまでに習得した言語以外の地域に研究を広げる必要がある場合もあるからです。特に、現地でのみ習得可能な言語に関しては、フィールドワークをしながら徐々に身に付けていくこともあります。

みんぱくについて



館長挨拶

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する



国立民族学博物館長　須藤　健一

国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館をそなえた世界でもユニークな文化人類学・民族学の研究所です。60名の教員たちは、「地の先へ。知の奥へ。」をモットーに世界各地で、グローバリゼーションの動きを受容し、あるいはそれに抗いながら独自の社会と固有の文化を維持ないし創造している人びとの営みを研究しています。一方で、世界の諸民族の生活や考えをより深く理解するために民族資料や映像音響資料などの収集につとめ、「もの」をとおして文化を表現する展示活動も行っています。

文化人類学・民族学は、現地の人びとと生活をともにしながら日常生活から地球規模の影響をも視野に入れて人間の社会と文化を研究する学問です。異文化に生きる人びとを理解するためには幅広い視野、柔軟な思考と豊かな想像力が求められます。そして、独創的な着想から収集したデータを分析して論理的に記述する手法が大事です。

みんぱくには、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置され、文化人類学をはじめ言語学、宗教学、生態学、先史学、民族音楽学そして博物館学などを研究する個性ゆたかな教授陣がいます。そのうえ、民族資料、文献図書や映像音響などの豊富な資料を所蔵しており、研究環境の点ではわが国随一の大学院であるといえます。

私たちは、皆さんが人類学の研究課題を追求し、博士論文を書きあげて一人前の研究者として社会に飛び立つことを支援するのを楽しみにしています。



国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要

国立民族学博物館（民博）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。民博は、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究を進め、学術情報を集積しています。その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することも使命としています。

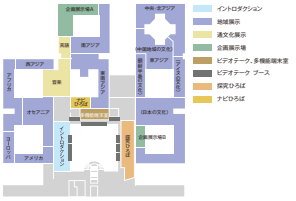
国立民族学博物館は「博物館機能をそなえた研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。民博の展示は、常設展示と特別展示とで構成されており、このうち常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示は、特定のテーマに焦点を当て、年に数回、期間を限って開催されています。

民博は、2004年４月より、国立大学と足並みをそろえて、法人組織となりました。法人の正式名称は、「大学共同利用機関法人人間文化研究機構」ですが、民博は、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所とともに、その一員として再出発しました。その後、2009年10月には６番目の大学共同利用機関として新たに国立国語研究所が設置されました。また民博の研究部は、３研究部（民族社会、民族文化、先端人類科学）２センター（研究戦略センター、文化資源研究センター）体制に組織替えがなされました。研究活動の機動性を高めるとともに、その成果をより広くわかりやすく社会に伝えていくための措置です。文化人類学・民族学を基礎としつつ、機関と分野の別を超えて、人間文化の総合的理解を深めようとする、民博の新たな活動が始まっているのです。

所蔵民族学資料（平成24年4月1日現在）

標本資料		映像音響資料	
海外資料	175,019点	映像資料	7,856点
国内資料	102,176点	音響資料	62,651点
計	277,195点	計	70,507点
文献図書資料			
日本語図書	259,454冊	日本語雑誌	9,935種
外国語図書	384,471冊	外国語雑誌	6,700種
計	643,925冊	計	16,635種

展示場案内図









総合研究大学院大学について

National University
SOKENDAI
The Graduate University for Advanced Studies

学長挨拶



総合研究大学院大学長　高畑　尚之

京都大学理学部卒、九州大学で理学博士号取得。国立遺伝学研究所研究員、助手、助教授を経て1992年本学教育研究交流センター教授に就任。2001年より副学長。2004年から2008年3月まで理事・副学長。2008年4月より現職。2003年9月に日本遺伝学会木原賞、2006年8月に日本遺伝学会賞木村賞を受賞。2002年The American Academy of Arts and Sciences 外国人名誉会員。2003年分子生物進化学会長に就任。

総合研究大学院大学（以下、総研大）は、大学共同利用機関が有する優れた人材と研究環境を活用して博士課程の教育を行い一流の研究者を養成する、という世界でも類例のないコンセプトのもとに昭和63年10月に設立されました。大学共同利用機関とは、各研究分野において日本全国の大学が共同に利用できる研究所のことです。各大学共同利用機関はそれぞれの研究分野の中核拠点としての機能、また研究者コミュニティの取りまとめ役としての機能や国際的な共同研究を推進する機能を果たしています。

総研大はこのような大学共同利用機関を研究科・専攻の基盤機関とする、学部をもたない大学院だけの大学（独立大学院大学）です。この独特の制度はそのまま総研大教育の特色となっています。もっとも顕著な点は、大学院教育が各基盤機関の研究の現場において直接実施されることです。基盤機関では専門性の高い国際的な研究活動が実施されていますが、それを活用して「高い専門性」と「国際的な通用性」を養成することを目指しています。

一方、総研大の基盤機関あるいは専攻全体をみると、文化、歴史、情報、生命、エネルギー、物質、宇宙など実に多様な分野の研究が行われています。したがって、この学術的な多様性を活用して、「広い視野」を持つ人材を養成することがもう１つの大きな教育目標です。広い視野の養成には、必ずしも複数の専門領域に精通する必要はありません。しかし、自分の領域とは異なる領域における問題や課題は何かを理解することが必要です。逆に、自らの専門領域については真摯に、かつ厳密に理解してもらわねばなりません。したがって、視野の広さとは、自分の専門的な知識を他の知識に結合することであり、知識全体の中に位置づける能力のことなのです。

学生のみなさんには、こうした総研大の制度的特色や教育目標のもとに、機会を追求して大きな課題に挑戦されることを願っています。容易に成功しそうなものを選ぶようでは、大きな成果は得られません。そのとき大学の果たすべき役割は、学生一人ひとりの強みがより大きく展開できるように指導・支援し、学んだことがやがて人生や仕事で使えるようにすることにあります。

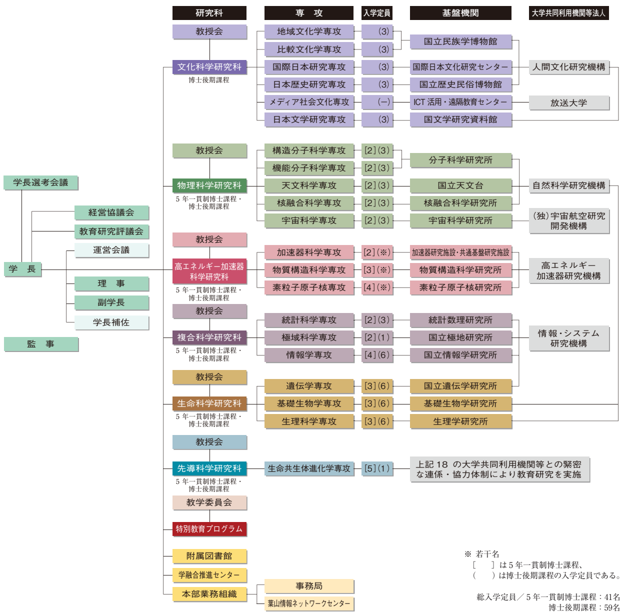
本学に限らず各大学が行っている高等教育は、「知識（基盤）社会」を支える柱です。しかし、知識社会への移行はようやく広く認識されるようになってきたところであり、多くの分野でこれまでとは全く異なった考えや仕組みを創造しなくてはならない状況にあります。大学院教育に関してもその役割と機能を見直し、責任を負うべき成果を明らかにしなければなりません。総研大においては、人材養成目的の検証、基礎教育のあり方、他機関との連携などさまざまな課題や期待があります。社会や大学のこうした移行時に、関係各位には総研大の一層の発展のためにご理解とご協力を賜りますようにお願い申し上げます。

総合研究大学院大学の特徴

特色ある博士課程教育	■5年一貫制博士課程制度と博士後期課程制度の併用 ■基盤機関の研究現場を活用した教育プログラム ■個の能力に即した教育プログラム ■社会人学生・留学生受入れプログラム
広い視野の養成	■専攻・研究科間の共同教育研究事業 ■総合科目遠隔授業プログラム ■全学学生セミナー ■全学学術交流会
高い専門性の育成	■各専攻分野の最先端研究者による研究指導 ■多様な専門教育プログラム ■学位取得プロセス管理プログラム／長倉研究奨励賞 ■基盤機関が有する世界最高水準の資料・施設・設備の活用
国際的通用性の確保	■最先端研究技術・研究者の交流拠点における教育 ■プレゼンテーション能力養成プログラム ■海外学生派遣事業 ■国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムの活用
分野横断的・先導的学問分野の創出	■学融合推進センターにおける主要四事業の推進 ■先導科学研究科における総合的な教育研究の実施 ■「科学と社会」プログラムの全学的な展開 ■修了生を中心とした学術交流ネットワーク

平成24年度 教育研究組織

（総研大 2012～2013要覧より）



※ 若干名
［　］は5年一貫制博士課程、
（　）は博士後期課程の入学定員である。

総入学定員／5年一貫制博士課程：41名
博士後期課程：59名

入学案内

詳細は募集要項を請求のうえ確認してください。

(1) 出願資格

次のいずれかに該当する者とします。

①修士の学位又は専門職学位を有する者及び入学の前月までに取得する見込みの者
②外国において、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者
③外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者
④我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位又は専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者
⑤学校教育法施行規則第156条第４号の規定により、国際連合大学の課程を修了し、修士の学位に相当する学位を授与された者及び入学の前日までに授与される見込みの者
⑥大学を卒業し、大学、研究所等において、２年以上研究に従事した者及び入学の前月までに２年以上研究に従事することとなる見込みの者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑦外国において学校教育における16年の課程を修了した後、又は外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、２年以上研究に従事した者及び入学の前月までに２年以上研究に従事することとなる見込みの者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑧本学において、個別の入学資格審査により、修士の学位又は専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、入学の前月末日までに24歳に達しているもの
（⑥～⑧により出願しようとする者は、事前に本学で実施する出願資格認定審査によって「学力の認定」を受ける必要があります）

(2) 出願期間

出願資格①～⑤に該当する者：平成24年11月30日（金）～12月６日（木）
出願資格⑥～⑧に該当する者：平成24年11月12日（月）～11月15日（木）
受付場所：総合研究大学院大学　学務課　学生厚生係
※原則郵送にて受付、持参による窓口受付も可

(3) 選抜方法

①書類選考
②修士論文等の審査
③面接（平成25年１月下旬より面接を行います）

入学者選抜試験倍率（地域・比較）

平　成	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年
志願者数	22	17	23	31	23	28	18	19	8	18	15	13	10	10	7（1）
合格者数	6（1）	7	6	8	8	7	6	7（1）	6（1）	7	4	4	5	4（1）	4（1）
倍率	3.7	2.4	3.8	3.9	2.9	4	3	2.7	1.3	2.6	3.8	3.3	2	2.5	1.5

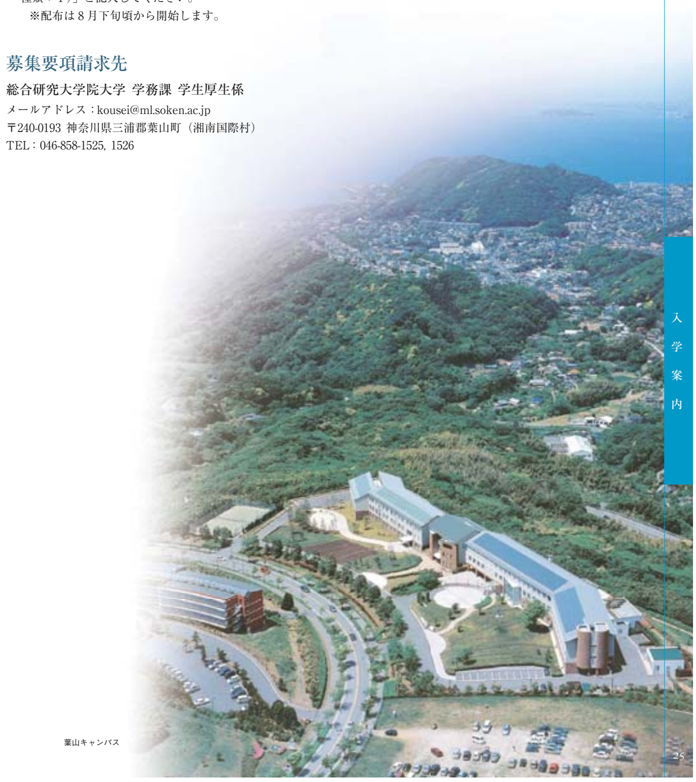
※（　）は辞退者で内数。

募集要項の請求方法

下記メールアドレスに、以下の必要事項を記入し、送信してください。
⑴郵便番号　⑵住所　⑶氏名　⑷電話番号
⑸希望する募集要項→「平成25年度４月入学 文化科学研究科地域文化学専攻・比較文化学専攻（希望する募集要項の種類：１）」と記入してください。
※配布は８月下旬頃から開始します。

募集要項請求先

総合研究大学院大学 学務課 学生厚生係
メールアドレス：kousei@ml.soken.ac.jp
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
TEL：046-858-1525, 1526

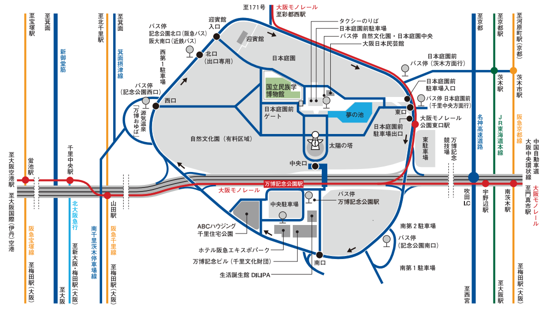


葉山キャンパス

問合せ先

国立民族学博物館 管理部研究協力課研究協力係

〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151（代表）　06-6878-8236（専攻担当）　FAX 06-6878-8479
URL http://www.minpaku.ac.jp/　　大学院トップページ
E-mail souken@idc.minpaku.ac.jp　　http://www.minpaku.ac.jp/research/education

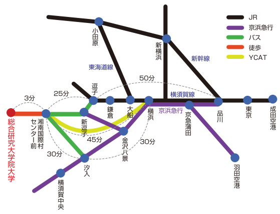


●大阪モノレールで「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車徒歩約15分
自然文化園（有料区域）を通ってこられる場合、自然文化園ゲート脇の券売機で本館（国立民族学博物館）の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。また、「公園東口駅」からは、自然文化園を通行せずに来館できます。
●バスで阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅から「日本庭園前」下車徒歩約15分。また、茨木方面からは、「自然文化園・日本庭園中央」下車徒歩約７分（１時間に１本程度）。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

総合研究大学院大学 事務局

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電話 046-858-1500（代表）　FAX 046-858-1542
URL http://www.soken.ac.jp/





携帯サイト
URL http://daigakujc.jp/sokendai/

●電車・バス利用
・JR 横須賀線逗子駅東口下車
▶京急バス①番乗り場より16 系統･26 系統「湘南国際村」行き、「湘南国際村センター前」下車　乗車時間：約25分　運賃：340円
▶京急バス②番乗り場より「湘南佐島なぎさの丘」行き、「湘南国際村間門沢調整池」下車　乗車時間：約20分　運賃：320円
・京浜急行逗子線新逗子駅南口下車
▶京急バス①番乗り場より16 系統･26 系統「湘南国際村」行き、「湘南国際村センター前」下車　乗車時間：約23分　運賃：340円
▶京急バス①番乗り場より「湘南佐島なぎさの丘」行き、「湘南国際村間門沢調整池」下車　乗車時間：約18分　運賃：320円
・京浜急行本線汐入駅下車
▶京急バス②番乗り場より16 系統「湘南国際村」行き、「湘南国際村センター前」下車　乗車時間：約30分　運賃：370円
・YCAT
▶横浜シティーエアーターミナル⑥番乗り場「横須賀西部」行き（電力中央研究所行きバス）、「湘南国際村センター前」下車　乗車時間：約45分　運賃：900円
（注）「湘南国際村センター前」下車徒歩３分、「湘南国際村間門沢調整池」下車徒歩10分

●車利用
・横浜横須賀道路（有料）「逗子インター」より逗葉新道（有料）出口より交差点左折　南郷トンネルを抜け直進約５分「湘南国際村センター入口」交差点を左折約１分

The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies
Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies

Overview '13



総合研究大学院大学
文化科学研究科

地域文化学専攻
比較文化学専攻

概要 '13

国立民族学博物館



目　次

人間と世界を究める
地域文化学・比較文化学専攻の魅力……1
文化科学研究科について……2
地域文化学・比較文化学専攻について……3

みんぱくで学ぶ
地域文化学専攻
担当教員一覧……4
2013年度開講科目　授業概要……5
比較文化学専攻
担当教員一覧……6
2013年度開講科目　授業概要……7

世界で学ぶ
学生の研究フィールド……8
在学生の研究テーマ・在学生の声
（東城義国　吉村健司）……10

学位論文を書く
過去の学位論文一覧……12
卒業生の声　山本睦　八巻恵子……14

Q&A……15

みんぱくについて
館長挨拶……16
国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要……17

総合研究大学院大学について
学長挨拶……18
総研大の特徴・組織図……19

入学案内……20

連絡先……裏表紙

人間と世界を究める

地域文化学専攻・比較文化学専攻の魅力

1．充実した教授陣

学生数をうわまわる教授陣は、学生一人一人の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また両専攻の教員は各分野の第一線で活躍する研究者であるため、最新の研究動向に基づいた指導を行うことができます。

2．豊富な情報源

日本における民族学（文化人類学）関連の最大の資料類が揃っています。また、館が主催する数多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通して、国内外の優秀な研究者との交流が容易になります。

3．各種の支援制度

授業料免除制度や奨学金、学会発表やフィールドワークへの援助など、充実した研究支援が受けられます。



地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育とは？

地域・比較文化学専攻では、以下の３点を目的とする教育活動を行っています。

① 独創的な文化人類学・民族学の研究
② 長期のフィールドワークで得られた資料にもとづく学位論文の作成
③ 広い視野をもった、専門的教養を養う

指導体制

個別指導と共同指導を組み合わせたユニークな指導体制を採用しています。各院生には正副２名の指導教員が指名され、入学から学位取得まで、これらの教員が中心となって日常的な指導をおこないます。一方、ゼミにおいては共同指導体制を取り入れています。ゼミは各４名の教員が担当し、研究の内容だけでなく発表の方法などに関する指導をおこないます。担当委員以外の教員にもゼミへの参加を求めることができ、また基本的に専攻長もゼミに出席するため、正副の指導教員を含めると10人前後の教員からコメントを得ることができます。

スケジュール

学生はおおむね１年次において「１年生ゼミ」での指導をもとに現地調査（フィールドワーク）の準備をおこない、２年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミ」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

文化科学研究科について

総合研究大学院大学、略して「総研大」は、学部をもたず大学院だけから成る国立大学として、昭和63年（1988）10月１日に開学しました。現在、全部で６つの研究科から構成されていますが、他の研究科が全て理系であるのに対して、文化科学研究科は唯一の文系研究科です。

研究科の成り立ちは、まず平成元年（1989）４月に、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻が設置されました。その後、平成４年（1992）４月に、国際日本文化研究センターを基盤とする国際日本研究専攻、平成11年（1999）４月に、国立歴史民俗博物館を基盤とする日本歴史研究専攻、平成13年（2001）４月にメディア教育開発センターを基盤とするメディア社会文化専攻、平成15年（2003）４月に、国文学研究資料館を基盤とする日本文学研究専攻が順次増設され、６専攻となりました。

国立大学の法人化に伴い、平成16年（2004）４月からは、新たに大学共同利用機関法人人間文化研究機構が設立され、４つの研究機関（国立民族学博物館、国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館）が属することとなり、独立行政法人メディア教育開発センターをあわせた５つの研究機関が基盤となりました。そして、平成21年（2009）４月に、独立行政法人メディア教育開発センターが、放送大学内に設置されたICT活用・遠隔教育センターに業務が移管され、現在に至っています。なお、総研大の他の研究科は、博士課程前期（修士）の学生を受け入れる５年一貫制を採用していますが、文化科学研究科は、博士課程後期（博士）のみから成っていることを申し添えます。

文化科学研究科の６専攻（民博から２専攻）は、それぞれが日本を代表する研究機関を基盤として、すでに多くの学位取得者、専門研究者を輩出し、またそのための努力を重ねていますが、同時に、文化科学研究科全体として、学生の専門研究を支援し、また『総研大文化科学研究』の刊行など専攻同士の横断連携を推進する事業を推進しております。



地域文化学・比較文化学専攻について

地域文化学専攻
専攻長　佐々木 史郎



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ及びオセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とします。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としています。本専攻においては、現地調査に基づいて個別文化の記述的研究を積極的に推進する、高度な専門性を持った研究者の養成を行います。

求める学生像…世界の多様な地域社会や地域文化について広い関心をもち、とりわけ文化人類学・民族学の基礎研究に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。

比較文化学専攻
専攻長　鈴木 七美



本専攻では、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術、文化資源という６つの研究分野があります。諸民族文化の比較研究により、各々に通底する普遍性の発見と理論的解明を目指しています。従来の文化人類学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入し、新しい研究方法の開発を積極的にすすめて高度な専門性を持った研究者を養成します。

求める学生像…人間の社会や文化について広い関心を抱き、とりわけ学問的な理論化やその社会的な応用に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。

両専攻のあゆみ

平成元年４月　文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）設置、学生受入、授業開始
平成12年10月　「オープンキャンパス」開催（年１回）
平成13年４月　地域文化学・比較文化学両専攻の同窓生ネットワーク発足
平成17年４月　下記 関西４大学との学生交流に関する協定を締結、単位互換授業の開講開始
・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
・大阪大学大学院人間科学研究科
・神戸大学大学院総合人間科学研究科
（平成19年度より国際文化学研究科および人間発達環境学研究科に改組）
・京都文教大学大学院文化人類学研究科

みんぱくで学ぶ

地域文化学専攻

担当教員一覧（平成25年度）26名

朝倉 敏夫（韓国社会研究）
池谷 和信（環境人類学・人文地理学・アフリカ研究・地球学）
印東 道子（オセアニア考古学）
宇田川 妙子（南ヨーロッパ研究・性研究）
樫永 真佐夫（東南アジア文化人類学）
久保 正敏（民族情報学・コンピュータ民族学・オーストラリア研究）
小長谷 有紀（牧畜文化論・モンゴル研究）
齋藤 晃（ラテンアメリカ歴史人類学）
佐々木 史郎（文化人類学・北アジア研究）
佐藤 浩司（民族建築学）
新免 光比呂（宗教学・東欧研究）
須藤 健一（社会人類学）
竹沢 尚一郎（宗教人類学・西アフリカ研究）
田村 克己（東南アジア文化人類学）
塚田 誠之（歴史民族学・中国研究）
西尾 哲夫（認識言語学・アラブ研究）
野林 厚志（民族考古学・台湾研究）
信田 敏宏（社会人類学・東南アジア研究）
林 勲男（社会人類学・オセアニア研究）
三尾 稔（文化人類学・南アジア研究）
三島 禎子（文化人類学・西アフリカ研究）
南 真木人（生態人類学・南アジア研究）
森 明子（中部ヨーロッパ文化人類学）
八杉 佳穂（言語人類学・中米文化史）
山中 由里子（比較文学・比較文化）
横山 廣子（文化人類学・中国社会研究）

地域文化学専攻授業概要（平成25年度）

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員	
アジア地域文化Ⅰ	東アジア文化研究	台湾原住民族の文化と歴史	教　授	野林　厚志
	東アジア文化研究特論Ⅰ	中国と周辺アジアにおける文化変容と社会	准教授	横山　廣子
	東アジア文化研究特論Ⅱ			
	東アジア文化研究演習Ⅰ	中国南部諸民族の歴史民族学的研究に関する講述	教　授	塚田　誠之
	東アジア文化研究演習Ⅱ	朝鮮半島を中心とした東アジアにおける社会と文化	教　授	朝倉　敏夫
	北・中央アジア文化研究	モンゴル遊牧社会論	教　授	小長谷有紀
	北・中央アジア文化研究特論	北アジア狩猟採集文化研究	教　授	佐々木史郎
	北・中央アジア文化研究演習Ⅰ			
	北・中央アジア文化研究演習Ⅱ			
アジア地域文化Ⅱ	東南アジア文化研究	東南アジアの住文化研究	准教授	佐藤　浩司
	東南アジア文化研究特論	東南アジアの周縁世界と開発	准教授	信田　敏宏
	東南アジア文化研究演習Ⅰ	東南アジア諸社会における精霊信仰	教　授	田村　克己
	東南アジア文化研究演習Ⅱ	東南アジアにおける地域文化	准教授	樫永真佐夫
	南アジア文化研究	インドのナショナリズムと宗教	准教授	三尾　稔
	南アジア文化研究特論	ネパールの現代政治と社会的包摂	准教授	南　真木人
	南アジア文化研究演習Ⅰ			
	南アジア文化研究演習Ⅱ			
	西アジア文化研究	中東イスラム社会における民衆文化	教　授	西尾　哲夫
	西アジア文化研究特論	モノと語りの相関関係を考える	准教授	山中由里子
	西アジア文化研究演習Ⅰ			
	西アジア文化研究演習Ⅱ			
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ文化研究	東欧の政治文化と宗教	准教授	新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究特論	南ヨーロッパのジェンダー・セクシュアリティ	准教授	宇田川妙子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	現代人類学とソシアルなるものの意味	教　授	森　明子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ			
アフリカ地域文化	アフリカ文化研究	人の移動に関する文化的研究	准教授	三島　禎子
	アフリカ文化研究特論			
	アフリカ文化研究演習Ⅰ	アフリカ地域の生態人類学	教　授	池谷　和信
	アフリカ文化研究演習Ⅱ	アフリカ史とアフリカ考古学	教　授	竹沢尚一郎
アメリカ地域文化	アメリカ文化研究	中米文化研究	教　授	八杉　佳穂
	アメリカ文化研究特論	南アメリカのエスノヒストリー	准教授	齋藤　晃
	アメリカ文化研究演習Ⅰ			
	アメリカ文化研究演習Ⅱ			
オセアニア地域文化	オセアニア文化研究	災害からの復興―支援、コミュニティ、文化	准教授	林　勲男
	オセアニア文化研究特論	オセアニアにおける土器文化の諸相	教　授	印東　道子
	オセアニア文化研究演習Ⅰ	オーストラリアにおける先住民文化	教　授	久保　正敏
	オセアニア文化研究演習Ⅱ			
基礎科目	地域文化学基礎演習Ⅰ	地域文化研究に関する基礎演習	准教授	樫永真佐夫
	地域文化学基礎演習Ⅱ	地域文化研究に関する基礎演習	准教授	信田　敏宏
	地域文化学演習Ⅰ	博士論文作成のための演習	教　授	野林　厚志
	地域文化学演習Ⅱ	博士論文作成のための演習	准教授	三島　禎子
共通科目	地域文化学特論Ⅰ	華南民族史誌：とくにチワン（壮）族を中心に	教　授	塚田　誠之
	地域文化学特論Ⅱ	アニミズム再考	教　授	田村　克己

※基礎科目は必修科目
※年度によって開講科目は異なる

比較文化学専攻

担当教員一覧（平成25年度）21名

飯田 卓（生態人類学・漁民研究）
韓 敏（社会人類学・中国研究）
菊澤 律子（言語学・オーストロネシア諸語）
岸上 伸啓（文化人類学・北方文化研究）
小林 繁樹（道具人類学・文化人類学・博物館学）
近藤 雅樹（民俗学・民具研究）
笹原 亮二（民俗学・民俗芸能研究）
庄司 博史（言語学・言語政策論）
杉本 良男（社会人類学・南アジア研究）
鈴木 七美（医療人類学・医療社会史）
鈴木 紀（開発人類学・ラテンアメリカ文化論）
關 雄二（アンデス考古学・ラテンアメリカ研究）
園田 直子（保存科学）
寺田 吉孝（民族音楽学・インド研究）
日髙 真吾（保存科学）
平井 京之介（経済人類学・東南アジア研究）
廣瀬 浩二郎（日本宗教史・民俗学）
福岡 正太（民族音楽学・東南アジア研究）
Matthews, Peter J.（先史学・民族植物学）
吉田 憲司（博物館人類学・アフリカ研究）
吉本 忍（民族工芸論・民族技術論）

比較文化学専攻授業概要（平成25年度）

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員	
比較社会研究	比較社会研究Ⅰ	コミュニティの人類学	教　授	平井京之介
	比較社会研究Ⅱ	中国の社会人類学―欧米・日本・中国のパースペクティブ	教　授	韓　敏
	比較社会研究特論Ⅰ			
	比較社会研究特論Ⅱ	社会・文化に関する人類学的アプローチ	教　授	岸上　伸啓
	比較社会研究演習Ⅰ	宗教とナショナリズム	教　授	杉本　良男
	比較社会研究演習Ⅱ	文化人類学の研究動向と研究課題	教　授	岸上　伸啓
	比較社会研究演習Ⅲ	社会と経済に関する人類学的アプローチ	准教授	鈴木　紀
比較宗教研究	比較宗教研究			
	比較宗教研究特論			
	比較宗教研究演習Ⅰ	多文化高齢社会におけるウェルビーイングの比較研究	教　授	鈴木　七美
	比較宗教研究演習Ⅱ			
比較技術研究	比較技術研究Ⅰ	技術の伝承と流用、創作	准教授	飯田　卓
	比較技術研究Ⅱ	物質文化研究からみた複合社会形成	教　授	關　雄二
	比較技術研究特論	「みんぱく」のコレクションと検索システムを活用した民族技術の比較研究	教　授	近藤　雅樹
	比較技術研究演習Ⅰ	アジアと太平洋地域における民族植物学と技術	准教授	Matthews,Peter J.
	比較技術研究演習Ⅱ	手織機の型式と機織り技術	教　授	吉本　忍
比較言語研究	比較言語研究	手話言語学	准教授	菊澤　律子
	比較言語研究特論			
	比較言語研究演習Ⅰ	少数言語のとらえ方	教　授	庄司　博史
	比較言語研究演習Ⅱ	オーストロネシア比較言語学	准教授	菊澤　律子
比較芸術研究	比較芸術研究Ⅰ	無形文化遺産の映像記録	准教授	福岡　正太
	比較芸術研究Ⅱ	日常的・実践的な身体技法としての芸能伝承論	教　授	笹原　亮二
	比較芸術研究特論			
	比較芸術研究演習Ⅰ	北米・ハワイのアジア系音楽	教　授	寺田　吉孝
	比較芸術研究演習Ⅱ			
文化資源研究	文化資源研究	博物館における資料管理	教　授	園田　直子
	文化資源研究特論	大規模災害時における文化資源の保全活動―被災文化財の視点から―	准教授	日髙　真吾
	文化資源研究演習Ⅰ			
	文化資源研究演習Ⅱ			
	博物館研究			
	博物館研究特論	博物館人類学	教　授	吉田　憲司
	博物館研究演習Ⅰ	文化人類学・民族学博物館における展示と活用	教　授	小林　繁樹
	博物館研究演習Ⅱ	ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践	准教授	廣瀬浩二郎
基礎科目	比較文化学基礎演習Ⅰ	比較文化研究に関する基礎演習	教　授	平井京之介
	比較文化学基礎演習Ⅱ	比較文化研究に関する基礎演習	准教授	菊澤　律子
	比較文化学演習Ⅰ	博士論文作成のための演習	准教授	Matthews,Peter J.
	比較文化学演習Ⅱ	博士論文作成のための演習	教　授	吉本　忍
共通科目	比較文化学特論Ⅰ	日本の触文化　―視覚障害者がみた世界―	准教授	廣瀬浩二郎
	比較文化学特論Ⅱ	資料の保存環境	教　授	園田　直子

※基礎科目は必修科目
※年度によって開講科目は異なる



在学生の研究テーマ

地域文化学専攻

■中国の食文化の歴史人類学的研究―制度と礼俗を中心として

■中国青海省同仁県におけるチベット文化とその民族誌的研究―同仁県ワォッコル村の事例から―

■先住民族による自然資源の利用に関する環境人類学的研究
―ニカラグア共和国・ミスキートによるウミガメ漁の事例―

■社会主義的政策下における牧畜社会の変容―中国内モンゴル・シリンゴル盟における開発を事例に―

■ベトナム北部山岳少数民族モン族社会の労働に関する民族誌的研究

■北海道西興部村における動物利用の歴史的変容に関する人類学的研究

■韓国と日本における墓と葬送儀礼の変容―「自然葬」の発生と定着を中心に

■メキシコ・ユカタン地方における先住民言語マヤユカテコ語とスペイン語の言語接触について
―音声学及び言語人類学的視点から―

■ウランバートル市のゲル地区に見られる住民の廃棄行動とその変容

■移住者の生業とホスト社会との関係：
韓国社会と日本社会に華僑移住者が生業の為に持ち込んだモノを中心に

Voice 在学生の声

地域文化学専攻
東城　義則（平成22年度入学）



幼いころ旅行で奈良公園と宮島を訪れた。この時、初めてシカという動物を知るとともに、自分よりも大きなシカがこちらから呼んでいないにも関わらず近寄ってくることに恐れを抱いた。それ以来、動物を苦手としてきた。

かくいう私の研究テーマは、人と動物とのつきあいである。具体的には、現代日本の地域社会を見つめながら、人びとの狩猟や動物飼養の技術文化について研究している。幼いころに体験した動物に対する恐怖心に触発され、人は動物とどのように折り合いをつけて生活していくのかに惹かれたためである。修士論文では奈良公園におけるシカの救護活動についての研究を行い、博士論文では北海道紋別郡西興部村におけるエゾシカ猟についての研究を進めている。

ところが研究を進めるなかで、自分自身に変化が生じてきた。当初は動物が苦手である、ということに囚われて研究をしていたが、地域社会において動物と向き合う人びとと行動を共にするうちに、なぜ自分は人と動物とのつきあいを主題にした研究を行うのか、そして自分自身の研究の社会的意義とは何かを自問自答するようになった。特に後者の問いを考えるとき、いつも次のようなことが頭にうかぶ。研究活動を通して、調査先の方々とどのような関わりを築くのか。現代社会における研究者の社会的責務とは何か。そもそも、研究とは何か…。そうそうに答えのでない、問いばかりである。

民博は博物館機能を備えた、社会に開かれている研究機関である。研究者をはじめ、人類学に関わるさまざまな人と出会える環境である。そんな環境のなか、あなたは研究活動に対して何を託し、どのような未来を追い求めるのか。民博・総研大の教職員スタッフは、博士論文執筆の指導を通して、研究者としてのステップを示しながら、あなたの背負った思いを応援してくれることでしょう。

比較文化学専攻

■ケニア沿岸州ワシニ島における資源獲得と利用のための知恵
―海との関わりを通して―

■日本と台湾における歴史的空間・建築物の保存・活用に関する博物館学的研究

■Pre- Hispanic rituals and ceremonial architecture in Peru's north central Highlands

■男女間のバーバルコミュニケーション―酒場を背景として―

■近現代アジアにおける民族衣装をまとった聖母像
―フィリピンと日本の事例を中心に―

■先史アンデス形成期における社会動態

■ラオス北部サムヌア地方における「伝統」織物の技術伝承とその変容

■沖縄島嶼地域における社会変化をめぐる民族誌的研究
―池間島のカツオ漁の衰退に伴う地域社会の適応―

■ブルキナファソのソンガイ居住村における簡易技術移転プロジェクトの人類学的研究

■造形活動にたずさわる人びと―ナイジェリア、「ヨルバの聖地」イレ・イフェの現在から

Voice 在学生の声

比較文化学専攻
吉村　健司（平成21年度入学）



現在、私が所属する比較文化学専攻は、国立民族学博物館に設置され、同博物館には多様な研究者がいる。また、様々な研究会やシンポジウムが開催されている。ここには、多くの研究者との交流が持ち、研究のアドバイスを受けることができる環境が整っている。

私は修士課程在籍時には沖縄の漁業について研究してきた。研究を進めるなかで、自身の興味関心がオセアニアへと広がった。当時の指導教員は、私の研究内容や、総研大の多くの研究者と交流が持てる環境から総研大進学を勧めてくれた。私の総研大入学当初の研究テーマはオセアニアにおける漁業を対象とした開発・援助と地域社会の変容に関するものであった。ところが、2年目のフィールドワーク時に私の研究に関する事柄について政治的状況の変化が起きた。そのため、現地での研究を断念し、新たに研究を立ち上げる必要があった。

そこで、私は、次に沖縄の漁業に関する研究を進めた。沖縄の漁業研究については、すでに修士課程時に経験はあったものの、研究内容は、それまで経験をもとに大きく発展させていく必要があった。多様な研究者が集まる総研大では、多くの研究者と交流を持つことが可能であり、私に研究の様々な発想を与えてくれた。総研大の環境は、私が新たに沖縄の漁業研究を立ち上げ、進めていくには、絶好の環境であった。さらに、今後もこの環境を活かすことで、独創的な研究へと深化させていくことができると考えている。

学位論文を書く

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。又専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専　攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）
比較文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）

学位論文リスト

【課程博士】		
数学的手法を用いた文化分析の方法について	小島　三弘（比較）	[H4.3.31 学術]
シドニーにおける都市アボリジニの研究　伝統と民族の創出	鈴木　清史（比較）	[H6.3.24 文学]
オルドス・モンゴル族の社会構造―ヤスの機能とその歴史的変容―	楊　　海英（地域）	[H6.9.20 文学]
ペルーにおける山の神信仰の現在性―アンデスの宗教的世界のダイナミズム―	細谷　広美（地域）	[H7.3.23 文学]
ビルマにおけるウェイザー信仰の研究	土佐　桂子（比較）	[H7.3.23 文学]
韓国社会の動態と「両班化」―忠清北道阿房郡における門中と儀式儀礼の検討を通して	岡田　浩樹（地域）	[H8.3.21 文学]
中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究	曹　　建南（地域）	[H8.3.21 文学]
歌に表象される落村意識―奄美における「シマの歌」の研究―	中原ゆかり（比較）	[H8.3.21 文学]
四合院家屋の文化人類学的研究―人間と自然との相互作用の視点から	杉山　京子（地域）	[H10.3.24 文学]
モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究―アルタイ・ハイラハ叙事詩を事例として―	勝井　麻湖（地域）	[H10.3.24 文学]
カストム・メレシン―ヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および民間医療観の現代的位相	白川　千尋（地域）	[H10.3.24 文学]
韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究	李　　善愛（比較）	[H10.3.24 文学]
東南中国の漢族社会組織とその変容―閩南農村社会における宗族の研究	潘　　宏立（比較）	[H10.3.24 文学]
芸の伝承―ジャワ島・チルボンの仮面舞踊を中心に	福岡まどか（比較）	[H10.3.24 文学]
Overt First and Second Person-Designating Terms in Japanese　Discourse ―A Pragmatic Perspective―	Riikka Lanisalmi(比較)	[H10.3.24 文学]
「二重の窮乏」下の平等理念―現代世界とキリバス南部環礁の社会生活―	風間　計博（地域）	[H10.9.30 文学]
建築と文化・社会との相互作用―中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象として―	栗原　伸治（地域）	[H10.9.30 学術]
カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容―宗教共同体と開発の視点から―	子島　　進（地域）	[H11.3.24 文学]
地域主義運動における言語と知識人―エストニア南部ヴォル地方の事例から―	寒水　明子（地域）	[H11.3.24 学術]
英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究 ―文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相―	塩路　有子（比較）	[H12.9.29 文学]
北タイ・アカの家屋に関する研究―家屋の形式とその変化への視点から―	清水　郁郎（地域）	[H13.3.23 文学]
韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化―忠清南道公州市を中心として活動する薬草商人を例に―	林　　史樹（地域）	[H13.3.23 文学]
現代インドネシアにおけるジャワ大衆演劇クトプラの研究	青木　武信（比較）	[H13.3.23 文学]
南ラオス村落社会における政治過程の研究―シゲの村における「連帯」と闘争―	中田　友子（地域）	[H14.3.22 文学]
20世紀前半のボリビアにおける先住民教育と植民地主義	吉江　貴文（地域）	[H14.3.22 文学]
カメルーンにおける「商売の民」バミレケの都市人類学的研究	野元　美佐（比較）	[H14.3.22 文学]
タイ式医療の構築とタイ・マッサージ―社会的文脈による権威的知識の多様性―	飯田　淳子（地域）	[H15.3.24 文学]
インドネシア・スンダの食文化―言語人類学的観点から―	阿良田麻里子（地域）	[H17.3.24 文学]
韓国の仮面劇「固城五広大」の伝承と演劇者―解放後の韓国社会における民俗芸能の変遷から―	高　　正子（地域）	[H17.3.24 文学]
帰還と離散のはざまで―ウクライナ地方都市におけるユダヤ人巡礼の民族誌―	赤尾　光春（地域）	[H17.9.30 学術]
イスラエルにおけるアラブ人キリスト教徒のアイデンティティの様態 ―ガリラヤ地方・メルキト派カトリック信徒の事例研究―	菅瀬　晶子（地域）	[H18.3.24 文学]
トンガ王国の土地制度―グローバル化のなかの伝統―	森本　利恵（地域）	[H18.3.24 文学]
バラライカの鳴り響く空間：1917～48年における社会主義の文化の生成	大家(柚木)かおり(地域)	[H18.3.24 学術]
フィジーにおける植民地主義とインド系移民社会―砂糖キビ栽培地域の村落社会における文化の動態―	村田　晶子（比較）	[H18.9.29 文学]
上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的研究	飯國有佳子（地域）	[H19.3.23 文学]
「護り」の身体技法に関する映像人類学研究―インドネシア・ミナンカバウの事例から―	村尾　静二（比較）	[H19.3.23 文学]
離散と故郷―ヨルダンのパレスチナ系住民にみられる帰属意識とナショナリズム―	錦田　愛子（地域）	[H19.3.23 文学]
「子ども域」の文化人類学的研究 ―バングラデシュ農村社会の子ども―	南出　和余（比較）	[H19.3.23 文学]
参加型開発を通した女性の自己変容過程に関する人類学的研究―北インド農村社会を事例として―	菅野美佐子（地域）	[H19.9.28 文学]
「場」と「パフォーマンス」に関する人類学的研究―トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として―	米山　知子（比較）	[H19.9.28 文学]
フェラインの民族誌―ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション―	山田　香織（地域）	[H20.3.19 文学]
水上人と呼ばれる人々―広東珠江デルタの漢族エスニシティとその変容―	長沼さやか（地域）	[H20.3.19 文学]
在米コリアンのサンフランシスコ日本町―マルチカルチャーのエスニックタウン―	小谷　幸子（比較）	[H20.3.19 文学]
インド農村社会における不妊経験の人類学的研究	松尾　瑞穂（比較）	[H20.9.30 文学]
韓国における老人の食―老人福祉施設を中心に―	守屋亜紀子（地域）	[H21.3.24 文学]
日本の先史時代における植物性食料の加工と利用：残存デンプン分析法の理論と応用	渋谷　綾子（比較）	[H22.3.24 文学]
農業技術改善の民俗誌―紀ノ川下流域村落の一七～二〇世紀前半における動向の分析―	加藤　幸治（比較）	[H22.9.30 文学]
オーストラリア先住民ヨルタ・ヨルタの環境管理のための先住民運動に関する文化人類学的研究	友永　雄吾（地域）	[H23.3.24 文学]
現代タイ社会における開発と僧侶―僧侶による社会貢献とネットワーク形成に焦点をあてて―	岡部真由美（地域）	[H23.3.24 文学]
現代東南中国における宗親会の民族誌的研究―国家との関係を中心として	陳　　夏暉（比較）	[H23.3.24 文学]
ヨーグルトをめぐる言説の生成と展開―社会主義期からポスト社会主義期にかけてのブルガリアを中心に―	マリア・ヨトヴァ(比較)	[H23.9.30 文学]
無文字社会における歴史記憶の生成と継承　―南エチオピア牧畜民ボラナにおける口承史の分析をとおして―	大場　千景（地域）	[H24.3.23 文学]
カオダイ教ハノイ聖室の民族誌的研究―ベトナム北部地域の都市における女性たちの社会関係―	伊藤まり子（地域）	[H24.3.23 文学]
周辺イスラームのダイナミズム―タイ南部村落におけるイスラーム復興運動と宗教実践の変容―	小河　久志（地域）	[H24.3.23 文学]
変化しつづける装い―中国雲南省文山モンの自己と他者をめぐる人類学的服飾研究―	宮脇　千絵（地域）	[H24.9.28 文学]
現代アンデス農村における聖人信仰の変容　―人の移動に焦点をあてて―	八木百合子（比較）	[H24.9.28 文学]

【論文博士】		
An Areal-Typological Study of Middle American Indian Languages	八杉　佳穂	[H6.3.30 文学]
農村女性からみたトルコの「近代化」―世俗主義、イスラーム、女性の相互関係	中山　紀子	[H9.3.24 文学]
南タイにおける実践宗教―ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から―	西井　凉子	[H9.3.24 文学]
セネガルの公権力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究	小川　　了	[H9.3.24 文学]
メラネシアの政治的リーダーシップと開発 ―ソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐって―	関根　久雄	[H10.9.30 文学]
南インドの農村におけるカースト内関係としての親族―コング・ヴェッラーラの事例研究―	杉本　星子	[H10.9.30 文学]
アイヌ民族における神送りの研究―沙流川流域を中心に―	萱野　　茂	[H13.3.23 学術]
低湿地立地の遺跡にみる縄文時代本州西部地域の生業活動 ―縄文時代早期末から中期初頭における若狭湾沿岸と琵琶湖周辺地域の動物考古学的考察―	内山　純蔵	[H14.3.22 文学]
考古学における数量化と数理的手法の研究	及川　昭文	[H14.3.22 学術]
鼓管信仰―近世江南農村社会と民間宗教―	濱島　敦俊	[H14.9.30 学術]
中国の食事方法―歴史人類学的考察―	西澤　治彦	[H15.3.24 文学]
台湾原住民のイノシシ（Sus scrofa taivanus）狩猟の民族考古学的研究：動物遺存体研究の方法論構築にむけて	野林　厚志	[H15.3.24 学術]
The Transformation and Social Functions of the sNang zhig Family and its Monastery ―An Ethnographic Description of the Bon Tradition in Amdo	才譲　　太	[H16.9.30 学術]
利用者の視点にたった博物館の理念と活動様式の研究	布谷　知夫	[H16.9.30 文学]
トビニタイ文化の集団構成と生計戦略―北海道東部における「中世アイヌ社会」成立に至る一階梯―	大西　秀之	[H17.3.24 文学]
アットッシの歴史に関する基礎的研究―アイヌ伝統文化の再検討の試みとして―	本田　優子	[H17.9.30 文学]
カナダ・イヌイットの食物分配に関する文化人類学的研究―先住民社会の変容と再生産―	岸上　伸啓	[H18.3.24 文学]
タイ中部農村における相互行為の民族誌的研究	高城　　玲	[H18.3.24 文学]
東ネパールにおける辛抱いの生産活動と放牧地をめぐる社会関係	渡辺　和之	[H18.3.24 文学]
「アイヌ風俗画」の研究―近世北海道におけるアイヌと美術	新明　英仁	[H19.9.28 文学]
国際線客室乗務員の接客業務と勤務体制―仕事の人類学的研究―	八巻　恵子	[H21.9.30 文学]
シャーマニズムによるエスニシティの探求 ―ポスト社会主義期におけるモンゴル・ブリヤートの事例を中心として	島村　一平	[H22.3.24 文学]
活用される職祖伝承―近・現代日本における木工挽物の担い手と木地屋「模元地」―	木村　裕樹	[H22.9.30 文学]
先住民学習の理論と実践―ポストコロニアル人類学の活用―	中山　京子	[H22.9.30 学術]
スリランカにおけるエステート・タミルのアイデンティティと「ジャーティヤ」をめぐる人類学的研究	鈴木　晋介	[H23.3.24 文学]
小集落から見た初期国家の形成過程―先スペイン期中央アンデスのワリ国家を事例として―	土井　正樹	[H24.3.23 文学]
先史アンデス形成期の社会動態 ―ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から―	山本　睦	[H24.9.28 文学]
多文化都市・新宿の生成と展開―ライフサイクルの視座―	川村千鶴子	[H25.3.22 学術]

年度別学位授与者数

平　成		3年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	12年	13年	14年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	計
地域文化学専攻	課程博士	0	0	2	2	0	3	4	2	1	1	2	4	2	2	1	0	2	3	1	32
	論文博士	0	0	0	0	3	0	2	0	1	1	3	2	0	1	0	1	0	0	1	15
比較文化学専攻	課程博士	1	1	1	1	0	4	0	2	2	0	0	0	3	3	1	1	2	1	1	24
	論文博士	0	1	0	0	0	0	0	1	1	2	0	2	0	0	0	1	3	1	1	13
計		1	2	3	3	3	7	6	5	5	4	5	8	5	6	2	3	7	5	4	84

Voice 卒業生の声

国立民族学博物館機関研究員
山本 睦（平成24年9月学位取得）

本当に長きにわたった私の学生生活の最後を飾った場所、それが民博である。

私の研究課題は、先史アンデス文明の形成過程、とくに文明の基盤が築かれたとされる前国家社会の動態を明らかにすることである。こうした問題に取り組むには、考古学調査を中心とした長期フィールドワークと、考古学ないし人類学の様々な知見が必要である。そして、このような研究を進めていくために、人類学・民族学研究の中心地である民博は最も優れた研究機関の一つといえる。

専門や関心分野の異なる多数の院生や教員が集まり、多角的な視点から優しくも厳しい数々のコメントを投げかけてくれる大学院のゼミ。日本だけでなく、フィールドにおいても行われる指導教員による直接指導。必要なものは大抵そろっている図書館。頻繁に開催され、著名な研究者が集まって最新の議論が交わされる研究会やシンポジウム。機材の貸し出しから、調査や研究発表の支援までしてくれる体制。これらの全てが備わった大学院は、日本中を探しても多くはないだろう。こうした民博の良さは、一旦、民博から離れてみると、本当によくわかる。

また、アカデミックな場に限らず、個性豊かな多くの面白い人たちとの出会いがあることも民博の大きな魅力の一つであり、それは私にとって貴重な財産となっている。

新入生の皆さんには、民博の特徴を最大限に活用して、濃い時間を過ごしてほしい。

広島大学マネジメント研究センター　特任准教授
八巻 恵子（平成21年9月学位取得）

国立民族学博物館では、大学共同利用機関として、国内外のさまざまな専門分野の研究者らと分野横断的で高度な学術研究が進められている。これらの共同研究会に院生のうちから参加できることは、研究者の卵としては大変に幸運だと思う。私が民博に進学を決めた最大の理由でもある。社会人学生だった私の研究テーマは、グローバル企業の仕事やグローバルスペースにおける生産価値の変容であった。民博の共同研究会の一つの経営人類学研究会は、1993年から文化人類学者、経営学、社会学、宗教学者他の研究者らが集まり、多様なフレームワークによる新新な研究プロジェクトを運営していた。研究のプロフェッショナル集団の洗練された議論は、院生にとってはまぶしい刺激であった。

民博自慢の図書館もすばらしく私の大好きな空間だった。専門書の蔵書の充実はもちろん、プライベート空間がたくさんあり、知の世界を堪能できる聖空間だ。さらに民博には院生の倍の教員がいることも大きな魅力である。

一方で、「すでに研究者だと思ってここには来なさい」と初日に言われたことは今も忘れない。抜群の研究環境も自らが主体的に動くことによってこそ生かすことができる。新入生にはぜひこの豊かな資源をフル活用し、自身の未来を開いていってもらいたい。

地域文化学専攻および比較文化学専攻の出身者は、以下のようなところに在職し、教育研究に活躍しています。

愛知淑徳大学、愛媛大学、大阪大学、大谷大学、沖縄県立芸術大学、帯広大谷短期大学、鹿児島国際大学、鹿児島純心女子大学、神奈川大学、川崎医療福祉大学、関西外国語大学、神田外語大学、京都外国語大学、京都大学、京都文教大学、神戸大学、神戸市外国語大学、神戸山手大学、成蹊大学、滋賀県立大学、静岡大学、四天王寺大学、芝浦工業大学、大阪工業大学、中部大学、筑波大学、天理大学、東京外国語大学、東北学院大学、東洋大学、長崎純心大学、新潟国際情報大学、日本大学、阪南大学、広島大学、広島市立大学、宮崎公立大学、桃山学院大学、インドネシア学術総局［インドネシア］、上海師範大学［中国］、北京大学［中国］、ライデン大学［オランダ］、在ペルー日本国大使館、総合地球環境学研究所、総合研究大学院大学、国立民族学博物館

Q&A

Q 国立民族学博物館に地域文化学専攻と比較文化学専攻の二専攻がありますが、これらはどのようにちがいますか？

A 地域と比較のいずれに比重を置くかにより専攻に別れているものの、共にフィールドワークを研究の根幹においているため、共通する部分も多く、密接な相互交流があります。また、専攻間に指導上の棲み分けはなく、院生がどちらの専攻に所属していても、両専攻に所属する教員の指導を受けることができるというメリットがあります。

Q 地域文化学専攻と比較文化学専攻で学ぶことができるのは、文化人類学・民族学だけでしょうか？

A そんなことはありません。両専攻には、考古学、風俗学、建築学、情報学、言語学、音楽学、博物館学、保存科学など幅広い分野を専門とする教員がそろっているので、それらの分野でも研究を行うことができます。また、教員の陣容は年度によって変化することがあるので、希望研究内容と当専攻の教育体制との整合性について不明な点がある方は、事前にお問い合わせください。

Q 長期の現地調査をするときには、授業料が免除されますか？

A 長期フィールドワークを行う期間中は、休学が認められています。在学中に支払う授業料の総額が減額されるわけではありませんが、フィールドワークを行う学期中に授業料を払う必要はありません。

Q 学部や修士課程で文化人類学・民族学を専攻しなかったのですが、地域文化学専攻や比較文化学専攻を受験することはできますか？

A 大学などで正規に文化人類学・民族学を学んだ経験がなくても受験することは可能です。しかし、入学後に志望研究が遂行可能であるか見通しをつけるためにも、関連図書などを精読し、少なくとも人類学やフィールドワークに関する基本的な考え方につ いて理解しておいたほうがよいでしょう。この作業は、何をするために当専攻を受験するのかを整理するためにも役立つはずです。

Q 受験する前に希望する指導教員を決めならず決めておく必要がありますか？

A 必要条件ではありませんが、強くお勧めします。また、受験を申請する前に希望指導教員に連絡を取れば、入学後の研究の見通しを立てる一助となるでしょう。

Q 研究支援制度にはどんなものがありますか？

A 研究に関連する様々な業務を行いな 給与を得ることができる「リサーチ・アシスタント（RA）制度」や、学会における発表やフィールドワークに対して支援をおこなう「文化科学研究科学生派遣事業」があります。学内の奨学金制度はありませんが、外部研究資金調達のための申請書の書き方などについても指導を行っています。

Q 地域文化学専攻と比較文化学専攻に入学すると、かならず長期の現地調査をしなければなりませんか？また、国内での現地調査も可能でしょうか？

A 実際には長期のフィールドワークを行う学生が多いのですが、研究の目的や内容によっては独自のフィールドワークの形を決めていくことも可能です。たとえば、継続した長期調査のかわりに短期の調査を繰り返しおこなうことで調査可能なテーマも存在します。また、調査対象は海外だけではありません。これまでにも数多くの卒業生が、国内のフィールドワークに基づいた博士論文を完成させています。

Q 受験する前に調査予定地域の現地語を習得している必要がありますか？

A 入学時にフィールドの言語を習得していることは望ましいのですが、受験の必要条件ではありません。入学前の習得が難しい言語が存在するだけでなく、それまでに習得した言語以外の地域に研究を広げる必要がある場合もあるからです。特に、現地でのみ習得可能な言語に関しては、フィールドワークをしながら除々に身に付けていくこともあります。

みんぱくについて



館長挨拶

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する



国立民族学博物館長　須藤　健一

国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館をそなえた世界でもユニークな文化人類学・民族学の研究所です。60名の教員たちは、「地の先へ。知の奥へ。」をモットーに世界各地で、グローバリゼーションの動きを受容し、あるいはそれに抗いながら独自の社会と固有の文化を維持ないし創造している人びとの営みを研究しています。一方で、世界の諸民族の生活や考えをより深く理解するために民族資料の収集や映像音響資料の採録などにつとめ、また、「もの」をとおして文化を表現する展示活動も行っています。

文化人類学・民族学は、現地の人びとと生活をともにしながら日常生活から地球規模の影響をも視野に入れて人間の社会と文化を研究する学問です。異文化に生きる人びとを理解するためには幅広い視野、柔軟な思考と豊かな想像力が求められます。そして、独創的な着想から収集したデータを分析して論理的に記述する手法が大事です。

みんぱくには、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置され、文化人類学をはじめ言語学、宗教学、生態学、先史学、民族音楽学そして博物館学などを研究する個性ゆたかな教授陣がいます。そのうえ、民族資料、文献図書や映像音響などの豊富な資料を所蔵しており、研究環境の点ではわが国随一の大学院であるといえます。

私たちは、皆さんが人類学の研究課題を追求し、博士論文を書きあげて一人前の研究者として社会に飛び立つことを支援するのを楽しみにしています。



国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要

国立民族学博物館（民博）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。民博は、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究や共同研究を進めるとともに、学術情報を集積しています。その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することも使命としています。

国立民族学博物館は「博物館機能をそなえた研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。民博の展示は、常設展示と特別展示と企画展示とで構成されており、常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示と企画展示は、特定のテーマのもとに、年に数回、期間を限って開催されます。

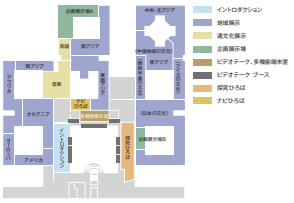
民博は、2004年４月より、国立大学と足並みをそろえて、法人組織となりました。法人の正式名称は、「大学共同利用機関法人人間文化研究機構」ですが、民博は、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所とともに、その一員として再出発しました。その後、2009年10月には６番目の大学共同利用機関として新たに国立国語研究所が加わりました。また民博の研究部は、３研究部（民族社会、民族文化、先端人類科学）２センター（研究戦略センター、文化資源研究センター）体制に組織替えがなされました。研究活動の機動性を高めるとともに、その成果をより広くわかりやすく社会に伝えていくための措置です。文化人類学・民族学を基礎としつつ、研究の機関と分野の別を超えて、人間文化の総合的理解を深めようとする、民博の新たな活動が始まっているのです。

所蔵民族学資料（平成25年4月1日現在）

標本資料（未登録資料含む）		映像音響資料	
海外資料	175,623点	映像資料	7,878点
国内資料※	約159,830点	音響資料	62,651点
計	約335,453点	計	70,529点
文献図書資料			
日本語図書	261,415冊	日本語雑誌	9,985種
外国語図書	388,370冊	外国語雑誌	6,773種
計	649,785冊	計	16,758種

※（うち、「玩具及び関連世相資料（未登録資料）」約56,000点）

展示場案内図









総合研究大学院大学について

National University
SOKENDAI
The Graduate University for Advanced Studies

学長挨拶



総合研究大学院大学長　高畑　尚之

京都大学理学部卒、九州大学で理学博士号取得。国立遺伝学研究所研究員、助手、助教授を経て1992年本学教育研究交流センター教授に就任。2001年より副学長、2004年から2008年3月まで理事・副学長。2008年4月より現職。2003年9月に日本遺伝学会会木賞受、2006年8月に日本進化学会学会賞木村賞を受賞。2002年The American Academy of Arts and Sciences 外国人名誉会員、2003年分子生物進化学会長に就任。

総合研究大学院大学（以下、総研大）は、大学共同利用機関が有する優れた人材と研究環境を活用して博士課程の教育を行い一流の研究者を養成する、という世界でも類例のないコンセプトのもとに昭和63年10月に設立されました。大学共同利用機関とは、各研究分野において日本全国の大学が共同に利用できる研究所のことです。各大学共同利用機関はそれぞれの研究分野の中核拠点としての機能、また研究者コミュニティの取りまとめ役としての機能や国際的な共同研究を推進する機能を果たしています。

総研大はこのような大学共同利用機関を研究科・専攻の基盤機関とする、学部をもたない大学院だけの大学（独立大学院大学）です。この独特の制度はそのまま総研大教育の特色となっています。もっとも顕著な点は、大学院教育が各基盤機関の研究の現場において直接実施されることです。基盤機関では専門性の高い国際的な研究活動が実施されていますが、それを活用して「高い専門性」と「国際的な通用性」を養成することを目指しています。

一方、総研大の基盤機関あるいは専攻全体をみると、文化、歴史、情報、生命、エネルギー、物質、宇宙など実に多様な分野の研究が行われています。したがって、この学術的な多様性を活用して、「広い視野」を持つ人材を養成することがもう１つの大きな教育目標です。広い視野の養成には、必ずしも複数の専門領域に精通する必要はありません。しかし、自分の領域とは異なる領域における問題や課題は何かを理解することが必要です。逆に、自らの専門領域については真摯に、かつ厳密に理解してもらわねばなりません。したがって、視野の広さとは、自分の専門的な知識を他の知識に結合することであり、知識全体の中に位置づける能力のことなのです。

学生のみなさんには、こうした総研大の制度的特色や教育目標のもとに、機会を追求して大きな課題に挑戦されることを願っています。容易に成功しそうなものを選ぶようでは、大きな成果は得られません。そのとき大学の果たすべき役割は、学生一人ひとりの強みがより大きく展開できるように指導・支援し、学んだことがやがて人生や仕事で使えるようにすることにあります。

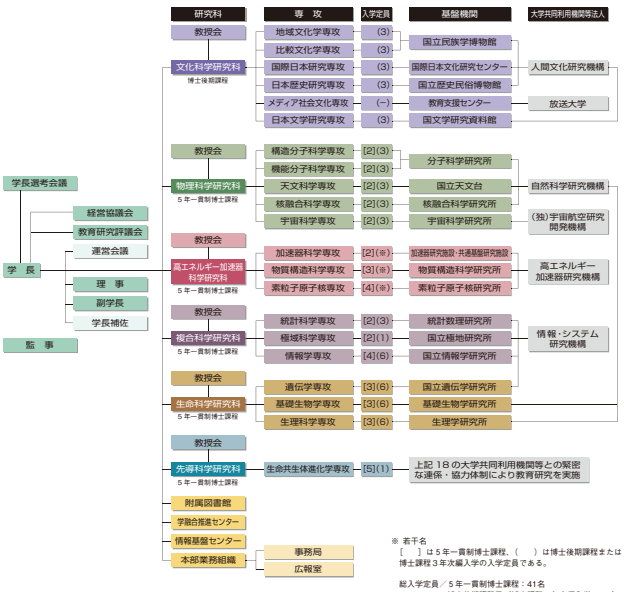
本学に限らず各大学が行っている高等教育は、「知識（基盤）社会」を支える柱です。しかし、知識社会への移行はようやく広く認識されるようになってきたところであり、多くの分野でこれまでとは全く異なった考えや仕組みを創造しなくてはならない状況にあります。大学院教育に関してもその役割と機能を見直し、責任を負うべき成果を明らかにしなければなりません。総研大においては、人材養成目的の検証、基礎教育のあり方、他機関との連携などさまざまな課題や期待があります。社会や大学のこうした移行時に、関係各位には総研大の一層の発展のためにご理解とご協力を賜りますようにお願い申し上げます。

総合研究大学院大学の特徴

特色ある博士課程教育	■ 5年一貫制博士課程制度と博士後期課程制度の併用 ■ 基盤機関の研究現場を活用した教育プログラム ■ 個の能力に即した教育プログラム ■ 社会人学生・留学生受入れプログラム
広い視野の養成	■ 専攻・研究科間の共同教育研究事業 ■ 総合科目遠隔授業プログラム ■ 全学学生セミナー ■ 全学学術交流会
高い専門性の育成	■ 各専攻分野の最先端研究者による研究指導 ■ 多様な専門教育プログラム ■ 学位取得プロセス管理プログラム／長倉研究奨励賞 ■ 基盤機関が有する世界最高水準の資料・施設・設備の活用
国際的通用性の確保	■ 最先端研究技術・研究者の交流拠点における教育 ■ プレゼンテーション能力養成プログラム ■ 海外学生派遣事業 ■ 国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムの活用
分野横断的・先導的学問分野の創出	■ 学融合推進センターにおける主要四事業の推進 ■ 先導科学研究科における総合的な教育研究の実施 ■『科学と社会』プログラムの全学的な展開 ■ 修了生を中心とした学術交流ネットワーク

平成25年度　教育研究組織

（総研大 2013～2014案覧より）



※ 若干名
［　］は５年一貫制博士課程、（　）は博士後期課程または博士課程３年次編入学の入学定員である。

総入学定員／５年一貫制博士課程：41名
博士後期課程及び博士課程３年次編入学：59名

入学案内

詳細は募集要項を請求のうえ確認してください。

(1) 出願資格

次のいずれかに該当する者とします。

①修士の学位または専門職学位を有する者及び入学の前月までに取得する見込みの者
②外国において、修士の学位または専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者
③外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位または専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者
④我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置づけられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位または専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者
⑤学校教育法施行規則第156条第４号の規定により、国際連合大学の課程を修了し、修士の学位に相当する学位を授与された者及び入学の前日までに授与される見込みの者
⑥外国の学校、外国の大学院の課程を有する教育施設または国際連合大学の教育課程を履修し、大学院設置基準（昭和49年文部省令第28号）第16条の２に規定する試験及び審査に相当するものに合格し、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者及び入学の前月までに認められる見込みの者
⑦大学を卒業し、大学、研究所等において、２年以上研究に従事した者及び入学の前月までに２年以上研究に従事する見込みの者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑧外国において学校教育における16年の課程を修了した後、または外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において２年以上研究に従事した者及び入学の前月までに２年以上研究に従事する見込みの者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑨本学において、個別の入学資格審査により、修士の学位または専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、入学の月の１日において24歳に達している者
（⑥～⑨により出願しようとする者は、事前に本学で実施する出願資格認定審査によって「学力の認定」を受ける必要があります）

(2) 出願期間

出願資格①～⑤に該当する者：平成25年11月29日（金）～12月５日（木）
出願資格⑥～⑨に該当する者：平成25年11月11日（月）～11月14日（木）
受付場所：総合研究大学院大学　学務課　学生厚生係
※原則郵送にて受付、持参による窓口受付も可

(3) 選抜方法

①書類選考
②修士論文等の審査
③面接（平成26年１月下旬より面接を行います）

入学者選抜試験倍率（地域・比較）

平　成	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年
志願者数	22	17	23	31	23	28	18	19	8	18	15	13	10	10	7(1)	8(1)
合格者数	6(1)	7	6	8	8	7	6	7(1)	6(1)	7	4	4	5	4(1)	4(1)	4
倍率	3.7	2.4	3.8	3.9	2.9	4	3	2.7	1.3	2.6	3.8	3.3	2	2.5	1.5	1.8

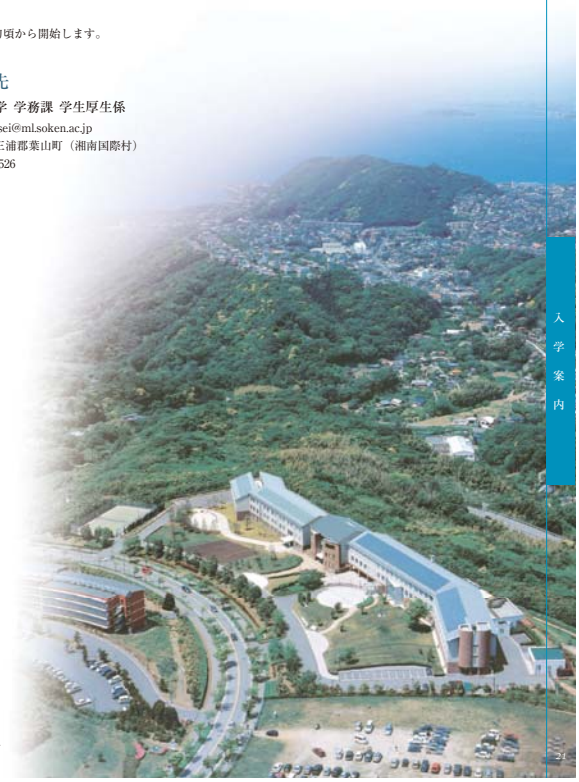
※（ ）は辞退者で内数。

募集要項の請求方法

下記メールアドレスに、以下の必要事項を記入し、送信してください。
(1) 郵便番号
(2) 住所
(3) 氏名
(4) 電話番号
※配布は８月下旬頃から開始します。

募集要項請求先

総合研究大学院大学　学務課　学生厚生係
メールアドレス：kousei@ml.soken.ac.jp
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
TEL：046-858-1525, 1526

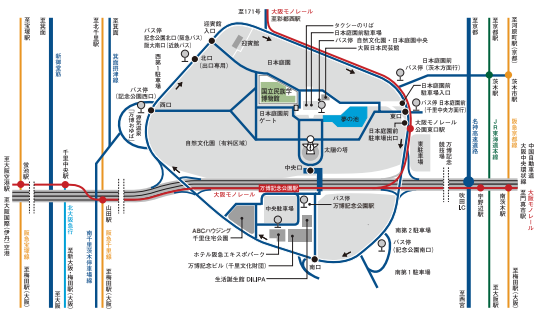


葉山キャンパス

問合せ先

国立民族学博物館　管理部研究協力課研究協力係

〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151(代表)　06-6878-8236(専攻担当)　FAX 06-6878-8479
URL http://www.minpaku.ac.jp/　大学院トップページ
E-mail souken@idc.minpaku.ac.jp　http://www.minpaku.ac.jp/research/education

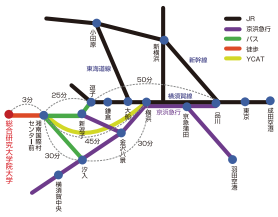


●大阪モノレールで「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車徒歩約15分
自然文化園（有料区域）を通ってこられる場合、自然文化園ゲート脇の券売機で本館（国立民族学博物館）の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。また、「公園東口駅」からは、自然文化園を通行せずに来館できます。
●バスで阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅から「日本庭園前」下車徒歩約15分。また、茨木方面からは、「自然文化園・日本庭園中央」下車徒歩約７分（１時間に１本程度）。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

総合研究大学院大学　事務局

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電話 046-858-1500(代表)　FAX 046-858-1542
URL http://www.soken.ac.jp/





●電車・バス利用
・JR 横須賀線逗子駅東口下車
▶京急バス①乗り場より16 系統-26 系統「湘南国際村」行き、「湘南国際村センター前」下車
乗車時間：約25分　運賃：340円
▶京急バス②乗り場より「湘南佐島なぎさの丘」行き、「湘南国際村間門訳調整池」下車
乗車時間：約20分　運賃：320円
・京浜急行逗子・葉山駅東口下車
▶京急バス①乗り場より16 系統-26 系統「湘南国際村」行き、「湘南国際村センター前」下車
乗車時間：約23分　運賃：340円
▶京急バス②乗り場より「湘南佐島なぎさの丘」行き、「湘南国際村間門訳調整池」下車
乗車時間：約18分　運賃：320円
・京浜急行本線京入駅下車
▶京急バス②乗り場より16 系統「湘南国際村」行き、「湘南国際村センター前」下車
乗車時間：約30分　運賃：370円
・YCAT
▶横浜シティーエアーターミナル⑤番乗り場「横須賀西部」行き（電力中央研究所行きバス）、「湘南国際村センター前」下車　乗車時間：約45分　運賃：900円
（注）「湘南国際村センター前」下車徒歩３分、「湘南国際村間門訳調整池」下車徒歩10分

●車利用
・横浜横須賀道路（有料）「逗子インター」より逗葉新道（有料）出口より交差点左折
南郷トンネルを抜け直進約５分「湘南国際村センター入口」交差点を左折約１分

The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies

Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies

Overview '14



総合研究大学院大学
文化科学研究科

地域文化学専攻
比較文化学専攻

概要 '14

国立民族学博物館

目　次

人間と世界を究める

地域文化学・比較文化学専攻の魅力……1
文化科学研究科について……2
地域文化学・比較文化学専攻について……3

みんぱくで学ぶ

地域文化学専攻
担当教員一覧……4
2014年度開講科目　授業概要……5
比較文化学専攻
担当教員一覧……6
2014年度開講科目　授業概要……7

世界で学ぶ

学生の研究フィールド……8
在学生の研究テーマ・在学生の声
（今井彬暁　中田梓音）……10

学位論文を書く

過去の学位論文一覧……12
卒業生の声（長沼さやか　陳夏晗）……14

Q&A……15

みんぱくについて

館長挨拶……16
国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要……17

総合研究大学院大学について

学長挨拶……18
総研大の特徴・組織図……19

入学案内……20

連絡先……裏表紙



人間と世界を究める



地域文化学専攻・比較文化学専攻の魅力

1．充実した教授陣

学生数をうわまわる教授陣は、学生一人一人の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また両専攻の教員は各分野の第一線で活躍する研究者であるため、最新の研究動向に基づいた指導を行うことができます。

2．豊富な情報源

日本における民族学（文化人類学）関連の最大の資料類が揃っています。また、館が主催する数多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通して、国内外の優秀な研究者との交流が容易になります。

3．各種の支援制度

授業料免除制度や奨学金、学会発表やフィールドワークへの援助など、充実した研究支援が受けられます。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育とは？

地域・比較文化学専攻では、以下の３点を目的とする教育活動を行っています。

① 独創的な文化人類学・民族学の研究
② 長期のフィールドワークで得られた資料にもとづく学位論文の作成
③ 広い視野をもった、専門的教養を養う

指導体制

個別指導と共同指導を組み合わせたユニークな指導体制を採用しています。各院生には正副２名の指導教員が指名され、入学から学位取得まで、これらの教員が中心となって日常的な指導をおこないます。一方、ゼミにおいては共同指導体制を取り入れています。ゼミは各４名の教員が担当し、研究の内容だけでなく発表の方法などに関する指導をおこないます。担当委員以外の教員にもゼミへの参加を求めることができ、また基本的に専攻長もゼミに出席するため、正副の指導教員を含めると10人前後の教員からコメントを得ることができます。

スケジュール

学生はおおむね１年次において「１年生ゼミ」での指導をもとに現地調査（フィールドワーク）の準備をおこない、２年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミ」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

文化科学研究科について

総合研究大学院大学、略して「総研大」は、学部をもたず大学院だけから成る国立大学として、昭和63年（1988）10月１日に開学しました。現在、全部で６つの研究科から構成されていますが、他の研究科が全て理系であるのに対して、文化科学研究科は唯一の文系研究科です。

研究科の成り立ちは、まず平成元年（1989）４月に、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻が設置されました。その後、平成４年（1992）４月に、国際日本文化研究センターを基盤とする国際日本研究専攻、平成11年（1999）４月に、国立歴史民俗博物館を基盤とする日本歴史研究専攻、平成13年（2001）４月にメディア教育開発センターを基盤とするメディア社会文化専攻、平成15年（2003）４月に、国文学研究資料館を基盤とする日本文学研究専攻が順次増設され、６専攻となりました。

国立大学の法人化に伴い、平成16年（2004）４月からは、新たに大学共同利用機関法人人間文化研究機構が設立され、４つの研究機関（国立民族学博物館、国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館）が属することとなり、独立行政法人メディア教育開発センターをあわせた５つの研究機関が基盤となりました。そして、平成21年（2009）４月に、独立行政法人メディア教育開発センターが、放送大学内に設置されたICT活用・遠隔教育センターに業務が移管され、現在に至っています。なお、総研大の他の研究科は、博士課程前期（修士）の学生を受け入れる５年一貫制を採用していますが、文化科学研究科は、博士課程後期（博士）のみから成っていることを申し添えます。

文化科学研究科の６専攻（民博から２専攻）は、それぞれが日本を代表する研究機関を基盤として、すでに多くの学位取得者、専門研究者を輩出し、またそのための努力を重ねていますが、同時に、文化科学研究科全体として、学生の専門研究を支援し、また『総研大文化科学研究』の刊行など専攻同士の横断連携を推進する事業を推進しております。



地域文化学・比較文化学専攻について



地域文化学専攻
専攻長　佐々木 史郎

アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ及びオセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とします。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としています。本専攻においては、現地調査に基づいて個別文化の記述的研究を積極的に推進する、高度な専門性を持った研究者の養成を行います。

求める学生像…世界の多様な地域社会や地域文化について広い関心をもち、とりわけ文化人類学・民族学の基礎研究に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。



比較文化学専攻
専攻長　笹原 亮二

本専攻では、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術、文化資源という６つの研究分野があります。諸民族文化の比較研究により、各々に通底する普遍性の発見と理論的解明を目指しています。従来の文化人類学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入し、新しい研究方法の開発を積極的にすすめて高度な専門性を持った研究者を養成します。

求める学生像…人間の社会や文化について広い関心を抱き、とりわけ学問的な理論化やその社会的な応用に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。

▌両専攻のあゆみ

平成元年４月　文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）設置、学生受入、授業開始
平成12年10月　「オープンキャンパス」開催（年１回）
平成13年４月　地域文化学・比較文化学両専攻の同窓生ネットワーク発足
平成17年４月　下記 関西４大学との学生交流に関する協定を締結、単位互換授業の開講開始
・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
・大阪大学大学院人間科学研究科
・神戸大学大学院総合人間科学研究科
（平成19年度より国際文化学研究科および人間発達環境学研究科に改組）
・京都文教大学大学院文化人類学研究科

みんぱくで学ぶ

地　域　文　化　学　専　攻

担当教員一覧（平成26年度）25名

朝倉 敏夫
（韓国社会研究）

池谷 和信
（環境人類学・人文地理学・アフリカ研究・地球学）

印東 道子
（オセアニア考古学）

宇田川 妙子
（南ヨーロッパ研究・性研究）

樫永 真佐夫
（東南アジア文化人類学）

久保 正敏
（民族情報学・コンピュータ民族学・オーストラリア研究）

齋藤 晃
（ラテンアメリカ歴史人類学）

佐々木 史郎
（文化人類学・北アジア研究）

佐藤 浩司
（民族建築学）

新免 光比呂
（宗教学・東欧研究）

須藤 健一
（社会人類学）

竹沢 尚一郎
（宗教人類学・西アフリカ研究）

塚田 誠之
（歴史民族学・中国研究）

西尾 哲夫
（認識言語学・アラブ研究）

丹羽 典生
（社会人類学・オセアニア地域研究）

野林 厚志
（民族考古学・台湾研究）

信田 敏宏
（社会人類学・東南アジア研究）

林 勲男
（社会人類学・オセアニア研究）

三尾 稔
（文化人類学・南アジア研究）

三島 禎子
（文化人類学・西アフリカ研究）

南 真木人
（生態人類学・南アジア研究）

森 明子
（中部ヨーロッパ文化人類学）

八杉 佳穂
（言語人類学・中米文化史）

山中 由里子
（比較文学・比較文化）

横山 廣子
（文化人類学・中国社会研究）

地域文化学専攻授業概要（平成26年度）

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員	
アジア地域文化Ⅰ	東アジア文化研究	台湾原住民族の文化と歴史	教　授	野林　厚志
	東アジア文化研究特論Ⅰ	中国と周辺アジアにおける文化変容と社会	准教授	横山　廣子
	東アジア文化研究特論Ⅱ			
	東アジア文化研究演習Ⅰ	中国南部諸民族の歴史民族学的研究に関する講述	教　授	塚田　誠之
	東アジア文化研究演習Ⅱ	朝鮮半島を中心とした東アジアにおける社会と文化	教　授	朝倉　敏夫
	北・中央アジア文化研究			
	北・中央アジア文化研究特論	北アジア狩猟採集文化研究	教　授	佐々木史郎
	北・中央アジア文化研究演習Ⅰ			
	北・中央アジア文化研究演習Ⅱ			
アジア地域文化Ⅱ	東南アジア文化研究	東南アジアの住文化研究	准教授	佐藤　浩司
	東南アジア文化研究特論	東南アジアの周縁世界と開発	教　授	信田　敏宏
	東南アジア文化研究演習Ⅰ			
	東南アジア文化研究演習Ⅱ	東南アジアにおける地域文化	准教授	樫永真佐夫
	南アジア文化研究	インドのナショナリズムと宗教	准教授	三尾　稔
	南アジア文化研究特論	ネパールの現代政治と社会的包摂	准教授	南　真木人
	南アジア文化研究演習Ⅰ			
	南アジア文化研究演習Ⅱ			
	西アジア文化研究	中東イスラム社会における民衆文化	教　授	西尾　哲夫
	西アジア文化研究特論	モノと語りの相関関係を考える	准教授	山中由里子
	西アジア文化研究演習Ⅰ			
	西アジア文化研究演習Ⅱ			
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ文化研究	東欧の政治文化と宗教	准教授	新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究特論	南ヨーロッパのジェンダー・セクシュアリティ	准教授	宇田川妙子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	現代人類学とソシアルなるものの意味	教　授	森　明子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ			
アフリカ地域文化	アフリカ文化研究	人の移動に関する文化的研究	准教授	三島　禎子
	アフリカ文化研究特論			
	アフリカ文化研究演習Ⅰ	アフリカ地域の生態人類学	教　授	池谷　和信
	アフリカ文化研究演習Ⅱ	アフリカ史とアフリカ考古学	教　授	竹沢尚一郎
アメリカ地域文化	アメリカ文化研究	中米文化研究	教　授	八杉　佳穂
	アメリカ文化研究特論	南アメリカのエスノヒストリー	教　授	齋藤　晃
	アメリカ文化研究演習Ⅰ			
	アメリカ文化研究演習Ⅱ			
オセアニア地域文化	オセアニア文化研究	災害からの復興―支援、コミュニティ、文化	准教授	林　勲男
	オセアニア文化研究特論	オセアニアにおける土器文化の諸相	教　授	印東　道子
	オセアニア文化研究演習Ⅰ	オーストラリアにおける先住民文化	教　授	久保　正敏
	オセアニア文化研究演習Ⅱ	オセアニアの政治と宗教	准教授	丹羽　典生
基礎科目	地域文化学基礎演習Ⅰ	地域文化研究に関する基礎演習	准教授	樫永真佐夫
	地域文化学基礎演習Ⅱ	地域文化研究に関する基礎演習	准教授	三尾　稔
	地域文化学演習Ⅰ	博士論文作成のための演習	教　授	西尾　哲夫
	地域文化学演習Ⅱ	博士論文作成のための演習	教　授	森　明子
共通科目	地域文化学特論Ⅰ	親族研究再考	教　授	信田　敏宏
	地域文化学特論Ⅱ	地域文化比較研究の諸相	准教授	山中由里子

※基礎科目は必修科目
※年度によって開講科目は異なる

比　較　文　化　学　専　攻

担当教員一覧（平成26年度）22名

飯田 卓
（生態人類学・漁民研究）

上羽 陽子
（民族芸術学・染織研究・手工芸研究）

太田 心平
（社会文化人類学・北東アジア研究）

韓 敏
（社会人類学・中国研究）

菊澤 律子
（言語学・オーストロネシア諸語）

岸上 伸啓
（文化人類学・北方文化研究）

笹原 亮二
（民俗学・民俗芸能研究）

庄司 博史
（言語学・言語政策論）

杉本 良男
（社会人類学・南アジア研究）

鈴木 七美
（医療人類学・医療社会史）

鈴木 紀
（開発人類学・ラテンアメリカ文化論）

關 雄二
（アンデス考古学・ラテンアメリカ研究）

出口 正之
（NPO メセナ・フィランソロピー）

園田 直子
（保存科学）

寺田 吉孝
（民族音楽学・インド研究）

日髙 真吾
（保存科学）

平井 京之介
（経済人類学・東南アジア研究）

廣瀬 浩二郎
（日本宗教史・民俗学）

福岡 正太
（民族音楽学・東南アジア研究）

Matthews, Peter J.
（先史学・民族植物学）

丸川 雄三
（速報情報学・文化財情報発信）

吉田 憲司
（博物館人類学・アフリカ研究）

比較文化学専攻授業概要（平成26年度）

分野	授業科目	授業科目の内容	担当教員	
比較社会研究	比較社会研究Ⅰ	コミュニティの人類学	教　授	平井京之介
	比較社会研究Ⅱ	中国の社会人類学―欧米・日本・中国のパースペクティブ	教　授	韓　敏
	比較社会研究特論Ⅰ	政策の人類学は可能か？	教　授	出口　正之
	比較社会研究特論Ⅱ	社会・文化に関する人類学的アプローチ	教　授	岸上　伸啓
	比較社会研究演習Ⅰ	宗教とナショナリズム	教　授	杉本　良男
	比較社会研究演習Ⅱ	文化人類学の研究動向と研究課題	教　授	岸上　伸啓
	比較社会研究演習Ⅲ	社会と経済に関する人類学的アプローチ	准教授	鈴木　紀
比較宗教研究	比較宗教研究			
	比較宗教研究特論			
	比較宗教研究演習Ⅰ	多文化高齢社会におけるウェルビーイングの比較研究	教　授	鈴木　七美
	比較宗教研究演習Ⅱ			
比較技術研究	比較技術研究Ⅰ	技術の伝承と流用、創作	准教授	飯田　卓
	比較技術研究Ⅱ	物質文化研究からみた複合社会形成	教　授	關　雄二
	比較技術研究特論			
	比較技術研究演習Ⅰ	アジアと太平洋地域における民族植物学と技術	准教授	Matthews,Peter J.
	比較技術研究演習Ⅱ	染織技術の比較研究	准教授	上羽　陽子
比較言語研究	比較言語研究	手話言語学	准教授	菊澤　律子
	比較言語研究特論			
	比較言語研究演習Ⅰ	少数言語のとらえ方	教　授	庄司　博史
	比較言語研究演習Ⅱ	オーストロネシア比較言語学	准教授	菊澤　律子
比較芸術研究	比較芸術研究Ⅰ	無形文化遺産の映像記録	准教授	福岡　正太
	比較芸術研究Ⅱ	日常的・実践的な身体技法としての芸能伝承論	教　授	笹原　亮二
	比較芸術研究特論			
	比較芸術研究演習Ⅰ	北米・ハワイのアジア系音楽	教　授	寺田　吉孝
	比較芸術研究演習Ⅱ			
文化資源研究	文化資源研究	博物館における資料管理	教　授	園田　直子
	文化資源研究特論	大規模災害時における文化資源の保全活動 ―被災文化財の視点から―	准教授	日髙　真吾
	文化資源研究演習Ⅰ	文化財情報の発信	准教授	丸川　雄三
	文化資源研究演習Ⅱ			
	博物館研究			
	博物館研究特論	博物館人類学	教　授	吉田　憲司
	博物館研究演習Ⅰ	文化人類学基礎講読	准教授	太田　心平
	博物館研究演習Ⅱ	ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践	准教授	廣瀬浩二郎
基礎科目	比較文化学基礎演習Ⅰ	比較文化研究に関する基礎演習	教　授	平井京之介
	比較文化学基礎演習Ⅱ	比較文化研究に関する基礎演習	准教授	菊澤　律子
	比較文化学演習Ⅰ	博士論文作成のための演習	准教授	Matthews,Peter J.
	比較文化学演習Ⅱ	博士論文作成のための演習	教　授	出口　正之
共通科目	比較文化学特論Ⅰ	実践理論からみた文化遺産	准教授	飯田　卓
	比較文化学特論Ⅱ	手話言語学入門	准教授	菊澤　律子

※基礎科目は必修科目
※年度によって開講科目は異なる



在学生の研究テーマ

地域文化学専攻

- 「負の遺産」の継承、その在り方について―ミュージアムが社会に果たす役割とは
- 日本の都市住民と観賞植物（草本類）との関わりにおける生き物文化研究
- ホボクサイルモンゴル人の仏教信仰に関する人類学的研究
- 中国の食文化の歴史人類学的研究―制度と礼俗を中心として
- 中国青海省同仁県におけるチベット文化とその民族誌的研究―同仁県ウォッコル村の事例から―
- 先住民族による自然資源の利用に関する環境人類学的研究
  ―ニカラグア共和国・ミスキートによるウミガメ漁の事例―
- 社会主義的政策下における牧畜社会の変容―中国内モンゴル・シリンゴル盟における開発を事例に―
- ベトナム北部山岳少数民族モン族社会の労働に関する民族誌的研究
- 北海道西興部村における動物利用の歴史的変容に関する人類学的研究
- 韓国と日本における墓と葬送儀礼の変容―「自然葬」の発生と定着を中心に
- メキシコ・ユカタン地方における先住民言語マヤユカテコ語とスペイン語の言語接触について
  ―音声学及び言語人類学的視点から―

在学生の声 Voice



地域文化学専攻
今井 彬暁（平成23年度入学）

私は、ベトナムの少数民族観光地サパをフィールド調査地にしている。修士課程在学時にサパを初めて訪れたとき、現地の少数民族女性との交流を通して、サパとのあいだに忘れられないつながりを得たことが、現在の自身の研究テーマに結びついている。その後、サパの人々に関する理解を深めるため、人類学的な研究方法を志向し、本学に進学した。

私は、本学進学以前は人類学の専攻ではなかったため、進学前に独学で人類学関連の書物を読んだが、人類学的な考え方に適応するのには未だに苦労している。本学教員と面談を行うと、調査地の人々を理解するための研究を行っているにもかかわらず、知らず知らずのうちに自身の価値観に依拠して現地の物事を捉えてしまっていることに気付かされるのである。人類学にはどうやら、言葉では説明するのが難しい、学習や実践のなかで身につくコツやセンスというものがあるらしく、現在はフィールドと大学院を往復するなかで、現地の人々をより深く理解するための方法を模索しながら研究を行っている。

地域文化学専攻と比較文化学専攻では、多岐にわたる専門分野の教員が指導にあたっている。また、両専攻がおかれた国立民族学博物館では、研究会やシンポジウムなどが活発に行われており、学習の機会は広く学生にも開かれている。研究は自身で切り開くものであるが、自身の研究を深め、道に迷ったときに軌道を修正するためには、気付きを与えるものや道標となるものが必要である。本大学院は、私にとってそのような存在である。

比較文化学専攻

- アンデス地帯形成期における複雑化社会の変容―ペルー北高地南部ワヤガ川上流域の社会動態から―
- 先史アンデスにおける生業と社会組織の相互動態的関係
- 鳥類と人との関わり
- 民族・民俗資料の文化資源としての活用に関する博物館人類学的研究
- Ethnobotany, Ecology, and Evolution of Wild and Cultivated Taro in Taiwan:
  Colocasia formosana Hayata *and C. esculenta* (L.) Schott
- ケニア沿岸州ワシニ島における資源獲得と利用のための知恵―海との関わりを通して―
- 日本と台湾における歴史的空間・建築物の保存・活用に関する博物館学的研究
- Pre- Hispanic rituals and ceremonial architecture in Peru's north central Highlands
- 男女間のバーバルコミュニケーション―酒場を背景として―
- 近現代アジアにおける民族衣装をまとった聖母像―フィリピンと日本の事例を中心に―
- 先史アンデス形成期における社会動態
- ラオス北部サムヌア地方における「伝統」織物の技術伝承とその変容
- 沖縄島嶼地域における社会変化をめぐる民族誌的研究―池間島のカツオ漁の衰退に伴う地域社会の適応―
- ブルキナファソのソンガイ居住村における簡易技術移転プロジェクトの人類学的研究

在学生の声 Voice



比較文化学専攻
中田 梓音（平成23年度入学）

私の研究は、酒場で交わされる会話分析を中心としたコミュニケーション研究である。

修士課程在籍時には日本語教育学を専攻しており、主に日本語を学習する留学生や日本語を教える日本語教師のための研究をしていた。模擬教材を作成する際にさまざまな場所での会話を収集していたのだが、その中でも特に「クラブ」や「スナック」などのいわゆる「水商売」と呼ばれる店の女性接客者と男性客の会話に興味を引かれ、修士論文はそれらの会話分析をおこなったことがきっかけであった。

これらのデータは、私自身も接客者として働きながらの参与観察と、客として入店する非参与観察を並行して収集した。当然のことながら、そのデータの中にはそれぞれの人間関係や店そのものの構造などの言語以外の多くの情報が含まれており、それらの分析も含めたコミュニケーション研究へと関心が広がった。しかしながら、私が研究対象としている店や接客者はいまだに社会的・学術的にメジャーではなく先行研究もほとんどないのが現状である。

このような、他機関では看過されがちな私の研究にも目を向けてくれたのが、現在所属する総研大の比較文化学専攻であった。指導教員や研究協力者を含む研究科全体で、１人１人の院生の研究に最大限の理解と協力を惜しまないことが一番の魅力であり、多くの独創的な研究者がうまれる環境となっているのである。

学位論文を書く

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。又専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専　攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）
比較文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）

学位論文リスト

【課程博士】		
数学的手法を用いた文化分析の方法について	小島　三弘（比較）	[H４.３.31 学術]
シドニーにおける都市アボリジニの研究　伝統と民族の創出	鈴木　清史（比較）	[H６.３.24 文学]
オルドス・モンゴル族の社会構造―ヤスの機能とその歴史的変容―	楊　　海英（地域）	[H６.９.20 文学]
ペルーにおける山の神信仰の現在性―アンデスの宗教的世界のダイナミズム―	細谷　広美（地域）	[H７.３.23 文学]
ビルマにおけるウェイザー信仰の研究	土佐　桂子（比較）	[H７.３.23 文学]
韓国社会の動態と「両班化」―忠清北道阿房郡における門中と儀式儀礼の検討を通して	岡田　浩樹（地域）	[H８.３.21 文学]
中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究	曹　　建南（地域）	[H８.３.21 文学]
歌に表象される落村意識―奄美における「シマの歌」の研究―	中原ゆかり（比較）	[H８.３.21 文学]
四会院家屋の文化人類学的研究―人間と自然との相互作用の視点から	杉山　京子（地域）	[H10.３.24 文学]
モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究―アルタイ・ハイラハ叙事詩を事例として―	藤井　麻湖（地域）	[H10.３.24 文学]
カストム・メレンシーヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および民間医療観の現代的位相	白川　千尋（地域）	[H10.３.24 文学]
韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究	李　　善愛（比較）	[H10.３.24 文学]
東南中国の漢族社会組織とその変容―閩南農村社会における宗族の研究	潘　　宏立（比較）	[H10.３.24 文学]
芸の伝承―ジャワ島・チルボンの仮面舞踊を中心に	福岡まどか（比較）	[H10.３.24 文学]
Overt First and Second Person-Designating Terms in Japanese　Discourse ―A Pragmatic Perspective―	Riikka Lansisalmi(比較)	[H10.３.24 文学]
「二重の窮乏」下の平等理念―現代世界とキリバス南部環礁の社会生活―	風間　計博（地域）	[H10.９.30 文学]
建築と文化・社会との相互作用―中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象として―	栗原　伸治（地域）	[H10.９.30 学術]
カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容―宗教共同体と開発の視点から―	子島　　進（地域）	[H11.３.24 文学]
地域主義運動における言語と知識人―エストニア南部ヴォル地方の事例から―	寒水　明子（地域）	[H11.３.24 学術]
英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究 ―文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相―	塩路　有子（比較）	[H12.９.29 文学]
北タイ・アカの家屋に関する研究―家屋の形式とその変化への視点から―	清水　郁郎（地域）	[H13.３.23 文学]
韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化―忠清南道公州市を中心として活動する薬草商人を例に―	林　　史樹（地域）	[H13.３.23 文学]
現代インドネシアにおけるジャワ大衆演劇クトプラの研究	青木　武信（比較）	[H13.３.23 文学]
南ラオス村落社会における政治過程の研究―シゲの村における「連帯」と闘争―	中田　友子（地域）	[H14.３.22 文学]
20世紀前半のボリビアにおける先住民教育と植民地主義	吉江　貴文（地域）	[H14.３.22 文学]
カメルーンにおける「商売の民」バミレケの都市人類学的研究	野元　美佐（比較）	[H14.３.22 文学]
タイ式医療の構築とタイ・マッサージ―社会的文脈による権威的知識の多様性―	飯田　淳子（地域）	[H15.３.24 文学]
インドネシア・スンダの食文化―言語人類学的観点から―	阿良田麻里子（地域）	[H17.３.24 文学]
韓国の仮面劇「固城五広大」の伝承と演劇者―解放後の韓国社会における民俗芸能の変遷から―	高　　正子（地域）	[H17.３.24 文学]
帰還と離散のはざまで―ウクライナ一地方都市におけるユダヤ人巡礼の民族誌―	赤尾　光春（地域）	[H17.９.30 学術]
イスラエルにおけるアラブ人キリスト教徒のアイデンティティの様態 ―ガリラヤ地方・メルキト派カトリック信徒の事例研究―	菅瀬　晶子（地域）	[H18.３.24 文学]
トンガ王国の土地制度―グローバル化のなかの伝統―	森本　利恵（地域）	[H18.３.24 文学]
パラライカの鳴り響く空間：1917～48年における社会主義の文化の生成	大家(柏木) かおり(地域)	[H18.３.24 学術]
フィジーにおける植民地主義とインド系移民社会―砂糖キビ栽培地域の村落社会における文化の動態―	村田　晶子（比較）	[H18.９.29 文学]
上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的研究	飯國有佳子（地域）	[H19.３.23 文学]
「護り」の身体技法に関する映像人類学研究―インドネシア・ミナンカバウの事例から―	村尾　静二（比較）	[H19.３.23 文学]
離散と故郷―ヨルダンのパレスチナ系住民にみられる帰属意識とナショナリズム―	錦田　愛子（地域）	[H19.３.23 文学]
「子ども域」の文化人類学的研究 ―バングラデシュ農村社会の子ども―	南出　和余（比較）	[H19.３.23 文学]
参加型開発を通した女性の自己変容過程に関する人類学的研究―北インド農村社会を事例として―	菅野美佐子（比較）	[H19.９.28 文学]
「場」と「パフォーマンス」に関する人類学的研究―トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として―	米山　知子（比較）	[H19.９.28 文学]
フェラインの民族誌―ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション―	山田　香織（地域）	[H20.３.19 文学]

水上人と呼ばれる人々―広東珠江デルタの漢族エスニシティとその変容―	長沼さやか（地域）	[H20.3.19 文学]
在米コリアンのサンフランシスコ日本町―マルチカルチャーのエスニックタウン―	小谷　幸子（比較）	[H20.3.19 文学]
インド農村社会における不妊経験の人類学的研究	松尾　瑞穂（比較）	[H20.9.30 文学]
韓国における老人の食―老人福祉施設を中心に―	守屋亜紀子（地域）	[H21.3.24 文学]
日本の先史時代における植物性食料の加工と利用：残存デンプン分析法の理論と応用	渋谷　綾子（比較）	[H22.3.24 文学]
農業技術改善の民俗誌―紀ノ川下流域村落の一七～二〇世紀前半における動向の分析―	加藤　幸治（比較）	[H22.9.30 文学]
オーストラリア先住民ヨルタ・ヨルタの環境管理のための先住民運動に関する文化人類学的研究	友永　雄吾（地域）	[H23.3.24 文学]
現代タイ社会における開発と僧侶―僧侶による社会貢献とネットワーク形成に焦点をあてて―	岡部真由美（地域）	[H23.3.24 文学]
現代東南中国における宗親会の民族誌的研究―国家との関係を中心として	陳　夏暗（比較）	[H23.3.24 文学]
ヨーグルトをめぐる言説の生成と展開―社会主義期からポスト社会主義期にかけてのブルガリアを中心に―	マリア・ヨトヴァ（比較）	[H23.9.30 文学]
無文字社会における歴史記憶の生成と継承　―南エチオピア牧畜民ボラナにおける口承史の分析をとおして―	大場　千景（地域）	[H24.3.23 文学]
カオダイ教ハノイ聖室の民族誌的研究―ベトナム北部地域の都市における女性たちの社会関係―	伊藤まり子（地域）	[H24.3.23 文学]
周辺イスラームのダイナミズムータイ南部村落におけるイスラーム復興運動と宗教実践の変容―	小河　久志（地域）	[H24.3.23 文学]
変化しつづける装い―中国雲南省文山モンの自己と他者をめぐる人類学的服飾研究―	宮脇　千絵（地域）	[H24.9.28 文学]
現代アンデス農村における聖人信仰の変容　―人の移動に焦点をあてて―	八木百合子（比較）	[H24.9.28 文学]
ナイジェリアの都市イレ・イフェにおける「アーティスト」の民族誌的研究	緒方しらべ（比較）	[H26.3.20 文学]

[論文博士]		
An Areal-Typological Study of Middle American Indian Languages	八杉　佳穂	[H6.3.30 文学]
農村女性からみたトルコの「近代化」―世俗主義、イスラーム、女性の相互関係	中山　紀子	[H9.3.24 文学]
南タイにおける実践宗教―ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から―	西井　凉子	[H9.3.24 文学]
セネガルの公権力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究	小川　了	[H9.3.24 文学]
メラネシアの政治的リーダーシップと開発 ―ソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐって―	関根　久雄	[H10.9.30 文学]
南インドの農村におけるカースト内関係としての親族―コング・ヴェッラーラの事例研究―	杉本　星子	[H10.9.30 文学]
アイヌ民族における神送りの研究―沙流川流域を中心に―	董野　茂	[H13.3.23 学術]
低湿地立地の遺跡にみる縄文時代本州西部地域の生業活動 ―縄文時代早期末から中期初頭における若狭湾沿岸と琵琶湖周辺地域の動物考古学的考察―	内山　純蔵	[H14.3.22 文学]
考古学における数量化と数理的手法の研究	及川　昭文	[H14.3.22 学術]
総管信仰―近世江南農村社会と民間宗教―	濱島　敦俊	[H14.9.30 学術]
中国の食事方法―歴史人類学的考察―	西澤　治彦	[H15.3.24 文学]
台湾原住民のイノシシ（Sus scrofa taivanus）狩猟の民族考古学的研究： 動物遺存体研究の方法論構築にむけて	野林　厚志	[H15.3.24 学術]
The Transformation and Social Functions of the sNang zhig Family and its Monastery －An Ethnographic Description of the Bon Tradition in Amdo	才譲　太	[H16.9.30 学術]
利用者の視点にたった博物館の理念と活動様式の研究	布谷　知夫	[H16.9.30 文学]
トビニタイ文化の集団構成と生計戦略―北海道東部における「中世アイヌ社会」成立に至る一階梯―	大西　秀之	[H17.3.24 文学]
アットゥシの歴史に関する基礎的研究―アイヌ伝統文化の再検討の試みとして―	本田　優子	[H17.9.30 文学]
カナダ・イヌイットの食物分配に関する文化人類学的研究―先住民社会の変容と再生産―	岸上　伸啓	[H18.3.24 文学]
タイ中部農村における相互行為の民族誌的研究	高城　玲	[H18.3.24 文学]
東ネパールにおける羊飼いの生産活動と放牧地をめぐる社会関係	渡辺　和之	[H18.3.24 文学]
「アイヌ風俗画」の研究―近世北海道におけるアイヌと美術	新明　英仁	[H19.9.28 文学]
国際線客室乗務員の接客業務と動務体制－仕事の人類学的研究―	八巻　惠子	[H21.9.30 文学]
シャーマニズムによるエスニシティの探求―ポスト社会主義期におけるモンゴル・ブリヤートの事例を中心として	島村　一平	[H22.3.24 文学]
活用される職祖伝承―近・現代日本における木工挽物の担い手と木地屋「根元地」―	木村　裕樹	[H22.9.30 文学]
先住民学習の理論と実践－ポストコロニアル人類学の活用－	中山　京子	[H22.9.30 学術]
スリランカにおけるエステート・タミルのアイデンティティと「ジャーティヤ」をめぐる人類学的研究	鈴木　晋介	[H23.3.24 文学]
小集落から見た初期国家の形成過程―先スペイン期中央アンデスのワリ国家を事例として―	土井　正樹	[H24.3.23 文学]
先史アンデス形成期の社会動態―ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から―	山本　睦	[H24.9.28 文学]
多文化都市・新宿の生成と展開―ライフサイクルの視座―	川村千鶴子	[H25.3.22 学術]
先住民生存捕鯨再考―国際捕鯨委員会における議論とベクウェイ島の事例を中心に―	濱口　尚	[H25.9.27 文学]

年度別学位授与者数

平成		3年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	12年	13年	14年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	計
地域文化学専攻	課程博士	0	0	2	2	0	3	4	2	1	1	2	4	2	2	1	0	2	3	1	0	32
	論文博士	0	0	0	0	3	0	2	0	1	1	3	2	0	1	0	1	0	0	1	0	15
比較文化学専攻	課程博士	1	1	1	1	0	4	0	2	2	0	0	0	3	3	1	1	2	1	1	1	25
	論文博士	0	1	0	0	0	0	0	1	1	2	0	2	0	0	0	1	3	1	1	1	14
計		1	2	3	3	3	7	6	5	5	4	5	8	5	6	2	3	7	5	4	2	86

Voice 卒業生の声

静岡大学　人文社会科学部社会学科　准教授
長沼 さやか（平成20年3月学位取得）

私は、中国南部の広東省において、かつて船などに住みながら移動生活をしていた水上居民の人々を対象に研究をしています。広東周辺では、宗族という父系出自集団が村落社会の基礎となっています。宗族の成員たちは、自分たちの祖先が漢文明の発祥地である黄河流域から移住してきたという伝説や系譜を持ち、出自の正統性を強く意識しています。一方で水上居民には起源説や系譜を持たないことから、宗族の成員たちに非漢族とみなされていました。水上居民と宗族の集団間境界には、漢族という巨大な民族集団を再考する糸口が隠れており、それが博士論文を執筆するポイントとなりました。

ところで、私が博士課程に入学した2001年頃には、フィールドワークの実施に制限がともなう中国を研究対象とする文化人類学者は多くはありませんでした。そうしたなかで民博は、中国を含む世界各地の研究機関と連携し、現地調査や学術交流をおこなっていました。研究のために必要な文献、施設の充実はもちろんですが、フィールドワークに不可欠な社会的ネットワークが民博にはありました。それは開館以来、民博や総研大に関わってきた人々すべてが地道に築き上げてきた「人脈力」であり、かけがえのない財産です。その財産をこれから総研大に入学する後輩の皆さんにも、ぜひ引き継いでもらいたいと思います。

中国厦門市社会科学院　助理研究員
陳 夏暗（平成23年3月学位取得）

私の研究課題は、現代東南中国における宗親会の復興、とくに歴史上の検討をふまえ、近年の社会的、経済的、政治的変動に応じた復興過程とそのあり様を民族誌的に記述することである。

国立民族学博物館は、大学共同利用機関として、国内外のさまざまな専門分野の研究者と分野横断で高度な学術研究が進められており、さまざまな共同研究やシンポジウムなどの機会がとても多い。しかも、専門や関心分野の異なる多数の院生や教員が集まり、多角的な視点からのコメントを投げかけてくれる大学院生のゼミが頻繁に行われている。さらに、民博図書館は、専門書の蔵書の充実が抜群である。

民博は、比較文化学の方法だけではなく、比較文化研究の環境も提供している。異なる地域と分野の研究者との交流を深めていくことが可能であり、豊富な英文・中国語・日本語の文献資料を存分に活用することができる。私にとって、比較文化学の視野から、東南アジアや東アジア社会への理解を深めるにつれて、中国社会もより深く分かるようになった。

こうした民博の魅力は、民博から離れている私にとって、いつも懐かしく思うことである。今後、総研大に入学する学生には、ぜひ民博の豊かな研究環境を存分に活用してほしい。

地域文化学専攻および比較文化学専攻の出身者は、以下のようなところに在職し、教育研究に活躍しています。

愛知淑徳大学、愛媛大学、大阪大学、大谷大学、沖縄県立芸術大学、帯広大谷短期大学、鹿児島国際大学、鹿児島純心女子大学、神奈川大学、川崎医療福祉大学、関西外国語大学、神田外語大学、京都外国語大学、京都大学、京都文教大学、神戸大学、神戸市外国語大学、神戸山手大学、成蹊大学、滋賀県立大学、静岡大学、四天王寺大学、芝浦工業大学、大同工業大学、中部大学、筑波大学、天理大学、東京外国語大学、東北学院大学、東洋大学、長崎純心大学、新潟国際情報大学、日本大学、阪南大学、広島大学、広島市立大学、宮崎公立大学、桃山学院大学、インドネシア学術総局［インドネシア］、上海師範大学［中国］、北京大学［中国］、ライデン大学［オランダ］、在ベルー日本国大使館、総合地球環境学研究所、総合研究大学院大学、国立民族学博物館

Q&A

Q 国立民族学博物館に地域文化学専攻と比較文化学専攻の二専攻がありますが、これらはどのようにちがいますか？

A 地域と比較のいずれに比重を置くかにより二専攻に別れているものの、共にフィールドワークを研究の根幹においているため、共通する部分も多く、密接な相互交流があります。また、専攻間に指導上の棲み分けはなく、院生がどちらの専攻に所属していても、両専攻に所属する教員の指導を受けることができるというメリットがあります。

Q 地域文化学専攻と比較文化学専攻で学ぶことができるのは、文化人類学・民族学だけでしょうか？

A そんなことはありません。両専攻には、考古学、風俗学、建築学、情報学、言語学、音楽学、博物館学、保存科学など幅広い分野を専門とする教員がそろっているので、それらの分野でも研究を行うことができます。また、教員の陣容は年度によって変化することがあるので、希望研究内容と当専攻の教育体制との整合性について不明な点がある方は、事前にお問い合わせください。

Q 長期の現地調査をするときには、授業料が免除されますか？

A 長期フィールドワークを行う期間中は、休学が認められています。在学中に支払う授業料の総額が減額されるわけではありませんが、フィールドワークを行う学期中に授業料を払う必要はありません。

Q 学部や修士課程で文化人類学・民族学を専攻しなかったのですが、地域文化学専攻や比較文化学専攻を受験することはできますか？

A 大学などで正規に文化人類学・民族学を学んだ経歴がなくても受験することは可能です。しかし、入学後に志望研究が遂行可能であるか見通しをつけるためにも、関連図書などを精読し、少なくとも人類学やフィールドワークに関する基本的な考え方につい て理解しておいたほうがよいでしょう。この作業は、何をするために当専攻を受験するのかを整理するためにも役立つはずです。

Q 受験する前に希望する指導教員をかならず決めておく必要がありますか？

A 必要条件ではありませんが、強くお勧めします。また、受験を申請する前に希望指導教員に連絡を取れば、入学後の研究の見通しを立てる一助となるでしょう。

Q 研究支援制度にはどんなものがありますか？

A 研究に関連する様々な業務を行いながら給与を得ることができる「リサーチ・アシスタント（RA）制度」や、学会における発表やフィールドワークに対して支援をおこなう「文化科学研究科学生派遣事業」があります。学内の奨学金制度はありませんが、外部研究資金調達のための申請書の書き方などについても指導を行っています。

Q 地域文化学専攻と比較文化学専攻に入学すると、かならず長期の現地調査をしなければなりませんかまた、国内での現地調査も可能でしょうか？

A 実際には長期のフィールドワークを行う学生が多いのですが、研究の目的や内容によっては独自のフィールドワークの形を決めていくことも可能です。たとえば、継続した長期調査のかわりに短期の調査を繰り返しおこなうことで調査可能なテーマも存在します。また、調査対象は海外だけではありません。これまでにも数多くの卒業生が、国内のフィールドワークに基づいた博士論文を完成させています。

Q 受験する前に調査予定地域の現地語を習得している必要がありますか？

A 入学時にフィールドの言語を習得していることは望ましいのですが、受験の必要条件ではありません。入学前の習得が難しい言語が存在するだけでなく、それまでに習得した言語以外の地域に研究を広げる必要がある場合もあるからです。特に、現地でのみ習得可能な言語に関しては、フィールドワークをしながら徐々に身に付けていくこともあります。

みんぱくについて



館長挨拶

地域文化学専攻・比較文化学専攻の受験生に期待する

国立民族学博物館長　須藤 健一



国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館をそなえた世界でもユニークな文化人類学・民族学の研究所です。60名の教員たちは、「地の先へ。知の奥へ。」をモットーに世界各地で、グローバリゼーションの動きを受容し、あるいはそれに抗いながら独自の社会と固有の文化を維持ないし創造している人びとの営みを研究しています。一方で、世界の諸民族の生活や考えをより深く理解するために民族資料の収集や映像音響資料の採録などにつとめ、また、「もの」をとおして文化を表現する展示活動も行っています。

文化人類学・民族学は、現地の人びとと生活をともにしながら日常生活から地球規模の影響をも視野に入れて人間の社会と文化を研究する学問です。異文化に生きる人びとを理解するためには幅広い視野、柔軟な思考と豊かな想像力が求められます。そして、独創的な着想から収集したデータを分析して論理的に記述する手法が大事です。

みんぱくには、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置され、文化人類学をはじめ言語学、宗教学、生態学、先史学、民族音楽学そして博物館学などを研究する個性ゆたかな教授陣がいます。そのうえ、民族資料、文献図書や映像音響などの豊富な資料を所蔵しており、研究環境の点ではわが国随一の大学院であるといえます。

私たちは、皆さんが人類学の研究課題を追求し、博士論文を書きあげて一人前の研究者として社会に飛び立つことを支援するのを楽しみにしています。



国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要

国立民族学博物館（みんぱく）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。みんぱくは、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究や共同研究を進めるとともに、学術情報を集積しています。その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することも使命としています。

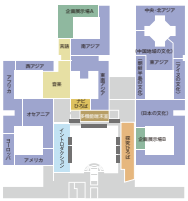
国立民族学博物館は「博物館機能をそなえた研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。みんぱくの展示は、常設展示と特別展示と企画展示とで構成されており、常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示と企画展示は、特定のテーマのもとに、年に数回、期間を限って開催されます。

みんぱくは、2004年４月より、国立大学と足並みをそろえて、法人組織となりました。法人の正式名称は、「大学共同利用機関法人人間文化研究機構」ですが、みんぱくは、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所とともに、その一員として再出発しました。その後、2009年10月には６番目の大学共同利用機関として新たに国立国語研究所が加わりました。またみんぱくの研究部は、３研究部（民族社会、民族文化、先端人類科学）２センター（研究戦略センター、文化資源研究センター）体制に組織替えがなされました。研究活動の機動性を高めるとともに、その成果をより広くわかりやすく社会に伝えていくための措置です。文化人類学・民族学を基礎としつつ、研究の機関と分野の別を超えて、人間文化の総合的理解を深めようとする、みんぱくの新たな活動が始まっているのです。

所蔵民族学資料（平成26年4月1日現在）

標本資料（未登録資料含む）		映像音響資料	
海外資料	176,732点	映像資料	7,937点
国内資料	162,816点	音響資料	62,651点
計	339,548点	計	70,588点
文献図書資料			
日本語図書	264,266冊	日本語雑誌	10,090冊
外国語図書	391,849冊	外国語雑誌	6,818冊
計	656,115冊	計	16,908冊

展示場案内図









総合研究大学院大学について

総合研究大学院大学長
岡田 泰伸



医学博士。京都大学医学部卒。同大学医学部助手、講師を経て、平成4年に同崎国立共同研究機構生理学研究所細胞器官研究系教授に就任。平成16年に自然科学研究機構生理研究所教授、副所長を経て、平成19年から5年間、副機構長、平成22年から同機構の理事を歴任。
専門は分子細胞生理学。特に動物細胞の膜構造維持機構、アポトーシス、ネクローシスや虚血性細胞死の誘導メカニズム、アニオンチャネルのセルセンサー・シグナリング機能における分子メカニズム研究の第一人者。生物学・生化学分野論文における ISI 高頻度被引用者。平成18年より4年間日本生理学会会長、5年間アジア・オセアニア生理学会（FAOPS）会長。平成12、23年度に日本生理学会人事賞共同受賞。

学長挨拶

総合研究大学院大学（以下、総研大）は、1988年にわが国で最初に設立された自らは学部を持たない大学院だけの大学（独立大学院大学）であり、人文・理工にわたる学術分野につき総合的な博士課程教育を、大学共同利用機関等を基盤機関として、それらの優れた研究・学習環境を最大限に生かして行うことにより、高い専門性と広い視野を持った一流の研究者を養成するという世界にも類例のないユニークな大学です。

総研大への入学者はすべて他の国公私立大学（2013年度入学者は７外国大学を含む58大学）からの出身者です。わが国の高等教育の最大の欠点の一つは流動性の低さとそれによる単線性や縦割性にありますが、総研大に入学する学生は、その弊害からまず自ら脱しています。それゆえに総研大の学生達は、多くのバリアを越えて飛び出すことができたという高いポテンシャルを、そして多くの場合には分野や学域を越えて飛び込むという気概と挑戦力を有しています。この点が、総研大の第一の特性であり、それが大学にも、そして一人一人の学生にも大きなメリットを与えています。というのは、新しい出会いや、新しい学問風土との接触こそが、新しい学問を形成する上で大きな力を与えるものだからです。

総研大の第２の特性は、世界最先端の研究設備・施設・資料・データベースが配備され、トップクラスの研究者マンパワーが国内外の研究者と不断に共同研究を展開している（計18の）大学共同利用機関等の研究現場という非常に恵まれた環境の下で大学院教育が行われるという点にあります。それらの基盤機関においては、専門性の高い国際的な研究活動が実施されていると共に、全国の大学・研究機関や諸外国の研究者との分野を越えた共同研究が行われています。それゆえに、「深い専門性」と「国際的な通用性」と「異分野連繋性」を兼ねそなえた研究者の養成を目指すことができるのです。

総研大の第３の特性は、高度の専門性の獲得にとどまらず、「総合性」の修得が体系的・組織的に目指されていることです。総研大の基盤機関・専攻の全体において、文化、歴史、情報、生命、人体、エネルギー、物質、宇宙など実に多様な分野の研究が行われています。この学術的な多様性を活用して、自らの専門的知識を他の知識と結合しながら知識全体の中に位置づけるという「広い視野」の獲得を総合性修得の第１の内容とすることができます。新しい学問は、多くは異なる分野をまたぐ形で現れ、その発展には異分野からの研究者の参入を必要としています。このような新しい分野における教育は、一専攻の枠にはおさまりきらず、複数の専攻をまたぐ形で行われる必要性が生じています。総研大では、その必要性に対応するために“専攻間融合プログラム”を推進しています。総研大では、専攻を越えた教育と異分野連繋的な共同研究現場における学習・研究によって、「分野を越えた学際性」の獲得を目指すことができる点が、総合性修得の第２の内容です。科学が生み出した多くのものが社会において物質化されて人々の生活に大きな影響を与えている今日では、科学者には研究成果やその使われ方がもたらす結果に対しても説明責任が求められています。即ち、現代の科学者には人類や社会を視野に入れた人間の総合性の修得が求められているのです。総研大教育における総合性修得の第３の内容は、「社会と連携する科学」という視点の獲得を目指していることです。

総研大の目標は、したがって、①深い専門性と広い視野を併せ持ち、異分野連繋的・社会連携的な視点を持つ国際的研究者人材を育成すること、②基盤機関と棄山の連係と、国内外研究者との共同利用研究によって、学際的で先導的（即ち新分野開拓・敷衍的）な研究を大学院生と共に展開すること、そして③社会と連携する科学を創造・教育するアジア大学院教育拠点としての地位を確立することです。

総研大の学生のみなさんには、こうした総研大の特性や目標をよく理解した上で、与えられたメリットを活用しつつ、大きな課題に挑戦されることを願っています。日々研鑽の忙しい大学院学生生活ですが、分野の異なる人々や大学や国を異にする人々との交流にも努めて下さい。それらによって得られた人と人とのつながりが、将来の研究人生に大きな財産をもたらすことになるからです。また、日本人学生は外国語の、外国人学生は日本語の取得にも心掛けて下さい。異なる専門分野間と同様に、異なる文化間のコミュニケーションに基礎なことは、国際的通用性を持った博士号取得者として、その能力を発揮する上での必須条件の一つとなるからです。総研大は教育現場においてもバイリンガル性の付与に力を尽くしたいと考えています。

総研大の全職員は、学生と共に、総研大の特性を更に発展させ、力を合わせて本学の目標の実現に向けての努力をして参りますので、関係各位には総研大の一層の発展のためにご理解とご支援を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

総合研究大学院大学の特徴

特色ある博士課程教育
- 5年一貫制博士課程制度と博士後期課程制度の併用
- 基盤機関の研究現場を活用した教育プログラム
- 個の能力に即した教育プログラム
- 社会人学生・留学生受入れプログラム

広い視野の養成
- 専攻・研究科間の共同教育研究事業
- 総合科目連関授業プログラム
- 全学学生セミナー
- 全学学術交流会

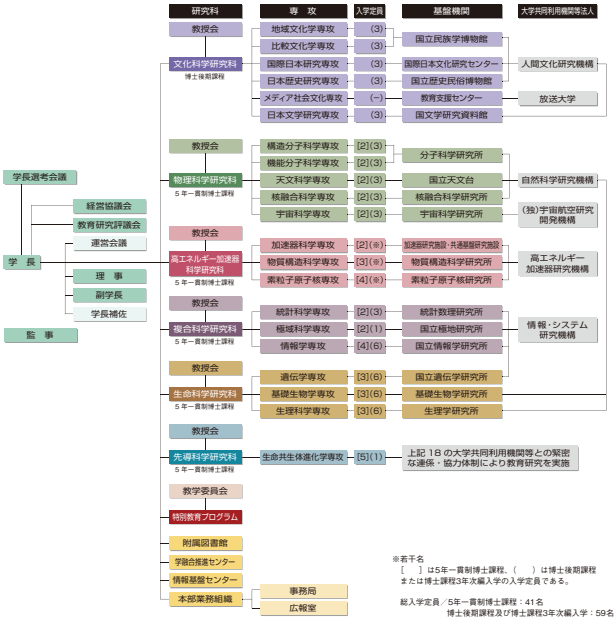
高い専門性の育成
- 各専攻分野の最先端研究者による研究指導
- 多様な専門教育プログラム
- 学位取得プロセス管理プログラム／長倉研究奨励賞
- 基盤機関が有する世界最高水準の資料・施設・設備の活用

国際的通用性の確保
- 最先端研究技術・研究者の交流拠点における教育
- プレゼンテーション能力養成プログラム
- 海外学生派遣事業
- 国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムの活用

分野横断的・先導的学問分野の創出
- 学融合推進センターにおける主要四事業の推進
- 先導科学研究科における総合的な教育研究の実施
- 「科学と社会」プログラムの全学的な展開
- 修了生を中心とした学術交流ネットワーク

平成26年度 教育研究組織

（総研大 2014～2015要覧より）



※若干名
［　］は5年一貫制博士課程、（　）は博士後期課程または博士課程3年次編入学の入学定員である。

総入学定員／5年一貫制博士課程：41名
博士後期課程及び博士課程3年次編入学：59名

入学案内

詳細は募集要項を請求のうえ確認してください。

(1) 出願資格

次のいずれかに該当する者とします。
①修士の学位または専門職学位を有する者及び入学の前月までに取得する見込みの者
②外国において、修士の学位または専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者
③外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位または専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者
④我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置づけられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位または専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者
⑤学校教育法施行規則第156条第４号の規定により、国際連合大学の課程を修了し、修士の学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者
⑥外国の学校、外国の大学院の課程を有する教育施設または国際連合大学の教育課程を履修し、大学院設置基準（昭和49年文部省令第28号）第16条の２に規定する試験及び審査に相当するものに合格し、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者及び入学の前月までに認められる見込みの者
⑦大学を卒業し、大学、研究所等において、２年以上研究に従事した者及び入学の前月までに２年以上研究に従事する見込みの者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑧外国において学校教育における16年の課程を修了した後、または外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において２年以上研究に従事した者及び入学の前月までに２年以上研究に従事する見込みの者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑨本学において、個別の入学資格審査により、修士の学位または専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、入学の月の１日において24歳に達している者
（⑥～⑨により出願しようとする者は、事前に本学で実施する出願資格認定審査によって「学力の認定」を受ける必要があります）

(2) 出願期間

出願資格①～⑤に該当する者：平成26年11月28日（金）～12月４日（木）
出願資格⑥～⑨に該当する者：平成26年11月10日（月）～11月13日（木）
受付場所：総合研究大学院大学　学務課　学生厚生係
※原則郵送にて受付、持参による窓口受付も可

(3) 選抜方法

①書類選考
②修士論文等の審査
③面接（平成27年１月下旬より面接を行います）

入学者選抜試験倍率（地域・比較）

平　成	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年
志願者数	22	17	23	31	23	28	18	19	8	18	15	13	10	10	7(1)	8(1)	11
合格者数	6(1)	7	6	8	8	7	6	7(1)	6(1)	7	4	4	5	4(1)	4(1)	4	8
倍率	3.7	2.4	3.8	3.9	2.9	4	3	2.7	1.3	2.6	3.8	3.3	2	2.5	1.5	1.8	1.4

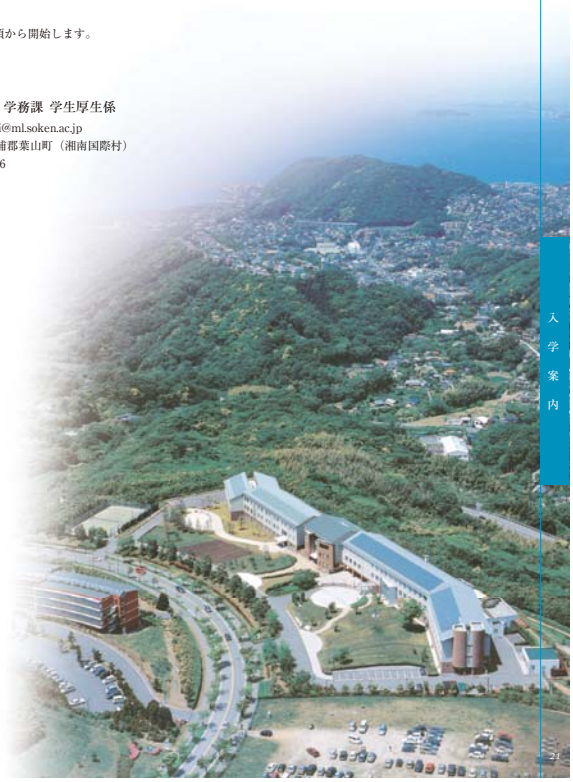
※（ ）は辞退者で内数。

募集要項の請求方法

下記メールアドレスに、以下の必要事項を記入し、送信してください。
(1) 郵便番号
(2) 住所
(3) 氏名
(4) 電話番号
※配布は 8 月下旬頃から開始します。

募集要項請求先

総合研究大学院大学 学務課 学生厚生係
メールアドレス：kousei@ml.soken.ac.jp
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
TEL：046-858-1525, 1526



葉山キャンパス

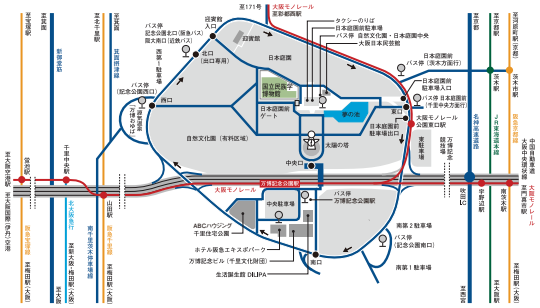
入学案内

21

問合せ先

国立民族学博物館 管理部研究協力課研究協力係

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151（代表） 06-6878-8236（専攻担当） FAX 06-6878-8479
URL http://www.minpaku.ac.jp/ 大学院トップページ
E-mail souken@idc.minpaku.ac.jp http://www.minpaku.ac.jp/research/education

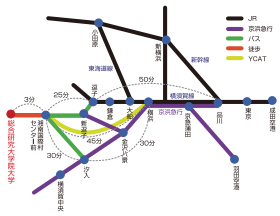


●大阪モノレールで「万博記念公園駅」-「公園東口駅」下車徒歩約15分
自然文化園（有料区域）を通ってこられる場合、自然文化園ゲート脇の券売機で本館（国立民族学博物館）の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。また、「公園東口駅」からは、自然文化園を通行せずに来館できます。
●近鉄バスで阪急茨木市駅・JR茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約15分。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

総合研究大学院大学 事務局

〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電話 046-858-1500（代表） FAX 046-858-1542
URL http://www.soken.ac.jp/





●電車・バス利用
・JR 横須賀線逗子駅東口下車
▶京急バス①番乗り場より16 系統-26 系統「湘南国際村 行き」、「湘南国際村センター前」下車 乗車時間：約25分 運賃：340円
▶京急バス②番乗り場より「湘南佐島なぎさの丘 行き」、「湘南国際村開門沢調整池」下車 乗車時間：約20分 運賃：320円
・京浜急行逗子・葉山駅東口下車
▶京急バス①番乗り場より16 系統-26 系統「湘南国際村 行き」、「湘南国際村センター前」下車 乗車時間：約25分 運賃：340円
▶京急バス①番乗り場より「湘南佐島なぎさの丘 行き」、「湘南国際村開門沢調整池」下車 乗車時間：約18分 運賃：320円
・京浜急行本線沙入駅下車
▶京急バス②番乗り場より16 系統「湘南国際村 行き」、「湘南国際村センター前」下車 乗車時間：約30分 運賃：370円
・YCAT
▶横浜シティーエアーターミナル①番乗り場「横須賀真部 行き」（電力中央研究所 行きバス）、「湘南国際村センター前」下車 乗車時間：約45分 運賃：900円
（注）「湘南国際村センター前」下車徒歩３分、「湘南国際村開門沢調整池」下車徒歩10分

●事利用
・横浜横須賀道路（有料）「逗子インター」より逗葉新道（有料）出口より北北左左折
前橋トンネルを抜け直進約５分「湘南国際村センター入口」交差点を左折約１分

SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies)
School of Cultural and Social Studies

Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies

Overview '15



総合研究大学院大学
文化科学研究科

地域文化学専攻
比較文化学専攻

概要 '15

国立民族学博物館

目　次

人間と世界を究める
地域文化学・比較文化学専攻の魅力…… 1
文化科学研究科について…… 2
地域文化学・比較文化学専攻について…… 3

みんぱくで学ぶ
地域文化学専攻
担当教員一覧…… 4
2015年度開講科目　授業概要…… 5
比較文化学専攻
担当教員一覧…… 6
2015年度開講科目　授業概要…… 7

世界で学ぶ
学生の研究フィールド…… 8・9
在学生の研究テーマ・在学生の声
（喬旦加布　古沢ゆりあ）…… 10・11

学位論文を書く
過去の学位論文一覧…… 12・13
卒業生の声（島村一平　宮脇千絵）…… 14

Q&A …… 15

みんぱくについて
館長挨拶…… 16
国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要…… 17

総合研究大学院大学について
学長挨拶…… 18
総研大の特徴・組織図…… 19

入学案内…… 20

連絡先 …… 裏表紙



人間と世界を究める

地域文化学専攻・比較文化学専攻の魅力

1．充実した教授陣

学生数をうわまわる教授陣は、学生一人一人の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また両専攻の教員は各分野の第一線で活躍する研究者であるため、最新の研究動向に基づいた指導を行うことができます。

2．豊富な情報源

日本における民族学（文化人類学）関連の最大の資料類が揃っています。また、館が主催する数多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通して、国内外の優秀な研究者との交流が容易になります。

3．各種の支援制度

授業料免除制度、学会発表やフィールドワークへの旅費の援助など、充実した研究支援が受けられます。



地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育とは？

地域・比較文化学専攻では、以下の３点を目的とする教育活動を行っています。

① 独創的な文化人類学・民族学の研究
② 長期のフィールドワークで得られた資料にもとづく学位論文の作成
③ 広い視野をもった、専門的教養を養う

指導体制

個別指導と共同指導を組み合わせたユニークな指導体制を採用しています。各院生には正副２名の指導教員が指名され、入学から学位取得まで、これらの教員が中心となって日常的な指導をおこないます。一方、ゼミにおいては共同指導体制を取り入れています。ゼミは各４名の教員が担当し、研究の内容だけでなく発表の方法などに関する指導をおこないます。担当教員以外の教員にもゼミへの参加を求めることができ、また基本的に専攻長もゼミに出席するため、正副の指導教員を含めると10人前後の教員からコメントを得ることができます。

スケジュール

学生はおおむね１年次において「１年生ゼミ」での指導をもとに現地調査（フィールドワーク）の準備をおこない、２年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミ」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

文化科学研究科について

総合研究大学院大学、略して「総研大」は、学部をもたず大学院だけから成る国立大学として、昭和63年（1988）10月１日に開学しました。現在、全部で６つの研究科から構成されていますが、他の研究科が全て理系であるのに対して、文化科学研究科は唯一の文系研究科です。

研究科の成り立ちは、まず平成元年（1989）４月に、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻が設置されました。その後、平成４年（1992）４月に、国際日本文化研究センターを基盤とする国際日本研究専攻、平成11年（1999）４月に、国立歴史民俗博物館を基盤とする日本歴史研究専攻、平成13年（2001）４月にメディア教育開発センターを基盤とするメディア社会文化専攻、平成15年（2003）４月に、国文学研究資料館を基盤とする日本文学研究専攻が順次増設され、６専攻となりました。

国立大学の法人化に伴い、平成16年（2004）４月からは、新たに大学共同利用機関法人人間文化研究機構が設立され、４つの研究機関（国立民族学博物館、国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館）が属することとなり、独立行政法人メディア教育開発センターをあわせた５つの研究機関が基盤となりました。そして、平成21年（2009）４月に、独立行政法人メディア教育開発センターが、放送大学内に設置されたICT活用・遠隔教育センターに業務が移管され、現在に至っています。なお、総研大の他の研究科は、博士課程前期（修士）の学生を受け入れる５年一貫制を採用していますが、文化科学研究科は、博士課程後期（博士）のみから成っていることを申し添えます。

文化科学研究科の６専攻（民博から２専攻）は、それぞれが日本を代表する研究機関を基盤として、すでに多くの学位取得者、専門研究者を輩出し、またそのための努力を重ねていますが、同時に、文化科学研究科全体として、学生の専門研究を支援し、また『総研大文化科学研究』の刊行など専攻同士の横断連携を推進する事業を推進しております。





地域文化学・比較文化学専攻について

地域文化学専攻
専攻長　横山 廣子



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ及びオセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とします。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮をはらいながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としています。本専攻においては、現地調査に基づいて個別文化の記述的研究を積極的に推進する、高度な専門性を持った研究者の養成を行います。

求める学生像…世界の多様な地域社会や地域文化について広い関心をもち、とりわけ文化人類学・民族学の基礎研究に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。

比較文化学専攻
専攻長　笹原 亮二



本専攻では、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術、文化資源という６つの研究分野があります。諸民族文化の比較研究により、各々に通底する普遍性の発見と理論的解明を目指しています。従来の文化人類学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入し、新しい研究方法の開発を積極的にすすめて高度な専門性を持った研究者を養成します。

求める学生像…人間の社会や文化について広い関心を抱き、とりわけ学問的な理論化やその社会的な応用に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。

両専攻のあゆみ

平成元年４月　文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）設置、学生受入、授業開始
平成12年10月　「オープンキャンパス」開催（年１回）
平成13年４月　地域文化学・比較文化学両専攻の同窓生ネットワーク発足
平成17年４月　下記 関西４大学との学生交流に関する協定を締結、単位互換授業の開講開始
・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
・大阪大学大学院人間科学研究科
・神戸大学大学院総合人間科学研究科
（平成19年度より国際文化学研究科および人間発達環境学研究科に改組）
・京都文教大学大学院文化人類学研究科

みんぱくで学ぶ

地　域　文　化　学　専　攻

担当教員一覧（平成27年度）23名

朝倉 敏夫（韓国社会研究）
池谷 和信（環境人類学・人文地理学・アフリカ研究・地域学）
印東 道子（オセアニア考古学）
宇田川 妙子（南ヨーロッパ研究・性研究）
樫永 真佐夫（東南アジア文化人類学）
齋藤 晃（ラテンアメリカ歴史人類学）
佐々木 史郎（文化人類学・北アジア研究）
佐藤 浩司（民族建築学）
新免 光比呂（宗教学・東欧研究）
須藤 健一（社会人類学）
竹沢 尚一郎（宗教人類学・西アフリカ研究）
塚田 誠之（歴史民族学・中国研究）
西尾 哲夫（認識言語学・アラブ研究）
丹羽 典生（社会人類学・オセアニア地域研究）
野林 厚志（民族考古学・台湾研究）
信田 敏宏（社会人類学・東南アジア研究）
林 勲男（社会人類学・オセアニア研究）
三尾 稔（文化人類学・南アジア研究）
三島 禎子（文化人類学・西アフリカ研究）
南 真木人（生態人類学・南アジア研究）
森 明子（中部ヨーロッパ文化人類学）
山中 由里子（比較文学・比較文化）
横山 廣子（文化人類学・中国社会研究）

地域文化学専攻授業概要（平成27年度）

分野	授業科目	単位	授業科目の内容	担当教員	
アジア地域文化Ⅰ	東アジア文化研究	2	先住民の歴史と文化	教　授	野林　厚志
	東アジア文化研究特論Ⅰ	2	中国と周辺アジアにおける文化変容と社会	教　授	横山　廣子
	東アジア文化研究特論Ⅱ	2			
	東アジア文化研究演習Ⅰ	2	中国南部諸民族の歴史民族学的研究に関する講述	教　授	塚田　誠之
	東アジア文化研究演習Ⅱ	2	朝鮮半島を中心とした東アジアにおける社会と文化	教　授	朝倉　敏夫
	北・中央アジア文化研究	2			
	北・中央アジア文化研究特論	2	北アジア狩猟採集文化研究	教　授	佐々木史郎
	北・中央アジア文化研究演習Ⅰ	2			
	北・中央アジア文化研究演習Ⅱ	2			
アジア地域文化Ⅱ	東南アジア文化研究	2	東南アジアの住文化研究	准教授	佐藤　浩司
	東南アジア文化研究特論	2	東南アジアの周縁世界と開発	教　授	信田　敏宏
	東南アジア文化研究演習Ⅰ	2			
	東南アジア文化研究演習Ⅱ	2	東南アジアにおける地域文化	准教授	樫永真佐夫
	南アジア文化研究	2	インドのナショナリズムと宗教	准教授	三尾　稔
	南アジア文化研究特論	2	ネパールの現代政治と社会的包摂	准教授	南　真木人
	南アジア文化研究演習Ⅰ	2			
	南アジア文化研究演習Ⅱ	2			
	西アジア文化研究	2	中東イスラム社会における民衆文化	教　授	西尾　哲夫
	西アジア文化研究特論	2	モノと語りの相関関係を考える	准教授	山中由里子
	西アジア文化研究演習Ⅰ	2			
	西アジア文化研究演習Ⅱ	2			
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ文化研究	2	東欧の政治文化と宗教	准教授	新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究特論	2	南ヨーロッパのジェンダー・セクシュアリティ	准教授	宇田川妙子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	2	現代人類学とソシアルなるものの意味	教　授	森　明子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ	2			
アフリカ地域文化	アフリカ文化研究	2	人の移動に関する文化的研究	准教授	三島　禎子
	アフリカ文化研究特論	2			
	アフリカ文化研究演習Ⅰ	2	アフリカ地域の生態人類学	教　授	池谷　和信
	アフリカ文化研究演習Ⅱ	2	アフリカ史とアフリカ考古学	教　授	竹沢尚一郎
アメリカ地域文化	アメリカ文化研究	2			
	アメリカ文化研究特論	2	南アメリカのエスノヒストリー	教　授	齋藤　晃
	アメリカ文化研究演習Ⅰ	2			
	アメリカ文化研究演習Ⅱ	2			
オセアニア地域文化	オセアニア文化研究	2	アジア・太平洋地域における災害復興 ー支援、コミュニティ、文化	准教授	林　勲男
	オセアニア文化研究特論	2	オセアニアにおける土器文化の諸相	教　授	印東　道子
	オセアニア文化研究演習Ⅰ	2			
	オセアニア文化研究演習Ⅱ	2	オセアニアの政治と宗教	准教授	丹羽　典生
基礎科目	地域文化学基礎演習Ⅰ	2	地域文化研究に関する基礎演習	准教授	丹羽　典生
	地域文化学基礎演習Ⅱ	2	地域文化研究に関する基礎演習	准教授	三尾　稔
	地域文化学演習Ⅰ	2	博士論文作成のための演習	教　授	森　明子
	地域文化学演習Ⅱ	2	博士論文作成のための演習	准教授	山中由里子
共通科目	地域文化学特論Ⅰ	2	グローバル化と人類学	准教授	丹羽　典生
	地域文化学特論Ⅱ	2	文化人類学の文献講読	教　授	齋藤　晃

※基礎科目は必修科目
※年度によって開講科目は異なる

比　較　文　化　学　専　攻

担当教員一覧（平成27年度）22名

飯田　卓
（生態人類学・漁民研究）

上羽 陽子
（民族芸術学・染織研究・手工芸研究）

太田 心平
（社会文化人類学・北東アジア研究）

韓　敏
（社会人類学・中国研究）

菊澤 律子
（言語学・オーストロネシア諸語）

岸上 伸啓
（文化人類学・北方文化研究）

笹原 亮二
（民俗学・民俗芸能研究）

杉本 良男
（社会人類学・南アジア研究）

鈴木 七美
（文化人類学・エイジング研究）

鈴木　紀
（開発人類学・ラテンアメリカ文化論）

關　雄二
（アンデス考古学・ラテンアメリカ研究）

園田 直子
（保存科学）

出口 正之
（NPO メセナ・フィランソロピー）

寺田 吉孝
（民族音楽学・インド研究）

日髙 真吾
（保存科学）

平井 京之介
（経済人類学・東南アジア研究）

廣瀬 浩二郎
（日本宗教史・民俗学）

福岡 正太
（民族音楽学・東南アジア研究）

Matthews, Peter J.
（先史学・民族植物学）

松尾 瑞穂
（文化人類学・ジェンダー医療人類学・南アジア研究）

丸川 雄三
（連想情報学・文化財情報発信）

吉田 憲司
（博物館人類学・アフリカ研究）

比較文化学専攻授業概要（平成27年度）

分野	授業科目	単位	授業科目の内容	担当教員	
比較社会研究	比較社会研究Ⅰ	2	コミュニティの人類学	教　授	平井京之介
	比較社会研究Ⅱ	2	中国の社会人類学―欧米・日本・中国のパースペクティブ	教　授	韓　敏
	比較社会研究特論Ⅰ	2	政策の人類学は可能か？	教　授	出口　正之
	比較社会研究特論Ⅱ	2	社会・文化に関する人類学的アプローチ	教　授	岸上　伸啓
	比較社会研究演習Ⅰ	2	生殖医療とリプロダクションの人類学	准教授	松尾　瑞穂
	比較社会研究演習Ⅱ	2	文化人類学の研究動向と研究課題	教　授	岸上　伸啓
	比較社会研究演習Ⅲ	2	社会と経済に関する人類学的アプローチ	准教授	鈴木　紀
比較宗教研究	比較宗教研究	2	宗教とナショナリズム	教　授	杉本　良男
	比較宗教研究特論	2			
	比較宗教研究演習Ⅰ	2	エイジングの人類学	教　授	鈴木　七美
	比較宗教研究演習Ⅱ	2			
比較技術研究	比較技術研究Ⅰ	2	技術の伝承と流用、創作	准教授	飯田　卓
	比較技術研究Ⅱ	2	物質文化研究からみた複合社会形成	教　授	關　雄二
	比較技術研究特論	2			
	比較技術研究演習Ⅰ	2	アジアと太平洋地域における民族植物学と技術	教　授	Matthews,Peter J.
	比較技術研究演習Ⅱ	2	染織技術の比較研究	准教授	上羽　陽子
比較言語研究	比較言語研究	2	手話言語学	准教授	菊澤　律子
	比較言語研究特論	2			
	比較言語研究演習Ⅰ	2			
	比較言語研究演習Ⅱ	2	オーストロネシア比較言語学	准教授	菊澤　律子
比較芸術研究	比較芸術研究Ⅰ	2	無形文化遺産の映像記録	准教授	福岡　正太
	比較芸術研究Ⅱ	2	日常的・実践的な身体技法としての芸能伝承論	教　授	笹原　亮二
	比較芸術研究特論	2			
	比較芸術研究演習Ⅰ	2	北米・ハワイのアジア系音楽	教　授	寺田　吉孝
	比較芸術研究演習Ⅱ	2			
文化資源研究	文化資源研究	2	博物館における資料管理	教　授	園田　直子
	文化資源研究特論	2	大規模災害時における文化資源の保全活動 ―被災文化財の視点から―	准教授	日髙　真吾
	文化資源研究演習Ⅰ	2	文化財情報の発信	准教授	丸川　雄三
	文化資源研究演習Ⅱ	2			
	博物館研究	2			
	博物館研究特論	2	博物館人類学	教　授	吉田　憲司
	博物館研究演習Ⅰ	2	アートと人類学	准教授	太田　心平
	博物館研究演習Ⅱ	2	ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践	准教授	廣瀬浩二郎
基礎科目	比較文化学基礎演習Ⅰ	2	比較文化研究に関する基礎演習	准教授	鈴木　紀
	比較文化学基礎演習Ⅱ	2	比較文化研究に関する基礎演習	准教授	日髙　真吾
	比較文化学演習Ⅰ	2	博士論文作成のための演習	教　授	出口　正之
	比較文化学演習Ⅱ	2	博士論文作成のための演習	准教授	丸川　雄三
共通科目	比較文化学特論Ⅰ	2	知識と学習の人類学――労働・信仰・運動	教　授	平井京之介
	比較文化学特論Ⅱ	2	文化人類学基礎講読	准教授	太田　心平

※基礎科目は必修科目
※年度によって開講科目は異なる



在学生の研究テーマ

地域文化学専攻

■ジャワにおける宗教的犯罪と宇宙観―マレー世界の慣習法文化との比較と法人類学研究―

■新疆モンゴル社会における歴史語りに関する人類学的研究

■「負の遺産」の継承、その在り方について―ミュージアムが社会に果たす役割とは―

■日本の都市住民と観賞植物（草本類）との関わりにおける生き物文化研究

■オイラド・モンゴルのアイデンティティに関する研究

■中国の食文化の歴史人類学的研究―制度と礼俗を中心として

■中国青海省同仁県におけるチベット文化とその民族誌的研究
―同仁県ワォッコル村の事例から―

■先住民族による自然資源の利用に関する環境人類学的研究
―ニカラグア共和国・ミスキートによるウミガメ漁の事例―

■社会主義的政策下における牧畜社会の変容―中国内モンゴル・シリンゴル盟における開発を事例に―

■ベトナム北部山岳少数民族モン族社会の労働に関する民族誌的研究

■北海道西興部村における動物利用の歴史的変容に関する人類学的研究

■韓国と日本における墓と葬送儀礼の変容―「自然葬」の発生と定着を中心に―

Voice 在学生の声



地域文化学専攻
番旦 加布（平成25年度入学）

私は2009年4月に中国・チベットアムド地域から私費留学生として来日した。本学進学前は北海道大学に3年6ヶ月間在籍し、修士課程で初めて文化人類学を専攻した。大学は青海師範大学を卒業し、専攻はチベット語チベット文学であった。大学を卒業した2006年7月に青海チベット鉄道が開通し、チベット地域への観光客が急増した。大学時代に日本語も勉強していた私は、旅行会社の日本語ガイドとしてチベット各地をまわり、近代化によって起きている文化の変容に注目した。特に私は出身村で伝統的に行われて来たルロ祭と呼ばれる祭祀儀礼に関心を持ち、目の前で起きている伝統文化の変化を考えるようになった。そこで、民俗学に関する本を読むようになったが、文化人類学的研究調査と思考方法に関する知識を身に付ける機会がなかった。

私の場合は異文化研究ではなく、出身村の伝統文化に関心を持ち、自分とは何か、人間とは何かという文化人類学の視点で自分の出自に関わる歴史や文化などを記述しようとしている。文化の記録と保存、展示という博物館の仕事にも関心を持ち、北海道大学在籍中に学芸員資格取得のための授業も受講した。

本学の地域文化学専攻の基盤機関である国立民族学博物館は多言語による世界各地の民族学・文化人類学、民族誌、地方史などに関する文献、映像、音声、標本資料を多く収蔵しており、世界でも有数の研究機関であると言っても過言ではない。また、多岐にわたって民族学・文化人類学の最先端で活躍されている研究者に恵まれ、大学院生に対して一対一の丁寧な研究指導を行っている点も魅力である。さらに、国内外におけるフィールド調査に対するサポート体制も充実しており、一般の大学より研究会や国際シンポジウムなどを頻繁に行い、大学院生でも研究発表を行う機会も多く、自分が目指す研究にとって最高の条件を備えていると思う。

比較文化学専攻

■アッシジ刺繍にみる「聖なるもの」への関心

■中国内陸部における客家文化の観光開発と日常実践をめぐる人類学的研究―四川省洛帯鎮を中心に―

■独立解放から1950年代に描かれた伝統表象―韓国における西洋画を中心に―

■チャイナタウンの多声的状況と中華表象の主体的構築
―神戸南京町と長崎新地中華街の文化創造を事例として―

■アンデス地帯形成期における複雑化社会の変容―ペルー北高地南部ワヤガ川上流域の社会動態から―

■先史アンデスにおける生業と社会組織の相互動態的関係

■鳥類と人との関わり

■民族・民俗資料の文化資源としての活用に関する博物館人類学的研究

■スワヒリ海村における生計維持活動と技能に関する人類学的研究

■日本と台湾における歴史的空間・建築物の保存・活用に関する博物館学的研究

■男女間のバーバルコミュニケーション―酒場を背景として―

■近現代アジアにおける民族衣装をまとった聖母像―フィリピンと日本の事例を中心に―

■先史アンデス形成期における社会動態

■ラオス北部サムヌア地方における「伝統」織物の技術伝承とその変容

■沖縄島嶼地域における社会変化をめぐる民族誌的研究―池間島のカツオ漁の衰退に伴う地域社会の適応―

■Ethnobotany, Ecology, and Evolution of Wild and Cultivated Taro in Taiwan: *Colocasia formosana* Hayata and *C. esculenta* (L.) Schott

Voice 在学生の声



比較文化学専攻
古沢 ゆりあ（平成23年度入学）

わたしは、これまで美術史・藝術学の分野で学んできたが、美術を隣接する領域を含めてより広い視野で論じるためには、美術史の枠組みにとどまらず文化人類学的な観点や方法も取り入れることが有効なのではないかと思い、総研大に入学した。また、美術と関連して博物館学にも関心があるので、国立民族学博物館（民博）という基盤機関は魅力的であった。

わたしにとって、ここで学ぶ利点は次のようなものであった。

まず、博物館があること。民博に所蔵される膨大な標本資料のなかで自分の研究に関係があって参照したいものがあれば、展示場に展示中のものだけでなく、手続きをふめば収蔵庫の中の資料も閲覧・撮影ができる。さらに、展覧会やイベントなど博物館の活動や先生方の実践を通してどのように研究成果が社会還元されているのかを目の当たりにして学ぶことができる。例えば、大学院生も特別展の準備などをお手伝いさせていただく機会もあり、わたしは、2012年の「世界の織機と織物」展と、2014年の「イメージの力」展の準備に関わらせていただいた。また、様々なテーマで頻繁に開催される研究者同士の研究会や一般向けの講演会にも参加でき、文化人類学やその隣接分野での研究動向や最新の情報が常に耳に入って来る環境である。

大学院としての研究環境も充実している。院生各自に机と本棚の研究スペースがあるほか、パソコンなど共用の機材も豊富である。さらに、研究費（助成金）獲得のためのノウハウなど、研究をする上で必要な情報が、先輩から後輩へと受け継がれている。

学位論文を書く

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。又専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専　攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）
比較文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）

学位論文リスト

【課程博士】		
数学的手法を用いた文化分析の方法について	小島　三弘（比較）	[H４.３.31 学術]
シドニーにおける都市アボリジニの研究　伝統と民族の創出	鈴木　清史（比較）	[H６.３.24 文学]
オルドス・モンゴル族の社会構造―ヤスの機能とその歴史的変容―	楊　海英（地域）	[H６.９.20 文学]
ペルーにおける山の神信仰の現在性―アンデスの宗教的世界のダイナミズム―	細谷　広美（地域）	[H７.３.23 文学]
ビルマにおけるウェイザー信仰の研究	土佐　桂子（比較）	[H７.３.23 文学]
韓国社会の動態と「両班化」―忠清北道阿房郡における門中と儒式儀礼の検討を通して	岡田　浩樹（地域）	[H８.３.21 文学]
中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究	曹　　建南（地域）	[H８.３.21 文学]
歌に表象される落村意識―奄美における「シマの歌」の研究―	中原ゆかり（比較）	[H８.３.21 文学]
四会院家屋の文化人類学的研究―人間と自然との相互作用の視点から	杉山　京子（地域）	[H10.３.24 文学]
モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究―アルタイ・ハイラハ叙事詩を事例として―	藤井　麻湖（地域）	[H10.３.24 文学]
カストム・メレシーヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および民間医療観の現代的位相	白川　千尋（地域）	[H10.３.24 文学]
韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究	李　　善愛（比較）	[H10.３.24 文学]
東南中国の漢族社会組織とその変容―閩南農村社会における宗族の研究	潘　　宏立（比較）	[H10.３.24 文学]
芸の伝承―ジャワ島・チルボンの仮面舞踊を中心に	福岡まどか（比較）	[H10.３.24 文学]
Overt First and Second Person-Designating Terms in Japanese　Discourse ―A Pragmatic Perspective―	Riikka Lansisalmi(比較)	[H10.３.24 文学]
「二重の窮乏」下の平等理念―現代世界とキリバス南部環礁の社会生活―	風間　計博（地域）	[H10.９.30 文学]
建築と文化・社会との相互作用―中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象として―	栗原　伸治（地域）	[H10.９.30 学術]
カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容―宗教共同体と開発の視点から―	子島　　進（地域）	[H11.３.24 文学]
地域主義運動における言語と知識人―エストニア南部ヴォル地方の事例から―	寒水　明子（地域）	[H11.３.24 学術]
英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究 ―文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相―	塩路　有子（比較）	[H12.９.29 文学]
北タイ・アカの家屋に関する研究―家屋の形式とその変化への視点から―	清水　郁郎（地域）	[H13.３.23 文学]
韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化―忠清南道公州市を中心として活動する薬草商人を例に―	林　　史樹（地域）	[H13.３.23 文学]
現代インドネシアにおけるジャワ大衆演劇クトプラの研究	青木　武信（比較）	[H13.３.23 文学]
南ラオス村落社会における政治過程の研究―シゲの村における「連帯」と闘争―	中田　友子（地域）	[H14.３.22 文学]
20世紀前半のボリビアにおける先住民教育と植民地主義	吉江　貴文（地域）	[H14.３.22 文学]
カメルーンにおける「商売の民」バミレケの都市人類学的研究	野元　美佐（比較）	[H14.３.22 文学]
タイ式医療の構築とタイ・マッサージ―社会的文脈による権威的知識の多様性―	飯田　淳子（地域）	[H15.３.24 文学]
インドネシア・スンダの食文化―言語人類学的観点から―	阿良田麻里子（地域）	[H17.３.24 文学]
韓国の仮面劇「固城五広大」の伝承と演劇者―解放後の韓国社会における民俗芸能の変遷から―	高　　正子（地域）	[H17.３.24 文学]
帰還と離散のはざまで―ウクライナ―地方都市におけるユダヤ人巡礼の民族誌―	赤尾　光春（地域）	[H17.９.30 学術]
イスラエルにおけるアラブ人キリスト教徒のアイデンティティの様態 ―ガリラヤ地方・メルキト派カトリック信徒の事例研究―	菅瀬　晶子（地域）	[H18.３.24 文学]
トンガ王国の土地制度―グローバル化のなかの伝統―	森本　利恵（地域）	[H18.３.24 文学]
パラライカの鳴り響く空間：1917―48年における社会主義の文化の生成	大家(柚木)かおり(地域)	[H18.３.24 学術]
フィジーにおける植民地主義とインド系移民社会―砂糖キビ栽培地域の村落社会における文化の動態―	村田　晶子（比較）	[H18.９.29 文学]
上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的研究	飯國有佳子（地域）	[H19.３.23 文学]
「護り」の身体技法に関する映像人類学研究―インドネシア・ミナンカバウの事例から―	村尾　静二（比較）	[H19.３.23 文学]
離散と故郷―ヨルダンのパレスチナ系住民にみられる帰属意識とナショナリズム―	錦田　愛子（地域）	[H19.３.23 文学]
「子ども域」の文化人類学的研究 ―バングラデシュ農村社会の子ども―	南出　和余（比較）	[H19.３.23 文学]
参加型開発を通した女性の自己変容過程に関する人類学的研究―北インド農村社会を事例として―	菅野美佐子（比較）	[H19.９.28 文学]
「場」と「パフォーマンス」に関する人類学的研究―トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として―	米山　知子（比較）	[H19.９.28 文学]
フェライン的民族誌―ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション―	山田　香織（地域）	[H20.３.19 文学]
水上人と呼ばれる人々―広東珠江デルタの漢族エスニシティとその変容―	長沼さやか（地域）	[H20.３.19 文学]
在米コリアンのサンフランシスコ日本町―マルチカルチャーのエスニックタウン―	小谷　幸子（比較）	[H20.３.19 文学]
インド農村社会における不妊経験の人類学的研究	松尾　瑞穂（比較）	[H20.９.30 文学]
韓国における老人の食―老人福祉施設を中心に―	守屋亜記子（地域）	[H21.３.24 文学]
日本の先史時代における植物性食料の加工と利用：残存デンプン分析法の理論と応用	渋谷　綾子（比較）	[H22.３.24 文学]
農業技術改善の民俗誌―紀ノ川下流域村落の一七～二〇世紀前半における動向の分析―	加藤　幸治（比較）	[H22.９.30 文学]
オーストラリア先住民ヨルタ・ヨルタの環境管理のための先住民運動に関する文化人類学的研究	友永　雄吾（地域）	[H23.３.24 文学]
現代タイ社会における開発と僧侶―僧侶による社会貢献とネットワーク形成に焦点をあてて―	岡部真由美（地域）	[H23.３.24 文学]
現代東南中国における宗親会の民族誌的研究―国家との関係を中心として	藤　　夏晗（比較）	[H23.３.24 文学]
ヨーグルトをめぐる言説の生成と展開―社会主義期からポスト社会主義期にかけてのブルガリアを中心に―	マリア・ヨトヴァ（比較）	[H23.９.30 文学]
無文字社会における歴史記憶の生成と継承　―南エチオピア牧畜民ボラナにおける口承史の分析をとおして―	大場　千景（地域）	[H24.３.23 文学]
カオダイ教ハノイ聖室の民族誌的研究―ベトナム北部地域の都市における女性たちの社会関係―	伊藤まり子（地域）	[H24.３.23 文学]
周辺イスラームのダイナミズムータイ南部村落におけるイスラーム復興運動と宗教実践の変容―	小河　久志（地域）	[H24.３.23 文学]
変化しつづける装い―中国雲南省文山モンの自己と他者をめぐる人類学的服飾研究―	宮脇　千絵（地域）	[H24.９.28 文学]
現代アンデス農村における聖人信仰の変容　―人の移動に焦点をあてて―	八木百合子（比較）	[H24.９.28 文学]
ナイジェリアの都市イレ・イフェにおける「アーティスト」の民族誌的研究	綾方しらべ（比較）	[H26.３.20 文学]
中国雲南省における徳宏タイ族の即興うたと感性の民族誌的研究	伊藤　悟（地域）	[H26.９.29 文学]
My *Huaca*: The Use of Archaeological Heritage in Modern Peru from a Public-Archaeology Perspective	ｻﾝﾄﾞﾛ･ｾﾊﾞｽﾁｬﾝ･ﾃﾞｭﾗﾝﾄﾞ（比較）	[H26.９.29 文学]
モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる交渉に関する民族誌	堀田あゆみ（地域）	[H27.３.24 学術]
「野球移民」を生みだす人びとードミニカ共和国におけるトランスナショナル移民研究―	窪田　暁（比較）	[H27.３.24 文学]

【論文博士】		
An Areal-Typological Study of Middle American Indian Languages	八杉　佳穂	[H６.３.30 文学]
農村女性からみたトルコの「近代化」―世俗主義、イスラーム、女性の相互関係	中山　紀子	[H９.３.24 文学]
南タイにおける実践宗教―ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から―	西井　凉子	[H９.３.24 文学]
セネガルの公権力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究	小川　　了	[H９.３.24 文学]
メラネシアの政治的リーダーシップと開発 ―ソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐって―	関根　久雄	[H10.９.30 文学]
南インドの農村におけるカースト内関係としての親族―コング・ヴェッラーラの事例研究―	杉本　星子	[H10.９.30 文学]
アイヌ民族における神送りの研究―沙流川流域を中心に―	萱野　茂	[H13.３.23 学術]
低湿地立地の遺跡にみる縄文時代本州西部地域の生業活動 ―縄文時代早期末から中期初頭における若狭湾沿岸と琵琶湖周辺地域の動物考古学的考察―	内山　純蔵	[H14.３.22 文学]
考古学における数量化と数理的手法の研究	及川　昭文	[H14.３.22 学術]
鼓管信仰―近世江南農村社会と民間宗教―	濱島　敦俊	[H14.９.30 学術]
中国の食事方法―歴史人類学的考察―	西澤　治彦	[H15.３.24 文学]
台湾原住民のイノシシ（Sus scrofa taivanus）狩猟の民族考古学的研究： 動物遺存体研究の方法論構築にむけて	野林　厚志	[H15.３.24 学術]
The Transformation and Social Functions of the sNang zhig Family and its Monastery ―An Ethnographic Description of the Bon Tradition in Amdo	才旦　　太	[H16.９.30 学術]
利用者の視点にたった博物館の理念と活動様式の研究	布谷　知夫	[H16.９.30 文学]
トビニタイ文化の集団構成と生計戦略―北海道東部における「中世アイヌ社会」成立に至る一関係―	大西　秀之	[H17.３.24 文学]
アットゥシの歴史に関する基礎的研究―アイヌ伝統文化の再検討の試みとして―	本田　優子	[H17.９.30 文学]
カナダ・イヌイットの食物分配に関する文化人類学的研究―先住民社会の変容と再生産―	岸上　伸啓	[H18.３.24 文学]
タイ中部農村における相互行為の民族誌的研究	高城　　玲	[H18.３.24 文学]
東ネパールにおける羊飼いの生産活動と放牧地をめぐる社会関係	渡辺　和之	[H18.３.24 文学]
「アイヌ風俗画」の研究―近世北海道におけるアイヌと美術	新明　英仁	[H19.９.28 文学]
国際線客室乗務員の接客業務と勤務体制―仕事の人類学的研究―	八巻　恵子	[H21.９.30 文学]
シャーマニズムによるエスニシティの探求―ポスト社会主義期におけるモンゴル・ブリヤートの事例を中心として	島村　一平	[H22.３.24 文学]
活用される職祖伝承―近・現代日本における木工挽物の担い手と木地屋「根元地」―	木村　裕樹	[H22.９.30 文学]
先住民学習の理論と実践―ポストコロニアル人類学の活用―	中山　京子	[H22.９.30 学術]
スリランカにおけるエステート・タミルのアイデンティティと「ジャーティヤ」をめぐる人類学的研究	鈴木　晋介	[H23.３.24 文学]
小集落から見た初期国家の形成過程―先スペイン期中央アンデスのワリ国家を事例として―	土井　正樹	[H24.３.23 文学]
先史アンデス形成期の社会動態―ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から―	山本　睦	[H24.９.28 文学]
多文化都市・新宿の生成と展開―ライフサイクルの視座―	川村千鶴子	[H25.３.22 学術]
先住民生存捕鯨再考―国際捕鯨委員会における議論とベクウェイ島の事例を中心に―	濱口　尚	[H25.９.27 文学]
アイヌ衣文化の研究	津田　命子	[H26.９.29 文学]

年度別学位授与者数

平　成		3年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	12年	13年	14年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年	計
地域文化学専攻	課程博士	0	0	2	2	0	3	4	2	1	1	2	4	2	2	1	0	2	3	1	0	1	33
	論文博士	0	0	0	0	3	0	2	0	1	1	3	2	0	1	0	1	0	0	1	0	1	16
比較文化学専攻	課程博士	1	1	1	1	0	4	0	2	2	0	0	0	3	3	1	1	2	1	1	1	1	26
	論文博士	0	1	0	0	0	0	0	1	1	2	0	2	0	0	0	1	3	1	1	1	0	14
計		1	2	3	3	3	7	6	5	5	4	5	8	5	6	2	3	7	5	4	2	3	89

Voice 卒業生の声



滋賀県立大学　人間文化学部　国際コミュニケーション学科　准教授
島村　一平（平成22年3月学位取得）

私は、モンゴルのナショナリズムやエスニシティの問題を特にシャーマニズムを切り口に研究してきた。意外なことであるが、モンゴルのシャーマニズム研究は、ここ10数年、欧米の人類学者の間でホットスポットとなっている。私が院生であった頃（2000年前後）も、ケンブリッジやハーバードといった大学の博士院生が10人以上、モンゴルでシャーマニズムをテーマにフィールド・ワークを行っていた。そうした事情から、私は日本語よりももしろ英語やモンゴル語で成果を発表することを意識してきた。モンゴル語でも書くのは、現地の研究者や一般の人々にも読んでもらいたいからだ。それと、実は欧米のモンゴル研究者も読む。つまり現地語の方が、日本語より研究上のパブリシティが高いのである。そうした国際発信力が評価されたのか、いくつかの学術賞をいただいた。

総研大のいいところは、まず私のような門外漢を受け入れてくれる度量の深さがある点だ。実は私は法学部の出身で、卒業後ドキュメンタリー番組の制作会社に就職した。そこでたまたま取材で訪れたモンゴルに魅せられ、会社を辞めて留学を果たした。したがって修士課程はモンゴルの大学の出身である。こうした私を受け入れてくれたことに本当に感謝している。第二に総研大の地域文化学・比較文化学両専攻が置かれている国立民族学博物館は、日本最大の文化人類学の研究所であるという点である。クリフォード・ギアツいわく「ある学問がどんな学問なのかを知りたければ、その学問を研究している人びとが実際にどんなことをしているかをまず見るべきである」。みんぱくほど「人類学者」と呼ばれる人びとが普段何をしているのか、参与観察できる場所はない。人類学者を目指す皆さん、総研大の両専攻は良いですよ。



南山大学　人類学研究所　研究員（国際化推進事業担当）
宮脇　千絵（平成24年9月学位取得）

中国語を専攻していた学部生のときに訪れた特別展「異文化へのまなざし」が、私と民博、そして文化人類学という学問との出会いでした。それ以来ファンであった民博のなかに入りたい、それも私が総研大に進学した理由のひとつです。

総研大は、調査研究をサポートしてくれる体制も整っていますし、学生主体のジャーナルやフォーラムなど研究成果を発表する場も多く準備されています。年間を通して開催される国内外のシンポジウムや学会の運営補助といった「研究外」活動もまた、研究者としての実務的資質を育んでくれました。中国雲南省のモン（ミャオ族）の服飾文化を研究する私にとっては、博物館におけるモノの扱い方、展示に関して実践的に学べる場でもありました。ほぼ毎日院生室にいた私は、総研大の資源を存分に活用した学生の一人だったのではないかと自負しています。

一大研究拠点である民博を離れたいま、そこでのたくさんの「出会い」が大きな財産となっていることを実感します。研究活動は時に不安で孤独なものです。しかし博士課程の苦楽を共にした同世代や総研大の歴史を紡いできた先輩方の活躍、指南し後押しとなってくれる教員や民博に集う多彩な研究員の存在は、ひとりの研究者として自立するための支えになってくれます。

総研大の充実した研究リソース、そこで培うことのできる幅広い人脈を、これから入学する後輩のみなさんにも引き継いでいってもらいたいと思います。

地域文化学専攻および比較文化学専攻の出身者は、以下のようなところに在職し、教育研究に活躍しています。

愛知淑徳大学、愛媛大学、大阪大学、大谷大学、沖縄県立芸術大学、帯広大谷短期大学、鹿児島国際大学、鹿児島純心女子大学、神奈川大学、川崎医療福祉大学、関西外国語大学、神田外語大学、京都外国語大学、京都文教大学、神戸大学、神戸市外国語大学、神戸山手大学、成蹊大学、滋賀県立大学、静岡大学、四天王寺大学、芝浦工業大学、大同工業大学、中部大学、筑波大学、天理大学、東京外国語大学、東北学院大学、東洋大学、長崎純心大学、新潟国際情報大学、日本大学、阪南大学、広島大学、広島市立大学、宮崎公立大学、桃山学院大学、中京大学、南山大学、インドネシア学術総局［インドネシア］、上海師範大学［中国］、北京大学［中国］、ライデン大学［オランダ］、在ペルー日本国大使館、総合地球環境学研究所、総合研究大学院大学、国立民族学博物館

Q&A

Q 国立民族学博物館に地域文化学専攻と比較文化学専攻の二専攻がありますが、これらはどのようにちがいますか？

A 地域と比較のいずれに比重を置くかにより二専攻に別れているものの、共にフィールドワークを研究の根幹においているため、共通する部分も多く、密接な相互交流があります。また、専攻間に指導上の棲み分けはなく、院生がどちらの専攻に所属していても、両専攻に所属する教員の指導を受けることができるというメリットがあります。

Q 受験する前に希望する指導教員をかならず決めておく必要がありますか？

A 必要条件ではありませんが、強くお勧めします。また、受験を申請する前に希望指導教員に連絡を取れば、入学後の研究の見通しを立てる一助となるでしょう。

Q 研究支援制度にはどんなものがありますか？

A 研究に関連する様々な業務を行いながら給与を得ることができる「リサーチ・アシスタント（RA）制度」や、学会における発表やフィールドワークに対して支援をおこなう学生派遣事業があります。学内の奨学金制度はありませんが、外部研究資金調達のための申請書の書き方などについても指導を行っています。

Q 地域文化学専攻と比較文化学専攻で学ぶことができるのは、文化人類学・民族学だけでしょうか？

A そんことはありません。両専攻には、考古学、風俗学、建築学、情報学、言語学、音楽学、博物館学、保存科学など幅広い分野を専門とする教員がそろっているので、それらの分野でも研究を行うことができます。また、教員の陣容は年度によって変化することがあるので、希望研究内容と当専攻の教育体制との整合性について不明な点がある方は、事前にお問い合わせください。

Q 地域文化学専攻と比較文化学専攻に入学すると、かならず長期の現地調査をしなければなりませんか？また、国内での現地調査も可能でしょうか？

A 実際には長期のフィールドワークを行う学生が多いのですが、研究の目的や内容によっては独自のフィールドワークの形を決めていくことも可能です。たとえば、継続した長期調査のかわりに短期の調査を繰り返しおこなうことで調査可能なテーマも存在します。また、調査対象は海外だけではありません。これまでにも数多くの卒業生が、国内のフィールドワークに基づいた博士論文を完成させています。

Q 長期の現地調査をするときには、授業料が免除されますか？

A 長期フィールドワークを行う期間中は、休学が認められています。在学中に支払う授業料の総額が減額されるわけではありませんが、フィールドワークを行う学期中に授業料を払う必要はありません。

Q 学部や修士課程で文化人類学・民族学を専攻しなかったのですが、地域文化学専攻や比較文化学専攻を受験することはできますか？

A 大学などで正規に文化人類学・民族学を学んだ経験がなくても受験することは可能です。しかし、入学後に志望研究が遂行可能であるか見通しをつけるためにも、関連図書などを精読し、少なくとも人類学やフィールドワークに関する基本的な考え方について理解しておいたほうがよいでしょう。この作業は、何をするために当専攻を受験するのかを整理するためにも役立つはずです。

Q 受験する前に調査予定地域の現地語を習得している必要がありますか？

A 入学時にフィールドの言語を習得していることは望ましいのですが、受験の必要条件ではありません。入学前の習得が難しい言語が存在するだけでなく、それまでに習得した言語以外の地域に研究を広げる必要がある場合もあるからです。特に、現地でのみ習得可能な言語に関しては、フィールドワークをしながら徐々に身に付けていくこともあります。

みんぱくについて



館長挨拶

地域文化学専攻と比較文化学専攻の受験生に期待する



国立民族学博物館長　**須藤　健一**

国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館をそなえた世界でもユニークな文化人類学・民族学の研究所です。60名の教員たちは、「地の先へ。知の奥へ。」をモットーに世界各地で、グローバリゼーションの動きを受容し、あるいはそれに抗いながら独自の社会と固有の文化を維持ないし創造している人びとの営みを研究しています。一方で、世界の諸民族の生活や考えをより深く理解するために民族資料や映像音響資料の採録などにつとめ、「もの」をとおして文化を表現する展示活動も行っています。

文化人類学・民族学は、現地の人びとと生活をともにしながら日常生活から地球規模の影響をも視野に入れて人間の社会と文化を研究する学問です。異文化に生きる人びとを理解するためには幅広い視野、柔軟な思考と豊かな想像力が求められます。そして、収集したデータを分析して論理的に記述する手法が大事です。

みんぱくには、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置され、文化人類学をはじめ言語学、宗教学、生態学、先史学、民族音楽学そして博物館学などを研究する個性ゆたかな教授陣がいます。そのうえ、民族資料、文献図書や映像音響など100万点をこす資料を所蔵しており、研究環境においてはわが国随一の大学院であるといえます。

私たちは、皆さんが人類学の研究課題を追究し、博士論文を書きあげて一人前の研究者として社会に飛び立つことを支援するのを楽しみにしています。



国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要

国立民族学博物館（みんぱく）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。みんぱくは、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究や共同研究を進めるとともに、学術情報を集積しています。その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することも使命としています。

国立民族学博物館は「博物館機能をそなえた研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。みんぱくの展示は、常設展示と特別展示と企画展示とで構成されており、常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示と企画展示は、特定のテーマのもとに、年に数回、期間を限って開催されます。

みんぱくは、2004年４月より、国立大学と足並みをそろえて、法人組織となりました。法人の正式名称は、「大学共同利用機関法人人間文化研究機構」ですが、みんぱくは、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所とともに、その一員として再出発しました。その後、2009年10月には６番目の大学共同利用機関として新たに国立国語研究所が加わりました。またみんぱくの研究部は、３研究部（民族社会、民族文化、先端人類科学）２センター（研究戦略センター、文化資源研究センター）体制に組織替えがなされました。研究活動の機動性を高めるとともに、その成果をより広くわかりやすく社会に伝えていくための措置です。文化人類学・民族学を基盤としつつ、研究の機関と分野の別を超えて、人間文化の総合的理解を深めようとする、みんぱくの新たな活動が始まっているのです。

所蔵民族学資料（平成27年4月1日現在）

標本資料（未登録資料含む）		映像音響資料	
海外資料	177,689点	映像資料	7,994点
国内資料	163,243点	音響資料	62,651点
計	340,932点	計	70,645点
文献図書資料			
日本語図書	266,823冊	日本語雑誌	10,104冊
外国語図書	394,214冊	外国語雑誌	6,830冊
計	661,037冊	計	16,934冊

展示場案内図









総合研究大学院大学について



総合研究大学院大学長
岡田 泰伸

医学博士。京都大学医学部卒。同大学医学部助手、講師を経て、平成4年に岡崎国立共同研究機構生理学研究所超微器官研究系教授に就任。平成16年に自然科学研究機構生理学研究所教授、副所長を経て、平成19年から所長・副機構長、平成22年から同機構の理事を歴任。
専門は分子細胞生理学。特に動物細胞の増殖調節機構、アポトーシス、ネクローシスや虚血性細胞死の誘導メカニズム、アニオンチャネルのセルセンサー・シグナリング機能における分子メカニズム研究の第一人者。生物学・生化学分野論文におけるISI高頻度被引用者。平成18年より16年間日本生理学会会長、5年間アジア・オセアニア生理学会（FAOPS）会長。平成12、22年度に日本生理学会入賞賞共同受賞。

学長挨拶

総合研究大学院大学（以下、総研大）は、1988年にわが国で最初に設立された自らは学部を持たない大学院だけの大学（独立大学院大学）であり、人文・理工にわたる学術分野につき総合的な博士課程教育を、大学共同利用機関等を基盤機関として、それらの優れた研究・学習環境を最大限に生かして行うことにより、高い専門性と広い視野を持った一流の研究者を養成するという世界にも類例のないユニークな大学です。

総研大への入学者はすべて他の国公私立大学（2014年度入学者は15外国大学を含む64大学）からの出身者です。わが国の高等教育の最大の欠点の一つは流動性の低さとそれによる単線性や縦割性にありますが、総研大に入学する学生は、その弊害からまず自ら脱しています。それゆえに総研大の学生達は、多くのバリアを越えて飛び出すことができたという高いポテンシャルを、そして多くの場合には分野や学域を越えて飛び込もうという気概と挑戦力を有しています。この点が、総研大の第一の特性であり、それが大学にも、そして一人一人の学生にも大きなメリットを与えています。というのは、新しい出会いや、新しい学問風土との接触こそが、新しい学問を形成する上で大きな力を与えるものだからです。

総研大の第２の特性は、世界最先端の研究設備・施設・資料・データベースが配備され、トップクラスの研究者マンパワーが国内外の研究者と不断に共同研究を展開している（計19の）大学共同利用機関等の研究現場という非常に恵まれた環境の下で大学院教育が行われるという点にあります。それらの基盤機関においては、専門性の高い国際的な研究活動が実施されていると共に、全国の大学・研究機関や諸外国の研究者との分野を越えた共同研究が行われています。それゆえに、「深い専門性」と「国際的な通用性」と「異分野連繋性」を兼ねそなえた研究者の養成を目指すことができるのです。

総研大の第３の特性は、高度の専門性の獲得にとどまらず、「総合性」の修得が体系的・組織的に目指されていることです。総研大の基盤機関・専攻の全体において、文化、歴史、情報、生命、人体、エネルギー、物質、宇宙など実に多様な分野の研究が行われています。この学術的な多様性を活用して、自らの専門的知識を他の知識と結合しながら知識全体の中に位置づけるという「広い視野」の獲得を総合性修得の第１の内容とすることができます。新しい学問は、多くは異なる分野をまたぐ形で現れ、その発展には異分野からの研究者の参入を必要としています。このような新しい分野における教育は、一専攻や一研究科の枠にはおさまりきらず、複数の専攻・研究科をまたぐ形で行われる必要性が生じています。総研大では、その必要性に対応するために“合宿型全学総合教育プログラム”や“研究科横断型専攻間融合プログラム”を推進しています。総研大では、専攻や研究科を越えた教育と異分野連繋の共同研究現場における学習・研究によって、「分野を越えた学際性」の獲得を目指すことができる点が、総合性修得の第２の内容です。科学が生み出した多くのものが社会において物質化されて人々の生活に大きな影響を与えている今日では、科学者には研究成果やその使われ方がもたらす結果に対しても説明責任が求められています。即ち、現代の科学者には人類や社会を視野に入れた人間の総合性の修得が求められているのです。総研大教育における総合性修得の第３の内容は、「社会と連携する科学」という視点の獲得を目指していることです。

総研大の目標は、したがって、①深い専門性と広い視野を併せ持ち、異分野連繋的・社会連携的な視点を持つ国際的研究者人材を育成すること、②基盤機関と葉山の連係と、国内外研究者との共同利用研究によって、学際的で先導的（即ち新分野開拓・敷衍的）な研究を大学院生と共に展開すること、そして③社会と連携する科学を創造・教育するアジア大学院教育拠点としての地位を確立することです。

総研大の学生のみなさんには、こうした総研大の特性や目標をよく理解した上で、与えられたメリットを活用しつつ、大きな課題に挑戦されることを願っています。日々研鑽の忙しい大学院学生生活ですが、分野の異なる人々や大学や国を異にする人々との交流にも努めて下さい。それらによって得られた人と人とのつながりが、将来の研究人生に大きな財産をもたらすことになるからです。また、日本人学生は外国語の、外国人学生は日本語の修得にも心掛けて下さい。異なる専門分野間と同様に、異なる文化間のコミュニケーションに基礎なことは、国際的通用性を持った博士号取得者として、その能力を発揮する上での必須条件の一つとなるからです。総研大は教育現場においてもバイリンガル性の付与に力を尽くしたいと考えています。

総研大の全職員は、学生と共に、総研大の特性を更に発展させ、力を合わせて本学の目標の実現に向けての努力をして参りますので、関係各位には総研大の一層の発展のためにご理解とご支援を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

総合研究大学院大学の特徴

特色ある博士課程教育
- 5年一貫制博士課程制度と博士後期課程制度の併設
- 基盤機関の研究現場を活用した教育プログラム
- 個の能力に即したマンツーマン的教育プログラム
- 社会人学生・留学生受入れプログラム

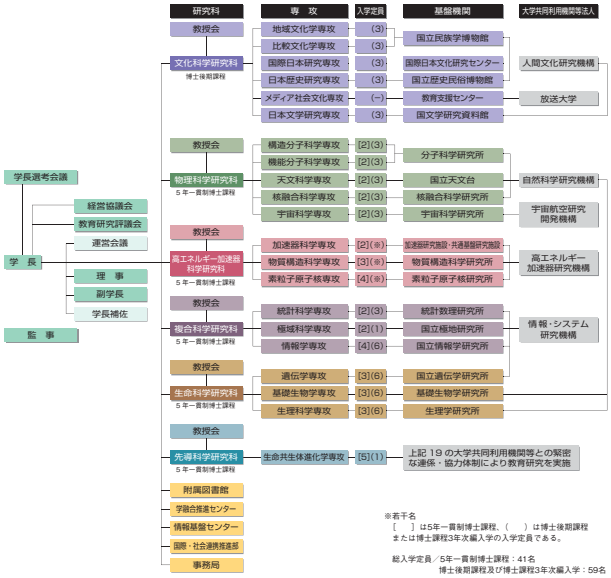
広い視野の養成
- 合宿によって行う全学総合教養教育プログラム（フレッシュマン・コース）
- 専攻・研究科間の共同教育研究事業
- 遠隔授業システムを活用した専攻横断的教育の提供

高い専門性の育成
- 各専攻分野の最先端研究者による研究指導
- 多様な専門教育プログラム
- 長倉研究奨励賞・総研大特別研究賞・未来科学者賞
- 基盤機関が有する世界最高水準の資料・施設・設備の活用

国際的通用性の確保
- 最先端研究技術・研究者の交流拠点における教育
- プレゼンテーション能力養成プログラム
- 海外学生派遣事業
- 国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムの活用

分野横断的・先導的学問分野の創出
- 各種新分野に対する研究・専攻を横断する特別教育プログラムの実施
- 学融合推進センターにおける異分野連繋的・社会連携的教育・研究事業の推進
- 「科学と社会」プログラムの全学的な展開
- 修了生を中心とした学術交流ネットワーク

平成27年度 教育研究組織



※若干名
［　］は5年一貫制博士課程、（　）は博士後期課程または博士課程3年次編入学の入学定員である。

総入学定員／5年一貫制博士課程：41名
博士後期課程及び博士課程3年次編入学：59名

入学案内

詳細は募集要項を請求のうえ確認してください。

(1) 出願資格

次のいずれかに該当する者とします。
①修士の学位または専門職学位を有する者及び入学の前月までに取得する見込みの者
②外国において、修士の学位または専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者
③外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位または専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者
④我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置づけられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位または専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者
⑤学校教育法施行規則第156条第４号の規定により、国際連合大学の課程を修了し、修士の学位に相当する学位を授与された者及び入学の前日までに授与される見込みの者
⑥外国の学校、外国の大学院の課程を有する教育施設または国際連合大学の教育課程を履修し、大学院設置基準（昭和49年文部省令第28号）第16条の２に規定する試験及び審査に相当するものに合格し、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者及び入学の前月までに認められる見込みの者
⑦大学を卒業し、大学、研究所等において、２年以上研究に従事した者及び入学の前月までに２年以上研究に従事する見込みの者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑧外国において学校教育における16年の課程を修了した後、または外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において２年以上研究に従事した者及び入学の前月までに２年以上研究に従事する見込みの者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑨本学において、個別の入学資格審査により、修士の学位または専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、入学の月の１日において24歳に達している者
（⑥～⑨により出願しようとする者は、事前に本学で実施する出願資格認定審査によって「学力の認定」を受ける必要があります）

(2) 出願期間

出願資格①～⑤に該当する者：平成27年11月27日（金）～12月３日（木）
出願資格⑥～⑨に該当する者：平成27年11月９日（月）～11月12日（木）
受付場所：総合研究大学院大学　学務課　学生厚生係
※原則郵送による受付。

(3) 選抜方法

①書類選考
②修士論文等の審査
③面接（平成28年1月下旬より面接を行います）

入学者選抜試験倍率（地域・比較）

平　成	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年
志願者数	22	17	23	31	23	28	18	19	8	18	15	13	10	10	7(1)	8(1)	11	8
合格者数	6(1)	7	6	8	8	7	6	7(1)	6(1)	7	4	4	5	4(1)	4(1)	4	8	6
倍率	3.7	2.4	3.8	3.9	2.9	4	3	2.7	1.3	2.6	3.8	3.3	2	2.5	1.5	1.8	1.4	1.33

※（　）は部選者で内数。

募集要項の請求方法

下記メールアドレスに、以下の必要事項を記入し、送信してください。
(1) 郵便番号
(2) 住所
(3) 氏名
(4) 電話番号
※配布は８月下旬頃から開始します。

募集要項請求先

総合研究大学院大学　学務課　学生厚生係
メールアドレス：kousei@mlsoken.ac.jp
〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
TEL：046-858-1525, 1526

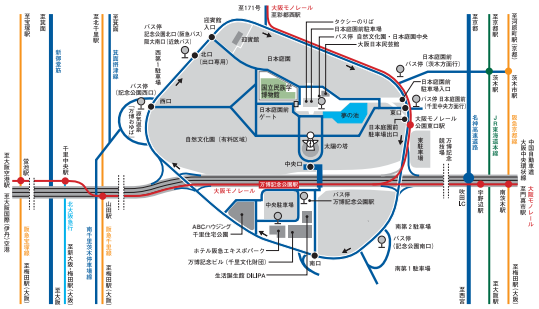


葉山キャンパス

問合せ先

国立民族学博物館 管理部研究協力課研究協力係

〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151(代表)　06-6878-8236(専攻担当)　FAX 06-6878-8479
URL http://www.minpaku.ac.jp/　大学院トップページ
E-mail souken@idc.minpaku.ac.jp　http://www.minpaku.ac.jp/research/education

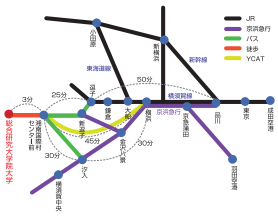


●大阪モノレールで「万博記念公園駅」-「公園東口駅」下車徒歩約15分
自然文化園（有料区域）を通ってこられる場合、自然文化園ゲート脇の券売機で本館（国立民族学博物館）の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。また、「公園東口駅」からは、自然文化園を通行せずに来館できます。
●近鉄バスで阪急茨木市駅・JR茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約15分。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

総合研究大学院大学 事務局

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町(湘南国際村)
電話 046-858-1500(代表)　FAX 046-858-1542
URL http://www.soken.ac.jp/





●電車・バス利用
・JR 横須賀線逗子駅東口下車
▶京急バス①番乗り場より16 系統-26 系統「湘南国際村」行き、「湘南国際村センター前」下車 乗車時間：約25分　運賃：350円
▶京急バス②番乗り場より「湘南佐島なぎさの丘」行き、「湘南国際村門門訳調整池」下車 乗車時間：約20分　運賃：330円
・京浜急行逗子・葉山駅東口下車
▶京急バス①番乗り場より16 系統-26 系統「湘南国際村」行き、「湘南国際村センター前」下車 乗車時間：約25分　運賃：350円
▶京急バス①番乗り場より「湘南佐島なぎさの丘」行き、「湘南国際村門門訳調整池」下車 乗車時間：約18分　運賃：330円
・京浜急行本線泊入駅下車
▶京急バス②番乗り場より16 系統「湘南国際村」行き、「湘南国際村センター前」下車 乗車時間：約30分　運賃：380円
・YCAT
▶横浜シティーエアーターミナル⑧番乗り場「横須賀西海岸」行き（電力中央研究所行きバス）「湘南国際村センター前」下車　乗車時間：約45分　運賃：920円
(注)「湘南国際村センター前」下車徒歩３分、「湘南国際村門門訳調整池」下車徒歩10分

●車利用
・横浜横須賀道路（有料）「逗子インター」より逗葉新道（有料）出口より交差点左折
南幅トンネルを抜け直進約５分「湘南国際村センター入口」交差点を左折約１分

SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies)
School of Cultural and Social Studies

Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies

Overview '16



総合研究大学院大学
文化科学研究科

地域文化学専攻
比較文化学専攻

概要 '16

国立民族学博物館

目　次

人間と世界を究める

地域文化学・比較文化学専攻の魅力……1
文化科学研究科について……2
地域文化学・比較文化学専攻について……3

みんぱくで学ぶ

地域文化学専攻
担当教員一覧……4
2016年度開講科目　授業概要……5
比較文化学専攻
担当教員一覧……6
2016年度開講科目　授業概要……7

世界で学ぶ

学生の研究フィールド……8・9
在学生の研究テーマ・在学生の声
（高木 仁　荘司一歩）……10・11

学位論文を書く

過去の学位論文一覧……12・13
卒業生の声（飯國有佳子　窪田 暁）……14

各種奨学金・経済支援　学生支援……15
よくある質問……16・17

みんぱくについて

館長挨拶……18
国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要……19

総合研究大学院大学について

学長挨拶……20

入学案内……21

連絡先……裏表紙





人間と世界を究める

地域文化学専攻・比較文化学専攻の魅力

1．充実した教授陣

学生数をうわまわる教授陣は、学生一人一人の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また両専攻の教員は各分野の第一線で活躍する研究者であるため、最新の研究動向に基づいた指導を行うことができます。

2．豊富な情報源

日本における民族学（文化人類学）関連の最大の資料類が揃っています。また、館が主催する数多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通して、国内外の優秀な研究者との交流が容易になります。

3．各種の支援制度

授業料免除制度、学会発表やフィールドワークへの旅費の援助など、充実した研究支援が受けられます。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の教育とは？

地域・比較文化学専攻では、以下の３点を目的とする教育活動を行っています。

① 独創的な文化人類学・民族学の研究
② 長期のフィールドワークで得られた資料にもとづく学位論文の作成
③ 広い視野をもった、専門的教養を養う

指導体制

個別指導と共同指導を組み合わせたユニークな指導体制を採用しています。各院生には正副２名の指導教員が指名され、入学から学位取得まで、これらの教員が中心となって日常的な指導をおこないます。一方、ゼミにおいては共同指導体制を取り入れています。ゼミは各４名の教員が担当し、研究の内容だけでなく発表の方法などに関する指導をおこないます。担当教員以外の教員にもゼミへの参加を求めることができ、また基本的に専攻長もゼミに出席するため、正副の指導教員を含めると10人前後の教員からコメントを得ることができます。

スケジュール

学生はおおむね１年次において「１年生ゼミ」での指導をもとに現地調査（フィールドワーク）の準備をおこない、２年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミ」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

文化科学研究科について

総合研究大学院大学、略して「総研大」は、学部をもたず大学院だけから成る国立大学として、昭和63年（1988）10月１日に開学しました。現在、全部で６つの研究科から構成されていますが、他の研究科が全て理系であるのに対して、文化科学研究科は唯一の文系研究科です。

研究科の成り立ちは、まず平成元年（1989）４月に、大学共同利用機関である国立民族学博物館を基盤とする地域文化学専攻・比較文化学専攻が設置されました。その後、平成４年（1992）４月に、国際日本文化研究センターを基盤とする国際日本研究専攻、平成11年（1999）４月に、国立歴史民俗博物館を基盤とする日本歴史研究専攻、平成13年（2001）４月にメディア教育開発センターを基盤とするメディア社会文化専攻、平成15年（2003）４月に、国文学研究資料館を基盤とする日本文学研究専攻が順次増設され、６専攻となりました。

国立大学の法人化に伴い、平成16年（2004）４月からは、新たに大学共同利用機関法人人間文化研究機構が設立され、４つの研究機関（国立民族学博物館、国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館）が属することとなり、独立行政法人メディア教育開発センターをあわせた５つの研究機関が基盤となりました。そして、平成21年（2009）４月に、独立行政法人メディア教育開発センターが、放送大学内に設置されたICT活用・遠隔教育センターに業務が移管され、現在に至っています。なお、総研大の他の研究科は、博士課程前期（修士）の学生を受け入れる５年一貫制を採用していますが、文化科学研究科は、博士課程後期（博士）のみから成っていることを申し添えます。

文化科学研究科の６専攻（民博から２専攻）は、それぞれが日本を代表する研究機関を基盤として、すでに多くの学位取得者、専門研究者を輩出し、またそのための努力を重ねていますが、同時に、文化科学研究科全体として、学生の専門研究を支援し、また『総研大文化科学研究』の刊行など専攻同士の横断連携を推進する事業を推進しております。



地域文化学・比較文化学専攻について

地域文化学専攻
専攻長　横山 廣子



アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ及びオセアニア等諸地域に居住する諸民族の個別文化を研究対象とします。おのおのの文化のもつ特性や歴史性について考慮しながら、民族誌学的方法論に基づいた文化の記述と構造の把握を主要な目的としています。本専攻においては、現地調査に基づいて個別文化の記述的研究を積極的に推進する、高度な研究能力を備えた人材の養成を行います。

求める学生像…世界の多様な地域社会や地域文化について広い関心をもち、とりわけ文化人類学・民族学の基礎研究に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。

比較文化学専攻
専攻長　平井 京之介



諸民族文化の比較研究により、各々に通底する普遍性の発見と理論的解明を目指しています。本専攻には、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術、文化資源という６つの研究分野があります。従来の文化人類学的方法論に加えて、情報科学や隣接諸科学の成果を導入し、新しい研究方法の開発を積極的にすすめて高度な研究能力を備えた人材の養成を行います。

求める学生像…人間の社会や文化について広い関心を抱き、とりわけ学問的な理論化やその社会的な応用に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。

両専攻のあゆみ

平成元年４月　文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻）設置、学生受入、授業開始
平成12年10月　「オープンキャンパス」開催（年１回）
平成13年４月　地域文化学・比較文化学両専攻の同窓生ネットワーク発足
平成17年４月　下記 関西４大学との学生交流に関する協定を締結、単位互換授業の開講開始
- 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
- 大阪大学大学院人間科学研究科
- 神戸大学大学院総合人間科学研究科
（平成19年度より国際文化学研究科および人間発達環境学研究科に改組）
- 京都文教大学大学院文化人類学研究科

みんぱくで学ぶ

地　域　文　化　学　専　攻

担当教員一覧（平成28年度）22名

池谷 和信（環境人類学・人文地理学・アフリカ研究・地球学）
伊藤 敦規（社会人類学・アメリカ先住民研究・博物館人類学）
印東 道子（オセアニア考古学）
宇田川 妙子（南ヨーロッパ研究・性研究）
樫永 真佐夫（東南アジア文化人類学）
齋藤 晃（ラテンアメリカ歴史人類学）
佐藤 浩司（民族建築学）
新免 光比呂（宗教学・東欧研究）
須藤 健一（社会人類学）
竹沢 尚一郎（宗教人類学・西アフリカ研究）
塚田 誠之（歴史民族学・中国研究）
西尾 哲夫（認識言語学・アラブ研究）
丹羽 典生（社会人類学・オセアニア地域研究）
野林 厚志（民族考古学・台湾研究）
信田 敏宏（社会人類学・東南アジア研究）
林　勲男（社会人類学・オセアニア研究）
三尾 稔（文化人類学・南アジア研究）
三島 禎子（文化人類学・西アフリカ研究）
南 真木人（生態人類学・南アジア研究）
森　明子（中部ヨーロッパ文化人類学）
山中 由里子（比較文学・比較文化）
横山 廣子（文化人類学・中国社会研究）

地域文化学専攻授業概要（平成28年度）

分野	授業科目	単位	授業科目の内容	担当教員	
アジア地域文化Ⅰ	東アジア文化研究	2	先住民の歴史と文化	教　授	野林　厚志
	東アジア文化研究特論Ⅰ	2	中国と周辺アジアにおける文化変容と社会	教　授	横山　廣子
	東アジア文化研究特論Ⅱ	2			
	東アジア文化研究演習Ⅰ	2	中国南部諸民族の歴史民族学的研究に関する講述	教　授	塚田　誠之
	東アジア文化研究演習Ⅱ	2			
	北・中央アジア文化研究	2			
	北・中央アジア文化研究特論	2			
	北・中央アジア文化研究演習Ⅰ	2			
	北・中央アジア文化研究演習Ⅱ	2			
アジア地域文化Ⅱ	東南アジア文化研究	2	東南アジアの住文化研究	准教授	佐藤　浩司
	東南アジア文化研究特論	2	東南アジアの周縁世界と開発	教　授	信田　敏宏
	東南アジア文化研究演習Ⅰ	2			
	東南アジア文化研究演習Ⅱ	2	東南アジアにおける地域文化	教　授	樫永真佐夫
	南アジア文化研究	2	インドのナショナリズムと宗教	准教授	三尾　稔
	南アジア文化研究特論	2	ネパールの現代政治と社会的包摂	准教授	南　真木人
	南アジア文化研究演習Ⅰ	2			
	南アジア文化研究演習Ⅱ	2			
	西アジア文化研究	2	中東イスラム社会における民衆文化	教　授	西尾　哲夫
	西アジア文化研究特論	2	モノと語りの相関関係を考える	准教授	山中由里子
	西アジア文化研究演習Ⅰ	2			
	西アジア文化研究演習Ⅱ	2			
ヨーロッパ地域文化	ヨーロッパ文化研究	2	東欧の政治文化と宗教	准教授	新免光比呂
	ヨーロッパ文化研究特論	2	南ヨーロッパのジェンダー・セクシュアリティ	准教授	宇田川妙子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅰ	2	現代人類学とソシアルなるものの意味	教　授	森　明子
	ヨーロッパ文化研究演習Ⅱ	2			
アフリカ地域文化	アフリカ文化研究	2	人の移動に関する文化的研究	准教授	三島　禎子
	アフリカ文化研究特論	2			
	アフリカ文化研究演習Ⅰ	2	アフリカ地域の生態人類学	教　授	池谷　和信
	アフリカ文化研究演習Ⅱ	2	アフリカ史とアフリカ考古学	教　授	竹沢尚一郎
アメリカ地域文化	アメリカ文化研究	2	アメリカ先住民と博物館	准教授	伊藤　敦規
	アメリカ文化研究特論	2	南アメリカのエスノヒストリー	教　授	齋藤　晃
	アメリカ文化研究演習Ⅰ	2			
	アメリカ文化研究演習Ⅱ	2			
オセアニア地域文化	オセアニア文化研究	2	アジア・太平洋地域における災害復興―支援、コミュニティ、文化	准教授	林　勲男
	オセアニア文化研究特論	2	オセアニアにおける土器文化の諸相	教　授	印東　道子
	オセアニア文化研究演習Ⅰ	2			
	オセアニア文化研究演習Ⅱ	2	オセアニアの政治と宗教	准教授	丹羽　典生
基礎科目	地域文化学基礎演習Ⅰ	2	地域文化研究に関する基礎演習	准教授 准教授 准教授 准教授	宇田川妙子 丹羽　典生 鈴木　紀 日髙　真吾
	地域文化学基礎演習Ⅱ	2	地域文化研究に関する基礎演習		
	地域文化学演習Ⅰ	2	博士論文作成のための演習	准教授 准教授 准教授 准教授	林　勲男 山中由里子 飯田　卓 福岡　正太
	地域文化学演習Ⅱ	2	博士論文作成のための演習		
共通科目	地域文化学特論Ⅰ	2	人類学的建築学序説	准教授	佐藤　浩司
	地域文化学特論Ⅱ	2	文化人類学文献講読	教　授	樫永真佐夫

※基礎科目は必修科目
※年度によって開講科目は異なる

比　較　文　化　学　専　攻

担当教員一覧（平成28年度）22名

飯田　卓
（生態人類学・漁民研究）

上羽 陽子
（民族芸術学・染織研究・手工芸研究）

卯田 宗平
（環境民俗学・東アジア研究）

太田 心平
（社会文化人類学・北東アジア研究）

韓　敏
（社会人類学・中国研究）

菊澤 律子
（言語学・オーストロネシア諸語）

岸上 伸啓
（文化人類学・北方文化研究）

笹原 亮二
（民俗学・民俗芸能研究）

鈴木 七美
（文化人類学・エイジング研究）

鈴木　紀
（開発人類学・ラテンアメリカ文化論）

關　雄二
（アンデス考古学・ラテンアメリカ研究）

園田 直子
（保存科学）

出口 正之
（NPO メセナ・フィランソロピー）

寺田 吉孝
（民族音楽学・インド研究）

日髙 真吾
（保存科学）

平井 京之介
（経済人類学・東南アジア研究）

廣瀬 浩二郎
（日本宗教史・民俗学）

福岡 正太
（民族音楽学・東南アジア研究）

Matthews, Peter J.
（先史学・民族植物学）

松尾 瑞穂
（文化人類学・ジェンダー医療人類学・南アジア研究）

丸川 雄三
（進想情報学・文化財情報発信）

吉田 憲司
（博物館人類学・アフリカ研究）

比較文化学専攻授業概要（平成28年度）

分野	授業科目	単位	授業科目の内容	担当教員	
比較社会研究	比較社会研究Ⅰ	2	コミュニティの人類学	教　授	平井京之介
	比較社会研究Ⅱ	2	文化人類学者の思考と実践	教　授	韓　敏
	比較社会研究特論Ⅰ	2	公益法人制度における政策の人類学	教　授	出口　正之
	比較社会研究特論Ⅱ	2	社会・文化に関する人類学的アプローチ	教　授	岸上　伸啓
	比較社会研究演習Ⅰ	2	生殖医療とリプロダクションの人類学	准教授	松尾　瑞穂
	比較社会研究演習Ⅱ	2	文化人類学の研究動向と研究課題	教　授	岸上　伸啓
	比較社会研究演習Ⅲ	2	社会と経済に関する人類学的アプローチ	准教授	鈴木　紀
比較宗教研究	比較宗教研究	2	社会的記憶からみた複雑社会の形成	教　授	關　雄二
	比較宗教研究特論	2			
	比較宗教研究演習Ⅰ	2	エイジングの人類学	教　授	鈴木　七美
	比較宗教研究演習Ⅱ	2			
比較技術研究	比較技術研究Ⅰ	2	技術の伝承と流用、創作	准教授	飯田　卓
	比較技術研究Ⅱ	2	生業と技術の民俗学	准教授	卯田　宗平
	比較技術研究特論	2			
	比較技術研究演習Ⅰ	2	アジアと太平洋地域における民族植物学と技術	教　授	Matthews,Peter J.
	比較技術研究演習Ⅱ	2	染織技術の比較研究	准教授	上羽　陽子
比較言語研究	比較言語研究	2	言語類型論の視点	准教授	菊澤　律子
	比較言語研究特論	2			
	比較言語研究演習Ⅰ	2			
	比較言語研究演習Ⅱ	2	歴史（比較）言語学	准教授	菊澤　律子
比較芸術研究	比較芸術研究Ⅰ	2	東南アジア音楽のリズム構造	准教授	福岡　正太
	比較芸術研究Ⅱ	2	日常的・実践的な身体技法としての芸能伝承論	教　授	笹原　亮二
	比較芸術研究特論	2			
	比較芸術研究演習Ⅰ	2	北米・ハワイのアジア系音楽	教　授	寺田　吉孝
	比較芸術研究演習Ⅱ	2			
文化資源研究	文化資源研究	2	博物館における資料管理	教　授	園田　直子
	文化資源研究特講	1	資料保存科学（モノ資料・基礎）	教　授	園田　直子
	文化資源研究特論	2	大規模災害時における文化資源の保全活動 ―被災文化財の視点から―	准教授	日髙　真吾
	文化資源研究演習Ⅰ	2	文化財情報の発信	准教授	丸川　雄三
	文化資源研究演習Ⅱ	2			
	博物館研究	2			
	博物館研究特論	2	博物館人類学	教　授	吉田　憲司
	博物館研究演習Ⅰ	2	韓国文化論	准教授	太田　心平
	博物館研究演習Ⅱ	2	ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践	准教授	廣瀬浩二郎
基礎科目	比較文化学基礎演習Ⅰ	2	比較文化研究に関する基礎演習	准教授 准教授 准教授 准教授	宇田川妙子 丹羽　典生 鈴木　紀 日髙　真吾
	比較文化学基礎演習Ⅱ	2	比較文化研究に関する基礎演習		
	比較文化学演習Ⅰ	2	博士論文作成のための演習	准教授 准教授 准教授 准教授	林　勲男 山中由里子 飯田　卓 福岡　正太
	比較文化学演習Ⅱ	2	博士論文作成のための演習		
共通科目	比較文化学特論Ⅰ	2	家族とつながりの人類学	准教授	松尾　瑞穂
	比較文化学特論Ⅱ	2	インドの染織文化	准教授	上羽　陽子

※基礎科目は必修科目
※年度によって開講科目は異なる



在学生の研究テーマ

地域文化学専攻

- ジャワにおける宗教的犯罪と宇宙観―マレー世界の慣習法文化との比較と法人類学研究―
- 新疆モンゴル社会における歴史語りに関する人類学的研究
- 「負の遺産」の継承、その在り方について―ミュージアムが社会に果たす役割とは―
- 日本の都市住民と観賞植物（草本類）との関わりにおける生き物文化研究
- オイラド・モンゴルのアイデンティティに関する研究
- 中国の食文化の歴史人類学的研究―制度と礼俗を中心として
- 中国青海省同仁県におけるチベット文化とその民族誌的研究
  ―同仁県ワォッコル村の事例から―
- 先住民族による自然資源の利用に関する環境人類学的研究
  ―ニカラグア共和国・ミスキートによるウミガメ漁の事例―
- 社会主義的政策下における牧畜社会の変容―中国内モンゴル・シリンゴル盟における開発を事例に―
- ベトナム北部山岳少数民族モン族社会の労働に関する民族誌的研究
- 北海道西興部村における動物利用の歴史的変容に関する人類学的研究

Voice 在学生の声

地域文化学専攻
高木 仁（平成24年度入学）



はじめまして。24期生の高木といいます。大学院では世界中のさまざまな民族について勉強しています。博士課程では、西カリブの海に赴いて、そこに暮らす先住民のミスキート・インディアンによるアオウミガメ漁について現地調査や研究をしています。

大学院にはいってもう4年が過ぎました。入りたての頃はとても忙しかったのを覚えています。それまで人類学を専門的に学んできたわけではありませんでしたので、学ぶことは沢山ありました。専攻には僕のような者のために学術史や人類学一般について学べる授業も用意してくれています。そうした授業は課題もおおく、四苦八苦しますが今ではいい思い出です。他にも博士論文の研究に関して、中米の民族言語に関してやミスキート文献の批判研究にも臨機応変に対応していただきました。

僕は初年度から指導教官の先生にお誘いいただき、民博の狩猟採集民に関する研究会などに顔を出し、他大学の同輩や先輩に混じっていくつか研究発表もしました。今思えば「叩かれてこい」ということだったのでしょうが、当時はこうした場での発表など経験もなかったので、それはもう散々なものでよく怒られました。皆さん、いつも手加減なしといった感じですので。ただ、こうした会は研究仲間たちと知り合う素晴らしい場所でもありましたし、そうした人たちの中にいるとぼんやりと自分の研究の立ち位置のようなものがわかる気もしました。これは何より特筆すべきことのように思います。

比較文化学専攻

■中央アジアに居住するカザフ人における「多場面的」な民族音楽実践の比較研究

■コスプレの仕組みと文化的意味に関する人類学的アプローチ
—名古屋における世界コスプレサミットの事例から—

■中国人留学生と元留学生の文化変容—関西地域を中心に—

■アッシジ刺繍にみる「聖なるもの」への関心

■中国内陸部における客家文化の観光開発と日常実践をめぐる人類学的研究—四川省洛帯鎮を中心に—

■独立解放から1950年代に描かれた伝統表象—韓国における西洋画を中心に—

■チャイナタウンの多声的状況と中華表象の主体的構築
—神戸南京町と長崎新地中華街の文化創造を事例として—

■アンデス地帯形成期における複雑化社会の変容—ペルー北高地南部ワヤガ川上流域の社会動態から—

■先史アンデスにおける生業と社会組織の相互動態的関係

■鳥類と人との関わり

■民族・民俗資料の文化資源としての活用に関する博物館人類学的研究

■スワヒリ海村における生計維持活動と技能に関する人類学的研究

■日本と台湾における歴史的空間・建築物の保存・活用に関する博物館学的研究

■近現代アジアにおける民族衣装をまとった聖母像—フィリピンと日本の事例を中心に—

■先史アンデス形成期における社会動態

Voice 在学生の声

比較文化学専攻
荘司 一歩（平成26年度入学）



私が、総研大で専門としているのは、日本から遠く離れた南アメリカ大陸の考古学である。幼少の頃から、歴史などの科目が好きで、いつか自分の知らない地球の裏側の世界を見てみたいと思っていた私は、大学で考古学を学んでいた。そこでは、過去の出来事を物質文化から立証する方法を学んでいたが、一方で、過去や現在、あるいは世界中の社会や文化を同じ土俵で捉え、人間について総合的に考察する、文化人類学にも興味を持つようになっていった。そこで、文化人類学的な視座から考古学を研究するために、この総研大に進学することにした。

この大学に進学することが、私にとって魅力的であったことの大きな理由は、基盤機関である国立民族学博物館（以下、民博）に、様々な分野で活躍する第一線の研究者が多く集まっている点である。民博は、研究成果を発信する社会最元の場であると同時に、最先端の研究が繰り広げられる場でもある。たとえば、日本中、あるいは世界中から研究者が集まるような、研究会や講演会が毎月数多く開催されており、我々学生も参加し議論を交わすことが日常的に行われている。考古学に限らず、様々な視点を持った研究者がいるということは、自分の視野や知見を広げるうえで、このうえない研究環境であることを意味する。

また、学生の研究活動を補助するような、助成事業が多く存在することも、魅力の一つである。民博には、世界中で調査活動をする学生が多く在籍しているが、その調査や研究発表のための旅費などを補助する制度が多く存在する。また、共用の調査機材なども充実しており、学生に貸し出しが行われているなど、研究活動を実現するための環境として恵まれている。

世界で学ぶ

学位論文を書く

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学位

本研究科を修了した者には、博士の学位を授与する。
又専攻の区分に応じて、次表の専攻分野を付記する。

専　攻	付記する専攻分野
地域文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）
比較文化学専攻	文学（学位論文の内容によっては学術）

学位論文リスト

【課程博士】		
数学的手法を用いた文化分析の方法について	小島　三弘（比較）	[H 4 . 3 .31 学術]
シドニーにおける都市アボリジニの研究　伝統と民族の創出	鈴木　清史（比較）	[H 6 . 3 .24 文学]
オルドス・モンゴル族の社会構造—ヤスの機能とその歴史的変容—	楊　海英（地域）	[H 6 . 9 .20 文学]
ペルーにおける山の神信仰の現在性—アンデスの宗教的世界のダイナミズム—	細谷　広美（地域）	[H 7 . 3 .23 文学]
ビルマにおけるウェイザー信仰の研究	土佐　桂子（比較）	[H 7 . 3 .23 文学]
韓国社会の動態と「両班化」—忠清北道阿房都における門中と儀式慣礼の検討を通して	岡田　浩樹（比較）	[H 8 . 3 .21 文学]
中国杭嘉湖地方における養蚕伝承の研究	曹　建南（地域）	[H 8 . 3 .21 文学]
歌に表象される落村意識—奄美における「シマの歌」の研究—	中原ゆかり（比較）	[H 8 . 3 .21 文学]
四会館家屋の文化人類学的研究—人間と自然との相互作用の視点から	杉山　京子（地域）	[H10. 3 .24 文学]
モンゴル叙事詩のナラトロジー（物語の構造分析）研究—アルタイ・ハイラハ叙事詩を事例として—	藤井　麻湖（地域）	[H10. 3 .24 文学]
カストム・メレシンーヴァヌアツ共和国トンゴア島民の民間医療および民間医療観の現代的位相	白川　千尋（地域）	[H10. 3 .24 文学]
韓・日両国における済州島海女の移動と定着に関する民族学的研究	李　善愛（比較）	[H10. 3 .24 文学]
東南中国の漢族社会組織とその変容—閩南農村社会における宗族の研究	潘　宏立（比較）	[H10. 3 .24 文学]
芸の伝承—ジャワ島・チルボンの仮面舞踊を中心に	福岡まどか（比較）	[H10. 3 .24 文学]
Overt First and Second Person-Designating Terms in Japanese　Discourse —A Pragmatic Perspective—	Riikka Lansisalmi(比較)	[H10. 3 .24 文学]
「二重の窮乏」下の平等理念—現代世界とキリバス南部諸島の社会生活—	風間　計博（地域）	[H10. 9 .30 文学]
建築と文化・社会との相互作用—中国黄土高原の窯洞住居・集落を対象として—	栗原　伸治（地域）	[H10. 9 .30 学術]
カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容—宗教共同体と開発の視点から—	子島　進（地域）	[H11. 3 .24 文学]
地域主義運動における言語と知識人—エストニア南部ヴォル地方の事例から—	寒水　明子（地域）	[H11. 3 .24 学術]
英国コッツウォルズ地域におけるエスニシティの文化人類学的研究　—文化遺産の保全をめぐる境界意識の重層的位相—	塩路　有子（比較）	[H12. 9 .29 文学]
北タイ・アカの家屋に関する研究—家屋の形式とその変化への視点から—	清水　郁郎（地域）	[H13. 3 .23 文学]
韓国の定期市にみられる移動商人の巡回移動とその変化—忠清南道公州市を中心として活動する薬草商人を例に—	林　史樹（地域）	[H13. 3 .23 文学]
現代インドネシアにおけるジャワ大衆演劇クトプラの研究	青木　武信（比較）	[H13. 3 .23 文学]
南ラオス村落社会における政治過程の研究—シゲの村における「連帯」と闘争—	中田　友子（地域）	[H14. 3 .22 文学]
20世紀前半のボリビアにおける先住民教育と植民地主義	吉江　貴文（地域）	[H14. 3 .22 文学]
カメルーンにおける「商売の民」パミレケの都市人類学的研究	野元　美佐（比較）	[H14. 3 .22 文学]
タイ式医療の構築とタイ・マッサージ—社会的文脈による権威的知識の多様性—	飯田　淳子（地域）	[H15. 3 .24 文学]
インドネシア・スンダの食文化—言語人類学的観点から—	阿良田麻里子（地域）	[H17. 3 .24 文学]
韓国の仮面劇「固城五広大」の伝承と演劇者—解放後の韓国社会における民俗芸能の変遷から—	高　正子（地域）	[H17. 3 .24 文学]
帰還と離散のはざまで—ウクライナ—地方都市におけるユダヤ人巡礼の民族誌—	赤尾　光春（地域）	[H17. 9 .30 学術]
イスラエルにおけるアラブ人キリスト教徒のアイデンティティの様態　—ガリラヤ地方・メルキト派カトリック信徒の事例研究—	菅瀬　晶子（地域）	[H18. 3 .24 文学]
トンガ王国の土地制度—グローバル化のなかの伝統—	森本　利恵（地域）	[H18. 3 .24 文学]
パラライカの鳴り響く空間：1917～48年における社会主義の文化の生成	大家（柚木）かおり（地域）	[H18. 3 .24 学術]
フィジーにおける植民地主義とインド系移民社会—砂糖キビ栽培地域の村落社会における文化の動態—	村田　晶子（比較）	[H18. 9 .29 文学]
上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的研究	飯國有佳子（地域）	[H19. 3 .23 文学]
「護り」の身体技法に関する映像人類学研究—インドネシア・ミナンカバウの事例から—	村尾　静二（比較）	[H19. 3 .23 文学]
離散と故郷—ヨルダンのパレスチナ系住民にみられる帰属意識とナショナリズム—	錦田　愛子（地域）	[H19. 3 .23 文学]
「子ども域」の文化人類学的研究 —バングラデシュ農村社会の子ども—	南出　和余（比較）	[H19. 3 .23 文学]
参加型開発を通した女性の自己変容過程に関する人類学的研究—北インド農村社会を事例として—	菅野美佐子（比較）	[H19. 9 .28 文学]
「場」と「パフォーマンス」に関する人類学的研究—トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として—	米山　知子（比較）	[H19. 9 .28 文学]
フェティシの民族誌—ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション—	山田　香織（地域）	[H20. 3 .19 文学]
水上人と呼ばれる人々—広東珠江デルタの漢族エスニシティとその変容—	長沼さやか（地域）	[H20. 3 .19 文学]
在米コリアンのサンフランシスコ日本町—マルチカルチャーのエスニックタウン—	小谷　幸子（比較）	[H20. 3 .19 文学]
インド農村社会における不妊経験の人類学的研究	松尾　瑞穂（比較）	[H20. 9 .30 文学]
韓国における老人の食—老人福祉施設を中心に—	守屋亜記子（地域）	[H21. 3 .24 文学]
日本の先史時代における植物性食料の加工と利用：残存デンプン分析法の理論と応用	渋谷　綾子（比較）	[H22. 3 .24 文学]
農業技術改善の民俗誌—紀ノ川下流域村落の一七～二〇世紀前半における動向の分析—	加藤　幸治（比較）	[H22. 9 .30 文学]
オーストラリア先住民ヨルタ・ヨルタの環境管理のための先住民運動に関する文化人類学的研究	友永　雄吾（地域）	[H23. 3 .24 文学]
現代タイ社会における開発と僧侶—僧侶による社会貢献とネットワーク形成に焦点をあてて—	岡部真由美（地域）	[H23. 3 .24 文学]
現代東南中国における宗親会の民族誌的研究—国家との関係を中心として	隙　夏暁（比較）	[H23. 3 .24 文学]
ヨーグルトをめぐる言説の生成と展開—社会主義期からポスト社会主義期にかけてのブルガリアを中心に—	マリア・ヨトヴァ(比較)	[H23. 9 .30 文学]

無文字社会における歴史記憶の生成と継承　—南エチオピア牧畜民ボラナにおける口承史の分析をとおして—	大場　千景（地域）	[H24. 3 .23 文学]
カオダイ教ハノイ聖室の民族誌的研究—ベトナム北部地域の都市における女性たちの社会関係—	伊藤まり子（地域）	[H24. 3 .23 文学]
周辺イスラームのダイナミズムータイ南部村落におけるイスラーム復興運動と宗教実践の変容—	小河　久志（地域）	[H24. 3 .23 文学]
変化しつづける装い—中国雲南省文山モンの自己と他者をめぐる人類学的服飾研究—	宮脇　千絵（地域）	[H24. 9 .28 文学]
現代アンデス農村における聖人信仰の変容　—人の移動に焦点をあてて—	八木百合子（比較）	[H24. 9 .28 文学]
ナイジェリアの都市イレ・イフェにおける「アーティスト」の民族誌的研究	緒方しらべ（比較）	[H26. 3 .20 文学]
中国雲南省における徳宏タイ族の即興ラたと感性の民族誌的研究	伊藤　悟（地域）	[H26. 9 .29 文学]
My *Huaca*: The Use of Archaeological Heritage in Modern Peru from a Public-Archaeology Perspective	ｻﾝﾄﾞｽﾃｰｶﾞﾙｼｱ・ｴｽﾋﾟﾉｻﾞ・ﾀﾞﾆｴﾙ（比較）	[H26. 9 .29 文学]
モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる交渉に関する民族誌	堀田あゆみ（地域）	[H27. 3 .24 学術]
「野球移民」を生みだす人びとードミニカ共和国におけるトランスナショナル移民研究—	窪田　暁（比較）	[H27. 3 .24 文学]
韓国の地域社会における華僑のアイデンティティに関する民族誌的研究　—韓国華僑ビジネスと華僑協会を中心に—	金　桂淵（地域）	[H27. 9 .28 文学]
日本社会の自然葬に関する民族誌的研究—NPO 法人「葬送の自由をすすめる会」を中心に—	金セッピョル（地域）	[H28. 3 .24 文学]
都市回族コミュニティの維持と宗教実践—中国陝西省西安市における回族の帰属意識をめぐる民族誌的研究—	今中　崇文（地域）	[H28. 3 .24 文学]

【論文博士】		
An Areal-Typological Study of Middle American Indian Languages	八杉　佳穂	[H 6 . 3 .30 文学]
農村女性からみたトルコの「近代化」—世俗主義、イスラーム、女性の相互関係	中山　紀子	[H 9 . 3 .24 文学]
南タイにおける実践宗教—ムスリムと仏教徒が混住する村落の事例から—	西井　涼子	[H 9 . 3 .24 文学]
セネガルの公権力とインフォーマル・セクターに関する民族学的研究	小川　了	[H 9 . 3 .24 文学]
メラネシアの政治的リーダーシップと開発　—ソロモン諸島サンタイサベル島における森林伐採事業をめぐって—	関根　久雄	[H10. 9 .30 文学]
南インドの農村におけるカースト内関係としての親族—コング・ヴェッラーラの事例研究—	杉本　星子	[H10. 9 .30 文学]
アイヌ民族における神送りの研究—沙流川流域を中心に—	萱野　茂	[H13. 3 .23 学術]
低湿地立地の遺跡にみる縄文時代本州西部地域の生業活動　—縄文時代早期末から中期初頭における若狭湾沿岸と琵琶湖周辺地域の動物考古学的考察—	内山　純蔵	[H14. 3 .22 文学]
考古学における数量化と数理的手法の研究	及川　昭文	[H14. 3 .22 学術]
総管信仰—近世江南農村社会と民間宗教—	濱島　敦俊	[H14. 9 .30 学術]
中国の食事方法—歴史人類学的考察—	西澤　治彦	[H15. 3 .24 文学]
台湾原住民のイノシシ（Sus scrofa taivanus）狩猟の民族考古学的研究：　動物遺存体研究の方法論構築にむけて	野林　厚志	[H15. 3 .24 学術]
The Transformation and Social Functions of the sNang zhig Family and its Monastery　— An Ethnographic Description of the Bon Tradition in Amdo	才譲　太	[H16. 9 .30 学術]
利用者の視点にたった博物館の理念と活動様式の研究	布谷　知夫	[H16. 9 .30 文学]
トビニタイ文化の集団構成と生計戦略—北海道東部における「中世アイヌ社会」成立に至る一階梯—	大西　秀之	[H17. 3 .24 文学]
アットゥシの歴史に関する基礎的研究—アイヌ伝統文化の再検討の試みとして—	本田　優子	[H17. 9 .30 文学]
カナダ・イヌイットの食物分配に関する文化人類学的研究—先住民社会の変容と再生産—	岸上　伸啓	[H18. 3 .24 文学]
タイ中部農村における相互行為の民族誌的研究	高城　玲	[H18. 3 .24 文学]
東ネパールにおける羊飼いの生産活動と放牧地をめぐる社会関係	渡辺　和之	[H18. 3 .24 文学]
「アイヌ風俗画」の研究—近世北海道におけるアイヌと美術	新明　英仁	[H19. 9 .28 文学]
国際線客室乗務員の接客業務と勤務体制—仕事の人類学的研究—	八巻　恵子	[H21. 9 .30 文学]
シャーマニズムによるエスニシティの探求—ポスト社会主義期におけるモンゴル・ブリヤートの事例を中心として	島村　一平	[H22. 3 .24 文学]
活用される職祖伝承—近・現代日本における木工挽物の担い手と木地屋「根元地」—	木村　裕樹	[H22. 9 .30 文学]
先住民学習の理論と実践—ポストコロニアル人類学の活用—	中山　京子	[H22. 9 .30 学術]
スリランカにおけるエステート・タミルのアイデンティティと「ジャーティヤ」をめぐる人類学的研究	鈴木　晋介	[H23. 3 .24 文学]
小集落から見た初期国家の形成過程—先スペイン期中央アンデスのワリ国家を事例として—	土井　正樹	[H24. 3 .23 文学]
先史アンデス形成期の社会動態—ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から—	山本　睦	[H24. 9 .28 文学]
多文化都市・新宿の生成と展開—ライフサイクルの視座—	川村千鶴子	[H25. 3 .22 学術]
先住民生存補鮭再考—国際捕鯨委員会における議論とベクウェイ島の事例を中心に—	濱口　尚	[H25. 9 .27 文学]
アイヌ衣文化の研究	津田　命子	[H26. 9 .29 文学]
ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成—東北地方のヌン・アン集団の事例から—	チュ・スワン・ザオ	[H27. 9 .28 文学]

年度別学位授与者数

平　成		3年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	12年	13年	14年	16年	17年
地域文化学専攻	課程博士	0	0	2	2	0	3	4	2	2	1	2	4
	論文博士	0	0	0	0	3	0	2	0	1	1	3	2
比較文化学専攻	課程博士	1	1	1	1	0	4	0	2	1	0	0	0
	論文博士	0	1	0	0	0	0	0	1	1	2	0	2
計		1	2	3	3	3	7	6	5	5	4	5	8

平　成		18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	計
地域文化学専攻	課程博士	2	2	1	0	2	3	1	0	2	3	38
	論文博士	0	1	0	1	0	0	1	0	1	1	17
比較文化学専攻	課程博士	3	3	1	1	2	1	1	1	2	0	26
	論文博士	0	0	0	1	3	1	0	1	0	0	14
計		5	6	2	3	7	5	4	2	5	4	95

学位論文を書く

Voice 卒業生の声

大東文化大学　国際関係学部　国際文化学科　講師
飯國 有佳子（平成19年3月学位取得）



現在、大学や研究機関で教育研究職に就くことを考えた場合、博士号を取った上で、単著と複数の論文を持つことが、「最低条件」のようになっています。総研大の地域文化学専攻、比較文化学専攻が立ち上がった平成元年には、両専攻は日本で文化人類学関連の博士号を取得できる稀有な機関でしたが、今では多くの大学で博士号がとれるようになっています。ここから、学部、修士と慣れ親しんできた環境を離れ、わざわざ総研大に進学することを躊躇する方もいるかもしれません。

しかし、総研大には、慣れ親しんだ環境を離れて入るだけの価値があります。「海外学生派遣事業」は、長期調査から帰った後の補足調査や国際学会での研究成果発表を可能にしてくれますし、「総研大文化科学研究」という査読付きの学術雑誌もあります。また、「論文ゼミ」では世界各地でフィールド経験を積まれた多彩な専門分野の先生方複数から、多くの貴重なアドバイスをもらうこともできます。

こうした研究サポート体制は他の大学にもあるかもしれませんが、総研大に入学すれば、日本最大の文化人類学の研究拠点である国立民族学博物館が有する資源を最大限に活用できるという、他にはないメリットがあります。文化人類学関連で国内最大規模の蔵書を誇る図書館も思う存分活用できますし、毎週のように開催される共同研究会にオブザーバー参加を願い出れば、自分の専門とは直接関わらない分野の知見を広げることもできるでしょう。私は総研大を出て、自分がいかに恵まれた研究環境にあったかを痛感しました。

文化人類学者を目指すなら、総研大の充実した研究サポート体制と、一流の人類学者が集う民博という最良のリソースを利用しない手はないと思います。

奈良県立大学　地域創造学部　専任講師
窪田 暁（平成26年3月学位取得）



2005年から毎年のようにドミニカ共和国を訪れている。きっかけは、学部生の頃にアメリカのメジャーリーグ・ベースボールでドミニカ出身の選手が活躍する姿に興味をもったからだ。彼らのほとんどがチームに欠かせない選手であり、膨大な額の年俸を受け取っていた。好奇心のアンテナがすぐに反応した。わたしが知っている国内の外国人労働者とあまりにかけ離れていたからである。

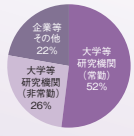
修士課程に進み、国境を越えるプロ野球選手を「移民」と捉え、その実態を明らかにすべく1年間のフィールドワークを経験しても納得できる答えは得られなかった。むしろ、フィールドで見聞きしたことが新たな「問い」を生み、もっと知りたいという欲求が湧きあがるばかり……。アンテナは振り切れたのである。

とはいえ、こんなテーマで博士論文を書きたいという人間を受け入れてくれる大学院はあるのだろうか。柄にもなく、真剣に悩んだことを鮮明に覚えている。もちろんそれは杞憂に終わった。総研大の地域文化学・比較文化学専攻は、むしろ「おもろい」研究をする院生に開かれていたからだ。総研大入学後、あらためてフィールドに出向き、調査をするなかで、野球がいかにドミニカの地域社会の論理や規範と深く結びつきながら発展してきたか、現地の人々の言動から浮かびあがってきた。そのとき、はじめて文化人類学という学問の「おもしろさ」を理解できたのだった。

異文化への好奇心が抑えられないあなた。アンテナが錆びつくまえに、総研大の扉を叩いてみては？　その先にある文化人類学の「おもしろさ」に出会うために。

大学等主な勤務先一覧（常勤）

愛知淑徳大学、インドネシア学術総局［インドネシア］、愛媛大学、大阪大学、大谷大学、神奈川大学、関西外国語大学、神田外語大学、京都外国語大学、京都大学、京都文教大学、神戸市外国語大学、神戸大学、国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館、滋賀県立大学、静岡大学、静岡文化芸術大学、芝浦工業大学、上海師範大学［中国］、成蹊大学、総合研究大学院大学、ソウル大学［韓国］、大東文化大学、中部大学、筑波大学、東京外国語大学、東京工業大学、東北学院大学、東洋大学、奈良県立大学、日本大学、阪南大学、広島市立大学、宮崎公立大学、桃山学院大学、山形大学、ライデン大学［オランダ］、龍谷大学



各種奨学金・経済支援

日本学術振興会「特別研究員（DC2）」制度

優れた若手研究者に、研究に専念する機会を与えることにより、学術研究の将来を担う創造性に富んだ研究者の養成・確保に資することを目的として、大学院博士課程在学者及び大学院博士課程修了者等で、優れた研究能力を有する者を「特別研究員」に採用し、研究奨励金を支給する制度です。地域文化学・比較文化学両専攻でも、毎年、数名の学生が特別研究員に採用され、経済的支援を受けて研究を進めています。

年　度	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28
採用数	3名	3名	4名	2名	1名	2名	2名	2名	2名

日本学生支援機構奨学金

日本学生支援機構では、毎年春に大学院を通じて、奨学金希望者の募集を行っています。貸与が受けられる奨学金は、第一種奨学金（無利子）、第二種奨学金（有利子）、一種・二種の併用です。地域文化学・比較文化学両専攻では、毎年6月に募集を行い、毎年数名が奨学金の貸与を受けています。

■ 各国政府奨学金
諸外国の政府または政府関係団体では、その国の大学などへ留学する日本人を対象に奨学金制度を実施しています。支給期間は主に2年以内です。

■ 私費留学生の方が応募できる奨学金（学習奨励費）
日本学生支援機構では、我が国の大学等に在籍する私費外国人留学生等で、学業、人物ともに優秀かつ経済的理由により修業が困難である者に対する育英奨学制度を実施しています。

■ 私費留学生の方が応募できる奨学金（民間財団奨学金）
民間団体の募集する奨学支援（大学推薦）の情報を、総研大掲示板に更新し掲示しています。

民間財団奨学金等

個人応募については、奨学金財団からの応募条件にあっていれば、誰でも申請できます。直接応募できる民間奨学金の情報は、応募の通知を積極的に学生に出しています。

松尾金蔵記念奨学基金奨学生、萬谷記念かながわ奨学基金奨学生、福井県ものづくり人材育成修学資金奨学生、佐藤奨学会奨学生、交通遺児育英会奨学生、大学女性協会国内奨学生、本庄国際奨学財団　日本人大学院生奨学金、起業家支援財団奨学金　等

授業料の免除等について

総研大では、授業料免除申請の受付を年2回行っています。授業料免除許可者は、半期の授業料の半額（267,900円）が免除されます。その他、新入生を対象とした入学料（282,000円）免除制度があります。

リサーチ・アシスタント

教員の指示・監督の下で、研究者の補助として、研究活動に必要な業務を行いながら給与を得られるリサーチ・アシスタントとして採用します。

学生支援

■ 研究環境の充実
より良いフィールドワークを行うために、豊富な機材を取りそろえ、院生に貸し出しします。また、院生各自に机、ロッカー、本棚等の研究スペースがあるほか、コピーカードの提供及び共用ＰＣ、製本機がある作業室があり、ハード面での環境も充実しています。
国立民族学博物館の図書室は、文化人類学・民族学関係の資料を収集している図書室としては日本最大規模を誇っています。
さらには、民博内で開催される共同研究会やシンポジウムに参加して、国内外から集まってくる研究者の方々と交流することができ、視野や知見を広げるうえで、恵まれた研究環境です。

■ 住宅総合補償制度
（財）日本国際教育支援協会（JEES）が実施するもので、外国人留学生が民間宿舎等への入居にあたり、保証人を探す困難さと保証人の精神的・経済的負担を軽減し、留学生の円滑な入居を支援することを目的として設けられた制度です。

■ 留学生チューター制度
新入学の外国人留学生に対し、学習・研究効果の向上を図ることを目的として、チューターによる教育・研究について個別の課外指導及び生活指導を行う制度を設けています。チューターは、留学生の指導教員の推薦に基づき、原則的に本学の学生です。学習・研究生活の大きな支えとなるように研究指導を中心に、学習面や生活面でのサポート等の業務を行っています。

■ 日本語補講制度
外国人留学生に対し広く日本語を学習する機会を与えるために、日本語補講を実施しています。大阪大学日本語日本文化教育センター（教育関係共同利用拠点事業）への事業参加への通知を行い、参加希望者がいる場合、申請を行います。

■ 就職支援
大学、研究機関等の就職情報を掲示板に更新し掲示しています。

■ 健康診断
毎年、基盤機関である国立民族学博物館にて健康診断を実施しています。
また、月に1回、メンタルヘルス・ハラスメント相談も行っています。

よくある質問

Q. 学部をもつ大学院の教育と比べてどんな特徴がありますか?

A. 教員数が学生数を上回るという、他大学にはない恵まれた教育環境があげられます。教員：学生の比率はおおよそ3：2であり、個々の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また教員は各分野の第一線で活躍する研究者であり、最新の研究動向に基づいた指導をおこなえます。さらに、民博が所蔵する豊富な研究資料（図書67万、標本34万、映像音響7万など）の利活用、館が主催する多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通し、国内外の研究者との交流が容易になります。

Q. 地域文化学専攻と比較文化学専攻の二専攻には、どのような違いがありますか?

A. 二専攻の違いについては、専攻概要をご覧ください。ただし、地域と比較に別れているものの、共にフィールドワークを研究の根幹においているため、共通する部分も多く、密接な相互交流があります。また、専攻間に指導上の棲み分けはなく、院生がどちらに所属していても、両専攻の教員の指導を受けることができます。

Q. 二専攻で学ぶことができるのは、文化人類学・民族学だけでしょうか?

A. そんなことはありません。両専攻には、考古学、民俗学、建築学、情報学、言語学、音楽学、博物館学、保存科学など幅広い分野を専門とする教員がそろっていますから、それらの分野でも研究をおこなうことができます。また、教員の陣容は年度によって変化することがありますから、希望研究内容と当該専攻の教育体制との整合性について不明な点がある方は、前もって専攻長にご相談ください。

Q. 受験する前に希望する指導教員をかならず決めておく必要がありますか?

A. 必要条件ではありませんが、強くお勧めします。また、受験を申請する前に希望指導教員に連絡を取れば、入学後の研究の見通しを立てる一助となるでしょう。

Q. 研究支援にはどんなものがありますか?

A. 例えば、「インターンシップ事業」があります。総合研究大学院大学の理念である深い専門性、国際通用性及び異分野連繋性をそなえた研究者の育成を目的として、国内外の大学、研究機関、企業等において、共同研究活動や調査活動等に参加する本学学生に対して、参加に必要な経費を支援するもので、助成額は最大100万円、年に2～3回募集があります。そのほかにも、学位申請論文作成に不可欠な国内外の調査や学会での成果発表に要する旅費、宿泊費などの支援をおこなう「学生派遣事業」があります。また、研究活動の発表を目的とした国内学会に参加する学生に対する、「教育・研究活動の高度化に伴う旅費の支援」もおこなっています。
学内の奨学金制度はありませんが、外部研究資金調達のための申請書の書き方などについても指導をおこなっています。
論文作成の面では、学生からリサーチプロポーザルが提出されると、指導教員、副指導教員に1～2名の教員を加えた助言ワーキングが組織され、学生に対し文書で助言内容を提示します。その後フィールドに出かけて調査をおこない、その成果について論文ゼミで報告を重ね、徐々に論文を仕上げていくことになりますが、この過程で多くの教員からさまざまな指導・助言がおこなわれ、論文を練り上げることができます。さらに指導教員と副指導教員が協同して論文作成を支援、博士論文を完成させます。

Q. 長期の現地調査をするときには、授業料が免除されますか?

A. 長期フィールドワークをおこなう期間中は、休学が認められています。在学中に支払う授業料の総額が減額されるわけではありませんが、フィールドワークをおこなう学期中に授業料を払う必要はありません。

Q. できるだけ早く学位を取得したいのですが、3年で取得するのは難しいでしょうか?

A. フィールドワークを研究の中心に据えている研究分野であるため、3年間で学位を取得するのは容易ではありません。早い取得が望ましいことは言うまでもありませんが、学問の進展に寄与できる質の高い研究成果を上げ、最終学位である博士号に相応しい研究能力を養うことがより重要であり、この点に留意した指導がおこなわれています。

Q. 学部や修士課程で文化人類学・民族学を専攻しなかったのですが、受験はできますか?

A. 正規に文化人類学・民族学を学んだ経験がなくても受験はできます。しかし、入学後に志望研究が遂行可能であるか見通しをつけるためにも、関連図書などを精読し、少なくとも人類学やフィールドワークに関する基本的な考え方について理解しておくほうがよいでしょう。これは、何をするために当専攻を受験するのか整理するためにも役立つはずです。

Q. 地域文化学専攻と比較文化学専攻は、どのような教育指導体制をとっていますか?

A. 個別指導と共同指導を組み合わせたユニークな指導体制を採用しています。各院生には正副2名の指導教員が指名され、入学から学位取得まで、これらの教員が中心となって日常的な指導をおこないますが、閉鎖的になりがちな講座制の弊害を防ぐため、ゼミ発表に共同指導体制を取り入れています。ゼミ（1年生ゼミ、論文ゼミ）には各4名の担当教員が配置され、研究の内容だけでなく発表の方法などに関する指導をおこないます。担当委員以外の教員にもゼミへの参加を求めることができ、また基本的に専攻長もゼミに出席するため、正副の指導教員を含めると10人前後の教員からコメントを得ることができる体制が整えられています。このように、数多くの研究者から指導を受けられる点が、共同指導体制の大きなメリットであり、また総研大が目指す「広い視野の養成」という大目的の達成にも寄与するものです。

Q. 地域文化学専攻と比較文化学専攻に入学すると、かならず長期の現地調査をしなければなりませんか？　また、国内での現地調査も可能でしょうか?

A. 実際には長期のフィールドワークをおこなう学生が多いのですが、研究の目的や内容によっては独自のフィールドワークの形を決めていくことも可能です。たとえば、継続した長期調査のかわりに短期の調査を繰り返しおこなうことで調査可能なテーマも存在します。また、調査対象は海外だけではありません。これまでにも数多くの卒業生が、国内のフィールドワークに基づいた博士論文を完成させています。

Q. 受験する前に調査予定地域の現地語を習得している必要がありますか?

A. 入学時にフィールドの言語を習得していることは望ましいのですが、受験の必要条件ではありません。入学前の習得が難しい言語が存在するだけでなく、それまでに習得した言語以外の地域に研究を広げる必要がある場合もあるからです。特に、現地でのみ習得可能な言語に関しては、フィールドワークをしながら徐々に身に付けていくこともあります。

Q. 修士課程ですでに現地調査をはじめているのですが、入学後すぐに長期の現地調査をすることは可能ですか?

A. 原則として、初年度は、長期フィールドワークをおこなうための準備期間にあてられています。フィールドワークは、単に現地に行けば遂行できるものではありません。また、修士課程でフィールドワークをすでにおこなっている場合でも、博士論文執筆のための調査では、求められる調査の質に大きな差があることが多いのです。入学後の一年間は、教員の指導のもと、調査計画の実現性・妥当性などについて、それまでの自己の研究成果や先行研究との関連に留意しながら検討します。年度末には、フィールドワークに向けたリサーチプロポーザルに関する発表をおこない、計画をより実現性の高いものへと練っていきます。

みんぱくについて



館長挨拶

地域文化学専攻と比較文化学専攻の受験生に期待する



国立民族学博物館長　須藤　健一

国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館をそなえ、大学共同利用機関としての役割もになう世界でもユニークな文化人類学・民族学の研究所です。60名の教員たちは、「地の先へ。知の奥へ。」をモットーに世界各地で、グローバリゼーションの動きを受容し、あるいはそれに抗いながら独自の社会と固有の文化を維持ないし創造している人びとの営みを研究しています。一方で、世界の諸民族の生活や考えをより深く理解するために民族資料や映像音響資料の採録などにつとめ、「もの」をとおして文化を表現する展示活動も行っています。

文化人類学・民族学は、現地の人びとと生活をともにしながら日常生活から地球規模の影響をも視野に入れて人間の社会と文化を研究する学問です。異文化に生きる人びとを理解するためには幅広い視野、柔軟な思考と豊かな想像力が求められます。そして、収集したデータを分析して論理的に記述する手法が大事です。

みんぱくには、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置され、文化人類学をはじめ言語学、宗教学、生態学、先史学、民族音楽学そして博物館学などを研究する個性ゆたかな教授陣がいます。そのうえ、民族資料、文献図書や映像音響など100万点をこす資料を所蔵しており、研究環境においてはわが国随一の大学院であるといえます。

私たちは、皆さんが人類学の研究課題を追究し、博士論文を書きあげて一人前の研究者として社会に飛び立つことを支援するのを楽しみにしています。



国立民族学博物館および人間文化研究機構の概要

国立民族学博物館（みんぱく）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。みんぱくは、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究や共同研究を進めるとともに、学術情報を集積しています。その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することも使命としています。

国立民族学博物館は「博物館機能をそなえた研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。みんぱくの展示は、常設展示と特別展示と企画展示とで構成されており、常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示と企画展示は、特定のテーマのもとに、年に数回、期間を限って開催されます。

みんぱくは、2004年４月より、国立大学と足並みをそろえて、法人組織となりました。法人の正式名称は、「大学共同利用機関法人人間文化研究機構」ですが、みんぱくは、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所とともに、その一員として再出発しました。その後、2009年10月には６番目の大学共同利用機関として新たに国立国語研究所が加わりました。またみんぱくの研究部は、３研究部（民族社会、民族文化、先端人類科学）２センター（研究戦略センター、文化資源研究センター）体制に組織替えがなされました。研究活動の機動性を高めるとともに、その成果をより広くわかりやすく社会に伝えていくための措置です。文化人類学・民族学を基盤としつつ、研究の機関と分野の別を超えて、人間文化の総合的理解を深めようとする、みんぱくの新たな活動が始まっているのです。

所蔵民族学資料（平成28年4月1日現在）

標本資料（未登録資料含む）		映像音響資料	
海外資料	178,465点	映像資料	8,009点
国内資料	163,686点	音響資料	62,651点
計	342,151点	計	70,660点
文献図書資料			
日本語図書	268,538冊	日本語雑誌	10,141種
外国語図書	396,892冊	外国語雑誌	6,874種
計	665,430冊	計	17,015種

展示場案内図







総合研究大学院大学について



総合研究大学院大学長
岡田 泰伸

医学博士。京都大学医学部卒。同大学医学部助手、講師を経て、平成4年に岡崎国立共同研究機構生理学研究所細胞器官研究系教授に就任。平成16年に自然科学研究機構生理学研究所教授、副所長を経て、平成19年から所長・副機構長、平成22年から同機構の理事を歴任。
専門は分子細胞生理学、特に動物細胞の容積調節機構、アポトーシス、ネクローシスや虚血性細胞死の誘導メカニズム、アニオンチャネルのセルセンサー・シグナリング機能における分子メカニズム研究の第一人者。生物学・生化学分野論文における(ISI)高頻度被引用者。平成18年より4年間日本生理学会会長、5年間アジア・オセアニア生理学会（FAOPS）会長。平成12、23年度に日本生理学会人澤賞共同受賞。

総合研究大学院大学（以下、総研大）は、1988年にわが国で最初に設立された自らは学部を持たない大学院だけの大学（独立大学院大学）であり、人文・理工にわたる学術分野につき総合的な博士課程教育を、大学共同利用機関等を基盤機関として、それらの優れた研究・学習環境を最大限に生かして行うことにより、高い専門性と広い視野を持った一流の研究者を養成するという世界にも類例のないユニークな大学です。

総研大への入学者はすべて他の国公私立大学（2015年度入学者は239共同大学を含む64大学）からの出身者です。わが国の高等教育の最大の欠点の一つは流動性の低さとそれによる単線性や縦割性にありますが、総研大に入学する学生は、その弊害からまず自ら脱しています。それゆえに総研大の学生達は、多くのバリアを越えて飛び出すことができたという高いポテンシャルを、そして多くの場合には分野や学域を越えて飛び込むという気概と挑戦力を有しています。この点が、総研大の第一の特性であり、それが大学にも、そして一人一人の学生にも大きなメリットを与えています。というのは、新しい出会いや、新しい学問風土との接触こそが、新しい学問を形成する上で大きな力を与えるものだからです。

総研大の第２の特性は、世界最先端の研究設備・施設・資料・データベースが配備され、トップクラスの研究者マンパワーが国内外の研究者と不断に共同研究を展開している（計19の）大学共同利用機関等の研究現場という非常に恵まれた環境の下で大学院教育が行われるという点にあります。それらの基盤機関においては、専門性の高い国際的な研究活動が実施されているとともに、全国の大学・研究機関や諸外国の研究者との分野を越えた共同研究が行われています。それゆえに、「深い専門性」と「国際的な通用性」と「異分野連繋性」を兼ねそなえた研究者の養成を目指すことができるのです。

総研大の第３の特性は、高度の専門性の獲得にとどまらず、「総合性」の修得が体系的・組織的に目指されていることです。総研大の基盤機関・専攻の全体において、文化、歴史、情報、生命、人体、エネルギー、物質、宇宙など実に多様な分野の研究が行われています。この学術的な多様性を活用して、自らの専門的知識を他の知識と結合しながら知識全体の中に位置づけるという「広い視野」の獲得を総合性修得の第１の内容とすることができます。新しい学問は、多くは異なる分野をまたぐ形で現れ、その発展には異分野からの研究者の参入を必要としています。このような新しい分野における教育は、一専攻や一研究科の枠にはおさまりきらず、複数の専攻・研究科をまたぐ形で行われる必要性が生じています。総研大では、その必要性に対応するために“合宿型全学総合教育プログラム”や“研究科横断型専攻間融合プログラム”を推進しています。総研大では、専攻や研究科を越えた教育と異分野連繋の共同研究現場における学習・研究によって、「分野を越えた学際性」の獲得を目指すことができる点が、総合性修得の第２の内容です。科学が生み出した多くのものが社会において物質化されて人々の生活に大きな影響を与えている今日では、科学者には研究成果やその使われ方がもたらす結果に対しても説明責任が求められています。即ち、現代の科学者には人類や社会を視野に入れた人間の総合性の修得が求められているのです。総研大教育における総合性修得の第３の内容は、「社会と連携する科学」という視点の獲得を目指していることです。

総研大の目標は、したがって、①深い専門性と広い視野を併せ持ち、異分野連繋的・社会連携的な視点を持つ国際的研究者人材を育成すること、②基盤機関と業山の連係と、国内外研究者との共同利用研究によって、学際的で先導的（即ち新分野開拓・敷衍的）な研究を大学院生と共に展開すること、そして③社会と連携する科学を創造・教育するアジア大学院教育拠点としての地位を確立することです。

総研大の学生のみなさんには、こうした総研大の特性や目標をよく理解した上で、与えられたメリットを活用しつつ、大きな課題に挑戦されることを願っています。日々研鑽の忙しい大学院学生生活ですが、分野の異なる人々や大学や国を異にする人々との交流にも努めて下さい。それらによって得られた人と人とのつながりが、将来の研究人生に大きな財産をもたらすことになるからです。また、日本人学生は外国語の、外国人学生は日本語の修得にも心掛けて下さい。異なる専門分野間と同様に、異なる文化間のコミュニケーションに堪能なことは、国際的通用性を持った博士号取得者として、その能力を発揮する上での必須条件の一つとなるからです。総研大は教育現場においてもバイリンガル性の付与に力を尽くしたいと考えています。

総研大の全職員は、学生と共に、総研大の特性を更に発展させ、力を合わせて本学の目標の実現に向けての努力をして参りますので、関係各位には総研大の一層の発展のためにご理解とご支援を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

入学案内

詳細は募集要項を請求のうえ確認してください。

(1) 出願資格

本学に出願できる者は、次のいずれかに該当する者とします。

A　修士または専門職学位を有する者

①修士の学位または専門職学位を有する者及び入学の前月までに取得する見込みの者

B　修士または専門職学位に相当する外国の学校等の学位をもつ者

②外国において修士の学位または専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者
③外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位または専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者
④我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位または専門職学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者
⑤外国の大学その他の外国の学校（その教育研究活動等の総合的な状況について、当該外国の政府または関係機関の認証を受けた者による評価を受けたものまたはこれに準ずるものとして文部科学大臣が別に指定するものに限る。）において、修業年限が3年以上である課程を修了すること（当該外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該課程を修了すること及び当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって前号の指定を受けたものにおいて課程を修了することを含む。）により、学士の学位に相当する学位を授与された者
⑥学校教育法施工規則第156条第4号の規定により、国際連合大学の課程を修了し、修士の学位に相当する学位を授与された者及び入学の前月までに授与される見込みの者

C　修士または専門職学位に相当する学力のある者（事前に出願資格認定審査を行います）

⑦外国の学校、外国の大学院の課程を有する教育施設または国際連合大学の教育課程を履修し、大学院設置基準（昭和49年文部省令第28号）第16条の2に規定する試験及び審査に相当するものに合格し、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者及び入学の前月末日までに認められる見込みの者
⑧大学を卒業し、大学、研究所等において、2年以上研究に従事した者及び入学の前月までに2年以上研究に従事することとなる見込みの者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑨外国において学校教育における16年の課程を修了した後、または外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了した後、大学、研究所等において、2年以上研究に従事した者及び入学の前月までに2年以上研究に従事することとなる見込みの者で、本学において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者
⑩本学において、個別の入学資格審査により、修士の学位または専門職学位を有する者と同等以上の学力があると認めた者で、入学の前月末日までに24歳に達している者
※出願資格⑦～⑩により出願しようとする者については、出願前に出願資格の事前審査または個別の入学資格審査を行う必要がありますので、ご注意ください。

(2) 出願期間

出願資格①～⑥に該当する者：平成28年11月25日（金）～12月1日（木）
出願資格⑦～⑩に該当する者：総合研究大学院大学　学務課学生厚生係にお問い合わせください
※原則郵送による受付。

(3) 選抜方法

①書類審査　②修士論文等の審査　③面接（平成29年1月下旬から面接を行います）

(4) 募集要項の請求方法

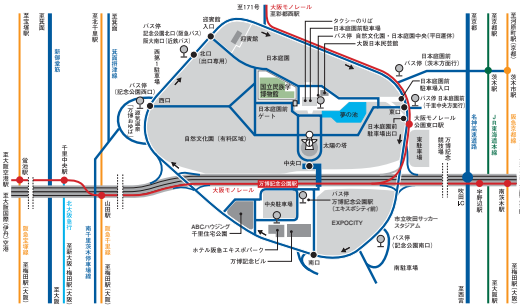
下記メールアドレスに、以下の必要事項を記入し、送信してください。
①郵便番号
②住所
③氏名
④電話番号
⑤希望する募集要項 → 平成29年度4月入学　文化科学研究科

募集要項請求先

総合研究大学院大学　学務課　学生厚生係
〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
Tel. 046-858-1525、1526
メールアドレス：kousei@mlsoken.ac.jp
（受信確認のメールを送付するため、携帯電話のメールアドレスは使用しないでください）

国立民族学博物館 管理部研究協力課研究協力係

〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151（代表）　06-6878-8236（専攻担当）　FAX 06-6878-8479
URL http://www.minpaku.ac.jp/　　大学院トップページ
E-mail souken@idc.minpaku.ac.jp　　http://www.minpaku.ac.jp/research/education

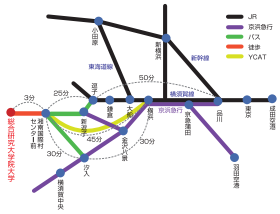


●大阪モノレールで「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車徒歩約15分
自然文化園（有料区域）を通ってこられる場合、自然文化園ゲート脇の券売機で本館（国立民族学博物館）の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。また、「公園東口駅」からは、自然文化園を通行せずに来館できます。
●近鉄バスで阪急茨木市駅・JR茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約15分。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

総合研究大学院大学 事務局

〒240-0193　神奈川県三浦郡葉山町（湘南国際村）
電話 046-858-1500（代表）　FAX 046-858-1542
URL http://www.soken.ac.jp/





●電車・バス利用
・JR 横須賀線逗子駅東口下車
▶京急バス①番乗り場より16 系統・26 系統「湘南国際村 行き」、「湘南国際村センター前」下車
乗車時間：約25分
▶京急バス②番乗り場より「湘南佐島なぎさの丘 行き」、「湘南国際村関門沢調整池」下車
乗車時間：約20分
・京浜急行逗子・葉山駅逗子駅東口下車
▶京急バス①番乗り場より16 系統・26 系統「湘南国際村 行き」、「湘南国際村センター前」下車
乗車時間：約23分
▶京急バス②番乗り場より「湘南佐島なぎさの丘 行き」、「湘南国際村関門沢調整池」下車
乗車時間：約18分
・京浜急行本線沿入駅下車
▶京急バス②番乗り場より16 系統「湘南国際村 行き」、「湘南国際村センター前」下車
乗車時間：約30分
・YCAT
▶横浜シティーエアーターミナル⑧番乗り場「横須賀西部 行き（逆方向中央研究所行きバス）」、「湘南国際村センター前」下車　乗車時間：約45分
（注）「湘南国際村センター前」下車徒歩３分、「湘南国際村関門沢調整池」下車徒歩10分

●車利用
・横浜横須賀道路（有料）「逗子インター」より逗葉新道（有料）約2.1ｋｍ交差点左折
南葉トンネルを抜け直進約５分「湘南国際村センター入口」交差点を左折約１分

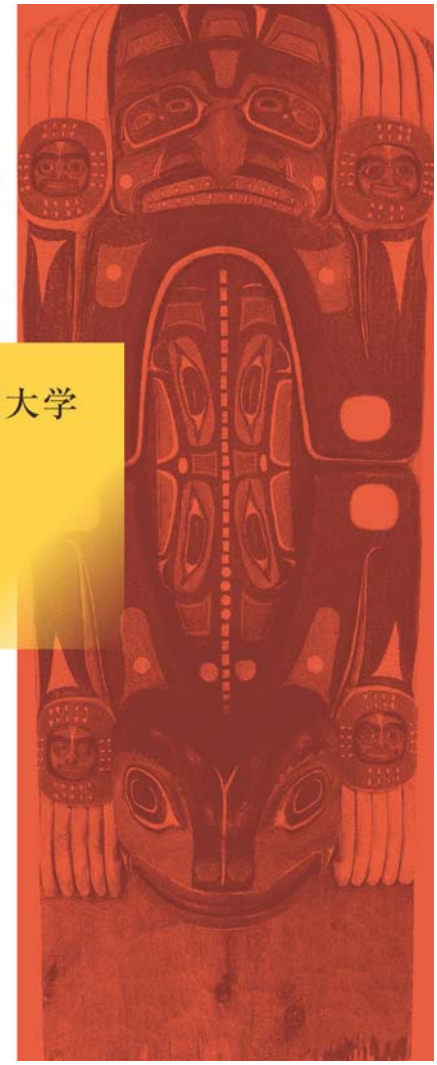
SOKENDAI
(The Graduate University for Advanced Studies)
School of Cultural and Social Studies
Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies

Overview '17

総合研究大学院大学
文化科学研究科

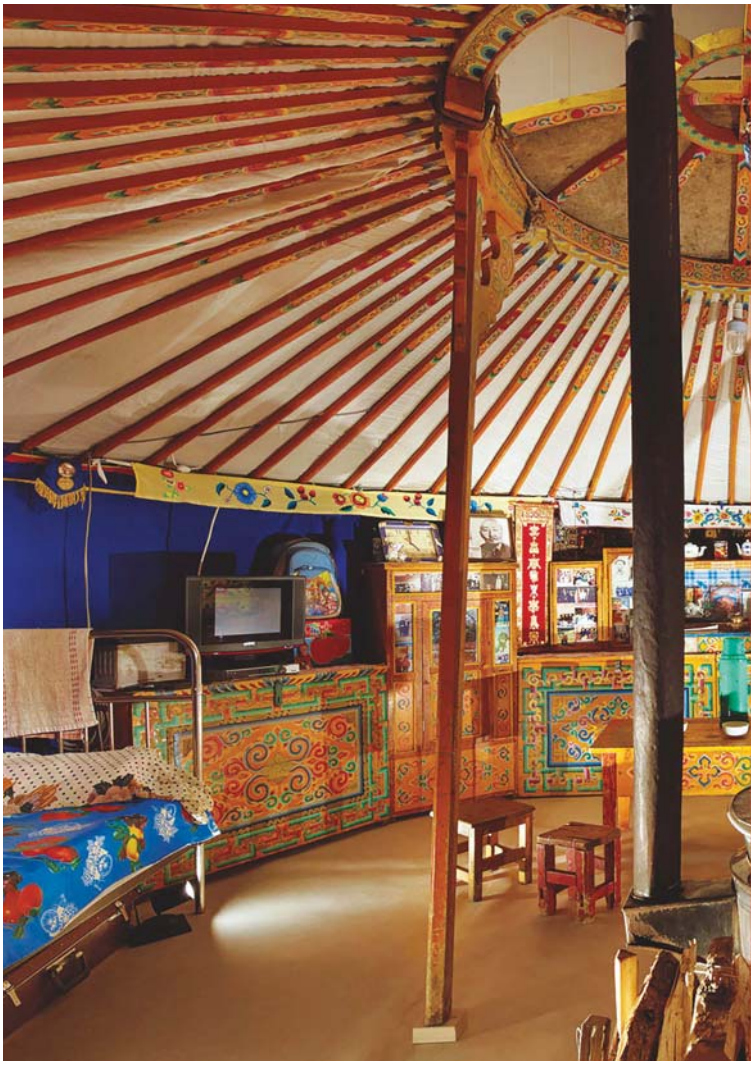
地域文化学専攻
比較文化学専攻

概要 '17



国立大学法人
総合研究大学院大学
THE GRADUATE UNIVERSITY FOR ADVANCED STUDIES

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology





国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館機能と博士課程の大学院教育機能を備えた文化人類学・民族学の研究センターとして、世界で唯一の存在です。みんぱくには、このほかにもいくつもの「世界一」の性格が備わっています。みんぱくは現在、世界各地から集めた34万5000点の民族学標本資料を収蔵していますが、このコレクションは、20世紀後半以降に築かれた民族学関係の資料としては世界最大の規模のものとなっています。また、民族学に特化した博物館としても、世界最大の博物館です。さらに世界全体をカヴァーするコレクション、展示、蔵書、そして研究部と研究者の陣容をもつ研究所としても、みんぱくはアジアで唯一の機関ということになります。みんぱくには、現在、51人の研究者、つまり、教授、准教授、助教がいますが、みんぱくの研究者は、日々、世界各地でフィールドワークに従事し、人類の営みの多様性と共通性を明らかにするとともに、その作業の中から、世界の未来の姿にむけての指針を示そうと力を注いでいます。

人類の文明は、今、数百年来の大きな転換点を迎えているように思います。これまでの、中心とされてきた側が周縁と規定されてきた側を一方的にまなざし、支配するという力関係が変質し、従来、それぞれ中心、周縁とされてきた人間集団の間に、創造的なものも破壊的なものも含めて、双方向的な接触と交流・交錯が至る所で起こるようになってきています。それだけに、異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の違いを超えてともに生きる世界の構築をめざす文化人類学の知が、これまでになく求められているように思われます。

みんぱくには、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置されています。この両専攻に所属する大学院生は、文化人類学をはじめ言語学、宗教学、生態学、先史学、芸術学、民族音楽学そして博物館学など、広範な研究領域を専門とする個性ゆたかな教授陣の指導を受けられるのみならず、上で述べた世界に冠たる資料の蓄積に身近に接することができます。みなさんが、これらの学術資源を縦横に使いこなし、新たな研究の領野を切り開いて、それぞれの分野のパイオニアとしてはばたいて行かれることを期待しています。

国立民族学博物館長　吉田 憲司

専攻の特長

充実した教授陣

学生数をうわまわる教授陣は、学生一人一人の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また両専攻の教員は各分野の第一線で活躍する研究者であるため、最新の研究動向に基づいた指導を行うことができます。

豊富な情報源

日本における民族学（文化人類学）関連の最大の資料類が揃っています。

また、国立民族学博物館が主催する数多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通して、国内外の優秀な研究者との交流が容易になります。

各種の支援制度

リサーチ・アシスタント制度、インターンシップ制度、授業料免除制度、学会発表やフィールドワークへの旅費の援助など、充実した研究支援が受けられます。

指導体制

個別指導と共同指導を組み合わせたユニークな指導体制を採用しています。学生には正副２名の指導教員が指名され、入学から学位取得まで、日常的な指導をおこないます。一方、ゼミにおいては共同指導体制を取り入れています。ゼミは各４名の教員が担当し、研究の内容だけでなく発表方法などに関する指導をおこないます。担当教員以外の教員にもゼミへの参加を求めることができ、正副の指導教員を含めると10人前後の教員からコメントを得ることができます。

スケジュール

学生はおおむね１年次において「１年生ゼミ」での指導をもとに現地調査（フィールドワーク）の準備をおこない、２年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別指導や「論文ゼミ」での共同指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

教員紹介

アドミッション・ポリシー

地域文化学専攻

独創的な文化人類学・民族学を目指して

本専攻は、国立民族学博物館が基盤機関となり、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ及びオセアニア等の地域に居住する人びとの文化や社会に関する研究教育を行っています。各々の文化のもつ特性や歴史性について考慮しながら、民族誌学的方法論に基づく文化の記述と構造の把握を目指します。現地調査から得られたデータを分析し、理論化を目指す、高度な研究能力を備えた人材を養成します。



齋藤　晃 専攻長

比較文化学専攻

比較研究を通じて文化の諸現象を解明

本専攻は、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術、文化資源という６つの研究分野から構成されています。諸民族文化の比較研究により、各々に通底する普遍性の発見と理論的解明を目指します。基盤機関である国立民族学博物館の標本資料や映像音響資料、文献図書資料等を教育と研究に活かせることは本専攻の強みです。従来の文化人類学的研究方法に加えて、隣接諸科学の成果を導入し、新しい研究分野の開発を積極的に進めることができる人材を養成します。



平井 京之介 専攻長

地域文化学専攻（2017年度）

相島 葉月 准教授
- ❶社会人類学・イスラーム学・中東研究
- ❷現代エジプトにおける美と身体文化に関する社会人類学的研究
  日本と中東に関する文化的知識のグローバルな流通について
- ❸モダニティ、都市中流層、マスメディア、教育、現代イスラーム思想、消費、様式美、独創性、知的伝統

池谷 和信 教授
- ❶環境人類学・人文地理学・アフリカ研究・地球学
- ❷熱帯の狩猟採集文化、家畜飼育文化の変容に関する比較研究
  南部アフリカにおける先住民運動に関する研究
  地球環境史の構築に関する研究
- ❸地球環境、狩猟採集民、アフリカ、東北アジア、サン（ブッシュマン）、ソマリ、チュクチ、日本、バングラデシュ、環境人類学、人文地理学

伊藤 敦規 准教授
- ❶アメリカ先住民研究・博物館人類学・知的財産問題の人類学的研究
- ❷日本国内博物館等所蔵アメリカ先住民資料の協働管理に向けた調査研究
- ❸米国先住民、博物館人類学

印東 道子 教授（2018年３月退任予定）
- ❶オセアニア考古学・民族学
- ❷オセアニアへの人類の拡散と居住
  オセアニアの伝統的土器文化
- ❸オセアニア、考古学、民族学、文化史研究

宇田川 妙子 准教授
- ❶南ヨーロッパ研究・性研究
- ❷イタリアおよび地中海ヨーロッパの民族誌的研究
  ジェンダー／セクシュアリティに関する文化人類学的研究
  社会理論の批判的再考
- ❸イタリア、地中海ヨーロッパ、イタリア人、文化人類学、ジェンダー／セクシュアリティ研究、南ヨーロッパ研究、性研究

樫永 真佐夫 教授
- ❶東南アジア文化人類学
- ❷東南アジアの伝統的政治社会組織に関する歴史的研究
  物資文化に焦点を当てた東タイの民族誌的研究
  ベトナムにおける国家と民族の関係に関する研究
- ❸東南アジア大陸部、ベトナム、黒タイ、白タイ、タイ系言語集団、社会人類学

河合 洋尚 准教授
- ❶社会人類学・漢族研究
- ❷中国漢族地域の都市景観再生（街づくり）にまつわる人類学的研究
  中国漢族地域の都市ー村落言説と景観形成にまつわる人類学的研究
  環南シナ海における漢族（特に客家）の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌
  中国人類学／民族学の歴史、方法論、会議文化にまつわる動向研究
- ❸景観、風水、都市、コミュニティ、漢族、客家

齋藤　晃 教授
- ❶歴史人類学・ラテンアメリカ研究
- ❷植民地期アンデスにおける先住民の組集住化に関する国際共同研究
  近世カトリックの世界宣教と文化適応に関する共同研究
- ❸ラテンアメリカ、植民地時代、先住民族、文化人類学、エスノヒストリー

齋藤 玲子 准教授
- ❶アイヌ・北方先住民文化研究
- ❷アイヌの工芸の変遷
- ❸アイヌ、北方先住民族、北海道、北アメリカ、物質文化、観光

佐藤 浩司 准教授（2019年３月退任予定）
- ❶民族建築学
- ❷東南アジア・オセアニアの居住様式に関する比較研究
- ❸東南アジア、オセアニア

新免 光比呂 准教授
- ❶宗教学・東欧研究
- ❷ファシズム運動における宗教的要因の比較研究
- ❸ルーマニア、ファシズム、レジオナール、キリスト教

西尾 哲夫 教授
- ❶認識言語学・アラブ研究
- ❷日本におけるアラビアンナイトの受容と文学的オリエンタリズムの発生と展開
- ❸中東、北アフリカ、アラビアンナイト

❶専門分野
❷現在の研究課題
❸研究のキーワード

比較文化学専攻（2017年度）

丹羽 典生 准教授
- ❶社会人類学・オセアニア地域研究
- ❷オセアニアにおける紛争と少数民族に関する研究
  応援に関する通文化比較
- ❸宗教運動、紛争、開発、少数民族、応援

野林 厚志 教授
- ❶人類学・民族考古学・台湾研究
- ❷動植物資源の多元的価値の探究
  台湾におけるエスニシティの動態の探究
- ❸生業文化、物質文化、食文化、台湾原住民族、平埔族、エスニシティ、文化資源、工芸

信田 敏宏 准教授
- ❶社会人類学・東南アジア研究
- ❷「周縁を生きる人びと」についての人類学的研究
- ❸東南アジア、マレーシア、オラン・アスリ、トゥムアン、社会人類学

林　勲男 教授
- ❶社会人類学・オセアニア研究
- ❷自然災害への対応に関する人類学的研究
  オセアニアにおけるキリスト教宣教師の活動に関する研究
- ❸災害、復興、記憶、宣教師、博物学誌、民族誌コレクション、オセアニア

藤本 透子 准教授
- ❶文化人類学・中央アジア地域研究
- ❷中央アジアにおけるイスラーム実践
  カザフの移動と社会再編
- ❸中央アジア、カザフスタン、ムスリム、社会再編、宗教実践、移動

三尾　稔 准教授
- ❶文化人類学・南アジア研究
- ❷南アジアにおける多様な宗教伝統の共生に関する研究
  インドのナショナリズムと宗教の関係に関する研究
  インドの大衆消費社会化と祭礼の変容に関する研究
- ❸ラージャスターン州メーワール地方（インド）、グジャラート州（インド）、ヒンドゥー、ムスリム、文化人類学、宗教人類学、南アジア地域研究

三島 禎子 准教授
- ❶文化人類学・西アフリカ研究
- ❷国際移動に関する人類学的考察 ―ソニンケの例―
- ❸西アフリカ、セネガル、ソニンケ、商業民族、民族ネットワーク

南　真木人 准教授
- ❶南アジア民族誌研究、文化人類学
- ❷ネパール地震後の社会再編に関する研究
  ネパール社会の30年間の変化に関する研究―1982年撮影番組の再資源化
- ❸ネパール地震、災害民族誌、旬祭、社会再編、映像人類学、当事者コミュニティ、研究資源の共有化、ガンダルバ（楽師カースト）

森　明子 教授
- ❶文化人類学・民族誌研究・ヨーロッパ
- ❷人類学の記述とその社会的文脈
  人類学的比較の再考
- ❸ヨーロッパ、ドイツ語圏、ベルリン、文化人類学、記述、比較、社会的なもの

山中 由里子 准教授
- ❶比較文学比較文化
- ❷中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究
  驚異と怪異の比較研究
  アレクサンドロス伝承の東西伝播
- ❸西アジア、アラブ文学、ペルシア文学、博物学、驚異、イラン、東西交渉史

横山 廣子 教授（2018年３月退任予定）
- ❶文化人類学・中国社会研究
- ❷東アジアにおける文化と社会の動態に関する人類学的研究
- ❸雲南、中国西南部、東南アジア大陸部、東アジア、ペー（白）族、漢族、少数民族、エスニシティ、文化変容、社会組織

上羽 陽子 准教授
- ❶民族芸術学・染織研究・手工芸研究
- ❷現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究
- ❸民族芸術学、手工芸文化、染織研究、インド、伝統的技術

飯田　卓 准教授
- ❶生態人類学・漁民研究
- ❷マダガスカルにおける漁民文化と漁撈技術
  日本の漁村における水産資源の管理と利用
  日本のマスメディアにおける異文化表象
- ❸マダガスカル、インド洋、日本、ヴェズ、北海道漁民、沖縄漁民、生態人類学

卯田 宗平 准教授
- ❶環境民俗学・東アジア研究
- ❷動物と人間とのかかわりをめぐる民俗学的研究
- ❸自然と人間、動物利用、リバランス論、縄胴文化、トナカイ飼養、物質文化、技術と技能

太田 心平 准教授
- ❶社会文化人類学・北東アジア研究
- ❷韓国・朝鮮社会における文化の統合性と多様性の研究
- ❸韓国・朝鮮、近代性研究、記憶研究、物語論、世代集団、知識生成

韓　敏 教授
- ❶社会人類学・中国研究
- ❷歴史記憶と象徴に関する人類学的研究
- ❸社会主義近代化、中国、文化遺産、聖地巡礼、英雄崇拝、漢族、シボ族

菊澤 律子 准教授
- ❶言語学・オーストロネシア諸語
- ❷比較（歴史）言語学、記述言語学
  言語データにもとづくオセアニアの先史研究
- ❸オセアニア、フィジー、オーストロネシア、記述言語学、比較（歴史）言語学、比較（歴史）統語論、先史言語学、手話言語学

岸上 伸啓 教授
- ❶文化人類学・北方文化研究
- ❷北アメリカ先住民社会における捕鯨と獲物の分配・流通に関する文化人類学的研究
- ❸カナダ、北太平洋沿岸、イヌイット、イヌピアット、社会変化、資源管理、先住民、分配、捕鯨

笹原 亮二 教授
- ❶民俗学・民俗芸能研究
- ❷モノの遺存の総体的把握を通じた生活文化に関する民俗学的研究
- ❸日本、民俗学、三匹獅子舞、民俗芸能

菅瀬 晶子 准教授
- ❶文化人類学・中東地域研究
- ❷パレスチナ・イスラエルを中心とした東地中海アラブ地域で、一神教徒が共有する聖者崇敬の研究
  イスラエルにおけるアラブ人市民を中心とした、マイノリティによる文化表象のありかた
- ❸中東、東地中海、パレスチナ、イスラエル、キリスト教徒、マイノリティ、アイデンティティ、エスニシティ、文化表象、共存

鈴木 七美 教授
- ❶文化人類学・エイジング研究
- ❷多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の国際共同研究
  スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究
- ❸エイジング・イン・プレイス、エイジ・フレンドリー・コミュニティ、ライフロング・ラーニング、養生、アーミッシュ

鈴木　紀 准教授
- ❶開発人類学・ラテンアメリカ文化論
- ❷開発援助プロジェクトの人類学的評価法
  博物館における先住民族文化表象
- ❸ラテンアメリカ、メキシコ、ユカタン、開発援助、フェアトレード、博物館展示学

關　雄二 教授
- ❶アンデス考古学・ラテンアメリカ研究
- ❷ペルーにおける世界文化遺産概念と国家・地域の文化遺産概念との相互作用に関する研究
- ❸ペルー、ラテンアメリカ、メスティソ、アンデス考古学、文化人類学

❶専門分野
❷現在の研究課題
❸研究のキーワード

園田 直子 教授
❶保存科学
❷博物館における持続可能な資料管理に関する研究
資料の展示・保存環境に関する研究
収蔵庫の再編成に関する研究
❸保存科学、総合的有害生物管理（IPM）、博物館環境

出口 正之 教授（2021年3月退任予定）
❶非営利組織の政策人類学的研究
❷公益法人その他の組織とフィランソロピーの政策人類学的研究
❸フィランソロピー、メセナ、非営利組織、NPO、公益法人、公益認定制度、ボランティア、言政学、政策人類学

平井 京之介 教授
❶社会人類学・日本研究・東南アジア研究
❷水俣病被害者支援運動の人類学的研究
人口減少社会における地域づくりに関する人類学的研究
タイのコミュニティ博物館についての人類学的研究
❸日本、タイ、ラオス、経済人類学、社会運動、博物館、上座部仏教、水俣病

福岡 正太 准教授
❶民族音楽学・東南アジア研究
❷インドネシアの初期ラジオ放送における伝統音楽
薩南諸島における伝統芸能の伝承と映像記録
❸スンダ音楽、西ジャワ、インドネシア、東南アジア、日本、民族音楽学、映像音響メディア

松尾 瑞穂 准教授
❶文化人類学・ジェンダー医療人類学・南アジア研究
❷近代化、開発がもたらすリプロダクション実践の変容
代理出産の文化論
サブスタンスを通した個と集団カテゴリーの同定と差異化
南アジアにおける産児制限と優生学
❸リプロダクション（性と生殖）、ジェンダー、インド、サブスタンス、身体東西交渉史

吉田 憲司 教授（国立民族学博物館長）
❶博物館人類学・アフリカ研究
❷アフリカにおける造形と儀礼の人類学的研究
博物館・美術館における文化の表象のあり方の研究
❸アフリカ、ヨーロッパ、日本

寺田 吉孝 教授（2020年3月退任予定）
❶民族音楽学・インド研究
❷マイノリティと音楽
グローバル化と南インド古典音楽の変容
❸インド（タミル）、フィリピン（マラナオ、マギンダナオ）、アジア系アメリカ、民族音楽学

日高 真吾 准教授
❶保存科学・保存修復
❷地域文化の保存と活用に関する研究
博物館における保存処理法の研究
❸日本、保存科学、保存処理

廣瀬 浩二郎 准教授
❶日本宗教史・民俗学
❷障害者文化に関する人類学的研究、日本近代の新宗教に関する歴史的研究
❸日本、東北、九州、京都、歴史、宗教、福祉、文化

ピーター J.マシウス 教授
❶先史学・民族植物学
❷History of agriculture and plant domestication, with specific interests in taro (Colocasia esculenta), paper mulberry (Broussonetia papyrifera), and other plants used for food, fodder and fibre
❸Asia, Pacific, Mediterranean, ethnobotany, ethnobiology, plant domestication, food history

丸川 雄三 准教授
❶文化財情報発信・連想情報学
❷連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究
❸文化財、連想検索、デジタルアーカイブ

博士後期課程（Ph.D.）

課程修了の要件、学位取得までの流れ

■ 学位取得の要件

学位を取得するためには、所定の3年限以上在学し、必要な研究指導を受けた上で、所定の単位数以上を修得し、博士論文の審査及び試験に合格すること（課程博士）が必要です。

■ 学位取得までの流れ

1年次	1年生ゼミ出席
	現地調査準備
	調査計画書提出
2年次前期以降	現地調査
	調査報告、博士論文構想発表
3年次	必須履修単位取得
	博士論文草稿発表
3年次後期以降	課程博士出願
	論文公開発表会・口述試験
	最終試験・合否決定
	学位授与



研究支援

■ リサーチ・アシスタント（RA）制度

教員の指示・監督の下で、研究者の補助として、研究活動に必要な様々な業務をおこないながら給与を得ることができます。

■ 学生派遣事業

学位申請論文作成に不可欠な国内外の調査や学会での成果発表に要する旅費、宿泊費などの支援をおこないます。

■ インターンシップ制度

深い専門性と広い視野、国際通用性をそなえた研究者の育成を目的として、国内外の大学、研究機関、企業等において、共同研究活動や調査活動等において必要な経費を支援する制度です。

■ 入学料・授業料免除等制度

学資負担者の死亡や風水害等の罹災、その他経済的理由により入学料や授業料の納入が困難な学生に対する経済的支援として、入学料・授業料の免除（収納猶予・分納）の制度があります。

授業料免除については、毎年2回、授業料免除申請の受付をおこなっています。授業料免除許可者は、半期の授業料の半額（267,900円）が免除されます。

■ 特別講義

外部研究資金調達のための申請書の書き方、論文投稿のしかたなどをテーマにした特別講義をおこなっています。

■ 日本学術振興会「特別研究員（DC 2）」採用数

年　度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
採用数	3	3	4	2	1	2	2	2	2	4

在学生の声

地域文化学専攻

呂　怡屏（ロ　イーピン）

私は2014年4月に私費留学生として来日した。修士課程の時、在学していた国立台北芸術大学（台湾）が国立民族学博物館（以下、民博）と学術協定を結び、博物館学ワークショップをおこなった。この際、民博の博物館としての魅力と、民博の研究者による文化人類学のアプローチからの多様な博物館研究が強く印象に残った。それで、私は博士課程では博物館学から文化人類学の世界に移り、民博に置かれている総研大の大学院に進学することにした。

総研大では人類学に関するさまざまなテーマの授業がおこなわれており、興味のある専門分野の知識を深く掘り下げることができる。また、民博に収蔵された世界各地の貴重な標本資料、図書資料、学術データベースなどを自らの研究に自由に利用することができる。

民博はたんなる博物館ではなく、大学共同利用機関である。それゆえ共同研究会や国際シンポジウムなどが数多く開催されている。これらに参加することを通じて、学生は多様な研究課題や最新の研究動向に触れることができるし、自らの研究の視野を広げることもできる。

また、人類学的研究ではフィールド調査が必要となるが、総研大は学生の調査への支援制度が充実している。短期フィールド調査や海外での研究成果発表のための旅費にたいする補助がある。さらに調査で使用するさまざまな機材の貸し出しもある。

私はいま総研大で学びながら、自分のやりたい研究を遂行するうえでとても恵まれた環境にいると感じている。



台湾、台南市のG村で行われたシラヤ族の夜祭

学位論文リスト

比較文化学専攻

田村 卓也

修士課程に在学中、私は2年間青年海外協力隊の隊員としてアフリカでの生活を送った。それまで日本国内をフィールドとした研究を行ってきた私は、博士課程への進学にあたって研究対象と調査地を大きく変更した。そのきっかけとなったのは、日本から遠く離れたアフリカ大陸の海辺で生きる人びととの出会いだった。

博士課程に進学後は、インド洋に面したケニア共和国の沿岸南部に位置する小さな島をフィールドとして、漁撈の研究を開始した。つたないスワヒリ語しか話せず、コミュニケーションに苦労しながら現地調査を進める中、人びとは私をやさしく迎え入れてくれ、島を訪れるたびに知人や友人も少しずつ増えていった。電気や水道のない島のくらしは大変なことも色々とあるが、周囲の自然環境をうまく利用しながら漁を行う漁撈者たちの姿からは学ぶことが多い。

こうした現地の人びとからのあたたかな支えに加え、本学からの手厚いサポートと恵まれた環境は研究を進めるうえで大きな助けとなっている。基盤機関である民博には、膨大な収蔵品や蔵書だけでなく、研究会やシンポジウムといった授業以外の学びの場もある。また、研究を進めていく上においては、現地調査や学会での発表などを重ねていく必要があるが、こうした旅費は学生にとって少なからず経済的な負担となる。本学には調査や学会発表への旅費の支援や、調査に必要な機材の貸与など、学生が行う研究を支援してくれる制度も充実している。

地域やテーマを超えて、さまざまなものの見方や資料に出会える民博は、自らの研究に刺激を与えてくれる、非常に恵まれた研究環境といえるだろう。



ケニア沿岸南部、サメを水揚げする漁師

学位論文リスト

2017年度以降

【課程博士】

自然資源の利用に関する環境人類学的研究 ―ニカラグアの先住民による商業的ウミガメ漁の事例―	基木　仁〔地域〕	[2017.3.24 文学]
スナックにおける言語コミュニケーション研究 ―対人関係を調節する接客言語ストラテジー―	中田　梓音〔比較〕	[2016.9.28 文学]
日本社会の自然観に関する民族誌的研究 ―NPO法人「酵遊の自由をすすめる会」を中心に―	金セッビョル〔地域〕	[2016.3.24 文学]
都市回族コミュニティの維持と宗教実践 ―中国陝西省西安市における回族の帰属意識をめぐる民族誌的研究―	今中　崇文〔地域〕	[2016.3.24 文学]
韓国の地域社会における華僑のアイデンティティに関する民族誌的研究 ―韓国華僑ビジネスと華僑協会を中心に―	金　桂淑〔地域〕	[2015.9.28 文学]
「野球移民」を生みだす人びと ―ドミニカ共和国におけるトランスナショナル移民研究―	窪田　暁〔比較〕	[2015.3.24 文学]
モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる交渉に関する民族誌	堀田あゆみ〔地域〕	[2015.3.24 学術]
中国雲南省における徳宏タイ族の節興うたと感性の民族誌的研究	伊藤　恒〔地域〕	[2014.9.29 文学]
My Huaca: The Use of Archaeological Heritage in Modern Peru from a Public-Archaeology Perspective	サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ〔比較〕	[2014.9.29 文学]
ナイジェリアの都市イレ・イフェにおける「アーティスト」の民族誌的研究	緒方しらべ〔比較〕	[2014.3.20 文学]
変化しつづける装い ―中国雲南省文山モンの自己と他者をめぐる人類学的服飾研究―	宮脇　千絵〔地域〕	[2012.9.28 文学]
現代アンデス農村における聖人信仰の変容 ―人の移動に焦点をあてて―	八木百合子〔比較〕	[2012.9.28 文学]
無文字社会における歴史記憶の生成と継承 ―南エチオピア牧畜民ボラナにおける口承史の分析をとおして―	大場　千景〔地域〕	[2012.3.23 文学]
カオダイ教ハノイ聖室の民族誌的研究 ―ベトナム北部地域の都市における女性たちの社会関係―	伊藤まり子〔地域〕	[2012.3.23 文学]
周辺イスラームのダイナミズム ―タイ南部村落におけるイスラーム復興運動と宗教実践の変容―	小河　久志〔地域〕	[2012.3.23 文学]
ヨーグルトをめぐる言説の生成と展開 ―社会主義期からポスト社会主義期にかけてのブルガリアを中心に―	マリア・ヨトヴァ〔比較〕	[2011.9.30 文学]
オーストラリア先住民ヨルタ・ヨルタの環境管理のための先住民運動に関する文化人類学的研究	友永　雄吾〔地域〕	[2011.3.24 文学]
現代タイ社会における開発と僧侶 ―僧侶による社会貢献とネットワーク形成に焦点をあてて―	岡部真由美〔地域〕	[2011.3.24 文学]
現代東南中国における宗親会の民族誌的研究 ―国家との関係を中心として	陳　夏暉〔比較〕	[2011.3.24 文学]
農業技術改善の民俗誌 ―紀ノ川下流域村落の一七～二〇世紀前半における動向の分析―	加藤　幸治〔比較〕	[2010.9.30 文学]
日本の先史時代における植物性食料の加工と利用 ―残存デンプン分析法の理論と応用―	渋谷　綾子〔比較〕	[2010.3.24 文学]
韓国における老人の食 ―老人福祉施設を中心に―	守屋亜記子〔地域〕	[2009.3.24 文学]
インド農村社会における不妊経験の人類学的研究	松尾　瑞穂〔比較〕	[2008.9.30 文学]
フェラインの民族誌 ―ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション―	山田　香織〔地域〕	[2008.3.19 文学]
水上人と呼ばれる人々 ―広東珠江デルタの漁族エスニシティとその変容―	長沼さやか〔地域〕	[2008.3.19 文学]
在米コリアンのサンフランシスコ日本町 ―マルチカルチャーのエスニックタウン―	小谷　幸子〔比較〕	[2008.3.19 文学]

参加型開発を通した女性の自己変容過程に関する人類学的研究 ―北インド農村社会を事例として―	菅野美佳子〔比較〕	[2007.9.28 文学]
「場」と「パフォーマンス」に関する人類学的研究 ―トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として―	米山　知子〔比較〕	[2007.9.28 文学]
上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的研究	飯國有佳子〔地域〕	[2007.3.23 文学]
「踊り」の身体技法に関する映像人類学研究 ―インドネシア・ミナンカバウの事例から―	村尾　静二〔比較〕	[2007.3.23 文学]
離散と故郷 ―ヨルダンのパレスチナ系住民にみられる帰属意識とナショナリズム―	錦田　愛子〔地域〕	[2007.3.23 文学]
「子ども域」の文化人類学的研究 ―バングラデシュ農村社会の子ども―	南出　和余〔比較〕	[2007.3.23 文学]

【論文博士】

グローバル化する互酬性 ―サモア世界の儀礼財の循環と首長制	山本　真鳥	[2017.3.24 文学]
ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成 ―東北地方のヌン・アン集団の事例から―	チュ・スワン・ザオ	[2015.9.28 文学]
アイヌ衣文化の研究	津田　命子	[2014.9.29 文学]
先住民生存捕鯨再考 ―国際捕鯨委員会における議論とベクウェイ島の事例を中心に―	濱口　尚	[2013.9.27 文学]
多文化都市・新宿の生成と展開 ―ライフサイクルの視座―	川村千鶴子	[2013.3.22 学術]
先史アンデス形成期の社会動態 ―ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から―	山本　睦	[2012.9.28 文学]
小集落から見た初期国家の形成過程 ―先スペイン期中央アンデスのワリ国家を事例として―	土井　正樹	[2012.3.23 文学]
スリランカにおけるエステート・タミルのアイデンティティと「ジャーティヤ」をめぐる人類学的研究	鈴木　晋介	[2011.3.24 文学]
活用される職祖伝承 ―近・現代日本における木工挽物の担い手と木地屋「根元地」―	木村　裕樹	[2010.9.30 文学]
先住民学習の理論と実践―ポストコロニアル人類学の活用―	中山　京子	[2010.9.30 学術]
シャーマニズムによるエスニシティの探求 ―ポスト社会主義期におけるモンゴル・ブリヤートの事例を中心として	島村　一平	[2010.3.24 文学]
国際線客室乗務員の接客業務と勤務体制 ―仕事の人類学的研究―	八巻　惠子	[2009.9.30 文学]
「アイヌ風俗画」の研究 ―近世北海道におけるアイヌと美術	新明　英仁	[2007.9.28 文学]

年度別学位授与者数

		'91～'06年	'07年	'08年	'09年	'10年	'11年	'12年	'13年	'14年	'15年	'16年	計
地域文化学専攻	課程博士	23	2	1	0	2	3	1	0	2	3	1	38
	論文博士	12	1	0	1	0	0	1	0	1	1	1	18
比較文化学専攻	課程博士	15	3	1	1	2	1	1	1	2	0	1	28
	論文博士	7	0	0	1	3	1	1	1	0	0	0	14
計		57	6	2	3	7	5	4	2	5	4	3	98

よくある質問

Q 学部をもつ大学院の教育と比べてどんな特徴がありますか？

A 教員数が学生数を上回るという、他大学にはない恵まれた教育環境があげられます。教員：学生の比率はおおよそ3：2であり、個々の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また教員は各分野の第一線で活躍する研究者であり、最新の研究動向に基づいた指導をおこなえます。さらに、民博が所蔵する豊富な研究資料（図書67万、標本34万、映像音響7万など）の利活用、館が主催する多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通し、国内外の研究者との交流が容易になります。

Q 地域文化学専攻と比較文化学専攻の二専攻には、どのような違いがありますか？

A 地域と比較に別れているものの、共にフィールドワークを研究の根幹においているため、共通する部分も多く、密接な相互交流があります。また、専攻間に指導上の棲み分けはなく、院生がどちらに所属していても、両専攻の教員の指導を受けることができます。

Q 二専攻で学ぶことができるのは、文化人類学・民族学だけでしょうか？

A そんなことはありません。両専攻には、考古学、民俗学、宗教学、芸術学、言語学、音楽学、博物館学、保存科学など幅広い分野を専門とする教員がそろっていますから、それらの分野でも研究をおこなうことができます。また、教員の陣容は年度によって変化することがありますから、希望研究内容と当該専攻の教育体制との整合性について不明な点がある方は、前もって専攻長にご相談ください。

Q 受験する前に希望する指導教員をかならず決めておく必要がありますか？

A 必要条件ではありませんが、強くお勧めします。また、受験を申請する前に希望指導教員に連絡を取れば、入学後の研究の見通しを立てる一助となるでしょう。

Q 学部や修士課程で文化人類学・民族学を専攻しなかったのですが、受験はできますか？

A 正規に文化人類学・民族学を学んだ経験がなくても受験はできます。しかし、入学後に志望研究が遂行可能であるか見通しをつけるためにも、関連図書などを精読し、少なくとも人類学やフィールドワークに関する基本的な考え方について理解しておくほうがよいでしょう。これは、何をするために当専攻を受験するのか整理するためにも役立つはずです。

Q できるだけ早く学位を取得したいのですが、3年で取得するのは難しいでしょうか？

A フィールドワークを研究の中心に据えている研究分野であるため、3年間で学位を取得するのは容易ではありません。早い取得が望ましいことは言うまでもありませんが、学問の進展に寄与できる質の高い研究成果を上げ、最終学位である博士号に相応しい研究能力を養うことがより重要であり、この点に留意した指導がおこなわれています。

Q 修士課程ですでに現地調査をはじめているのですが、入学後すぐに長期の現地調査をすることは可能ですか？

A 原則として、初年度は、長期フィールドワークをおこなうための準備期間にあてられています。フィールドワークは、単に現地に行けば遂行できるものではありません。また、修士課程でフィールドワークをすでにおこなっている場合でも、博士論文執筆のための調査では、求められる調査の質に大きな差があることが多いのです。入学後の一年間は、教員の指導のもと、調査計画の実現性・妥当性などについて、それまでの自己の研究成果や先行研究との関連に留意しながら検討します。年度末には、フィールドワークに向けたリサーチプロポーザルに関する発表をおこない、計画をより実現性の高いものへと練っていきます。

▼ その他の質問はこちら
http://www.minpaku.ac.jp/research/education/university/information/faq

修了生の声

立命館大学 言語教育センター スペイン語 講師　サウセド ダニエル ダンテ（2014年9月学位取得）

2008年4月に私はペルーからの留学生として、総研大の比較文化学専攻博士課程に入学しました。私の研究課題は、考古遺跡周辺に住む人々の視点に着目しながら、発展途上国（特にペルー、南米）における考古遺産を保護するための新しい方法を見つけることです。

総研大生になると、学際的な視点で研究を行う機会が得られます。入学当初から、理系・文系問わず、日本で権威のある機関に属するさまざまな分野の研究者と対話する機会を得ることができ、それらを通して視野を広げることができました。文化人類学の研究機関である国立民族学博物館は様々な地域や分野の研究者が集まっているため、多角的な視点から自分の研究分野に関する議論ができ、研究生活をすすめる上で必要な刺激を受けることができました。

さらに、国立民族学博物館には世界でも有数の文化人類学の図書室があり、世界中の新しいかつ貴重な資料が集められており、学生にとってはこの上なく恵まれた環境だといえます。

また、総研大の大きな特色として、学生の研究活動のバックアップ制度が充実していることがあげられます。たとえば、調査研究を実現し、その成果を出版物や国際会議で公表するための助成制度があり、それによって自分の研究成果をだすことができました。在学中は、そうした研究成果をベースに、それをさらに発展させるための調査の助成金を他機関から得ることができました。その過程で、教員からいただくきめ細やかなアドバイスは私にとって欠かせないものでした。

さらに、国立民族学博物館では、国際シンポジウム等、研究会の開催が多くあり、それらを身近に感じながら学生生活をおくるなかで、研究発表のノウハウだけでなく、それらの運営の仕方など、研究者として将来に役に立つスキルを学びました。



大東文化大学 国際関係学部 国際文化学科 講師　飯國 有佳子（2007年3月学位取得）

現在、大学や研究機関で教育研究職に就くことを考えた場合、博士号を取った上で、単著と複数の論文を持つことが、「最低条件」のようになっています。総研大の地域文化学専攻、比較文化学専攻が立ち上がった平成元年には、両専攻は日本で文化人類学関連の博士号を取得できる稀有な機関でしたが、今では多くの大学で博士号がとれるようになっています。ここから、学部、修士と慣れ親しんできた環境を離れ、わざわざ総研大に進学することを躊躇する方もいるかもしれません。

しかし、総研大には、慣れ親しんだ環境を離れて入るだけの価値があります。「海外学生派遣事業」は、長期調査から帰った後の補足調査や国際学会での研究成果発表を可能にしてくれますし、「総研大文化科学研究」という査読付きの学術雑誌もあります。また、「論文ゼミ」では世界各地でフィールド経験を積まれた多彩な専門分野の先生方複数から、多くの貴重なアドバイスをもらうこともできます。

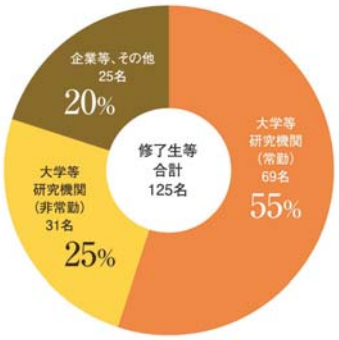
こうした研究サポート体制は他の大学にもあるかもしれませんが、総研大に入学すれば、日本最大の文化人類学の研究拠点である国立民族学博物館が有する資源を最大限に活用できるという、他にはないメリットがあります。文化人類学関連で国内最大規模の蔵書を誇る図書館も思う存分活用できますし、毎週のように開催される共同研究会にオブザーバー参加を願い出れば、自分の専門とは直接関わらない分野の知見を広げることもできるでしょう。私は総研大を出て、自分がいかに恵まれた研究環境にあったかを痛感しました。

文化人類学者を目指すなら、総研大の充実した研究サポート体制と、一流の人類学者が集う民博という最良のリソースを利用しない手はないと思います。



修了生等の進路

修了生等の進路（2017年7月）



大学等研究機関（常勤）勤務先一覧

愛知淑徳大学、インドネシア学術総局、愛媛大学、大阪大学、大阪府立柏原東高等学校、鹿児島純心女子大学、神奈川大学、関西外国語大学、川崎医療福祉大学、神田外語大学、京都外国語大学、京都大学、京都文教大学、神戸市外国語大学、神戸大学、神戸山手大学、国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館、滋賀県立近代美術館、滋賀県立大学、静岡大学、静岡文化芸術大学、四天王寺国際仏教大学、芝浦工業大学、上海師範大学（中国）、就実大学、女子栄養大学、成蹊大学、総合研究大学院大学、総合地球環境学研究所、ソウル大学、大東文化大学、中京大学、中部大学、筑波大学、帝京大学、東京外国語大学、東京工業大学、東北学院大学、東洋大学、常葉大学、長崎純心大学、奈良県立大学、南山大学、日越大学（ベトナム）、日本赤十字九州国際看護大学、日本大学、人間文化研究機構、阪南大学、広島市立大学、宮崎公立大学、桃山学院大学、山形大学、ライデン大学（オランダ）、立命館大学、龍谷大学

入学選考

■ 入学者選抜の基本的な考え方

第一次選抜（書類審査）では、修士論文または他の学術論文等について、独創性、研究史の把握、実証性、論理性の各項目に基づき評価します。また、研究内容（研究活動の概要、これまでに行った研究の要旨、これから志望する研究）については、計画の妥当性、計画の具体性、学問的意義、発展性の各項目に基づき評価します。

第二次選抜（面接審査）では、これまでに行った研究、修士論文等の内容、これから志望する研究に関する口頭試問を通し、討論能力、語学力、研究意欲等を評価します。

書類審査、面接審査の各項目を総合的に判断し、合否を判定します。

■ 求める学生像

【地域文化学専攻】

世界の多様な地域社会や地域文化について広い関心をもち、とりわけ文化人類学・民族学の基礎研究に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。

【比較文化学専攻】

人間の社会や文化について広い関心を抱き、とりわけ学問的な理論化やその社会的な応用に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。



■ 募集人数

専攻	課程の種類	講座（分野）	募集人員
地域文化学専攻	博士課程の後期3年の課程	アジア地域文化Ⅰ、アジア地域文化Ⅱ、ヨーロッパ地域文化、アフリカ地域文化、アメリカ地域文化、オセアニア地域文化	3人
比較文化学専攻		比較社会研究、比較宗教研究、比較技術研究、比較言語研究、比較芸術研究、文化資源研究	3人

■ 入学選考日程

出願資格認定審査 修士または専門職学位に相当する外国の学校等の学位をもたない場合、事前に出願資格認定審査を行います	2017年11月6日（月） ～2017年11月9日（木）
入学願書受付期間	2017年11月24日（金） ～2017年11月30日（木）
第一次選考書類選考・結果通知	2018年1月中旬
第一次選考面接試験	2018年1月22日（月） ※予備日1月23日（火）
合格発表	2月中旬
入学手続き	2018年3月5日（月） ～2018年3月9日（金）

▼出願書類および出願までの流れ等についてはこちら
http://www.minpaku.ac.jp/research/education/university/information/steps

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館（みんぱく）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。みんぱくは、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究や共同研究を進めるとともに、学術情報を集積しています。その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することも使命としています。

みんぱくは「博物館機能をそなえた研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。みんぱくの展示は、常設展示と特別展示と企画展示とで構成されており、常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示と企画展示は、特定のテーマのもとに、年に数回、期間を限って開催されます。



所蔵民族学資料（平成29年4月1日現在）

【標本資料】

海外資料	178,864点
国内資料	164,717点
計	343,581点

【映像音響資料】

映像資料	8,168点
音響資料	62,651点
計	70,819点

【文献図書資料】

日本語図書	270,944冊
外国語図書	399,113冊
計	670,057冊
日本語雑誌	10,114種
外国語雑誌	6,913種
計	17,027種



みんぱくアクセス



●大阪・万博記念公園内
●大阪モノレール…「万博記念公園駅」または「公園東口駅」下車徒歩約15分
●バス…阪急茨木市駅・JR茨木駅から「万博記念公園駅（エキスポシティ前）」「日本庭園前」下車徒歩約13分
●乗用車…万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分
「日本庭園前駐車場」を利用される方は、「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
※自然文化園（有料区域）を通行するには、同園入場料が必要です。
※東口からは、自然文化園（有料区域）を通行せずに来館できます。
※東口または日本庭園前駐車場から来館し、自然文化園（有料区域）を通行してお帰りの場合は、同園入場料が必要です。

［お問い合わせ］
国立民族学博物館 管理部研究協力課研究協力係（大学院担当）
〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電 話　06-6878-8236（大学院担当）
FAX　06-6878-8479
E-mail　souken@idc.minpaku.ac.jp
URL　http://www.minpaku.ac.jp/
http://www.minpaku.ac.jp/research/education/university

SOKENDAI
(The Graduate University for Advanced Studies)
School of Cultural and Social Studies
Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies

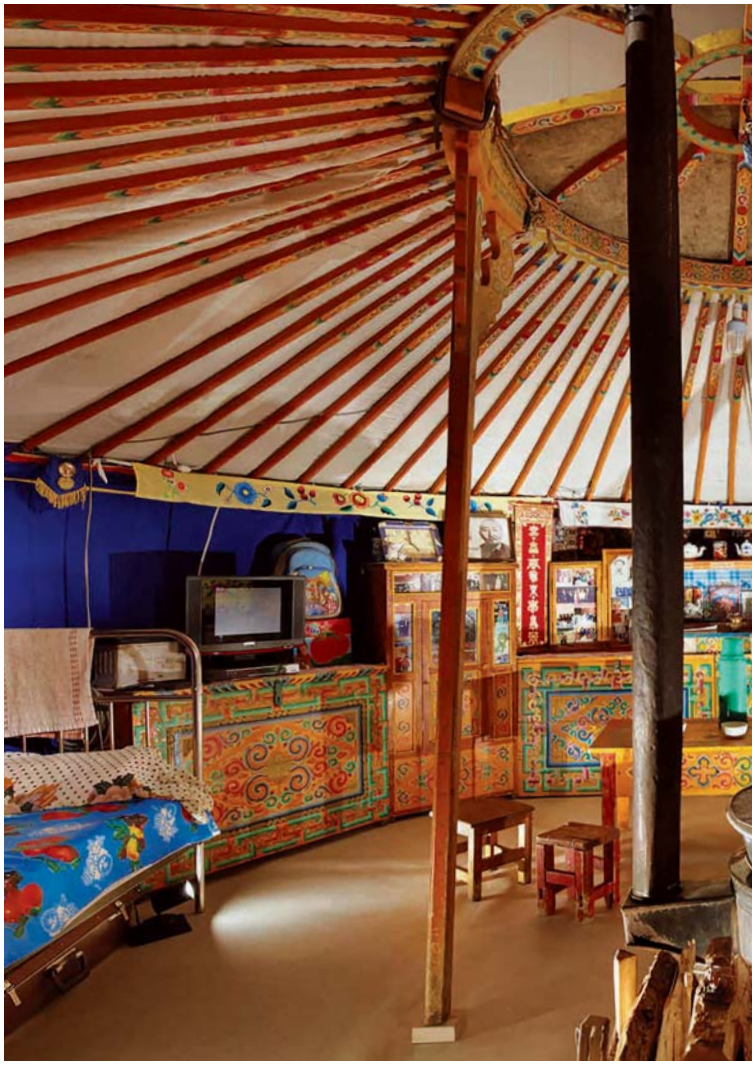
Overview '18

総合研究大学院大学
文化科学研究科

地域文化学専攻
比較文化学専攻

概要 '18





国立大学法人
総合研究大学院大学
THE GRADUATE UNIVERSITY FOR ADVANCED STUDIES

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology



国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館機能と博士課程の大学院教育機能を備えた文化人類学・民族学の研究センターとして、世界で唯一の存在です。みんぱくには、このほかにもいくつもの「世界一」の性格が備わっています。みんぱくは現在、世界各地から集めた34万5000点の民族学標本資料を収蔵していますが、このコレクションは、20世紀後半以降に築かれた民族学関係の資料としては世界最大の規模のものとなっています。また、民族学に特化した博物館としても、世界最大の博物館です。さらに世界全体をカヴァーするコレクション、展示、蔵書、そして研究部と研究者の陣容をもつ研究所としても、みんぱくはアジアで唯一の機関ということになります。みんぱくには、現在、51人の研究者、つまり、教授、准教授、助教がいますが、みんぱくの研究者は、日々、世界各地でフィールドワークに従事し、人類の営みの多様性と共通性を明らかにするとともに、その作業の中から、世界の未来の姿にむけての指針を示そうと力を注いでいます。

人類の文明は、今、数百年来の大きな転換点を迎えているように思います。これまでの、中心とされてきた側が周縁と規定されてきた側を一方的にまなざし、支配するという力関係が変質し、従来、それぞれ中心、周縁とされてきた人間集団の間に、創造的なものも破壊的なものも含めて、双方向的な接触と交流・交錯が至る所で起こるようになってきています。それだけに、異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の違いを超えてともに生きる世界の構築をめざす文化人類学の知が、これまでになく求められているように思われます。

みんぱくには、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置されています。この両専攻に所属する大学院生は、文化人類学をはじめ言語学、宗教学、生態学、先史学、芸術学、民族音楽学そして博物館学など、広範な研究領域を専門とする個性ゆたかな教授陣の指導を受けられるのみならず、上で述べた世界に冠たる資料の蓄積に身近に接することができます。みなさんが、これらの学術資源を縦横に使いこなし、新たな研究の領野を切り開いて、それぞれの分野のパイオニアとしてはばたいて行かれることを期待しています。

国立民族学博物館長　吉田 憲司

専攻の特長

充実した教授陣

学生数をうわまわる教授陣は、学生一人一人の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また両専攻の教員は各分野の第一線で活躍する研究者であるため、最新の研究動向に基づいた指導をおこなうことができます。

豊富な情報源

日本における文化人類学・民族学関連の最大の資料類が揃っています。

また、国立民族学博物館が主催する数多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通して、国内外の優秀な研究者との交流ができます。

各種の支援制度

リサーチ・アシスタント制度、インターンシップ制度、授業料免除制度、学会発表やフィールドワークの旅費の援助など、充実した研究支援が受けられます。

指導体制

個別指導と共同指導を組み合わせたユニークな指導体制を採用しています。学生には正副２名の指導教員が指名され、入学から学位取得まで、日常的な指導をおこないます。一方、ゼミにおいては共同指導体制を取り入れています。ゼミは各４名の教員が担当し、研究の内容だけでなく発表方法などに関する指導をおこないます。担当教員以外の教員にもゼミへの参加を求めることができます。

スケジュール

学生は１年次において１年生ゼミでの指導をもとにフィールドワーク（現地調査）の準備をおこない、２年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別指導や論文ゼミでの共同指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

教員紹介

専攻案内

地域文化学専攻

独創的な文化人類学・民族学を目指して

本専攻は、国立民族学博物館が基盤機関となり、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ及びオセアニアの諸地域に居住する人びとの文化と社会に関する教育研究を行っています。各々の地域の特性や歴史を考慮しながら、民族誌学的方法論に基づく文化と社会の記述、構造の解明、動態の把握を目指します。現地調査から得られたデータを分析し、理論化し、学術的な貢献と実践的な提言ができる人材を養成します。



齋藤　晃 専攻長

比較文化学専攻

比較研究を通じて文化の諸現象を解明

本専攻は、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術、文化資源という６つの研究分野から構成されています。諸民族文化の比較研究により、各々に通底する普遍性の発見と理論的解明を目指します。基盤機関である国立民族学博物館の標本資料や映像音響資料、文献図書資料等を教育と研究に活かせることは本専攻の強みです。従来の文化人類学的研究方法に加えて、隣接諸科学の成果を導入し、新しい研究分野の開発を積極的に進めることができる人材を養成します。



宇田川 妙子 専攻長

地域文化学専攻（2018年度）

相島 葉月 准教授
- ❶ 社会人類学・イスラーム学・中東研究
- ❷現代エジプトにおける美と身体文化に関する社会人類学的研究
  日本と中東に関する文化的知識のグローバルな流通について
- ❸モダニティ、都市中流層、マスメディア、教育、現代イスラーム思想、消費、様式美、独創性、知的伝統

伊藤 敦規 准教授
- ❶ アメリカ先住民研究・博物館人類学・知的財産問題の人類学的研究
- ❷日本国内博物館等所蔵アメリカ先住民資料の協働管理に向けた調査研究
- ❸米国先住民、博物館人類学

河合 洋尚 准教授
- ❶ 社会人類学・漢族研究
- ❷空間、景観、フードスケープをめぐる人類学的研究
  中国漢族地域における都市景観開発と文化遺産保護の研究
  環太平洋の客家に関するマルチサイト民族誌
- ❸景観、風水、都市、コミュニティ、漢族、客家

小長谷　有紀 教授
- ❶ 文化人類学・モンゴル研究・牧畜研究
- ❷モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築
- ❸学術探検、宣教師、アーカイブズ、写真、オープンサイエンス

齋藤 玲子 准教授
- ❶ アイヌ・北方先住民文化研究
- ❷アイヌの工芸の変遷
- ❸アイヌ、北方先住民族、北海道、北アメリカ、物質文化、観光

新免 光比呂 准教授
- ❶ 宗教学・東欧研究
- ❷ファシズム運動における宗教的要因の比較研究
- ❸ルーマニア、ファシズム、レジオナール、キリスト教

池谷 和信 教授
- ❶ 環境人類学・人文地理学・アフリカ研究・地球学
- ❷熱帯の狩猟採集文化、家畜飼育文化の変容に関する比較研究
  南部アフリカにおける先住民運動に関する研究
  地球環境史の構築に関する研究
- ❸地球環境、狩猟採集民、アフリカ、東北アジア、サン（ブッシュマン）、ソマリ、チュクチ、日本、バングラデシュ、環境人類学、人文地理学

樫永 真佐夫 教授
- ❶ 東南アジア文化人類学
- ❷東南アジアの伝統的政治社会組織に関する歴史的研究
  物資文化に焦点を当てた黒タイの民族誌的研究
  ベトナムにおける国家と民族の関係に関する研究
- ❸東南アジア大陸部、ベトナム、黒タイ、白タイ、タイ系言語集団、社会人類学

川瀬　慈 准教授
- ❶ 映像人類学・民族誌映画
- ❷エチオピアの音楽職能集団の人類学的研究
  民族誌映画制作の理論と実践に関する研究
  アフリカの無形文化の保護と継承に資する映像人類学研究
  人類学研究にもとづく創作的な話法の探求
- ❸映像人類学、民族誌映画、エチオピア、音楽職能、Ethio-Jazz、エスノフィクション

齋藤　晃 教授
- ❶ 歴史人類学・ラテンアメリカ研究
- ❷植民地期アンデスにおける先住民の総集住化に関する国際共同研究
  近世カトリックの世界宣教と文化適応に関する共同研究
- ❸ラテンアメリカ、植民地時代、先住民族、文化人類学、エスノヒストリー

佐藤 浩司 准教授（2019年３月退任予定）
- ❶ 民族建築学
- ❷東南アジア・オセアニアの居住様式に関する比較研究
- ❸東南アジア、オセアニア

西尾 哲夫 教授
- ❶ 認識言語学・アラブ研究
- ❷日本におけるアラビアンナイトの受容と文学的オリエンタリズムの発生と展開
- ❸中東、北アフリカ、アラビアンナイト

❶専門分野
❷現在の研究課題
❸研究のキーワード

比較文化学専攻（2018年度）

丹羽 典生 准教授
- ❶ 社会人類学・オセアニア地域研究
- ❷オセアニアにおける紛争と少数民族に関する研究
  応援に関する通文化比較
- ❸宗教運動、紛争、開発、少数民族、応援

信田 敏宏 教授
- ❶ 社会人類学・東南アジア研究
- ❷東南アジアの文化に関する人類学的研究
  インクルーシブ社会に関する人類学的研究
- ❸東南アジア、マレーシア、オラン・アスリ、日本、博物館、知的障害者

平井 京之介 教授
- ❶ 社会人類学・日本研究・東南アジア研究
- ❷水俣病被害者支援運動の人類学的研究
  「負の遺産」の生成に関する博物館人類学的研究
  タイのコミュニティ博物館についての人類学的研究
- ❸日本、タイ、ラオス、経済人類学、社会運動、博物館、上座部仏教、水俣病

三尾　稔 教授
- ❶ 文化人類学・南アジア研究
- ❷南アジアにおける多様な宗教伝統の共生に関する研究
  インドのナショナリズムと宗教の関係に関する研究
  インドの大衆消費社会化と祭礼の変容に関する研究
- ❸ラージャスターン州メーワール地方（インド）、グジャラート州（インド）、ヒンドゥー、ムスリム、文化人類学、宗教人類学、南アジア地域研究

南　真木人 准教授
- ❶ 南アジア民族誌研究・文化人類学
- ❷ネパール地震後の社会再編に関する研究
  ネパール社会の30年間の変化に関する研究―1982年撮影番組の再資源化
- ❸ネパール地震、災害民族誌、包摂、社会再編、映像人類学、当事者コミュニティ、研究資源の共有化、ガンダルバ（楽師カースト）

山中 由里子 准教授
- ❶ 比較文学比較文化
- ❷中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究
  驚異と怪異の比較研究
  アレクサンドロス伝承の東西伝播
- ❸西アジア、アラブ文学、ペルシア文学、博物学、驚異、イラン、東西交渉史

野林 厚志 教授
- ❶ 人類学・民族考古学・台湾研究
- ❷動植物資源の多元的価値の探究
  台湾におけるエスニシティの動態の探究
- ❸生業文化、物質文化、台湾原住民族、平埔族、エスニシティ、文化資源、工芸

林　勲男 教授（2022年３月退任予定）
- ❶ 社会人類学・オセアニア研究
- ❷自然災害への対応に関する人類学的研究
  オセアニアにおけるキリスト教宣教師の活動に関する研究
- ❸災害、復興、記憶、宣教師、博物学誌、民族誌コレクション、オセアニア

藤本 透子 准教授
- ❶ 文化人類学・中央アジア地域研究
- ❷中央アジアにおけるイスラーム実践
  カザフの移動と社会再編
- ❸中央アジア、カザフスタン、ムスリム、社会再編、宗教実践、移動

三島 禎子 准教授
- ❶ 文化人類学・西アフリカ研究
- ❷国際移動に関する文化人類学的研究
- ❸西アフリカ、セネガル、ソニンケ、商業民族、民族ネットワーク

森　明子 教授
- ❶ 文化人類学・民族誌研究・ヨーロッパ研究
- ❷人類学の記述とその社会的文脈
  人類学的比較の再考
- ❸都市、家族、国家、場所、社会的なもの

上羽 陽子 准教授
- ❶ 民族芸術学・染織研究・手工芸研究
- ❷現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究
- ❸民族芸術学、手工芸文化、染織研究、インド、伝統的技術

卯田 宗平 准教授
- ❶ 環境民俗学・東アジア研究
- ❷動物と人間とのかかわりをめぐる民俗学的研究
- ❸自然と人間、動物利用、リバランス論、鵜飼文化、トナカイ飼養、物質文化、技術と技能

太田 心平 准教授
- ❶ 社会文化人類学・北東アジア研究・博物館組織行動論
- ❷韓国・朝鮮社会における文化の統合性と多様性の研究
- ❸韓国・朝鮮、近代性、社会的記憶、物語論、世代集団、知識生成、博物館

菊澤 律子 准教授
- ❶ 言語学・オーストロネシア諸語
- ❷オーストロネシア諸語における統語構造の変遷
  言語データを軸としたオセアニアの先史に関する学際研究
  手話言語と音声言語の対照研究
- ❸オセアニア、フィジー、オーストロネシア、記述言語学、比較（歴史）言語学、比較（歴史）統語論、先史言語学、手話言語学

菅瀬 晶子 准教授
- ❶ 文化人類学・中東地域研究
- ❷パレスチナ・イスラエルを中心とした東地中海アラブ地域で、一神教徒が共有する聖者崇敬の研究
  イスラエルにおけるアラブ人市民を中心とした、マイノリティによる文化表象のありかた
- ❸中東、東地中海、パレスチナ、イスラエル、キリスト教徒、マイノリティ、アイデンティティ、エスニシティ、文化表象、共存

鈴木　紀 准教授
- ❶ 開発人類学・ラテンアメリカ文化論
- ❷開発援助プロジェクトの人類学的評価法
  博物館における先住民族文化表象
- ❸ラテンアメリカ、メキシコ、ユカタン、開発援助、フェアトレード、博物館展示学

笹原 亮二 教授
- ❶ 民俗学・民俗芸能研究
- ❷モノの遺存の総体的把握を通じた生活文化に関する民俗学的研究
- ❸日本、民俗学、三匹獅子舞、民俗芸能

鈴木 七美 教授
- ❶ 歴史人類学・医療人類学・エイジング研究
- ❷キルトドキュメンテーション活動―アーミッシュ・キルトから考える米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開
- ❸エイジ・フレンドリー・コミュニティ、ライフロング・ラーニング、米国宗教コミュニティ、アーミッシュ・キルト

關　雄二 教授（2022年３月退任予定）
- ❶ アンデス考古学・ラテンアメリカ研究
- ❷古代アンデス文明における権力の発生に関する研究
  ペルーにおける世界文化遺産概念と国家・地域の文化遺産概念との相互作用に関する研究
- ❸ペルー、ラテンアメリカ、メスティソ、アンデス考古学、文化人類学

❶専門分野
❷現在の研究課題
❸研究のキーワード

園田 直子 教授
❶保存科学
❷博物館における持続可能な資料管理に関する研究
資料の展示・保存環境に関する研究
収蔵庫の再編成に関する研究
❸保存科学、総合的有害生物管理（IPM）、博物館環境

出口 正之 教授（2021年３月退任予定）
❶非営利組織の政策人類学的研究
❷公益法人その他の組織とフィランソロピーの政策人類学的研究
❸フィランソロピー、メセナ、非営利組織、NPO、公益法人、公益認定制度、ボランティア、言政学、政策人類学

寺田 吉孝 教授（2020年３月退任予定）
❶民族音楽学・インド研究
❷マイノリティと音楽
グローバル化と南インド古典音楽の変容
❸インド（タミル）、フィリピン（マラナオ、マギンダナオ）、アジア系アメリカ、民族音楽学

寺村 裕史 准教授
❶情報考古学・文化情報学
❷情報考古学的手法を用いた文化資料のデジタル化と情報統合に関する研究
❸GIS（地理情報システム）、考古学、情報科学

日髙 真吾 准教授
❶保存科学・保存修復
❷地域文化の保存と活用に関する研究
博物館における保存処理法の研究
❸日本、保存科学、保存処理

廣瀬 浩二郎 准教授
❶日本宗教史・民俗学
❷障害者文化に関する人類学的研究
日本近代の新宗教に関する歴史的研究
❸日本、東北、九州、京都、歴史、宗教、福祉、文化

福岡 正太 准教授
❶民族音楽学・東南アジア研究
❷インドネシアの初期ラジオ放送における伝統音楽
薩南諸島における伝統芸能の伝承と映像記録
❸スンダ音楽、西ジャワ、インドネシア、東南アジア、日本、民族音楽学、映像音響メディア

ピーター J.マシウス 教授
❶先史学・民族植物学
❷History of agriculture and plant domestication, with specific interests in taro (Colocasia esculenta), paper mulberry (Broussonetia papyrifera), and other plants used for food, fodder and fibre
❸Asia, Pacific, Mediterranean, ethnobotany, ethnobiology, plant domestication, food history

松尾 瑞穂 准教授
❶文化人類学・ジェンダー医療人類学・南アジア研究
❷近代化、開発がもたらすリプロダクション実践の変容に関する研究
サブスタンスと身体研究
子育ての比較文化論
❸リプロダクション（性と生殖）、ジェンダー、インド、サブスタンス、身体

丸川 雄三 准教授
❶文化財情報発信・連想情報学
❷連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究
❸文化財、連想検索、デジタルアーカイブ

吉田 憲司 教授（国立民族学博物館長）
❶博物館人類学・アフリカ研究
❷アフリカにおける造形と儀礼の人類学的研究
博物館・美術館における文化の表象のあり方の研究
❸アフリカ、ヨーロッパ、日本

博士後期課程（Ph.D.）

課程修了の要件、学位取得までの流れ

■ 学位取得の要件

学位を取得するためには、所定の３年限以上在学し、必要な研究指導を受けた上で、所定の単位数以上を修得し、博士論文の審査及び試験に合格すること（課程博士）が必要です。

■ 学位取得までの流れ

１年次	１年生ゼミ出席
	現地調査準備
	調査計画書提出
２年次前期以降	現地調査
	調査報告、博士論文構想発表
３年次	必須履修単位取得
	博士論文草稿発表
３年次後期以降	課程博士出願
	論文公開発表会・口述試験
	最終試験・合否決定
	学位授与



研究支援

■ リサーチ・アシスタント（RA）制度

教員の指示・監督の下で、研究者の補助として、研究活動に必要な様々な業務をおこないながら給与を得ることができます。

■ 学生派遣事業

学位申請論文作成に不可欠な国内外の調査や学会での成果発表に要する旅費、宿泊費などの支援をおこないます。

■ インターンシップ制度

深い専門性と広い視野、国際通用性をそなえた研究者の育成を目的として、国内外の大学、研究機関、企業等における共同研究活動や調査活動等に必要な経費を支援する制度です。

■ 入学料・授業料免除等制度

経済的理由により入学料や授業料の納入が困難な学生に対する経済的支援として、入学料・授業料の免除（収納猶予・分納）の制度があります。授業料免除については、毎年２回、授業料免除申請の受付をおこなっています。授業料免除許可者は、半期の授業料の半額（267,900円）が免除されます。

■ 特別講義

外部研究資金調達のための申請書の書き方、論文投稿のしかたなどをテーマにした特別講義をおこなっています。

■ 日本学術振興会「特別研究員（DC２）」採用数

年　度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
採用数	3	3	4	2	1	2	2	2	2	4	0

在学生の声

地域文化学専攻

松岡とも子

私が研究対象としているのは、韓国の近現代絵画です。修士課程、美術館学芸員として働いた中では美術史分野でのみ学んできたため、画家を取り巻く文化や社会をより深く掘り下げ論じる力をつけたいと考え、2015年度より入学しました。

美術作品を扱う学生、先生方は僅かです。私にとって文化人類学の下にある日々のゼミや研究会そのものが“異文化”体験であり、調査対象とも言えます。ここで共有される新たな視野や視点に感心し自分のテーマに活かせないかと考えたり、ときに感じる違和感については何がどう食い違っているのか、美術史や美術史学という自分の立ち位置を客観視し、画家の人生を新たな目で見直しています。

特に国立民族学博物館の在学環境は、様々な国と地域、年齢層の学生仲間が集っており、少人数の学生指導となっています。学振特別研究員の助成金をもとに多くの調査に出かけられたことや、学内のリサーチアシスタントとしてこれまで知り得なかった地域の所蔵資料を調べたことも、大きな刺激となりました。また総研大本部で開かれた英語プレゼンテーション研修では、理系・文系の様々な分野の方々と交流しました。英語という手段のもとで、不慣れながら発表の基本をより普遍的なかたちで学ぶことができました。

育児の中で学生生活を再開したため、いわゆる昼夜を問わぬ大学院生の日々を送るには制限が多いのですが、学生の個別性に適う環境は得難いものと感じています。これまで関わってくださった全ての先生方、いつも温かい院生の皆さんとみんばくスタッフの方々には深く感謝しています。



ナショナルトラスト文化遺産基金・市民文化遺産1号・崔淳雨旧宅（韓国・ソウル）

比較文化学専攻

笠井 みぎわ

私が文化人類学という学問に出会ったのは、社会人として働いていた時でした。以前から手工芸に興味があり、手工芸に関するイベントや展覧会があると足を運んでいましたが、その当時は学問として勉強する、あるいは勉強できるという発想も持っていませんでした。しかし、就職し働き始めてから、やはりどうしても手工芸というモノが現在の社会の中でどのような存在意義があるのかについて考えてみたくなり、全く未知の分野だった学問の世界に足を踏み入れることにしました。

私の場合は、文化人類学に関する基礎知識を全く持ち合わせていなかったため、まず他大学の修士課程の２年間で専門分野に関する基礎固めをしながら、みんぱくを受験する準備をしました。みんぱくを受験するきっかけは、修士課程時の指導教官から文化人類学を勉強するならば、国立民族学博物館にある総合研究大学院大学が最適な環境であると勧められたからです。その理由は、専門的な知識を持った研究者が数多く在籍しているということと、国際的なシンポジウムが年に何回も開催されているため、海外の研究者の研究を聞く機会が大変多いからというものでした。

入学後は、博士論文執筆に際して必修のゼミの授業があります。その授業に参加し、他の院生や先生方の前で何度か発表することによって、自身のテーマをより深く掘り下げたり、自分とは異なる意見を聞き、新たな知見を得る機会にも恵まれます。博士論文を執筆することは大変孤独な作業になるので、多くの仲間に囲まれながら自分の研究を進めていくことは、大きな励みになります。この恵まれた環境を活かして、残りの博士課程の時間を有意義に過ごしながら博士論文を執筆したいと思っています。



イタリア中部の町アッシジで継承されているアッシジ刺繍

学位論文リスト

学位論文リスト

2006年度以降

【課程博士】		
中国青海省におけるチベット仏教復興運動下の民間信仰の変容に関する人類学的研究 —同仁県ウォッコル村を事例として—	衞旦　加布（地域）	[2018.3.23 文学]
近代フィリピンにおける民族衣装をまとった聖母像の研究	古沢ゆりあ（比較）	[2017.9.28 文学]
自然資源の利用に関する環境人類学的研究 —ニカラグアの先住民による商業的ウミガメ漁の事例—	高木　仁（地域）	[2017.3.24 文学]
スナックにおける言語コミュニケーション研究 —対人関係を調節する接客言語ストラテジー—	中田　梓音（比較）	[2016.9.28 文学]
日本社会の自然葬に関する民族誌的研究 —NPO法人「葬送の自由をすすめる会」を中心に—	金セッビョル（地域）	[2016.3.24 文学]
都市回族コミュニティの維持と宗教実践 —中国陝西省西安市における回族の帰属意識をめぐる民族誌的研究—	今中　崇文（地域）	[2016.3.24 文学]
韓国の地域社会における華僑のアイデンティティに関する民族誌的研究 —韓国華僑ビジネスと華僑協会を中心に—	金　桂淵（地域）	[2015.9.28 文学]
「野球移民」を生みだす人びと —ドミニカ共和国におけるトランスナショナル移民研究—	窪田　暁（比較）	[2015.3.24 文学]
モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる交渉に関する民族誌	堀田あゆみ（地域）	[2015.3.24 学術]
中国雲南省における徳宏タイ族の即興うたと感性の民族誌的研究	伊藤　悟（地域）	[2014.9.29 文学]
My Huaca: The Use of Archaeological Heritage in Modern Peru from a Public-Archaeology Perspective	サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ（比較）	[2014.9.29 文学]
ナイジェリアの都市イレ・イフェにおける「アーティスト」の民族誌的研究	緒方しらべ（比較）	[2014.3.20 文学]
変化しつづける装い —中国雲南省文山モンの自己と他者をめぐる人類学的服飾研究—	宮脇　千絵（地域）	[2012.9.28 文学]
現代アンデス農村における聖人信仰の変容 —人の移動に焦点をあてて—	八木百合子（比較）	[2012.9.28 文学]
無文字社会における歴史記憶の生成と継承 —南エチオピア牧畜民ボラナにおける口承史の分析をとおして—	大場　千景（地域）	[2012.3.23 文学]
カオダイ教ハノイ聖室の民族誌的研究 —ベトナム北部地域の都市における女性たちの社会関係—	伊藤まり子（地域）	[2012.3.23 文学]
周辺イスラームのダイナミズム —タイ南部村落におけるイスラーム復興運動と宗教実践の変容—	小河　久志（地域）	[2012.3.23 文学]
ヨーグルトをめぐる言説の生成と展開 —社会主義期からポスト社会主義期にかけてのブルガリアを中心に—	マリア・ヨトヴァ（比較）	[2011.9.30 文学]
オーストラリア先住民ヨルタ・ヨルタの環境管理のための先住民運動に関する文化人類学的研究	友永　雄吾（地域）	[2011.3.24 文学]
現代タイ社会における開発と僧侶 —僧侶による社会貢献とネットワーク形成に焦点をあてて—	岡部真由美（地域）	[2011.3.24 文学]
現代東南中国における宗親会の民族誌的研究 —国家との関係を中心として—	陳　夏晗（比較）	[2011.3.24 文学]
農業技術改善の民俗誌 —紀ノ川下流域村落の一七〜二〇世紀前半における動向の分析—	加藤　幸治（比較）	[2010.9.30 文学]
日本の先史時代における植物性食料の加工と利用 —残存デンプン分析法の理論と応用—	渋谷　綾子（比較）	[2010.3.24 文学]
韓国における老人の食 —老人福祉施設を中心に—	守屋亜記子（地域）	[2009.3.24 文学]
インド農村社会における不妊経験の人類学的研究	松尾　瑞穂（比較）	[2008.9.30 文学]
フェライン的民族誌 —ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション—	山田　香織（地域）	[2008.3.19 文学]
水上人と呼ばれる人々 —広東珠江デルタの漢族エスニシティとその変容—	長沼さやか（地域）	[2008.3.19 文学]
在米コリアンのサンフランシスコ日本町 —マルチカルチャーのエスニックタウン—	小谷　幸子（比較）	[2008.3.19 文学]
参加型開発を通した女性の自己変容過程に関する人類学的研究 —北インド農村社会を事例として—	菅野美佐子（比較）	[2007.9.28 文学]
「場」と「パフォーマンス」に関する人類学的研究 —トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として—	米山　知子（比較）	[2007.9.28 文学]
上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的研究	飯國有佳子（地域）	[2007.3.23 文学]
「護り」の身体技法に関する映像人類学研究 —インドネシア・ミナンカバウの事例から—	村尾　静二（比較）	[2007.3.23 文学]
離散と故郷 —ヨルダンのパレスチナ系住民にみられる帰属意識とナショナリズム—	錦田　愛子（地域）	[2007.3.23 文学]
「子ども域」の文化人類学的研究 —バングラデシュ農村社会の子ども—	南出　和余（比較）	[2007.3.23 文学]

【論文博士】		
グローバル化する互酬性 —サモア世界の儀礼財の循環と首長制—	山本　真鳥	[2017.3.24 文学]
ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成 —東北地方のヌン・アン集団の事例から—	チュ・スワン・ザオ	[2015.9.28 文学]
アイヌ衣文化の研究	津田　命子	[2014.9.29 文学]
先住民生存捕鯨再考 —国際捕鯨委員会における議論とベクウェイ島の事例を中心に—	濱口　尚	[2013.9.27 文学]
多文化都市・新宿の生成と展開 —ライフサイクルの視座—	川村千鶴子	[2013.3.22 学術]
先史アンデス形成期の社会動態 —ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から—	山本　睦	[2012.9.28 文学]
小集落から見た初期国家の形成過程 —先スペイン期中央アンデスのワリ国家を事例として—	土井　正樹	[2012.3.23 文学]
スリランカにおけるエステート・タミルのアイデンティティと「ジャーティヤ」をめぐる人類学的研究	鈴木　晋介	[2011.3.24 文学]
活用される職祖伝承 —近・現代日本における木工挽物の担い手と木地屋「視元地」—	木村　裕樹	[2010.9.30 文学]
先住民学習の理論と実践—ポストコロニアル人類学の活用—	中山　京子	[2010.9.30 学術]
シャーマニズムによるエスニシティの探求 —ポスト社会主義期におけるモンゴル・ブリヤートの事例を中心として	島村　一平	[2010.3.24 文学]
国際線客室乗務員の接客業務と勤務体制 —仕事の人類学的研究—	八巻　恵子	[2009.9.30 文学]
「アイヌ風俗画」の研究 —近世北海道におけるアイヌと美術	新明　英仁	[2007.9.28 文学]

年度別学位授与者数

		'91〜'06年	'07年	'08年	'09年	'10年	'11年	'12年	'13年	'14年	'15年	'16年	'17年	計
地域文化学専攻	課程博士	23	2	1	0	2	3	1	0	2	3	1	1	39
	論文博士	12	1	0	1	0	0	1	0	1	1	1	0	18
比較文化学専攻	課程博士	15	3	1	1	2	1	1	1	2	0	1	1	29
	論文博士	7	0	0	1	3	1	1	1	0	0	0	0	14
計		57	6	2	3	7	5	4	2	5	4	3	2	100

よくある質問

Q 学部をもつ大学院の教育と比べてどんな特徴がありますか？

A 教員数が学生数をうわまわるという、他大学にはない恵まれた教育環境があげられます。教員：学生の比率はおおよそ３：２であり、個々の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また教員は各分野の第一線で活躍する研究者であり、最新の研究動向に基づいた指導をおこなえます。さらに、民博が所蔵する豊富な研究資料（図書67万冊、標本資料34万点、映像音響資料７万点など）の利用、館が主催する多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通し、国内外の研究者との交流ができます。

Q 地域文化学専攻と比較文化学専攻の二専攻には、どのような違いがありますか？

A 地域と比較に別れているものの、共にフィールドワークを研究の根幹においているため、共通する部分も多く、密接な相互交流があります。また、専攻間に指導上の棲み分けはなく、院生がどちらに所属していても、両専攻の教員の指導を受けることができます。

Q 二専攻で学ぶことができるのは、文化人類学・民族学だけでしょうか？

A そんなことはありません。両専攻には、考古学、民俗学、宗教学、芸術学、言語学、音楽学、博物館学、保存科学など幅広い分野を専門とする教員がそろっていますから、それらの分野でも研究をおこなうことができます。また、教員の陣容は年度によって変化することがありますから、希望研究内容と当該専攻の教育体制との整合性について不明な点がある方は、前もってご相談ください。

Q 受験する前に希望する指導教員をかならず決めておく必要がありますか？

A 必要条件ではありませんが、強くお勧めします。また、受験を申請する前に希望指導教員に連絡を取れば、入学後の研究の見通しを立てる一助となるでしょう。

Q 学部や修士課程で文化人類学・民族学を専攻しなかったのですが、受験はできますか？

A 正規に文化人類学・民族学を学んだ経験がなくても受験はできます。しかし、入学後に志望研究が遂行可能であるか見通しをつけるためにも、関連図書などを精読し、少なくとも人類学やフィールドワークに関する基本的な考え方について理解しておくほうがよいでしょう。これは、何をするために当専攻を受験するのか整理するためにも役立つはずです。

Q できるだけ早く学位を取得したいのですが、3年で取得するのは難しいでしょうか？

A フィールドワークを研究の中心に据えている分野であるため、3年間で学位を取得するのは容易ではありません。早い取得が望ましいことは言うまでもありませんが、学問の進展に寄与できる質の高い研究成果を上げ、最終学位である博士号に相応しい研究能力を養うことがより重要であり、この点に留意した指導がおこなわれています。

Q 修士課程ですでに現地調査をはじめているのですが、入学後すぐに長期の現地調査をすることは可能ですか？

A 原則として、初年度は、長期フィールドワークをおこなうための準備期間にあてられています。フィールドワークは、単に現地に行けば遂行できるものではありません。また、修士課程でフィールドワークをすでにおこなっている場合でも、博士論文執筆のための調査では、求められる調査の質に大きな差があることが多いのです。入学後の一年間は、教員の指導のもと、調査計画の実現性・妥当性などについて、それまでの自己の研究成果や先行研究との関連に留意しながら検討します。年度末には、フィールドワークに向けたリサーチプロポーザルに関する発表をおこない、計画をより実現性の高いものへと練っていきます。

▼その他の質問はこちら
http://www.minpaku.ac.jp/research/education/university/information/faq

修了生の声

立命館大学 言語教育センター スペイン語 講師　サウセド ダニエル ダンテ（2014年9月学位取得）

2008年4月に私はペルーからの留学生として、総研大の比較文化学専攻博士課程に入学しました。私の研究課題は、考古遺跡周辺に住む人々の視点に着目しながら、発展途上国（特にペルー、南米）における考古遺産を保護するための新しい方法を見つけることです。

総研大生になると、学際的な視点で研究を行う機会が得られます。入学当初から、理系・文系問わず、日本で権威のある機関に属するさまざまな分野の研究者と対話する機会を得ることができ、それらを通して視野を広げることができました。文化人類学の研究機関である国立民族学博物館は様々な地域や分野の研究者が集まっているため、多角的な視点から自分の研究分野に関する議論ができ、研究生活をすすめる上で必要な刺激を受けることができました。

さらに、国立民族学博物館には世界でも有数の文化人類学の図書室があり、世界中の新しいかつ貴重な資料が集められており、学生にとってはこの上なく恵まれた環境だといえます。

また、総研大の大きな特色として、学生の研究活動のバックアップ制度が充実していることがあげられます。たとえば、調査研究を実現し、その成果を出版物や国際会議で公表するための助成制度があり、それによって自分の研究成果をだすことができました。在学中は、そうした研究成果をベースに、それをさらに発展させるための調査の助成金を他機関から得ることができました。その過程で、教員からいただくきめ細やかなアドバイスは私にとって欠かせないものでした。

さらに、国立民族学博物館では、国際シンポジウム等、研究会の開催が多くあり、それらを身近に感じながら学生生活をおくるなかで、研究発表のノウハウだけでなく、それらの運営の仕方など、研究者として将来に役に立つスキルを学びました。



滋賀県立近代美術館　学芸員　古沢ゆりあ（2017年9月学位取得）

近年、人文学においては隣接分野の研究動向にも目を配った学際的で横断領域的な研究の重要性がいわれます。私は、学部から修士課程まで美術史・芸術学の分野で学んできましたが、隣接する領域を含めてより広い視野から造形文化を論じるためには、美術史学の枠組みにとどまらず文化人類学的な観点や方法を取り入れることが有効であると考え、総合研究大学院大学の比較文化学専攻に入学しました。美術と関連して博物館学にも関心があったため、国立民族学博物館（民博）という基盤機関は魅力的でした。

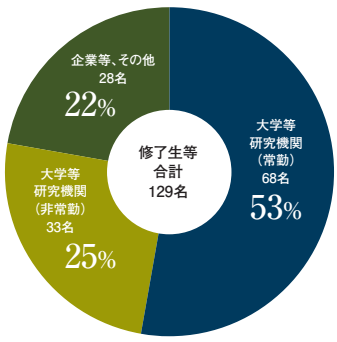
私にとってここで学ぶ利点は、まず、博物館がある研究機関であることでした。民博に所蔵される膨大な標本資料のなかで参照したいものがあれば、展示場に展示中のものだけでなく、申請すれば収蔵庫の中の資料も閲覧できます。図書館の蔵書も充実しています。さらに、展覧会やイベントなど博物館の活動や先生方の実践を通してどのように研究成果が社会還元されているのかを目の当たりにして学ぶことができます。例えば、大学院生も特別展の準備などをお手伝いさせていただく機会もあり、私は、2012年の「世界の織機と織物」展と、2014年の「イメージの力」展の準備に関わらせていただきました。また、様々なテーマで頻繁に開催される研究者同士の研究会や一般向けの講演会にも参加でき、文化人類学やその隣接分野での研究動向や最新の情報が常に耳に入って来る環境です。

民博という場所柄、当然、先生方や学生には民族学・文化人類学を専門とする人が多いですが、それだけでなく博物館学、言語学、考古学など文化や歴史に関する様々な研究が行なわれています。総研大は、多様な背景をもつ人たちと議論するなかで研究を深めることができる刺激に満ちた環境といえます。



修了生等の進路

修了生等の進路（2018年5月）



大学等研究機関（常勤）勤務先

愛知淑徳大学、インドネシア学術総局、愛媛大学、大阪大学、鹿児島純心女子大学、神奈川大学、関西外国語大学、川崎医療福祉大学、神田外語大学、京都外国語大学、京都大学、京都文教大学、神戸市外国語大学、神戸大学、神戸山手大学、国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館、滋賀県立近代美術館、滋賀県立大学、静岡大学、静岡文化芸術大学、四天王寺国際仏教大学、芝浦工業大学、上海師範大学（中国）、就実大学、女子栄養大学、成蹊大学、総合研究大学院大学、総合地球環境学研究所、ソウル大学、大東文化大学、中京大学、中部大学、筑波大学、帝京大学、東京外国語大学、東京工業大学、東北学院大学、東洋大学、常葉大学、長崎純心大学、奈良県立大学、南山大学、日越大学（ベトナム）、日本赤十字九州国際看護大学、日本大学、人間文化研究機構、阪南大学、広島市立大学、宮崎公立大学、桃山学院大学、山形大学、ライデン大学（オランダ）、立命館大学、龍谷大学

入学選考

■ 入学者選抜の基本的な考え方

第一次選抜（書類審査）では、修士論文または他の学術論文等について、独創性、研究史の把握、実証性、論理性の各項目に基づき評価します。また、研究内容（研究活動の概要、これまでに行った研究の要旨、これから志望する研究）については、計画の妥当性、計画の具体性、学問的意義、発展性の各項目に基づき評価します。

第二次選抜（面接審査）では、これまでに行った研究、修士論文等の内容、これから志望する研究に関する口頭試問を通し、討論能力、語学力、研究意欲等を評価します。

書類審査、面接審査の各項目を総合的に判断し、合否を判定します。

■ 求める学生像

【地域文化学専攻】

世界の多様な地域社会や地域文化について広い関心をもち、とりわけ文化人類学・民族学の基礎研究に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。

【比較文化学専攻】

人間の社会や文化について広い関心を抱き、とりわけ学問的な理論化やその社会的な応用に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。



■ 募集人数

専攻	課程の種類	講座（分野）	募集人員
地域文化学専攻	博士課程の後期3年の課程	アジア地域文化Ⅰ、アジア地域文化Ⅱ、ヨーロッパ地域文化、アフリカ地域文化、アメリカ地域文化、オセアニア地域文化	3人
比較文化学専攻		比較社会研究、比較宗教研究、比較技術研究、比較言語研究、比較芸術研究、文化資源研究	3人

■ 入学者選抜日程

出願資格認定審査 修士または専門職学位に相当する学力のある方は、事前に出願資格認定審査を行います	2018年11月5日（月） ～2018年11月8日（木）
入学願書受付期間	2018年11月22日（木） ～2018年11月29日（木）
第一次選抜（書類選考）・結果通知	2019年1月中旬
第二次選抜（面接審査）	2019年1月28日（月） ※予備日1月29日（火）
合格発表	2月中旬
入学手続き	2019年3月11日（月） ～2019年3月15日（金）

▼出願書類および出願までの流れ等についてはこちら
http://www.minpaku.ac.jp/research/education/university/information/steps

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館（みんぱく）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。みんぱくは、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究や共同研究を進めるとともに、学術情報を集積しています。その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することも使命としています。

みんぱくは「博物館機能をそなえた研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。みんぱくの展示は、常設展示と特別展示と企画展示とで構成されており、常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示と企画展示は、特定のテーマのもとに、年に数回、期間を限って開催されます。



所蔵民族学資料（平成30年3月31日現在）

【標本資料】

海外資料	178,989点
国内資料	164,749点
計	343,738点

【映像音響資料】

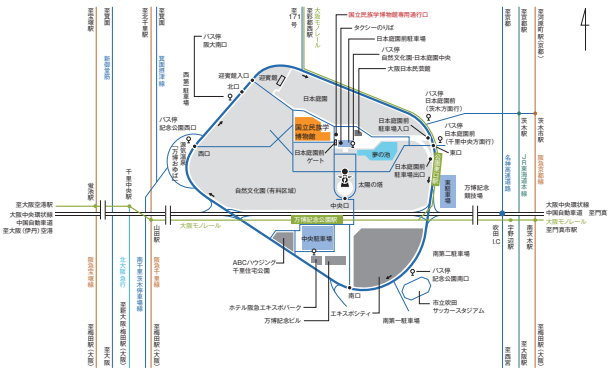
映像資料	8,199点
音響資料	62,651点
計	70,850点

【文献図書資料】

日本語図書	264,444冊
外国語図書	411,083冊
計	675,527冊
日本語雑誌	10,129種
外国語雑誌	6,970種
計	17,099種



みんぱくアクセス



●大阪・万博記念公園内
○大阪モノレール…「万博記念公園駅」または「公園東口駅」下車徒歩約15分
○バス…阪急茨木市駅・JR茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約13分
○乗用車…万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分
「日本庭園前駐車場」を利用される方は、「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
※自然文化園（有料区域）を通行するには、同園入場料が必要です。
※東口からは、自然文化園（有料区域）を通行せずに来館できます。
※東口または日本庭園前駐車場から来館し、自然文化園（有料区域）を通行してお帰りの場合は、同園入園料が必要です。

［お問い合わせ］

国立民族学博物館 管理部研究協力課研究協力係（大学院担当）

〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電 話　06-6878-8236（大学院担当）
FAX　06-6878-8479
E-mail　souken@idc.minpaku.ac.jp
URL　http://www.minpaku.ac.jp/

http://www.minpaku.ac.jp/research/education/university

SOKENDAI
(The Graduate University for Advanced Studies)
School of Cultural and Social Studies
Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies

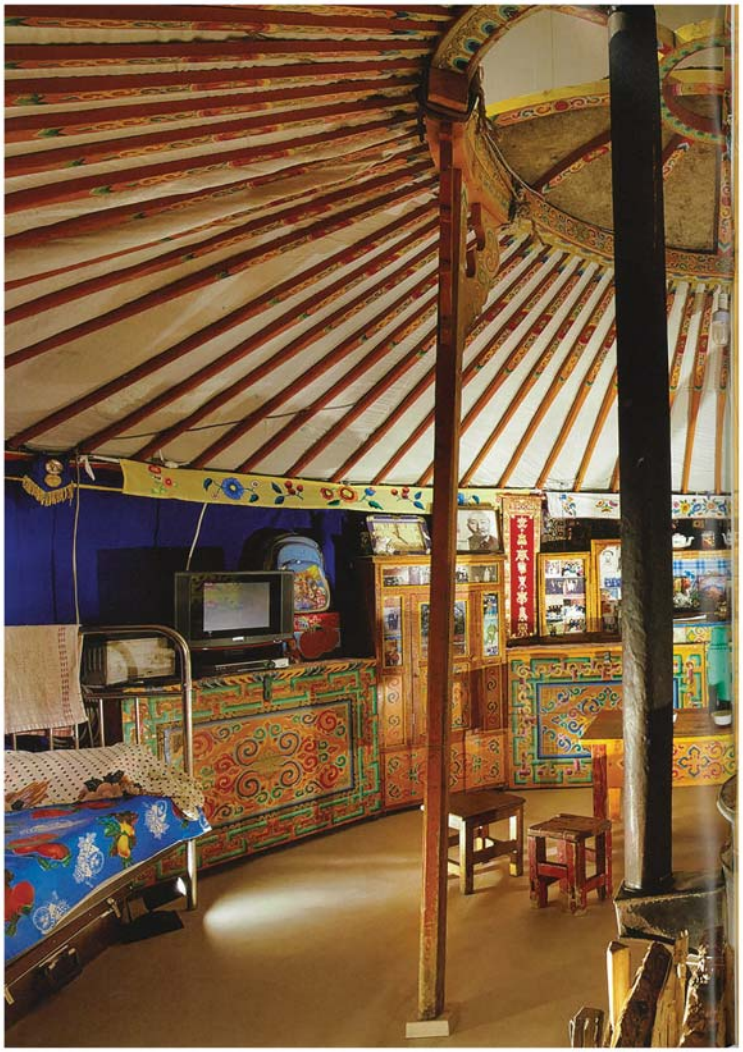
Overview '19

総合研究大学院大学
文化科学研究科

地域文化学専攻
比較文化学専攻

概要 '19





国立大学法人 総合研究大学院大学
THE GRADUATE UNIVERSITY FOR ADVANCED STUDIES

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology



国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館機能と博士課程の大学院教育機能を備えた文化人類学・民族学の研究センターとして、世界で唯一の存在です。みんぱくには、このほかにもいくつもの「世界一」の性格が備わっています。みんぱくは現在、世界各地から集めた34万5000点の民族学標本資料を収蔵していますが、このコレクションは、20世紀後半以降に築かれた民族学関係の資料としては世界最大の規模をもちます。また、施設の規模のうえでは、世界最大の民族学博物館となっています。さらに世界全体をカヴァーするコレクション、展示、蔵書、そして研究部と研究者の陣容をもつ研究所としても、みんぱくはアジアで唯一の機関ということになります。みんぱくには、現在、51人の研究者、つまり、教授、准教授、助教がいますが、みんぱくの研究者は、日々、世界各地でフィールドワークに従事し、人類の営みの多様性と共通性を明らかにするとともに、その作業の中から、世界の未来の姿にむけての指針を示そうと力を注いでいます。

人類の文明は、今、数百年来の大きな転換点を迎えているように思います。これまでの、中心とされてきた側が周縁と規定されてきた側を一方的にまなざし、支配するという力関係が変質し、従来、それぞれ中心、周縁とされてきた人間集団の間に、創造的なものも破壊的なものも含めて、双方向的な接触と交流・交錯が至る所で起こるようになってきています。それだけに、異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の違いを超えてともに生きる世界の構築をめざす文化人類学の知が、これまでになく求められているように思われます。

みんぱくには、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置されています。この両専攻に所属する大学院生は、文化人類学をはじめ言語学、宗教学、生態学、先史学、芸術学、民族音楽学そして博物館学など、広範な研究領域を専門とする個性ゆたかな教授陣の指導を受けられるのみならず、上で述べた世界に冠たる資料の蓄積に身近に接することができます。みなさんが、これらの学術資源を縦横に使いこなし、新たな研究の領野を切り開いて、それぞれの分野のパイオニアとしてはばたいて行かれることを期待しています。

国立民族学博物館長　吉田 憲司



国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館機能と博士課程の大学院教育機能を備えた文化人類学・民族学の研究センターとして、世界で唯一の存在です。みんぱくには、このほかにもいくつもの「世界一」の性格が備わっています。みんぱくは現在、世界各地から集めた34万5000点の民族学標本資料を収蔵していますが、このコレクションは、20世紀後半以降に築かれた民族学関係の資料としては世界最大の規模をもちます。また、施設の規模のうえでは、世界最大の民族学博物館となっています。さらに世界全体をカヴァーするコレクション、展示、蔵書、そして研究部と研究者の陣容をもつ研究所としても、みんぱくはアジアで唯一の機関ということになります。みんぱくには、現在、51人の研究者、つまり、教授、准教授、助教がいますが、みんぱくの研究者は、日々、世界各地でフィールドワークに従事し、人類の営みの多様性と共通性を明らかにするとともに、その作業の中から、世界の未来の姿にむけての指針を示そうと力を注いでいます。

人類の文明は、今、数百年来の大きな転換点を迎えているように思います。これまでの、中心とされてきた側が周縁と規定されてきた側を一方的にまなざし、支配するという力関係が変質し、従来、それぞれ中心、周縁とされてきた人間集団の間に、創造的なものも破壊的なものも含めて、双方向的な接触と交流・交錯が至る所で起こるようになってきています。それだけに、異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の違いを超えてともに生きる世界の構築をめざす文化人類学の知が、これまでになく求められているように思われます。

みんぱくには、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置されています。この両専攻に所属する大学院生は、文化人類学をはじめ言語学、宗教学、生態学、先史学、芸術学、民族音楽学そして博物館学など、広範な研究領域を専門とする個性ゆたかな教授陣の指導を受けられるのみならず、上で述べた世界に冠たる資料の蓄積に身近に接することができます。みなさんが、これらの学術資源を縦横に使いこなし、新たな研究の領野を切り開いて、それぞれの分野のパイオニアとしてはばたいて行かれることを期待しています。

国立民族学博物館長　吉田 憲司

専攻の特長

充実した教授陣

学生数をうわまわる教授陣は、学生一人一人の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また両専攻の教員は各分野の第一線で活躍する研究者であるため、最新の研究動向に基づいた指導をおこなうことができます。

豊富な情報源

日本における文化人類学・民族学関連の最大の資料類が揃っています。

また、国立民族学博物館が主催する数多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通して、国内外の優秀な研究者との交流ができます。

各種の支援制度

リサーチ・アシスタント制度、インターンシップ制度、授業料免除制度、学会発表やフィールドワークの旅費の援助など、充実した研究支援が受けられます。

指導体制

個別指導と共同指導を組み合わせたユニークな指導体制を採用しています。学生には正副２名の指導教員が指名され、入学から学位取得まで、日常的な指導をおこないます。一方、ゼミにおいては共同指導体制を取り入れています。ゼミは各４名の教員が担当し、研究の内容だけでなく発表方法などに関する指導をおこないます。担当教員以外の教員にもゼミへの参加を求めることができます。

スケジュール

学生は１年次において１年生ゼミでの指導をもとにフィールドワーク（現地調査）の準備をおこない、２年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別指導や論文ゼミでの共同指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

専攻案内

地域文化学専攻

独創的な文化人類学・民族学を目指して

本専攻は、国立民族学博物館が基盤機関となり、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ及びオセアニアの諸地域に居住する人びとの文化と社会に関する教育研究を行っています。各々の地域の特性や歴史を考慮しながら、民族誌学的方法論に基づく文化と社会の記述、構造の解明、動態の把握を目指します。現地調査から得られたデータを分析し、理論化し、学術的な貢献と実践的な提言ができる人材を養成します。



樫永 真佐夫 専攻長

比較文化学専攻

比較研究を通じて文化の諸現象を解明

本専攻は、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術、文化資源という６つの研究分野から構成されています。諸民族文化の比較研究により、各々に通底する普遍性の発見と理論的解明を目指します。基盤機関である国立民族学博物館の標本資料や映像音響資料、文献図書資料等を教育と研究に活かせることは本専攻の強みです。従来の文化人類学的研究方法に加えて、隣接諸科学の成果を導入し、新しい研究分野の開発を積極的に進めることができる人材を養成します。



宇田川 妙子 専攻長

教員紹介

地域文化学専攻 (2019年度)

❶専門分野
❷現在の研究課題
❸研究のキーワード

相島 葉月 准教授

❶社会人類学・イスラーム学・中東研究

❷現代エジプトにおける美と身体文化に関する社会人類学的研究
日本と中東に関する文化的知識のグローバルな流通について
❸モダニティ、都市中流層、マスメディア、教育、現代イスラーム思想、消費、様式美、独創性、知的伝統

伊藤 敦規 准教授

❶アメリカ先住民研究・博物館人類学・知的財産問題の人類学的研究

❷日本国内博物館等所蔵アメリカ先住民資料の協働管理に向けた調査研究
❸米国先住民、博物館人類学

樫永 真佐夫 教授

❶東南アジア文化人類学

❷東南アジアの伝統的政治社会組織に関する歴史的研究
物質文化に焦点を当てた黒タイの民族誌的研究
ベトナムにおける国家と民族の関係に関する研究
❸東南アジア大陸部、ベトナム、黒タイ、白タイ、タイ系言語集団、社会人類学

川瀬 慈 准教授

❶映像人類学・民族誌映画

❷エチオピアの音楽職能集団の人類学的研究
民族誌映画制作の理論と実践に関する研究
アフリカの無形文化の保護と継承に資する映像人類学研究
人類学研究にもとづく創作的な語法の探求
❸映像人類学、民族誌映画、エチオピア、音楽職能、Ethio-Jazz、エスノフィクション

齋藤 玲子 准教授

❶アイヌ・北方先住民文化研究

❷アイヌ文化の継承と社会的背景についての研究
北アジアおよび北アメリカ先住民の物質文化に関する研究
❸アイヌ、北方先住民族、北海道、北アメリカ、物質文化、観光

奈良 雅史 准教授

❶文化人類学・中国研究

❷中国における宗教と少数民族をめぐる人類学的研究
宗教と移動をめぐる人類学的研究
❸宗教実践、国家、自律性、公共性、移動、エスニシティ、ムスリム、回族

池谷 和信 教授

❶環境人類学・人文地理学・アフリカ研究・地球学

❷熱帯の狩猟採集文化、家畜飼育文化の変容に関する比較研究
南部アフリカにおける先住民運動に関する研究
地球環境史の構築に関する研究
❸地球環境、狩猟採集民、アフリカ、東北アジア、サン（ブッシュマン）、ソマリ、チュクチ、日本、バングラデシュ、環境人類学、人文地理学

小野 林太郎 准教授

❶海洋考古学・東南アジア研究・オセアニア考古学

❷熱帯島嶼域における人類史や資源利用史に関する考古学研究
漁撈や海の利用にかかわる人類・考古学的研究
水中文化遺産を対象とした海洋考古学的研究
❸東南アジア島嶼部、インドネシア、オセアニア、オーストロネシア語族、漁撈、水中文化遺産、人類史

河合 洋尚 准教授

❶社会人類学・演族研究

❷空間、景観、フードスケープをめぐる人類学的研究
中国漢族地域における都市景観開発と文化遺産保護の研究
盛大平洋の客家に関するマルチサイト民族誌
❸景観、風水、都市、コミュニティ、漢族、客家

齋藤 晃 教授

❶歴史人類学・ラテンアメリカ研究

❷植民地期アンデスにおける先住民の総集住化に関する国際共同研究
近世カトリックの世界宣教と文化適応に関する共同研究
❸ラテンアメリカ、植民地時代、先住民族、文化人類学、エスノヒストリー

新免 光比呂 准教授

❶宗教学・東欧研究

❷ファシズム運動における宗教的要因の比較研究
❸ルーマニア、ファシズム、レジオナール、キリスト教

西尾 哲夫 教授 (2023年３月退任予定)

❶言語人類学・アラブ研究

❷グローバル化と中東地域の民衆文化に関する言語人類学的研究
多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究
❸中東、北アフリカ、アラビアンナイト、ナラトロジー

丹羽 典生 准教授

❶社会人類学・オセアニア地域研究

❷オセアニアにおける紛争と少数民族に関する研究
応援に関する通文化比較
❸宗教運動、紛争、開発、少数民族、応援

信田 敏宏 教授

❶社会人類学・東南アジア研究

❷東南アジアの文化に関する人類学的研究
インクルーシブ社会に関する人類学的研究
❸東南アジア、マレーシア、オラン・アスリ、日本、博物館、知的障害者

平井 京之介 教授

❶社会人類学・日本研究・東南アジア研究

❷水俣病被害者支援運動の人類学的研究
「負の遺産」の生成に関する博物館人類学的研究
タイのコミュニティ博物館についての人類学的研究
❸日本、タイ、ラオス、経済人類学、社会運動、博物館、上座部仏教、水俣病

三尾 稔 教授

❶文化人類学・南アジア研究

❷南アジアにおける多様な宗教伝統の共生に関する研究
インドのナショナリズムと宗教の関係に関する研究
インドの大衆消費社会化と祭礼の変容に関する研究
❸ラージャスターン州メーワール地方（インド）、グジャラート州（インド）、ヒンドゥー、ムスリム、文化人類学、宗教人類学、南アジア地域研究

南 真木人 准教授

❶南アジア民族誌研究・文化人類学

❷ネパール地震後の社会再編に関する研究
ネパール社会の30年間の変化に関する研究―1982年撮影番組の再資源化
❸ネパール地震、災害民族誌、包摂、社会再編、映像人類学、当事者コミュニティ、研究資源の共有化、ガンダルバ（楽師カースト）

山中 由里子 教授

❶比較文学比較文化

❷中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究
驚異と怪異の比較研究
アレクサンドロス伝承の東西伝播
❸西アジア、アラブ文学、ペルシア文学、博物学、驚異、イラン、東西交渉史

野林 厚志 教授

❶人類学・民族考古学・台湾研究・食文化研究

❷生業技術の通文化比較研究
食の多元的価値に関する人類学的研究
台湾におけるエスニシティの動態の探究
❸生業文化、食文化、物質文化、狩猟技術、野生動物、家畜動物、狩猟農耕民、台湾原住民族、エスニシティ、文化資源

林 勲男 教授 (2022年３月退任予定)

❶社会人類学・オセアニア研究

❷自然災害への対応に関する人類学的研究
オセアニアにおけるキリスト教宣教師の活動に関する研究
❸災害、復興、記憶、宣教師、博物学誌、民族誌コレクション、オセアニア

藤本 透子 准教授

❶文化人類学・中央アジア地域研究

❷中央アジアにおけるイスラーム実践の人類学的研究
カザフの伝統医療に関する研究
カザフの移動と社会再編に関する研究
❸中央アジア、カザフスタン、ムスリム、宗教実践、伝統医療、社会再編、移動

三島 禎子 准教授

❶文化人類学・西アフリカ研究

❷国際移動に関する文化人類学的研究
❸西アフリカ、セネガル、ソニンケ、商業民族、民族ネットワーク

森 明子 教授 (2023年３月退任予定)

❶文化人類学・民族誌研究・ヨーロッパ人類学

❷人類学の記述とその社会的文脈
人類学的比較の再考
❸都市、家族、国家、場所、社会的なもの

比較文化学専攻（2019年度）

❶専門分野
❷現在の研究課題
❸研究のキーワード

飯田　卓 教授
❶生態人類学・アフリカ地域研究・視覚メディアの人類学
❷マダガスカルにおける漁民文化と漁撈技術
アフリカにおける文化遺産とコミュニティの相互影響
日本人類学の発達における大衆メディアの役割
❸インド洋、アフリカ大陸、日本、人類学史、文化遺産実践、大衆アカデミズム、情報と知

上羽 陽子 准教授
❶民族芸術学・染織研究・手工芸研究
❷現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究
❸民族芸術学、手工芸文化、染織研究、インド、伝統的技術

卯田 宗平 准教授
❶環境民俗学・東アジア研究
❷動物と人間とのかかわりをめぐる民俗学的研究
❸自然と人間、動物利用、リバランス論、鵜飼文化、トナカイ飼養、物質文化、技術と技能

宇田川 妙子 教授
❶南ヨーロッパ研究・性研究
❷イタリアおよび地中海ヨーロッパの民族誌的研究
ジェンダー／セクシュアリティに関する文化人類学的研究
社会理論の批判的再考
❸イタリア、地中海ヨーロッパ、イタリア人、文化人類学、ジェンダー／セクシュアリティ研究、南ヨーロッパ研究、性研究

太田 心平 准教授
❶社会文化人類学・北東アジア研究・博物館組織行動論
❷韓国・朝鮮社会における文化の統合性と多様性の研究
労働現場としての博物館における組織行動と動機付け
❸韓国・朝鮮、近代性、社会的記憶、物語論、世代集団、知識生成、博物館

韓　敏 教授
❶社会人類学・中国研究
❷歴史記憶と象徴に関する人類学的研究
❸社会主義近代化、中国、文化遺産、観光、文化表象、記憶、聖地巡礼、英雄崇拝、漢族、シボ族

菊澤 律子 准教授
❶言語学・オーストロネシア諸語・言語研究における地理情報システム（GIS）の利用
❷オーストロネシア諸語における統語構造の変遷
言語データを軸としたオセアニアの先史に関する学際研究
手話言語と音声言語の対照研究
❸オセアニア、フィジー、オーストロネシア、記述言語学、比較（歴史）言語学、比較（歴史）統語論、先史言語学、手話言語学

笹原 亮二 教授
❶民俗学・民俗芸能研究
❷モノの遺存の経時的把握を通じた生活文化に関する民俗学的研究
❸日本、民俗学、三匹獅子舞、民俗芸能

菅瀬 晶子 准教授
❶文化人類学・中東地域研究
❷パレスチナ・イスラエルを中心とした東地中海アラブ地域で、一神教徒が共有する聖者崇敬の研究
イスラエルにおけるアラブ人市民を中心とした、マイノリティによる文化表象のありかた
❸中東、東地中海、パレスチナ、イスラエル、キリスト教徒、マイノリティ、アイデンティティ、エスニシティ、文化表象、共存

鈴木 七美 教授（2023年3月退任予定）
❶歴史人類学・医療人類学・エイジング研究
❷キルトドキュメンテーション活動―アーミッシュ・キルトから考える米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開
❸エイジングフレンドリー・コミュニティ、米国宗教コミュニティ、アーミッシュ・キルト

鈴木　紀 教授
❶開発人類学・ラテンアメリカ文化論
❷開発援助プロジェクトの人類学的評価法
博物館における先住民族文化表象
❸ラテンアメリカ、メキシコ、ユカタン、開発援助、フェアトレード、博物館展示学

關　雄二 教授（2022年3月退任予定）
❶アンデス考古学・ラテンアメリカ研究
❷古代アンデス文明における権力の発生に関する研究
ペルーにおける世界文化遺産概念と国家・地域の文化遺産概念との相互作用に関する研究
❸ペルー、ラテンアメリカ、メスティソ、アンデス考古学、文化人類学

園田 直子 教授
❶保存科学
❷博物館における持続可能な資料管理に関する研究
資料の展示・保存環境に関する研究
収蔵庫の再編成に関する研究
❸保存科学、総合的有害生物管理（IPM）、博物館環境

出口 正之 教授（2021年3月退任予定）
❶非営利組織の政策人類学的研究
❷公益法人その他の組織とフィランソロピーの政策人類学的研究
❸フィランソロピー、メセナ、非営利組織、NPO、公益法人、公益認定制度、ボランティア、官政学、政策人類学

寺田 吉孝 教授（2020年3月退任予定）
❶民族音楽学・インド研究
❷マイノリティと音楽
グローバル化と南インド古典音楽の変容
❸インド（タミル）、フィリピン（マラナオ、マギンダナオ）、アジア系アメリカ、民族音楽学

寺村 裕史 准教授
❶情報考古学・文化情報学
❷情報考古学的手法を用いた文化資料のデジタル化と情報統合に関する研究
❸GIS（地理情報システム）、考古学、情報科学

日髙 真吾 教授
❶保存科学・保存修復
❷地域文化の保存と活用に関する研究
博物館における保存処理法の研究
❸日本、保存科学、保存処理

廣瀬 浩二郎 准教授
❶日本宗教史・民俗学
❷韓害者文化に関する人類学的研究
日本近代の新宗教に関する歴史的研究
❸日本、東北、九州、京都、歴史、宗教、福祉、文化

福岡 正太 准教授
❶民族音楽学・東南アジア研究
❷映像音響メディアとインドネシア音楽の変容
伝統芸能の伝承と映像記録
❸インドネシア（スンダ）、東南アジア、映像音響メディア、民族音楽学

ピーター J.マシウス 教授
❶先史学・民族植物学
❷History of agriculture and plant domestication, with specific interests in taro (Colocasia esculenta), paper mulberry (Broussonetia papyrifera), and other plants used for food, fodder and fibre
❸Asia, Pacific, Mediterranean, ethnobotany, ethnobiology, plant domestication, food history

松尾 瑞穂 准教授
❶文化人類学・ジェンダー医療人類学・南アジア研究
❷近代化、開発がもたらすリプロダクション実践の変容に関する研究
サブスタンスと身体研究
子育ての比較文化論
❸リプロダクション（性と生殖）、ジェンダー、インド、サブスタンス、身体

丸川 雄三 准教授
❶文化財情報発信・連想情報学
❷連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究
❸文化財、連想検索、デジタルアーカイブ

吉田 憲司 教授（国立民族学博物館長）
❶博物館人類学・アフリカ研究
❷アフリカにおける造形と儀礼の人類学的研究
博物館・美術館における文化の表象のあり方の研究
❸アフリカ、ヨーロッパ、日本

博士後期課程（Ph.D.）

課程修了の要件、学位取得までの流れ

■ 学位取得の要件

学位を取得するためには、所定の3年限以上在学し、必要な研究指導を受けた上で、所定の単位数以上を修得し、博士論文の審査及び試験に合格すること（課程博士）が必要です。

■ 学位取得までの流れ

1年次	1年生ゼミ出席
	現地調査準備
	調査計画書提出
2年次前期以降	現地調査
	調査報告、博士論文構想発表
3年次	必須履修単位取得
	博士論文草稿発表
3年次後期以降	課程博士出願
	論文公開発表会・口述試験
	最終試験・合否決定
	学位授与



研究支援

■ リサーチ・アシスタント（RA）制度

教員の指示・監督の下で、研究者の補助として、研究活動に必要な様々な業務をおこないながら給与を得ることができます。

■ 学生派遣事業

学位申請論文作成に不可欠な国内外の調査や学会での成果発表に要する旅費、宿泊費などの支援をおこないます。

■ インターンシップ制度

深い専門性と広い視野、国際通用性をそなえた研究者の育成を目的として、国内外の大学、研究機関、企業等における共同研究活動や調査活動等に必要な経費を支援する制度です。

■ 入学料・授業料免除等制度

経済的理由により入学料や授業料の納入が困難な学生に対する経済的支援として、入学料・授業料の免除（収納猶予・分納）の制度があります。授業料免除については、毎年2回、授業料免除申請の受付をおこなっています。授業料免除許可者は、半期の授業料の半額（267,900円）が免除されます。

■ 特別講義

外部研究資金調達のための申請書の書き方、論文投稿のしかたなどをテーマにした特別講義をおこなっています。

■ 日本学術振興会「特別研究員（DC2）」採用数

年　度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
採用数	3	3	4	2	1	2	2	2	2	4	0	2

在学生の声

地域文化学専攻

拉加本（ラジャブン）

中国のチベット・アムド地域にあるチベット人村落では、チベット仏教、ボン教、道教的な土着神や山の神に対する信仰が混交しています。私はその村の人々の生活と信仰がどのように関わり合っているのか、現地調査に基づき明らかにしようと考えています。

修士課程では、チベット仏教思想と文献学を専攻し、仏教古典に関する専門知識を学びました。しかし宗教的指導者と一般民衆の宗教に対する意識は必ずしも同じではありません。民衆の宗教実践は、僧院中心でおこなわれる教義重視の仏教的伝統とは異なっています。たとえば道教の影響を受けた土着神を祀り、アニミズムの性格が強い土地神信仰を強く維持しているのです。これらの背景にある伝統的民間行事や各宗派に関わる信仰の問題を解明するには文化人類学的アプローチが有効であると考え、私は2017年に入学しました。

近年、チベット語を知らない若者が増え、チベットの伝統的な教育を受けた僧侶も知識人も次第に減少しています。このような状況が続くと、チベット語を話す人は寺院の僧侶と田舎の農牧民に限られることになり、チベット語及びその文化は、専門家たちによる机上の研究対象としての存在になりかねないのではと危惧しています。私は、ネイティブアンソロポロジストとして、失われつつある伝統的民間行事などを再度復活させ、後世に継承させるためにも、歴史を視野に入れた人々の宗教実践の現状を実証する必要があると考えています。

総合研究大学院大学では、チベット関係の研究資料が多く保管され、チベットに関する文化人類学の研究方法を勉強するには理想的な環境が整っています。国立民族学博物館という多元的かつ国際的な研究環境の中で、チベット本土ではなしえない研究も達成されると確信しています。学術振興会特別研究員の助成金をもとに複数回にわってフィールド調査を実施できたこと、海外学生派遣事業の助成で国内外の学会に参加し発表する機会を得ることもできました。また学内のリサーチアシスタントとしてこれまで知り得なかった他地域の収蔵資料と文献などを調べたことも、大変勉強になっています。



チベットの子供の剃髪儀礼（ボンコル村5社、2018年）

比較文化学専攻

八木 風輝

私は中央アジアとモンゴルに住んでいるカザフ人の音楽と社会の関係を、「音楽文化の越境」というキーワードから研究しています。そのため、民族音楽学を専門とする先生に師事したいと思い、総研大（国立民族学博物館）に進学しました。私が修士課程で学んだ先生も、かつて総研大の出身だったことも入学理由として大きかったと思います。

中央アジアとモンゴルという海外のフィールドで毎年欠かさず調査することは、旅費といった調査費の負担が大きくなります。そのため、毎年のように調査のための助成金を獲得する必要がありますが、申請書を書くための技術や基礎知識がないと獲得が難しいです。

しかし、その獲得の可能性を上げるノウハウやサポートが、総研大にはあります。すなわち、学外の助成金を獲得する院生が大勢在籍していて、学外の助成金をとるためのコツみたいなものが蓄積されているのです。また、学外の助成金に申請するためには、あらかじめ予備的な調査が必要になることがありますが、この調査費用の一部を支援する学内の制度があります。

その他にも、調査した内容の発表や研究者と交流する場は、国内だけではなく国外にも開かれています。総研大がある国立民族学博物館には外国からの研究者が常時来館しており、希望すれば、研究にかかわる相談をすることも可能です。私は、東欧から来られた言語学の研究者との相談がきっかけとなり、調査地の音楽演奏の変容に関する共著の論文を出すことになりました。現在一緒に音楽の内容や旋律を分析しています。

学問を知り、世界に向けて研究を行いたいという方にとって、総研大は、興味の尽きない場所になるのではないかと思います。



カザフスタンの楽器を練習するモンゴル国のカザフ人劇団員（2018年）

学位論文リスト

学位論文リスト

2006年度以降

【課程博士】

中国新疆オイラドの宗教復興に関する人類学的研究 —寺とオワー祭祀の復活に関わる転生活仏シャリワン・ゲゲン14世—	照 木 加 甫（地域）	[2019.3.22 学術]
中国青海省におけるチベット仏教復興運動下の民間信仰の変容に関する人類学的研究 —同仁県ワッコル村を事例として—	南 旦 加 布（地域）	[2018.3.23 文学]
近代フィリピンにおける民族衣装をまとった聖母像の研究	古沢ゆりあ（比較）	[2017.9.28 文学]
自然資源の利用に関する環境人類学的研究 —ニカラグアの先住民による漁業的ウミガメ漁の事例—	高木　仁（地域）	[2017.3.24 文学]
スナックにおける言語コミュニケーション研究 —対人関係を調節する接客言語ストラテジー—	中田　祥貴（比較）	[2016.9.28 文学]
日本社会の自然葬に関する民族誌的研究 —NPO法人「葬送の自由をすすめる会」を中心に—	金セッビョル（地域）	[2016.3.24 文学]
都市回族コミュニティの維持と宗教実践 —中国陝西省西安市における回族の帰属意識をめぐる民族誌的研究—	今中　崇文（地域）	[2016.3.24 文学]
韓国の地域社会における華僑のアイデンティティに関する民族誌的研究 —韓国華僑ビジネスと華僑協会を中心に—	金　桂淵（地域）	[2015.9.28 文学]
「野球移民」を生みだす人びと —ドミニカ共和国におけるトランスナショナル移民研究—	窪田　暁（比較）	[2015.3.24 文学]
モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる交渉に関する民族誌	堀田あゆみ（地域）	[2015.3.24 学術]
中国雲南省における徳宏タイ族の即興うたと感性の民族誌的研究	伊藤　悟（地域）	[2014.9.29 文学]
My Huaca: The Use of Archaeological Heritage in Modern Peru from a Public-Archaeology Perspective	サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ（比較）	[2014.9.29 文学]
ナイジェリアの都市イレ・イフェにおける「アーティスト」の民族誌的研究	緒方しらべ（比較）	[2014.3.20 文学]
変化しつづける装い —中国雲南省文山モンの自己と他者をめぐる人類学的服飾研究—	宮脇　千絵（地域）	[2012.9.28 文学]
現代アンデス農村における聖人信仰の変容 —人の移動に焦点をあてて—	八木百合子（比較）	[2012.9.28 文学]
無文字社会における歴史記憶の生成と継承 —南エチオピア牧畜民ボラナにおける口承史の分析をとおして—	大場　千景（地域）	[2012.3.23 文学]
カオダイ教ハノイ聖室の民族誌的研究 —ベトナム北部地域の都市における女性たちの社会関係—	伊藤まり子（地域）	[2012.3.23 文学]
周辺イスラームのダイナミズム —タイ南部村落におけるイスラーム復興運動と宗教実践の変容—	小河　久志（地域）	[2012.3.23 文学]
ヨーグルトをめぐる言説の生成と展開 —社会主義期からポスト社会主義期にかけてのブルガリアを中心に—	マリア・ヨトヴァ（比較）	[2011.9.30 文学]
オーストラリア先住民ヨルタ・ヨルタの環境管理のための先住民運動に関する文化人類学的研究	友永　雄吾（地域）	[2011.3.24 文学]
現代タイ社会における開発と僧侶 —僧侶による社会貢献とネットワーク形成に焦点をあてて—	岡部真由美（地域）	[2011.3.24 文学]
現代東南中国における宗親会の民族誌的研究 —国家との関係を中心として—	陳　夏旭（比較）	[2011.3.24 文学]
農業技術改善の民俗誌 —紀ノ川下流域村落の一七〜二〇世紀前半における動向の分析—	加藤　幸治（比較）	[2010.9.30 文学]
日本の先史時代における植物性食料の加工と利用 —残存デンプン分析法の理論と応用—	渋谷　綾子（比較）	[2010.3.24 文学]
韓国における老人の食 —老人福祉施設を中心に—	守屋亜紀子（地域）	[2009.3.24 文学]
インド農村社会における不妊経験の人類学的研究	松尾　瑞穂（比較）	[2008.9.30 文学]
フェラインの民族誌 —ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション—	山田　香織（地域）	[2008.3.19 文学]
水上人と呼ばれる人々 —広東珠江デルタの漢族エスニシティとその変容—	長沼さやか（地域）	[2008.3.19 文学]
在米コリアンのサンフランシスコ日本町 —マルチカルチャーのエスニックタウン—	小谷　幸子（比較）	[2008.3.19 文学]
参加型開発を通した女性の自己変容過程に関する人類学的研究 —北インド農村社会を事例として—	菅野美佐子（比較）	[2007.9.28 文学]
「場」と「パフォーマンス」に関する人類学的研究 —トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として—	米山　知子（比較）	[2007.9.28 文学]
上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的研究	飯國有佳子（地域）	[2007.3.23 文学]
「護り」の身体技法に関する映像人類学研究 —インドネシア・ミナンカバウの事例から—	村尾　静二（比較）	[2007.3.23 文学]
離散と故郷 —ヨルダンのパレスチナ系住民にみられる帰属意識とナショナリズム—	錦田　愛子（地域）	[2007.3.23 文学]
「子ども域」の文化人類学的研究 —バングラデシュ農村社会の子ども—	南出　和余（比較）	[2007.3.23 文学]

【論文博士】

グローバル化する互酬性 —サモア世界の儀礼財の循環と首長制—	山本　真鳥	[2017.3.24 文学]
ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成 —東北地方のヌン・アン集団の事例から—	チュ・スワン・ザオ	[2015.9.28 文学]
アイヌ衣文化の研究	津田　命子	[2014.9.29 文学]
先住民生存捕鯨再考 —国際捕鯨委員会における議論とベクウェイ島の事例を中心に—	濱口　尚	[2013.9.27 文学]
多文化都市・新宿の生成と展開 —ライフサイクルの視座—	川村千鶴子	[2013.3.22 学術]
先史アンデス形成期の社会動態 —ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から—	山本　睦	[2012.9.28 文学]
小集落から見た初期国家の形成過程 —先スペイン期中央アンデスのワリ国家を事例として—	土井　正樹	[2012.3.23 文学]
スリランカにおけるエステート・タミルのアイデンティティと「ジャーティヤ」をめぐる人類学的研究	鈴木　晋介	[2011.3.24 文学]
活用される職祖伝承 —近・現代日本における木工挽物の担い手と木地屋「根元地」—	木村　裕樹	[2010.9.30 文学]
先住民学習の理論と実践—ポストコロニアル人類学の活用—	中山　京子	[2010.9.30 学術]
シャーマニズムによるエスニシティの探求 —ポスト社会主義期におけるモンゴル・ブリヤートの事例を中心として	島村　一平	[2010.3.24 文学]
国際線客室乗務員の接客業務と勤務体制 —仕事の人類学的研究—	八巻　恵子	[2009.9.30 文学]
「アイヌ風俗画」の研究 —近世北海道におけるアイヌと美術	新明　英仁	[2007.9.28 文学]

年度別学位授与者数

		'91〜'06年	'07年	'08年	'09年	'10年	'11年	'12年	'13年	'14年	'15年	'16年	'17年	'18年	計
地域文化学専攻	課程博士	23	2	1	0	2	3	1	0	2	3	1	1	1	40
	論文博士	12	1	0	1	0	0	1	0	1	1	1	0	0	18
比較文化学専攻	課程博士	15	3	1	1	2	1	1	1	2	0	1	1	0	29
	論文博士	7	0	0	1	3	1	1	1	0	0	0	0	0	14
計		57	6	2	3	7	5	4	2	5	4	3	2	1	101

よくある質問

Q 学部をもつ大学院の教育と比べてどんな特徴がありますか？

A 教員数が学生数をうわまわるという、他大学にはない恵まれた教育環境があげられます。教員：学生の比率はおおよそ3：2であり、個々の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また教員は各分野の第一線で活躍する研究者であり、最新の研究動向に基づいた指導をおこなえます。さらに、民博が所蔵する豊富な研究資料（図書67万冊、標本資料34万点、映像音響資料7万点など）の利用、館が主催する多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通し、国内外の研究者との交流ができます。

Q 地域文化学専攻と比較文化学専攻の二専攻には、どのような違いがありますか？

A 地域と比較に別れているものの、共にフィールドワークを研究の根幹においているため、共通する部分も多く、密接な相互交流があります。また、専攻間に指導上の棲み分けはなく、院生がどちらに所属していても、両専攻の教員の指導を受けることができます。

Q 二専攻で学ぶことができるのは、文化人類学・民族学だけでしょうか？

A そんなことはありません。両専攻には、考古学、民俗学、宗教学、芸術学、言語学、音楽学、博物館学、保存科学など幅広い分野を専門とする教員がそろっていますから、それらの分野でも研究をおこなうことができます。また、教員の陣容は年度によって変化することがありますから、希望研究内容と当該専攻の教育体制との整合性について不明な点がある方は、前もってご相談ください。

Q 受験する前に希望する指導教員をかならず決めておく必要がありますか？

A 必要条件ではありませんが、強くお勧めします。また、受験を申請する前に希望指導教員に連絡を取れば、入学後の研究の見通しを立てる一助となるでしょう。

Q 学部や修士課程で文化人類学・民族学を専攻しなかったのですが、受験はできますか？

A 正規に文化人類学・民族学を学んだ経験がなくても受験はできます。しかし、入学後に志望研究が遂行可能であるか見通しをつけるためにも、関連図書などを精読し、少なくとも人類学やフィールドワークに関する基本的な考え方について理解しておくほうがよいでしょう。これは、何をするために当専攻を受験するのか整理するためにも役立つはずです。

Q できるだけ早く学位を取得したいのですが、3年で取得するのは難しいでしょうか？

A フィールドワークを研究の中心に据えている分野であるため、3年間で学位を取得するのは容易ではありません。早い取得が望ましいことは言うまでもありませんが、学問の進展に寄与できる質の高い研究成果を上げ、最終学位である博士号に相応しい研究能力を養うことがより重要であり、この点に留意した指導がおこなわれています。

Q 修士課程ですでに現地調査をはじめているのですが、入学後すぐに長期の現地調査をすることは可能ですか？

A 原則として、初年度は、長期フィールドワークをおこなうための準備期間にあてられています。フィールドワークは、単に現地に行けば遂行できるものではありません。また、修士課程でフィールドワークをすでにおこなっている場合でも、博士論文執筆のための調査では、求められる調査の質に大きな差があることが多いのです。入学後の一年間は、教員の指導のもと、調査計画の実現性・妥当性などについて、それまでの自己の研究成果や先行研究との関連に留意しながら検討します。年度末には、フィールドワークに向けたリサーチプロポーザルに関する発表をおこない、計画をより実現性の高いものへと練っていきます。

▼ その他の質問はこちら
http://www.minpaku.ac.jp/research/education/university/information/faq

修了生の声

滋賀県立近代美術館　学芸員

古沢ゆりあ（2017年9月学位取得）

近年、人文学においては隣接分野の研究動向にも目を配った学際的で横断領域的な研究の重要性がいわれます。私は、学部から修士課程まで美術史・芸術学の分野で学んできましたが、隣接する領域を含めてより広い視野から造形文化を論じるためには、美術史学の枠組みにとどまらず文化人類学的な観点や方法を取り入れることが有効であると考え、総合研究大学院大学の比較文化学専攻に入学しました。美術と関連して博物館学にも関心があったため、国立民族学博物館（民博）という基盤機関は魅力的でした。

私にとってここで学ぶ利点は、まず、博物館がある研究機関であることでした。民博に所蔵される膨大な標本資料のなかで参照したいものがあれば、展示場に展示中のものだけでなく、申請すれば収蔵庫の中の資料も閲覧できます。図書館の蔵書も充実しています。さらに、展覧会やイベントなど博物館の活動や先生方の実践を通してどのように研究成果が社会還元されているのかを目の当たりにして学ぶことができます。例えば、大学院生も特別展の準備などをお手伝いさせていただく機会もあり、私は、2012年の「世界の織機と織物」展と、2014年の「イメージの力」展の準備に関わらせていただきました。また、様々なテーマで頻繁に開催される研究者同士の研究会や一般向けの講演会にも参加でき、文化人類学やその隣接分野での研究動向や最新の情報が常に耳に入って来る環境です。

民博という場所柄、当然、先生方や学生には民族学・文化人類学を専門とする人が多いですが、それだけでなく博物館学、言語学、考古学など文化や歴史に関する様々な研究が行なわれています。総研大は、多様な背景をもつ人たちと議論するなかで研究を深めることができる刺激に満ちた環境といえます。



中国社会科学院　助理研究員

那木加甫（ナムジャフ）（2019年3月学位取得）

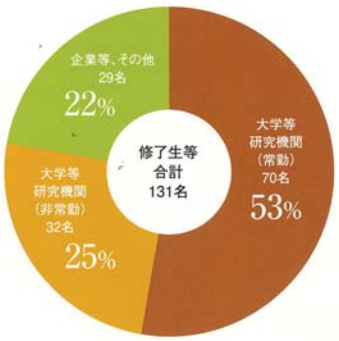
私は今日のモンゴル族を構成する1つのエスニック集団であるオイラド・モンゴルを対象に研究しています。オイラド・モンゴルは現在、中国、モンゴル国、ロシア、カルキズ共和国などの各国に広く分布しています。博士課程在学中、私は中国の新疆ウイグル自治区を中心にオイラド・モンゴルの宗教復興について調査研究をしました。

修士課程は名古屋大学東洋史専攻に在籍し、歴史学の視点と方法を用いてオイラド・モンゴルを研究していた私にとって、総研大・国立民族学博物館（民博）に在学した5年間は多くの新しいことを学ぶいい機会に恵まれた期間でもありました。総研大・民博では、博士課程における研究計画や中間報告、論文の構想などをゼミで発表し、多地域・多分野の研究者から意見やアドバイスをいただけます。それによって私自身も国境を越えて分布するオイラド・モンゴルの地域間比較をする必要性を感じ、ロシアやモンゴル国においても調査を行ない、オイラド・モンゴルを切り口に中央アジアやモンゴル社会に関する理解が実に深まりました。また、人類学の基礎理論から、調査方法、調査支援制度への申請、学振の申請、雑誌論文への投稿にいたるまで手厚い指導をしていただきました。学生も多く、研究地域やテーマは異なりますが、同じく研究に専念している多くの仲間がいることは研究生活において大きな支えとなりました。これから総研大・民博に入学する後輩のみなさんにもぜひ総研大・民博の豊かな研究環境を活用してほしいです。



修了生等の進路

修了生等の進路（2019年7月）



大学等研究機関（常勤）勤務先

愛知淑徳大学、インドネシア学術総局（インドネシア）、愛媛大学、大阪大学、鹿児島純心女子大学、神奈川大学、関西外国語大学、川崎医療福祉大学、神田外語大学、京都外国語大学、京都大学、京都文教大学、神戸市外国語大学、神戸大学、神戸山手大学、国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館、滋賀県立近代美術館、滋賀県立大学、静岡大学、静岡文化芸術大学、四天王寺国際仏教大学、芝浦工業大学、上海師範大学（中国）、就実大学、女子栄養大学、成蹊大学、青海民族大学蔵学院（中国）、総合地球環境学研究所、ソウル大学（韓国）、大東文化大学、中京大学、中国社会科学院（中国）、中部大学、筑波大学、帝京大学、東京外国語大学、東京工業大学、東北学院大学、東洋大学、常葉大学、長崎純心大学、奈良県立大学、南山大学、日越大学（ベトナム）、日本赤十字九州国際看護大学、日本大学、人間文化研究機構、阪南大学、広島市立大学、宮崎公立大学、桃山学院大学、山形大学、ライデン大学（オランダ）、立命館大学、龍谷大学

入学選考

■ 入学者選抜の基本的な考え方

第一次選抜（書類審査）では、修士論文または他の学術論文等について、独創性、研究史の把握、実証性、論理性の各項目に基づき評価します。また、研究内容（研究活動の概要、これまでに行った研究の要旨、これから志望する研究）については、計画の妥当性、計画の具体性、学問的意義、発展性の各項目に基づき評価します。

第二次選抜（面接審査）では、これまでに行った研究、修士論文等の内容、これから志望する研究に関する口頭試問を通し、討論能力、語学力、研究意欲等を評価します。

書類審査、面接審査の各項目を総合的に判断し、合否を判定します。

■ 求める学生像

【地域文化学専攻】

世界の多様な地域社会や地域文化について広い関心をもち、とりわけ文化人類学・民族学の基礎研究に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。

【比較文化学専攻】

人間の社会や文化について広い関心を抱き、とりわけ学問的な理論化やその社会的な応用に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。



■ 募集人数

専攻	課程の種類	講座（分野）	募集人員
地域文化学専攻	博士課程の後期・3年の課程	アジア地域文化Ⅰ、アジア地域文化Ⅱ、ヨーロッパ地域文化、アフリカ地域文化、アメリカ地域文化、オセアニア地域文化	3人
比較文化学専攻		比較社会研究、比較宗教研究、比較技術研究、比較言語研究、比較芸術研究、文化資源研究	3人

■ 入学者選抜日程

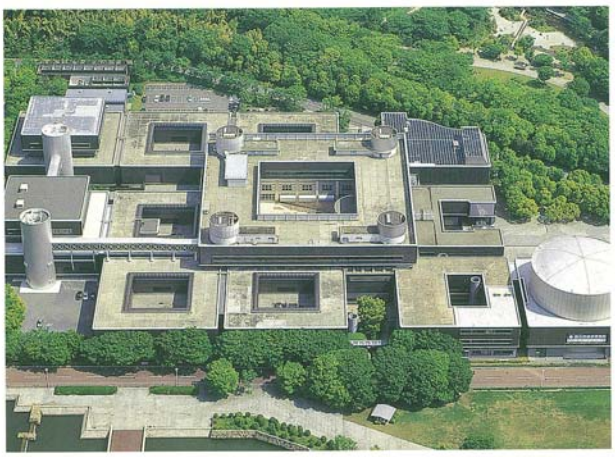
出願資格認定審査 修士または専門職学位に相当する学力のある方は、事前に出願資格認定審査を行います	2019年11月1日（金） ～2019年11月7日（木）
入学願書受付期間	2019年11月22日（金） ～2019年11月28日（木）
第一次選抜（書類選考）・結果通知	2020年1月中旬
第二次選抜（面接審査）	2020年1月27日（月） ※予備日1月28日（火）
合格発表	2月中旬
入学手続き	2020年3月9日（月） ～2020年3月13日（金）

▼出願書類および出願までの流れ等についてはこちら
http://www.minpaku.ac.jp/research/education/university/information/steps

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館（みんぱく）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。みんぱくは、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究や共同研究を進めるとともに、学術情報を集積しています。その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することも使命としています。

みんぱくは「博物館機能をそなえた研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。みんぱくの展示は、常設展示と特別展示と企画展示とで構成されており、常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示と企画展示は、特定のテーマのもとに、年に数回、期間を限って開催されます。



所蔵民族学資料（2019年3月31日現在）

【標本資料】

海外資料	179,127点
国内資料	165,838点
計	344,965点

【映像音響資料】

映像資料	8,223点
音響資料	62,651点
計	70,874点

【文献図書資料】

日本語図書	266,112冊
外国語図書	412,158冊
計	678,270冊
日本語雑誌	10,143種
外国語雑誌	7,028種
計	17,171種



みんぱくアクセス



●大阪・万博記念公園内
○大阪モノレール…「万博記念公園駅」または「公園東口駅」下車徒歩約15分
○バス…阪急茨木市駅・JR茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約13分
○乗用車…万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分
「日本庭園前駐車場」を利用される方は、「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
※自然文化園（有料区域）を通行するには、同園入場料が必要です。
※東口からは、自然文化園（有料区域）を通行せずに来館できます。
※東口または日本庭園前駐車場から来館し、自然文化園（有料区域）を通行してお帰りの場合は、同園入園料が必要です。

［お問い合わせ］
国立民族学博物館 管理部研究協力課研究協力係（大学院担当）
〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電 話　06-6878-8236（大学院担当）
FAX　06-6878-8479
E-mail　souken@minpaku.ac.jp
URL　http://www.minpaku.ac.jp/

http://www.minpaku.ac.jp/research/education/university

SOKENDAI
(The Graduate University for Advanced Studies)
School of Cultural and Social Studies
Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies

Overview '20

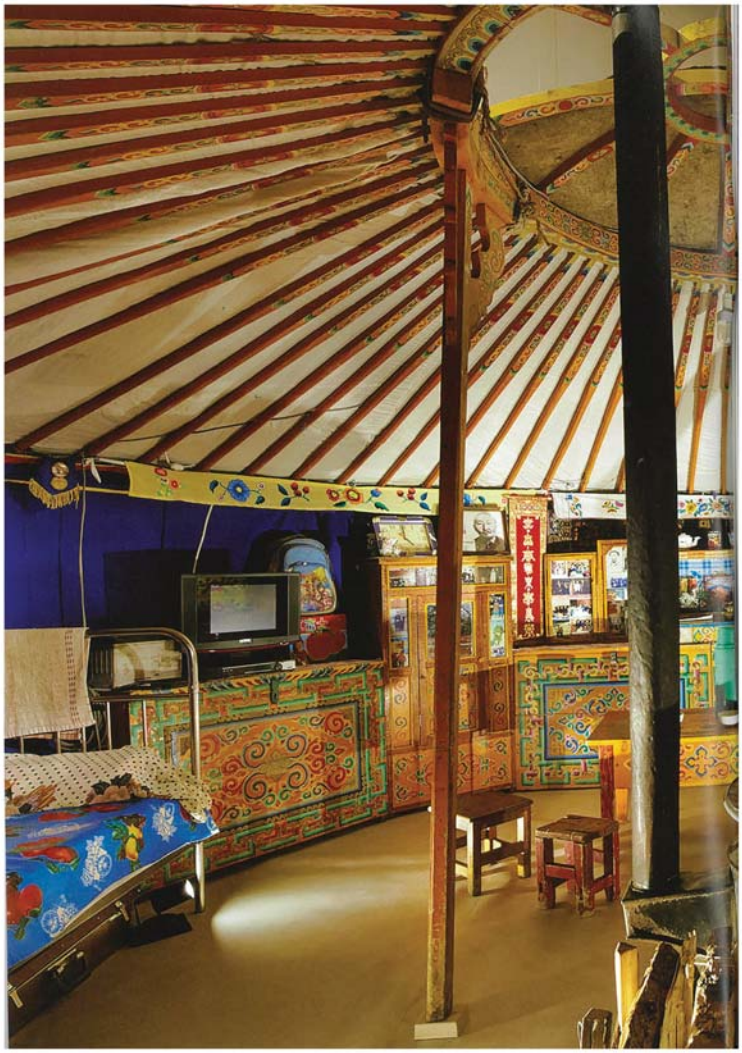
総合研究大学院大学
文化科学研究科
地域文化学専攻
比較文化学専攻

概要 '20



国立大学法人 総合研究大学院大学
THE GRADUATE UNIVERSITY FOR ADVANCED STUDIES

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology





国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館機能と博士課程の大学院教育機能を備えた文化人類学・民族学の研究センターとして、世界で唯一の存在です。みんぱくは、世界各地から集めた34万５千点の民族学標本資料を収蔵していますが、このコレクションは、20世紀後半以降に築かれた民族学関係の資料としては世界最大の規模をもちます。また、施設の規模のうえで、みんぱくは、世界最大の民族学博物館となっています。

みんぱくには、現在、52人の研究者がいますが、それぞれが世界各地でフィールドワークに従事し、人類の営みの多様性と共通性、そして地球規模でのつながりの中での社会の動態について調査研究を続けています。

人類の文明は、今、大きな転換点を迎えているように思います。これまでの、中心とされてきた側が周縁と規定されてきた側を一方的にまなざし、支配するという力関係が変質し、従来、それぞれ中心、周縁とされてきた人間集団の間に、創造的なものも破壊的なものも含めて、双方向的な接触と交流・交錯が至る所で起こるようになってきています。

そして、2020年、新型コロナウイルス感染症がほぼ同時に地球全体に広がるという事態に至って、私たちは、今、人類がこれまで経験したことのない局面にいやおうなく立ち会うことになりました。その状況の中で、私たちが現在の生活を送るうえで当たり前と思って来たあらゆる制度や規範の成り立ちやありようが洗い出され、その意義と存在理由が改めて問われるとともに、社会に潜在していた差別意識が浮かび上がり、世界の新たな分断の状況も生まれてきています。

それだけに、異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の違いを超えてともに生きる世界の構築をめざす文化人類学の知が、これまでになく求められているように思われます。

みんぱくには、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置されています。この両専攻に所属する大学院生は、文化人類学をはじめ言語学、宗教学、生態学、先史学、芸術学、民族音楽学そして博物館学など、広範な研究領域を専門とする個性ゆたかな教授陣の指導を受けられるのみならず、上で述べた世界に冠たる資料の蓄積に身近に接することができます。みなさんが、これらの学術資源を縦横に使いこなし、新たな研究の領野を切り開いて、それぞれの分野のパイオニアとしてはばたいて行かれることを期待しています。

国立民族学博物館長　吉田 憲司

専攻の特長

充実した教授陣

学生数をうわまわる教授陣は、学生一人一人の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また両専攻の教員は各分野の第一線で活躍する研究者であるため、最新の研究動向に基づいた指導をおこなうことができます。

豊富な情報源

日本における文化人類学・民族学関連の最大の資料類が揃っています。

また、国立民族学博物館が主催する数多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通して、国内外の優秀な研究者との交流ができます。

各種の支援制度

リサーチ・アシスタント制度、インターンシップ制度、授業料免除制度、学会発表やフィールドワークの旅費の援助など、充実した研究支援が受けられます。

指導体制

個別指導と共同指導を組み合わせたユニークな指導体制を採用しています。学生には正副2名の指導教員が指名され、入学から学位取得まで、日常的な指導をおこないます。一方、ゼミにおいては共同指導体制を取り入れています。ゼミは各4名の教員が担当し、研究の内容だけでなく発表方法などに関する指導をおこないます。担当教員以外の教員にもゼミへの参加を求めることができます。

スケジュール

学生は1年次において1年生ゼミでの指導をもとにフィールドワーク（現地調査）の準備をおこない、2年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別指導や論文ゼミでの共同指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

専攻案内

地域文化学専攻

独創的な文化人類学・民族学を目指して

本専攻は、国立民族学博物館が基盤機関となり、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ及びオセアニアの諸地域に居住する人びとの文化と社会に関する教育研究を行っています。各々の地域の特性や歴史を考慮しながら、民族誌学的方法論に基づく文化と社会の記述、構造の解明、動態の把握を目指します。現地調査から得られたデータを分析し、理論化し、学術的な貢献と実践的な提言ができる人材を養成します。



樫永 真佐夫 専攻長

比較文化学専攻

比較研究を通じて文化の諸現象を解明

本専攻は、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術、文化資源という6つの研究分野から構成されています。諸民族文化の比較研究により、各々に通底する普遍性の発見と理論的解明を目指します。基盤機関である国立民族学博物館の標本資料や映像音響資料、文献図書資料等を教育と研究に活かせることは本専攻の強みです。従来の文化人類学的研究方法に加えて、隣接諸科学の成果を導入し、新しい研究分野の開発を積極的に進めることができる人材を養成します。



鈴木 紀 専攻長

教員紹介

地域文化学専攻（2020年度）

相島 葉月 准教授

❶社会人類学・イスラーム学・中東研究

❷現代エジプトにおける美と身体文化に関する社会人類学的研究
日本と中東に関する文化的知識のグローバルな流通について
❸モダニティ、都市中流層、マスメディア、教育、現代イスラーム思想、消費、様式美、独創性、知的伝統

伊藤 敦規 准教授

❶アメリカ先住民研究・博物館人類学・知的財産問題の人類学的研究

❷日本国内博物館等所蔵アメリカ先住民資料の協働管理に向けた調査研究
❸米国先住民、博物館人類学

樫永 真佐夫 教授

❶東南アジア文化人類学

❷東南アジアの伝統的政治社会組織に関する歴史的研究
物質文化に焦点を当てた黒タイの民族誌的研究
ベトナムにおける国家と民族の関係に関する研究
❸東南アジア大陸部、ベトナム、黒タイ、白タイ、タイ系言語集団、社会人類学

川瀬 慈 准教授

❶映像人類学・民族誌映画

❷エチオピアの音楽職能集団の人類学的研究
民族誌映画制作の理論と実践に関する研究
アフリカの無形文化の保護と継承に資する映像人類学研究
人類学研究にもとづく創作的な話法の探求
❸映像人類学、民族誌映画、エチオピア、音楽職能、Ethio-Jazz、エスノフィクション

齋藤 玲子 准教授

❶アイヌ・北方先住民文化研究

❷アイヌ文化の継承と社会的背景についての研究
北アジアおよび北アメリカ先住民の物質文化に関する研究
❸アイヌ、北方先住民族、北海道、北アメリカ、物質文化、観光

新免 光比呂 准教授

❶宗教学・東欧研究

❷ファシズム運動における宗教的要因の比較研究
❸ルーマニア、ファシズム、レジオナール、キリスト教

池谷 和信 教授（2024年3月退任予定）

❶環境人類学・人文地理学・アフリカ研究・地球学

❷熱帯の狩猟採集文化、家畜飼育文化の変容に関する比較研究
南部アフリカにおける先住民運動に関する研究
地球環境史の構築に関する研究
❸地球環境、狩猟採集民、アフリカ、東北アジア、サン（ブッシュマン）、ソマリ、チュクチ、日本、バングラデシュ、環境人類学、人文地理学

小野 林太郎 准教授

❶海洋考古学・東南アジア研究・オセアニア考古学

❷熱帯島嶼域における人類史や資源利用史に関する考古学研究
漁撈や海の利用にかかわる人類・考古学的研究
水中文化遺産を対象とした海洋考古学的研究
❸東南アジア島嶼部、インドネシア、オセアニア、オーストロネシア語族、漁撈、水中文化遺産、人類史

河合 洋尚 准教授

❶社会人類学・漢族研究

❷空間、景観、フードスケープをめぐる人類学的研究
中国漢族地域における都市景観開発と文化遺産保護の研究
環太平洋の客家に関するマルチサイト民族誌
❸景観、風水、都市、コミュニティ、漢族、客家

齋藤 晃 教授

❶歴史人類学・ラテンアメリカ研究

❷植民地期アンデスにおける先住民の経集住化に関する国際共同研究
近世カトリックの世界宣教と文化適応に関する共同研究
❸ラテンアメリカ、植民地時代、先住民族、文化人類学、エスノヒストリー

島村 一平 准教授

❶文化人類学・モンゴル研究

❷モンゴル仏教のグローカル実践に関する学際・国際的地域研究
モンゴル・ヒップホップに関する文化人類学的研究
モンゴル人の輪廻転生と死生観に関する研究
❸モンゴル、ブリヤート、シャーマニズム、モンゴル仏教、エスニシティ、ナショナリズム、チンギスハーン表象、ヒップホップ

奈良 雅史 准教授

❶文化人類学・中国研究

❷中国における宗教と少数民族をめぐる人類学的研究
宗教と移動をめぐる人類学的研究
❸宗教実践、国家、自律性、公共性、移動、エスニシティ、ムスリム、回族

❶専門分野
❷現在の研究課題
❸研究のキーワード

西尾 哲夫 教授（2023年3月退任予定）

❶言語人類学・アラブ研究

❷グローバル化と中東地域の民衆文化に関する言語人類学的研究
多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究
❸中東、北アフリカ、アラビアンナイト、ナラトロジー

丹羽 典生 准教授

❶社会人類学・オセアニア地域研究

❷オセアニアにおける紛争と少数民族に関する研究
応援に関する通文化比較
❸宗教運動、紛争、開発、少数民族、応援

野林 厚志 教授

❶人類学・民族考古学・台湾研究・食文化研究

❷生業技術の通文化比較研究
食の多元的価値に関する人類学的研究
台湾におけるエスニシティの動態の探究
❸生業文化、食文化、物質文化、狩猟技術、野生動物、家畜動物、狩猟農耕民、台湾原住民族、エスニシティ、文化資源

信田 敏宏 教授

❶社会人類学・東南アジア研究

❷東南アジアの文化に関する人類学的研究
インクルーシブ社会に関する人類学的研究
❸東南アジア、マレーシア、オラン・アスリ、日本、博物館、知的障害者

林 勲男 教授（2022年3月退任予定）

❶社会人類学・オセアニア研究

❷自然災害への対応に関する人類学的研究
オセアニアにおけるキリスト教宣教師の活動に関する研究
❸災害、復興、記憶、宣教師、博物学誌、民族誌コレクション、オセアニア

平井 京之介 教授

❶社会人類学・日本研究・東南アジア研究

❷水俣病被害者支援運動の人類学的研究
「食の遺産」の生成に関する博物館人類学的研究
タイのコミュニティ博物館についての人類学的研究
❸日本、タイ、ラオス、経済人類学、社会運動、博物館、上座部仏教、水俣病

藤本 透子 准教授

❶文化人類学・中央アジア地域研究

❷中央アジアにおけるイスラーム実践の人類学的研究
カザフの伝統医療に関する研究
カザフの移動と社会再編に関する研究
❸中央アジア、カザフスタン、ムスリム、宗教実践、伝統医療、社会再編、移動

三尾 稔 教授

❶文化人類学・南アジア研究

❷南アジアにおける多様な宗教伝統の共生に関する研究
インドのナショナリズムと宗教の関係に関する研究
インドの大衆消費社会化と祭礼の変容に関する研究
❸ラージャスターン州メーワール地方（インド）、グジャラート州（インド）、ヒンドゥー、ムスリム、文化人類学、宗教人類学、南アジア地域研究

三島 禎子 准教授

❶文化人類学・西アフリカ研究

❷国際移動に関する文化人類学的研究
❸西アフリカ、セネガル、ソニンケ、商業民族、民族ネットワーク

南 真木人 准教授

❶南アジア民族誌研究・文化人類学

❷ネパール地震後の社会再編に関する研究
ネパール社会の30年間の変化に関する研究―1982年撮影番組の再資源化
❸ネパール地震、災害民族誌、包摂、社会再編、映像人類学、当事者コミュニティ、研究資源の共有化、ガンダルバ（楽師カースト）

森 明子 教授（2023年3月退任予定）

❶文化人類学・民族誌研究・ヨーロッパ人類学

❷人類学の記述とその社会的文脈
人類学的比較の再考
❸都市、家族、国家、場所、社会的なもの

山中 由里子 教授

❶比較文学比較文化

❷中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究
驚異と怪異の比較研究
アレクサンドロス伝承の東西伝播
❸西アジア、アラブ文学、ペルシア文学、博物学、驚異、イラン、東西交渉史

比較文化学専攻（2020年度）

❶専門分野
❷現在の研究課題
❸研究のキーワード

飯田　卓 教授
❶生態人類学・アフリカ地域研究・視覚メディアの人類学
❷マダガスカルにおける漁民文化と漁撈技術
アフリカにおける文化遺産とコミュニティの相互影響
日本人類学の発達における大衆メディアの役割
❸インド洋、アフリカ大陸、日本、人類学史、文化遺産実践、大衆アカデミズム、情報と知

卯田 宗平 准教授
❶環境民俗学・東アジア研究
❷動物と人間とのかかわりをめぐる民俗学的研究
❸自然と人間、動物利用、リバランス論、*縄綱文化、トナカイ飼養、物質文化、技術と技能

太田 心平 准教授
❶社会文化人類学・北東アジア研究・博物館組織行動論
❷韓国・朝鮮社会における文化の統合性と多様性の研究
労働現場としての博物館における組織行動と動機付け
❸韓国・朝鮮、近代性、社会的記憶、物語論、世代集団、知識生成、博物館

菊澤 律子 准教授
❶言語学・オーストロネシア諸語・言語研究における地理情報システム(GIS)の利用
❷オーストロネシア諸語における統語構造の変遷
言語データを軸としたオセアニアの先史に関する学際研究
手話言語と音声言語の対照研究
❸オセアニア、フィジー、オーストロネシア、記述言語学、比較（歴史）言語学、比較（歴史）統語論、先史言語学、手話言語学

菅瀬 晶子 准教授
❶文化人類学・中東地域研究
❷パレスチナ・イスラエルを中心とした東地中海アラブ地域で、一神教徒が共有する聖者崇敬の研究
イスラエルにおけるアラブ人市民を中心とした、マイノリティによる文化表象のありかた
❸中東、東地中海、パレスチナ、イスラエル、キリスト教徒、マイノリティ、アイデンティティ、エスニシティ、文化表象、共存

鈴木　紀 教授
❶開発人類学・ラテンアメリカ文化論
❷開発援助プロジェクトの人類学的評価法
博物館における先住民族文化表象
❸ラテンアメリカ、メキシコ、ユカタン、開発援助、フェアトレード、博物館展示学

上羽 陽子 准教授
❶民族芸術学・染織研究・手工芸研究
❷現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究
❸民族芸術学、手工芸文化、染織研究、インド、伝統的技術

宇田川 妙子 教授
❶南ヨーロッパ研究・性研究
❷イタリアおよび地中海ヨーロッパの民族誌的研究
ジェンダー／セクシュアリティに関する文化人類学的研究
社会理論の批判的再考
❸イタリア、地中海ヨーロッパ、イタリア人、文化人類学、ジェンダー／セクシュアリティ研究、南ヨーロッパ研究、性研究

韓　敏 教授
❶社会人類学・中国研究
❷歴史記憶と集団に関する人類学的研究
❸社会主義近代化、中国、文化遺産、観光、文化表象、記憶、聖地巡礼、英雄崇拝、漢族、シボ族

笹原 亮二 教授
❶民俗学・民俗芸能研究
❷モノの遺存の総体的把握を通じた生活文化に関する民俗学的研究
❸日本、民俗学、三匹獅子舞、民俗芸能

鈴木 七美 教授（2023年３月退任予定）
❶歴史人類学・医療人類学・エイジング研究
❷超高齢社会のエイジングフレンドリー・コミュニティ
キルトドキュメンテーション活動――アーミッシュキルトから考える
❸エイジング・イン・プレイス、米国宗教コミュニティ、アーミッシュキルト

關　雄二 教授（2022年３月退任予定）
❶アンデス考古学・ラテンアメリカ研究
❷古代アンデス文明における権力の発生に関する研究
ペルーにおける世界文化遺産概念と国家・地域の文化遺産概念との相互作用に関する研究
❸ペルー、ラテンアメリカ、メスティソ、アンデス考古学、文化人類学

園田 直子 教授（2024年３月退任予定）
❶保存科学
❷博物館における持続可能な資料管理に関する研究
資料の展示・保存環境に関する研究
収蔵庫の再編成に関する研究
❸保存科学、総合的有害生物管理（IPM）、博物館環境

寺村 裕史 准教授
❶情報考古学・文化情報学
❷情報考古学的手法を用いた文化資料のデジタル化と情報統合に関する研究
❸GIS（地理情報システム）、考古学、情報科学

廣瀬 浩二郎 准教授
❶日本宗教史・民俗学
❷障害者文化に関する人類学的研究
日本近代の新宗教に関する歴史的研究
❸日本、東北、九州、京都、歴史、宗教、福祉、文化

ピーター J.マシウス 教授
❶先史学・民族植物学
❷History of agriculture and plant domestication, with specific interests in taro (Colocasia esculenta), paper mulberry (Broussonetia papyrifera), and other plants used for food, fodder and fibre
❸Asia, Pacific, Mediterranean, ethnobotany, ethnobiology, plant domestication, food history

丸川 雄三 准教授
❶文化財情報発信・連想情報学
❷連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究
❸文化財、連想検索、デジタルアーカイブ

吉田 憲司 教授（国立民族学博物館長）
❶博物館人類学・アフリカ研究
❷アフリカにおける造形と儀礼の人類学的研究
博物館・美術館における文化の表象のあり方の研究
❸アフリカ、ヨーロッパ、日本

出口 正之 教授（2021年３月退任予定）
❶非営利組織の政策人類学的研究
❷公益法人その他の組織とフィランソロピーの政策人類学的研究
❸フィランソロピー、メセナ、非営利組織、NPO、公益法人、公益認定制度、ボランティア、寄付学、政策人類学

日髙 真吾 教授
❶保存科学・保存修復
❷地域文化の保存と活用に関する研究
博物館における保存処理法の研究
❸日本、保存科学、保存処理

福岡 正太 教授
❶民族音楽学・東南アジア研究
❷映像音響メディアとインドネシア音楽の変容
伝統芸能の伝承と映像記録
❸インドネシア［スンダ］、東南アジア、映像音響メディア、民族音楽学

松尾 瑞穂 准教授
❶文化人類学・ジェンダー医療人類学・南アジア研究
❷近代化、開発がもたらすリプロダクション実践の変容に関する研究
サブスタンスと身体研究
子育ての比較文化論
❸リプロダクション（性と生殖）、ジェンダー、インド、サブスタンス、身体

吉岡 乾 准教授
❶言語学・南アジア研究
❷北パキスタン諸言語の記述言語学的研究
❸ブルシャスキー語、ドマーキ語、カティ語、カラーシャ語、記述言語学、パキスタン、カラコラム山脈、ヒンドゥークシ山脈

博士後期課程（Ph.D.）

課程修了の要件、学位取得までの流れ

■ 学位取得の要件

学位を取得するためには、所定の３年限以上在学し、必要な研究指導を受けた上で、所定の単位数以上を修得し、博士論文の審査及び試験に合格すること（課程博士）が必要です。

■ 学位取得までの流れ

１年次	１年生ゼミ出席
	現地調査準備
	調査計画書提出
２年次前期以降	現地調査
	調査報告、博士論文構想発表
３年次	必須履修単位取得
	博士論文草稿発表
３年次後期以降	課程博士出願
	論文公開発表会・口述試験
	最終試験・合否決定
	学位授与



研究支援

■ リサーチ・アシスタント（RA）制度

教員の指示・監督の下で、研究者の補助として、研究活動に必要な様々な業務をおこないながら給与を得ることができます。

■ 学生派遣事業

学位申請論文作成に不可欠な国内外の調査や学会での成果発表に要する旅費、宿泊費などの支援をおこないます。

■ インターンシップ制度

深い専門性と広い視野、国際通用性をそなえた研究者の育成を目的として、国内外の大学、研究機関、企業等における共同研究活動や調査活動等に必要な経費を支援する制度です。

■ 入学料・授業料免除等制度

経済的理由により入学料や授業料の納入が困難な学生に対する経済的支援として、入学料・授業料の免除（収納猶予・分納）の制度があります。授業料免除については、毎年２回、授業料免除申請の受付をおこなっています。授業料免除許可者は、半期の授業料の半額（267,900円）が免除されます。

■ 特別講義

外部研究資金調達のための申請書の書き方、論文投稿のしかたなどをテーマにした特別講義をおこなっています。

■ 日本学術振興会「特別研究員（DC２）」採用数

年　度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
採用数	3	3	4	2	1	2	2	2	2	4	0	2	2

在学生の声

地域文化学専攻

松永 千紗

私は、アメリカ合衆国に現存する日本町のひとつである「サンノゼ日本町」を、コミュニティの視点から研究しています。修士課程では、この日本町にあるサンノゼ日系アメリカ人博物館を対象に、解説員による語りの継承について研究していました。博士課程では、この博物館が日本町で果たす役割への興味から始まり、コミュニティへと研究対象が発展していきました。

地域文化学専攻は、国立民族学博物館（みんぱく）を基盤機関としています。博物館の形として最先端である「フォーラム型情報ミュージアム」プロジェクトの試みを間近で見られるなど、博物館研究に最適の場所です。さらに、みんぱくは、博物館研究だけでなく、人類学や民族学、考古学などの分野を専攻する学生にとって、非常に理想的な環境だといえます。館内には、世界最大級の所蔵品や人類学・民族学に関する膨大かつ多様な資料があり、これらを用いた研究が可能です。また、みんぱくには学生数を遥かに超える様々な専門分野の先生方が所属されており、希望すれば、それぞれの専門分野の視点から、的確なコメントを頂くことができます。加えて、館内で開かれる様々な共同研究や講演、プロジェクトに参加する機会にも多く恵まれます。また、専攻では、当該分野に必須であるフィールドワークに対する経済的な支援も充実しています。

私は、このような恵まれた研究環境をできる限り活用しながら、日々研究に邁進しています。多様な分野の先生方との対話、共同研究への参加、充実した資料の活用、さらにフィールドワークの支援など、地域文化学専攻には、良い研究成果を残すことができるすべての環境が整っているといえるでしょう。



サンノゼ日本町でのお盆祭り
（カリフォルニア州サンノゼ市、2019年）

比較文化学専攻

孫文

2008年5月12日、四川省アバ・チベット族チャン族自治州でM8.0の大地震（「5・12四川大地震」）が発生しました。同年、私は中国の中央民族大学に入学し、震災復旧について研究をはじめました。修士課程では、四川大地震の被災地を訪問し、日常生業の変化と資源問題について調べました。調査結果を整理するために参考にしたのは、日本の資源人類学研究と生業研究でした。これがきっかけとなり日本の人類学に関心をもちました。特に、日常の些細なことに対する研究姿勢が興味深いと思います。

災害、生業、開発が博士課程を選ぶためのキーワードでした。総研大（みんぱく）には、異なる研究分野の人類学者が大勢集まっています。多様な研究視座と国際的な視野に憧れて、私は総研大に進学すると決心しました。現在の研究テーマは、2008年の地震で被災した四川省の黒水チベット族の開発状況とアイデンティティの選択策略で、さまざまな立場の人々の日常的実践に着目しています。

自分の研究を遂行するために、総研大本部やみんぱくの支援制度が役立ちます。私は予備調査のために「学生派遣事業」を利用しました。また学外の助成金に関する情報も豊富です。そのおかげで2020年度日本学術振興会の特別研究員（DC2）に選ばれました。申請の際、指導教員と研究協力係が丁寧に支援してくださったことは、今後一生の財産だと思います。

人類学の研究者として、国立民族学博物館の収蔵資料も魅力です。自分の研究だけでなく、世界の文化を比較するために重要なヒントが得られます。総研大（みんぱく）で学びながら、研究室の仲間と先生方から、通文化的研究と学際的研究のドアを開いていただきました。



貧困削減計画への解説　調査地の政府役人
（中国四川省黒水県、2019年）

学位論文リスト

学位論文リスト

2006年度以降

【課程博士】

オイラド・モンゴルにおける口頭伝承とアイデンティティ―故郷創出物語から―	査 斯 査 干（地域）	[2020.3.24 文学]
中国都市部の家庭の食生活に関する歴史民族誌 ―社会主義制度下（1949-2018年）の天津市の事例―	劉　征宇（比較）	[2020.3.24 文学]
神戸南京町50年の民族誌的研究―包摂的チャイナタウンの生成と変容―	辺　清音（比較）	[2020.3.24 学術]
中国新疆オイラドの宗教復興に関する人類学的研究 ―寺とオワー祭祀の復活に関わる転生活仏シャリワン・ゲゲン14世―	那 木 加 甫（地域）	[2019.3.22 学術]
中国青海省におけるチベット仏教復興運動下の民間信仰の変容に関する人類学的研究 ―同仁県ワォッコル村を事例として―	喬 且 加 布（地域）	[2018.3.23 文学]
近代フィリピンにおける民族衣装をまとった聖母像の研究	古沢ゆりあ（比較）	[2017.9.28 文学]
自然資源の利用に関する環境人類学的研究 ―ニカラグアの先住民による漁業のウミガメ漁の事例―	高木　仁（地域）	[2017.3.24 文学]
スナックにおける言語コミュニケーション研究 ―対人関係を調節する接客言語ストラテジー―	中田　梓音（比較）	[2016.9.28 文学]
日本社会の自然葬に関する民族誌的研究 ―NPO法人「葬送の自由をすすめる会」を中心に―	金セッビョル（地域）	[2016.3.24 文学]
都市回族コミュニティの維持と宗教実践 ―中国陝西省西安市における回族の帰属意識をめぐる民族誌的研究―	今中　崇文（地域）	[2016.3.24 文学]
韓国の地域社会における華僑のアイデンティティに関する民族誌的研究 ―韓国華僑ビジネスと華僑協会を中心に―	金　桂淵（地域）	[2015.9.28 文学]
「野球移民」を生みだす人びと―ドミニカ共和国におけるトランスナショナル移民研究―	窪田　暁（比較）	[2015.3.24 文学]
モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる交渉に関する民族誌	堀田あゆみ（地域）	[2015.3.24 学術]
中国雲南省における徳宏タイ族の部屋うたと感性の民族誌的研究	伊藤　悟（地域）	[2014.9.29 文学]
My Huaca: The Use of Archaeological Heritage in Modern Peru from a Public-Archaeology Perspective	サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ（比較）	[2014.9.29 文学]
ナイジェリアの都市イレ・イフェにおける「アーティスト」の民族誌的研究	緒方しらべ（比較）	[2014.3.20 文学]
変化しつづける装い ―中国雲南省文山モンの自己と他者をめぐる人類学的服飾研究―	宮脇　千絵（地域）	[2012.9.28 文学]
現代アンデス農村における聖人信仰の変容 ―人の移動に焦点をあてて―	八木百合子（比較）	[2012.9.28 文学]
無文字社会における歴史記憶の生成と継承 ―南エチオピア牧畜民ボラナにおける口承史の分析をとおして―	大場　千景（地域）	[2012.3.23 文学]
カオダイ教ハノイ聖室の民族誌的研究 ―ベトナム北部地域の都市における女性たちの社会関係―	伊藤まり子（地域）	[2012.3.23 文学]
周辺イスラームのダイナミズム ―タイ南部村落におけるイスラーム復興運動と宗教実践の変容―	小河　久志（地域）	[2012.3.23 文学]
ヨーグルトをめぐる言説の生成と展開 ―社会主義期からポスト社会主義期にかけてのブルガリアを中心に―	マリア・ヨトヴァ（比較）	[2011.9.30 文学]
オーストラリア先住民ヨルタ・ヨルタの環境管理のための先住民運動に関する文化人類学的研究	友永　雄吾（地域）	[2011.3.24 文学]
現代タイ社会における開発と僧侶 ―僧侶による社会貢献とネットワーク形成に焦点をあてて―	岡部真由美（地域）	[2011.3.24 文学]
現代東南中国における宗親会の民族誌的研究 ―国家との関係を中心として―	陳　夏晗（比較）	[2011.3.24 文学]
農業技術改善の民俗誌 ―紀ノ川下流域村落の一七～二〇世紀前半における動向の分析―	加藤　幸治（比較）	[2010.9.30 文学]
日本の先史時代における植物性食料の加工と利用 ―残存デンプン分析法の理論と応用―	渋谷　綾子（比較）	[2010.3.24 文学]
韓国における老人の食 ―老人福祉施設を中心に―	守屋亜記子（地域）	[2009.3.24 文学]
インド農村社会における不妊経験の人類学的研究	松尾　瑞穂（比較）	[2008.9.30 文学]
フェラインの民族誌 ―ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション―	山田　香織（地域）	[2008.3.19 文学]
水上人と呼ばれる人々 ―広東珠江デルタの漢族エスニシティとその変容―	長沼さやか（地域）	[2008.3.19 文学]
在米コリアンのサンフランシスコ日本町 ―マルチカルチャーのエスニックタウン―	小谷　幸子（比較）	[2008.3.19 文学]
参加型開発を通した女性の自己変容過程に関する人類学的研究 ―北インド農村社会を事例として―	菅野美佐子（比較）	[2007.9.28 文学]
「場」と「パフォーマンス」に関する人類学的研究 ―トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として―	米山　知子（比較）	[2007.9.28 文学]
上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的研究	飯国有佳子（地域）	[2007.3.23 文学]
「護り」の身体技法に関する映像人類学研究 ―インドネシア・ミナンカバウの事例から―	村尾　静二（比較）	[2007.3.23 文学]
離散と故郷 ―ヨルダンのパレスチナ系住民にみられる帰属意識とナショナリズム―	錦田　愛子（地域）	[2007.3.23 文学]
「子ども域」の文化人類学的研究 ―バングラデシュ農村社会の子ども―	南出　和余（比較）	[2007.3.23 文学]

【論文博士】

グローバル化する互酬性 ―サモア世界の儀礼財の循環と首長制―	山本　真鳥	[2017.3.24 文学]
ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成 ―東北地方のヌン・アン集団の事例から―	チュ・スワン・ザオ	[2015.9.28 文学]
アイヌ衣文化の研究	津田　命子	[2014.9.29 学術]
先住民生存捕鯨再考 ―国際捕鯨委員会における議論とベクウェイ島の事例を中心に―	濱口　尚	[2013.9.27 文学]
多文化都市・新宿の生成と展開 ―ライフサイクルの視座―	川村千鶴子	[2013.3.22 学術]
先史アンデス形成期の社会動態 ―ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から―	山本　睦	[2012.9.28 文学]
小集落から見た初期国家の形成過程 ―先スペイン期中央アンデスのワリ国家を事例として―	土井　正樹	[2012.3.23 文学]
スリランカにおけるエステート・タミルのアイデンティティと「ジャーティヤ」をめぐる人類学的研究	鈴木　晋介	[2011.3.24 文学]
活用される職種伝承 ―近・現代日本における木工挽物の担い手と木地屋「根元地」―	木村　裕樹	[2010.9.30 文学]
先住民学習の理論と実践―ポストコロニアル人類学の活用―	中山　京子	[2010.9.30 学術]
シャーマニズムによるエスニシティの探求 ―ポスト社会主義期におけるモンゴル・ブリヤートの事例を中心として	島村　一平	[2010.3.24 文学]
国際線客室乗務員の接客業務と勤務体制 ―仕事の人類学的研究―	八巻　惠子	[2009.9.30 文学]
「アイヌ風伝画」の研究 ―近世北海道におけるアイヌと美術	新明　英仁	[2007.9.28 文学]

年度別学位授与者数

		'91～'06年	'07年	'08年	'09年	'10年	'11年	'12年	'13年	'14年	'15年	'16年	'17年	'18年	'19年	計
地域文化学専攻	課程博士	23	2	1	0	2	3	1	0	2	3	1	1	1	1	41
	論文博士	12	1	0	1	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	18
比較文化学専攻	課程博士	15	3	1	1	2	1	1	1	2	0	1	1	0	2	31
	論文博士	7	0	0	1	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	14
計		57	6	2	3	7	5	4	2	5	4	3	2	1	3	104

よくある質問

Q 学部をもつ大学院の教育と比べてどんな特徴がありますか？

A 教員数が学生数をうわまわるという、他大学にはない恵まれた教育環境があげられます。教員：学生の比率はおおよそ３：２であり、個々の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また教員は各分野の第一線で活躍する研究者であり、最新の研究動向に基づいた指導をおこなえます。さらに、民博が所蔵する豊富な研究資料（図書68万冊、標本資料34万５千点、映像音響資料７万点など）の利用、館が主催する多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通し、国内外の研究者との交流ができます。

Q 地域文化学専攻と比較文化学専攻の二専攻には、どのような違いがありますか？

A 地域と比較に別れているものの、共にフィールドワークを研究の根幹においているため、共通する部分も多く、密接な相互交流があります。また、専攻間に指導上の棲み分けはなく、院生がどちらに所属していても、両専攻の教員の指導を受けることができます。

Q 二専攻で学ぶことができるのは、文化人類学・民族学だけでしょうか？

A そんなことはありません。両専攻には、考古学、民俗学、宗教学、芸術学、言語学、音楽学、博物館学、保存科学など幅広い分野を専門とする教員がそろっていますから、それらの分野でも研究をおこなうことができます。また、教員の陣容は年度によって変化することがありますから、希望研究内容と当該専攻の教育体制との整合性について不明な点がある方は、前もってご相談ください。

Q 受験する前に希望する指導教員をかならず決めておく必要がありますか？

A 必要条件ではありませんが、強くお勧めします。また、受験を申請する前に希望指導教員に連絡を取れば、入学後の研究の見通しを立てる一助となるでしょう。

Q 学部や修士課程で文化人類学・民族学を専攻しなかったのですが、受験はできますか？

A 正規に文化人類学・民族学を学んだ経験がなくても受験はできます。しかし、入学後に志望研究が遂行可能であるか見通しをつけるためにも、関連図書などを精読し、少なくとも人類学やフィールドワークに関する基本的な考え方について理解しておくほうがよいでしょう。これは、何をするために当専攻を受験するのか整理するためにも役立つはずです。

Q できるだけ早く学位を取得したいのですが、３年で取得するのは難しいでしょうか？

A フィールドワークを研究の中心に据えている分野であるため、３年間で学位を取得するのは容易ではありません。早い取得が望ましいことは言うまでもありませんが、学問の進展に寄与できる質の高い研究成果を上げ、最終学位である博士号に相応しい研究能力を養うことがより重要であり、この点に留意した指導がおこなわれています。

Q 修士課程ですでに現地調査をはじめているのですが、入学後すぐに長期の現地調査をすることは可能ですか？

A 原則として、初年度は、長期フィールドワークをおこなうための準備期間にあてられています。フィールドワークは、単に現地に行けば遂行できるものではありません。また、修士課程でフィールドワークをすでにおこなっている場合でも、博士論文執筆のための調査では、求められる調査の質に大きな差があることが多いのです。入学後の一年間は、教員の指導のもと、調査計画の実現性・妥当性などについて、それまでの自己の研究成果や先行研究との関連に留意しながら検討します。年度末には、フィールドワークに向けたリサーチプロポーザルに関する発表をおこない、計画をより実現性の高いものへと練っていきます。

▼ その他の質問はこちら
https://www.minpaku.ac.jp/research/education/university/information/faq

修了生の声

京都市文化財保護課　文化財保護技師（民俗文化財担当）　**今中 崇文**（2016年３月学位取得）

総研大の地域文化学専攻・比較文化学専攻が設置されている国立民族学博物館は、日本でも有数の文化人類学・民族学の研究センターです。学部から修士課程まで東洋史学専攻に在籍していた私は、中国のイスラームを信仰する少数民族、回族の日常的な宗教実践やコミュニティについて関心を持ち、その解明にはフィールドワークが不可欠になることから、ここならば充分な指導を受けられるのではないかと考え、総研大に進学しました。

実際、総研大在籍中には、フィールドワークを実施するための多種多様なサポートを受けることができました。先生方からの指導・助言はもちろんのこと、院生同士で交換されるフィールドワークの情報も大いに役立ちました。総研大の研究支援制度を利用し、追加調査の費用をまかなわせてもらったこともあります。デジタルカメラやレコーダーといった機器も借り出すことができます。

民博には、文化人類学・民族学だけでなく、民俗学や考古学、博物館学、保存科学など、幅広い分野の先生方が在籍されています。そこに集う学生もさまざまな分野の出身者で構成されており、ゼミや講義は言うに及ばず、学生同士で繰り広げられる議論も多岐にわたります。さらには、民博が主催する共同研究会やシンポジウムなどに参加させてもらい、国内外のさまざまな分野の専門家と直接交流することが可能です。現在、私は民俗文化財担当の文化財保護技師として、京都市内の有形・無形民俗文化財の保護に携わっていますが、しばしば思わぬところで、民博での耳学問で得られた知識が役に立っています。

自らの研究を深めるとともに、その幅を広めるためにも、総研大・民博はこれ以上ない環境といえます。貪欲に活用していただきたいと思います。



中国社会科学院　助理研究員　**那木加甫**（ナムジャフ）（2019年３月学位取得）

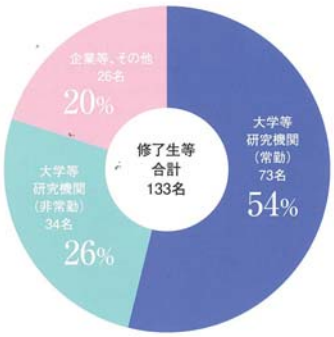
私は今日のモンゴル族を構成する１つのエスニック集団であるオイラド・モンゴルを対象に研究しています。オイラド・モンゴルは現在、中国、モンゴル国、ロシア、キルギス共和国などの各国に広く分布しています。博士課程在学中、私は中国の新疆ウイグル自治区を中心にオイラド・モンゴルの宗教復興について調査研究をしました。

修士課程は名古屋大学東洋史専攻に在籍し、歴史学の視点と方法を用いてオイラド・モンゴルを研究していた私にとって、総研大・国立民族学博物館（民博）に在学した５年間は多くの新しいことを学ぶいい機会に恵まれた期間でもありました。総研大・民博では、博士課程における研究計画や中間報告、論文の構想などをゼミで発表し、多地域・多分野の研究者から意見やアドバイスをいただきます。それによって私自身も国境を越えて分布するオイラド・モンゴルの地域間比較をする必要性を感じ、ロシアやモンゴル国においても調査を行ない、オイラド・モンゴルを切り口に中央アジアやモンゴル社会に関する理解が実に深まりました。また、人類学の基礎理論から、調査方法、調査支援制度への申請、学振の申請、雑誌論文への投稿にいたるまで手厚い指導をしていただきました。学生も多く、研究地域やテーマは異なりますが、同じく研究に専念している多くの仲間がいることは研究生活において大きな支えとなりました。これから総研大・民博に入学する後輩のみなさんにもぜひ総研大・民博の豊かな研究環境を活用してほしいです。



修了生等の進路

修了生等の進路（2020年7月）



大学等研究機関（常勤）勤務先

愛知淑徳大学、インドネシア学術総局（インドネシア）、愛媛大学、大阪大学、鹿児島純心女子大学、神奈川大学、金沢星稜大学、川崎医療福祉大学、関西外国語大学、神田外語大学、京都外国語大学、京都大学、京都文教大学、神戸市外国語大学、神戸女学院大学、神戸大学、神戸山手大学、国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館、滋賀県立近代美術館、静岡大学、静岡文化芸術大学、四天王寺国際仏教大学、芝浦工業大学、上海師範大学（中国）、就実大学、女子栄養大学、成蹊大学、青海民族大学蔵学院（中国）、清泉女学院、総合地球環境学研究所、ソウル大学（韓国）、大東文化大学、中京大学、中国社会科学院（中国）、中部大学、筑波大学、帝京大学、東京外国語大学、東京大学、東北学院大学、東洋大学、長崎純心大学、奈良県立大学、南山大学、日越大学（ベトナム）、日本赤十字九州国際看護大学、日本大学、人間文化研究機構、阪南大学、広島市立大学、宮崎公立大学、桃山学院大学、山形大学、ライデン大学（オランダ）、立命館大学、龍谷大学

入学選考

■ 入学者選抜の基本的な考え方

第一次選抜（書類審査）では、修士論文または他の学術論文等について、独創性、研究史の把握、実証性、論理性の各項目に基づき評価します。また、研究内容（研究活動の概要、これまでに行った研究の要旨、これから志望する研究）については、計画の妥当性、計画の具体性、学問的意義、発展性の各項目に基づき評価します。

第二次選抜（面接審査）では、これまでに行った研究、修士論文等の内容、これから志望する研究に関する口頭試問を通し、討論能力、語学力、研究意欲等を評価します。

書類審査、面接審査の各項目を総合的に判断し、合否を判定します。

■ 求める学生像

【地域文化学専攻】

世界の多様な地域社会や地域文化について広い関心をもち、とりわけ文化人類学・民族学の基礎研究に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。

【比較文化学専攻】

人間の社会や文化について広い関心を抱き、とりわけ学問的な理論化やその社会的な応用に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行することができる学生。



■ 募集人数

専攻	課程の種類	講座（分野）	募集人員
地域文化学専攻	博士課程の後期*3年の課程	アジア地域文化Ⅰ、アジア地域文化Ⅱ、ヨーロッパ地域文化、アフリカ地域文化、アメリカ地域文化、オセアニア地域文化	3人
比較文化学専攻		比較社会研究、比較宗教研究、比較技術研究、比較言語研究、比較芸術研究、文化資源研究	3人

■ 入学者選抜日程

出願資格認定審査 修士または専門職学位に相当する学力のある方は、事前に出願資格認定審査を行います	2020年11月2日（月） ～2020年11月5日（木）
入学願書受付期間	2020年11月26日（木） ～2020年12月2日（水）
第一次選抜（書類選考）・結果通知	2021年1月中旬
第二次選抜（面接審査）	2021年1月25日（月） ※予備日1月26日（火）
合格発表	2月中旬
入学手続き	2021年3月15日（月） ～2021年3月18日（木）

▼ 出願書類および出願までの流れ等についてはこちら
https://www.minpaku.ac.jp/research/education/university/information/steps

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館（みんぱく）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。みんぱくは、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究や共同研究を進めるとともに、学術情報を集積しています。その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することも使命としています。

みんぱくは「博物館機能をそなえた研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。みんぱくの展示は、常設展示と特別展示と企画展示とで構成されており、常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示と企画展示は、特定のテーマのもとに、年に数回、期間を限って開催されます。

所蔵民族学資料（2020年3月31日現在）

【標本資料】	
海外資料	179,256点
国内資料	165,878点
計	345,134点

【映像音響資料】	
映像資料	8,223点
音響資料	62,651点
計	70,874点

【文献図書資料】	
日本語図書	268,282冊
外国語図書	413,897冊
計	682,179冊
日本語雑誌	10,144点
外国語雑誌	7,051点
計	17,195点





みんぱくアクセス



●大阪モノレール……「万博記念公園駅」「公園東口駅」下車徒歩約15分
●バス（近鉄バス）……阪急茨木市駅・JR茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約13分
阪急茨木市駅から約20分、JR茨木駅から約10分
●乗用車……万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分
※万博記念公園各ゲートで、国立民族学博物館の観覧券をお買い求めください。
同園内を無料で通行できます。
※万博記念公園をご利用になる場合は、同園入園料が必要です。

［お問い合わせ］
国立民族学博物館 管理部研究協力課研究協力係（大学院担当）
〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電 話　06-6878-8236（大学院担当）
FAX　06-6878-8479
E-mail　souken@minpaku.ac.jp
URL　https://www.minpaku.ac.jp/
https://www.minpaku.ac.jp/research/education/university

SOKENDAI
(The Graduate University for Advanced Studies)
School of Cultural and Social Studies
Department of Regional Studies
Department of Comparative Studies

Overview '21

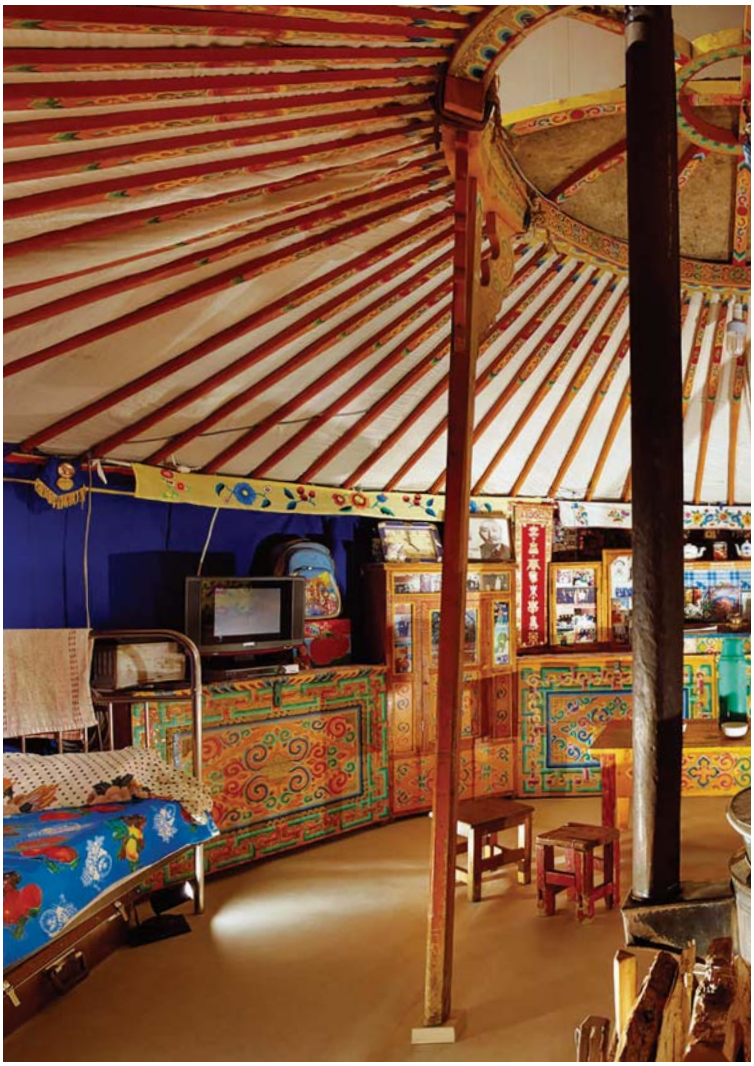


総合研究大学院大学
文化科学研究科
地域文化学専攻
比較文化学専攻

概要 '21

国立大学法人 総合研究大学院大学
THE GRADUATE UNIVERSITY FOR ADVANCED STUDIES

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology





国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館機能と博士課程の大学院教育機能を備えた文化人類学・民族学の研究センターとして、世界で唯一の存在です。みんぱくは、世界各地から集めた34万５千点を超える民族学標本資料を収蔵していますが、このコレクションは、20世紀後半以降に築かれた民族学関係の資料としては世界最大の規模をもちます。また、施設の規模のうえで、みんぱくは、世界最大の民族学博物館となっています。

みんぱくには、現在、52人の研究者がいますが、それぞれが世界各地でフィールドワークに従事し、人類の営みの多様性と共通性、そして地球規模でのつながりの中での社会の動態について調査研究を続けています。

人類の文明は、今、大きな転換点を迎えているように思います。これまでの、中心とされてきた圏が周縁と規定されてきた圏を一方的にまなざし、支配するという力関係が変質し、従来、それぞれ中心、周縁とされてきた人間集団の間に、創造的なものも破壊的なものも含めて、双方向的な接触と交流・交錯が至る所で起こるようになってきています。

そして、新型コロナウイルス感染症がほぼ同時に地球全体に広がるという事態に至って、私たちは、今、人類がこれまで経験したことのない局面にいやおうなく立ち会うことになりました。その状況の中で、私たちが現在の生活を送るうえで当たり前と思って来た慣行やルール、とりわけ人類が近代に入って作り上げてきたあらゆる制度や規範の成り立ちやありようが洗い出され、その意義と存在理由が改めて問われることになっています。同時に、社会に潜在していた差別意識が浮かび上がり、世界の新たな分断の状況も生まれてきています。

それだけに、異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の違いを超えてともに生きる世界の構築をめざす文化人類学の知が、これまでになく求められているように思われます。

みんぱくには、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置されています。この両専攻に所属する大学院生は、文化人類学をはじめ言語学、宗教学、生態学、考古学、芸術学、民族音楽学そして博物館学など、広範な研究領域を専門とする個性ゆたかな教授陣の指導を受けられるのみならず、上で述べた世界に冠たる資料の蓄積に身近に接することができます。みなさんが、これらの学術資源を縦横に使いこなし、新たな研究の領野を切り開いて、それぞれの分野のパイオニアとしてはばたいて行かれることを期待しています。

国立民族学博物館長　吉田 憲司

専攻の特長

充実した教授陣

学生数をうわまわる教授陣は、学生一人一人の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また両専攻の教員は各分野の第一線で活躍する研究者であるため、最新の研究動向に基づいた指導をおこなうことができます。

豊富な情報源

日本における文化人類学・民族学関連の最大の資料類が揃っています。

また、国立民族学博物館が主催する数多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通して、国内外の優秀な研究者との交流ができます。

各種の支援制度

リサーチ・アシスタント制度、インターンシップ制度、授業料免除制度、学会発表やフィールドワークの旅費の援助など、充実した研究支援が受けられます。

指導体制

個別指導と共同指導を組み合わせたユニークな指導体制を採用しています。学生には正副２名の指導教員が指名され、入学から学位取得まで、日常的な指導をおこないます。一方、ゼミにおいては共同指導体制を取り入れています。ゼミは４名の教員が担当し、研究の内容だけでなく発表方法などに関する指導をおこないます。担当教員以外の教員にもゼミへの参加を求めることができます。

スケジュール

学生は１年次において１年生ゼミでの指導をもとにフィールドワーク（現地調査）の準備をおこない、２年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別指導や論文ゼミでの共同指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

専攻案内

地域文化学専攻

独創的な文化人類学・民族学を目指して

本専攻は、国立民族学博物館が基盤機関となり、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ及びオセアニアの諸地域に居住する人びとの文化と社会に関する教育研究を行っています。各々の地域の特性や歴史を考慮しながら、民族誌学的方法論に基づく文化と社会の記述、構造の解明、動態の把握を目指します。現地調査から得られたデータを分析し、理論化し、学術的な貢献と実践的な提言ができる人材を養成します。



信田 敏宏 専攻長

比較文化学専攻

比較研究を通じて文化の諸現象を解明

本専攻は、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術、文化資源という６つの研究分野から構成されています。諸民族文化の比較研究により、各々に通底する普遍性の発見と理論的解明を目指します。基盤機関である国立民族学博物館の標本資料や映像音響資料、文献図書資料等を教育と研究に活かせることは本専攻の強みです。従来の文化人類学的研究方法に加えて、隣接諸科学の成果を導入し、新しい研究分野の開発を積極的に進めることができる人材を養成します。



鈴木 紀 専攻長

教員紹介

❶専門分野
❷現在の研究課題
❸研究のキーワード

地域文化学専攻（2021年度）

相島 葉月 准教授

❶ 社会人類学・イスラーム学・中東研究

❷現代エジプトにおける美と身体文化に関する社会人類学的研究
日本と中東に関する文化的知識のグローバルな流通について
❸モダニティ、都市中流層、マスメディア、教育、現代イスラーム思想、消費、様式美、独創性、知的伝統

池谷 和信 教授（2024年３月退任予定）

❶ 環境人類学・人文地理学・アフリカ研究・地球学

❷熱帯の狩猟採集文化、家畜飼育文化の変容に関する比較研究
南部アフリカにおける先住民運動に関する研究
地球環境史の構築に関する研究
❸地球環境、狩猟採集民、アフリカ、東北アジア、サン（ブッシュマン）、ソマリ、チュクチ、日本、バングラデシュ、環境人類学、人文地理学

伊藤 敦規 准教授

❶ アメリカ先住民研究・博物館人類学・知的財産問題の人類学的研究

❷人類学博物館の Indigenization に関する研究
❸米国先住民、博物館人類学

小野 林太郎 准教授

❶ 海洋考古学・東南アジア研究・オセアニア考古学

❷熱帯島嶼域における人類史や資源利用史に関する考古学研究
漁撈や海の利用にかかわる人類・考古学的研究
水中文化遺産を対象とした海洋考古学的研究
❸東南アジア島嶼部、インドネシア、オセアニア、オーストロネシア語族、漁撈、水中文化遺産、人類史

樫永 真佐夫 教授

❶ 東南アジア文化人類学

❷東南アジアの伝統的政治社会組織に関する歴史的研究
物質文化に焦点を当てた黒タイの民族誌的研究
ベトナムにおける国家と民族の関係に関する研究
❸東南アジア大陸部、ベトナム、黒タイ、白タイ、タイ系言語集団、社会人類学

川瀬 慈 准教授

❶ 映像人類学・民族誌映画

❷エチオピアの音楽職能集団の人類学的研究
民族誌映画制作の理論と実践に関する研究
アフリカの無形文化の保護と継承に資する映像人類学研究
人類学研究にもとづく創作的な話法の探求
❸映像人類学、民族誌映画、エチオピア、音楽職能、Ethio-Jazz、エスノフィクション、エスノポエティクス

齋藤 晃 教授

❶ 歴史人類学・ラテンアメリカ研究

❷植民地期アンデスの先住民の総集住化に関する人文情報学的研究
南米ボリビア低地のモヘニョに関する歴史人類学的研究
❸ラテンアメリカ、アンデス、アマゾン、植民地時代、エスノヒストリー、先住民、キリスト教

齋藤 玲子 准教授

❶ アイヌ・北方先住民文化研究

❷アイヌおよび隣接する民族における物と人の移動と交流
環北太平洋地域先住民の物質文化に関する比較研究
❸アイヌ、北海道、北アメリカ、物質文化、観光、博物館

島村 一平 准教授

❶ 文化人類学・モンゴル研究

❷モンゴル仏教のグローカル実践に関する学際・国際的地域研究
モンゴル・ヒップホップに関する文化人類学的研究
モンゴル人の輪廻転生と死生観に関する研究
❸モンゴル、ブリヤート、シャーマニズム、モンゴル仏教、エスニシティ、ナショナリズム、チンギスハーン表象、ヒップホップ

新免 光比呂 教授（2025年３月退任予定）

❶ 宗教学・東欧研究

❷ファシズム運動における宗教的要因の比較研究
❸ルーマニア、ファシズム、レジオナール、キリスト教

鈴木 英明 准教授

❶ 歴史学・インド洋海域史研究・アフリカ研究

❷19世紀を対象としたインド洋西海域世界の実態解明
20世紀前半のペルシア湾における拘束の実態解明・移動概念の学際的再検討
❸インド洋、海域世界、奴隷、奴隷廃止、移動

奈良 雅史 准教授

❶ 文化人類学・中国研究

❷中国における宗教と少数民族をめぐる人類学的研究
宗教と移動をめぐる人類学的研究
❸宗教実践、国家、自律性、公共性、移動、エスニシティ、ムスリム、回族

西尾 哲夫 教授（2023年３月退任予定）

❶ 言語人類学・アラブ研究

❷グローバル化と中東地域の民衆文化に関する言語人類学的研究
多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究
❸中東、北アフリカ、アラビアンナイト、ナラトロジー

野村 厚志 教授

❶ 人類学・民族考古学・台湾研究・食文化研究

❷生業技術の通文化比較研究
食の多元的価値に関する人類学的研究
台湾におけるエスニシティの動態の探究
❸生業文化、食文化、物質文化、狩猟技術、野生動物、家畜動物、狩猟農耕民、台湾原住民族、エスニシティ、文化資源

林 勲男 教授（2022年３月退任予定）

❶ 災害人類学・オセアニア民族誌資料コレクション研究・オセアニア研究

❷自然災害への対応に関する人類学的研究
オセアニアで収集された民族誌資料コレクションの研究
オセアニアにおけるキリスト教宣教師の活動に関する研究
❸災害、復興、記憶、宣教師、博物学誌、民族誌資料コレクション、異文化表象、オセアニア

藤本 透子 准教授

❶ 文化人類学・中央アジア地域研究

❷中央アジアにおけるイスラーム実践の人類学的研究
カザフの伝統医療に関する研究
カザフの移動と社会再編に関する研究
❸中央アジア、カザフスタン、ムスリム、宗教実践、伝統医療、社会再編、移動

三島 禎子 准教授

❶ 文化人類学・西アフリカ研究

❷国際移動に関する文化人類学的研究
❸西アフリカ、セネガル、ソニンケ、商業民族、民族ネットワーク

森 明子 教授（2023年３月退任予定）

❶ 文化人類学・民族誌研究・ヨーロッパ人類学

❷人類学の記述とその社会的文脈
人類学的比較の再考
❸社会的なもの、移民、ケア、場所、家族、都市、国家、EU

丹羽 典生 准教授

❶ 社会人類学・オセアニア地域研究

❷オセアニアにおける紛争と少数民族に関する研究
応援に関する通文化比較
❸宗教運動、紛争、開発、少数民族、応援

信田 敏宏 教授

❶ 社会人類学・東南アジア研究

❷マレーシア先住民に関する人類学的研究
インクルーシブ社会に関する人類学的研究
❸東南アジア、マレーシア、オラン・アスリ、日本、博物館、知的障害者

平井 京之介 教授

❶ 社会人類学・日本研究・東南アジア研究

❷水俣病被害者主援運動の人類学的研究
「食の遺産」の生成に関する博物館人類学的研究
タイのコミュニティ博物館についての人類学的研究
❸日本、タイ、ラオス、経済人類学、社会運動、博物館、上座部仏教、水俣病

三尾 稔 教授

❶ 文化人類学・南アジア研究

❷南アジアにおける多様な宗教伝統の共生に関する研究
インドのナショナリズムと宗教の関係に関する研究
インドの大衆消費社会化と祭礼の変容に関する研究
❸ラージャスターン州メーワール地方（インド）、グジャラート州（インド）、ヒンドゥー、ムスリム、文化人類学、宗教人類学、南アジア地域研究

南 真木人 教授

❶ 南アジア民族誌研究・文化人類学

❷ネパール地震後の社会再編に関する研究
ネパール社会の30年間の変化に関する研究―1982年撮影番組の再資源化
❸ネパール地震、災害民族誌、包摂、社会再編、映像人類学、当事者コミュニティ、研究資源の共有化、ガンダルバ（楽師カースト）

山中 由里子 教授

❶ 比較文学比較文化

❷中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究
驚異と怪異の比較研究
アレクサンドロス伝承の東西伝播
❸西アジア、アラブ文学、ペルシア文学、博物学、想像界、イラン、ユーラシア交渉史

❶専門分野
❷現在の研究課題
❸研究のキーワード

比較文化学専攻（2021年度）

飯田　卓 教授
❶生態人類学・文化遺産の人類学・視覚メディアの人類学
❷マダガスカルにおける漁民文化と漁撈技術
アフリカにおける文化遺産とコミュニティの相互影響
日本人類学の発達における大衆メディアの役割
❸インド洋、アフリカ大陸、日本、人類学史、文化遺産実践、大衆アカデミズム、情報と知

上羽 陽子 准教授
❶民族芸術学・染織研究・手工芸研究
❷現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究
❸民族芸術学、手工芸文化、染織研究、インド、伝統的技術

卯田 宗平 准教授
❶環境民俗学・東アジア研究
❷動物と人間とのかかわりをめぐる民俗学的研究
❸自然と人間、動物利用、リバランス論、鵜飼文化、トナカイ飼養、物質文化、技術と技能

宇田川 妙子 教授（2025年３月退任予定）
❶南ヨーロッパ研究・性研究
❷イタリアおよび地中海ヨーロッパの民族誌的研究
ジェンダー／セクシュアリティに関する文化人類学的研究
社会理論の批判的再考
❸イタリア、地中海ヨーロッパ、イタリア人、文化人類学、ジェンダー／セクシュアリティ研究、南ヨーロッパ研究、性研究

太田 心平 准教授
❶社会文化人類学・北東アジア研究・博物館組織行動論
❷韓国・朝鮮社会における文化の統合性と多様性の研究
労働現場としての博物館における組織行動と動機付け
❸韓国・朝鮮、近代性、社会的記憶、物語論、世代集団、知識生成、博物館

岡田 恵美 准教授
❶音楽民族学・南アジア研究
❷南アジアのマイノリティにおける音楽文化
伝統ポリフォニー歌唱の記録保存と教育資源化
❸インド、マイノリティ、山岳民族、ポリフォニー、音楽文化、伝承、楽器改良

韓　敏 教授
❶社会人類学・中国研究
❷歴史記憶と象徴に関する人類学的研究
❸社会主義近代化、中国、文化遺産、観光、文化表象、記憶、聖地巡礼、英雄崇拝、漢族、シボ族

菊澤 律子 教授
❶言語学・オーストロネシア諸語・言語研究における地理情報システム（GIS）の利用
❷オーストロネシア諸語における統語構造の変遷
言語データを軸としたオセアニアの先史に関する学際研究
手話言語と音声言語の対照研究
❸オセアニア、フィジー、オーストロネシア、記述言語学、比較（歴史）言語学、比較（歴史）統語論、先史言語学、手話言語学

笹原 亮二 教授（2025年３月退任予定）
❶民俗学・民俗芸能研究
❷モノの遺存の総体の把握を通じた生活文化に関する民俗学的研究
❸日本、民俗学、三匹獅子舞、民俗芸能

菅瀬 晶子 准教授
❶文化人類学・中東地域研究
❷パレスチナ・イスラエルを中心とした東地中海アラブ地域で、一神教徒が共有する聖者崇敬の研究
イスラエルにおけるアラブ人市民を中心とした、マイノリティによる文化表象のありかた
❸中東、東地中海、パレスチナ、イスラエル、キリスト教徒、マイノリティ、アイデンティティ、エスニシティ、文化表象、共存

鈴木 七美 教授（2023年３月退任予定）
❶歴史人類学・医療人類学・エイジング研究
❷超高齢社会のエイジングフレンドリー・コミュニティ
キルトドキュメンテーション活動――アーミッシュキルトから考える
❸エイジング・イン・プレイス、米国宗教コミュニティ、アーミッシュキルト

鈴木　紀 教授（2025年３月退任予定）
❶開発人類学・ラテンアメリカ文化論
❷開発援助プロジェクトの人類学的評価法
博物館における先住民族文化表象
❸ラテンアメリカ、メキシコ、ユカタン、開発援助、フェアトレード、博物館展示学

關　雄二 教授（2022年３月退任予定）
❶アンデス考古学・ラテンアメリカ研究
❷古代アンデス文明における権力の発生に関する研究
ペルーにおける世界文化遺産概念と国家・地域の文化遺産概念との相互作用に関する研究
❸ペルー、ラテンアメリカ、メスティソ、アンデス考古学、文化人類学

園田 直子 教授（2024年３月退任予定）
❶保存科学
❷博物館における持続可能な資料管理に関する研究
資料の展示・保存環境に関する研究
収蔵庫の再編成に関する研究
❸保存科学、総合的有害生物管理（IPM）、博物館環境

寺村 裕史 准教授
❶情報考古学・文化情報学
❷情報考古学的手法を用いた文化資料のデジタル化と情報統合に関する研究
❸GIS（地理情報システム）、考古学、情報科学

日髙 真吾 教授
❶保存科学・保存修復
❷地域文化の保存と活用に関する研究
博物館における保存処理法の研究
❸日本、保存科学、保存処理

廣瀬 浩二郎 准教授
❶日本宗教史・民俗学
❷障害者文化に関する人類学的研究
日本近代の新宗教に関する歴史的研究
❸日本、東北、九州、京都、歴史、宗教、福祉、文化

福岡 正太 教授
❶民族音楽学・東南アジア研究
❷映像音響メディアとインドネシア音楽の変容
伝統芸能の伝承と映像記録
❸インドネシア（スンダ）、東南アジア、映像音響メディア、民族音楽学

ピーター J.マシウス 教授（2025年３月退任予定）
❶先史学・民族植物学
❷History of agriculture and plant domestication, with specific interests in taro (Colocasia esculenta), paper mulberry (Broussonetia papyrifera), and other plants used for food, fodder and fibre
❸Asia, Pacific, Mediterranean, ethnobotany, ethnobiology, plant domestication, food history

松尾 瑞穂 准教授
❶文化人類学・ジェンダー医療人類学・南アジア研究
❷近代化、開発がもたらすリプロダクション実践の変容に関する研究
サブスタンスと身体研究
子育ての比較文化論
❸リプロダクション（性と生殖）、ジェンダー、インド、サブスタンス、身体

丸川 雄三 准教授
❶文化財情報発信・連想情報学
❷連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究
❸文化財、連想検索、デジタルアーカイブ

吉岡 乾 准教授
❶言語学・南アジア研究
❷北パキスタン諸言語の記述言語学的研究
❸ブルシャスキー語、ドマーキ語、カティ語、カラーシャ語、記述言語学、パキスタン、カラコラム山脈、ヒンドゥークシ山脈

吉田 憲司 教授（国立民族学博物館長）
❶博物館人類学・アフリカ研究
❷アフリカにおける造形と儀礼の人類学的研究
博物館・美術館における文化の表象のあり方の研究
❸アフリカ、ヨーロッパ、日本

博士後期課程（Ph.D.）

課程修了の要件、学位取得までの流れ

■ 学位取得の要件

学位を取得するためには、所定の３年限以上在学し、必要な研究指導を受けた上で、所定の単位数以上を修得し、博士論文の審査及び試験に合格すること（課程博士）が必要です。

■ 学位取得までの流れ

１年次	１年生ゼミ出席
	現地調査準備
	調査計画書提出
２年次前期以降	現地調査
	調査報告、博士論文構想発表
３年次	必須履修単位取得
	博士論文草稿発表
３年次後期以降	課程博士出願
	論文公開発表会・口述試験
	最終試験・合否決定
	学位授与



研究支援

■ リサーチ・アシスタント（RA）制度

教員の指示・監督の下で、研究者の補助として、研究活動に必要な様々な業務をおこないながら給与を得ることができます。

■ 学生派遣事業

学位申請論文作成に不可欠な国内外の調査や学会での成果発表に要する旅費、宿泊費などの支援をおこないます。

■ SOKENDAI 研究派遣プログラム

高い専門性と広い視野、国際通用性をそなえた研究者の育成を目的として、国内外の大学、研究機関、企業等における共同研究活動や調査活動等に必要な経費を支援する制度です。

■ 入学料・授業料免除等制度

経済的理由により入学料や授業料の納入が困難な学生に対する経済的支援として、入学料・授業料の免除（収納猶予）の制度があります。授業料免除については、毎年２回、授業料免除申請の受付をおこなっています。授業料免除許可者は、半期の授業料の全額もしくは半額が免除されます。

■ 特別講義

外部研究資金調達のための申請書の書き方、論文投稿のしかたなどをテーマにした特別講義をおこなっています。

■ 日本学術振興会「特別研究員（DC２）」採用数

年　度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
採用数	3	3	4	2	1	2	2	2	2	4	0	2	2	1

在学生の声

地域文化学専攻

川上　香

私は、南アルプス周辺山村の畑作と作物の変遷について研究しています。焼畑農業に関心があり、焼畑が衰退した昭和30年代から現代までに作物がどのように集約されていったのか、また、多数の近代品種が栽培されているにもかかわらず在来作物が今でも栽培されているのはなぜか、その理由を明らかにしたいと考えています。このため、季節ごとの農作業の参与観察を断続的に長期間行いたいと希望していました。専攻では、学生派遣事業という制度があり、研究計画の中で必要なフィールドワークに対する経済的支援を受けることができます。直近の調査では、PCR検査費用に対しても専攻から支援をいただき、インフォーマントに不安を与えることなく調査を続けることができました。

2020年は感染症の拡大で大学院に足を運ぶことが難しい中、リモートでのゼミ参加と講義を経験しました。通常、専攻のゼミは自身の主指導、副指導の２名の先生と、分野の違う４名の先生方、院生が一堂に会して行われます。今回はパソコンの画面を介して質疑や意見を交わす形となりました。また、履修した講義は、論文11本（！）についてリモート講義を受け、レポートを提出して添削、解説していただくという贅沢なスタイルで進められました。私は長野県の山村に暮らしていますが、ゼミも講義も自宅に居ながら参加することができ、充実した学びの時間だったと感じています。

最後に、私は社会人を30年近く経験してから進学しました。経済的に続けられるのか、そして博士論文が本当に書けるのか、入学当初は迷いと不安だらけでした。しかし、今では「何とかなる！」と考えられるようになりました。ご指導いただいている先生方やサポートしてくださる事務の皆さん、図書室の皆さん、院生の皆さんにはとても感謝しています。



もと焼畑だった茶畑の茶摘み準備（静岡市、2021年）

比較文化学専攻

ウ ウユンガ

私は、中国国内においてラクダを最も多く飼育し、「ラクダの故郷」と呼ばれる内モンゴル自治区アラシャー盟を調査地とし、ラクダを放牧しながら生活をしているモンゴル族を対象に、彼らの放牧技術や物質文化などを明らかにする研究を続けています。修士課程では、当該地域における古老たちの口承伝承や口述史などを収集し、その中で、ラクダに関する語りが非常に多いことを明らかにしました。博士課程では、すでに収集した資料や現地調査を通して、ラクダ牧畜民の放牧生活やラクダとの関わりを描写した民族誌を作成することを研究目的にしています。

日本に留学し、総研大（みんぱく）に進学したきっかけは、2015年、内モンゴル大学の修士課程２年生の時に、みんぱくを見学したことにあります。当時、みんぱくに収蔵されていたモンゴルに関する書籍や総研大の先生方らの研究成果、梅棹忠夫先生の収集した資料、モンゴルに関する展示、標本などが印象深く、非常に魅力的なものでした。

総研大（みんぱく）には、人類学・民族学、考古学など異なる研究分野の研究者が大勢集まっており、それぞれの専門分野の視点からコメントやアドバイスをいただくこともでき、非常にオープンな雰囲気があります。加えて、館内外の研究者から構成された共同研究会や国際研究会、講演に参加することも可能であり、素晴らしい研究環境が揃っています。

また、総研大には学生に対する様々な支援があり、私は、中国における予備調査を実施する際には、専攻が実施する『学生派遣事業』を利用することができました。また投稿論文や学会発表の日本語文章の添削支援もあり、留学生としては非常に安心です。さらに、総研大には学外の助成金に関する情報も豊富であり、私は指導教員の指導や事務サポートのおかげで、海外調査助成金を獲得することができ、長期調査の実施につながっています。院生の研究室には、自由に使える多くの機材やソフトウェアが用意されており、院生にとっては非常に恵まれた環境と言えます。



2歳ラクダの毛刈り作業と焼印押し（中国内モンゴル自治区アラシャー盟、2021年）

学位論文リスト

学位論文リスト

2006年度以降

【課程博士】

ケニア沿岸部の零細漁業者による水産資源の利用に関する生態人類学的研究 —かご漁を事例として—	田村　卓也（比較）	[2021.3.24 文学]
Formation of Music of Kazakh Diaspora in Mongolia :A Case Study of the Musical Practices of Professional Performers	八木　風輝（比較）	[2021.3.24 文学]
ベトナムのモンの二元論における諸存在の制作と構成 —「常世」と「現世」の関係に着目して—	今井　彬暁（地域）	[2020.9.28 文学]
オイラド・モンゴルにおける口頭伝承とアイデンティティ—故郷創出物語から—	査 斯 査 干（地域）	[2020.3.24 文学]
中国都市部の家庭の食生活に関する歴史民族誌 —社会主義制度下（1949-2018年）の天津市の事例—	劉　征宇（比較）	[2020.3.24 文学]
神戸南京町50年の民族誌的研究—包摂的チャイナタウンの生成と変容—	辺　清音（比較）	[2020.3.24 文学]
中国新疆オイラドの宗教復興に関する人類学的研究 —寺とオヲー祭祀の復活に関わる転生活仏シャリワン・ゲゲン14世—	那 木 加 甫（地域）	[2019.3.22 学術]
中国青海省におけるチベット仏教復興運動下の民間信仰の変容に関する人類学的研究 —同仁県ワォッコル村を事例として—	喬 旦 加 布（地域）	[2018.3.23 文学]
近代フィリピンにおける民族衣装をまとった聖母像の研究	古沢ゆりあ（比較）	[2017.9.28 文学]
自然資源の利用に関する環境人類学的研究 —ニカラグアの先住民による商業的ウミガメ漁の事例—	高木　仁（地域）	[2017.3.24 文学]
スナックにおける言語コミュニケーション研究 —対人関係を調節する接客言語ストラテジー—	中田　梓音（比較）	[2016.9.28 文学]
日本社会の自然葬に関する民族誌的研究 —NPO法人「葬送の自由をすすめる会」を中心に—	金セッピョル（地域）	[2016.3.24 文学]
都市回族コミュニティの維持と宗教実践 —中国陝西省西安市における回族の帰属意識をめぐる民族誌的研究—	今中　崇文（地域）	[2016.3.24 文学]
韓国の地域社会における華僑のアイデンティティに関する民族誌的研究 —韓国華僑ビジネスと華僑協会を中心に—	金　桂淵（地域）	[2015.9.28 文学]
「野球移民」を生みだす人びと —ドミニカ共和国におけるトランスナショナル移民研究—	窪田　暁（比較）	[2015.3.24 文学]
モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる交渉に関する民族誌	堀田あゆみ（地域）	[2015.3.24 学術]
中国雲南省における徳宏タイ族の即興うたと感性の民族誌的研究	伊藤　悟（地域）	[2014.9.29 文学]
My Huaca: The Use of Archaeological Heritage in Modern Peru from a Public-Archaeology Perspective	サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ（比較）	[2014.9.29 文学]
ナイジェリアの都市イレ・イフェにおける「アーティスト」の民族誌的研究	緒方しらべ（比較）	[2014.3.20 文学]
変化しつづける装い —中国雲南省文山モンの自己と他者をめぐる人類学的服飾研究—	宮脇　千絵（地域）	[2012.9.28 文学]
現代アンデス農村における聖人信仰の変容 —人の移動に焦点をあてて—	八木百合子（比較）	[2012.9.28 文学]
無文字社会における歴史記憶の生成と継承 —南エチオピア牧畜民ボラナにおける口承史の分析をとおして—	大場　千景（地域）	[2012.3.23 文学]
カオダイ教ハノイ聖室の民族誌的研究 —ベトナム北部地域の都市における女性たちの社会関係—	伊藤まり子（地域）	[2012.3.23 文学]
周辺イスラームのダイナミズム —タイ南部村落におけるイスラーム復興運動と宗教実践の変容—	小河　久志（地域）	[2012.3.23 文学]
ヨーグルトをめぐる言説の生成と展開 —社会主義期からポスト社会主義期にかけてのブルガリアを中心に—	マリア・ヨトヴァ（比較）	[2011.9.30 文学]
オーストラリア先住民ヨルタ・ヨルタの環境管理のための先住民運動に関する文化人類学的研究	友永　雄吾（地域）	[2011.3.24 文学]
現代タイ社会における開発と僧侶 —僧侶による社会貢献とネットワーク形成に焦点をあてて—	岡部真由美（地域）	[2011.3.24 文学]
現代東南中国における宗親会の民族誌的研究 —国家との関係を中心として—	陳　夏晗（比較）	[2011.3.24 文学]
農業技術改善の民俗誌 —紀ノ川下流域村落の一七〜二〇世紀前半における動向の分析—	加藤　幸治（比較）	[2010.9.30 文学]
日本の先史時代における植物性食料の加工と利用 —残存デンプン分析法の理論と応用—	渋谷　綾子（比較）	[2010.3.24 文学]
韓国における老人の食 —老人福祉施設を中心に—	守屋亜記子（地域）	[2009.3.24 文学]
インド農村社会における不妊経験の人類学的研究	松尾　瑞穂（比較）	[2008.9.30 文学]
フェラインの民族誌 —ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション—	山田　香織（地域）	[2008.3.19 文学]
水上人と呼ばれる人々 —広東珠江デルタの漢族エスニシティとその変容—	長沼さやか（地域）	[2008.3.19 文学]
在米コリアンのサンフランシスコ日本町 —マルチカルチャーのエスニックタウン—	小谷　幸子（比較）	[2008.3.19 文学]
参加型開発を通した女性の自己変容過程に関する人類学的研究 —北インド農村社会を事例として—	菅野美佐子（比較）	[2007.9.28 文学]
「場」と「パフォーマンス」に関する人類学的研究 —トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として—	米山　知子（比較）	[2007.9.28 文学]
上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的研究	飯國有佳子（地域）	[2007.3.23 文学]
「護り」の身体技法に関する映像人類学研究 —インドネシア・ミナンカバウの事例から—	村尾　静二（比較）	[2007.3.23 文学]
離散と故郷 —ヨルダンのパレスチナ系住民にみられる帰属意識とナショナリズム—	錦田　愛子（地域）	[2007.3.23 文学]
「子ども域」の文化人類学的研究 —バングラデシュ農村社会の子ども—	南出　和余（比較）	[2007.3.23 文学]

【論文博士】

都市環境における関係性を巡る実践としての精霊憑依 —マリの首都におけるソンガイ移民の精霊憑依に関する人類学的研究—	内田　修一	[2021.3.24 学術]
グローバル化する互酬性 —サモア世界の儀礼財の循環と首長制—	山本　真鳥	[2017.3.24 文学]
ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成 —東北地方のヌン・アン集団の事例から—	チュ・スワン・ザオ	[2015.9.28 文学]
アイヌ衣文化の研究	津田　命子	[2014.9.29 学術]
先住民生存捕鯨再考 —国際捕鯨委員会における議論とベクウェイ島の事例を中心に—	濱口　尚	[2013.9.27 文学]
多文化都市・新宿の生成と展開 —ライフサイクルの視座—	川村千鶴子	[2013.3.22 学術]
先史アンデス形成期の社会動態 —ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から—	山本　睦	[2012.9.28 文学]
小集落から見た初期国家の形成過程 —先スペイン期中央アンデスのワリ国家を事例として—	土井　正樹	[2012.3.23 文学]
スリランカにおけるエステート・タミルのアイデンティティと「ジャーティヤ」をめぐる人類学的研究	鈴木　晋介	[2011.3.24 文学]
活用される職祖伝承 —近・現代日本における木工挽物の担い手と木地屋「根元地」—	木村　裕樹	[2010.9.30 文学]
先住民学習の理論と実践—ポストコロニアル人類学の活用—	中山　京子	[2010.9.30 学術]
シャーマニズムによるエスニシティの探求 —ポスト社会主義期におけるモンゴル・ブリヤートの事例を中心として	島村　一平	[2010.3.24 文学]
国際線客室乗務員の接客業務と勤務体制 —仕事の人類学的研究—	八巻　惠子	[2009.9.30 文学]
「アイヌ風俗画」の研究 —近世北海道におけるアイヌと美術	新明　英仁	[2007.9.28 文学]

年度別学位授与者数

		'91〜'07年	'08年	'09年	'10年	'11年	'12年	'13年	'14年	'15年	'16年	'17年	'18年	'19年	'20年	計
地域文化学専攻	課程博士	25	1	0	2	3	1	0	2	3	1	1	1	1	1	42
	論文博士	13	0	1	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	1	19
比較文化学専攻	課程博士	18	1	1	2	1	1	1	2	0	1	1	0	2	2	33
	論文博士	7	0	1	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	14
計		63	2	3	7	5	4	2	5	4	3	2	1	3	4	108

よくある質問

Q 学部をもつ大学院の教育と比べてどんな特徴がありますか？

A 教員数が学生数をうわまわるという、他大学にはない恵まれた教育環境があげられます。教員：学生の比率はおおよそ３：２であり、個々の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また教員は各分野の第一線で活躍する研究者であり、最新の研究動向に基づいた指導をおこなえます。さらに、民博が所蔵する豊富な研究資料（図書68万冊、標本資料34万５千点、映像音響資料７万点など）の利用、館が主催する多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通し、国内外の研究者との交流ができます。

Q 地域文化学専攻と比較文化学専攻の二専攻には、どのような違いがありますか？

A 地域と比較に別れているものの、共にフィールドワークを研究の根幹においているため、共通する部分も多く、密接な相互交流があります。また、専攻間に指導上の棲み分けはなく、院生がどちらに所属していても、両専攻の教員の指導を受けることができます。

Q 二専攻で学ぶことができるのは、文化人類学・民族学だけでしょうか？

A そんなことはありません。両専攻には、考古学、民俗学、宗教学、芸術学、言語学、音楽学、博物館学、保存科学など幅広い分野を専門とする教員がそろっていますから、それらの分野でも研究をおこなうことができます。また、教員の陣容は年度によって変化することがありますから、希望研究内容と当該専攻の教育体制との整合性について不明な点がある方は、前もってご相談ください。

Q 受験する前に希望する指導教員をかならず決めておく必要がありますか？

A 必要条件ではありませんが、強くお勧めします。また、受験を申請する前に希望指導教員に連絡を取れば、入学後の研究の見通しを立てる一助となるでしょう。

Q 学部や修士課程で文化人類学・民族学を専攻しなかったのですが、受験はできますか？

A 正規に文化人類学・民族学を学んだ経験がなくても受験はできます。しかし、入学後に志望研究が遂行可能であるか見通しをつけるためにも、関連図書などを精読し、少なくとも人類学やフィールドワークに関する基本的な考え方について理解しておくほうがよいでしょう。これは、何をするために当専攻を受験するのか整理するためにも役立つはずです。

Q できるだけ早く学位を取得したいのですが、３年で取得するのは難しいでしょうか？

A フィールドワークを研究の中心に据えている分野であるため、３年間で学位を取得するのは容易ではありません。早い取得が望ましいことは言うまでもありませんが、学問の進展に寄与できる質の高い研究成果を上げ、最終学位である博士号に相応しい研究能力を養うことがより重要であり、この点に留意した指導がおこなわれています。

Q 修士課程ですでに現地調査をはじめているのですが、入学後すぐに長期の現地調査をすることは可能ですか？

A 原則として、初年度は、長期フィールドワークをおこなうための準備期間にあてられています。フィールドワークは、単に現地に行けば遂行できるものではありません。また、修士課程でフィールドワークをすでにおこなっている場合でも、博士論文執筆のための調査では、求められる調査の質に大きな差があることが多いのです。入学後の一年間は、教員の指導のもと、調査計画の実現性・妥当性などについて、それまでの自己の研究成果や先行研究との関連に留意しながら検討します。年度末には、フィールドワークに向けたリサーチプロポーザルに関する発表をおこない、計画をより実現性の高いものへと練っていきます。

▼その他の質問はこちら
https://www.minpaku.ac.jp/education/university/information/faq

修了生の声

京都市文化財保護課　文化財保護技師（民俗文化財担当）　今中 崇文（2016年３月学位取得）

総研大の地域文化学専攻・比較文化学専攻が設置されている国立民族学博物館は、日本でも有数の文化人類学・民族学の研究センターです。学部から修士課程まで東洋史学専攻に在籍していた私は、中国のイスラームを信仰する少数民族、回族の日常的な宗教実践やコミュニティについて関心を持ち、その解明にはフィールドワークが不可欠になることから、ここならば充分な指導を受けられるのではないかと考え、総研大に進学しました。

実際、総研大在籍中には、フィールドワークを実施するための多種多様なサポートを受けることができました。先生方からの指導・助言はもちろんのこと、院生同士で交換されるフィールドワークの情報も大いに役立ちました。総研大の研究支援制度を利用し、追加調査の費用をまかなわせてもらったこともあります。デジタルカメラやレコーダーといった機器も借り出すことができます。

民博には、文化人類学・民族学だけでなく、民俗学や考古学、博物館学、保存科学など、幅広い分野の先生方が在籍されています。そこに集う学生もさまざまな分野の出身者で構成されており、ゼミや講義は言うに及ばず、学生同士で繰り広げられる議論も多岐にわたります。さらには、民博が主催する共同研究会やシンポジウムなどに参加させてもらい、国内外のさまざまな分野の専門家と直接交流することが可能です。現在、私は民俗文化財担当の文化財保護技師として、京都市内の有形・無形民俗文化財の保護に携わっていますが、しばしば思わぬところで、民博での耳学問で得られた知識が役に立っています。

自らの研究を深めるとともに、その幅を広めるためにも、総研大・民博はこれ以上ない環境といえます。貪欲に活用していただきたいと思います。



中国青海民族大学　准教授　喬 旦 加 布（2018年３月学位取得）

私は2009年４月に中国・青海省から私費留学生として日本にきました。留学前は、青海師範大学で、チベット語チベット文学を専攻しました。留学後は、北海道大学に３年６ヶ月間在籍し、修士課程で初めて文化人類学を専攻しました。そして、総研大地域文化学専攻に進学しました。日本での生活は９年間ほどになります。

私の場合、出身村の伝統文化に関心を持ち、自分とは何か、人間とは何かという文化人類学の視点で自身の出自に関わる歴史や文化などを研究したいと考えました。博士課程の研究テーマは、主に近年のチベットアムド地域の青海省一帯で見られるチベット仏教の復興運動と民間信仰の変容にかかわる問題で、青海省黄南藏族自治州同仁県ワォッコル村の事例から、それら宗教にかかわる変化の実態を考察しました。

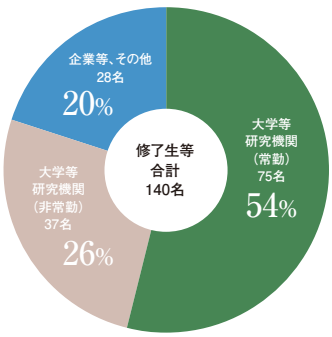
総研大地域文化学専攻の基盤機関である国立民族学博物館は、多言語による世界各地の民族学・文化人類学、民族誌、地方誌などに関する文献、映像、音声、標本資料を多く収蔵しており、世界でも有数の研究機関であると言っても過言ではありません。また、多岐にわたって民族学・文化人類学の最先端で活躍されている研究者が在籍し、大学院生に対して一対一の丁寧な研究指導を行っている点も魅力です。さらに、国内外におけるフィールド調査に対するサポート体制と学術振興会、その他の助成金の申請、雑誌への投稿に至るまで、指導も充実しています。また、一般の大学より研究会や国際シンポジウムなどが頻繁に行われ、大学院生でも研究発表を行う機会も多く、自分が目指す研究にとって最高の条件が備わっていたと思います。

現在、私は中国青海民族大学の准教授として主に大学院生に対して、人類学の理論や方法論に関する知識を教えながら、大学の民族博物館の展示にも携わっています。いま考えると民博で学んできた知識が大いに役に立っており、これから総研大の地域文化学専攻へ受験を希望する後輩の皆さんには是非とも豊かな研究環境を活用して欲しいと思っております。



修了生等の進路

修了生等の進路（2021年7月）



大学等研究機関（常勤）勤務先

青山学院大学、愛知淑徳大学、愛媛大学、大阪大学、神奈川大学、金沢星陵大学、鹿児島純心女子大学、川崎医療福祉大学、関西外国語大学、神田外語大学、京都大学、京都精華大学、京都文教大学、京都外国語大学、県立広島大学、神戸大学、神戸市外国語大学、神戸山手大学、神戸女学院大学、芝浦工業大学、四天王寺国際仏教大学、静岡大学、静岡文化芸術大学、滋賀県立近代美術館、女子栄養大学、清泉女学院、就実大学、成蹊大学、大東文化大学、中部大学、中京大学、筑波大学、東京大学、東京外国語大学、東北学院大学、東洋大学、帝京大学、長崎純心大学、奈良県立大学、南山大学、日本赤十字九州国際看護大学、日本大学、阪南大学、広島市立大学、宮崎公立大学、山形大学、龍谷大学、立命館大学、上海師範大学、インドネシア学術総局、ライデン大学（オランダ）、ソウル大学（韓国）、青海民族大学藏学院（中国）、中国社会科学院（中国）、国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館、総合地球環境学研究所

入学選考

■ 入学者選抜の基本的な考え方

第一次選抜（書類審査）では、修士論文または他の学術論文等について、独創性、研究史の把握、実証性、論理性の各項目に基づき評価します。また、研究内容（研究活動の概要、これまでに行った研究の要旨、これから志望する研究）については、計画の妥当性、計画の具体性、学問的意義、発展性の各項目に基づき評価します。

第二次選抜（面接審査）では、これまでに行った研究、修士論文等の内容、これから志望する研究に関する口頭試問を通し、討論能力、語学力、研究意欲等を評価します。

書類審査、面接審査の各項目を総合的に判断し、合否を判定します。

■ 求める学生像

【地域文化学専攻】

・世界の多様な地域の文化について深い関心を抱き、とりわけ文化人類学・民族学の基礎研究に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行できる学生
・研究対象地域の文化に関するデータ収集のための調査に必要な方法論上の基礎知識と基礎的語学力を備え、在学中に調査を遂行できる学生
・特定地域を横断または包摂するような超域的な文化動態を広い視点から調査研究する意欲をもつ学生
・世界の多様な地域の人びとが直面する現代的課題に積極的に関与しようとする意欲をもつ学生
・学術論文の十分な読解力と基礎的な執筆力を備える学生

【比較文化学専攻】

・人類の諸文化について広い関心を抱き、とりわけ学問的理論化やその社会的応用に強い意欲をもって、在学中の研究活動を遂行できる学生
・研究対象とする文化に関するデータ収集のための調査に必要な方法論上の基礎知識と基礎的語学力を備え、在学中に調査を遂行できる学生
・文化人類学・民族学のみならず隣接諸科学にも強い関心をもち、横断的・学際的な領域を切り開こうとする意欲をもつ学生
・複雑化するグローバルな現代社会の諸課題に積極的に関与しようとする意欲をもつ学生
・学術論文の十分な読解力と基礎的な執筆力を備える学生

■ 募集人数

専攻	課程の種類	講座（分野）	募集人員
地域文化学専攻	博士課程の後期3年の課程	アジア地域文化Ⅰ、アジア地域文化Ⅱ、ヨーロッパ地域文化、アフリカ地域文化、アメリカ地域文化、オセアニア地域文化	3人
比較文化学専攻		比較社会研究、比較宗教研究、比較技術研究、比較芸術研究、文化資源研究	3人

■ 入学者選抜日程

出願資格認定審査 修士または専門職学位に相当する学力のある方は、事前に出願資格認定審査を行います	2021年11月1日（月） ～2021年11月4日（木）
入学願書受付期間	2021年11月25日（木） ～2021年12月1日（水）
第一次選抜（書類選考）・結果通知	2022年1月中旬
第二次選抜（面接審査）	2022年1月24日（月） ※予備日1月25日（火）
合格発表	2月中旬
入学手続き	3月中旬

▼出願書類および出願までの流れ等についてはこちら
https://www.minpaku.ac.jp/education/university/information/steps

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館（みんぱく）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。みんぱくは、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究や共同研究を進めるとともに、学術情報を集積しています。その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することも使命としています。

みんぱくは「博物館機能をそなえた研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。みんぱくの展示は、常設展示と特別展示と企画展示とで構成されており、常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示と企画展示は、特定のテーマのもとに、年に数回、期間を限って開催されます。

所蔵民族学資料（2021年3月31日現在）

【標本資料】	
海外資料	179,264点
国内資料	165,879点
計	345,143点

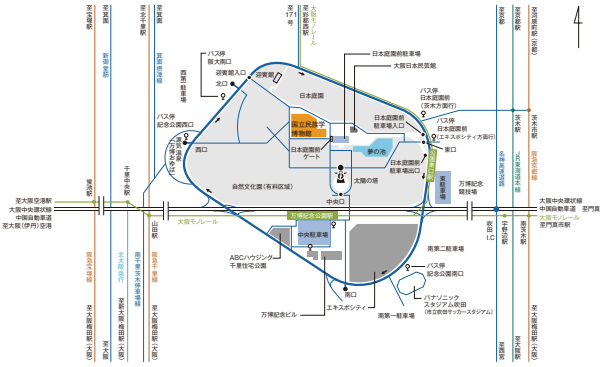
【映像音響資料】	
映像資料	8,277点
音響資料	64,421点
計	72,698点

【文献図書資料】	
日本語図書	270,428冊
外国語図書	415,855冊
計	686,283冊
日本語雑誌	10,162点
外国語雑誌	7,070点
計	17,232点





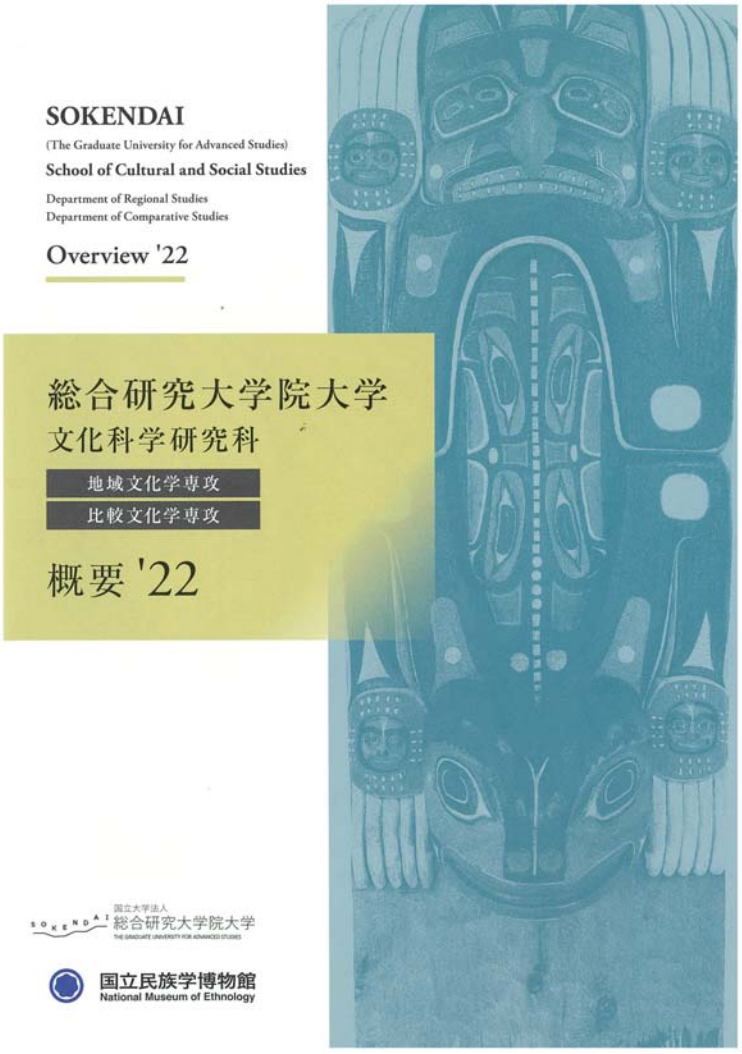
みんぱくアクセス

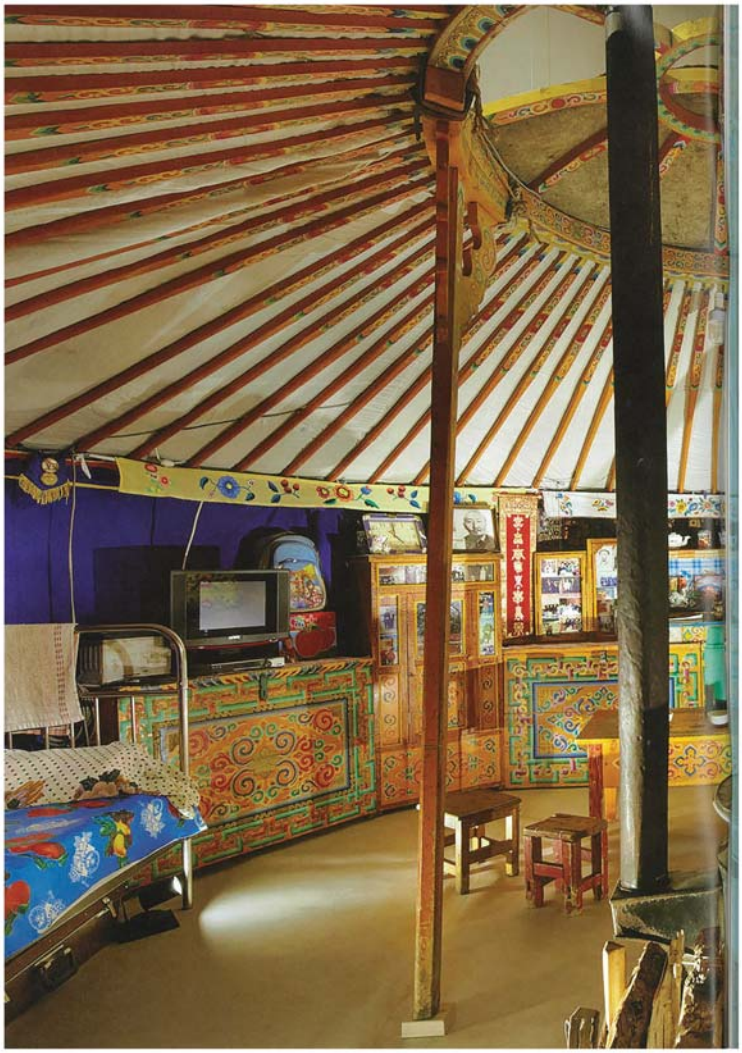


●大阪モノレール……「万博記念公園駅」、「公園東口駅」下車徒歩約15分
●バス（近鉄バス）……阪急茨木市駅・JR茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約13分
　阪急茨木市駅から約20分、JR茨木駅から約10分
●乗用車……万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分
※万博記念公園各ゲートで、国立民族学博物館の観覧券をお買い求めください。
　同園内を無料で通行できます。
※万博記念公園をご利用になる場合は、同園入園料が必要です。

［お問い合わせ］
国立民族学博物館 管理部研究協力課研究協力係（大学院担当）
〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電 話　06-6878-8236（大学院担当）
FAX　06-6878-8479
E-mail　souken@minpaku.ac.jp
URL　https://www.minpaku.ac.jp/

https://www.minpaku.ac.jp/education/university







国立民族学博物館（みんぱく）は、博物館機能と博士課程の大学院教育機能を備えた文化人類学・民族学の研究センターとして、世界で唯一の存在です。みんぱくは、世界各地から集めた34万5千点を超える民族学標本資料を収蔵していますが、このコレクションは、20世紀後半以降に築かれた民族学関係の資料としては世界最大の規模をもちます。また、施設の規模のうえで、みんぱくは、世界最大の民族学博物館となっています。

みんぱくには、現在、53人の研究者が在籍していますが、それぞれが世界各地でフィールドワークに従事し、人類の営みの多様性と共通性、そして地球規模でのつながりの中での社会の動態について調査研究を続けています。

人類の文明は、今、大きな転換点を迎えているように思います。これまでの、中心とされてきた側が周縁と規定されてきた側を一方的にまなざし、支配するという力関係が変質し、従来、それぞれ中心、周縁とされてきた人間集団の間に、創造的なものも破壊的なものも含めて、双方向的な接触と交流・交錯が至る所で起こるようになってきています。

そして、新型コロナウイルス感染症がほぼ同時に地球全体に広がるという事態に至って、私たちは、今、人類がこれまで経験したことのない局面にいやおうなく立ち会うことになりました。その状況の中で、私たちが現在の生活を送るうえで当たり前と思って来た慣行やルール、とりわけ人類が近代に入って作り上げてきたあらゆる制度や規範の成り立ちやありようが洗い出され、その意義と存在理由が改めて問われることになっています。同時に、社会に潜在していた差別意識が浮かび上がり、世界の新たな分断の状況も生まれてきています。

それだけに、異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の違いを超えてともに生きる世界の構築をめざす文化人類学の知が、これまでになく求められているように思われます。

みんぱくには、総合研究大学院大学の地域文化学専攻と比較文化学専攻が設置されています。この両専攻に所属する大学院生は、文化人類学をはじめ言語学、宗教学、生態学、先史学、芸術学、民族音楽学そして博物館学など、広範な研究領域を専門とする個性ゆたかな教授陣の指導を受けられるのみならず、上で述べた世界に冠たる資料の蓄積に身近に接することができます。みなさんが、これらの学術資源を縦横に使いこなし、新たな研究の領野を切り開いて、それぞれの分野のパイオニアとしてはばたいて行かれることを期待しています。

国立民族学博物館長　吉田 憲司

専攻の特長

充実した教授陣

学生数をうわまわる教授陣は、学生一人一人の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また両専攻の教員は各分野の第一線で活躍する研究者であるため、最新の研究動向に基づいた指導をおこなうことができます。

豊富な情報源

日本における文化人類学・民族学関連の最大の資料館が揃っています。

また、国立民族学博物館が主催する数多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通して、国内外の優秀な研究者との交流ができます。

各種の支援制度

リサーチ・アシスタント制度、インターンシップ制度、授業料免除制度、学会発表やフィールドワークの旅費の援助など、充実した研究支援が受けられます。

指導体制

個別指導と共同指導を組み合わせたユニークな指導体制を採用しています。学生には主副２名の指導教員が指名され、入学から学位取得まで、日常的な指導をおこないます。一方、ゼミにおいては共同指導体制を取り入れています。ゼミは４名の教員が担当し、研究の内容だけでなく発表方法などに関する指導をおこないます。担当教員以外の教員にもゼミへの参加を求めることができます。

スケジュール

学生は１年次において１年生ゼミでの指導をもとにフィールドワーク（現地調査）の準備をおこない、２年次以降、指導教員の指導のもとに調査地にてフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別指導や論文ゼミでの共同指導を受けながら学位論文の完成をめざします。

専攻案内

地域文化学専攻

独創的な文化人類学・民族学を目指して



本専攻は、国立民族学博物館が基盤機関となり、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ及びオセアニアの諸地域に居住する人びとの文化と社会に関する教育研究を行っています。各々の地域の特性や歴史を考慮しながら、民族誌学的方法論に基づく文化と社会の記述、構造の解明、動態の把握を目指します。現地調査から得られたデータを分析し、理論化し、学術的な貢献と実践的な提言ができる人材を養成します。

信田 敏宏 専攻長

比較文化学専攻

比較研究を通じて文化の諸現象を解明



本専攻は、比較社会、比較宗教、比較技術、比較言語、比較芸術、文化資源という６つの研究分野から構成されています。諸民族文化の比較研究により、各々に通底する普遍性の発見と理論的解明を目指します。基盤機関である国立民族学博物館の標本資料や映像音響資料、文献図書資料等を教育と研究に活かせることは本専攻の強みです。従来の文化人類学的研究方法に加えて、隣接諸科学の成果を導入し、新しい研究分野の開発を積極的に進めることができる人材を養成します。

南 真木人 専攻長

地域文化学専攻・比較文化学専攻は、2023年４月に、先端学術院先端学術専攻 人類文化研究コースに統合することを検討しています（設置構想中）。なお設置計画は予定であり、内容には変更が生じる場合がございます。詳細はこちらをご覧ください。 https://next20.soken.ac.jp/

教員紹介

地域文化学専攻（2022年度）

❶専門分野
❷現在の研究課題
❸研究のキーワード

相島 葉月 准教授

❶ 社会人類学・イスラーム学・中東研究

❷現代エジプトにおける美と身体文化に関する社会人類学的研究
日本と中東に関する文化的知識のグローバルな流通について
❸モダニティ、都市中流層、マスメディア、教育、現代イスラーム思想、消費、様式美、独創性、知的伝統

伊藤 敦規 准教授

❶ アメリカ先住民研究・博物館人類学・知的財産問題の人類学的研究

❷人類学博物館の Indigenization に関する研究
❸米国先住民、博物館人類学

樫永 真佐夫 教授

❶ 東南アジア文化人類学

❷東南アジアの伝統的政治社会組織に関する歴史的研究
物質文化に焦点を当てた黒タイの民族誌的研究
ベトナムにおける国家と民族の関係に関する研究
❸東南アジア大陸部、ベトナム、黒タイ、白タイ、タイ系言語集団、社会人類学

齋藤 晃 教授

❶ 歴史人類学・ラテンアメリカ研究

❷植民地期アンデスの先住民の経済住化に関する人文情報学的研究
南米ボリビア低地のモヘニョに関する歴史人類学的研究
❸ラテンアメリカ、アンデス、アマゾン、植民地時代、エスノヒストリー、先住民、キリスト教

島村 一平 准教授

❶ 文化人類学・モンゴル研究

❷モンゴル仏教のグローカル実践に関する学際・国際的地域研究
モンゴル・ヒップホップに関する文化人類学的研究
モンゴル人の輪廻転生と死生観に関する研究
❸モンゴル、ブリヤート、シャーマニズム、モンゴル仏教、エスニシティ、ナショナリズム、チンギスハーン表象、ヒップホップ

鈴木 英明 准教授

❶ 歴史学・インド洋海域史研究・アフリカ研究

❷19世紀を対象としたインド洋西海域世界の実態解明
20世紀前半のベルシア湾における拘束の実態解明
移動概念の学際的再検討
❸インド洋、海域世界、奴隷、奴隷廃止、移動

池谷 和信 教授（2024年３月退任予定）

❶ 環境人類学・人文地理学・アフリカ研究・地球学

❷熱帯の狩猟採集文化、家畜飼育文化の変容に関する比較研究
南部アフリカにおける先住民運動に関する研究
地球環境史の構築に関する研究
❸地球環境、狩猟採集民、アフリカ、東北アジア、サン（ブッシュマン）、ソマリ、チュクチ、日本、バングラデシュ、環境人類学、人文地理学

小野 林太郎 准教授

❶ 海洋考古学・東南アジア研究・オセアニア考古学

❷熱帯島嶼域における人類史や資源利用史に関する考古学研究
漁撈や海の利用にかかわる人類・考古学的研究
水中文化遺産を対象とした海洋考古学的研究
❸東南アジア島嶼部、インドネシア、オセアニア、オーストロネシア語族、漁撈、水中文化遺産、人類史

川瀬 慈 准教授

❶ 映像人類学・民族誌映画

❷エチオピアの音楽職能集団の人類学的研究
民族誌映画制作の理論と実践に関する研究
アフリカの無形文化の保護と継承に資する映像人類学研究
人類学研究にもとづく創作的な話法の探求
❸映像人類学、民族誌映画、エチオピア、音楽職能、Ethio-Jazz、エスノフィクション、エスノポエティクス

齋藤 玲子 准教授

❶ アイヌ・北方先住民文化研究

❷アイヌおよび隣接する民族における物と人の移動と交流
環北太平洋地域先住民の物質文化に関する比較研究
❸アイヌ、北海道、北アメリカ、物質文化、観光、博物館

新免 光比呂 教授（2025年３月退任予定）

❶ 宗教学・東欧研究

❷ファシズム運動における宗教的要因の比較研究
❸ルーマニア、ファシズム、レジオナール、キリスト教

中川 理 准教授

❶ 文化人類学・グローバル化研究

❷資本主義と周縁の接合に関する人類学的研究
難民出身のモン（Hmong）と国家に関する人類学的研究
❸経済人類学、政治人類学、ヨーロッパ、移民、難民

奈良 雅史 准教授

❶ 文化人類学・中国研究

❷中国における宗教と少数民族をめぐる人類学的研究
宗教と移動をめぐる人類学的研究
❸宗教実践、国家、自律性、公共性、移動、エスニシティ、ムスリム、回族

丹羽 典生 教授

❶ 社会人類学・オセアニア地域研究

❷オセアニアにおける紛争と少数民族に関する研究
応援に関する通文化比較
❸宗教運動、紛争、開発、少数民族、応援

信田 敏宏 教授

❶ 社会人類学・東南アジア研究

❷マレーシア先住民に関する人類学的研究
インクルーシブ社会に関する人類学的研究
❸東南アジア、マレーシア、オラン・アスリ、日本、博物館、知的障害者

藤本 透子 准教授

❶ 文化人類学・中央アジア地域研究

❷中央アジアにおけるイスラーム実践の人類学的研究
カザフの伝統医療に関する研究
カザフの移動と社会再編に関する研究
❸中央アジア、カザフスタン、ムスリム、宗教実践、伝統医療、社会再編、移動

三島 禎子 准教授

❶ 文化人類学・西アフリカ研究

❷国際移動に関する文化人類学的研究
❸西アフリカ、セネガル、ソニンケ、商業民族、民族ネットワーク

山中 由里子 教授

❶ 比較文学比較文化

❷中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究
驚異と怪異の比較研究
アレクサンドロス伝承の東西伝播
❸西アジア、アラブ文学、ペルシア文学、博物学、想像界、イラン、ユーラシア交渉史

西尾 哲夫 教授（2023年３月退任予定）

❶ 言語人類学・アラブ研究

❷グローバル化と中東地域の民衆文化に関する言語人類学的研究
多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究
❸中東、北アフリカ、アラビアンナイト、ナラトロジー

野林 厚志 教授

❶ 人類学・民族考古学・台湾研究・食文化研究

❷生業技術の通文化比較研究
食の多元的価値に関する人類学的研究
台湾におけるエスニシティの動態の探究
❸生業文化、食文化、物質文化、狩猟技術、野生動物、家畜動物、狩猟農耕民、台湾原住民族、エスニシティ、文化資源

平井 京之介 教授

❶ 社会人類学・日本研究・東南アジア研究

❷水俣病被害者支援運動の人類学的研究
「食の遺産」の生成に関する博物館人類学的研究
タイのコミュニティ博物館についての人類学的研究
❸日本、タイ、ラオス、経済人類学、社会運動、博物館、上座部仏教、水俣病

三尾 稔 教授

❶ 文化人類学・南アジア研究

❷南アジアにおける多様な宗教伝統の共生に関する研究
インドのナショナリズムと宗教の関係に関する研究
インドの大衆消費社会化と祭礼の変容に関する研究
❸ラージャスターン州メーワール地方（インド）、グジャラート州（インド）、ヒンドゥー、ムスリム、文化人類学、宗教人類学、南アジア地域研究

森 明子 教授（2023年３月退任予定）

❶ 文化人類学・民族誌研究・ヨーロッパ人類学

❷人類学の記述とその社会的文脈
人類学的比較の再考
❸社会的なもの、移民、ケア、場所、家族、都市、国家、EU

比較文化学専攻（2022年度）

❶専門分野
❷現在の研究課題
❸研究のキーワード

飯田　卓 教授
❶生態人類学・文化遺産の人類学・視覚メディアの人類学
❷マダガスカルにおける漁民文化と漁撈技術
アフリカにおける文化遺産とコミュニティの相互影響
日本人類学の発達における大衆メディアの役割
❸インド洋、アフリカ大陸、日本、人類学史、文化遺産実践、大衆アカデミズム、情報と知

上羽 陽子 准教授
❶民族芸術学・染織研究・手工芸研究
❷現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究
❸民族芸術学、手工芸文化、染織研究、インド、伝統的技術

卯田 宗平 准教授
❶環境民俗学・東アジア研究
❷動物と人間とのかかわりをめぐる民俗学的研究
❸自然と人間、動物利用、リバランス論、鵜飼文化、トナカイ飼養、物質文化、技術と技能

宇田川 妙子 教授（2025年3月退任予定）
❶南ヨーロッパ研究・性研究
❷イタリアおよび地中海ヨーロッパの民族誌的研究
ジェンダー／セクシュアリティに関する文化人類学的研究
社会理論の批判的再考
❸イタリア、地中海ヨーロッパ、イタリア人、文化人類学、ジェンダー／セクシュアリティ研究、南ヨーロッパ研究、性研究

太田 心平 准教授
❶社会文化人類学・北東アジア研究・博物館組織行動論
❷韓国・朝鮮社会における文化の統合性と多様性の研究
労働現場としての博物館における組織行動と動機付け
❸韓国・朝鮮、近代性、社会的記憶、物語論、世代集団、知識生成、博物館

岡田 恵美 准教授
❶音楽民族学・南アジア研究
❷南アジアのマイノリティにおける音楽文化
伝統ポリフォニー歌唱の記録保存と教育資源化
❸インド、マイノリティ、山岳民族、ポリフォニー、音楽文化、伝承、楽器改良

韓　敏 教授（2026年3月退任予定）
❶社会人類学・中国研究
❷歴史記憶と象徴に関する人類学的研究
❸社会主義近代化、中国、文化遺産、観光、文化表象、記憶、聖地巡礼、英雄崇拝、演族、シボ族

菊澤 律子 教授
❶言語学・オーストロネシア諸語・言語研究における地理情報システム（GIS）の利用
❷オーストロネシア諸語における統語構造の変遷
言語データを軸としたオセアニアの先史に関する学際研究
手話言語と音声言語の対照研究
❸オセアニア、フィジー、オーストロネシア、記述言語学、比較（歴史）言語学、比較（歴史）統語論、先史言語学、手話言語学

岸上 伸啓 教授（2024年3月退任予定）
❶文化人類学・北方文化研究
❷北アメリカ北西海岸先住民社会における社会・文化変化
カナダ先住民アートに関する文化人類学的研究
❸カナダ、北太平洋沿岸、アラスカ、イヌイット、イヌピアット、ハイダ、社会・文化変化、先住民、アート

笹原 亮二 教授（2025年3月退任予定）
❶民俗学・民俗芸能研究
❷モノの遺存の総体的把握を通じた生活文化に関する民俗学的研究
❸日本、民俗学、三匹獅子舞、民俗芸能

菅瀬 晶子 准教授
❶文化人類学・中東地域研究
❷パレスチナ・イスラエルを中心とした東地中海アラブ地域で、一神教徒が共有する聖者崇敬の研究
イスラエルにおけるアラブ人市民を中心とした、マイノリティによる文化表象のありかた
❸中東、東地中海、パレスチナ、イスラエル、キリスト教徒、マイノリティ、アイデンティティ、エスニシティ、文化表象、共存

鈴木 七美 教授（2023年3月退任予定）
❶歴史人類学・医療人類学・エイジング研究
❷超高齢社会のエイジングフレンドリー・コミュニティ
キルトドキュメンテーション活動――アーミッシュキルトから考える
❸エイジング・イン・プレイス、米国宗教コミュニティ、アーミッシュキルト

鈴木　紀 教授（2025年3月退任予定）
❶開発人類学・ラテンアメリカ文化論
❷開発援助プロジェクトの人類学的評価法
博物館における先住民族文化表象
❸ラテンアメリカ、メキシコ、ユカタン、開発援助、フェアトレード、博物館展示学

園田 直子 教授（2024年3月退任予定）
❶保存科学
❷博物館における持続可能な資料管理に関する研究
資料の展示・保存環境に関する研究
収蔵庫の再編成に関する研究
❸保存科学、総合的有害生物管理（IPM）、博物館環境

寺村 裕史 准教授
❶情報考古学・文化情報学
❷情報考古学的手法を用いた文化資料のデジタル化と情報統合に関する研究
❸GIS（地理情報システム）、考古学、情報科学

日高 真吾 教授
❶保存科学・保存修復
❷地域文化の保存と活用に関する研究
博物館における保存処理法の研究
❸日本、保存科学、保存処理

廣瀬 浩二郎 准教授
❶日本宗教史・民俗学
❷障害者文化に関する人類学的研究
日本近代の新宗教に関する歴史的研究
❸日本、東北、九州、京都、歴史、宗教、福祉、文化

福岡 正太 教授
❶民族音楽学・東南アジア研究
❷映像音響メディアとインドネシア音楽の変容
伝統芸能の伝承と映像記録
❸インドネシア（スンダ）、東南アジア、映像音響メディア、民族音楽学

ピーター J.マシウス 教授（2025年3月退任予定）
❶先史学・民族植物学
❷History of agriculture and plant domestication, with specific interests in taro (Colocasia esculenta), paper mulberry (Broussonetia papyrifera), and other plants used for food, fodder and fibre
❸Asia, Pacific, Mediterranean, ethnobotany, ethnobiology, plant domestication, food history

松尾 瑞穂 准教授
❶文化人類学・ジェンダー医療人類学・南アジア研究
❷近代化、開発がもたらすリプロダクション実践の変容に関する研究
サブスタンスと身体研究
子育ての比較文化論
❸リプロダクション（性と生殖）、ジェンダー、インド、サブスタンス、身体

丸川 雄三 准教授
❶文化財情報発信・連想情報学
❷連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究
❸文化財、連想検索、デジタルアーカイブ

南　真木人 教授（2026年3月退任予定）
❶南アジア研究・文化人類学
❷ネパール人移民に関する人類学的研究
映像音響資料の再資源化に関する研究
❸在留ネパール人、社会運動、環流する文化、先住民族、当事者コミュニティ、研究資源の共有化、薬師カースト

吉岡 乾 准教授
❶言語学・南アジア研究
❷北パキスタン諸言語の記述言語学的研究
❸ブルシャスキー語、ドマーキ語、カティ語、カラーシャ語、記述言語学、パキスタン、カラコラム山脈、ヒンドゥークシ山脈

吉田 憲司 教授（国立民族学博物館長）
❶博物館人類学・アフリカ研究
❷アフリカにおける造形と儀礼の人類学的研究
博物館・美術館における文化の表象のあり方の研究
❸アフリカ、ヨーロッパ、日本

博士後期課程（Ph.D.）

課程修了の要件、学位取得までの流れ

■ 学位取得の要件

学位を取得するためには、所定の3年限以上在学し、必要な研究指導を受けた上で、所定の単位数以上を修得し、博士論文の審査及び試験に合格すること（課程博士）が必要です。

■ 学位取得までの流れ

1年次	1年生ゼミ出席
	現地調査準備
	調査計画書提出
2年次前期以降	現地調査
	調査報告、博士論文構想発表
3年次	必須履修単位取得
	博士論文草稿発表
3年次後期以降	課程博士出願
	論文公開発表会・口述試験
	最終試験・合否決定
	学位授与



研究支援

■ リサーチ・アシスタント（RA）制度

教員の指示・監督の下で、研究者の補助として、研究活動に必要な様々な業務をおこないながら給与を得ることができます。

■ 学生派遣事業

学位申請論文作成に不可欠な国内外の調査や学会での成果発表に要する旅費、宿泊費などの支援をおこないます。

■ SOKENDAI 研究派遣プログラム

高い専門性と広い視野、国際通用性をそなえた研究者の育成を目的として、国内外の大学、研究機関、企業等における共同研究活動や調査活動等に必要な経費を支援する制度です。

■ 入学料・授業料免除等制度

経済的理由により入学料や授業料の納入が困難な学生に対する経済的支援として、入学料・授業料の免除（収納猶予）の制度があります。授業料免除については、毎年2回、授業料免除申請の受付をおこなっています。授業料免除許可者は、半期の授業料の全額もしくは半額が免除されます。

■ 特別講義

外部研究資金調達のための申請書の書き方、論文投稿のしかたなどをテーマにした特別講義をおこなっています。

■ 日本学術振興会「特別研究員（DC2）」採用数

年　度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
採用数	3	3	4	2	1	2	2	2	2	4	0	2	2	1	2

在学生の声

地域文化学専攻

金丸 雄一

私は、日本列島のアマ（海女・海士）の民族誌的研究をしています。環境変動がもたらす海産資源の減少に対しアマがいかに適応しているかを、三重県志摩半島に居住しながら、定点的に参与観察しています。はじめてホンモノ＝生の海女を目にした2011年、志摩に移住しみずからアマとなった2014年から比べると、海洋環境の激変を肌で感じています。海一生き物一アマ（人）の関係をより深くとらえるため、私は総研大博士課程に進学しました。

地域文化学専攻は、国立民族学博物館（みんぱく）を基盤機関とするため、以下の大いなる利点があります。①教員数の多さ、②さまざまな共同研究や懇談会に接するチャンス、③博物館展示に常にふれられる環境、④経済的な支援制度、です。

①は、多分野に跨る先生方が院生数を遥かに超えて在籍されていること。これはゼミにも反映され、主副指導教員2名とゼミ担当4名にくわえ、ご興味をもたれた先生方の飛び入り参加？もあります。オンライン併用開催がここ2年進み、院生含め20名ほどで活発な議論が交わされています。②は館内外のまさに「プロの研究」を間近で見られること、③は国際的／学際的に多様な視座が常に得られる「土俵」のうえに研究拠点があること、と言えます。④では、私は「学生派遣事業」の支援により、予備調査費を工面できました。総研大葉山本部の各種支援制度や助成金／奨学金情報もたいへん充実しています。

最後に、私は、社会で四半世紀働いてから「学び直し」をした口です。現在は、指導教員と事務の方がたのご指導のおかげで2022年度日本学術振興会の特別研究員DC2に採用され、社会人院生から研究者への転換に挑んでおります。本専攻の間口の広さと絶好の環境に感謝しつつ、国内外からの院生仲間と過ごす日々です。



磯メガネをつけ合う
80代の高齢海女たち
（三重県志摩市、2020年）

比較文化学専攻

服部 裕規

私は、フィンランドにおける民俗楽器ヨウヒッコの再創造過程について、自身による楽器作製・演奏を踏まえて明らかにすることを試みています。私は教育学研究で修士課程を修了後、他大学の研究員として、対話の中で声や言葉を「聴く」ことの意味を問うナラティヴ研究に従事しました。より視野を広げ、文化人類学の視点から、音の響きを作る／聴くことが開く音楽文化に接近したいと思い至り、総研大に進学しました。

総研大のある国立民族学博物館は、新たな学びや気付きに事欠きません。研究に活用できる膨大な数の収蔵品や文献資料が在るだけでなく、多様な研究領域を持つ文化人類学者たちがひしめき合い、共同研究や講演会、特別展示、一般向けワークショップ等を通して、日々新たなアイデアが生産されています。院生は、少なくとも物理的には気軽に、それらの場に参加可能で（オンライン環境も完備）、いつでも刺激的な学びを享受できます。

先輩方による研究助成金の採択実績を参照できる点も魅力です。手続きにあたって、研究協力係の方がたの温かいサポートも大きな助けになります。私も学外機関の助成金を獲得できました。また、リサーチアシスタント制度も充実しています。私の場合は、博物館内外の人類学者が撮影した写真資料に触れ、未知の世界を伺い知ると同時に、写真撮影についての考察を深めました。さらに、業務の合間における先生方や他の院生らとの何気ない会話の中で、自分の研究に関する思わぬ気付きを得たり、海外の研究者を紹介していただく機会にも恵まれました。

総研大は、よりよい研究を実践するためのヒントが至る所に潜み、多様な交流を通して文化人類学を学び続けることができる稀有な場だと感じます。



ヨウヒッコ再興の第一人者
ラウノ・ニエミネン氏の作製楽器
（2020年）

学位論文リスト

学位論文リスト

2006年度以降

【課程博士】

チベット・アムド地域における村落社会と信仰生活の変容に関する人類学的研究 ——中国青海省海南チベット族自治州貴南県ボンコル村の事例から	拉 加 本（地域）	[2022.3.24 学術]
移民の食事に関する文化人類学的研究 ——広島県在住の中国人女性の家庭を事例として	謝 春游（地域）	[2022.3.24 学術]
韓国近現代美術史叙述系の南北分断体験と制作活動 ——朝鮮の文化を象徴するモチーフを中心に	松岡とも子（地域）	[2022.3.24 文学]
The Kong Puja Drum: A Musical Communication in the Community of Khon Muang, Nan Province, Thailand	カンティウォン・ティティポン（比較）	[2022.3.24 学術]
包摂的かつ協働的な博物館活動に関する研究 ——台湾の桃園市立大溪木芸生態博物館の実践を中心に	邱 君妮（比較）	[2022.3.24 学術]
台湾の先住民族認定とエスニシティの形成に関する文化人類学的研究 ——タウヤ族の「正名運動」を事例として	呂 怡屏（地域）	[2021.9.28 文学]
先史アンデス古期におけるマウンド形成の考古学的研究 ——クルス・ベルデ遺跡における環境変動と集団の実践の変化	荘司 一歩（比較）	[2021.9.28 文学]
ケニア沿岸部の零細漁業者による水産資源の利用に関する生態人類学的研究 ——かご漁を事例として——	田村 卓也（比較）	[2021.3.24 文学]
Formation of Music of Kazakh Diaspora in Mongolia -A Case Study of the Musical Practices of Professional Performers	八木 風輝（比較）	[2021.3.24 文学]
ベトナムのモンの弓元論における諸存在の制作と構成 —「常世」と「現世」の関係に着目して—	今井 衛暁（地域）	[2020.9.28 文学]
オイラド・モンゴルにおける口頭伝承とアイデンティティ—故郷創出物語から—	査 斯 奎 干（地域）	[2020.3.24 文学]
中国都市部の家庭の食生活に関する歴史民族誌 —社会主義制度下（1949-2018年）の天津市の事例—	劉 征宇（比較）	[2020.3.24 文学]
神戸南京町50年の民族誌的研究—包摂的チャイナタウンの生成と変容—	辺 清音（比較）	[2020.3.24 文学]
中国新疆イリラドの宗教復興に関する人類学的研究 —寺とオワー祭祀の復活に関わる転生活仏シャリワン・ゲゲン14世—	那 木 加 甫（地域）	[2019.3.22 学術]
中国青海省におけるチベット仏教復興運動下の民間信仰の変容に関する人類学的研究 —同仁県ウォッコル村を事例として—	喬 旦 加 布（地域）	[2018.3.23 文学]
近代フィリピンにおける民族衣装をまとった聖母像の研究	古沢ゆりあ（比較）	[2017.9.28 文学]
自然資源の利用に関する環境人類学的研究 —ニカラグアの先住民による商業のウミガメ漁の事例—	高木 仁（地域）	[2017.3.24 文学]
スナックにおける言語コミュニケーション研究 —対人関係を調節する接客言語ストラテジー—	中田 祥音（比較）	[2016.9.28 文学]
日本社会の自然葬に関する民族誌的研究 —NPO法人「葬送の自由をすすめる会」を中心に—	金セッビョル（地域）	[2016.3.24 文学]
都市団族コミュニティの維持と宗教実践 —中国陝西省西安市における回族の帰属意識をめぐる民族誌的研究—	今中 幸文（地域）	[2016.3.24 文学]
韓国の地域社会における華僑のアイデンティティに関する民族誌的研究 —韓国華僑ビジネスと華僑協会を中心に—	金 桂淵（地域）	[2015.9.28 文学]
「野球移民」を生みだす人びと —ドミニカ共和国におけるトランスナショナル移民研究—	窪田 暁（比較）	[2015.3.24 文学]
モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる交渉に関する民族誌	堀田あゆみ（地域）	[2015.3.24 学術]
中国雲南省における徳宏タイ族の節典うたと感性の民族誌的研究	伊藤 悟（地域）	[2014.9.29 文学]
My Huaca: The Use of Archaeological Heritage in Modern Peru from a Public-Archaeology Perspective	サウセド・セガミ・ダニエル・タンテ（比較）	[2014.9.29 文学]
ナイジェリアの都市イレ・イフェにおける「アーティスト」の民族誌的研究	綾方しらべ（比較）	[2014.3.20 文学]
変化しつづける装い —中国雲南省文山モンの自己と他者をめぐる人類学的服飾研究—	宮脇 千絵（地域）	[2012.9.28 文学]
現代アンデス農村における聖人信仰の変容 —人の移動に焦点をあてて—	八木百合子（比較）	[2012.9.28 文学]
無文字社会における歴史記憶の生成と継承 —南エチオピア牧畜民ボラナにおける口承史の分析をとおして—	大場 千景（地域）	[2012.3.23 文学]
カオダイ教ハノイ聖堂の民族誌的研究 —ベトナム北部地域の都市における女性たちの社会関係—	伊藤まり子（地域）	[2012.3.23 文学]
周辺イスラームのダイナミズム —タイ南部村落におけるイスラーム復興運動と宗教実践の変容—	小河 久志（地域）	[2012.3.23 文学]
ヨーグルトをめぐる言説の生成と展開 —社会主義期からポスト社会主義期にかけてのブルガリアを中心に—	マリア・ヨトヴァ（比較）	[2011.9.30 文学]
オーストラリア先住民ヨルタ・ヨルタの環境管理のための先住民運動に関する文化人類学的研究	友永 雄吾（地域）	[2011.3.24 文学]
現代タイ社会における開発と僧侶 —僧侶による社会貢献とネットワーク形成に焦点をあてて—	岡部真由美（地域）	[2011.3.24 文学]
現代東南中国における宗親会の民族誌的研究 —国家との関係を中心として—	鍾 夏晴（比較）	[2011.3.24 文学]
農業技術改善の民俗誌 —紀ノ川下流域村落の一七—二〇世紀前半における動向の分析—	加藤 幸治（比較）	[2010.9.30 文学]
日本の先史時代における植物性資料の加工と利用 —残存デンプン分析法の理論と応用—	渋谷 綾子（比較）	[2010.3.24 文学]
韓国における老人の食 —老人福祉施設を中心に—	守屋亜記子（地域）	[2009.3.24 文学]
インド農村社会における不妊経験の人類学的研究	松尾 瑞穂（比較）	[2008.9.30 文学]
フェラインの民族誌 —ドイツ・バイエルン州のローカル・アソシエーション—	山田 香織（地域）	[2008.3.19 文学]
水上人と呼ばれる人々 —広東珠江デルタの漂民エスニシティとその変容—	長沼さやか（地域）	[2008.3.19 文学]
在米コリアンのサンフランシスコ日本町 —マルチカルチャーのエスニックタウン—	小谷 幸子（比較）	[2008.3.19 文学]
参加型開発を通した女性の自己変容過程に関する人類学的研究 —北インド農村社会を事例として—	菅野美佐子（比較）	[2007.9.28 文学]
「場」と「パフォーマンス」に関する人類学的研究 —トルコ・都市におけるアレヴィーのセマーを例として—	米山 知子（比較）	[2007.9.28 文学]
上ビルマ村落における宗教とジェンダーに関する人類学的研究	飯國有佳子（地域）	[2007.3.23 文学]
「護り」の身体技法に関する映像人類学研究 —インドネシア・ミナンカバウの事例から—	村尾 静二（比較）	[2007.3.23 文学]
離散と故郷 —ヨルダンのパレスチナ系住民にみられる帰属意識とナショナリズム—	錦田 愛子（地域）	[2007.3.23 文学]
「子ども域」の文化人類学的研究 —バングラデシュ農村社会の子ども—	南出 和余（比較）	[2007.3.23 文学]

【論文博士】

日本手話、台湾手話、韓国手話における語彙の記述とその歴史的変遷 —数詞および視点表現に着目して—	相良 啓子	[2021.9.28 学術]
都市環境における関係性を巡る実践としての精霊憑依 —マリの首都におけるソンガイ移民の精霊憑依に関する人類学的研究—	内田 修一	[2021.3.24 学術]
グローバル化する互酬性 —サモア世界の儀礼財の循環と首長制—	山本 真鳥	[2017.3.24 文学]
ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成 —東北地方のヌン・アン集団の事例から—	チュ・スワン・ザオ	[2015.9.28 文学]
アイヌ衣文化の研究	津田 命子	[2014.9.29 学術]
先住民生存捕鯨再考 —国際捕鯨委員会における議論とベクウェイ島の事例を中心に—	濱口 尚	[2013.9.27 文学]
多文化都市・新宿の生成と展開 —ライフサイクルの視座—	川村千鶴子	[2013.3.22 学術]
先史アンデス形成期の社会動態 —ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から—	山本 睦	[2012.9.28 文学]
小集落から見た初期国家の形成過程 —先スペイン期中央アンデスのワリ国家を事例として—	土井 正樹	[2012.3.23 文学]
スリランカにおけるエステート・タミルのアイデンティティと「ジャーティヤ」をめぐる人類学的研究	鈴木 晋介	[2011.3.24 文学]
活用される職祖伝承 —近・現代日本における木工技物の担い手と木地屋「根元地」—	木村 裕樹	[2010.9.30 文学]
先住民学習の理論と実践—ポストコロニアル人類学の活用—	中山 京子	[2010.9.30 学術]
シャーマニズムによるエスニシティの探求 —ポスト社会主義期におけるモンゴル・ブリヤートの事例を中心として	島村 一平	[2010.3.24 文学]
国際線客室乗務員の接客業務と勤務体制 —仕事の人類学的研究—	八巻 恵子	[2009.9.30 文学]
「アイヌ風俗画」の研究 —近世北海道におけるアイヌと美術	新明 英仁	[2007.9.28 文学]

年度別学位授与者数

		'91～'08年	'09年	'10年	'11年	'12年	'13年	'14年	'15年	'16年	'17年	'18年	'19年	'20年	'21年	計
地域文化学専攻	課程博士	26	0	2	3	1	0	2	3	1	1	1	1	1	4	46
	論文博士	13	1	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	1	0	19
比較文化学専攻	課程博士	18	1	2	1	1	1	2	0	1	1	0	2	2	3	35
	論文博士	7	1	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	15
計		64	3	7	5	4	2	5	4	3	2	1	3	4	8	115

よくある質問

Q 学部をもつ大学院の教育と比べてどんな特徴がありますか？

A 教員数が学生数をうわまわるという、他大学にはない恵まれた教育環境があげられます。教員：学生の比率はおおよそ３：２であり、個々の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。また教員は各分野の第一線で活躍する研究者であり、最新の研究動向に基づいた指導をおこなえます。さらに、みんぱくが所蔵する豊富な研究資料（図書68万冊、標本資料34万５千点、映像音響資料７万点など）の利用、館が主催する多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通し、国内外の研究者との交流ができます。

Q 地域文化学専攻と比較文化学専攻の二専攻には、どのような違いがありますか？

A 地域と比較に別れているものの、共にフィールドワークを研究の根幹においているため、共通する部分も多く、密接な相互交流があります。また、専攻間に指導上の棲み分けはなく、院生がどちらに所属していても、両専攻の教員の指導を受けることができます。

Q 二専攻で学ぶことができるのは、文化人類学・民族学だけでしょうか？

A そんなことはありません。両専攻には、考古学、民俗学、宗教学、芸術学、言語学、音楽学、博物館学、保存科学など幅広い分野を専門とする教員がそろっており、それらの分野でも研究をおこなうことができます。また、教員の陣容は年度によって変化することがあるので、希望研究内容と当該専攻の教育体制との整合性について不明な点がある方は、前もってご相談ください。

Q 受験する前に希望する指導教員をかならず決めておく必要がありますか？

A 必要条件ではありませんが、強くお勧めします。また、受験を申請する前に希望指導教員に連絡を取れば、入学後の研究の見通しを立てる一助となるでしょう。

Q 学部や修士課程で文化人類学・民族学を専攻しなかったのですが、受験はできますか？

A 正規に文化人類学・民族学を学んだ経験がなくても受験はできます。しかし、入学後に志望研究が遂行可能であるか見通しをつけるためにも、関連図書などを精読し、少なくとも人類学やフィールドワークに関する基本的な考え方について理解しておくほうがよいでしょう。これは、何をするために当専攻を受験するのか整理するためにも役立つはずです。

Q できるだけ早く学位を取得したいのですが、３年で取得するのは難しいでしょうか？

A フィールドワークを研究の中心に据えている分野であるため、３年間で学位を取得するのは容易ではありません。早い取得が望ましいことは言うまでもありませんが、学問の進展に寄与できる質の高い研究成果を上げ、最終学位である博士号に相応しい研究能力を養うことがより重要であり、この点に留意した指導がおこなわれています。

Q 修士課程ですでに現地調査をはじめているのですが、入学後すぐに長期の現地調査をすることは可能ですか？

A 原則として、初年度は、長期フィールドワークをおこなうための準備期間にあてられています。フィールドワークは、単に現地に行けば遂行できるものではありません。また、修士課程でフィールドワークをすでにおこなっている場合でも、博士論文執筆のための調査では、求められる調査の質に大きな差があることが多いのです。入学後の一年間は、教員の指導のもと、調査計画の実現性・妥当性などについて、それまでの自己の研究成果や先行研究との関連に留意しながら検討します。年度末には、フィールドワークに向けたリサーチプロポーザルに関する発表をおこない、計画をより実現性の高いものへと練っていきます。

▼ その他の質問はこちら
https://www.minpaku.ac.jp/education/university/information/faq

修了生の声

関西外国語大学　外国語学部　准教授　**土井 正樹**（2012年３月学位取得）

私は、先スペイン期アンデス地域の古代国家の成立過程を研究しています。文化人類学と考古学の中間的な研究分野といえますが、専攻できる大学院は限られています。私のような研究テーマの学生も受け入れてもらえる許容度の高さが、総研大の魅力の一つです。

総研大の地域文化学専攻・比較文化学専攻が置かれているみんぱくは、世界最先端の研究テーマに挑む研究者がつどう研究所であり、優れた研究環境となっています。たとえばその充実した図書室では、利用したい資料にすぐにあたることができ、私の研究の大きな助けになりました。その上、みんぱくに備えられている高価な機器も利用でき、私の場合、デジタル顕微鏡や大型プリンターを利用することができました。

特筆すべき利点として、みんぱくでは、共同研究会や国際シンポジウムも多く開催されており、国内外の一流研究者と直接交流することが可能です。私自身、そのような場に積極的に参加したことにより、知識だけでなく、海外の一流研究者と意見交換する度胸も身につきました。また、論文ゼミという授業では、多様な専門分野の先生方および参加学生たちとの議論を通じて、自分とは専門分野の異なる人たちへの研究アピールの仕方など、研究者にとって必要な実践的能力が鍛えられたと思います。先生および有志の仲間とで行った自主勉強会のおかげで、視野を広げ専門性を高めることもできました。

総研大の両専攻には、ほかの大学院にはないメリットがあります。またそれは、皆さんの行動を通じてより大きなものにすることができます。総研大を志望する皆さんにもぜひ、このすばらしい環境を生かして、独創的かつ先駆的な研究テーマにチャレンジして欲しいと思います。



中国青海民族大学　准教授　**喬 旦加布**（2018年３月学位取得）

私は2009年４月に中国・青海省から私費留学生として日本にきました。留学前は、青海師範大学で、チベット語チベット文学を専攻しました。留学後は、北海道大学に３年６か月間在籍し、修士課程で初めて文化人類学を専攻しました。そして、総研大地域文化学専攻に進学しました。日本での生活は９年間ほどになります。

私の場合、出身村の伝統文化に関心を持ち、自分とは何か、人間とは何かという文化人類学の視点で自身の出自に関わる歴史や文化などを研究したいと考えました。博士課程の研究テーマは、主に近年のチベットアムド地域の青海省一帯で見られるチベット仏教の復興運動と民間信仰の変容にかかわる問題で、青海省黄南蔵族自治州同仁県ワッコル村の事例から、それら宗教にかかわる変化の実態を考察しました。

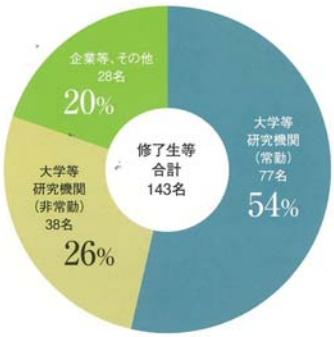
総研大地域文化学専攻の基盤機関である国立民族学博物館は、多言語による世界各地の民族学・文化人類学、民族誌、地方誌などに関する文献、映像、音声、標本資料を多く収蔵しており、世界でも有数の研究機関であると言っても過言ではありません。また、多岐にわたって民族学・文化人類学の最先端で活躍されている研究者が在籍し、大学院生に対して一対一の丁寧な研究指導を行っている点も魅力です。さらに、国内外におけるフィールド調査に対するサポート体制と学術振興会、その他の助成金の申請、雑誌への投稿に至るまで、指導も充実しています。また、一般の大学より研究会や国際シンポジウムなどが頻繁に行われ、大学院生でも研究発表を行う機会も多く、自分が目指す研究にとって最高の条件が備わっていたと思います。

現在、私は中国青海民族大学の准教授として主に大学院生に対して、人類学の理論や方法論に関する知識を教えながら、大学の民族博物館の展示にも携わっています。いま考えるとみんぱくで学んできた知識が大いに役に立っており、これから総研大の地域文化学専攻へ受験を希望する後輩の皆さんには是非とも豊かな研究環境を活用して欲しいと思っております。



修了生等の進路

修了生等の進路（2022年7月）



大学等研究機関（常勤）勤務先

青山学院大学、愛知淑徳大学、愛媛大学、大阪大学、神奈川大学、金沢星陵大学、鹿児島純心女子大学、川崎医療福祉大学、関西外国語大学、神田外語大学、京都大学、京都精華大学、京都文教大学、京都外国語大学、県立広島大学、神戸大学、神戸市外国語大学、神戸山手大学、神戸女学院大学、芝浦工業大学、四天王寺国際仏教大学、静岡大学、静岡文化芸術大学、滋賀県立近代美術館、女子栄養大学、清泉女学院、就実大学、成蹊大学、大東文化大学、中部大学、中京大学、筑波大学、東京大学、東京外国語大学、東北学院大学、東洋大学、帝京大学、長崎純心大学、奈良県立大学、南山大学、日本赤十字九州国際看護大学、日本大学、阪南大学、広島市立大学、宮崎公立大学、山形大学、龍谷大学、立命館大学、上海師範大学、インドネシア学術総局、ライデン大学（オランダ）、ソウル大学（韓国）、吉林大学（中国）、青海民族大学蔵学院（中国）、中国社会科学院（中国）、国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館、総合地球環境学研究所

入学選考

入学者選抜の基本的な考え方

第一次選抜（書類審査）では、修士論文または他の学術論文等について、独創性、研究史の把握、実証性、論理性の各項目に基づき評価します。また、研究内容（研究活動の概要、これまでに行った研究の要旨、これから志望する研究）については、計画の妥当性、計画の具体性、学問的意義、発展性の各項目に基づき評価します。

第二次選抜（面接審査）では、これまでに行った研究、修士論文等の内容、これから志望する研究に関する口頭試問を通し、討論能力、語学力、研究意欲等を評価します。

書類審査、面接審査の各項目を総合的に判断し、合否を判定します。

入学者選抜日程

出願資格認定審査 修士または専門職学位に相当する学力のある方は、事前に出願資格認定審査を行います	2022年11月７日（月） ～2022年11月10日（木）
入学願書受付期間	2022年12月１日（木） ～2022年12月７日（水）
第一次選抜（書類選考）・結果通知	2023年１月中旬
第二次選抜（面接審査）	2023年１月23日（月） ※予備日１月24日（火）
合格発表	２月中旬
入学手続き	３月中旬

▼出願書類および出願までの流れ等についてはこちら
https://www.minpaku.ac.jp/education/university/information/steps

総合研究大学院大学

Next20

先端学術院先端学術専攻20コース体制

2023年４月以降予定（設置構想中）

総合研究大学院大学は、大学共同利用機関等世界トップクラスの研究機関を基盤とする、大学院大学です。世界最先端の研究拠点を教育の現場として、高い専門性を持った博士人材の育成を行ってきました。人文科学系から自然科学系にわたって、６つの研究科のもと、20の専攻が設置されており、各専攻の教育は、国立民族学博物館などの18の基盤機関のもとで実施されています。

一方で、刻々と変化する学術分野の動向や社会の要請を踏まえ、複合的・融合的な課題に取り組む研究者人材を育成していくには、高度に専門的な教育リソースを、分野を超えて柔軟に活用できる体制としてする必要があります。そのため、これまでの教育体制を見直し、20コース体制へ移行する検討を開始しました。専門分野を超えた、新たな地平を創造する、次代の研究者育成を目指します。

地域文化学専攻と比較文化学専攻は、20コース体制への移行に伴い、２つの専攻を一つに統合し、新たに「人類文化研究コース」として生まれ変わる予定です（設置構想中）。

※なお設置計画は予定であり、内容には変更が生じる場合がございます。詳細はこちらをご覧ください。
https://next20.soken.ac.jp/

国立民族学博物館の概要

国立民族学博物館（みんぱく）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。みんぱくは、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究や共同研究を進めるとともに、学術情報を集積しています。その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することも使命としています。

みんぱくは「博物館機能をそなえた研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。みんぱくの展示は、常設展示と特別展示と企画展示とで構成されており、常設展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示と企画展示は、特定のテーマのもとに、年に数回、期間を限って開催されます。



所蔵民族学資料（2022年3月31日現在）

【標本資料】

海外資料	179,398点
国内資料	165,880点
計	345,278点

【映像音響資料】

映像資料	8,277点
音響資料	64,421点
計	72,698点

【文献図書資料】

日本語図書	272,631冊
外国語図書	417,562冊
計	690,193冊
日本語雑誌	10,189点
外国語雑誌	7,091点
計	17,280点



みんぱくアクセス



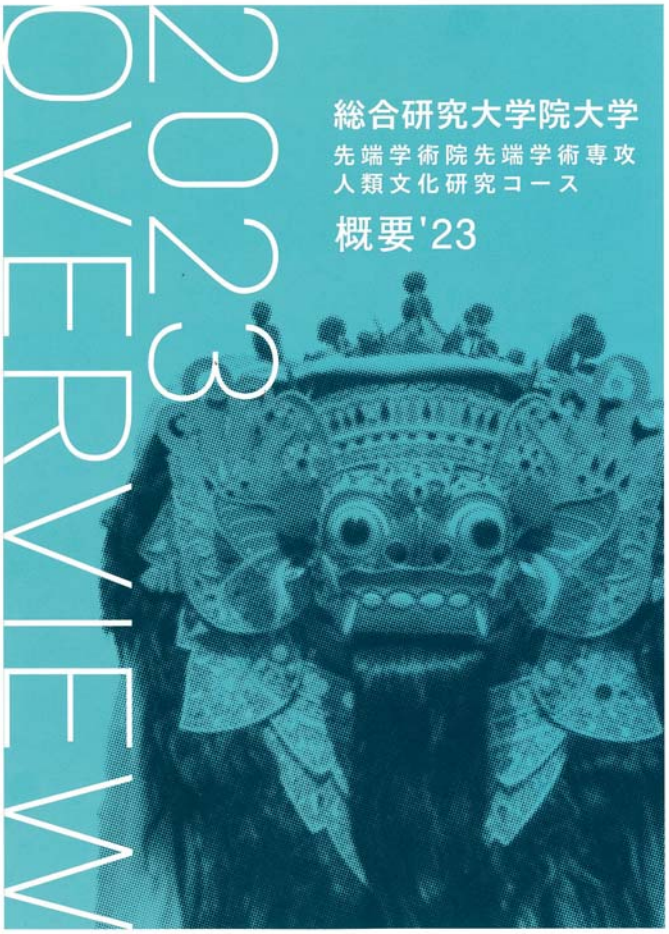
●大阪モノレール……「万博記念公園駅」、「公園東口駅」下車徒歩約15分
●バス（近鉄バス）……阪急茨木市駅・JR茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約13分
　阪急茨木市駅から約20分、JR茨木駅から約10分
●乗用車……万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分
※万博記念公園各ゲートで、国立民族学博物館の観覧券をお買い求めください。
　同園内を無料で通行できます。
※万博記念公園をご利用になる場合は、同園入園料が必要です。

［お問い合わせ］
国立民族学博物館 管理部研究協力課研究協力係（大学院担当）
〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電 話　06-6878-8236（大学院担当）
FAX　06-6878-8479
E-mail　souken@minpaku.ac.jp
URL　https://www.minpaku.ac.jp/

https://www.minpaku.ac.jp/education/university

2023 OVERVIEW

総合研究大学院大学
先端学術院先端学術専攻
人類文化研究コース
概要'23



国立大学法人 総合研究大学院大学　SOKENDAI THE GRADUATE UNIVERSITY FOR ADVANCED STUDIES

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology







館長挨拶

総合研究大学院大学（総研大）は、これまでの6研究科20専攻が、本年2023年から、先端学術院という1研究科、先端学術専攻という1専攻のもとに20コースが設置されるという大変革を遂げ、私たち国立民族学博物館（みんぱく）には、従来の地域文化学専攻、比較文化学専攻に代わり、人類文化研究コースが置かれることになりました。

みんぱくは、文化人類学・民族学とその関連分野の大学共同利用機関として1974年に創設され、1977年に開館しました。

みんぱくには現在、54名の研究者が在籍していますが、それぞれが世界各地でフィールドワークに従事し、人類文化の多様性と共通性、そして地球規模でのつながりの中での社会の動態について調査研究を続けています。文化人類学関係の教育研究機関として、世界全域をカヴァーする研究者の陣容と研究組織をもち、さらには博物館機能も備えているという点で、みんぱくは世界で唯一の存在といえます。

みんぱくがこれまでに収集してきた標本資料、モノの資料は、34万5千点を超えます。これは、20世紀後半以降に築かれた民族誌コレクションとしては世界最大のものです。また、博物館施設の規模の上で、みんぱくは、現在、世界最大の民族学博物館となっています。

人類の文明は、今、数百年来の大きな転換点を迎えているように思われます。これまでの、中心とされてきた側と周縁と規定されてきた側を一方的に支配しコントロールするという力関係が変質し、従来、それぞれ中心、周縁とされてきた人間集団の間に、創造的なものも破壊的なものも含めて、双方向的な接触と交錯・交流が至るところで起こるようになってきています。

そして、2020年以来、地球全域に広がった新型コロナウイルス感染症は、私たちの生活のありようを根底から変貌させることになりました。コロナ禍を経験した私たちは、私たちの生活が、動物や植物ばかりでなく、目に見えないウイルスや細菌の動きと密接に結びついていることを、身をもって経験することになりました。同時に、人と人との直接の接触を一時的にせよ制限する慣行の中から、社会に潜在していた差別意識が浮かび上がり、世界の新たな分断の状況も生まれてきています。

今ほど、あらゆる生物も含めた他者への共感に基づき、自己と他者についての理解を深めるという、人類学の知、そして民族学博物館の役割が求められている時代はないと思います。

みんぱくに設置された総研大の人類文化研究コースに所属する大学院生は、文化人類学をはじめ考古学、言語学、宗教学、生態学、生物学、芸術学、音楽学そして、保存科学、博物館学、情報工学など、広範な研究領域を専門とする個性ゆたかな教授陣の指導を受けられるのみならず、上で述べた世界に冠たる資料の蓄積に身近に接することができます。みなさんが、これらの学術資源を縦横に使いこなし、新たな研究の領野を切り開いて、それぞれの分野のパイオニアとしてはばたいて行かれることを期待しています。

国立民族学博物館長　吉田 憲司

MESSAGE

コース長挨拶



南 真木人 教授
人類文化研究コース長

人類文化研究コースはその英語名称 Anthropological Studies Programにあるように、文化人類学・民族学とその関連分野の視点に立ち、先史時代から現代まで人類が世界各地で形成してきた多様な文化を学ぶところです。その方法論上の特徴は、調査対象とする国や地域、場所がどこで、テーマが何であろうと、比較的長期の民族誌的な現地調査（エスノグラフィックなフィールドワーク）を行い、唯一無二の実地データを集めることです。学生はそうして得られた結果を記述し、先行研究や他の文字資料とあわせて考察した博士論文を作成します。ただし、ここまでは他大学の文化人類学専攻の大学院と大きな違いはありません。

人類文化研究コースの最大の強みは、コースが国立民族学博物館に設置されているため助教を除く地域や専門を異にする47名の教員が教育に携わり、学生の多様なニーズにきめ細かく対応できる点にあります。また、大学と異なり本コースでは、講義やゼミにとどまらず、大学共同利用機関ならではの多様な共同研究プロジェクトや研究集会、博物館ならではの標本資料や一般来館者向けの展示、講演・公演会、映画会などを研究に活用してもらえます。こうした他に類の見ない環境を活かして、皆さんには文化的な事象について幅広い関心をもつジェネラリストで、かつ特定の地域やテーマのスペシャリストになることを目指してほしいと思います。

私は1985年にはじめてネパールに自分のフィールド（調査村）を得て継続的な調査を進めてきましたが、最近つくづく思うことがあります。それは調査村の多くの世話になった人びとが亡くなり、1985年当時子どもだった人が父や母に、人によっては祖父母になっている年月です。そこで起こったさまざまな出来事を共有し、世代をこえた親族関係を熟知する調査村の人びととは、お互いの生きざまに関心を寄せる全人格的なつきあいをしてきたことに気づかされます。今になって思うと、民族誌的な現地調査とは、生涯続くこうした関係性を地球上の片隅につくる営みだったようです。

皆さんも人類文化研究コースに身をおいて、自らの強みを基にフィールドとテーマを見つけ、人生を豊かなものにする営みをはじめてみませんか。

コースの特長

人類文化研究コース（博士後期課程）

独創的な文化人類学・民族学を目指して

本コースは国立民族学博物館が基盤機関となり、先史時代から現代まで人類が世界各地で形成してきた多様な文化に関する教育研究をおこないます。文化人類学・民族学とその関連分野の視点に立ち、特定の文化を記述分析する民族誌学的研究や、特定の観点から文化を比較する通文化的研究を指導します。学生は、フィールド調査で得たデータ、国立民族学博物館が所蔵する標本、映像・音響、文献資料等を活用しながら研究し、博士論文の完成をめざします。

充実した教授陣

教員数が学生数をうわまわるという、他大学にはない恵まれた教育環境において、学生一人一人の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。コース担当教員は各分野の第一線で活躍する研究者であり、最新の研究動向に基づいた指導をうけることができます。



豊富な情報源

みんぱく図書室には、文化人類学・民族学関連のさまざまな研究テーマに関連した資料が所蔵されており、国内における文化人類学・民族学の大学や研究機関の中でも有数の規模の資料類を利用してもらえます。また、国立民族学博物館が主催する数多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通して、国内外の優秀な研究者との交流ができます。



各種の支援制度

リサーチ・アシスタント制度、論文校閲費用助成制度、学会発表やフィールドワークの旅費等支援制度など、充実した研究支援が受けられます。



指導体制

個別指導と共同指導を組み合わせた指導体制を採用しています。学生には主・副2名の指導教員がつき、入学から学位取得まで個別指導の形で研究指導をおこないます。一方、共同指導体制を取るゼミは3名の教員が担当し、研究の内容だけでなく発表方法などに関する指導をおこないます。担当教員と主・副指導教員以外の教員にもゼミへの参加を求めることができます。

教員紹介（50音順）

人類文化研究コース（2023年度）

相島 葉月 准教授
❶社会人類学・イスラーム学・中東研究
❷現代エジプトにおける美と身体文化に関する社会人類学的研究
日本と中東に関する文化的知識のグローバルな流通について
❸モダニティ、都市中流層、マスメディア、教育、現代イスラーム思想、消費、様式美、独創性、知的伝統

飯田 卓 教授
❶生態人類学・文化遺産の人類学・視覚メディアの人類学
❷マダガスカルにおける漁民文化と漁撈技術
アフリカにおける文化遺産とコミュニティの相互影響
日本人類学の発達における大衆メディアの役割
❸インド洋、アフリカ大陸、日本、人類学史、文化遺産実践、大衆アカデミズム、情報と知

池谷 和信 教授（2024年3月退任予定）
❶環境人類学・人文地理学・アフリカ研究・地球学
❷熱帯の狩猟採集文化、家畜飼育文化の変容に関する比較研究
南部アフリカにおける先住民運動に関する研究
地球環境史の構築に関する研究
❸地球環境、狩猟採集民、アフリカ、東北アジア、サン（ブッシュマン）、ソマリ、チュクチ、日本、バングラデシュ、環境人類学、人文地理学

伊藤 敦規 准教授
❶アメリカ先住民研究・博物館人類学・知的財産問題の人類学的研究
❷人類学博物館の Indigenization に関する研究
❸米国先住民、博物館人類学

上羽 陽子 准教授
❶民族芸術学・染織研究・手工芸研究
❷現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究
❸民族芸術学、手工芸文化、染織研究、インド、伝統的技術

卯田 宗平 教授
❶環境民俗学・東アジア研究
❷日本的な動物利用の実態解明に関わる民俗学研究
人類と鳥類とのかかわりに関する地域間比較研究
東アジアの内水面漁撈に関わる人類学的研究
❸自然と人間、動物利用、家畜化と野生性、物質文化、技術と技能、日本列島、中国

宇田川 妙子 教授（2025年3月退任予定）
❶南ヨーロッパ研究・性研究
❷イタリアおよび地中海ヨーロッパの民族誌的研究
ジェンダー／セクシュアリティに関する文化人類学的研究
社会理論の批判的再考
❸イタリア、地中海ヨーロッパ、イタリア人、文化人類学、ジェンダー／セクシュアリティ研究、南ヨーロッパ研究、性研究

太田 心平 准教授
❶社会文化人類学・北東アジア研究・博物館組織行動論
❷韓国・朝鮮社会における文化の統合性と多様性の研究
労働現場としての博物館における組織行動と動機付け
❸韓国・朝鮮、近代性、社会的記憶、物語論、世代集団、知識生成、博物館

岡田 恵美 准教授
❶音楽民族学・南アジア研究
❷インド北東部のポリフォニー歌唱文化に関する音楽民族学的研究
年中行事と歌の伝承をめぐる音楽民族学的研究
マイノリティの芸能と生存戦略に関する民族誌的研究
❸インド、マイノリティ、山岳民族、ポリフォニー、歌唱文化、伝承、観光資源化、教育資源化、芸能研究、楽器学

小野 林太郎 准教授
❶海洋考古学・東南アジア研究・オセアニア考古学
❷熱帯島嶼域における人類史や資源利用史に関する考古学研究
漁撈や海の利用にかかわる人類・考古学的研究
水中文化遺産を対象とした海洋考古学的研究
❸東南アジア島嶼部、インドネシア、オセアニア、オーストロネシア語族、漁撈、水中文化遺産、人類史

樫永 真佐夫 教授
❶東南アジア文化人類学
❷東南アジアの伝統的政治社会組織に関する歴史的研究
物質文化に焦点を当てた黒タイの民族誌的研究
ベトナムにおける国家と民族の関係に関する研究
❸東南アジア大陸部、ベトナム、黒タイ、白タイ、タイ系言語集団、社会人類学

川瀬 慈 准教授
❶映像人類学・民族誌映画
❷エチオピアの音楽職能集団の人類学的研究
民族誌映画制作の理論と実践に関する研究
アフリカの無形文化の保護と継承に資する映像人類学研究
人類学研究にもとづく創作的な話法の探求
❸映像人類学、民族誌映画、エチオピア、音楽職能、Ethio-Jazz、エスノフィクション、エスノポエティクス

❶専門分野 ❷現在の研究課題 ❸研究のキーワード

韓 敏 教授（2026年3月退任予定）
❶社会人類学・中国研究
❷歴史記憶と象徴に関する人類学的研究
❸社会主義近代化、中国、文化遺産、観光、文化表象、記憶、聖地巡礼、英雄崇拝、演族、シボ族

菊澤 律子 教授
❶言語学・オーストロネシア諸語・言語研究における地理情報システム（GIS）の利用
❷オーストロネシア諸語における統語構造の変遷
言語データを軸としたオセアニアの先史に関する学際研究
手話言語と音声言語の対照研究
❸オセアニア、フィジー、オーストロネシア、記述言語学、比較（歴史）言語学、比較（歴史）統語論、先史言語学、手話言語学

岸上 伸啓 教授（2024年3月退任予定）
❶文化人類学・北方文化研究
❷北アメリカ北西海岸先住民社会における社会・文化変化
カナダ先住民アートに関する文化人類学的研究
❸カナダ、北太平洋沿岸、アラスカ、イヌイット、イヌピアット、ハイダ、社会・文化変化、先住民、アート

齋藤 晃 教授
❶歴史人類学・ラテンアメリカ研究
❷植民地期アンデスの先住民の超集住化に関する人文情報学的研究
南米ボリビア低地のモヘニョに関する歴史人類学的研究
❸ラテンアメリカ、アンデス、アマゾン、植民地時代、エスノヒストリー、先住民、キリスト教

齋藤 玲子 准教授
❶アイヌ・北方先住民文化研究
❷アイヌおよび隣接する民族における物と人の移動と交流
環北太平洋地域先住民の物質文化に関する比較研究
❸アイヌ、北海道、北アメリカ、物質文化、観光、博物館

笹原 亮二 教授（2025年3月退任予定）
❶民俗学・民俗芸能研究
❷モノの遺存の総体的把握を通じた生活文化に関する民俗学的研究
❸日本、民俗学、三匹獅子舞、民俗芸能

島村 一平 教授
❶文化人類学・モンゴル研究
❷モンゴル・シベリアにおける宗教人類学的研究
ヒップホップ（ラップ・ミュージック）の実践に関する国際比較研究
❸モンゴル、ブリヤート、シャーマニズム、モンゴル仏教、エスニシティ、ナショナリズム、チンギスハーン表象、ヒップホップ

新免 光比呂 教授（2025年3月退任予定）
❶宗教学・東欧研究
❷ファシズム運動における宗教的要因の比較研究
❸ルーマニア、ファシズム、レジオナール、キリスト教

菅瀬 晶子 准教授
❶文化人類学・中東地域研究
❷パレスチナ・イスラエルを中心とした東地中海アラブ地域で、一神教徒が共有する聖者崇敬の研究
イスラエルにおけるアラブ人市民を中心とした、マイノリティによる文化表象のありかた
❸中東、東地中海、パレスチナ、イスラエル、キリスト教徒、マイノリティ、アイデンティティ、エスニシティ、文化表象、共存

末森 薫 准教授
❶文化財科学・保存科学・文化遺産学・中国仏教美術史
❷寺院空間・洞窟空間に描かれた彩色壁画の研究
光学的手法による博物館資料の保存・活用に関する研究
❸保存科学、博物館環境、文化遺産、洞窟空間、壁画、仏教美術、光学撮影、中国、エジプト、国際協力

鈴木 英明 准教授
❶歴史学・インド洋海域史研究・アフリカ研究
❷19世紀を対象としたインド洋西海域世界の実態解明
20世紀前半のペルシア湾における拘束の実態解明
移動概念の学際的再検討
❸インド洋、海域世界、奴隷、奴隷廃止、移動

鈴木 紀 教授（2025年3月退任予定）
❶開発人類学・ラテンアメリカ文化論
❷開発援助プロジェクトの人類学的評価法
博物館における先住民族文化表象
❸ラテンアメリカ、メキシコ、ユカタン、開発援助、フェアトレード、博物館展示学

❶専門分野　❷現在の研究課題　❸研究のキーワード

園田 直子 教授　(2024年３月退任予定)
❶保存科学
❷博物館における持続可能な資料管理に関する研究
資料の展示・保存環境に関する研究
収蔵庫の再編成に関する研究
❸保存科学、総合的有害生物管理（IPM）、博物館環境

信田 敏宏 教授
❶社会人類学・東南アジア研究
❷マレーシア先住民に関する人類学的研究
インクルーシブ社会に関する人類学的研究
❸東南アジア、マレーシア、オラン・アスリ、日本、博物館、知的障害者

寺村 裕史 准教授
❶情報考古学・文化情報学
❷情報考古学的手法を用いた文化資料のデジタル化と情報統合に関する研究
❸GIS（地理情報システム）、考古学、情報科学

日髙 真吾 教授
❶保存科学・保存修復
❷地域文化の保存と活用に関する研究
博物館資料の保存方法の研究
❸日本、保存科学、保存処理

中川 理 准教授
❶文化人類学・グローバル化研究
❷資本主義と周縁の接合に関する人類学的研究
難民出身のモン（Hmong）と国家に関する人類学的研究
❸経済人類学、政治人類学、ヨーロッパ、移民、難民

平井 京之介 教授
❶社会人類学・日本研究・東南アジア研究
❷水俣病被害者支援運動の人類学的研究
「負の遺産」の生成に関する博物館人類学的研究
タイのコミュニティ博物館についての人類学的研究
❸日本、タイ、ラオス、経済人類学、社会運動、博物館、上座部仏教、水俣病

奈良 雅史 准教授
❶文化人類学・中国研究
❷中国における宗教と少数民族をめぐる人類学的研究
宗教と移動をめぐる人類学的研究
❸宗教実践、国家、自律性、公共性、移動、エスニシティ、ムスリム、回族

廣瀬 浩二郎 教授
❶日本宗教史・民俗学
❷障害文化に関する人類学的研究
日本近代の新宗教に関する歴史的研究
❸日本、東北、九州、京都、歴史、宗教、福祉、文化

丹羽 典生 教授
❶社会人類学・オセアニア地域研究
❷オセアニアにおける紛争と少数民族に関する研究
日本におけるオセアニア関連資料の収集に関する研究
応援に関する通文化比較
❸宗教運動、紛争、開発、少数民族、収集、応援

福岡 正太 教授
❶民族音楽学・東南アジア研究
❷映像音響メディアとインドネシア音楽の変容
伝統芸能の伝承と映像記録
❸インドネシア（スンダ）、東南アジア、映像音響メディア、民族音楽学

野林 厚志 教授
❶人類学・民族考古学・台湾研究・食文化研究
❷生業技術の通文化比較研究
食の多元的価値に関する人類学的研究
台湾におけるエスニシティの動態の探究
❸生業文化、食文化、物質文化、ハンター・ガーデナー、台湾原住民族、エスニシティ、文化資源

藤本 透子 准教授
❶文化人類学・中央アジア地域研究
❷中央アジアにおけるイスラーム実践の人類学的研究
カザフの伝統医療に関する研究
カザフの移動と社会再編に関する研究
❸中央アジア、カザフスタン、ムスリム、宗教実践、伝統医療、社会再編、移動

ピーター J.マシウス 教授（2025年３月退任予定）
❶先史学・民族植物学
❷History of agriculture and plant domestication, with specific interests in taro (Colocasia esculenta), paper mulberry (Broussonetia papyrifera), and other plants used for food, fodder and fibre.
❸Asia, Pacific, Mediterranean, ethnobotany, ethnobiology, plant domestication, food history

南 真木人 教授　(2026年３月退任予定)
❶南アジア研究・文化人類学
❷ネパール人移民に関する人類学的研究
映像音響資料の再資源化に関する研究
❸在留ネパール人、社会運動、環境する文化、先住民族、当事者コミュニティ、研究資源の共有化、薬師カースト

松尾 瑞穂 准教授
❶文化人類学・ジェンダー医療人類学・南アジア研究
❷近代化、開発がもたらすリプロダクション実践の変容に関する研究
サブスタンスと身体研究
子育ての比較文化論
❸リプロダクション（性と生殖）、ジェンダー、インド、サブスタンス、身体

八木 百合子 准教授
❶文化人類学・ラテンアメリカ地域研究・アンデス民族学
❷南米アンデス地域の宗教文化に関する研究
❸ペルー、アンデス、キリスト教、カトリック、聖人信仰

松本 雄一 准教授
❶アンデス考古学
❷アンデス文明形成過程に関する考古学的研究
モニュメントをめぐる考古学的研究
❸アンデス文明、古代文明、複合的社会

山中 由里子 教授
❶比較文学比較文化
❷中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究
驚異と怪異の比較研究
アレクサンドロス伝承の東西伝播
❸西アジア、アラブ文学、ペルシア文学、博物学、想像界、イラン、ユーラシア交渉史

丸川 雄三 准教授
❶文化財情報発信・連想情報学
❷連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究
❸文化財、連想検索、デジタルアーカイブ

吉岡 乾 准教授
❶言語学・南アジア研究
❷北パキスタン諸言語の記述言語学的研究
ブルシャスキー語、ドマーキ語、カティ語、カラーシャ語、記述言語学、パキスタン、カラコラム山脈、ヒンドゥークシ山脈

三尾 稔 教授
❶文化人類学・南アジア研究
❷南アジアにおける多様な宗教伝統の共生に関する研究
インドのナショナリズムと宗教の関係に関する研究
インドの大衆消費社会化と祭礼の変容に関する研究
❸ラージャスターン州メーワール地方（インド）、グジャラート州（インド）、ヒンドゥー、ムスリム、文化人類学、宗教人類学、南アジア地域研究

吉田 憲司 教授
❶博物館人類学・アフリカ研究
❷アフリカにおける造形と儀礼の人類学的研究
博物館・美術館における文化の表象のあり方の研究
❸アフリカ、ヨーロッパ、日本

三島 禎子 准教授
❶文化人類学・西アフリカ研究
❷国際移動に関する文化人類学的研究
❸西アフリカ、セネガル、ソニンケ、商業民族、民族ネットワーク



学修活動・研究活動

カリキュラム

本コースの学生は、専門分野に蓄積された知見や方法論に関する講義、研究課題に関連する討論を行う演習、学生個々のニーズに即した論文作成指導を通じて、自らの研究課題への理解を深め、高度な研究を推進する力を身につけます。

1年目

- 1年生ゼミナール（授業科目名「基礎演習1・2」）において、以下の3つのシリーズを受講します。

01 研究計画シリーズ
入学直後、学生は個々のこれまでおこなってきた研究および博士課程での研究計画を発表します。

02 テーマ・シリーズ
学生が幅広い知識を習得することを目的として、各教員が文化で専門分野について講義し、それに基づいて議論を進めます。

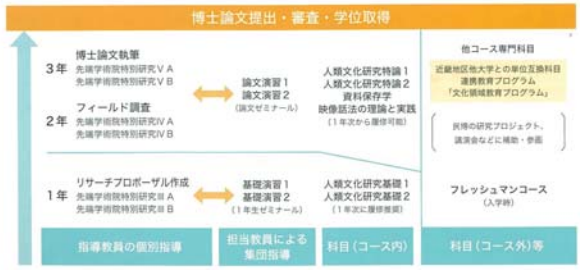
03 リサーチプロポーザル・シリーズ
1年間の研究や講義等を経たうえで、改めて学生が自らの今後の研究計画を練り上げて発表し、リサーチプロポーザルを作成して提出します。

- 文化人類学・民族学とその関連分野の基礎的な知識と方法論を習得するために、共通科目（授業科目名「人類文化研究基礎1・2」）を選択し履修します。

2年目以降

- 各種助成金、コースの学生派遣事業、SOKENDAI研究派遣プログラムなどを活用しフィールド調査を実施します。
- 投稿論文および博士論文の一部に関して論文ゼミナール（授業科目名「論文演習1・2」）で数回発表し、参加者からの批判や助言を受け、討論やコメント、論点の整理などのスキルを磨き、かつ研究を進めるうえで必要な多角的・複合的な視点を身につけます。
- 指導教員による指導（授業科目名「先端学術院特別研究Ⅲ A～VB」）と論文ゼミナールによる議論を得ながら博士論文の章になるいくつかの投稿論文を発表し、最終的に博士論文を作成します。

人類文化研究コースの履修モデル



学位取得

人類文化研究コースの教育課程における修了要件を満たし、文化人類学・民族学とその関連分野の基本的な知識と教養を身につけたうえで、自立した研究者としての力量を兼ね備え、博士論文審査および口述試験に合格した者に学位を授与します。

めざす博士像

本コースでは、文化人類学・民族学とその関連分野の学術領域に蓄積された知見と方法論を修得し、それらを応用して高度な研究を推進することができる博士人材の育成を目的としています。

- フィールド調査や資料分析を通して事象を深く理解し、自由な発想に基づいて、主体的に新たな独創的な知の価値を創造することができる人物
- 国・地域・言語・文化・性別・宗教などの差異とマイノリティ性を尊重し、対話と協議に基づき、高い普遍性をもつ学術成果を国際的に発信することができる人物
- 自らの専門性に立脚しつつ、融合的・学際的な視点から関連分野の課題に関心を寄せ、幅広い学術の進展に資することができる見識豊かな人物
- 自らが行う学術研究の社会的な意義や位置づけを認識し、研究者としての倫理観と責任感をもって自律して行動できる人物

研究支援

リサーチ・アシスタント（RA）制度
教員の指示・監督の下で、研究の補助業務等に携わり、自らの能力の向上を図りながら給与を得ることができます。

学生派遣事業
博士論文作成に不可欠な国内外の調査や学会での成果発表に要する旅費、宿泊費などの支援をおこないます。

SOKENDAI研究派遣プログラム
高い専門性と広い視野、国際通用性をそなえた研究者の育成を目的として、国内外の大学、研究機関、企業等における共同研究活動や調査活動等に必要な経費を支援する制度です。

入学料・授業料免除等制度
経済的理由により入学料や授業料の納入が困難な学生に対する経済的支援として、入学料・授業料の免除（もしくは収納猶予）の制度があります。授業料免除については、毎年2回、授業料免除申請の受付をおこなっています。授業料免除が許可された者は、半期の授業料の全額もしくは半額が免除されます。

特別講義
外部研究資金調達のための申請書の書き方、論文投稿のしかたなどをテーマにした特別講義をおこなっています。

日本学術振興会「特別研究員（DC2）」採用数

年度	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
採用数	3	4	2	1	2	2	2	2	4	0	2	2	1	2	1

博士論文リスト

博士論文リスト（2008年度以降）

課程博士

中国四川の客家の創出に関する文化人類学的研究 ―成都市龍泉驛区洛帯鎮における儀礼と儀習の分析から―	星野 麗子（比較）	[2022.9.28 文学]
近現代の日本の都市における庭の景観と植物利用 ―東京都台東区谷中の事例を中心として―	高野 智司（地域）	[2022.9.28 学術]
包摂的かつ協働的な博物館活動に関する研究 ―台湾の桃園市立渓木芸生態博物館の実践を中心に	邱 君 妮（比較）	[2022.3.24 学術]
"The Kong Puja Drum: A Musical Communication in the Community of Khon Muang, Nan Province, Thailand	カンティウォン・ティティポン（比較）	[2022.3.24 学術]
韓国近現代画家金煥基の南北分断体験と制作活動 ―朝鮮の文化を象徴するモチーフを中心に	松岡とも子（地域）	[2022.3.24 文学]
移民の食事に関する文化人類学的研究 ―広島県在住の中国人女性の家庭を事例として	謝 春 游（地域）	[2022.3.24 学術]
チベット・アムド地域における村落社会と信仰生活の変容に関する人類学的研究 ―中国青海省海南チベット族自治州貴南県ボンコル村の事例から	拉 加 本（地域）	[2022.3.24 学術]
先史アンデス古期におけるマウンド形成の考古学的研究 ―クルス・ベルデ遺跡における環境変動と集団の実践の変化	荘司 一歩（比較）	[2021.9.28 文学]
台湾の先住民族認定とエスニシティの形成に関する文化人類学的研究 ―シラヤ族の「正名運動」を事例として―	呂 怡 屏（地域）	[2021.9.28 文学]
ケニア沿岸部の零細漁業者による水産資源の利用に関する生態人類学的研究 ―かご漁を事例として―	田村 卓也（比較）	[2021.3.24 文学]
Formation of Music of Kazakh Diaspora in Mongolia: A Case Study of the Musical Practices of Professional Performers	八木 風輝（比較）	[2021.3.24 文学]
ベトナムのモンの二元論における諸存在の制作と構成 ―「常世」と「現世」の関係に着目して―	今井 彬暁（地域）	[2020.9.28 文学]
神戸南京町50年の民族誌的研究 ―包摂的チャイナタウンの生成と変容	辺 清 音（比較）	[2020.3.24 文学]
中国都市部の家庭の食生活に関する歴史民族誌 ―社会主義制度下（1949-2018年）の天津市の事例―	劉 征 宇（比較）	[2020.3.24 文学]
オイラド・モンゴルにおける口頭伝承とアイデンティティ ―故郷創出物語から―	倉 島 査 千（地域）	[2020.3.24 文学]
中国新疆オイラドの宗教復興に関する人類学的研究 ―寺とオワー祭祀の復活に関わる転生活仏シャリワン・ゲゲン14世―	那 木 加 甫（地域）	[2019.3.22 学術]
中国青海省におけるチベット仏教復興運動下の民間信仰の変容に関する人類学的研究 ―同仁県ワォコル村を事例として―	魯 旦 加 布（地域）	[2018.3.23 文学]
近代フィリピンにおける民族衣装を まとった聖母像の研究	古沢ゆりあ（比較）	[2017.9.28 文学]
自然資源の利用に関する環境人類学的研究 ―ニカラグアの先住民による商業的ウミガメ漁の事例―	島本 仁（地域）	[2017.3.24 文学]
スナックにおける言語コミュニケーション研究 ―対人関係を調節する接客言語ストラテジー―	中田 祥音（比較）	[2016.9.28 文学]
日本社会の自然葬に関する民族誌的研究 ―NPO 法人「葬送の自由をすすめる会」を中心に―	金セッビョル（地域）	[2016.3.24 文学]
都市回族コミュニティの維持と宗教実践 ―中国陝西省西安市における回族の帰属意識をめぐる民族誌的研究	今中 崇文（地域）	[2016.3.24 文学]
韓国の地域社会における華僑のアイデンティティに関する民族誌的研究 ―韓国華僑ビジネスと華僑協会を中心に―	金 桂淵（地域）	[2015.9.28 文学]
「野球移民」を生みだす人びと ―ドミニカ共和国におけるトランスナショナル移民研究―	窪田 暁（比較）	[2015.3.24 文学]
モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる交渉に関する民族誌	堀田あゆみ（地域）	[2015.3.24 学術]
My *Huaca*: The Use of Archaeological Heritage in Modern Peru from a Public-Archaeology Perspective	サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ（比較）	[2014.9.29 文学]
中国雲南省における徳宏タイ族の部興うたと感性の民族誌的研究	伊藤 悟（地域）	[2014.9.29 文学]
ナイジェリアの都市イレ・イフェにおける「アーティスト」の民族誌的研究	緒方しらべ（比較）	[2014.3.20 文学]
現代アンデス農村における聖人信仰の変容 ―人の移動に焦点をあてて―	八木百合子（比較）	[2012.9.28 文学]
変化しつづける装い ―中国雲南省文山モンの自己と他者をめぐる人類学的服飾研究―	宮脇 千絵（地域）	[2012.9.28 文学]
周辺イスラームのダイナミズム ―タイ南部村落におけるイスラーム復興運動と宗教実践の変容―	小河 久志（地域）	[2012.3.23 文学]
カオダイ教ハノイ聖堂の民族誌的研究 ―ベトナム北部地域の都市における女性たちの社会関係―	伊藤まり子（地域）	[2012.3.23 文学]
無文字社会における歴史記憶の生成と継承 ―南エチオピア牧畜民ボラナにおける口承史の分析をとおして―	大場 千景（地域）	[2012.3.23 文学]
ヨーグルトをめぐる言説の生成と展開 ―社会主義期からポスト社会主義期にかけてのブルガリアを中心に―	マリア・ヨトヴァ（比較）	[2011.9.30 文学]
現代東南中国における宗親会の民族誌的研究 ―国家との関係を中心として	陳 夏暐（比較）	[2011.3.24 文学]
現代タイ社会における開発と僧侶 ―僧侶による社会貢献とネットワーク形成に焦点をあてて―	岡部真由美（地域）	[2011.3.24 文学]
オーストラリア先住民ヨルタ・ヨルタの環境管理のための先住民運動に関する文化人類学的研究	友永 雄吾（地域）	[2011.3.24 文学]
農業技術改善の民俗誌 ―紀ノ川下流域村落の一七～二〇世紀前半における動向の分析―	加藤 幸治（比較）	[2010.9.30 文学]
日本の先史時代における植物性食料の加工と利用：残存デンプン分析法の理論と応用	渋谷 綾子（比較）	[2010.3.24 文学]
韓国における老人の食 ―老人福祉施設を中心に―	守屋亜紀子（地域）	[2009.3.24 文学]
インド農村社会における不妊経験の人類学的研究	松尾 瑞穂（比較）	[2008.9.30 文学]

論文博士

日本手話、台湾手話、韓国手話における語彙の記述とその歴史的変遷 ―数詞および親族表現に着目して―	相良 啓子	[2020.9.28 学術]
都市環境における関係性を巡る実践としての精霊憑依 ―マリの首都におけるソンガイ移民の精霊憑依に関する人類学的研究	内田 修一	[2020.3.24 学術]
グローバル化する互酬性 ―サモア世界の儀礼財の循環と首長制―	山本 真鳥	[2017.3.24 文学]
ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成 ―東北地方のヌン・アン集団の事例から―	チュ スワン ザオ	[2015.9.28 文学]
アイヌ衣文化の研究	津田 命子	[2014.9.29 文学]
先住民生存捕鯨再考 ―国際捕鯨委員会における議論とベクウェイ島の事例を中心に―	濱口 尚	[2013.9.27 文学]
多文化都市・新宿の生成と展開 ―ライフサイクルの視座―	川村千鶴子	[2013.3.22 学術]
先史アンデス形成期の社会動態 ―ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から―	山本 睦	[2012.9.28 文学]
小集落から見た初期国家の形成過程 ―先スペイン期中央アンデスのワリ国家を事例として―	土井 正樹	[2012.3.23 文学]
スリランカにおけるエステート・タミルのアイデンティティと「ジャーティヤ」をめぐる人類学的研究	鈴木 晋介	[2011.3.24 文学]
活用される職祖伝承 ―近・現代日本における木工挽物の担い手と木地屋「榎元地」―	木村 裕樹	[2010.9.30 文学]
先住民学習の理論と実践 ―ポストコロニアル人類学の活用―	中山 京子	[2010.9.30 学術]
シャーマニズムによるエスニシティの探求 ―ポスト社会主義期におけるモンゴル・ブリヤートの事例を中心として	島村 一平	[2010.3.24 文学]
国際線客室乗務員の接客業務と勤務体制 ―仕事の人類学的研究―	八巻 恵子	[2009.9.30 文学]

▼博士論文一覧は、こちらをご覧ください。
https://www.minpaku.ac.jp/education/university_next20/dissertation/dissertation

年度別学位授与者数

		'91-'08年	'09年	'10年	'11年	'12年	'13年	'14年	'15年	'16年	'17年	'18年	'19年	'20年	'21年	'22年	計
地域文化学専攻	課程博士	26	0	2	3	1	0	2	3	1	1	1	1	1	4	1	47
	論文博士	13	1	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	1	0	0	19
比較文化学専攻	課程博士	19	1	2	1	1	1	2	0	1	1	0	2	2	3	1	37
	論文博士	7	1	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	15
計		65	3	7	5	4	2	5	4	3	2	1	3	4	8	2	118

在学生の声

総合研究大学院大学　地域文化学専攻

BALJINNYAM Bat-Ochir（バルジンニャム・バトオチル）

私はモンゴルにおける家畜の交換に関する文化人類学的研究を行っています。具体的には、遊牧に伴う「家畜泥棒」が一種の「互奪性」交換であるという仮説を立て、遊牧民たちの財産である家畜をめぐる奪取や交換、精霊への供犠を「広義の交換」と捉えることで、モンゴル遊牧世界の実態を明らかにすることを目指しています。

私はモンゴルの大草原出身であり、10年前に交換留学生として来日しました。来日して間もない頃に、現在の主指導の先生に国立民族学博物館（みんぱく）へ連れてきてもらったことで、私の人生は大きく変わりました。私は国立民族学博物館の展示を見て、人類学の研究対象が想像以上に広範であることに驚きました。また、世界中の研究者たちがフィールドワークに取り組み、人類文化の多様性と共通性、そして地球規模のつながりの中での社会の変動について調査していることを知りました。この経験から、私は文化人類学者としての人生を歩むことを心に決め、8年間にわたり文化人類学と日本語を学び、ついには総合研究大学院大学（総研大）博士後期課程に進学し、夢を実現しました。

人類文化研究コースは、国立民族学博物館を基盤機関とするため、以下の大いなる利点があります。①さまざまな地域と専門分野を持つ先生方から指導を受けられる点、②豊富な資料や文献がある点、③博物館展示に常にふれられる環境、④経済的な支援制度、です。これらは、研究者を目指す人にとって最適な研究環境と言えます。

また先輩方による研究助成金の申請書などを参照できるのは、非常に魅力的です。これにより、成功した研究プロジェクトの実績を参考にすることができます。さらに、研究協力係の方々は書類手続きに関して豊富な経験と知識を持っており、暖かいサポートを受けることができるのは大きな助けとなります。

指導教員の先生と事務の方々のご指導のおかげで、私は2021年度のSOKENDAI特別研究員制度（挑戦型）に採用され、今まさに研究者としての第一歩を踏み出しているところです。



遊牧民の男性
（モンゴル国ウブルハンガイ県ハラホリン郡、2022年）

総合研究大学院大学　比較文化学専攻

志川 真子

私は、京都市西京区桂で伝承されている桂六斎念佛という芸能について研究をしています。桂六斎念佛は2005年から14年間中断していましたが、2019年に再開されました。私は修士課程の時から桂六斎念佛とその保存会を対象としたフィールドワークを行っています。私自身も保存会に入会し、笛の奏者として保存会の方々と共に芸能に関わりながら、一度中断した芸能をどのように復活させるのか、民族音楽学的な視点から調査しています。

私は修士課程まで、芸術大学の音楽科に所属していましたが、音楽の専門的な知識や技術のみならず、音楽に関わる人間や社会・文化について幅広い視野を得たいと考え、総研大の受験を決めました。入学当初は、民族音楽学や人類学の知識が不足していることを痛感しましたが、主副指導教員をはじめ、さまざまな分野の先生方からの丁寧なご指導を受けることができ、徐々に視野を広げてきたように思います。また、多様な分野・地域の豊富な資料を所蔵している国立民族学博物館（みんぱく）の図書室を利用できるのも、知識の幅を広げるためにとても役立っています。

総研大では半年ごとに論文ゼミナールを開催しており、発表者はフィールドワークの調査報告や博士論文の内容について発表を行います。主副指導教員や論文ゼミナール担当の先生方、院生を交えて、活発な議論が交わされています。また、休憩時間等には、長期のフィールドワークから戻ってきた仲間の話を聞いたり、院生同士で悩みを相談し合ったりすることもあります。特に、世界各地の調査地の話や留学生の出身地の話を聞くことができるのは、私にとってとても刺激的です。

このように総研大は、その道のプロフェッショナルである先生方と充実した資料に囲まれ、仲間と刺激し合いながら学ぶことができる、とても恵まれた環境だと感じています。



地域のお祭りで笛を演奏している様子（筆者右端）
（京都市西京区桂、2023年）

修了生の声

関西外国語大学　外国語学部　准教授　**土井 正樹**（2012年3月学位取得）

私は、先スペイン期アンデス地域の古代国家の成立過程を研究しています。文化人類学と考古学の中間的な研究分野といえますが、専攻できる大学院は限られています。私のような研究テーマの学生も受け入れてもらえる許容度の高さが、総研大の魅力の一つです。

総研大の地域文化学専攻・比較文化学専攻が置かれているみんぱくは、世界最先端の研究テーマに挑む研究者がつどう研究所であり、優れた研究環境となっています。たとえばその充実した図書室では、利用したい資料にすぐにあたることができ、私の研究の大きな助けになりました。その上、みんぱくに備えられている高価な機器も利用でき、私の場合、デジタル顕微鏡や大型プリンターを利用することができました。

特筆すべき利点として、みんぱくでは、共同研究会や国際シンポジウムも多く開催されており、国内外の一流研究者と直接交流することが可能です。私自身、そのような場に積極的に参加したことにより、知識だけでなく、海外の一流研究者と意見交換する度胸も身につきました。また、論文ゼミという授業では、多様な専門分野の先生方および参加学生たちとの議論を通じて、自分とは専門分野の異なる人たちへの研究アピールの仕方など、研究者にとって必要な実践的能力が鍛えられたと思います。先生および有志の仲間とで行った自主勉強会のおかげで、視野を広げ専門性を高めることもできました。

総研大の両専攻には、ほかの大学院にはないメリットがあります。またそれは、皆さんの行動を通じてより大きなものにすることができます。総研大を志望する皆さんにもぜひ、このすばらしい環境を生かして、独創的かつ先駆的な研究テーマにチャレンジして欲しいと思います。



マチュピチュ遺跡
（筆者撮影、2008年）

華僑大学　華僑華人与区域国別研究院　講師　**謝 春游**（2022年3月学位取得）

私は2015年4月に中国・四川省から私費留学生として広島大学の修士課程に進学しました。当時、広島大学の周辺にある中華料理店で出された食べ物にカルチャーショックを受け、それをきっかけに食文化研究を始めました。みんぱくには、食文化を研究している先生方も多く、「食文化研究を続けるなら、みんぱくだろう」と思い、総合研究大学院大学（総研大）地域文化学専攻に進学しました。

私は食と移民に特に関心を持ち、食を通じた移民社会の展開およびそれに伴う食生活の変化に注目して研究に取り組みました。博士論文では、広島県に住む中国人女性の家庭の事例を取り上げ、これら中国人女性移民の食事の実態や移住先での食経験などを記述し、社会関係が移民の食事に与える影響を研究しました。

総研大の最大の魅力は、総研大とそれぞれの専攻の所在地である大学共同利用機関と連携しているため、双方の豊富な研究資源を利用できることにあると思います。機関に所属する世界全域をカバーする研究者から学び、また世界中から来た研究者と交流したりする機会が得られます。他にも、研究支援が非常に充実しています。私自身も、学生派遣事業とインターンシップ事業を利用して国際学会発表やフィールド調査を行いました。リサーチ・アシスタントや研究会のアルバイトの機会もあり、学生生活のサポートにもなっています。

大学院時代を振り返ってみると、いつも見守ってくださった指導教員をはじめ研究に対して議論できた同期や先輩方、後輩たちとの交流、また様々なところでサポートしてくださった研究協力係等の方々のおかげで、無事に学位を取得できたと思います。こういった優れた研究環境が整う研究室で研究生活を楽しむことができるのも、総研大の魅力だと感じています。



オシドリ鍋料理を食べている中国人女性2人と日本生まれの息子
（筆者撮影、広島県、2018年）

※2023年4月より、地域文化学専攻・比較文化学専攻は人類文化研究コースに統合されました。

修了生等の進路

修了生の進路（2023年5月）

修了生等の就職先



大学等研究機関（常勤）就職先

青山学院大学、愛知淑徳大学、亜細亜大学、愛媛大学、大阪大学、神奈川大学、鹿児島純心女子大学、川崎医療福祉大学、関西外国語大学、関西国際大学、神田外語大学、京都大学、京都文教大学、京都外国語大学、県立広島大学、神戸大学、神戸市外国語大学、神戸女学院大学、公立小松大学、芝浦工業大学、静岡大学、静岡文化芸術大学、女子栄養大学、清泉女学院、就実大学、成蹊大学、大東文化大学、中部大学、中京大学、筑波大学、東京大学、東京外国語大学、東洋大学、帝京大学、長崎純心大学、奈良県立大学、南山大学、日本大学、阪南大学、広島市立大学、宮崎公立大学、武蔵野美術大学、山形大学、龍谷大学、立命館大学、上海師範大学、インドネシア学術総局、ヘルシンキ大学、ソウル大学、青海民族大学政学院、吉林大学、華僑大学、国立台湾歴史博物館、国立民族学博物館、総合地球環境学研究所

総研大ネットワーク

本コースは、平成元（1989）年に地域文化学専攻および比較文化学専攻の2専攻体制で発足し、これまでに180名を超える学生が入学してきました。

総研大ネットワークは、地域文化学専攻・比較文化学専攻、そして人類文化研究コースに入学した人たちのつながりを維持し、情報交換などに役立てる同窓会的な組織です。



入学選考

求める学生像

文化人類学・民族学とその関連分野の研究に対する強い関心を持ち、世界の動向と人類の活動、およびそれらを捕捉しようとする学問の現在を俯瞰的に捉えながら、新しい時代を切り開く研究を目指して豊かな知性と感性を絶えず研磨し、国際的に活躍する意志、語学力、コミュニケーション能力を兼ね備えた学生を求めます。

入学者の選抜について

入学者を選抜するにあたり、本コースの基盤となる国立民族学博物館が担う文化人類学・民族学とその関連分野において、自立的に研究を推進することのできる構想力・基礎学力と論理的な思考力および表現力を重視します。そのような力を適正に判定するために、出願書類、修士論文、これまでに発表した論文がある場合はその論文、および面接により選抜します。

入学者選抜日程

出願資格認定審査申請期間 修士の学位をお持ちでない方で、修士または専門職学位に相当する学力のある方は、事前に出願資格認定審査をおこないます	2023年11月6日（月）～11月9日（木）
入学願書受付期間	2023年11月30日（木）～12月6日（水）
第一次選抜（書類選考）・結果通知	2024年1月中旬
第二次選抜（面接審査）	2024年1月22日（月）※予備日1月23日（火）
合格発表	2月初旬～中旬
入学手続き	3月中旬

▼出願書類および出願までの流れについてはこちらをご覧ください
https://www.minpaku.ac.jp/education/university_next20/information/steps



よくある質問



Q 国立民族学博物館と総合研究大学院大学とはどういう関係ですか？

A 総合研究大学院大学（総研大）は、国立極地研究所や国立天文台など、日本が世界に誇るトップレベルの20の大学共同利用機関等と連係して教育研究をおこなう、学部をもたない国立の大学院大学です。1989年、国立民族学博物館（みんぱく）に、総研大文化科学研究科地域文化学専攻・比較文化学専攻という博士後期課程の2専攻が設置され、2023年、2専攻を統合し人類文化研究コースが新しく設置されました。大学本部は神奈川県葉山町にありますが、実際の教育活動はみんぱくの研究者が、みんぱくの施設や所蔵資料を活用しておこないます。

Q 受験する前に希望する指導教員をかならず決めておく必要がありますか？

A 必要条件ではありませんが、強くお勧めします。また、受験を申請する前に希望指導教員に連絡を取れば、入学後の研究の見通しを立てる一助となるでしょう。

Q 学部や修士課程で文化人類学・民族学を専攻しなかったのですが、人類文化研究コースを受験することはできますか？

A 大学などで文化人類学・民族学を学んだ経験がなくても受験することは可能です。しかし、入学後に志望研究が遂行可能であるか見通しをつけるためにも、関連図書などを精読し、少なくとも人類学やフィールド調査に関する基本的な考え方について理解しておいたほうがよいでしょう。この作業は、何をするために当コースを受験するのかを整理するためにも役立つはずです。

Q 修士課程ですでに現地調査をはじめているのですが、入学後すぐに長期の現地調査をすることは可能ですか？

A 原則として、初年度は、長期フィールド調査をおこなうための準備期間にあてられています。フィールド調査は、単に現地に行けば遂行できるものではありません。また、修士課程でフィールド調査をすでにおこなっている場合でも、博士論文執筆のための調査では、求められる調査の質に大きな差があることが多いようです。入学後の一年間は、教員の指導のもと、調査計画の実現性・妥当性などについて、それまでの自己の研究成果や先行研究との関連に留意しながら検討します。年度末には、フィールド調査に向けたリサーチプロポーザルに関する発表をおこない、計画をより実現性の高いものへと練っていきます。



▼その他のよくある質問はこちらをご覧ください
https://www.minpaku.ac.jp/education/university_next20/infomation/faq

総合研究大学院大学の概要

国立大学法人　総合研究大学院大学

SOKENDAI

世界トップレベルの研究機関で研究者を育成

総合研究大学院大学（総研大）は、大学共同利用機関等との緊密な連係及び協力の下に、世界最高水準の国際的な大学院大学として学術の理論及び応用を教育研究して、文化の創造と発展に貢献することを理念に、1988年に我が国最初の独立大学院大学として創設されました。

総研大の最大の特徴は、大学共同利用機関等の世界トップレベルの研究環境を教育の場としている点にあります。

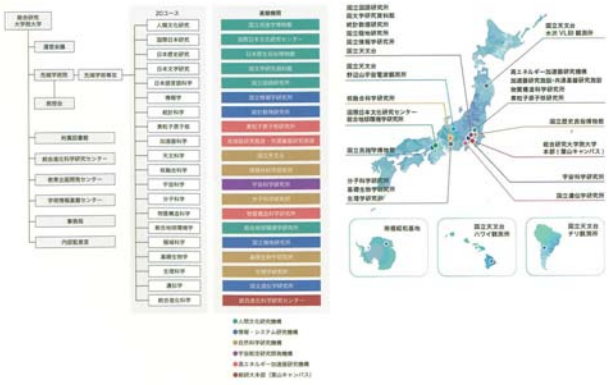
大学共同利用機関等の研究機関（基盤機関）は、個々の大学では整備できない大規模な施設・設備、大量のデータや貴重な資料等の研究資源を全国の大学の研究者に提供するとともに、国内外の研究者との多彩な共同研究を通じて、我が国の先端学術を牽引する研究拠点の役割を担っています。

総研大は、そのような基盤機関の優れた研究環境において、各研究分野の豊富な研究者集団を教授陣とし、高度な専門教育を提供します。

先端学術院について

総研大は、大学院の研究科に相当する教育研究上の基本組織として、先端学術院を置いています。

先端学術院には、世界トップレベルの大学共同利用機関等の優れた研究環境を教育の場とした、多彩な専門分野を持つ20のコースが展開しており、大学共同利用機関等の枠組みや専門領域を跨ぐ柔軟な大学院教育プログラムを通じて、学術及び社会の様々な複合的課題に挑戦できる博士人材を育成します。



自立した研究者の育成

総研大は、「自立した研究者」として必要な、５つの力量を備えた博士人材を育成します。



充実した学生支援

●経済的支援

リサーチ・アシスタント制度や授業料免除制度、SOKENDAI特別研究員制度等により、学生の研究活動を経済的にサポートします。

●研究派遣支援

SOKENDAI研究派遣プログラムや国際共同学位プログラムにより、国内外の長期共同研究等に取り組む学生をサポートします。



国立民族学博物館 概要

国立民族学博物館（みんぱく）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。みんぱくは、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究や共同研究を進めるとともに、学術情報を集積しています。その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することも使命としています。

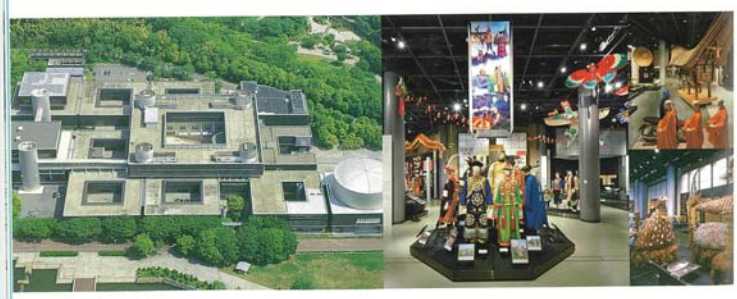
みんぱくは「博物館機能をそなえた研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。みんぱくの展示は、本館展示と特別展示と企画展示とで構成されており、本館展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示と企画展示は、特定のテーマのもとに、年に数回、期間を限って開催されます。

所蔵民族学資料（2023年4月1日現在）

標本資料	
海外資料	179,715点
国内資料	165,909点
計	345,624点

映像音響資料	
映像資料	8,277点
音響資料	64,421点
計	72,698点

文献図書資料	
日本語図書	275,229冊
外国語図書	419,130冊
計	694,359冊
日本語雑誌	10,229点
外国語雑誌	7,094点
計	17,323点



みんぱくアクセス



●大阪モノレール……「万博記念公園駅」、「公園東口駅」下車徒歩約15分
●バス（近鉄バス）……阪急茨木市駅・JR茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約13分
阪急茨木市駅から約20分、JR茨木駅から約10分
●乗用車……万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分
※万博記念公園各ゲートで、国立民族学博物館の観覧券をお買い求めください。
同園内を無料で通行できます。
※万博記念公園をご利用になる場合は、同園入園料が必要です。

［お問い合わせ］
国立民族学博物館 管理部研究協力課研究協力係（大学院担当）
〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6878-8236（大学院担当）
FAX　06-6878-8479
E-mail　souken@minpaku.ac.jp
URL　https://www.minpaku.ac.jp/

https://www.minpaku.ac.jp/education/university_next20


国立大学法人
総合研究大学院大学

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology